

長岡市埋蔵文化財調査報告書

浦及浦東遺跡

一二級河川郷本川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

本文編

2016

新潟県長岡市教育委員会

例 言

- 1 本書は新潟県長岡市島崎に所在する浦反南東遺跡発掘調査報告書で、2分冊構成のうちの「本文編」である。
- 2 今回の調査・報告書作成は、二級河川郷本川河川改修事業に伴い、平成23年度から27年度にかけて長岡市が新潟県から委託を受けて実施したものである。
- 3 試掘確認調査に要した費用は、平成24年度分を除いて文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫及び県費の補助金の交付を受けた。本発掘調査及び報告書作成に要した経費は事業主体である新潟県が全額負担した。
- 4 遺物の注記は、調査年度の下2桁と遺跡名称の略記号（UTH）、グリッド名、出土位置・層位等を記した。
- 5 報告書掲載遺物の番号は、すべて通し番号とした。本文・観察表・図版の番号はすべて一致している。
- 6 本文中の注、および引用参考文献は巻末に一括して掲載した。
- 7 平安時代の出土遺物については次の諸氏から御教示・御協力を賜った。（敬称略・順不同）
 - 須臾器等の産地や所属時期等 笹澤 正史（株式会社吉田建設）
 - 佐渡小泊窯跡群資料の観察 堅木 宜弘（佐渡市世界遺産推進課）・滝川 邦彦（佐渡市教育委員会）
 - 木簡の釈文等 渡辺 晃宏・山本 崇・山本 祥隆（独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所）
 - 木簡の赤外線写真撮影 中村 一郎（独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所）
 - サクラ樹皮の製作工程分類 浦 蓉子（独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所）
 - 墨書土器（主にⅡ区出土資料）の釈文 浅井 勝利（新潟県立歴史博物館）
 - 漆手箱の養生・金属製品のX線写真撮影 三ツ井 朋子（公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）
- 8 金属製品・鍛冶関連遺物の観察所見及び観察表の作成、砥石・電材等の抽出は穴澤 義功氏（製鉄遺跡研究会）に委託するとともに、整理作業全般にわたり指導を依頼した。これに関する表・挿図は穴澤氏によるものである。
- 9 珪藻・花粉分析はパリノ・サーヴェイ株式会社、樹種・植物遺体同定、放射性炭素年代測定、及び木製品保存処理は株式会社吉田生物研究所、鍛冶関連遺物分析調査は日鉄住金テクノロジー株式会社八幡事業所・TACセンター、漆器塗膜分析は漆器文化財研究所へ委託し、その報告書を原稿とした。
- 10 本書の執筆は、丸山 一昭（長岡市教育委員会）、松井 奈緒子・竹部 佑介・南波 守（以上、株式会社大石組）があたった。ただし、第Ⅵ章は分析諸機関に委託した。本文の編集は丸山・松井が行い、丸山が総括した。執筆分担は以下のとおりである。なお、委託した原稿以外の記載には、上記7・8のご教示や撮影データをもとに執筆担当者が原稿化したものがある。担当者の理解不足で事実記載等に誤りがある場合、その責は執筆担当者にある。
 - 第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章第2節、第Ⅴ章第1節・第3節1(1)～(3)・4・7・第Ⅶ章…丸山
 - 第Ⅳ章第1節・第3節、第Ⅴ章第2節・第3節5…南波
 - 第Ⅴ章第3節2…松井
 - 第Ⅴ章第3節3・第4節…竹部
 - 第Ⅴ章第3節6…穴澤氏の所見を記載した観察表から丸山が作成
 - 第Ⅳ章第4節…竹部・南波・松井
 - 第Ⅴ章第3節1(4)・(5)…松井（主要遺構出土）・丸山（その他）
 - 第Ⅵ章第1節…パリノ・サーヴェイ株式会社
 - 第Ⅵ章第2節・第3節・第4節…株式会社吉田生物研究所
 - 第Ⅵ章第5節…日鉄住金テクノロジー株式会社八幡事業所・TACセンター 大澤 正己・鈴木 瑞穂
 - 第Ⅵ章第6節…漆器文化財科学研究所 四柳 嘉章
- 11 調査体制は第Ⅰ章第3節に記した。

12 発掘調査で出土した遺物及び、測量図面・写真等の記録類は、長岡市教育委員会で保管している。

13 本遺跡の発掘調査に関連して、下記のとおり随時公開等を行った。

(平成23年)

10月16日 和島公民館主催和島歴史講座 現地見学 見学者数30名

10月19日 和島小学校4年生 現地見学

(平成24年)

4月28日 現地説明会(Ⅱ区) 見学者数120名

8月26日 日本史研究会第40回古代史サマーセミナー 現地見学

9月15日 現地説明会(Ⅰ区) 見学者数69名

(平成25年)

2月16日 第4回新潟出土文字資料検討会「長岡市浦反甫東遺跡出土の墨書土器について」新潟市歴史博物館

3月10日 遺跡発掘調査報告会「浦反甫東遺跡でわかったこと」長岡市教育委員会科学博物館主催 長岡市和島支所 参加者40名

6月9日 新潟県考古学会第25回大会「長岡市浦反甫東遺跡の調査」万代市民会館

11月8日 和島歴史講座「浦反甫東遺跡発掘調査の成果」和島公民館主催 長岡市和島支所 参加者20名

14 本遺跡の調査内容・所見については、本書の記述をもって正式報告とし、本書発行以前に記載された現地説明会・発掘調査報告会・研究会資料等の内容に優先する。

15 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なる御教示・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げます。(五十音順・敬称略)

相澤 央 相田 泰臣 浅井 勝利 伊藤 秀和 伊藤 善充 浦 蓉子 春日 真実
堅木 宜弘 駒形 敏朗 小林 昌二 笹澤 正史 関 雅之 滝川 邦彦 鶴巻 康志
中村 一郎 中林 隆之 橋本 博文 羽鳥 仁一 三ツ井朋子 山本 崇 山本 祥隆
渡辺 晃宏

大字島崎 公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 佐渡市立佐渡博物館 佐渡市世界遺産推進課
下町下集落 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 新潟県教育庁文化行政課
新潟県長岡地域振興局地域整備部与板維持管理事務所

目 次

第Ⅰ章	調査の過程	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	2
1	平成21・22年度試掘調査	2
2	第1次発掘調査	2
3	平成24年度試掘調査	4
4	第2次発掘調査	4
5	整理作業	4
第3節	調査体制	5
第Ⅱ章	遺跡をとりまく環境	
第1節	地理的環境	7
第2節	歴史的環境	9
1	古墳時代以前	9
2	古代	9
3	中世	11
4	「島崎川」をめぐる治水史	11
第Ⅲ章	調査の概要	
第1節	調査区とグリッドの設定	15
第2節	基本層序	15
第3節	調査方針とその方法	16
1	発掘作業	16
2	整理作業	16
第Ⅳ章	遺構	
第1節	遺構の分布状況	18
第2節	遺構の対応関係	18
第3節	遺構の記述と分類	21
第4節	各説	22
1	I区の遺構	22
(1)	第1確認面(V層)検出遺構	22
A	掘立柱建物	22
B	土坑	22
C	溝	23
D	性格不明遺構	24
(2)	第2確認面(VI層)検出遺構	25
A	掘立柱建物	25
B	柱穴	26

C	土坑	27
D	溝	27
E	河川	28
F	性格不明遺構	29
2	Ⅱ区の遺構	30
(1)	第1確認面（Ⅴ層）検出遺構	30
A	掘立柱建物	30
B	柱穴	31
C	井戸	31
D	土坑	31
E	溝	33
F	性格不明遺構	37
(2)	第2確認面（Ⅴ層中）検出遺構	37
A	土坑	37
B	溝	38
C	性格不明遺構	38
(3)	第3確認面（Ⅶ層）検出遺構	39
A	掘立柱建物・柵列	39
B	柱穴	45
C	井戸	45
D	土坑	46
E	溝	46
F	河川	48
G	性格不明遺構	48

第Ⅴ章 遺物

第1節	遺物の出土状況	49
第2節	弥生・古墳時代	56
1	概要	56
2	各説	56
(1)	古墳時代前期の土器	56
(2)	古墳時代後期の土器	56
(3)	石製品	57
(4)	木製品	57
第3節	平安時代	59
1	土器	59
(1)	土器の観察	59
A	胎土	59
B	製作技法	59
C	器壁の厚さ	59
D	ロクロ目の幅	60
E	底部と体部の接続	60

F 口縁部の形態	61
G 使用痕と転用の諸痕跡	61
(2) 器種分類	61
A 須恵器	62
B 土師器	63
C 黒色土器	63
D 施釉陶器	67
(3) 記述の方法	68
(4) I区出土土器各説	68
A I区第1確認面(V層)遺構出土	68
B I区II～IV層出土	73
C I区第2確認面(VI層)遺構出土	74
D I区河川出土	76
E I区V～VI層出土	79
(5) II区出土土器各説	80
A II区第1確認面(V層)遺構出土	80
B II区IV層・整地層出土	88
C II区第2確認面(V層中)遺構出土	90
D II区V層出土	92
E II区第3確認面(VII層)遺構出土	93
F II区VI層出土	97
2 土製品	97
(1) 円筒形土製品・製塩土器	97
(2) 土錘	98
(3) 土製紡錘車	99
3 木製品	100
(1) 概要	100
(2) 分類と記述の方法	102
A 柱根	102
B 杭	102
C 容器	102
D 木製品	102
E 加工材	102
(3) 各説	105
A I区遺構出土	105
B I区河川出土	105
C II区遺構出土	110
4 漆製品	113
5 石製品	113
(1) 概要	113
(2) 分類と記述	114
(3) 各説	114

A	砥石	114
B	石帯	118
6	金属製品・鍛冶関連遺物	118
(1)	概要	118
(2)	整理作業手順	118
(3)	I区出土遺物	119
A	遺構出土遺物	119
B	遺構外出土遺物	120
(4)	II区出土遺物	120
A	遺構出土遺物	120
B	遺構外出土遺物	120
7	文字資料	122
(1)	木簡	122
(2)	墨書土器	123
A	観察・分類	123
B	概要	123
C	I区の墨書文字	123
D	II区の墨書文字	126
E	墨書記号など	126
第4節	中・近世	131
1	土器・陶磁器	131
2	漆器	131
3	木製品	132
4	金属製品	132
5	銭貨	132

第VI章 自然科学分析

第1節	珪藻・花粉分析	133
1	はじめに	133
2	試料	133
(1)	基本土層	133
(2)	流路跡	133
(3)	井戸跡	135
3	分析方法	135
(1)	珪藻分析	135
(2)	花粉分析	136
4	結果	136
(1)	珪藻分析	136
(2)	花粉分析	137
5	考察	137
(1)	堆積環境	137
(2)	古植生	138

第2節	樹種同定	152
1	試料	152
2	観察方法	152
3	結果	152
	(1) スギ科スギ属スギ	152
	(2) プナ科クリ属クリ	152
	(3) ニレ科ケヤキ属ケヤキ	152
第3節	植物遺体同定	160
1	試料	160
2	調査方法	160
3	結果	160
第4節	放射性炭素年代測定	161
1	はじめに	161
2	試料と方法	161
3	結果	161
第5節	製鉄・鍛冶関連遺物の分析調査	164
1	いきさつ	164
2	調査方法	164
	(1) 供試材	164
	(2) 調査項目	164
3	調査結果	165
	(1) I区出土遺物	165
	(2) II区出土遺物	166
4	まとめ	169
第6節	長岡市浦反甫東遺跡出土漆器の科学分析	177
1	はじめに	177
2	分析の方法	177
3	分析結果	178
	(1) 塗膜分析	178
	A 古代	178
	B 中世	179
	(2) 赤外分光分析	179
	(3) 蛍光X線分析	180
4	おわりに	182

第VII章 まとめ

第1節	平安時代	187
1	出土土器の編年的位置付け	187
	(1) 検討方法	187
	(2) 本遺跡出土土器の変遷案	188
	(3) 土器の検討	197
	(4) 編年の対応関係	200

2 建物群について	206
(1) 建物の編年的位置	206
(2) 建物の形態と規模	208
(3) 柱根について	209
3 生産・生業関連遺物について	210
(1) 鍛冶関連遺物・砥石について	210
(2) 生業関連遺物について	214
A 土錘	214
B 円筒形土製品・製塩土器	214
(3) 手工業関連遺物について	215
4 特殊遺物について	215
5 文字資料と関連資料	218
A 「七」	218
B 「大市」	218
C 「仲成」	218
D 「田庄」	219
E 転用硯について	219
6 集落の動態	219
7 小結	223
第2節 古墳時代・中近世	223
要約	224
注	225
引用・参考文献	226
遺構観察表	231
遺物観察表	248

挿図目次

第1図 試掘トレンチ配置図 (1/8,000)	3	第11図 須恵器重量分布図	50
第2図 調査対象範囲 (1/2,000)	3	第12図 土師器重量分布図	51
第3図 地質分類図	7	第13図 円筒形土製品重量分布図	52
第4図 旧島崎川流域の地形 (1/200,000)	8	第14図 竈材重量分布図	53
第5図 周辺の遺跡分布 (1/70,000)	13	第15図 砥石重量分布図	54
第6図 基本土層模式図	15	第16図 鍛冶関連遺物重量分布図	55
第7図 グリッド設定図 (1/2,000)・土層柱状図 (1/40)	17	第17図 古墳時代の土器分類図	58
第8図 遺構全体図1 (第1確認面)	19	第18図 須恵器無台坏の諸要素	60
第9図 遺構全体図2 (第2・3確認面)	20	第19図 器種分類図(1)	64
第10図 遺構形態・覆土の分類	21	第20図 器種分類図(2)	65
		第21図 器種分類図(3)	66

第22図	器種分類図(4)……………67	第44図	出土土器編年案(須恵器食膳具2)…191
第23図	径高指数・底径指数……………68	第45図	出土土器編年案(土師器・黒色土器食膳具)……………192
第24図	木製品・加工材・端材出土分布図…100	第46図	出土土器編年案(須恵器等貯蔵具1)……………193
第25図	サクラ樹皮出土分布図……………100	第47図	出土土器編年案(須恵器等貯蔵具2)……………194
第26図	主な木製品および加工材・端材……………103	第48図	出土土器編年案(土師器煮炊具等1)……………195
第27図	サクラ樹皮における樹皮紐製作工程 104	第49図	出土土器編年案(土師器煮炊具等2)……………196
第28図	手箱の断面模式図……………113	第50図	器種構成比率(1)……………201
第29図	石製品分類図……………114	第51図	器種構成比率(2)……………202
第30図	鍛冶関連遺物構成図……………121	第52図	機能別・食膳具の種類別構成比率…203
第31図	出土木簡の釈文……………122	第53図	食膳具の指数分布(1)……………204
第32図	主要墨書文字集成図(1)……………127	第54図	食膳具の指数分布(2)……………205
第33図	主要墨書文字集成図(2)……………128	第55図	遺構の編年的位置及び相関図……………207
第34図	主要墨書文字集成図(3)……………129	第56図	遺構の主軸方位……………208
第35図	各地点の模式柱状図および試料採取位置……………134	第57図	掘立柱建物の平面積……………210
第36図	土壌サンプル採取位置……………135	第58図	土錘の全長・重量分布図……………214
第37図	主要珪藻化石群集の層位分布……………140	第59図	浦反甫東遺跡出土遺物集成(1)…216
第38図	主要花粉化石群集の層位分布……………147	第60図	浦反甫東遺跡出土遺物集成(2)…217
第39図	赤外線吸収スペクトル(1)……………181	第61図	建物の変遷案……………222
第40図	赤外線吸収スペクトル(2)……………181		
第41図	蛍光X線定性分析スペクトル……………182		
第42図	分析試料実測図……………184		
第43図	出土土器編年案(須恵器食膳具1)…190		

写真目次

写真 1	珪藻化石……………150	写真11	炉壁・羽口の顕微鏡組織……………173
写真 2	花粉化石……………151	写真12	椀形鍛冶滓?の顕微鏡組織……………174
写真 3	樹種同定顕微鏡写真(1)……………154	写真13	椀形鍛冶滓のEPMA調査結果・顕微鏡組織……………175
写真 4	樹種同定顕微鏡写真(2)……………155	写真14	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果……………176
写真 5	樹種同定顕微鏡写真(3)……………156	写真15	金沢市戸水大西遺跡出土漆革箱の塗装工程……………184
写真 6	樹種同定顕微鏡写真(4)……………157	写真16	漆器塗膜層断面顕微鏡写真……………185
写真 7	樹種同定顕微鏡写真(5)……………158	写真17	漆器塗膜層断面及び実体顕微鏡写真 186
写真 8	樹種同定顕微鏡写真(6)……………159		
写真 9	モモの核……………160		
写真10	炉壁・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織……………172		

表目次

第1表	作業工程表	6	第16表	珪藻分析結果(6)	146
第2表	周辺の遺跡	12	第17表	花粉分析結果(1)	148
第3表	出土遺物の重量内訳	49	第18表	花粉分析結果(2)	149
第4表	土器分類基準表	67	第19表	木製品樹種同定表	153
第5表	遺構別木製品出土数	101	第20表	植物遺体同定表	160
第6表	河川SD976(SX1209含む)木製品出土数	101	第21表	対象試料一覧	162
第7表	砥石の分類・石材別点数	114	第22表	放射性炭素年代測定結果一覧	163
第8表	墨書土器集計表	130	第23表	供試材の履歴と調査項目	170
第9表	分析試料一覧	134	第24表	供試材の化学組成	171
第10表	珪藻の生態性	139	第25表	出土遺物の調査結果のまとめ	171
第11表	珪藻分析結果(1)	141	第26表	編年図出典	189
第12表	珪藻分析結果(2)	142	第27表	編年対照表	200
第13表	珪藻分析結果(3)	143	第28表	浦反甫東遺跡まとめ表(1)	211
第14表	珪藻分析結果(4)	144	第29表	浦反甫東遺跡まとめ表(2)	212
第15表	珪藻分析結果(5)	145	第30表	浦反甫東遺跡まとめ表(3)	213
			第31表	遺跡の動態	221

第 I 章 調査の過程

第 1 節 調査に至る経緯

長岡市北西部の島崎を貫流する郷本川は笠拔山から発し、保内川、小島谷川、荒巻川と合流しながら寺泊郷本で日本海に注ぐ、流域面積30.78km²、幹川流路延長12.3kmの二級河川である。郷本川流域の沖積低地部は、大河津分水開削以前から水害の常襲地帯として知られていた。それは、郷本川の川幅が狭い上に川の縦断勾配も極端に緩いため、雨で増水した水量をうまく排水できないことに起因している。さらに河道は集落内の民家に接する部分もあり、大雨のたびに増水した濁流が住民の安全を脅かしていた。特に昭和36年8月、昭和53年6月の集中豪雨では甚大な被害を受けたことから、新潟県（以下、「県」）ではこれを契機に河川改修事業を継続的に実施してきた。しかし、平成16年7月の集中豪雨をはじめたび重なる洪水には対応できず、より抜本的な対策が住民から切望されていた。このため県は平成17年4月に「郷本川水系河川整備計画」を策定し、本格的な改修工事に着手した。この計画は現河道の拡幅や河床の掘削に加え、島崎集落を迂回する延長約2.3kmの捷水路を新たに開削することにより、治水安全度を向上させ洪水災害の防止あるいは軽減を図るものである。

この計画の事業者である新潟県長岡地域振興局（以下、「振興局」）と文化財保護部局の長岡市教育委員会（以下、「市教委」）は、本事業に伴い川東遺跡が発見された平成20年度以降、事業用地にかかる埋蔵文化財包蔵地の取扱いについての協議を重ねた。協議の結果、事業用地については埋蔵文化財の有無を確かめる試掘調査を買収済み用地から順次実施することとした。平成21年11月の試掘調査で新たに発見された浦反甫東遺跡は平安時代を中心とする遺跡で、用地内の延長約200mの区間に存在することが判明した〔長岡市教委 2010〕。両者協議の結果、既に事業が着手されていることや緊急を要する工事であることを考慮し、工事計画の変更は難しいと判断された。このため、遺跡が破壊を受ける部分については、市教委が工事に先立ち本発掘調査を行い記録保存することで合意した。発掘調査対象面積は平面積7,200m²、基礎整理作業を除く現場における調査期間は7か月と試算され、平成23年度実施の見通しとなった。

平成22年12月9日付け与板維第234号文書で、振興局は市教委経由で新潟県教育委員会（以下、「県教委」）に浦反甫東遺跡における埋蔵文化財発掘の届け出を行い、平成22年12月22日付け教文第1106号の2文書で県教委から振興局へ浦反甫東遺跡の本発掘調査を実施するよう通知があった。発掘調査実施の目処が立った平成23年4月、市教委は振興局の依頼により浦反甫東遺跡発掘調査委託契約のための資料として計画書を提出した。計画書には、新潟県が長岡市に調査を委託し市教委が調査主体となること、調査内容とその実施年度、調査費用などが記され、委託契約の内容が振興局に提示された。この計画書を元に新潟県と長岡市は発掘調査委託契約を締結することとなっていたが、平成23年3月11日に発生した東日本大震災の影響で事業実施の財源確保が流動的となる中、契約締結がなされたのは23年6月16日であった。市教委は平成23年7月29日付け長教博第141号文書で、文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査の着手を県教委に報告、8月3日から発掘調査を開始した。

第2節 調査の経過

1 平成21・22年度試掘調査

平成21年11月24日から30日、買収済み用地を対象に12か所にトレンチを設定し試掘調査を実施した（第1図・2図）。調査対象地は郷本川・小島谷川合流点付近の西側と荒巻川合流点の東側に分かれる。調査対象地の現況は標高16.5m前後の水田などで、東側の調査地7か所で9世紀後半頃の遺構・遺物が耕作土およそ60cm下から検出された。遺構・遺物の分布はひと続きではなく、湿地帯や河川などの地形変化に分断されるものと想定された〔長岡市教委2010〕。この試掘結果に基づいて平成22年1月、埋蔵文化財包蔵地カードを新潟県教育委員会に提出した。遺跡の名称については周辺の小字が「浦反甫」であるものの、既に「浦反甫遺跡」が存在することからこれと区別するため「浦反甫東遺跡」として登録した。また、遺構・遺物が確認された西側部分のⅠ区と東側部分のⅡ区を合わせたおよそ7,200㎡を本調査対象とすることとなった。

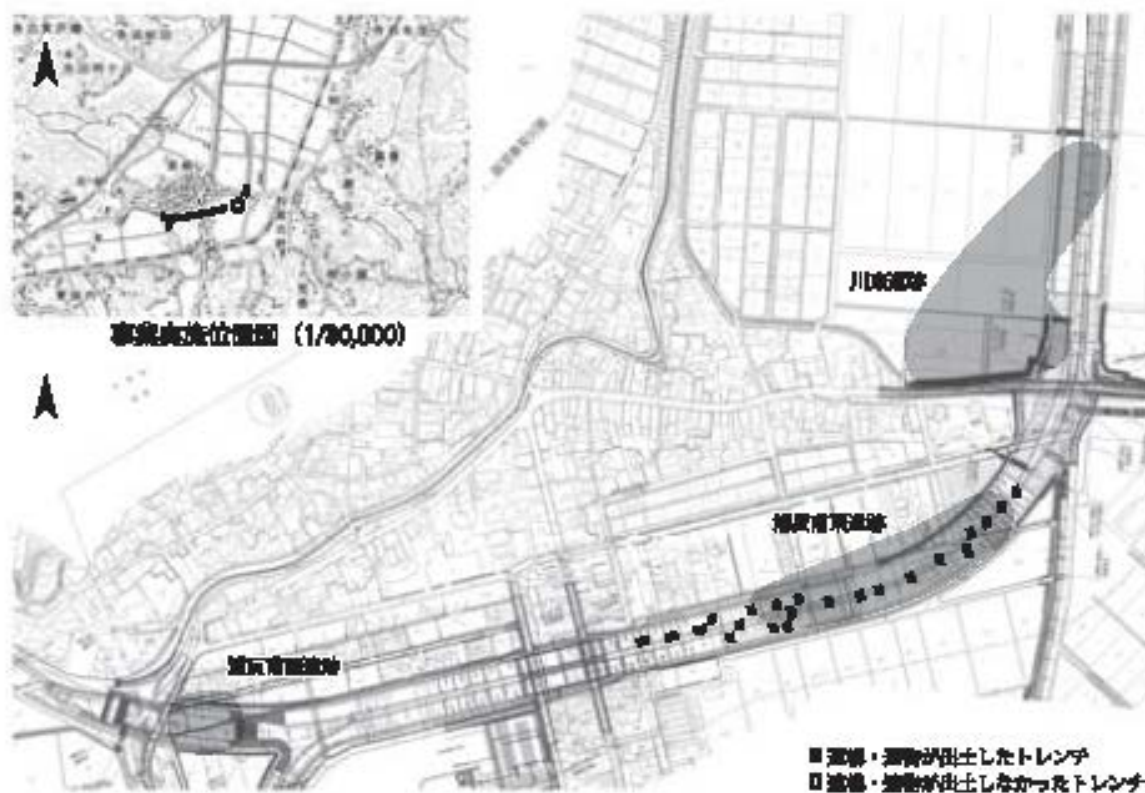
平成22年6月3日から8日にかけて、本調査対象地のうち新たに買収済みとなった部分の試掘調査を補足的に実施した。この結果に基づいて、浦反甫東遺跡の本調査対象地が確定することとなった。なお、小島谷川合流点付近では、新たに遺構・遺物が確認され、平成22年12月に「浦反甫西遺跡」として登録された〔長岡市教委2011〕。

2 第1次発掘調査

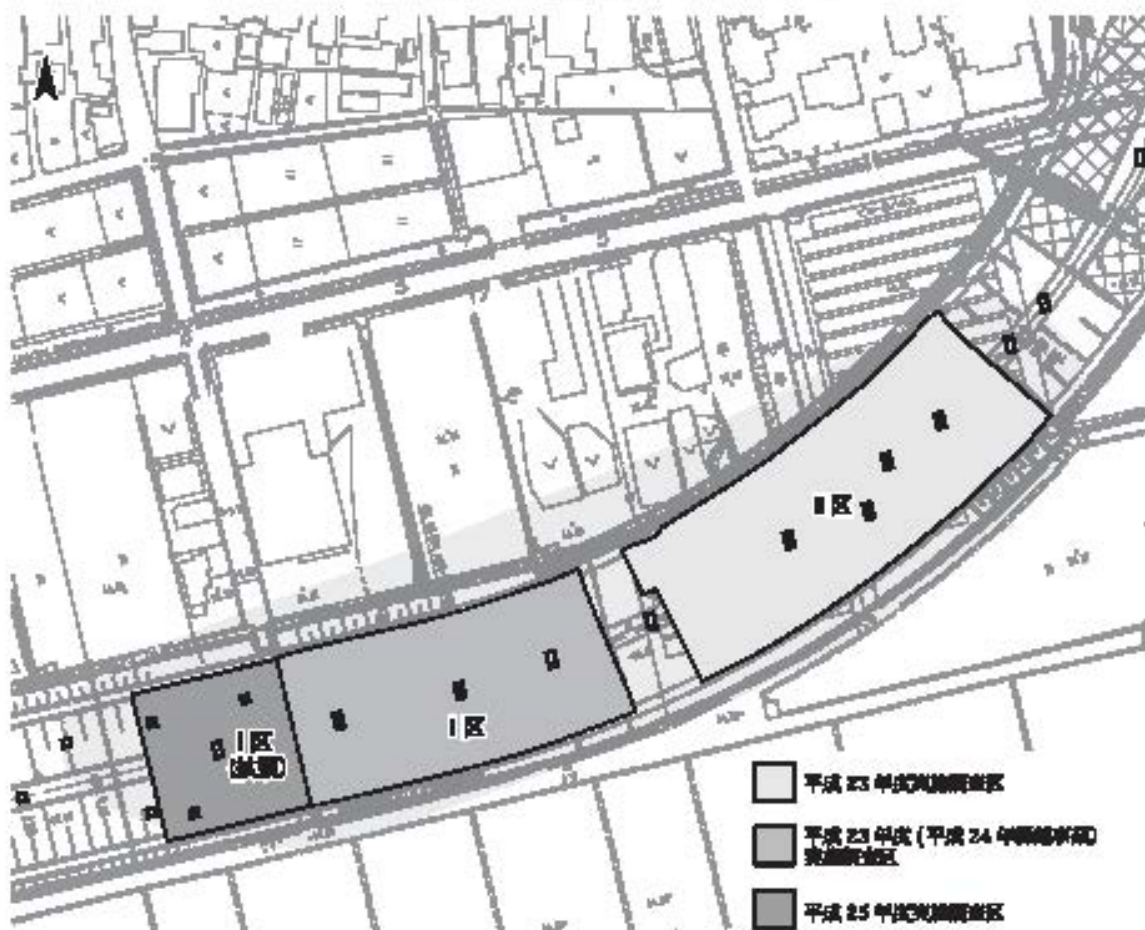
平成23年7月8日、発掘調査業務委託について株式会社大石組と委託契約を締結し、同日業務に着手した。重機による表土掘削等事前準備が完了した8月18日、発掘作業員を動員し本格的な発掘作業を開始した。9月初旬には包含層掘削、遺構検出が完了し、遺構発掘作業に着手した。遺構発掘作業が進む中、現状の遺構確認面下部においても包含層や遺構が存在することが判明し、上下2回の発掘調査が必要な見通しとなった。これを受けて市教委は今後の調査計画について振興局と10月に協議を行い、平成23年度予算で執行する本事業を翌年までの繰越事業とし、翌平成24年12月の完了を目指すこととした。主な変更内容は調査面積の増加（当初7,200㎡→のべ12,100㎡）と調査期間の延長（平成24年12月まで）である。このうち、変更契約事務や繰越事務を現地調査と並行して実施することとなった。

10月28日、Ⅱ区の1回目の空中写真撮影を実施し、11月初旬までにはⅡ区の1回目調査が終了した。1回目の調査では平安時代を中心とする掘立柱建物4棟（当初6棟、検討の後4棟となる。）を初めとする多数の遺構群と石帯・漆製品・墨書土器など特殊遺物を含む遺物群が出土した。その後、季節は降雪期を迎えていたため仮設の上屋をかけて下層の調査を引き続き実施した。このため調査は円滑に進行し、翌平成24年5月下旬頃にⅡ区の2回目調査を終了することができた。Ⅱ区の下層では平安時代の建物跡17棟（調査段階）のほか、古墳時代前期から古墳時代にかけての旧河道などが検出され、建物跡やその周辺域の遺構から良好な土器群が出土した。また、桁行5間の大型建物3棟を含む建物群の柱穴には、24本の柱根が遺存するなど特筆すべき成果が挙げられた。

平成24年5月21日、Ⅰ区の1回目調査を開始し、7月31日には1回目の空中写真撮影を実施した。検出されたのは掘立柱建物1棟と大型の溝状遺構、中世以降と見られる河道等である。また、引き続き墨書土器が複数出土するなど注目すべきものがあった。8月以降、下層に向けた掘削作業を開始し、同月下旬には新たに掘立柱建物3棟を含む遺構群が検出された。また、中世以降の河道と考えられたSD976の一部には古代の遺物を多量に含む部分が残存していることが判明した。古代の河道部では木簡をはじめ、多



第1図 試掘トレンチ配置図 (1/8,000)



第2図 調査対象範囲 (1/2,000)

数の墨書土器が出土したほか、腰帯具・漆器・木器・木製品・祭祀具（斎串・人面墨書土器）などが良好な状態で出土した。10月11日、2回目の空中写真撮影を実施した後に補足調査を行い、10月16日までに現地調査を終了した。なお、出土遺物は現場事務所において、整理作業員による水洗・注記作業を随時実施した。平成24年12月14日、発掘調査受託者の株式会社大石組から測量図など成果品の納入を受け、第1次発掘調査を終了した。最終的な発掘調査面積は約13,500㎡、出土遺物はコンテナ換算で269箱であった。

この間、平成25年1月7日付け長教博第316号文書で県教委へ発掘調査の終了を報告し、同日付け長教博第317号文書で遺物発見届を新潟県警与板警察署へ提出した。この後、平成25年1月31日付け教文第1169号の2文書で文化財認定の通知を受けている。

3 平成24年度試掘調査

平成24年に実施したI区の発掘調査により、古代の遺物を包含した溝状遺構や中世以降の河道跡、及び建物等の遺構群が西側の調査区外へ延びることが想定された。当該地は、平成21・22年度の試掘調査において調査可能な場所が限られていたため、1か所のみ調査にとどまっていた。このため、より詳細な遺跡の範囲を確定するため、8か所に試掘トレンチを設定した。この結果、I区西側からおおよそ37mまでの間で遺構・遺物が確認されたため、河道跡を含むおおよそ1,480㎡の範囲について本発掘調査が必要であると判断された。平成25年2月15日、市教委は遺跡の範囲変更を県教委に通知し、同年2月26日付け与板維第249号文書で振興局は埋蔵文化財発掘の通知を提出した。この後、25年3月13日付け教文第1335号の2文書で県教委から振興局へ浦反甫東遺跡の本発掘調査を実施するよう通知があり、引き続き市教委が第2次発掘調査を実施することとなった。

4 第2次発掘調査

平成25年5月15日、新潟県と長岡市は第2次発掘調査委託について契約を締結した。これを受けて長岡市は6月12日、同業務委託について株式会社大石組と委託契約を締結し同日業務に着手した。重機による表土掘削等事前準備が完了した後、7月16日から発掘作業員を動員し本格的な発掘作業を開始した。8月1日未明の集中豪雨により調査区が冠水したものの、9月3日には1回目の遺構掘削が終了し空中写真撮影を行うことができた。上層部では少数ながら古代の遺構や中世以降の河道が検出された。その後、2回目の遺構検出に向けて掘り下げを行い、10月9日には遺構掘削が終了し下層の空中写真撮影を行った。調査区中央を横切る中世の河道内部では等間隔に並ぶ杭列や珠洲焼・漆器・木製品などが出土したほか、より古い時代の河道と見られる落ち込みから古代の遺物が出土した。また、調査区西側へと離れるにつれ遺構・遺物の密度は薄くなり、遺跡の縁辺部にあたることが確認された。

平成25年12月16日付け長教博第333号文書で、県教委へ発掘調査の終了を報告し、同日付け長教博第335号文書で遺物発見届を新潟県警与板警察署へ提出した。この後、平成26年1月6日付け教文第1214号文書で文化財認定の通知を受けている。

5 整理作業

浦反甫東遺跡の本格的な整理作業は平成25年度から27年度に以下のとおり実施した。なお、出土遺物の水洗・注記や記録類の整理等を行う基礎整理作業は当発掘調査実施の当該年度内に、現場の仮設事務所において実施済みである。

(1) 平成25年度

第1次調査分は、出土土器の接合、出土遺物実測図作成、出土遺物の自然科学分析、木製品保存処理を行った。およそ180箱の出土土器接合や1,400点以上の遺物実測図作成と並行して、木製品や柱根等の年代測定及び樹種同定と保存処理、金属製品・鍛冶関連遺物の分析、漆器の塗膜分析等を実施した。また、これに伴う金属製品・鍛冶関連遺物の観察・所見を穴澤義功氏に、同じく漆器については四柳嘉章氏に作成いただいた。

第2次調査分は基礎整理作業終了後、遺物実測作業に移行した。また、出土木製品及び漆器の自然科学分析についても、第1次調査分と同様に実施した。

(2) 平成26年度

第1次・第2次調査分を対象に、大型土器等の接合・復元・実測、出土土器数量の計測、遺構・遺物の所見作成、遺構・遺物観察表作成入力、遺構・遺物の図版仮レイアウト、遺構・遺物実測図のデジタルトレース、遺物写真撮影・切り抜き加工を実施した。

(3) 平成27年度

第1次・第2次調査分を対象に、報告書作成・刊行に向け、図版原稿作成・本文執筆・編集・構成を行った。また、出土遺物の梱包、報告書作成に関する各種記録類の整理を行い、一連の調査を完了した。

第3節 調査体制

浦反甫東遺跡の発掘調査体制は以下のとおりである。

試掘調査

平成21年度	事業内容	現場作業
	事業期間	平成21年11月24～30日
	調査主体	長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）
	事務局	長岡市教育委員会 科学博物館
	総括	山屋 茂人（科学博物館 館長）
	監理・調査指導	田中 靖（同 文化財係長）
調査担当	丸山一昭（同 主任）	

平成22年度	事業内容	現場作業
	事業期間	平成22年6月3～8日
	調査主体	長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）
	事務局	長岡市教育委員会 科学博物館
	総括	山屋 茂人（科学博物館 館長）
	監理・調査指導	田中 靖（同 文化財係長）
調査担当	丸山一昭（同 主任）	

平成24年度	事業内容	現場作業
	事業期間	平成24年10月12～15日
	調査主体	長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）
	事務局	長岡市教育委員会 科学博物館
	総括	山屋 茂人（科学博物館 館長）
	監理・調査指導	田中 靖（同 文化財係長）
調査担当	丸山一昭（同 主任）	

第3節 調査体制

本発掘調査

平成23年度	事業内容	現場作業
	事業期間	平成23年6月16日～平成24年12月20日（繰越事業）
	調査主体	長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）
	事務局	長岡市教育委員会 科学博物館
	総括	山屋 茂人（科学博物館 館長）
	監理・調査指導	田中 靖（ 同 文化財係長）
	調査担当	丸山一昭（ 同 主任）
	調査再委託先	株式会社大石組
	現場代理人	現場作業：田中 博明（株式会社大石組）
	調査員	現場作業：竹部 佑介（株式会社大石組）、南波 守（同）、松井 奈緒子（同）、白井 雅明（同、平成24年4月14日まで）、岡本 郁栄（同、平成24年4月15日から）
調査補助員	遠藤 昌代（株式会社大石組）、竹内 謙二（同）、真嶋 仁（同）、本多 光江（同）	

平成25年度	事業内容	現場作業・整理作業
	事業期間	平成25年5月15日～平成26年3月13日
	調査主体	長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）
	事務局	長岡市教育委員会 科学博物館
	総括	山屋 茂人（科学博物館 館長）
	監理・調査指導	田中 靖（ 同 文化財係長）
	調査担当	丸山一昭（ 同 主査）
	調査再委託先	株式会社大石組
	現場代理人	現場作業：笹川 順司（株式会社大石組）
	調査員	現場作業：竹部 佑介（株式会社大石組）、三ッ橋 勝（同） 整理作業：松井 奈緒子（同）
調査補助員	現場作業：榎本 好美（株式会社大石組）、菅沼 克絵（同） 整理作業：神林 康子（株式会社大石組）、山崎 聖子（同）	

平成26年度	事業内容	整理作業
	事業期間	平成26年5月8日～平成27年3月18日
	調査主体	長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）
	事務局	長岡市教育委員会 科学博物館
	総括	小熊 博史（科学博物館 館長）
	監理・調査指導	田中 靖（ 同 文化財係長）
	調査担当	丸山一昭（ 同 主査）
	調査再委託先	株式会社大石組
	調査員	松井 奈緒子（株式会社大石組）
	調査補助員	山崎 聖子（株式会社大石組）、榎本 好美（同）

平成27年度	事業内容	整理作業
	事業期間	平成27年5月22日～平成28年3月22日
	調査主体	長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）
	事務局	長岡市教育委員会 科学博物館
	総括	小熊 博史（科学博物館 館長）
	監理・調査指導	田中 靖（ 同 文化財係長）
	調査担当	丸山一昭（ 同 主査）
	調査再委託先	株式会社大石組
	調査員	松井 奈緒子（株式会社大石組）、竹部 佑介（同）、南波 守（同）
	調査補助員	山崎 聖子（株式会社大石組）、松井 麻未（同）

事業内容・契約期間	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
第1次発掘調査	6月	12月			
第1次調査整理			5月	3月	
第2次発掘調査			5月	3月	
第1次・2次調査整理				5月	3月
報告書作成・刊行					5月

第1表 作業工程表

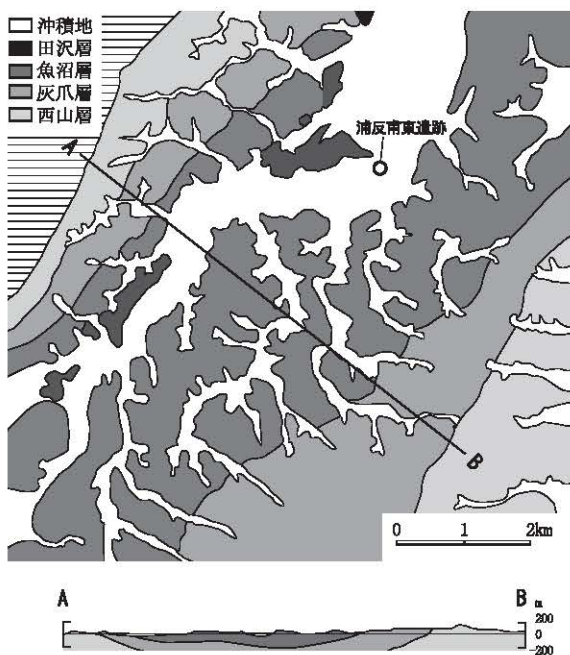
第II章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

浦反甫東遺跡が所在する長岡市島崎は新潟県の中央部海岸寄りにある和島地域に位置する。JR越後線、国道116号バイパスが東西に横断し、新潟市と柏崎市や上越市を結ぶ新潟県海岸部の主要交通ルートとして、重要な位置を占めている。和島地域は日本海側気候に属するが、海岸部に近いため気温の変化は比較的穏やかで、冬季の積雪量は多くても50cm前後である。旧来の集落は山裾に沿って形成され、丘陵部は人工林や二次林、沖積地の大部分は水田・畑地に利用されている。一方、近年の国道バイパス開通や今回の新河道掘削工事は従来の地理環境を変貌させ、その結果集落の景観も様変わりすると予想される。

遺跡周辺の地形は、いくつかの小河川が合流する沖積平野を両側から挟むように連なる低位丘陵から構成されている。この丘陵は東頸城丘陵の北端部分にあたり、角田・弥彦山地へつながる海岸部の西側丘陵、与板・三島地域と接する東側丘陵に細分される。丘陵部では田沢層・魚沼層・灰爪層・西山層の4層が確認され、沖積平野を中心として東西方向へ対称的に分布している。これらの地形は「新潟方向」と呼ばれる南南西―北北東の方向性をもって連なっている。これは褶曲作用によって地層の隆起（山）と沈降（谷）が生じた時の皺の方向と考えられる。和島地域では、皺の山部分（背斜軸）と谷部分（向斜軸）が2本ずつ確認でき、この皺の方向が丘陵や台地の分布、川の流れ方を支配し、現在に至る地形を形成したと考えられる [和島村 1996]。

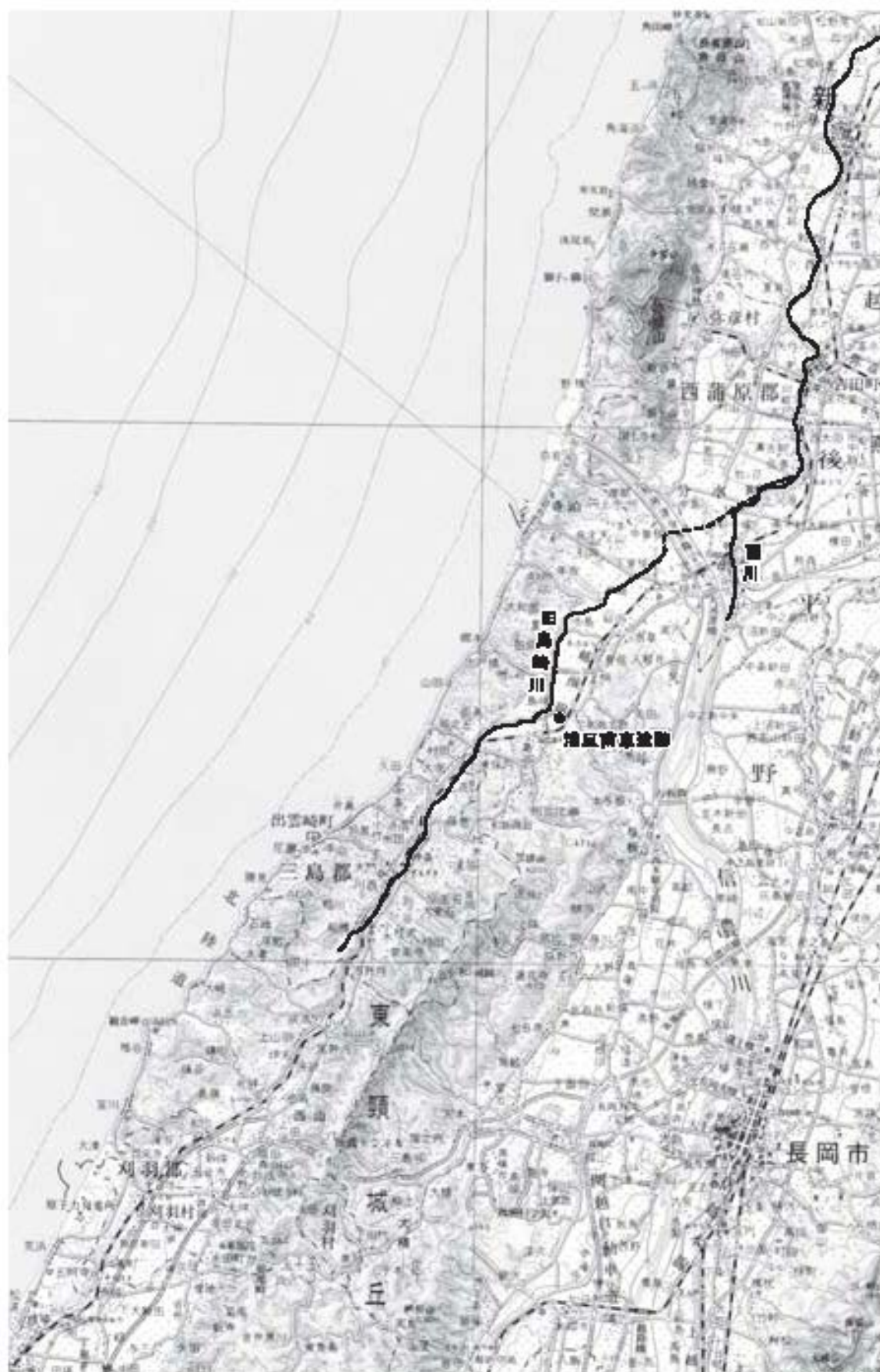
沖積平野は幅500m前後でおよそ10km続いたのち、長岡市島崎で幅2km弱に広げ燕市分水地区で新潟平野へと続く。沖積平野を形成したかつての島崎川（以下、「旧島崎川」）は、出雲崎町田中に源を発し燕市牧ヶ花で信濃川の支流西川と合流、河口の新潟港へと通じていたが、1922年（大正11）の大河津分水路



第3図 地質分類図

通水によって分断され、当時盛んであった舟運は衰退した。また、分水路掘削土は長岡市寺泊本山の南に存在した円上寺瀧の干拓に利用され、昭和40年代には完全にその姿を消し乾田化が図られ、現在は大区画の水田が広がっている。旧島崎川は現在、上流から島崎川、郷本川、新島崎川として完全に分離され、西側丘陵部を開削した放水路から日本海へ注いでいる。

遺跡は郷本川右岸の水田地帯にあり、南東側から流れる下富岡川や荒巻川との合流点付近にあたる。遺跡は隣接する集落と同様、旧島崎川が形成した微高地上に立地している。調査地の標高は約14.5mで周辺の水田に比べ約10cmほど高い微高地にある。調査前の遺跡の現況は、河川用地で元は休耕田であった。



第4図 旧烏崎地(旧烏崎の地形(1/200,000))

国土院 国土地院 国土地院

第2節 歴史的環境

1 古墳時代以前

旧島崎川流域では、後期旧石器時代から近世に至る遺跡が確認されている。和島地域・寺泊地域に限ってみれば、その総数は502件（平成28年1月現在）である。浦反甫東遺跡と併行する古墳時代から中世の遺跡は墳墓を除くと丘陵裾に沿って多く確認され、沖積地での確認例も近年は増加している。

中流域の沖積地にある大武遺跡は、縄文時代から近世に至る文化層が層位的に検出された。これに近接した丘陵部の奈良崎遺跡もほぼ同時代に機能している。この2遺跡の調査成果は、周辺地域の自然環境と人間の活動痕跡の一端を通覧することができる点で、重要な意義を持っている。大武遺跡の調査成果によれば、深さ約7mを測る縄文時代前期の谷は、14世紀前後の中世には完全に埋没したことが判明している。河川氾濫による堆積作用は後背湿地と自然堤防を形成し水田耕作に適した環境を整え、弥生時代後期には山裾の低地部で水田が営まれ生産域として利用された。また、奈良崎遺跡では丘陵頂部を墓域に、テラス部を居住域に利用している状況が明らかとなった。

山裾から離れた沖積平野の微高地への積極的な進出が認められるのは、前代より大規模な墳墓の築造が可能となり土木技術が発達した古墳時代前期と考えられる。中流域の門新遺跡は旧島崎川右岸の微高地に立地し、古墳時代前期・後期の水田跡が検出されている。また、下流域の五千石遺跡も同様に右岸微高地に立地し、古墳時代前期の集落跡や後期に属する堰を伴う水路が検出されており、周辺で水田耕作が営まれた可能性が高い。こうした生産基盤を背景として、地域首長らを埋葬する古墳が中流域の島崎・下流域の竹森周辺の丘陵を中心に築かれたと考えられる。

2 古代

現在の新潟県は7世紀末において北陸3県とともに「越」と呼ばれていた。その後、段階的に国の領域が分割され、最終的に確定したのは越後国から出羽国が分離された712年（和銅5）のことである。また現在の和島地域は、奈良・平安時代において越後国古志郡大家郷に属していた。

927年（延長5）に編纂が完了した『延喜式』（兵部省式諸国駅伝馬条）には越後国10駅の名を載せる。そのうち大家駅・渡戸駅が古志郡とされる。大家駅は八幡林遺跡から墨書土器「大_ナ家驛」が出土しており和島地域周辺を比定地としている。一方、渡戸駅の比定地については近年異論も出されているが〔浅井2010〕、822年（弘仁13）に国分寺尼法光が布施屋を建てた「越後国古志郡渡戸」と同様にとらえ、現在「渡部」の地名が残る寺泊地域周辺を比定地としている〔木村1986〕。

『延喜式』神名帳には、古志郡内の神社6座を挙げている。浦反甫東遺跡に隣接する川東遺跡には、現在の宇奈具志神社の旧地で、延喜式内社の小丹生神社とされる出田神社が鎮座しており、伝承も残る。また、「泉田西庄」と墨書された9世紀末頃の須恵器無台坏が出土しており、文献に記載されない未知の荘園が存在することを示唆している。

律令制の開始・定着期における古志郡の支配拠点は、お互いの距離が0.8kmの至近にある八幡林遺跡と下ノ西遺跡の2遺跡にあり、その動態は互いに連動しながら推移する。下ノ西遺跡では八幡林遺跡に先駆けて拠点施設が置かれており、その時期は7世紀後葉から8世紀初頭の飛鳥時代に遡る。この段階から広い範囲で棟方向を揃え、一辺1mを超える掘方をもつ大型建物が造営されており、官衙や有力者層の居宅と共通する特徴を示す。このことから創建期の下ノ西遺跡は八幡林遺跡に先行する郡（評）衙であった

可能性が高い〔田中 2000〕。また、東側丘陵の北端に近い丘陵頂部には7世紀後半から8世紀初頭に位置付けられる横瀧山廃寺が立地する。白鳳期の瓦・埴仏・鷗尾などと共に金堂と推定される建物基壇1基が確認され、東西約12m、南北約10mの木造基壇外装をもつと考えられている。造営時期が下ノ西遺跡や八幡林遺跡の創建期に近いことから、地方の直接的支配を行った「大領」など郡司層を中心とする在地豪族の関与が想定される。下ノ西遺跡では掘立柱建物の区画溝から8世紀前半の木簡が出土した。木簡の内容は①公出挙や国司（掾）借貸事務、②都への貢進、③郡符（習書）、④越後国内の浮浪人対策に関わる木簡、⑤『山海経』の情景描写絵画などである。①～③の内容はいずれも郡の職掌に関わるものであることから、当該期の下ノ西遺跡には郡レベルの官衙が存在したと考えられる。また、④は越後国内の浮浪人対策を所管する「今浪人司」から古志郡滞在の国司「丸部臣」へ宛てた文書と考えられ、①の国司（掾）借貸の事実も合わせて考慮すると、古志郡内に国司第三等官の掾が常駐したことが想定される〔田中 2003a〕。

また、八幡林遺跡の創建期は、同遺跡出土第2号木簡に見える「養老」年間をさほど遡らない時期であったと考えられる。桁行5間の掘立柱建物を最大として周辺では大規模な地形改変が見られるが、官衙中枢部と考えられる建物は現段階で確認されていない。しかし当該期の遺物としては、奈良三彩・緑釉鳥形硯・帯金具・木簡・墨書土器・人形・斎串など官衙の特徴を示すものが多く見られる。特に「石屋木」墨書土器は未知の城柵「石屋城（または柵）」の存在を示唆する。過所機能をもつ蒲原郡符が廃棄されている点や647年設置の城柵「淨足柵」を継承したと推測される「沼垂城」との関連を窺わせる木簡の存在も考慮すると、城柵・関といった国レベルの機能を備えていたと考えられる〔田中 2005〕。

8世紀後半の下ノ西遺跡・八幡林遺跡では遺構・遺物が殆ど確認されない空白期間が存在する。その要因は不明であるが、何らかの社会情勢の変化によって施設の廃止・移転が行われた可能性がある。この2遺跡が再興するのは、八幡林遺跡が9世紀初頭頃、下ノ西遺跡は9世紀前半のことである。八幡林遺跡では創建期に見られた国レベルの機能を示す文字資料は確認できなくなり、郡に関連する内容のもののみとなる。9世紀前半には本遺跡最大の四面廂付建物（平面積180㎡）や中・小規模の建物が造営され、この建物周辺からは帯金具・神功開寶・太刀外装具・円面硯・風字硯・漆器優品・木簡・墨書土器など官衙の特徴を有する遺物が多数出土した。特に「^{（上カ）}□郡殿門」「上大領殿門」と宛書された封緘木簡や「大領」墨書土器が多量に出土することは、この中心的な建物群が大領館であることを物語っている。一方、下ノ西遺跡では東西棟と南北棟が計画的に配置されたエリア（Ⅰ区）や官衙風の建物配置をとる遺構群（Ⅴ区）が確認されている。後者の建物群には長大な土坑が並置されており、平城宮跡馬寮で馬の洗い場状土坑に類似することから、駅家に関連する遺構ととらえ「大家駅」の可能性が指摘されている〔田中 2003a〕。

八幡林遺跡の四面廂付建物は9世紀後半には廃絶したと考えられ、官衙的機能は次第に衰退し10世紀初頭には機能しなくなったと考えられる。これに替わって出現するのが下ノ西遺跡の四面廂付建物SB17で、平面積250㎡を測る古志郡最大規模の建物である。さらに、SB17と重複して造営されたSB20はその機能を継承した建物と考えられ、その傍らには1,000個体近い土師器碗を一括廃棄した長大な土坑が検出された。この廃棄行為は建物の廃絶時に執り行われた祭祀によるものと考えられ、その土器群は10世紀前葉に位置付けられる。SB20の廃絶を機に下ノ西遺跡は終焉を迎えることとなる。

こうした律令制の開始・定着期に機能した八幡林遺跡・下ノ西遺跡が消滅する頃、新たに出現するのが沖積平野の中心に位置する門新遺跡である。門新遺跡は10世紀第1四半紀には既に2棟の東西棟が造営されるが、最も充実するのは主屋や付属建物・倉庫・井戸・船着場遺構を備え、「延長六年」（928）の漆紙文書を出土した10世紀第2四半紀前後の時期である。これは、律令体制が崩壊し地方支配の担い手で

ある郡が機能しなくなる時期にあたる。この遺跡の性格としては、郡司を歴任していた首長層、あるいは私出挙等の私的経済活動によって急成長した富豪層が郡衙の解体と共に郡の機能を掌握し、さらなる勢力拡大のために造営した開発領主の居宅と捉えるのが妥当であるとされている [田中 1995]。

3 中世

古志郡は9世紀代の三嶋郡分立の後、南北朝時代に至り信濃川左岸を西古志郡、右岸を東古志郡と呼ばれるようになった。西古志郡は「山東郡」とも呼ばれ、江戸時代初頭に「三島郡」に変化し現在に至ったものと考えられている。11世紀中頃以降、全国的に荘園が増加する一方、国衙領においても保と呼ばれる公領が存在した。旧島崎川流域周辺で確認されているものでは、吉河荘（長岡市三島地域から和島地域・出雲崎町に及ぶ）、福雄荘（燕市南西部・弥彦村の一部）、乙茂保（出雲崎町・長岡市和島地域の一部）、於木保（出雲崎町小木周辺）、小加礼保（長岡市寺泊町軽井・入軽井周辺）などがある。

本地域における小字名のほとんどは慶長3年（1598）の検地帳に既にその名が記されているように、少なくとも中世までは遡りうると考えられる。現在、中世における集落遺跡の確認例が少ない状況ではあるが、少量ながら中世の遺物が現集落内や隣接地から採集されており、中世と現在の一部の集落は重複しているものがあると考えられる。このため、結果的に発掘調査事例は少なく本地域における集落の実像は不明な点が多い。

しかし、いくつかの発掘調査によって本地域における中世集落の実像の一端が明らかになっている。山田郷内遺跡では15世紀頃の鍛冶工房跡や井戸・水田及び呪符木簡やりん、卒塔婆などの仏教関連遺物が発見された。「東司觸桶」と墨書される曲物桶が出土したことや、周辺に廃寺の伝承とその存在を裏付ける石塔群がある。このことから、本遺跡は仏教寺院との関連を想起させる周辺地域でも稀有な遺跡である。また、13世紀代の総柱式の庇付掘立柱建物をもつ下ノ西遺跡や、12世紀後半から15世紀前半の在地領主の屋敷地とされる番場遺跡、漆製品や鋳造関連遺物が出土した寺前遺跡、13～15世紀の土器・陶磁器・木器・漆器などが多量に出土した大武遺跡等を挙げることができる。

山城は東西の丘陵に非常に多く確認され、集落に近接して分布する。奈良崎遺跡の丘陵部北端で削平段や土塁、建物、井戸など14世紀から16世紀の遺構群が検出された。本遺跡は延元元年（1336）の「色部高長軍忠状案」に記される「島崎城郭」の比定地とされており、発掘調査によって検出された遺構群が山城に伴うことを裏付けた [春日ほか 2002]。また、村岡城跡は日蓮宗総本山妙法寺の背後に控える南北朝時代の山城で、南朝方の武将村岡三郎の居城とされ、周辺には南北朝期に遡る文化財も残されている。

4 「島崎川」をめぐる治水史

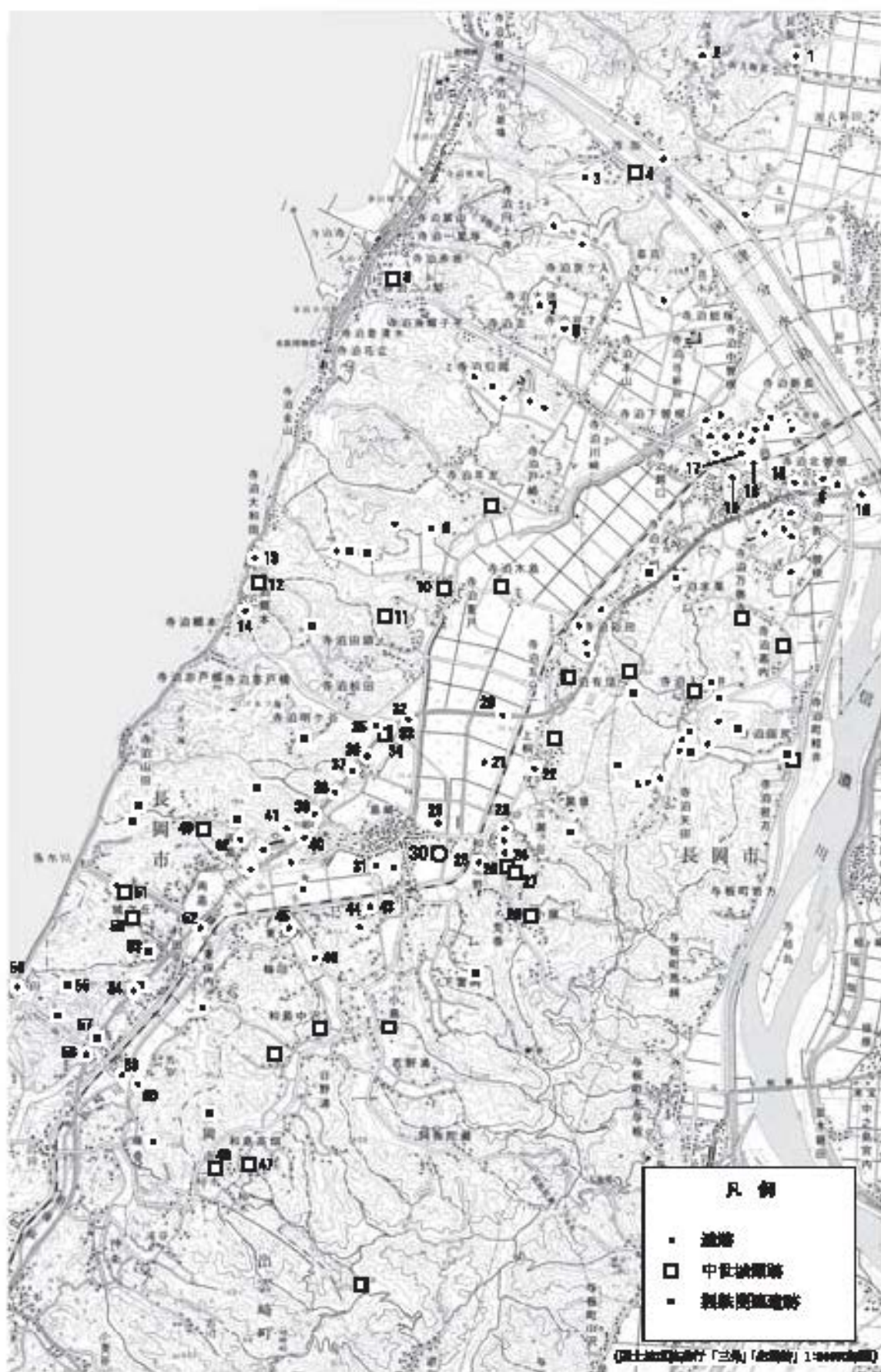
現在の和島・寺泊地域を流れる河川は、西から島崎川・郷本川・新島崎川の3水系に分かれており、それぞれが日本海へ注いでいる。しかし、明治から大正年間にかけて大河津分水の開削がなされる以前は、これら3水系は元来ひとつの河川であった。これが旧来の「島崎川」（以下「旧島崎川」）である。旧島崎川は出雲崎町小木周辺の小谷から流れを發し、中流域の和島・下流域の寺泊地域を蛇行しながら北東の越後平野に向かって流れ、燕市牧ヶ花で信濃川の支流西川へと注いでいた。上流域は山間部の狭い谷あいでは流れは速く、中流域の島崎周辺では沖積平野の幅が2km弱に広がり平坦となる。さらに、下流域の本山から下曾根周辺には広さ500ha余りの「円上寺瀧」が広がっていた。

右岸にあたる門新遺跡や割田遺跡では、埋没した河川跡が検出されている。流路の方向は基本的に南北

第2節 歴史的環境

番号	名称	所在地	時代	文献	備考
1	有馬崎	燕市	古代(平安)・中世	前山 1997	
2	国上寺遺跡群	燕市	古代・中世	分水町 2004	
3	天王	長岡市	古代(平安)・中世	加藤 2013	
4	渡部城	長岡市	中世(戦国)	寺泊町 1991	
5	弁才天竈跡	長岡市	古代	寺村・久我 1960	須恵器竈か
6	日光畑	長岡市	古代(奈良・平安)・中世	寺泊町 1991	
7	向屋敷	長岡市	古代中世	八重樫 2000	
8	赤坂山城	長岡市	中世(南北朝)	寺泊町 1991	
9	夏戸竈跡	長岡市	古代	寺村・久我 1960	須恵器竈か
10	夏戸城	長岡市	中世(戦国)	寺泊町 1991	志駄氏の居城
11	田頭城	長岡市	中世(室町～戦国)	寺泊町 1991	
12	伊奈胡城	長岡市	中世(室町～戦国)	寺村 ^{ほか} 1992	
13	七ツ石	長岡市	古代	寺泊町 1991	製塩遺跡
14	郷本	長岡市	古代	寺泊町 1991	
15	太屋敷	長岡市	古代(平安)	寺村 ^{ほか} 1987・1991	
16	五千石	燕市・長岡市	縄文・弥生・古墳・古代	松島 ^{ほか} 2010、加藤 ^{ほか} 2011	
17	諏訪田	長岡市	弥生・古代(平安)	寺泊町 1991	
18	京田	長岡市	弥生・古代(平安)	寺泊町 1991	
19	横滝山	長岡市	縄文・弥生・古代(白鳳～平安)	寺村 ^{ほか} 1977・1983・1985・1986	白鳳期の寺院跡
20	門新	長岡市	古墳・古代(平安)	田中 1995・1996、丸山 2005	古代開発領主の居宅
21	上新田	長岡市	古墳・古代	和島村 1996	
22	上桐神社裏	長岡市	弥生・古代・中世	和島村 1996	
23	北野大平	長岡市	弥生・古代	和島村 1996	
24	和島中道	長岡市	古代	和島村 1996	
25	北野丸山	長岡市	縄文・古墳・古代(平安)	田中 2003b	
26	入り館	長岡市	中世(室町～戦国)	和島村 1996	北野城の居館
27	北野城	長岡市	中世(室町～戦国)	和島村 1996	
28	根小屋城	長岡市	中世(室町～戦国)	和島村 1996	力丸氏の居館
29	川東	長岡市	弥生・古墳・古代(平安)・中世	山賀 2012	
30	浦反南東	長岡市	古墳・古代(平安)・中世	本報告書	
31	浦反南西	長岡市	古代(平安)・中世	加藤 ^{ほか} 2013	
32	大武	長岡市	縄文・弥生・古墳・古代・中世	春日 ^{ほか} 2000・2014	
33	奈良崎	長岡市	縄文・弥生・古墳・古代・中世	春日 ^{ほか} 2002	
34	島崎城	長岡市	中世(南北朝)	和島村 1996	
35	姥ヶ入製鉄	長岡市	古代～中世	渡邊 ^{ほか} 2010	製鉄関連遺跡
36	姥ヶ入南	長岡市	古代(飛鳥～平安) 中世	渡邊 ^{ほか} 2010	
37	妙満寺跡	長岡市	中世(室町)	丸山 2003	
38	立野大谷製鉄	長岡市	古代～中世	渡邊 ^{ほか} 2010	製鉄関連遺跡
39	山田郷内	長岡市	古代(平安) 中世 近世	和島村 1996、丸山 2007	中世の鍛冶工房跡
40	八幡林	長岡市	古代(奈良・平安) 中世	山本 ^{ほか} 1992・高橋 ^{ほか} 1993 田中 ^{ほか} 1994・田中 2005	官衙関連遺跡
41	吉沢	長岡市	古代(平安) 中世 近世	丸山 2012	
42	坂谷	長岡市	古代(平安) 中世	和島村 1996、小林 2012	
43	下ノ西	長岡市	古代(飛鳥～平安) 中世	田中 1998・1999・2000・2003a	古志郡衙関連遺跡
44	旧北辰中学校	長岡市	古代	和島村 1996	瓦竈跡
45	梅田	長岡市	古代	和島村 1996	
46	本合分	長岡市	古代 中世	和島村 1996	
47	高畑館	長岡市	中世(南北朝)	和島村 1996	
48	高畑城	長岡市	中世(南北朝)	和島村 1996	
49	高森城	長岡市	中世(南北朝)	和島村 1996	
50	村岡城	長岡市	中世(南北朝)	和島村 1996	
51	落水館	長岡市	中世(南北朝)	和島村 1996	
52	オクマンサマ	長岡市	古代 中世	和島村 1996	
53	メチガ谷	出雲崎町	古代(飛鳥・奈良)	出雲崎町 1988	
54	大慶寺御経塚	出雲崎町	古代	小田 ^{ほか} 2006	
55	合清水	出雲崎町	中世	出雲崎町 1988	
56	久田製塩	出雲崎町	古代	出雲崎町 1988	製塩遺跡
57	梯子谷竈跡	出雲崎町	古代(飛鳥・奈良)	出雲崎町 1988	須恵器竈跡
58	寺前	出雲崎町	古代 中世	高橋 ^{ほか} 2008	
59	乙茂島崎川	出雲崎町	古代(平安)	出雲崎町 1988	
60	向江山	出雲崎町	古代(平安)	出雲崎町 1988	

第2表 周辺の遺跡



第5図 周辺の遺跡分布(1/70,000)

方向を示しており、旧島崎川と同様に北側が下流になると考えられる。門新遺跡の平成5年度調査のⅢ区旧河道は川幅約20m・深さ約4mの比較的大きな規模のもので、古墳時代前期から古代を中心とし近世まで存続する。平成6年度調査の旧河道は川幅12m・深さ2m以上で、古代から近世の遺物が検出された。また、蛇行する左岸側には大型掘立柱建物が隣接し、川岸をテラス状に改変して船着場に利用した形跡がみられた。割田遺跡の1号河川跡は川幅16.5m・深さ1.3m、同2号河川跡は川幅21.3m・深さ2.3mとほぼ同規模で、古代から中・近世まで機能した。遺跡の北西側には瀉状の湿地帯が広範囲で確認されており、1号河川跡はこの瀉に流入していたとされる。瀉に開口する部分では多数の木杭群が設けられ、しがらみとして機能したと考えられる。これらの河川跡はその位置関係からいずれも同一の河川で、旧島崎川の一部、あるいは荒巻・三瀬ヶ谷方面からの出水を集めたものと推定され、古墳時代以降、時代によって規模や流れを変えながら近世まで存続したと考えられる。このように水上交通において河川は重要な役割を担ったと考えられ、この流域での利用は古代まで遡ることが可能である。

近世17世紀中頃以降になると新田開発が奨励され始め、治水・灌漑機能の向上のため人々は積極的に河川に手を加えていった。村人にとって旧島崎川は「拙者共茂用悪水之川ニ御座候」とあるように、稲作における用水・排水の両機能を兼ねていた川であり、また農閑期には舟運にも利用される重要な河川であった。しかし前述のとおり、傾斜が極端に緩いため雨季になると西川からの悪水が逆流し、流域一帯は一大湖沼と化した。逆に、水量が少ない時期は水田に広く水を引くことが難しくなるという早損・水損の激しい土地であった。このため各所に堰が設けられるが、同時に洪水時には排水の障害となり取水堰の高さをめぐって上流・下流の村々の間でたびたび争論が起こされてきた。

このような状況の抜本的解決のために計画されたのが、日本海へ向けた3本の放水路開削工事である。浦反甫東遺跡の北西を流れる郷本川もこのうちの一つである。郷本川開削の計画は、旧島崎川から海岸に向かって分水路を掘削し郷本村の海浜へ悪水を落とすというものであった。1699（元禄12）年、地元の村々によってこの計画は立案されるが藩主の領地換えにより中断し、1768（明和5）年に再び工事請願が出された。しかし、工事の悪影響を懸念する地元村々との折衝もあり、着手の運びとなったのは1774（安永3）年のことであった。その後も工事は思うようには捗らず期待する効果は得られなかったようである。1796（寛政8）年には再工事のための負担金や各種取決めが村々の間で交わされるなど、水害の克服を目指す村人の苦労は続いた。一応の完成を見たのは1873（明治6）年のことであったが、すべてが人力によるものであったため川幅も深さも十分ではなく、その後もしばしば水害に見舞われた。その後、殖産興業政策を背景に国家主導の大規模な国土開発が実施されるとともに、河川法の制定など治水に向けた国家的な取り組みが整備された。こうした背景のもと1907（明治40）年、大河津分水は再度の着工が決定され1922（大正11）年に通水となった。しかし、このために旧島崎川は流末の遮断を余儀なくされ、落水分水路・円上寺隧道の開削、郷本川の改修工事が必要となり、これらは大河津分水付帯工事として行われることになった。1923年（大正12）、郷本川改修工事が竣工したのを契機に周辺域の治水環境は大幅に改善することとなり、耕地整理への環境も整いつつあったが財政的負担が大きく、本格的な実施は戦後間もない昭和20年代まで待たねばならなかった。

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 調査区とグリッドの設定

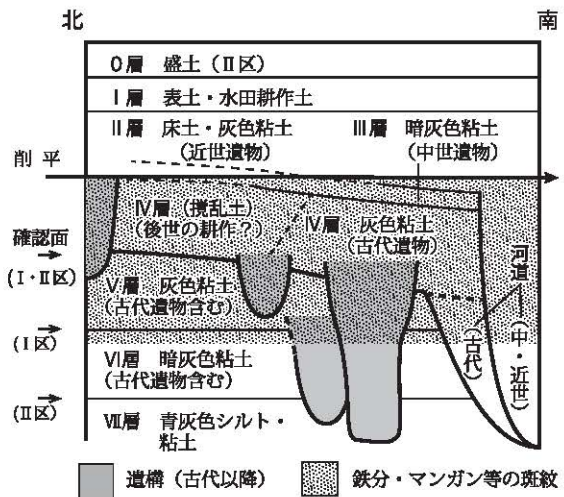
試掘・確認調査をもとに遺構・遺物の検出された捷水路法線内の範囲、延長約230mを調査区として設定した(第7図)。調査区中央の近世頃まで機能したと推定される旧河川は、遺物が出土しないため本調査対象外とした。この旧河川を挟んで西側をⅠ区、東側をⅡ区とした。

グリッドは調査区全体を覆う10m四方のメッシュを設定し、これを大グリッドとした。メッシュは世界測地系 X=175,350・Y=24,190を起点に縦軸・横軸に組み、縦軸は北から南に1マスずつアルファベットを付し、横軸は西から東に同様にアラビア数字を付した。これにより、大グリッドは「8N」のように表記する。さらに、大グリッドは2m四方のマスを分割される合計25マスの小グリッドからなり、西から東へ順に1.2.3.4…と番号を割り振った。この大グリッドと小グリッドを組み合わせ、「8N1」のように表記して、調査区内の位置情報を記録した。

なお、このグリッド名称は本遺跡調査固有のものであるが、同じ郷本川河川改修事業に伴い発掘調査された川東遺跡の遺構平面図との整合性を取るため、同方向のメッシュを採用している。

第2節 基本層序

遺跡は沖積地における微高地状に立地している。標高は調査区北側の水田で14.46m、南側で14.28mとなっており、北から南に向かって傾斜していることが分かる。基本土層は、上層から表土・耕作土(Ⅰ層)・水田床土(Ⅱ-1層)・近世中心の遺物包含層(Ⅱ-2層)、中世中心の遺物包含層(Ⅲ層)、古代の遺物包含層(Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層)に相当する。古代の遺構は、Ⅰ区ではⅤ・Ⅵ層、Ⅱ区ではⅤ・Ⅶ層で確認され、いずれもシルト・粘土層を主体とした安定した地盤に構築されている。柱穴はⅦ層中に支持基盤を持つものが多い。古墳時代の遺物はⅦ層検出の河川SD466から出土しており、河川埋没後に古代の建物が構築されたと考えられる。



第6図 基本土層模式図

遺跡は近年まで水田や育苗施設として利用され、Ⅰ区は北側で削平を受けⅡ区では攪乱坑が見られた。また、Ⅳ層・Ⅴ層は古代以降の耕作で攪拌され、純粋な層序ではない部分があった。これに加え、上部遺構確認面のⅤ層を中心に酸化鉄・マンガンの斑紋が著しい状況であった。このため、より明瞭に検出できるⅥ・Ⅶ層で再度遺構確認作業を行った。したがって、検出された上下2面の遺構確認面は新旧関係を表すものではなく、一定の時期幅(9世紀代)の中で遺構が重層的に構築されたことを表すと考えている。

第3節 調査方針とその方法

1 発掘作業

調査区を通して検出された河川跡 SD976・SD981は川幅もあり深度も深いことが予想されたため、はじめに重機によるトレンチ掘削を行った。その後、遺物が希薄な部分は重機で掘り進めることとし、遺物が密集する部分を本格的に調査することとした。

Ⅱ区V層では遺構が容易に確認できるものと、土中の斑紋や攪拌により非常に困難なものがあり、今後とも検出・判定に時間がかかることが懸念された。また、V層では複数の掘立柱建物が存在することが推測されたため、調査の主眼はより多くの建物を検出することに重点を置いた。

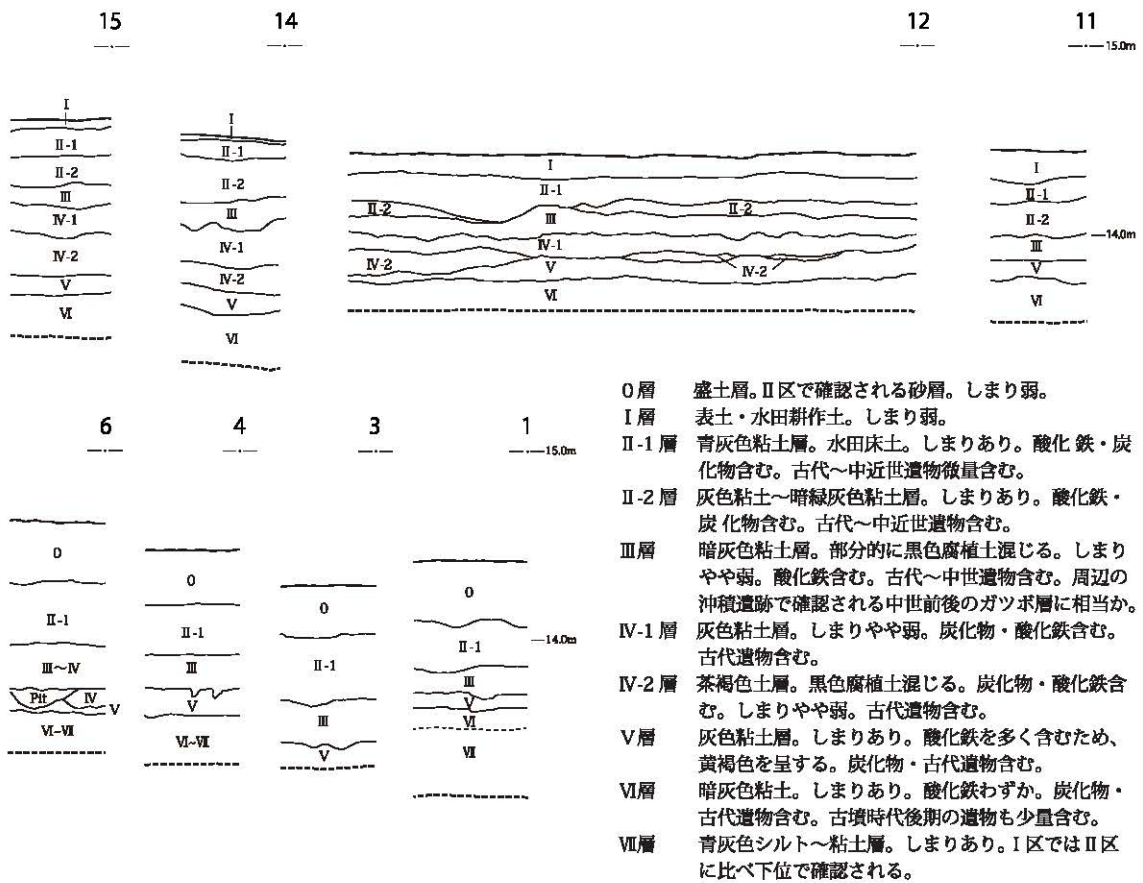
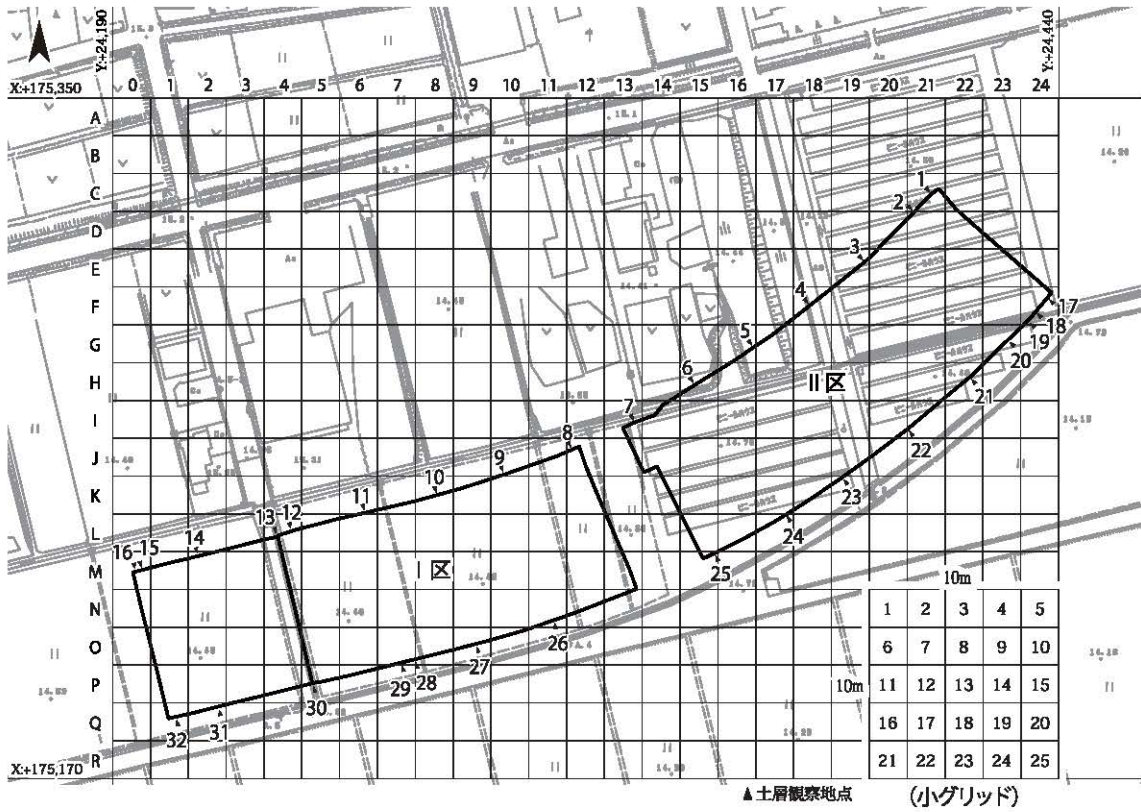
調査の進展に伴いV層より下層でも遺構・遺物が確認できたため、再度掘り下げを実施した（前節・第1章第2節参照）。この結果、Ⅰ区ではV層（第1確認面と呼ぶ。以下同様）及びⅥ層（第2確認面）で、Ⅱ区ではV層上面（第1確認面）、V層中層（第2確認面）、及びⅦ層（第3確認面）で遺構が確認できた。遺構確認にあたって、V層では容易に検出できるものに留め、遺構プランが不明確なものはより認識しやすい下位の層で検出作業を行った。この結果、Ⅰ区では2面、Ⅱ区では3面の遺構平面図が作成できた。各層で重複する遺構についてはそれぞれの出土遺物が接合したことから同一遺構の可能性もあったため、主に整理段階において、各層の遺構平面図や出土遺物の接合関係、記録写真等を参考に同定の判断をした。

建物跡の検出では、まず平面的に個々の柱穴を把握したのち配列を考える必要があるため、遺構確認面を水平に整えることとした。また、柱痕跡の平面的な位置もできるだけ正確に把握するために、掘方内部と柱痕跡をそれぞれ平面的に掘り下げた状態で略図を作成し、検討を行った。この後に断面を確認することになるため、柱穴の断面図は十分なものが作成できなかった遺構もある。建物と判断した根拠は、柱痕跡または柱穴の配列と間隔、覆土の類似性と断面の状況、他の建物や区画溝等との方向性などである。したがって、調査段階において平面的には建物と考えていたSB2・4は、半裁によって柱穴と認められなかったため遺構から除外し、欠番とした。

現場作業の遺構検出には縮尺1/100で遺構略図を随時作成し、建物復元の可能性を検討した。遺構検出の後、ラジコンヘリコプターや高所作業車による空中写真撮影を実施し、電子平板により1/40平面図・1/20微細図等を作成した。その後、遺構発掘・半裁作業を行い手実測による1/20土層断面図を作成した。記録写真の撮影には、35mm判リバーサルフィルム・モノクロフィルム、6×6判ブローニーサイズのリバーサルフィルム・モノクロフィルム、APS-Cサイズのデジタル一眼カメラを使用した。

2 整理作業

現場で作成した遺構平面図及び断面図等は校正を行い、掲載対象遺構を抽出し、デジタルトレースを行った。この時、再度図面を検討し新たに建物として復元できたものもある。出土遺物では最も量の多い土器の接合を重点的に行った。遺構間や層位を超えた接合事例もあり、出土位置から10m四方を目途に接合関係をみた。相対的に個体数の多い食膳具は基本的に残存率が高いものを実測対象とし、個体数の少ない須恵器貯蔵具はその破片を全て抜き出し接合を試みた。その結果、復元率の高い資料を得ることができた。主要な木製品は写真撮影と図化をはじめに済ませ、今後の保存管理・活用を考慮して高級アルコール法による保存処理を行った。遺物実測は対象遺物を抽出し、手実測で図化した後デジタルトレースを行った。遺物写真はすべてデジタルカメラにより撮影した。版組みは印刷業者のDTPソフトにより行った。



第7図 グリッド設定図(1/2,000)・土層柱状図(1/40)

第IV章 遺構

第1節 遺構の分布状況

検出した遺構は全体で、掘立柱建物28棟、柵列4条、柱穴・ピット474基、井戸6基、土坑41基、溝313条、河川4条、性格不明遺構83基であった(第8・9図)。

I区では、調査区東側で古墳時代後期から中近世に至る河川SD976が、調査区西側では平安時代から中近世に至る河川SD981が検出された。時代により流れが変化しているが、旧島崎川の一部と考えられ、南西から北東へ流れていたと考えられる。古墳時代後期以前の遺構は確認されず、遺物のみ出土した。平安時代の遺構はこの河川に挟まれた4～9グリッドで主に確認できる。ほとんどの遺構は北西-南東方向を主軸とし、河川SD976に沿って分布している。また、調査区北側で検出されたSD977より北西側では遺構の密度が低くなっている。これは、確認面の標高が南から北に向かって緩やかに上がっており、標高の高い区域では後世の耕作等で削平を受けたことが原因であろう。

II区では北東-南西方向で緩やかな微高地が形成されており、ここに平安時代の遺構が分布している。遺構の主軸方位はI区同様北西-南東方向が主体であるが、I区よりもやや南北方向に寄る。また古墳時代前期～後期の河川SD466は、調査区の南寄りを東西方向に蛇行しながら流れており、平安時代の遺構が分布する微高地はこれによって形成された可能性も考えられる。なお、II区東端及び西端では、近世以降と考えられる河川がII層から検出されている。西端の河川は調査範囲外となるため明確ではないが、I区で検出された河川SD976と同一の可能性も考えられる。

第2節 遺構の対応関係

前節では平面的な遺構の分布状況をみたが、ここでは垂直的な遺構の分布状況を見ていきたい。第III章第2節・第3節で述べたとおり、遺構確認面をI区では2面、II区では3面に区分・設定し、その都度遺構平面図を作成した。各調査区の遺構平面図を重ね合わせたものが、別添の合成平面図である。これを見ると各確認面を通じてほぼ同じ場所で遺構が確認されるものがある。例えばII区SB9-P716は、第1確認面(V層)では当初SK408と認識していたが後に第3確認面(VII層)でも確認され、柱穴であることが判明した。また、第2確認面(V層中)で検出されたII区P891やP892は、第3確認面(VII層)検出の柱穴とともにSB22を構成することが確認された。上記2例は、いずれもV層確認の遺構がVII層まで到達していたものである。

さらに、V層で検出された幅広の溝がVI・VII層で検出された建物を囲む、あるいは区画するように存在する事例がみられる。例として、I区ではSB26の柱穴、SD982とSB27、II区ではSD360の一部とSB7、同SD301とSB13、同SD305・SD385とSB9・SB10などが挙げられる。これは、周溝よりも柱穴が相対的に深いためであり、かつ上層の確認面が耕作等の影響で検出しづらい状況であったためと考えられる。一般に「官衙建物では、方形の柱掘りかたの場合、(中略)深さ0.8～1m以上の大型の規模を有する例が多い」とされ[山中2003]、周溝よりも柱穴が相対的に深いのは容易に想像できる。本遺跡もこれに準じて言えば、桁行5間の大型建物(SB7・SB9・SB12)のうち深さ80cm以上の柱穴は見られないことから、



第8図 遺構全体図1 (第1確認面)



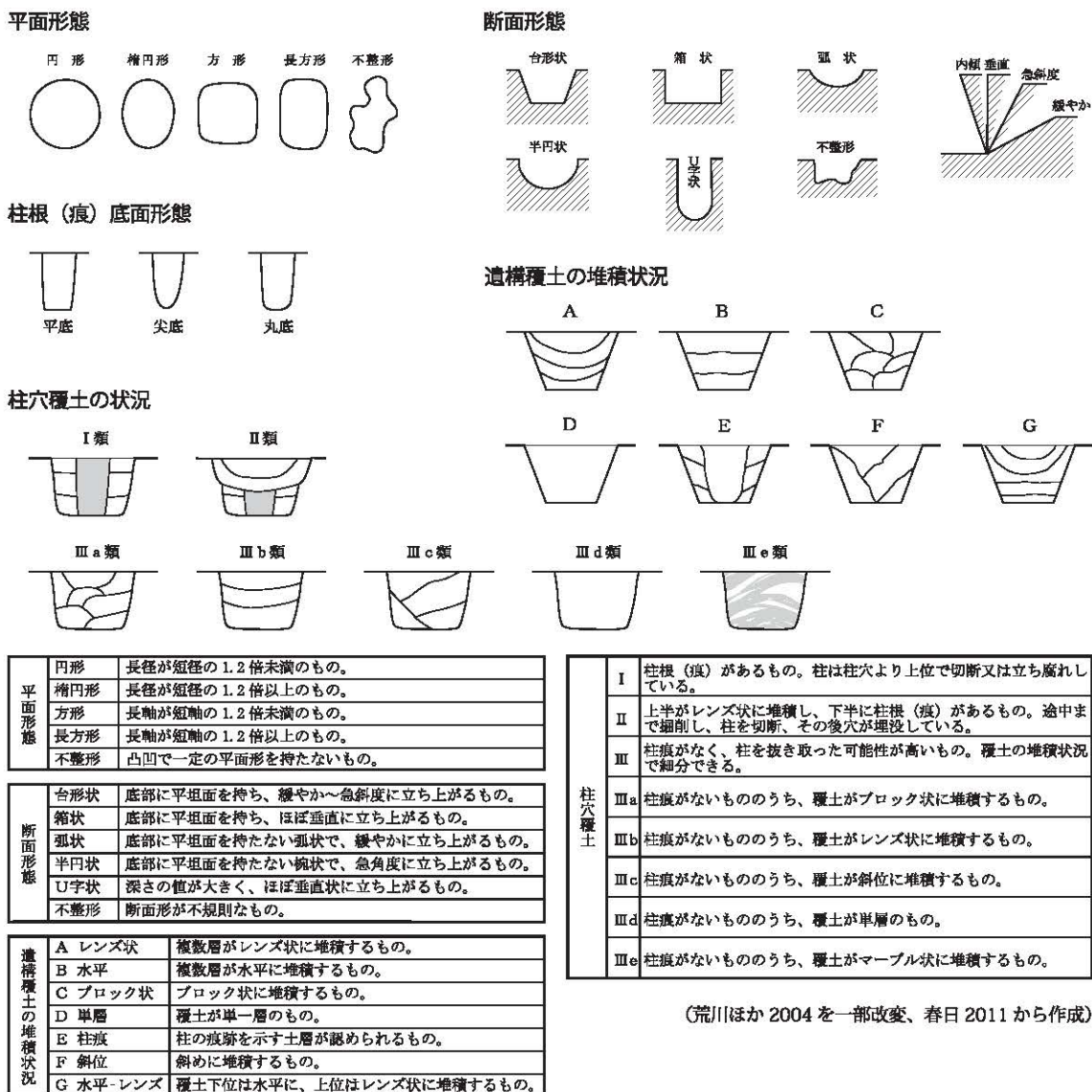
第9図 遺構全体図2 (第2・3確認面)

構築当時の地面はさらに上層にあった可能性が高い。調査担当者の力量不足もあり現場段階では認識できなかったが、本遺跡の遺構には、VII層検出の柱穴でも本来はV層よりも上層から掘り込まれたものがあること、また、異なる確認面の遺構が対応し一つの建物として復元できる例があることを指摘しておく。

第3節 遺構の記述と分類

遺構名称には略号を用い、掘立柱建物 (SB)、柵列 (SA)、柱穴・ピット (P)、井戸 (SE)、土坑 (SK)、河川を含む溝 (SD)、性格不明遺構 (SX) とした。遺構の記述及び図示は主要なものに限定した。主要な遺構以外は観察表に個々の計測値を記載し、詳述は行っていない。遺構番号は、SB・SA 以外は遺構種別に限らず通し番号とし、検出した順に付した。一部は整理作業中に認定し番号を付したのものもある。

遺構の記述に当たり、平面形、断面形、遺構覆土の堆積状況の分類については『青田遺跡』[荒川ほか 2004] を、掘立柱建物の柱穴覆土については、春日真実氏の分類 [春日 2011] を参考とした (第10図)。また、主要な遺構の帰属年代については第七章第1節1で設定した編年区分 (1~7段階) を用いて記述する。



第10図 遺構形態・覆土の分類

第4節 各説

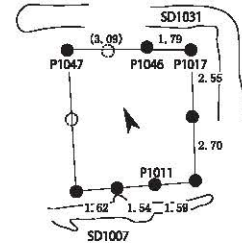
1 I区の遺構

(1) 第1確認面(V層) 検出遺構

A 掘立柱建物

SB24 (図版3・5、図版202)

4N・5M・5Nグリッドに位置する。V層中で検出された。建物の方位はN-21°-Eを指す。桁行2間、梁行3間の側柱建物で、コの字状に配置される2条の周溝が確認された。建物の平面積は26.16㎡、柱間寸法は桁方向で2.55~2.70m、梁方向で1.54~1.79mを測る。建物の北西側はSD977によって切られ、建物の北辺と南辺の柱穴を1基ずつ欠いている。柱穴は8基確認され、円形・楕円形・長方形と様々で、覆土は灰色土を基調とする。柱穴の直径は42~50cmを測り、6基から15~35cmの柱痕跡が確認できた。コの字状の溝を構成するSD1007の長さは6.33m、幅50cm、深さ35cmを測る。覆土は褐灰色土を基調とし、レンズ状に堆積する。もう一方のSD1031は建物北辺から東辺に沿ってL字状に巡る。長さは北辺で8.24m、南辺で3.52m、幅1m、深さ16cmを測る。覆土は灰色土を基調とし、地山ブロックを含みレンズ状に堆積する。建物の軸線に沿って巡るこれらの周溝は雨落ち溝等、SB24に伴う遺構と考えられる。本建物と重複するSD977はP1047・SD1007・SD1031を、同じくSD1006はP1011を、SD1015はP1017・P1046をそれぞれ切っている。なおSX1241は本建物と近接する位置にある。直接的に関連を示す状況は確認できなかったが、P1017出土遺物の多くとほぼ同時期のものと考えられる。また、SD1031と重複するSB27-P1148とも直接的な切り合い関係は確認できなかった。遺物は柱穴および溝から須恵器有台環・無台環・瓶類・横瓶、土師器無台碗・小甕、土製品が出土し、わずかに6段階を含むが、多くは3段階に位置付けられる。



B 土坑

SK1019 (図版3・6、図版203)

6Nグリッドに位置する。V層中で検出された。長軸95cm、短軸80cm、深さ36cmを測る円形の土坑である。SD1018やSB26-P1113を切っている。断面は台形状を呈し、覆土はレンズ状に堆積する。遺物は6段階(新)に位置付けられる須恵器無台環などが出土した。

SK1038 (図版3・6、図版203)

7M・7Nグリッドに位置する。V層中で検出された。長軸2.31m、短軸1.47m、深さ29cmを測る。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。覆土は上層に炭化物を多く含み、レンズ状に堆積する。規模、形状の類似したSK1039が東に隣接する。V層検出のSX985が本遺構の北側を切る。遺物は須恵器有台環・無台環(墨書)・甕、土師器長甕、砥石が出土した。出土土器は2~3段階頃のものと考えられる。

SK1039 (図版3・6、図版203)

7M・7Nグリッドに位置する。V層中で検出された。隣接するSK1038同様に北端をSX985に切られている。長軸1.97m、短軸1.20m、深さ17cmを測る。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。覆土は炭化物を多く含み、レンズ状に堆積する。遺物は須恵器無台環・瓶類、砥石が出土した。須恵器無台環は6段階(新)に位置付けられる。

S K1064 (図版4・6、図版203)

9 Lグリッドに位置する。V層中で検出された。円形の土坑で、断面は弧状を呈する。直径1.3m、深さ16cmを測る。覆土は灰白色粘土と炭層の互層で、レンズ状に堆積する。覆土中に炭層は2面検出されたが、間層が5cm程度と薄く、埋没の時間は短期間であると考えられる。また、最底面の覆土5層からは、焼土ブロックの含有が認められた。本遺構またはその周辺において火焼き行為が行われた後に投棄されたと考えられる。遺物は須恵器無台坏、坏蓋(転用硯)が出土したほか、土師器が微量に出土した。出土土器は6段階(新)に位置付けられる。

C 溝**S D977** (図版2～4・8、図版205)

4 N～8 Kグリッドにかけて直線状に伸びる。V層上面で検出された。主軸はN-48°-Eを指す。断面は台形状を呈し延長47.94m、最大幅2.43m、深さ78cmを測る。覆土はⅢ層由来の黒褐色土が上層を覆い、下層はレンズ状に堆積する。SB24・SD982を切り、河川SD981に切られる。遺物は須恵器、土師器、土錘、木製品が出土した。

S D982 (図版3・7・16、図版204)

4～6 M・6 Nグリッドに位置する。L字状の溝で延長約30.7m、幅約3.1m、深さ約40cmを測る。覆土は灰色土が主体でレンズ状に堆積する。遺物は北側の4 M 9グリッドや東側の6 M16グリッド付近からややまとまって出土した。須恵器坏蓋・無台坏・横瓶・長頸瓶・括れ鉢、土師器無台坏・無台碗・鍋がある。検出面が異なるが、第2確認面(VI層)検出のSB27を囲むように位置しており、この建物を区画する溝であった可能性が考えられる。本遺構の出土土器は4段階に位置付けられる。

S D1018 (図版3・6、図版203)

6 Nグリッドに位置する。V層中で検出された。溝の方位はN-40°-WからN-62°-Wを指す。延長9.70m、幅1.20m、深さ8cmを測る。湾曲しながら伸び、幅は両端部で狭く南西側に張り出した部分で広がる。断面形は弧状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、木炭片を含む。本遺構はSK1019・SB26・P1112・P1113に切られる。遺物は5段階頃の須恵器無台坏のほか、被熱石なども出土した。

S D1037 (図版4・7、図版204)

8 L・8 Mグリッドに位置する。V層中で検出された。方位はN-36°-Wを指す。長さ約11.7m、幅約3.5m、深さ約53cmを測る溝状遺構である。南北の両端部では、溝が東側と西側の2条に分かれる。2条の切り合い関係は南半部の断面図(b-b')で確認され、西側の溝が東側の溝を切っていることが判明したが、中央部では不明確であった。遺物取り上げに際しては、東西2条の溝が存在したと考えられ、遺構番号の後に「東」「西」を付した。覆土は灰色土を主体としレンズ状に堆積する。遺物は、須恵器有台坏・無台坏(墨書)・横瓶・瓶類・甕・括れ鉢、土師器壺・長甕・小甕・鍋、円筒形土製品、砥石、炉内滓、被熱石など、多様に出土した。出土土器の検討により、本遺構は主として2～3段階に比定される。

S D1216・S D1219 (図版2・7)

SD1216は2 M・3 Mグリッド、SD1219は1 N・2 Nグリッドに位置する。V層上面で検出された。SD1216は長さ7.86m、幅59cm、深さ9cmを測る。SD1219は長さ6.84m、幅80cm、深さ8cmを測る。両者とも直線状に伸びる溝で、共に同軸・同規模である。断面は弧状を呈する。覆土は単層であり、灰色を基調とする。遺物はSD1216より土師器碗・甕が出土し、SD1219より土師器碗・甕、須恵器が少量出土した。

SD1220 (図版2・20)

3P・4Pグリッドに位置する。V層上面で検出された。調査区南壁付近でL字状に屈曲する溝で一部は調査区外に延びる。長さ5.46m、最大幅2.25m、深さ19cmを測る。断面は弧状を呈する。覆土は単層で、灰色を基調とする。本遺構の北端は河川SD981によって切られる。遺物は出土しなかった。

D 性格不明遺構

SX984 (図版3・8、図版205)

5N・6Nグリッドに位置する。V層上で確認された。長方形の落込み状遺構で、長軸7.20m、短軸5.18m、深さ58cmを測る。断面形は弧状を呈す。覆土は8層に分けられレンズ状に堆積する。また底部では基本層序VI層下部の木炭集中帯を掘り抜いており木炭の混入が多く認められる。遺物は須恵器坏蓋(転用碗)、須恵器坏や甕、土師器甕、被熟石が出土した。

SX985 (図版3・8、図版205)

6M・7M・6N・7Nグリッドに位置する。V層上で検出された。楕円形の落込み状遺構で長軸5.82m、短軸3.32m、深さ26cmを測る。覆土上層はⅢ層由来と考えられる黒褐色粘質土である。覆土下層は灰色土を主体としレンズ状に堆積する。本遺構はSK1038・SK1039を切っている。遺物は須恵器無台坏・甕、土師器無台碗等が出土した。出土土器は6段階(新)に位置付けられる。

SX1041～SX1045 (図版4・8、図版205)

9～10K・Lグリッドに位置する。V層上面で検出された。V層は管状斑紋を多く含み褐色を呈するが、帯状に管状斑紋の分布が希薄である範囲をSX1041～SX1045と呼称することとした。これらの管状斑紋に乏しい範囲は南側を河川SD976によって切られるため、全容は判然としないが、おおよそ長軸9.34m、短軸4.48mの長方形になると推定される。SX1041は幅1.22m、高さ24cmを測る断面が山形の灰色粘土帯であり、管状斑紋が希薄である点を考慮するならば水田畦畔の痕跡を示すものと考えらる。遺物はSX1044より土師器が微量出土したのみである。

SX1072 (図版3・8、図版205)

6N・6Oグリッドに位置する。V層上で検出された。南側は大きく河川SD981によって切られており、正確な平面形は不明瞭であるが残存部分から長方形と推測する。長軸6.22m、短軸5.35m、深さは74cm以上となる。南東に隣接するSX984とは規模や形状に近い。2～3段階頃の須恵器坏蓋や土師器無台碗が少量出土した。

SX1240 (図版3)

6M・7Mグリッドに位置する。IV層で検出された。IV層掘り下げ途中に検出された遺物集中範囲である。範囲は長軸4.48m、短軸2.90mで、楕円形状に広がる。集中的な出土状況から周囲の建物群に伴うものと考えられ、最も関連性が高いものは下層で重複するSB25 - SD1078であろう。遺物は土師器鍋、須恵器無台坏が出土した。出土遺物は6段階に位置付けられる。

SX1241 (図版3・5)

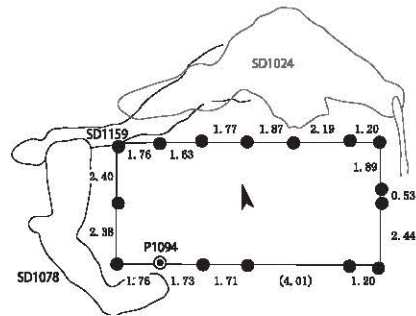
5Mグリッドに位置する。SX1240と同様に、IV層の掘り下げ時に確認された遺物集中範囲である。範囲は長軸2.50m、短軸1.82mほどと、SX1240に比べて小規模である。本遺構はSB24と重複しており、何らかの関連があると考えられる。遺物は3段階頃の須恵器無台坏が出土した。

(2) 第2確認面(VI層)検出遺構

A 掘立柱建物

SB25 (図版13・14、図版206)

6M・7Mグリッドに位置する。建物の方位はN-18°-Eを指す。建物は周溝をもつ桁行6間、梁行2間の側柱建物で、平面積は50.43㎡を測り、I区では最大規模の建物である。第2確認面(VI層)を中心に検出されたが、検討の結果第1確認面(V層中)で検出されたSD1024・SD979も本建物に関連する可能性が高い。柱間寸法は桁方向で1.63~1.87m、梁方向で1.89~2.44mを測る。柱穴は16基確認され、南側の1基は未検出であった。

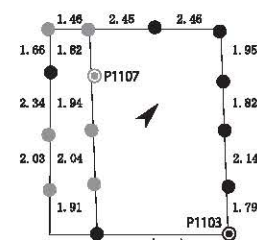


柱穴は円形や楕円形を呈し、直径30~75cmを測る。覆土は灰色土を基調とする。柱痕跡は12基から確認でき、P1094には柱根が残存していた。当初は桁行4間の建物を想定したが、東側に柱筋が通る2間分の柱穴が存在することと、周溝と考えられるSD1024の長軸距離が建物の規模と一致することから桁行6間の建物と判断した。ただし、建物は西側と東側で柱穴の規模が異なり、西側桁方向5間分の柱穴直径が平均で62.2cmであるのに対し、東側2間分は34.3cmとおよそ二分の一である。このため本建物は、西側4間分の主体的な構造物と東側2間分の付属的な構造物で構成された可能性がある。

また、建物北側から南西ではSD1024に加え2条の溝が検出された。SD1078は建物の南西に位置し、やや不整なL字状を呈し、長さは北西辺で2.00m、南西辺で2.85m、南辺で2.44m、幅1.70m、深さ22cmを測る。SD1159は建物北側に湾曲して伸びる周溝で、東端は上部のSD978と重複するため不明確となる。長さ8.63m、幅24cm、深さ14cmを測る。建物の長軸方向からややずれ、SD1078に一部切られる。第1確認面(V層)検出の遺物集中範囲SX1240は、SD1078の上部にあたることから関連性をもつと考えられる。遺物は柱穴や周溝から多数出土した。柱穴では須恵器坏蓋・有台坏・無台坏、土師器碗・長甕などが出土し、周溝では須恵器無台坏・瓶類・横瓶、土師器無台碗・有台皿・長甕・鍋、砥石などが出土した。周溝SD1078出土土器は6段階(新)頃と考えられる。

SB26 (図版12・15、図版207)

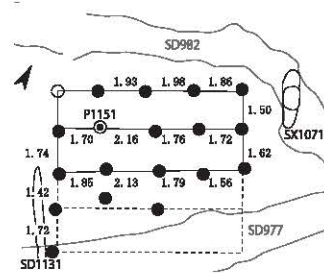
5N・6M・6Nグリッドに位置する。第1確認面(V層中)及び第2確認面(VI層)で検出された。建物の方位はN-42°-Wを指す。15基の柱穴が検出され、そのうち2基には柱根が残存していた。身舎の南側妻と廂南端の柱穴は検出できなかった。建物東側の柱穴は第2確認面、西側の柱穴は第1確認面を中心に検出された。確認面が異なるが柱筋が通り柱間の間隔も一定であることから、これらの柱穴は同一の建物を構成するものと判断した。この結果、本遺構は西面に廂がつく桁行4間、梁行2間の身舎をもつ建物となる。身舎の平面積は37.73㎡で、廂部分を含めると51.28㎡である。身舎の柱間寸法は桁行が1.79~2.14m、梁行は2.45~2.46mを測る。廂の出はおよそ1.6mである。身舎、廂ともに柱穴は掘方をもち円形、楕円形、方形、長方形を呈する。柱穴の直径は身舎で38~60cmを測る。直径14~25cmの柱痕跡が確認でき、P1103・P1107には柱根が残存していた。廂では柱穴の直径は30~75cmで、22cmの柱痕跡が確認できた。覆土は灰色土を基調とする。遺物は柱穴から6段階頃の須恵器無台坏が出土した。本建物は5段階のSD1018を切って構築され、6段階(新)のSK1019に切られている。また、柱根P1103の放射性炭素年代測定からは9世紀第3~4四半期の可能性が最も高かった。



この結果、本遺構は西面に廂がつく桁行4間、梁行2間の身舎をもつ建物となる。身舎の平面積は37.73㎡で、廂部分を含めると51.28㎡である。身舎の柱間寸法は桁行が1.79~2.14m、梁行は2.45~2.46mを測る。廂の出はおよそ1.6mである。身舎、廂ともに柱穴は掘方をもち円形、楕円形、方形、長方形を呈する。柱穴の直径は身舎で38~60cmを測る。直径14~25cmの柱痕跡が確認でき、P1103・P1107には柱根が残存していた。廂では柱穴の直径は30~75cmで、22cmの柱痕跡が確認できた。覆土は灰色土を基調とする。遺物は柱穴から6段階頃の須恵器無台坏が出土した。本建物は5段階のSD1018を切って構築され、6段階(新)のSK1019に切られている。また、柱根P1103の放射性炭素年代測定からは9世紀第3~4四半期の可能性が最も高かった。

SB27 (図版12・16・17、図版208)

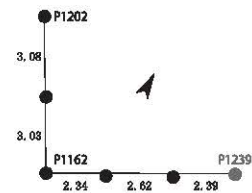
5 Mグリッドに位置する。建物の方位はN - 29° - Wを指す。桁行4間、梁行2間の総柱建物で、平面積は23.71㎡である。南西辺で柱穴が1列検出されており、さらに2間分延びる可能性があるが、大部分がSD977に切られ規模は不明である。柱間寸法は桁方向で1.56~2.16m、梁方向で1.50~1.74mを測る。柱穴は円形又は楕円形を呈し、直径35~60cmを測る。覆土は灰色を基調とする。P1151からは未図化であるが柱根の一部と考えられる木片が出土した。また8基の柱穴で直径10~23cmの柱痕跡を確認した。



周囲には建物と方向を同じくするSD1131やSX1071があるが、出土遺物はない。また、第1確認面(V層上)で検出されたSD982が本建物を囲むように存在し、本建物に近接した位置で一定量の出土遺物が検出されている。遺物はP1147から土師器の小片が出土した。なお、SD982からは4段階を主体とする遺物が出土している。

SB28 (図版13・18、図版209)

6 M・7 Mグリッドに位置する。建物の方位はN - 29.5° - Wを指す。本遺構は調査終了後の整理段階で図上復元されたもので、現状で桁行3間、梁行2間分が確認され、さらに北側や東側へ延びる可能性がある。周溝などの付属遺構は確認できなかった。柱の配列状況から第1確認面(V層中)で検出されたP1239もこれに加わると考えられる。柱間寸法は桁方向で2.34~2.62m、梁方向で3.03



~3.08mを測り、それぞれの軸でほぼ一定となる。柱穴は円形を呈し直径33~40cmで、3基からは直径16~25cmの柱痕跡が確認できた。覆土は灰色土を基調とする。P1202がSB25 - SD1159と、P1162がSB25 - SD1078とそれぞれ重複する。遺物は柱穴から土師器、須恵器の細片がごくわずかに出土した。

B 柱穴

P1177 (図版13・19、図版210)

8 L・8 Mグリッドに位置する。SD1037底面で検出した。南東側に長軸方向を持つ楕円形を呈し、断面は弧状で柱根を残す。柱根部は掘方より一段深くなる。掘方の大きさは、長軸50cm、短軸41cm、深さ12cmを測る。柱根は腐食により原形を留めず、現状では直径10.2cmを測る。覆土は灰色を基調とする。周囲に未検出の建物等の存在が考えられるが、対応する柱穴を確認できなかった。遺物は出土していない。

P1189 (図版12・19、図版210)

6 Nグリッドに位置する。掘方は楕円形で、長軸65cm、短軸54cm、深さ50cmを測る。断面形は台形を呈す。覆土は2つに分けられレンズ状に堆積する。1層目には木炭片を多く含む。遺物は土師器細片と礫がごく少量出土した。

P1190 (図版12・19、図版210)

7 Nグリッドに位置する。掘方は円形で、長軸70cm、短軸60cm、深さ18cmを測る。断面形は底面がいびつで不整な弧状を呈す。覆土は単層で木炭片を多く含む。遺物は土師器と円筒形土製品の細片が少量出土した。

P1205 (図版12・19、図版210)

6 Oグリッドに位置する。掘方は楕円形で、長軸38cm、短軸32cm、深さ24cmを測る。断面形は台形を

呈す。柱痕跡は底面丸底で、直径9cm、深さ24cmを測る。遺物は出土していない。

P1210 (図版12・19、図版211)

6 Nグリッドに位置する。長方形の掘方で長軸86cm、短軸60cm、深さ29cmを測る。柱痕跡は直径20cm前後ある。付近にはP1211～P1213が存在し、未検出の建物等が存在する可能性があるが、これに対応する柱穴は確認できなかった。

P1211 (図版19、図版211)

5 N・6 Nグリッドに位置する。楕円形の掘方で長軸1.00m、短軸70cm、深さ25cmを測る。須恵器坏蓋(転用碗)が出土した。

P1212 (図版12・19、図版211)

5 Nグリッドに位置する。平面はやや直線的な円形、断面は段部の緩やかな漏斗状を呈する。掘方の直径は55cm、深さは36cmを測る。覆土上半はレンズ状に堆積し、下半では直径15cmの柱痕跡を確認した。遺物は土師器が少量出土した。

P1213 (図版12・19、図版211)

5 Nグリッドに位置する。平面は楕円形、断面は台形状を呈し、北西側が一段深くなる。長軸59cm、短軸41cm、深さ41cmを測る。覆土はブロック状を呈し、底面付近にはしまりの弱い灰色粘土が混入する。遺物は出土しなかった。

C 土坑

SK1083 (図版13・19、図版209)

8 L・9 Lグリッドに位置する。主軸はN-55°-Wを指す。長方形の土坑で、断面形は弧状を呈する。長軸2.75m、短軸1.65m、深さ22cmを測る。覆土は灰色土を基調とし、レンズ状に堆積する。覆土上面の一部に炭化物を多量に含む。遺物は須恵器坏蓋・無台坏、土師器甕、円筒形土製品、砥石類、皆折釘が出土した。近接して存在するSD1085・SX1066との間で土器の接合関係が認められた。SD1085との接合は8個体と最も多い。本遺構の出土土器は3段階に位置付けられる。

D 溝

SD1085 (図版13・20、図版209)

8 L・9 Lグリッドに位置する。北でL字状に屈曲する溝で、延長12.89m、最大幅2.09m、深さ54cmを測る。断面は弧状を呈する。覆土は炭化物を含んだ灰色粘土を基調とし、レンズ状に堆積する。近接して存在するSK1083・SD1082・SD1084・SX1066との間で土器の接合関係が認められた。特にSK1083との接合個体が8点と最も多い。遺物は須恵器・土師器が定量出土した。須恵器は食膳具、土師器は煮炊具が主体的である。この他に円筒形土製品、砥石、鉄製品、炉壁がある。本遺構は2～3段階に比定される。

SD1131 (図版12・16)

4 M・4 Nグリッドに位置する。方位はN-34°-Wを指す。長さ約3.2m、幅約35cm、深さ約22cmを測る。南東端はSD977に切られる。覆土は灰色土がレンズ状に堆積する。遺物は土師器の小片が出土した。SB27の柱穴列と平行しており、SB27に伴う溝の可能性はある。

SD1225 (図版11・20)

3 P・4 Pグリッドに位置する。長さ6.36mに渡り検出した。北端を河川SD981に切られ、南端は調

査区外へ延びている。幅4.29m、深さは63cmを測る。断面は弧状を呈する。覆土は灰色土を基調としレンズ状に堆積する。

SD1226 (図版11・12・20)

2M～4Mグリッドに位置する。方位はN-34°-Wを指す。長さ15.23m、幅1.81m、深さは25cmを測る。西側はSD1227と重複し、東側でL字状に屈曲する。断面は弧状を呈する。覆土は灰色土を基調とし、レンズ状に堆積する。遺物は土師器鍋が出土した。なお、平成24年度試掘調査の1T出土遺物は3段階と考えられ、その出土位置からみて本遺構の遺物である可能性が高い [長岡市教育委員会 2013]。

E 河川

河川SD976 (図版3・4・9・13・21、図版212・213)

70～12Jグリッドに位置する。I区調査区の北東から南西にかけて旧河川の一部が検出された。長さ72.02m、幅30.10m、深さ1.86mを測る。出土遺物の年代と流路の切り合い関係から、新・旧に分けられる。第1確認面(IV～V層)で検出した範囲は、中近世(12～19世紀)を主体としたものである(図版3・4)。河川上面で中近世の遺物が少量出土したことと、これを覆うII層で幕末前後の陶磁器が出土したことから、相対的に新しい流れと考える。第2確認面(VI層)の8Nグリッドを中心とした範囲は、古代を主体としたものである(図版13)。IV層由来の炭化物と遺物を多量に含む灰色土が、南側に向け落ち込んでいる状況が新たに確認されたことから、古代の河川跡として把握した(図版9)。遺物はIV層由来の多量に炭を含む灰色土を中心に出土し、第2確認面より約1.9m下位の粗砂層を境に減少する。この粗砂とともに細片化された土器が多く混じる標高11.50m付近が当時の川底であったと考えられる。これ以外の部分ではトレンチを3か所設定し調査したが、出土遺物は小片1点のみであった。また、河川SD976の8N6・11グリッド付近では沢状に小さく窪んだ部分があり、SX1209として調査した。SX1209内部は特に出土遺物の密度が高く、窪みの底面から杭状の木材が出土している。断面観察の結果、河川SD976との切り合い関係は認められず、出土遺物も一体で把握できる(図版21)。

遺物は、建物群の南側にあたる川岸を中心に多数出土した。古墳時代後期の須恵器・土師器を少量含むが、大部分は6段階を中心とした平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器である。このほか円筒形土製品、木製品、石製品、金属製品、鍛冶関連遺物などが出土した。また、木簡や多数の墨書土器・転用硯、帯金具・石帯も出土しており、建物群を中心とした活動痕跡に官衙の様相を窺うことができる。古代における河川の存続期間は、出土遺物の所属時期からみて6世紀末頃の古墳時代後期から10世紀代の平安時代と捉えることができる。なお、平成21年度試掘調査5T出土遺物は6～7段階頃で、その出土位置からみて本遺構の遺物である可能性が高い [長岡市教育委員会 2010]。

河川SD981 (図版2・3・11・12・22～24、図版205・214・215)

0N～7Nグリッドにかけて位置する。深く掘り下がった中近世の流路部分と古代の遺物包含層が落ち込むテラス部分がみられることから、古代以降流れを変えながら近世に至るまで機能したと考えられる。中近世の川岸付近では3か所において杭列群が認められた。延長69m、幅は中近世の流路で9.5～15.2mを測り、古代の部分では21.4mとなる。深さは2.4mである。覆土は灰色を基調としたシルト層・粗砂層・炭化物粒や未分解の植物遺存体を含む層の互層となることから、流速の変動を繰り返したと考えられる。本遺構の北岸では建物群が展開し、南岸以南では遺構密度が薄くなることから、遺跡の南側が本遺構で限られていたと考えられる。70グリッドでは河川SD976の流路を切っており、接続する状況は認められ

なかった。このため、両河川跡は互いに異なる時代の流路であると考えられる。遺物は1～3Nに存在するテラス部から古代の土師器・須恵器、砥石が出土した。中近世の流路では、青磁・珠洲焼などの陶磁器、鉄製品、木製品、漆器などが出土した。また、覆土の上面からは戊辰戦争時のものと考えられる鉛玉が出土しており、この頃にはすでに埋没していたと考えられる。

河川SD981杭列 (図版2・3・11・12・22～24、図版214・215)

中近世流路の南北兩岸付近3か所において杭列を検出した。北杭列(3Nグリッド、図版23)、南東杭列(3O・3Pグリッド、図版23)、南西杭列(1O・1Pグリッド、図版22)がある。

北杭列では杭1386を含めた3本の杭が流路内より北岸に向け打設されている状況を確認した。杭1386は90cmが残存、地山中に26cm打ち込まれている。杭間距離は28～32cmを測る。

南東杭列では、流路方向に直交する棧橋状の杭列が検出された。杭1387～1389を含めた計5本の杭が2列に分かれており、遺存状況の比較的良好な杭1388・1389では杭が直立して地山に至るまで打設されている(図版24)。杭1387～1389の3本は共に全面が著しく炭化したものであった。これは火災等で焼けたものではなく、腐食防止のため予め炭化処理を施した杭であることを示している。杭1387は南岸に向かい傾斜しているが、本来は1388・1389同様に直立していた可能性が考えられる。放射性炭素年代測定の結果、杭1338・1339はおよそ13世紀末～14世紀代のものであることが判明した。また、杭1389北側の杭は遺存状況が不良で痕跡的に確認するにとどまったが、川岸から流路中央に向け3対以上の杭列が存在した可能性が考えられる。杭は0.90m～1.16mが残存、杭1388は地山中に8cm打ち込まれている。杭間距離は0.68m～1.01mとまとまりを欠く。この他、南東杭列では残存する長さ33～64cm、直径4～6cmの比較的小規模な杭を5本用いた杭列が検出された。いずれも地山中に30cm程度打ち込まれており、杭間距離は42～85cmを測る。また、周囲に杭材が散在している。

南西杭列では、杭1391・1392・No.111(未図化)の3本の杭が流路内より南岸に向け打設されている。杭1391・1392は長さ1.40m程度が残存し、直径は8～10cmを測る。1391は地山中に36cm打ち込まれており、1392は河川SD981覆土5層中で留まる(図版24)。また、杭の周辺には刃物の切断痕を残すしがりみ状の小枝が岸辺周辺で多数出土した。横位の状態で出土する杭もあり、洪水発生時の水流によって構造物が破壊された可能性が考えられる。周辺からは珠洲焼や青磁、漆器、曲物、簀状木製品など中世に位置付けられる遺物が出土した。

F 性格不明遺構

SX1071 (図版12・16)

5Mグリッドに位置する。平面楕円形で長軸2.32m、短軸68cm、深さ30cmを測る。遺構の中ほどが深く2段に落ち込む。覆土は灰色土を主体としレンズ状に堆積する。遺物は覆土上面より須恵器の小片が出土した。SB27に近く同軸となることから、建物に伴う遺構であると考えられる。

SX1238 (図版11)

河川SD981の北岸、3Nグリッドに位置する。長軸5.90m、短軸3.60mの範囲に遺物が集中する。掘り込みは確認できなかった。河川SD981の北岸に隣接し、遺物が集積しやすい環境にあったと考えられる。いずれも遺存度の高い土器で、7世紀代の土師器壺2点、9世紀代の須恵器長頸瓶2点のほか、壺1点が出土した。

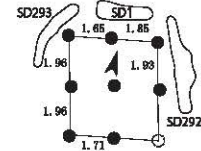
2 II区の遺構

(1) 第1確認面（V層）検出遺構

A 掘立柱建物

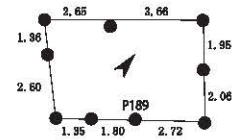
SB 1（図版28・30、図版216）

21Hグリッドに位置する。建物の方位はN - 16.5° - Wを指す。桁行2間、梁間2間で周溝をもつ建物と考えられるが、南東隅の柱穴が調査区外のため未検出である。調査区外に桁行が延びる可能性もあり構造は不明である。2×2間の建物と仮定した場合、平面積は13.72㎡である。柱間寸法は桁方向で1.93~1.96mと等間、梁方向は1.65~1.85mである。柱穴は掘方をもち円形・楕円形・方形を呈す。柱穴の規模は長軸方向で42~66cmである。覆土は褐灰~黒褐色を基調とする。全ての柱穴で直径14~26cmの柱痕跡が確認できた。また、建物北側の外周を周溝のSD1・SD292・SD293が断続的に巡る。建物の柱穴からは須恵器や土師器が少量出土した。周溝からは4段階（新）に相当する須恵器無台坏のほか、土師器片が出土した。



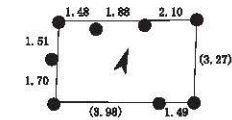
SB 3（図版27・31、図版217）

16I・17Iグリッドに位置する。建物の方位はN - 41° - Wを指す。桁行3間、梁行2間の側柱建物であるが、北東側は中間の柱穴はSB5 - P180が重複しており確認できなかった。平面積は24.48㎡を測る。柱間寸法は桁方向で1.35~2.65m、梁方向で1.36~2.60mと幅がある。柱穴掘方の形状は円形・楕円形・方形・長方形で、規模は長軸で48~75cmである。覆土は灰色土を基調とする。すべての柱穴から直径20~30cmの柱痕跡が確認された。本建物のP189はSB5 - P199に切られる。遺物は柱穴から須恵器無台坏、土師器鍋、砥石が出土した。



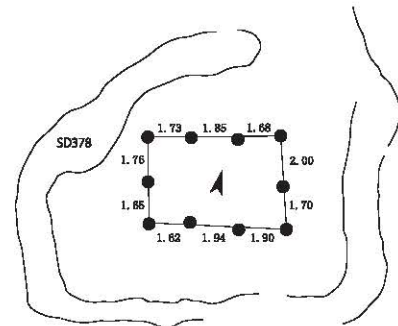
SB 5（図版27・32、図版217）

17H・17Iグリッドに位置する。建物の方位はN - 18° - Wを指す。桁行3間、梁行2間の側柱建物で、平面積は17.89㎡を測る。柱間寸法は桁方向で1.48~2.10m、梁方向で1.51~1.70mを測る。柱穴の直径は、54~132cmと揃いで、形状も円形、方形、楕円形と一様ではない。東辺と南辺の柱穴1基ずつは検出できなかった。覆土は灰色土を基調とする。5基の柱穴で径22~32cmの柱痕跡が確認できた。遺物は柱穴から3段階を中心とする須恵器有台坏のほか、無台坏が少量出土した。



SB 6（図版29・33、図版218）

22Fグリッドに位置する。建物の方位はN - 15.5° - Wを指す。桁行3間、梁行2間の側柱建物で、平面積は18.91㎡を測る。柱間寸法は桁方向で1.62~1.94m、梁方向で1.65~2.00mを測る。柱穴は掘方をもち長軸で73~112cmと規模が大きい。形状は長方形、円形、楕円形を呈する。覆土は灰色土を基調とする。10基全ての柱穴で径20~32cmの柱痕跡が確認された。しかし、本建物のP364と第3確認面（VII層）検出のSB7 - P554とが重複したこと



や、SB6の柱穴や柱痕跡の掘り込みが浅いものが多いため、建物と判断するうえで不明確さを残す。一方、SB6を取り囲む口の字状の溝SD378を建物に関連した区画溝と考えることも可能であり、現時点では建物が存在した可能性を考えておく。遺物は柱穴から須恵器無台坏、椀形鍛冶滓が出土した。

B 柱穴

P205 (図版27・36、図版220)

18Iグリッドに位置する。楕円形の掘方で、長軸1.70m、短軸1.04mを測る。3層に分かれる覆土は2層目に炭化物を多く含む。本遺構はSK294を切っている。遺物は須恵器坏蓋(漆パレット含む)・有台坏・無台坏、球状土錘、砥石が出土した。本遺構の出土土器は3段階頃と考えられる。

P311 (図版28・44、図版225)

19Hグリッドに位置する。楕円形の掘方で、長軸1.02m、短軸1.01mを測る。柱痕跡は尖底で、深さ29cmを測る。SD310の東端を切る。遺物は土師器と須恵器の細片が底面付近からわずかに出土した。

C 井戸

SE2 (図版26・34、図版219)

13J・14Jグリッドに位置する。河川跡によって南西側を切られているが、平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。微高地上に位置しており、長軸6.20m、短軸3.50m、深さ42cmを測る。覆土はレンズ状に堆積する。井戸としては深さが浅いためSE3の事例のように、底面と判断した青灰色粘土層が覆土であった可能性も考えられる。遺物は底面から土師器、須恵器の細片がわずかに出土した。

SE3 (図版26・35、図版219)

16Jグリッドに位置する。平面形は円形で、長軸3.50m、短軸2.78m、深さ79cmを測る井戸である。断面形は上方が広がる漏斗状を呈す。覆土は15層に分層されレンズ状に堆積する。当初は断面図に示した深さ55cmほどの所で底面に達したと判断したが、第3確認面(VII層)での調査でもほぼ同じ位置に重なって土坑状の遺構が検出されたことから、SE3の下層部分が存在すると判断した。遺物は、須恵器坏蓋・無台坏(墨書含む)・長頸瓶・甕、原始灰釉陶器の長頸瓶、土師器無台碗・鉢、木製品が出土した。本遺構の出土遺物は、概ね4段階(新)頃と考えられる。

SE121 (図版26・34、図版219)

16K・16Lグリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は北側に浅い平坦面を有する漏斗状を呈する。長さ5.72m、幅4.04m、深さ50cmを測る。覆土はレンズ状に堆積、灰色を基調とするが炭化物や明青灰色土の混入度の違いで互層となる。また、底面では未分解植物遺存体を少量含む。遺物は出土しなかった。

D 土坑

SK110 (図版27・35)

18Iグリッドに位置する。長軸1.45m、短軸1.80mの平面楕円形で、深さ26cmを測る。断面形は弧状を呈す。遺物が多く出土したSK294が東側に近接する。覆土は全体に炭化物が多く、とりわけ1層目は非常に多い。遺物は、遺存度の良い円筒形土製品が1層目を中心に出土した。

SK125 (図版27・35、図版219)

16Hグリッドに位置する。楕円形の土坑で長軸1.96m、短軸98cm、深さ21cmを測る。覆土は黄灰色土が主体でレンズ状に堆積する。遺物は4段階(新)の須恵器無台坏のほか、須恵器、土師器の小片が覆土上層から出土した。遺物量は少ないが廃棄土坑のような性格と考えられる。

SK217 (図版27・35、図版220)

18Iグリッドに位置する。平面形は長方形で南側がやや丸く、断面形は台形状を呈す。長軸2.54m、

短軸1.30m、深さ24cmを測る。壁面の立ち上がり角度は急である。南端は、直線状に伸びる溝 SD218と接続する。覆土は4つに分層され、底部に近い2層目、3層目は炭化物主体の層となる。遺物は遺存度が高く炭化物層上面から、須恵器坏蓋・有台坏・無台坏、砥石が出土した。本遺構の出土遺物は3段階に位置付けられる。

S K 294 (図版27・36、図版220)

18 I グリッドに位置する。長軸3.84m、短軸2.62m、深さは30cmを測る。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。重複する P 205 に切られる。遺物は須恵器有台坏・無台坏、土師器長甕・小甕・鍋、土錘などがあり、特に底面付近でまとまって出土した。本遺構の出土遺物は3段階頃と考えられる。

S K 299 (図版28・36)

18 G グリッドに位置する。長方形の土坑で長軸1.0m、短軸62cm、深さ22cmを測る。覆土はレンズ状に堆積し、灰～黒色を呈する。遺物は須恵器有台坏が出土した。

S K 300 (図版28・36)

18 G グリッドに位置する。楕円形の土坑で長軸1.46m、短軸80cm、深さ35cmを測る。覆土は灰色土を基調としてレンズ状に堆積する。遺物は須恵器、土師器の小片のほか、底面付近から須恵器甕 (674) が出土した。674は遺構底面に食い込むように出土しており、直下の第3確認面 (V層) で検出した P 697 と一部重複する。

S K 321 (図版28・36)

19 G・20 G グリッドに位置する。楕円形の土坑で長軸1.17m、短軸78cm、深さ7cmを測る。覆土は単層で黒色を呈する。遺物は須恵器坏蓋が出土した。

S K 323 (図版28・36)

21 F グリッドに位置する。円形の土坑で長軸1.90m、短軸1.75m、深さ19cmを測る。覆土はレンズ状に堆積し断面は弧状を呈する。遺物は須恵器長頸瓶が1点出土した。

S K 342 (図版29・38、図版221)

23 G グリッドに位置する。北側は既設の水路によって切られる。長軸1.57m、短軸1.06m、深さ15cmを測る長方形の土坑で、断面は箱状を呈す。覆土はレンズ状に堆積し、特に上層では炭化物を多く含む。遺物は上面から須恵器有台坏・無台坏、土師器無台椀が出土した。6段階 (古) に位置付けられる。

S K 351 (図版28・37、図版220)

20 H グリッドに位置する。長軸1.78m、短軸1.70m、深さ11cmを測る。平面形は不整形で、断面形は弧状を呈す。覆土は炭化物が多くレンズ状に堆積する。周辺は土坑や溝など遺構が多く密接している。遺物は須恵器有台坏・無台坏、被熱石が出土した。

S K 380 (図版28・37、図版221)

21 G グリッドに位置する。既設の水路で切られているが、溝状に北へ延びる可能性がある。長軸3.44m、短軸1.80m、深さ20cmを測る。平面形は不整形で、断面形は弧状を呈す。覆土は炭化物を多く含んだ灰色土を主体とし、レンズ状に堆積する。遺物は比較的多く、須恵器有台坏・無台坏・長頸瓶、土師器無台椀・鍋、砥石などが出土した。遺物の出土状況から廃棄土坑と考えられる。本遺構の出土遺物は6段階 (新) に位置付けられる。

S K 384 (図版28・37、図版220)

20 G グリッドに位置する。方形の土坑で長軸1.24m、短軸1.12m、深さ12cmを測る。覆土は3層に分

層できれんず状に堆積する。覆土2層は炭化物を多量に含む黒色土で、須恵器無台坏が出土した。

SK429 (図版29・38、図版222)

23F・23Gグリッドに位置する。円形の土坑で、断面は弧状を呈し、長さ1.85m、幅1.7m、深さ44cmを測る。覆土は炭化物を含む灰白色粘土を基調とし、れんず状に堆積する。SD360を切っている。遺物は須恵器坏蓋・有台坏・無台坏、および土師器細片が出土した。本遺構の出土遺物は5段階に位置付けられる。

SK453 (図版27・37、図版221)

17Hグリッドに位置する。不整な長方形土坑で長軸2.14m、短軸1.18m、深さ17cmを測る。遺構東側は一段深く落ち込む。覆土は灰色土を主体としれんず状に堆積する。遺物は須恵器横瓶のほか、須恵器片や土師器片が底面からやや浮いた状態でまとまって出土した。本遺構は、遺物の出土状況からみて廃棄土坑と考えられる。

SK476 (図版28・39、図版222)

20Hグリッドに位置する。長軸1.76m、短軸1.54m、深さ18cmを測る。平面形は隅丸方形、断面形は弧状を呈す。隣接するSK477に切られている。覆土はれんず状に堆積する。遺物は土師器や須恵器の細片がわずかに出土した。

SK477 (図版28・39、図版222)

20G・20Hグリッドに位置する。長軸1.45m、短軸1.04m、深さ11cmを測る。平面形は不整形で、南に隣接するSK476を切っている。断面形は弧状を呈し、覆土は単層である。遺物は土師器、須恵器の細片と被熱石が出土した。

SK491 (図版26・39、図版222)

16Jグリッドに位置する。周囲にはSE3、SX4、SX5等の遺構が密集する。楕円形の土坑で、断面形は狭い平坦面を持つ弧状を呈する。長さ1.53m、幅1.07m、深さ23cmを測る。覆土は炭化物を含む灰色粘土を基調とし、れんず状に堆積する。特に底面付近は、炭化物を多く含む。遺物は底面より土師器・須恵器が少量出土した。

E 溝

SD6 (図版26・39、図版217)

16H～16K・17J～17Lグリッドに位置し、南北方向に伸びる溝状遺構である。長さ38.21m、1.22m、深さ31cmを測り、南端は調査区外へ延びる。溝は直線状に伸びるが緩やかな弧を描くため、方位はN-2°-WからN-26°-Wを指す。断面形は半円状を呈し、覆土はれんず状に堆積する。本遺構は直交するSD9・10・13・14とともに、遺跡内において一定の範囲を区切った区画溝であると考えられる。遺物は転用碗の須恵器坏蓋・研磨痕のある甕破片、内面黒色処理した土師器無台碗が出土した。出土遺物は3段階頃に位置付けられる。

SD9 (図版27)

15H～18Hグリッドに位置する東西方向に伸びる溝状遺構である。方位はN-78°-Eを指す。長さ約28.2m以上、幅約64cm、深さ約20cmを測り、西端は調査区外へ延びる。覆土は赤みを帯びた灰色土を主体としれんず状に堆積する。東端の延長上にはSD10が位置し、SD13・SD14とも平行する。また、南北方向に伸びるSD6とは直交する。これらの溝はSD6・10・13・14などと同様、区画溝である可能性が高い。遺物は須恵器坏蓋・有台坏・無台坏、土師器小甕などが出土した。出土遺物は3～4段階頃に位置付けられる。

SD13・SD14 (図版27・28・39)

17H・18G・18Hグリッドに位置する。方位はN-75°-Eを指す。SD13は長さ約13.0m、幅約56cm、深さ約18cm、SD14は長さ約4.2m、幅約45cm、深さ約12cmを測る。SD6・9・10・13・14とともに区画溝である可能性が高い。覆土は赤みを帯びた灰色土を主体としレンズ状に堆積する。遺物はSD13から須恵器有台坏・無台坏が出土した。

SD21 (図版27・40、図版222)

16I・17Iグリッドに位置するL字状の溝で、方位はN-16°-Wを指す。長さ5.90m、幅1.18m、深さ10cmを測る。断面形は弧状を呈す。覆土は単層で炭化物を多く含む。須恵器有台坏・無台坏、土師器小甕、砥石などの遺物が出土した。本遺構の出土遺物は4～6段階(古)に位置付けられる。

SD22 (図版27・40)

16I・17Iグリッドに位置する。方位はN-89°-Eを指す。長さ2.55m、幅47cm、深さ14cmを測る。平面形は直線、断面は台形状を呈し、覆土はレンズ状に堆積する。遺物は須恵器・土師器の細片が少量出土した。溝の北側には方位を同じくするSD30・SD31が近接する。

SD30 (図版27・40、図版222)

16Iグリッドに位置する。方位はN-81°-Eを指す。長さ1.14m、幅50cm、深さ10cmを測る。平面形は直線、断面形は弧状を呈す。覆土はレンズ状に堆積する。遺物は土師器、須恵器坏細片が少量出土した。SD22・SD31と平行し、SD21とも近接する。

SD31 (図版27・40、図版222)

16Iグリッドに位置する。方位はN-88°-Wを指す。長さ1.30m、幅45cm、深さ12cmを測る。平面形は直線、断面形は弧状を呈し、覆土は単層である。遺物は須恵器有台坏が出土した。SD22・SD31と並行し、SD21とも近接する。

SD35 (図版27・42)

17J・17K・18Kグリッドに位置するL字状の溝である。南北方向で6.57m、東西方向で9.39m、幅61cm、深さ10cmを測る。断面は弧状を呈する。覆土は単層で、灰色を基調とする。畝状の連続小溝群SD37～SD45と主軸方位がほぼ一致し同規模であることから、本遺構もこれら溝群に伴うものと考えられる。また、南側のSD279が埋没後、方向をほぼ同じくしてSD35が掘られており、遺跡内における区画の方向性を意識しているようである。遺物は須恵器・土師器ともに少量出土した。

SD46 (図版27・40)

17G・17Hグリッドに位置する。方位はN-16°-Wを指す。長さ約4.5m以上、幅約1.45m、深さ約10cmを測る。北端は調査区外へと延びる。覆土は灰色を基調とする。遺物は須恵器有台坏のほか、須恵器や土師器の小片が出土した。本遺構は3段階頃に位置付けられる。

SD48 (図版28・40)

17G・18Gグリッドに位置する。方位はN-5°-Wを指す。長さ約4.9m、幅約1.26m、深さ約22cmを測る。覆土は黒色～灰色を呈しレンズ状に堆積する。遺物は須恵器、土師器の小片が出土した。

SD53 (図版27・44、図版225)

18H・18Iグリッドに位置する。方位はN-14°-Eを指す。長さ7.47m、幅1.42m、深さ12cmを測る。平面形は湾曲し、断面形は弧状を呈する。覆土は黒褐色土が主体でレンズ状に堆積する。遺物は須恵器と土師器の細片が出土した。溝の東側には方位がほぼ等しいSD269、SD307、SD331などが近接する。

SD59 (図版26・40)

14Iグリッドに位置する。方位はN-88°-Wを指す。長さ3.04m、幅1.02m、深さ9cmを測る。平面形は直線、断面形は弧状を呈し、掘り込みは浅い。遺物は土師器小甕が出土した。

SD269 (図版27・44、図版225)

18H・18Iグリッドに位置する。方位はN-18°-Wを差す。長さ3.07m、幅1.05m、深さ20cmを測る。溝の平面形は直線、断面形は台形状を呈する。覆土はレンズ状に堆積する。遺物は須恵器・土師器の細片が少量出土した。周辺に規模、形状のほぼ等しいSD307・SD331などが位置する。

SD274 (図版28・43、図版224)

19Hグリッドに位置する。方位はN-58°-WからN-88°-Wを指す。長さ6.64m、幅1.50m、深さ43cmを測る。溝は緩やかに湾曲し、溝の東半分は南側に向かってテラス状に広がる。断面形は台形状を呈す。覆土はレンズ状に堆積し、上部が色調の濃い黒色土主体で6つに分層できる。遺物量は多く、須恵器有台坏・無台坏・長頸瓶・甕、土師器無台碗・長甕・小甕、被熱石が出土した。出土土器は6段階(新)と一部7段階のものを含む新しい時期のものである。これは本遺構がP318を切り、さらにP318は6段階(新)のSD301を切っていることと整合する。

SD279 (図版27・42、図版224)

17K・18Kグリッドに位置する。南西側にやや湾曲する溝で、長さ15.46m、幅1.18m、深さ35cmを測る。断面は弧状を呈する。覆土は灰白色を基調とし、レンズ状に堆積する。SD35の底面で検出し、ほぼ同軸方向に伸びている様子が確認された。遺物は須恵器・土師器が定量出土した。須恵器には転用碗を含む食膳具・短頸壺・甕がある。土師器は碗・鍋・甕が出土した。この他、羽口先が溶着した粘土質溶解物が出土している。出土土器は、4段階頃に位置付けられよう。

SD301 (図版28・41)

19G・19H・20G・20Hグリッドに位置する。方位はN-54°-EからN-23°-Wを指す。溝の両端は不鮮明で、長さ7.30m、幅2.60m、深さ6cmを測る。平面形はやや不整なL字状で部分的に幅が広がる。断面形は弧状で覆土は単層である。立ち上がりは緩やかで掘り込みも非常に浅い。遺物は6段階(新)の須恵器無台坏が出土した。

SD302 (図版28・41、図版223)

20Hグリッドに位置する。方位はN-2°-Eを指す。溝の北端は攪乱で切られる。長さ3.30m、幅97cm、深さ16cmを測る。平面形は直線で南に向かって幅が狭くなる。断面形は弧状で、黒色土が主体の覆土はレンズ状に堆積する。遺物は須恵器無台坏、土師器小甕、金床石、炉壁が出土した。出土土器は6段階(新)以降と考えられる。

SD304 (図版28・29・41、図版223)

20E・21E・21D・22Dグリッドに位置する。方位はN-65°-Eを指す。溝の南西端は不明瞭となる。長さ23.60m、幅2.66m、深さ20cmを測る。直線状に伸び、断面形は弧状を呈する。掘り込みは浅く、自然地形の可能性もある。覆土は黒色土が主体で水平に堆積する。規模のほぼ等しいSD305と平行する。遺物は須恵器・土師器の細片が少量出土した。

SD305 (図版28・29・41、図版223)

19~20F・20~22E・21~22Dグリッドに位置する。長さ32.30m、幅2.86m、深さ14cmを測る。方位はN-60°-Eを指す。直線状に伸び、断面形は弧状を呈す。覆土は黒色土が主体でレンズ状に堆

積し、自然地形の可能性もある。遺物は土師器、須恵器の細片が少量出土した。

SD306 (図版28・29・41)

20F・21Fグリッドに位置する。方位はN - 65° - Eを指す。コの字状を呈し、延長18.22m幅3.50m、深さ8cmを測る。断面形は弧状を呈す。掘り込みは浅く、自然地形の可能性もある。覆土は単層で、SD304、SD305と類似した黒色土が主体となる。遺物は墨書がある須恵器有台坏、砥石が出土した。出土土器は3段階頃と考えられる。

SD307 (図版27・44、図版225)

18H・18Iグリッドに位置する。長さ3.78m、幅1.10m、深さ9cmを測る。溝の方位はN - 8° - Wを指し直線状に伸びる。覆土は単層で炭化物を多く含む。掘り込みは浅く、立ち上がりも緩やかな形状を呈す。遺物は土師器、須恵器坏の細片が少量出土した。周辺にSD269、SD331などが平行する。

SD309 (図版28・44)

18H・19Hグリッドに位置する。方位はN - 75° - Eを指す。長さ4.20m、幅88cm、深さ10cmを測る。直線状に伸びるが、南側へ枝分かれした溝の一部はSD331に切られている。覆土は炭化物が多くレンズ状に堆積する。遺物は漆が付着した須恵器坏の細片が出土した。

SD310 (図版28・44)

19Hグリッドに位置する。方位はN - 40° - Eを指す。長さ3.50m、幅1.10m、深さ16cmを測る。北東側の端はP311に切られている。覆土は単層で、遺物は須恵器と土師器の細片がわずかに出土した。

SD317 (図版28・41、図版223)

20H・21Hグリッドに位置する。方位はN - 13° - Wを指す。長さ4.70m、幅1.22m、深さ28cmを測る。直線状に伸び南に向かって幅が狭まる。断面形は弧状、覆土は炭化物を多く含む黒色土が主体でレンズ状に堆積する。本遺構はSD385とともに第3確認面(VII層)で検出されたSB9と同一方向を示し、近接する位置にあることから、これに伴う遺構であった可能性も考えられる。遺物は比較的まとまって出土しており、須恵器有台坏・無台坏、土師器長甕のほか、被熱石も出土した。出土遺物は6段階(古)に位置付けられる。

SD331 (図版28・44、図版225)

18H・19Hグリッドに位置する。方位はN - 21° - Wを指す。長さ2.33m、幅1.18m、深さ30cmを測る。溝の北側に位置するSD309を切っている。平面形は直線で、断面形は箱状を呈す。遺物は須恵器・土師器の細片が少量底面から出土した。

SD333・SD339・SD340 (図版28・45、図版226)

21H・22Hグリッドに位置する。3条の溝が重複しており、北西・南東方向に主軸をとり南端が調査区外に延びる溝をSD333、L字状の溝をSD339北端付近で重複する溝をSD340とした。SD333は検出した範囲において長さ3m、幅92cm、深さ20cm、SD339は延長7.80m、幅70cm、深さは19cm、SD340は長さ1.40m、幅64cm、深さは12cmを測る。いずれも断面は弧状を呈し、覆土はSD333が単層、その他はレンズ状に堆積する。遺物は須恵器・土師器が少量出土、SD339では砥石が出土した。

SD345 (図版29・41、図版223)

21~22E、21~22Fグリッドに位置する。方位はN - 30° - Wを指す。長さ14.16m、幅1.72m、深さ14cmを測る。湾曲して伸び、断面形は弧状を呈す。覆土は単層で黒色土が主体となる。遺物は少量で須恵器・土師器の細片が出土した。

SD350 (図版29・43、図版225)

23E・23Fグリッドに位置する。方位はN - 6° - Eを指す。直線状に伸びる溝で、長さ14.40mに亘り検出した。幅は99cm、深さは29cmを測る。溝の南端は近世以降の旧河道により切られている。断面は弧状を呈し、覆土はレンズ状に堆積する。遺物は須恵器食膳具、土師器煮炊具が定量出土した。出土土器は概ね2～3段階と考えられる。

SD360 (図版29・38、図版222)

23F・23Gグリッドに位置する。複数条の溝が重複した可能性のある溝で、長さは計10.48m、幅2m、深さは24cmを測る。断面は弧状を呈し、覆土はレンズ状に堆積する。西端においてはSK429に切られる。SK429付近では比較的遺物がまとまって出土した。須恵器食膳具、土師器煮炊具が出土した。本遺構の出土土器は、5～6段階に相当する。

SD378 (図版29・33、図版218)

21～23F・21～23G・22Eグリッドに位置する。口の字状にSB6を取り囲む溝である。長軸約11.80m、短軸約8.40m、深さ32cmを測る。断面形は半円状で覆土はレンズ状に堆積する。北東方向に開口部を持つ可能性も考えられる。配置状況からみて、SB6と関連性をもつと考えられる。遺物は溝の西側21Gグリッドから特に多く出土した。須恵器坏蓋・有台坏・無台坏・横瓶・鉢、土師器無台椀・小甕・長甕・鍋、管状土錘、砥石があり、4段階と6段階(新)の遺物がみられる。ただし、これらの出土遺物は下層にある別遺構の遺物を検出した可能性がある。したがって、これらの出土資料の帰属先については複数の可能性があり、現時点では本遺構に伴うものとは断定できない。

SD385 (図版28・45、図版226)

20F・20G・20Hグリッドに位置する。方位はN - 18° - Wを指す。長さ約15.0m、幅約1.02m、深さ37cmを測る。断面は弧状で覆土はレンズ状に堆積する。遺物は須恵器や土師器の細片が出土した。

F 性格不明遺構

SX111 (図版26・46)

16J・17Jグリッドに位置する。平面形は南側が現代の攪乱坑によって切られているため全体は不明である。残存部分では隅丸の長方形を呈するが、比較的長くなることから溝状になると考えられる。長軸2.05m、短軸1.40m、深さ10cmを測る。立ち上がりは緩やかで断面形は弧状を呈する。遺物は須恵器有台坏が出土した。

SX157 (図版27・46、図版226)

16H・16Iグリッドに位置する。長軸2.30m、短軸1.92m、深さ14cmを測る。平面は方形で西側はテラス状となる。断面は弧状を呈し底面は平坦である。覆土はレンズ状に堆積する。所謂、小型竪穴状土坑であろう。SD122を切る。遺物は底面付近から3段階の須恵器食膳具、土師器煮炊具が少量出土した。

SX420 (図版28・46、図版226)

20Fグリッドに位置する。平面が不整な長方形で長軸3.20m、短軸1.87m、深さ12cmを測る。覆土は灰色を基調としレンズ状に堆積する。遺物は須恵器無台坏が出土した。非常に浅い落ち込みである。

(2) 第2確認面(V層中) 検出遺構

A 土坑

SK510 (図版48・50、図版227)

15J・16Jグリッドに位置する。直軸6.20m、短軸5.98m、深さ27cmを測る。平面形は不整形の三角形に近いため、自然地形の落ち込みの可能性がある。断面形は底面が平坦な弧状を呈す。覆土はレンズ状に堆積し、3層に分かれて1層目は炭化物を多く含む。遺物は南側の集中部分を中心に遺存度のよいものが多量に出土した。須恵器坏蓋・有台坏・無台坏・瓶類・加工円盤、土師器無台椀・長甕・小甕・鍋、土錘、被熱石などがみられる。特に土錘52点が集中して出土した状況は、漁具の網一式が一括的に廃棄された痕跡と考えられる。本遺構の位置からみて、第3確認面(VII層)で検出されたSB30の廃棄土坑である可能性がある。本遺構出土土器は3段階を中心とし、一部4・6段階の遺物もみられる。

B 溝

SD525南 (図版49・51、図版227)

当初SD525として緩やかに湾曲して伸びる1つの溝として調査したが、途中で途切れることから、北側をSD525北、南側をSD525南として報告する。SD525南は21G・22Gグリッドに位置する。方位はN-48°-Wを指す。長さ9.50m、幅40cm、深さ18cmを測る。断面形は弧状を呈し、覆土はレンズ状に堆積する。周辺の遺構SX529、SX537と重複する。遺物は須恵器坏蓋・無台坏、土師器長甕が出土した。本遺構の出土土器は、4段階(古)に位置付けられる。

C 性格不明遺構

SX511 (図版48・52、図版228)

17I・17Jグリッドに位置する。平面形はやや丸みを帯びた歪んだ方形で、長軸4.26m、短軸4.26m、深さ46cmを測る。断面形は弧状を呈する。上部でSD709が検出され本遺構を切る。覆土はレンズ状に堆積し、3層に分けられる。最下層は炭化物を多く含み、遺物も多く出土した。遺物は主に東側でまとまって確認でき、遺物の廃棄エリアと考えられる。須恵器坏蓋・有台坏・無台坏、土師器小甕・長甕などがある。本遺構の出土土器は3段階に位置付けられる。なお、後述するように本遺構およびSX707を中心とした最上層の覆土は硬化していたことから、これを整地層と判断した。

SX521 (図版49・52)

21Fグリッドに位置する。長軸2.56m、短軸90cm、深さ12cmを測る。平面は楕円形、断面は弧状を呈し、覆土はレンズ状に堆積する。遺物は東側で須恵器食膳具を中心に比較的まとまって出土した。本遺構の出土土器はおよそ5段階頃と考えられる。

SX526 (図版52)

22G・23Gグリッドに位置する。平面形は不整な長方形で、北側を既設の水路が切っており全形は不明である。長軸3.10m、短軸2.60m、深さ24cmを測る。立ち上がりは緩やかで、断面形は弧状を呈す。遺物は出土しなかった。

SX529 (図版49・51、図版227)

21G・22Gグリッドに位置する。平面形は不整な円形で、北側は既設の水路に切られている。またSD525南によって切られる。長軸4.40m、短3.32m、深さ17cmを測る。残存する南側の立ち上がりは非常に緩やかで断面形は弧状を呈す。遺物は須恵器有台椀・無台坏、ハケメ成形の土師器長甕や被熱石が出土した。出土土器は4段階(古)頃に相当すると考えられる。

SX707 (図版48・52、図版227)

16I・17Iグリッドに位置する。平面は北西・東・南の各方位に向けて突出する不整形で、長軸5.05m、短軸4.05m、深さ22cmを測る。断面は弧状を呈し、覆土はレンズ状に堆積する。最上層はSX511とともに整地層と考えられる。遺物は須恵器食膳具、土師器煮炊具が出土し、4段階(古)頃と考えられる。

SX1214 (図版53、図版228)

17J・17Kグリッドに位置する鍛冶炉である。V層面に被熱・吸炭して黒色化した部分と還元状態で灰色を呈する部分が認められた。長軸26cm、短軸21cmを測る。淬化しており、中央部が若干湾曲する。表面には羽口の設置痕が確認できる。また、1mほど南西側には鍛造による表面剥離がみられる金床石が出土しており、鍛冶炉に伴うものと考えられる。

整地層

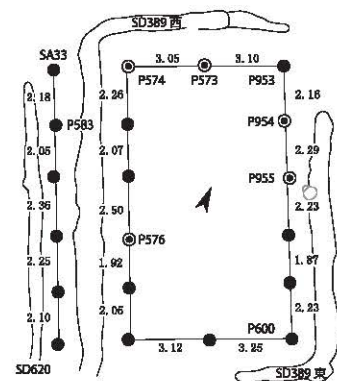
分布範囲は把握できなかったが、SX511からSX707周辺の最上層では周囲のV層と比べ、炭化物を多く含む硬化した面がみられた。SB19・SB22など建物群が隣接することから、窪みを人為的に整地した可能性がある。調査ではSX511・SX707と区別し整地層として扱った。遺物は3～4段(古)階頃と考えられる。

(3) 第3確認面(VII層) 検出遺構

A 掘立柱建物・柵列

SB7 (図版58・60、図版230・231)

22Fグリッドに位置する。方位はN-25°-Wを指す。桁行5間、梁間2間の側柱建物である。平面積は68.97㎡である。柱間寸法は桁方向で1.87～2.50mで、東西辺の南側2間目が共に2m未満と間隔が狭い。梁方向は3.10～3.25mで比較的均等である。柱穴は掘方をもち、円形・楕円形が多いが、一部方形・長方形を呈する。掘方は長軸0.70～1.15mと大型である。覆土は灰色を基調とする。P954・P955・P576・P574・P573の計5基からは柱根が出土し、P953・P600では柱痕跡を確認した。建物の周囲には周溝SD389が巡る。幅1.04～1.2m程度で、確認面からの深さは約0.3mを測る。SD389は建物北東隅及び



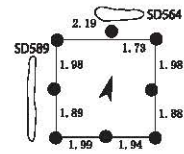
南西隅で途切れ、東西に二分される。建物西側には、桁行方向に平行する柵列SA33および溝SD620がある。SA33はSB7西側柱列と平行すること、柱間距離および間数が一致することからSB7に付随する目隠し塀等の機能が推定される。遺物はP573から須恵器無台坏、P956から須恵器坏蓋、その他の柱穴で土師器・須恵器が少量出土した。また、SD389東西からは墨書土器や転用碗を含む須恵器食膳具が定量出土した。SD389西ではこのほかに須恵器長頸瓶が出土した他、土師器甕・食膳具細片が出土した。柱穴や柵列脇の溝SD620からは3段階頃、周溝のSD389東西からは3～6段階頃の複数時期に渡る遺物が出土した。なお、柱根の放射性炭素年代測定では、およそ8世紀第3四半期から9世紀第4四半期までの可能性が最も高かった。

SA33 (図版58・60、図版230・231)

22Fグリッドに位置する。主軸方位はN-25°-Wを指し、SB7と等しい値をとる。SB7の長軸方向に平行する5間の柱穴列である。全長10.96mで柱間寸法は2.05～2.36mを測る。柱穴はP583が直径70cmのほかは、直径40～52cmを測る。覆土は全て単層で、褐灰色を基調とする。SB7と主軸方位が一致することから、SB7の目隠し塀等の性格が考えられる。P650・P635より土師器細片が少量出土した。

SB8 (図版57・59、図版234)

20F・20Gグリッドに位置する。8基の柱穴が確認され、中には建物の軸線から外れたものや堀方が浅いものも含まれているが、本遺跡において特徴的な溝が柱穴列と平行している点を考慮し、建物であると判断した。方位はN - 17° - Wを指す。桁行2間、梁行2間の側柱建物で、平面積は15.13㎡を測る。柱間寸法は桁方向で1.73

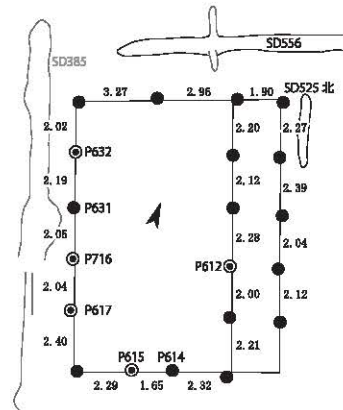


～2.19m、梁方向で1.88～1.98mと比較的揃っている。柱穴の形状は全て円形で、直径は24～42cmと規模は小さい。覆土は灰色土を基調とする。2基の柱穴で柱痕跡を確認し、柱の直径は10cm前後と推測できる。

また、建物の北側にはSD564、西側にはSD589の2条の周溝が存在する。SD564は、長さ1.94m、幅50cm、深さ10cmを測り、覆土は地山ブロックを多く含みレンズ状に堆積する。SD589は長さ3.36m、幅32cm、深さ8cmを測り、覆土は炭層の灰色粘質土が堆積する。それぞれ、建物から周溝までは1m程離れている。遺物はほとんどなく、柱穴1基から土師器の細片が出土したのみである。

SB9 (図版57・61・62、図版232・233)

21Gグリッドに位置する。一部の柱穴は第1確認面(VI層)及び第2確認面(V層中)で検出されていたが、明確に柱穴として把握できたのは本確認面であるため、本項で記述する。建物の方位はN - 21° - Wを指し、SB10と軸線がほぼ等しい。東側に廂をもつ建物で、身舎の桁行は5間、梁行は北側が2間、南側が3間となる。南側の妻柱P614・P615は他のものに比べ小規模で、対面する北側妻とは異なる構造をもっていたと考えられる。



平面積は身舎で67.63㎡、廂を含めると89.41㎡となり第3確認面(VI層上面)で検出した掘立柱建物の中では最大規模である。柱間寸法は桁方向で2.0～2.4mである。梁方向は北側が2.96～3.27m、南側は中央が1.65m、その両脇が約2.3mを測る。身舎の柱穴はすべて掘方をもち、方形のものが主体である。掘方の規模は一様ではないものの一辺が1.5mを超えるものもあり、建物の規模を反映していると考えられる。また、掘方の軸方向と建物全体の軸方向とがほぼ揃っており、計画的な施工を窺わせる。P612・P615・P617・P716・P632の計5基からは柱根が出土した。柱根の底面はすべて平坦であるが、断面形状や加工形態は一様ではなく、直径も17.9～33.8cmと幅がある。樹種同定の結果、柱材にはクリやケヤキなど異なる材が使用されていることが分かった。

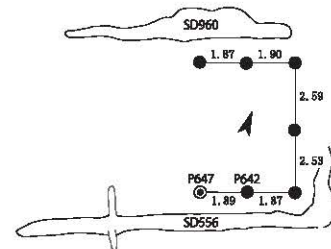
身舎の東側には主柱列にほぼ対応する小規模の柱穴列が検出された。この状況はSB7と同様であるが、身舎とこの柱穴列の間を画する溝が存在しないことから、この柱穴列をSB9の廂であると判断した。東隣にある5段階のSD525北は雨落溝の一部となる可能性がある。なお、南隅の柱穴1基分は一部先行して掘り下げた河川SD466の調査により検出できなかったが、本来は身舎同様6基が存在したと推定される。柱間寸法は2.04～2.27mを測り、柱穴規模は直径32～38cmと一様である。柱穴の平面形は総じて円形である。西隣では第1確認面(V層)で検出されたSD385が本建物の雨落溝として対応する可能性がある。このほか直接的な遺構の切り合い関係は認められないが、P346 (P614上層部) は3段階に属するSD566の上部、P631・P716はSD565の上部に位置し、これより新しい遺構であることが判明している。

遺物はP633・P644で墨書土器が出土したほか、柱穴・周溝から須恵器食膳具を中心に出土した。また、P616では砥石が1点出土した。P391・P569・P611は3～4段階、このほか6段階(新)以降の土

器が柱穴から出土した。隣接する区画溝 SD556でも6段階（新）に位置付けられる土器が出土している。このことから、本建物の機能した期間は5～6段階を中心とした時期であり、7段階頃には廃絶したと考えられる。柱根の放射性炭素年代測定では、P612の下限が新しい年代を示す以外は、8世紀第3四半期から9世紀第4四半期に収まる値を示す。なお、P553から出土した古墳時代前期の土器は重複する古墳時代の河川 SD466からの混入であろう。

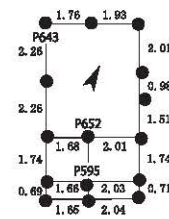
SB 10 (図版58・63、図版234)

21Fグリッドに位置する。主軸方位はN - 20.5° - Wを指し、SB 9とほぼ等しい。調査区北側が削平の影響を受けたためか、西の妻柱は検出できなかった。桁行方向に延びる形跡が認められず、規模は不明であるが、桁行2間以上、梁行2間で区画溝を伴う側柱建物と考えられる。桁・梁ともに2間規模とした場合の平面積は19.25㎡である。柱間寸法は桁行方向で1.87～1.9m、梁間方向では2.53～2.59の等間である。柱穴は径46～70cmで、平面形は円形を呈するものが主体である。P647より柱根が出土し、他の柱穴でも柱痕跡を確認した。覆土は褐灰色を基調とする。区画溝は建物に平行してSD960、SD556がコの字状に巡る。P642はSB11 - P643を切っており、本建物はSB11より新しい。柱穴出土遺物は細片が多く少量だが、SD556からは6段階（新）に相当する須恵器坏蓋（転用硯）・無台坏・長頸瓶が出土している。SD960では須恵器片が少量出土した。なお、柱根の放射性炭素年代測定では9世紀中葉から10世紀第3四半期頃の可能性が最も高かった。



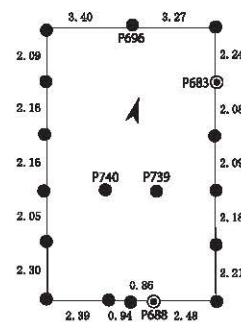
SB 11 (図版58・64、図版235)

21Fグリッドに位置する。方位はN - 27° - Wを指す。桁行は西側が4間、東側が5間、梁間は2間の側柱建物である。平面積は25.68㎡を測る。南寄りには東柱 P652・P595がある。柱間寸法は、桁・梁とも不等間隔であるが柱筋はほぼ通っている。柱穴は直径21～55cm、円形が主体である。覆土は褐灰色を基調とする。北西隅の P643はSD568・SB10 - P642の順に切られ、SB11はSB10より古い建物である。遺物は P640から須恵器有台坏、P598・P654・P664から土師器が少量出土した。



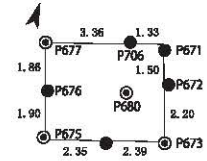
SB 12 (図版56・65・66、図版236)

18Hグリッドに位置する。方位はN - 16.5° - Wを指す。桁行5間、梁行2間（南側は4間）の側柱建物である。建物南寄りには小型の柱穴 P739・P740があり、間仕切りの可能性がある。平面積72.19㎡を測る。南側の柱数が多いのは、妻側に出入口を設けた妻入構造によるものと考えられる。柱間寸法は桁方向で2.05～2.24m、梁方向は北側で3.40mと3.27m、南側で0.86～2.48mを測る。柱穴の直径は間仕切り柱を除くと45～90cmで不等である。形状は円形、楕円形、方形、長方形、不整形と多様である。覆土は灰色を基調とする。13基の柱穴で柱痕跡を確認できたほか、P683・P688の2基には柱根が残存していた。柱根は直径約21～29cmで、底面は平底状に加工されている。P696では礎板と考えられる木片が散在しており、柱の抜き取りが行われた可能性がある。他の遺構との切り合いは認められないが、SB15・SB16と重複する。遺物は柱穴から4段階頃と考えられる須恵器有台坏・無台坏、土師器鍋が出土した。なお、柱根の放射性炭素年代測定では8世紀第4四半期から10世紀第2四半期まで幅をもっているが、その中では9世紀第3～4四半期の可能性が最も高かった。



SB13 (図版57・67、図版237)

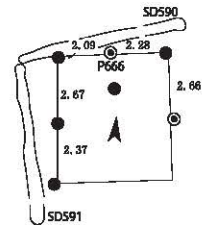
20G・20Hグリッドに位置する。方位はN - 19° - Wを指す。桁行2間、梁行2間分の柱穴が認められる。建物内にあるP680は、側柱P672・P676・P706と柱筋が通る位置にあることから本建物の柱穴と考えており、この場合には束柱となる。平面積



は18.30㎡を測る。柱間寸法は桁方向で1.33~3.36m、梁方向で1.50~2.20mとなり特に北側、東側では不等間隔となる。掘方をもつ柱穴の直径は57~92cmで、形状は方形、円形、楕円形である。覆土は灰色から黒褐色を呈する。P671・P676・P706など柱痕跡が見られず覆土がレンズ状に堆積するものは、廃絶後に柱を抜き取られた可能性が考えられる。6基の柱穴で直径12~28cmほどの柱痕跡が確認され、そのうちP673・P675・P677・P680の4基からは柱根が確認できた。本建物に伴う溝は検出されなかったが、第1確認面(V層)検出のSD301は本建物の周囲を巡ることから、周溝である可能性が高い。遺物は柱穴から土師器や須恵器の細片がごくわずかに出土した。本建物は6段階(新)に位置付けられるSD301やSB9と対応する可能性が高いことから、これらとほぼ同時期と考えられる。なお、柱根の放射性炭素年代測定値は7世紀後半から8世紀後半までの値を示すものがあり、出土土器の編年的位置付けと齟齬が生じている。

SB14 (図版57・68、図版238)

19G・20Gグリッドに位置する。方位はN - 5° - Wを指す。建物の南端は既設の水路により切られるため、東側と南側の柱穴は未検出であるが、西側の溝SD591に対応すると考え、桁行2間、梁行2間の側柱建物と判断した。平面積は23.02㎡を測る。柱間寸法は桁方向で2.37~2.67m、梁行方向で2.09~2.28mで等間となる。柱穴掘方は円形で直径は62~68cmである。覆土は灰色から黒褐色を呈す。



全ての柱穴から直径8~16cmの柱痕跡が確認できた。そのうち3基に木柱が残存していたが、遺存状態が悪く凶化できたのはP666の1点であった。また、建物の北側にはSD590、西側にはSD591の2条の溝が直交する。SD590は長さ6.77m、幅45cmで、深さは4cmと浅い。断面は弧状、覆土は単層で地山土を多く含む。SD591は長さ6.40m、幅60cm、深さ11cmを測り、覆土は1層目に地山土を多く含みレンズ状に堆積する。これらの溝は本建物の区画溝と考えるが、本建物に斜行することから、建て替えを想定しSB14以前の建物に伴う溝とも考えられる。遺物は柱穴から土師器の細片がごくわずかに出土した。

SB15 (図版56・69、図版235)

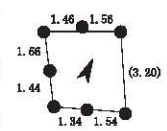
18Hグリッドに位置する。方位はN - 13° - Wを指す。桁行2間、梁行2間の側柱建物で、平面積13.09㎡である。柱間寸法は桁方向で1.66~1.85m、梁方向は1.47~2.09mを測り不等である。柱穴は円形を呈し、直径40~50cmを測る。覆土は灰色を基調とする。



P727・P738で直径10cm程の柱根が残存していたほか、全ての柱穴で直径9~22cmの柱痕跡を確認した。重複するSB12・SB16との前後関係は不明である。遺物は柱穴から土師器の小片が出土した。

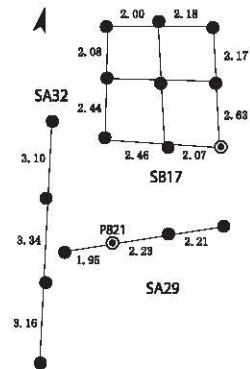
SB16 (図版56・70、図版239)

18Gグリッドに位置する。建物の方位はN - 32° - Wを指す。桁行2間、梁行2間の側柱建物である。西側は中間の柱穴が検出できなかった。平面積9.09㎡を測り、本調査で検出した建物の中では最も規模が小さい。平面は平行四辺形を呈し、柱間寸法は北西側を除くと、桁方向で1.44~1.56m、梁方向は1.34~1.56mと不等である。柱穴の直径は18~40cmで、形状は円形を呈するものが多い。覆土は灰色を基調とする。2基の柱穴で柱痕跡が確認でき、柱の直径は20cm程と考えられる。出土遺物がなく所属時期は不明である。また重複するSB12・SB15との前後関係も不明である。



SB17・SA29・SA32 (図版56・71・72、図版240・247)

SB17は18Hグリッドに位置する。方位はN - 11° - Wを指す。桁行2間、梁間2間の総柱建物である。南東の隅柱が突出するため平面形はやや崩れる。平面積は20.65㎡を測る。柱間寸法は2.0~2.63mを測り、やや不等である。柱穴の掘方は円形を基調とし、直径43~80cmである。覆土は褐灰色を基調とする。P791より直径18cmの柱根が出土した。建物の西側にはSD754南が平行して存在し、建物に関連した遺構であると考えられる。

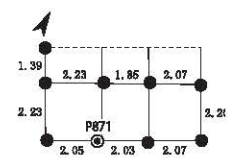


SA29は17I・18Iグリッドに位置する。本柵列は整理段階で図上復元された。方位はN - 68.5° - Eを指す。全長6.39mを測る。4基の柱穴で構成され、柱間寸法は1.95~2.23mを測る。柱穴の形状はそれぞれ円形、楕円形、方形などである。P821では柱根が残存していた。遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

SA32は17I・17Jグリッドに位置する。本柵列は整理段階で図上復元された。主軸方位はN - 9.5° - Wを指す。4基の柱穴で構成され、全長9.6m、柱間寸法は3.10~3.34mを測る。柱穴は円形を呈し、直径36~55cmを測る。覆土は灰色を基調とする。遺物は出土しなかった。

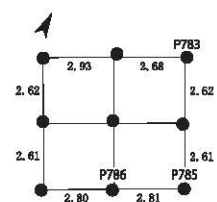
SB18 (図版55・73、図版241)

15Hグリッドに位置する。主軸方位はN - 30° - Wを指す。桁行3間、梁間2間以上の総柱建物である。建物北側は調査区外へと延びる。平面積は22.53㎡以上と考えられる。柱間寸法は南側の桁で2m、西側の梁で1.39~2.23mである。柱穴の掘方は一辺57~78cmの方形である。P871では直径18cmの柱根が出土した。覆土は褐灰色を基調とする。本建物は畝状小溝のSD772・SD768を切る。遺物は柱穴から4段階頃の須恵器坏蓋(転用碗)、土師器小甕が出土した。



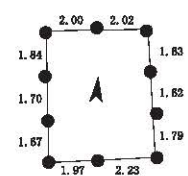
SB19 (図版55・74、図版242)

16I・17Iグリッドに位置する。方位はN - 28° - Wを指す。桁行2間、梁行2間の総柱建物で、平面積は29.23㎡を測る。柱間寸法は桁行が2.68~2.93m、梁行は2.6m等間である。柱穴の掘方は概ね円形を呈し、直径40~82cmである。覆土は灰色から黒色を呈す。7基の柱穴から直径21~25cmの柱痕跡が確認できた。本建物周辺では遺構の切り合いが多くみられ、復元した以外の建物も存在した可能性が高い。SB19 - P783はSB20 - P807を、同P785はSB31 - P819を、同P786はSB31 - P889を、同P788はSA34 - P912をそれぞれ切ることから、SB19はSB20・SB31よりも新しい。遺物は柱穴から4段階頃と考えられる須恵器坏蓋・無台坏・横瓶・瓶類、土師器長甕・小甕が出土した。



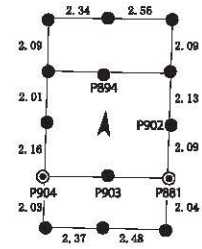
SB20 (図版55・75、図版243)

16H・16Iグリッドに位置する。建物の方位はN - 6° - Wを指す。桁行3間、梁行2間の側柱建物で、平面積は22.03㎡を測る。柱間寸法は桁方向で1.62~1.84m、梁方向で1.97~2.23mとやや不等で、東側は柱筋の通りが悪い。柱穴は掘方をもち直径は50~87cmで概ね楕円形を呈す。覆土は黒色土を基調とする。10基の柱穴のうち8基から直径18~42cmの柱痕跡が確認できた。柱根は残存していない。SB20は、下層で検出された3間×2間の建物の中では最も規模が小さい。SA34は本建物と平行することから、建物と関連した遺構の可能性が高い。遺物は柱穴から須恵器有台坏が出土した。



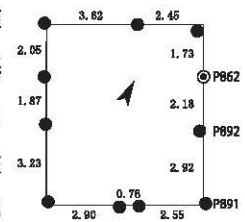
SB21 (図版55・76、図版244)

15 I グリッドに位置する。方位はN - 3° - Wを指す。桁行4間、梁行2間の側柱建物で、平面積40.37㎡である。内部に東柱 (P894・P903) を持つ柱間寸法は桁方向で2.01~2.16m、梁方向で2.34~2.56mで概ね揃っている。柱穴の直径は30~48cmで、形状は主に円形を呈する。覆土は灰色を呈するものが多い。P881では直径10cm程の木柱が出土したほか、P902・P904でも柱の一部と考えられる木片が出土した。この他6基の柱穴では直径13~26cmの柱痕跡が認められる。遺物は柱穴から、須恵器と土師器の小片が出土した。



SB22 (図版55・77、図版245)

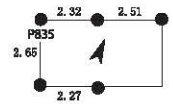
16~17 I、16~17 J グリッドに位置する。南東側の柱穴 P892、P891は第2確認面 (V層中) から、それ以外は第3確認面 (VII層) で検出された。上記の柱穴2基の底面はVII層中間まで到達していることから、本来はV層中より上層から掘り込まれたと考えられる。建物の方位はN - 28° - Wを指す。桁行3間、梁行2間の側柱建物で、平面積は44.47㎡を測る。柱間寸法は桁方向で1.73~3.23m、梁方向で2.45



~3.62mとやや不揃いである。柱穴は円形または楕円形を呈し、直径は30~70cmである。覆土は灰色土を基調とする。7基の柱穴から直径18~28cmの柱痕跡が確認でき、そのうち P862からは直径20cm程の柱根が残存していた。木柱は底面が平坦に加工してある。建物の南妻は2基検出され、他の柱穴に比べ小規模である。SB22は下層で検出した3×2間の建物の中で規模が最も大きく、柱間距離の平均値も大きい。また、建物の北西隅に軸線を同じくしたSD775が位置する。遺物は柱穴から須恵器や土師器片が少量出土した。なお、柱根の放射性炭素年代測定では9世紀代、特に9世紀第3~4半期で高い可能性を示した。

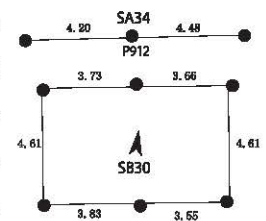
SB23 (図版55・78、図版239)

16H・17Hグリッドに位置する。方位はN - 22° - Wを指す。桁行2間、梁行1間の側柱建物で、平面積は12.87㎡を測る。柱間寸法は桁方向で2.27~2.51m、梁方向で2.65mを測り、柱穴は概ね円形を呈す。覆土は灰色を基調とする。南東隅の柱穴はSE856や既設の水路によって消滅し未検出である。また、P835は第1確認面 (V層) 検出のP460と重複している。柱穴の直径は35~65cmで、4基から直径16~25cmの柱痕跡が確認できた。遺物は柱穴から2段階頃に相当する須恵器有台坏、土師器長甕・小甕が出土した。



SA34・SB30 (図版55・79、図版246・247)

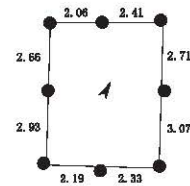
SA34は15 I・16 I グリッドに位置する。本柵列は整理段階で図上復元された。方位はN - 80.5° - Eを指す。3基の柱穴で構成され全長8.68mを測り、柱間寸法は4.20~4.48mを測る。柱穴の形状は円形もしくは楕円形を呈す。直径は32~58cmを測り、2基から直径18~30cmの柱痕跡が確認された。覆土は灰色から黒色を呈す。本柵列 P912はSB19 - P788に切られる。また、近接するSB20・SB21・SB30とは同軸上にある。遺物は須恵器と土師器の細片がわずかに出土した。



SB30は16 I・16 J グリッドに位置する。方位はN - 9° - Wを指す。桁行2間、梁行1間の側柱建物で、平面積は34.1㎡を測る。柱間寸法は桁方向で3.55~3.83m、梁方向で4.61mと概ね揃っている。柱穴の直径は41~58cmで、形状は円形、楕円形を呈す。覆土は灰色から黒色土を呈す。南側の3基から直径15~34cmの柱痕跡が確認された。遺物は柱穴から4段階 (新) の須恵器有台坏、土師器無台碗が出土した。

SB31 (図版55・78、図版246)

16～17 I、16～17 J グリッドに位置する。本建物は整理段階で図上復元された。方位はN - 28.5° - Wを指す。桁行2間、梁行2間の側柱建物で、平面積は25.78㎡を測る。柱間寸法は桁方向で2.66～3.07m、梁方向で2.06～2.41mである。柱穴は円形または楕円形を呈し、直径は23～68cmである。本建物 P889はSB19 - P786に、同 P819はSB19 - P785に切られることから、本建物の方が古い。P1246は第1確認面（V層）で検出したP115と重複しており土器細片が出土している。

**B 柱穴****P827** (図版55・80)

17 I グリッドに位置する。掘方は長方形で長さ49cm、幅36cm、深さ41cmを測る。断面は南東側に段を持つ不整形を呈する。覆土は柱痕状で、柱痕跡断面は丸底で直径12cm、深さ44cmを測る。P828と近接している。周囲の柱穴等と合わせ、未検出の柵列等を構成していた可能性がある。遺物は出土しなかった。

P828 (図版55・80、図版248)

17 I グリッドに位置する。掘方は長方形で長軸41cm、短軸37cm、深さ23cmを測る。断面は北側に段部を持つ不整なU字状である。覆土は柱痕状を呈し、柱痕跡断面は丸底で直径14cm、深さ36cmを測る。P827と近接している。遺物は土師器がわずかに出土した。

P850 (図版55・80、図版248)

17Hグリッドに位置する。掘方は円形で長軸44cm、短軸42cm、深さ32cmを測る。断面はU字状、覆土はレンズ状で一部ブロック状の土が認められる。遺物は土師器がわずかに出土した。

P877 (図版55・80)

15 I グリッドに位置する。平面円形で長軸60cm、短軸56cmを測る。須恵器無台坏が出土した。

C 井戸**SE555** (図版58・80、図版248)

23Fグリッドに位置する。平面形はやや不整な円形、断面形は不整な漏斗状を呈する。長軸1.14m、短軸98cm、深さは78cmを測る。覆土はレンズ状に堆積し、炭化物を含む灰色粘土を基調とする。素掘りの井戸と考えられ、底面付近には湧水層があり、調査中は水分が比較的多い状況であった。本遺構はSD552に切られ、さらにSD552がSD389に切られるため、SB7に先行すると考えられる。遺物は須恵器有台坏・土師器が覆土上位から少量出土した。

SE556 (図版55・80、図版248)

17Hグリッドに位置する。北側は既設水路によって切られるが、円形を呈すると考えられる。断面形は壁面・底面共に凹凸の顕著なU字状を呈し、長さ1.42m、幅1.18m、深さ1.64mを測る。形態からみて素掘りの井戸と考えられる。覆土はレンズ状堆積で遺構周辺の土壌が自然埋没したと考えられ、埋井行為を窺わせる覆土は確認されなかった。覆土から土壌サンプルを採取、珪藻・花粉分析を行ったが、水生珪藻はほとんど産出しなかった。また、イネ・ソバ属の花粉が検出されたことから、周辺でのイネ・ソバ栽培の可能性が指摘された。遺物は底面付近から少量の土師器片と共に樹皮が、覆土中層から墨書土器を含む須恵器食膳具・土師器煮炊具が出土した。中層の土器は2～4段階（古）に位置付けられる。

D 土坑

S K 630 (図版57・81、図版248)

21Hグリッドに位置する。楕円形の土坑で長軸1.25m、短軸95cm、深さ20cmを測る。覆土は灰色土を主体としレンズ状に堆積する。遺物は須恵器長頸瓶と甕が出土した。

S K 719 (図版56・81)

18H・18Iグリッドに位置する。隅丸方形の土坑で長軸1.45m、短軸1.24m以上、深さ18cmを測る。遺構中央部では、平面楕円形で一段落ち込んでいる。覆土は灰色土が主体でレンズ状に堆積する。SD712を切るため、本遺構が新しい。遺物は須恵器・土師器の小片が出土した。

E 溝

S D 525北 (図版57・61)

21Fグリッドに位置する。直線状に伸び、長さ2.90m、幅42cm、深さ10cmを測る。溝の方位はN - 16° - Wを指す。断面形は弧状を呈す。覆土は単層で暗灰色土が主体となる。SB9の長軸とほぼ沿うように近接することから、本建物に伴う遺構である可能性が高い。遺物は土師器無台椀や被熱石が出土した。出土遺物は、およそ5段階相当と考える。

S D 534・S D 535 (図版57・82)

20G・20H・21Hグリッドに位置する。SD534は長さ約10.9m、幅約88cm、深さ約37cm、SD535は長さ約9.1m、幅約52cm、深さ約11cmを測る。いずれも方位はN - 23° - Wを指す。覆土は灰色土がレンズ状に堆積する。遺物は須恵器・土師器の小片が出土した。

S D 556 (図版57・61)

20F・21Fグリッドに位置する。L字状に屈曲する溝で、延長14.42m、幅65cm、深さ20cmを測る。断面は弧状を呈し、覆土はレンズ状に堆積する。本遺構は、SB10の北東辺および南東辺の外周を巡る区画溝で、一部SB9とも共有する。SB11 - P643を切るSD568を本遺構が切ることから、SB10に伴う本遺構はSB11よりも新しい。このことはSB10の柱穴(P642)がSB11の柱穴(P643)を切るという切り合い関係とも整合している。遺物はSB7とSB10隣接部、およびSB9北側の2地点で遺物が出土した。須恵器食膳具・貯蔵具の他、土師器が少量出土しており、6段階(新)に位置付けられる。

S D 557・S D 558 (図版57・82)

20~21G・20~21Hグリッドに位置する。いずれも方位はN - 21° - Wを指す。SD557は長さ約8.8m、幅約80cm、深さ約18cm、SD558は長さ約10.9m、幅約34cm、深さ約9cmを測る。覆土は灰色土がレンズ状に堆積する。遺物はSD557より4段階頃の須恵器無台坏(墨書)が出土した。

S D 561 (図版57・81)

20Fグリッドに位置する。方位はN - 29° - Wを指す。長さ1m、幅42cm、深さ8cmを測る。平面形は直線状、断面形は弧状を呈す。本遺構は北端でSD562を切る。遺物は出土しなかった。

S D 562 (図版57・81)

20Fグリッドに位置する。方位はN - 34° - Wを指す。長さ2.18m、幅72cm、深さ8cmを測る。平面形は直線、断面形は弧状を呈す。遺物は土師器細片がわずかに出土した。

S D 775 (図版55・77)

16I・16Jグリッドに位置する。方位はN - 28° - Wを指す。長さ2.73m、幅1.05m、深さ25cmを測

る。平面形は直線で断面形は弧状を呈す。覆土は炭層を間に挟んでレンズ状に堆積する。腐食した植物片も含む。SB22と平行して近接することから、これに伴う遺構と考えられる。遺物は須恵器無台坏、土師器小甕が出土した。

SD565 (図版57・82)

20G・21G・21Hグリッドに位置する。方位はN - 18° - Wを指す。長さ約8.6m、幅約34cm、深さ17cmを測る。覆土は単層で灰色を呈する。遺物は出土していない。SB9の柱穴P631・P716に切られることから、SB9に先行する溝である。

SD566 (図版57・82)

21Gグリッドに位置する。方位はN - 25° - Wを指す。長さ約8.9m、幅約94cm、深さ約22cmを測る。覆土は灰色土がレンズ状に堆積する。遺物は3段階に相当する須恵器有台坏・無台坏、甕、土師器無台碗が出土した。なお、底面で検出されたSB9 - P614は第1確認面で検出されたP346と同一遺構であるため、SD566のほうが古い遺構と考えられる。

SD567 (図版57・81)

21H・22Hグリッドに位置する。方位はN - 77.5° - Eを指す。長さ約6.5m、幅約1.02m、深さ約18cmを測る。覆土は灰色土がレンズ状に堆積する。遺物は出土しなかった。

SD588 (図版57・82)

20G・20Hグリッドに位置する。方位はN - 18.5° - Wを指す。長さ約12.8m、幅約50cm、深さ約9cmを測る。覆土は灰色土が主体でレンズ状に堆積する。遺物は土師器の小片が出土した。SB13 - P674に切られており、これに先行する時期の遺構である。

SD620 (図版58・60、図版231)

22F・22Gグリッドに位置する。方位はN - 11° - Eを指す。北西・南東方向に直線状に伸びる溝で、長さ10.46m、幅55cm、深さ34cmを測る。南端は既設用水路に切られており、端部を確認できなかった。断面はU字状で、覆土はブロック状に堆積する。本遺構はSA33に隣接して平行する。SA33と共にSB7に伴う溝であると考えられる。本遺構に関する切り合いは認められなかった。遺物は3段階頃の須恵器有台坏、土師器が少量出土した。

SD712・SD718・SD754~762・SD777~779 (図版75・83、図版248)

16H~16J・17H~17I・18Hグリッドに位置する。概ねN - 20° - Wの方位を指す14条の畝状小溝群である。このうちSD754は切り合い関係を有し、土坑状の南半をSD754南として区別した。長さはSD778が最短となり2.90mで、最も長い。SD712は4.90m以上になると推測される。幅は23~48cm、深さは6~18cmを測る。SD754南は長軸2.75m、幅80cm、深さ51cmを測る。断面は弧状を主体とし、SD755・SD756では半円状、SD754南は台形状を呈する。覆土は単層またはレンズ状に堆積する。SD754はSB17に関連するSD754南に、SD760はSB20 - P806に、SD755はSE856にそれぞれ切られることから、これら建物群に先行する遺構である。遺物はSD754・SD754南・SD760・SD775から概ね3段階に相当する須恵器食膳具や土師器煮炊具がわずかながら出土した。

SD960 (図版58・63、図版234)

20E・21Eグリッドに位置する。直線状に伸びる溝で、SB10の北西辺に平行する。長さは8.97m、幅は1.26m、深さは12cmを測る。断面は弧状を呈し、覆土はレンズ状に堆積する。SD556と共にSB10の外周を巡り、SB10に伴う区画溝と考えられる。遺物は須恵器が少量出土した。

S D974 (図版58・81)

22F・23Fグリッドに位置する。方位はN-63°-Eを指す。長さ1.40m、幅25cm、深さ13cmを測る。断面形は弧状を呈す。覆土はレンズ状に堆積する。遺物は出土しなかった。

F 河川

河川 S D466・S D975 (図版86~89、図版249)

15I~23Fグリッドに位置し、東西方向に蛇行して流れる。17Jグリッド付近では2本に枝分かれし、北西側の流路は調査区外へと延びる。南西側は16K・17Kグリッドにかけて広がり、この流路の南側では浅いテラス部分が存在し湿地のような状態を形成していたと考えられる。長さは約79.0m、幅は南西部の広がりを除いて約2.2~8.0m、深さは最大で約77cmを測る。覆土は灰~緑灰色土を主体としレンズ状に堆積する。遺物は古墳時代前期の土師器器台・鉢・壺・甕、古墳時代後期の土師器坏・高坏・甕・甑、砥石が出土した。西側の16Jグリッド付近では、川筋に直交して杭が3本検出された。何らかの施設が構築された可能性が高いが、詳細は不明である。また同地点ではSD975が河川SD466の埋没後に形成されており、時代によって流れが変化したことを表している。

河川SD466が機能していた時期は、古墳時代前期の土器が含まれること、埋没した河川SD466の上に平安時代の遺構が構築されていること、河川SD466に後続するSD975から古墳時代後期の土器が出土していることから、古墳時代前期から古墳時代後期頃と考えられる。

G 性格不明遺構

S X715 (図版56・84)

18Hグリッドに位置する。平面楕円形で長軸1.87m、短軸92cm、深さ14cmを測る。覆土は灰色土を主体としレンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

S X804 (図版55・84)

15Iグリッドに位置する。長軸1.7m、短軸1.25m、深さ32cmを測る。平面は不整な楕円形、断面は弧状で、南西側にテラス部を有する。覆土はレンズ状に堆積する。遺物は出土せず、性格は不明である。

S X816 (図版56・84)

18Iグリッドに位置する。長軸1.52m、短軸91cm、深さ16cmを測る。平面は北側に向かい細くなる不整な楕円形、断面は弧状を呈する。覆土はレンズ状に堆積する。

S X833 (図版55・84)

17Iグリッドに位置する。長さ3.1m、幅1.6m、深さ14cmを測る。平面形は、溝状に張り出す不整な方形で、掘り込みは浅く断面形は弧状を呈す。第2確認面(V層中)検出のSX511と重複する位置で検出したことから、同一遺構の可能性もある。遺物は須恵器有台坏・無台坏(墨書)、土師器の細片が少量出土した。概ね3段階に位置付けられる。

S X925 (図版55・84)

17Iグリッドに位置する。長軸2.98m、短軸1.4m、深さ22cmを測る。平面は不整形、断面は弧状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、褐灰色を基調とする。また、覆土中に炭層が認められた。遺物は墨書土器を含む須恵器食膳具、土師器煮炊具が定量出土した。

第V章 遺物

第1節 遺物の出土状況

本遺跡から出土した遺物は、浅型のコンテナ換算で299箱であった。遺物の種類は、土器・土製品・木製品・石製品・金属製品・鍛冶関連遺物・漆製品・竈材などがある。遺物の年代は、およそ古墳時代前期初頭前後に始まり古代・中世を経て近世・幕末まで断続的に確認されている。古墳時代の土器は河川跡SD466を中心に定量出土し、中世以降の遺物は散発的な出土である。最も出土量が多いのは、平安時代の遺物である。

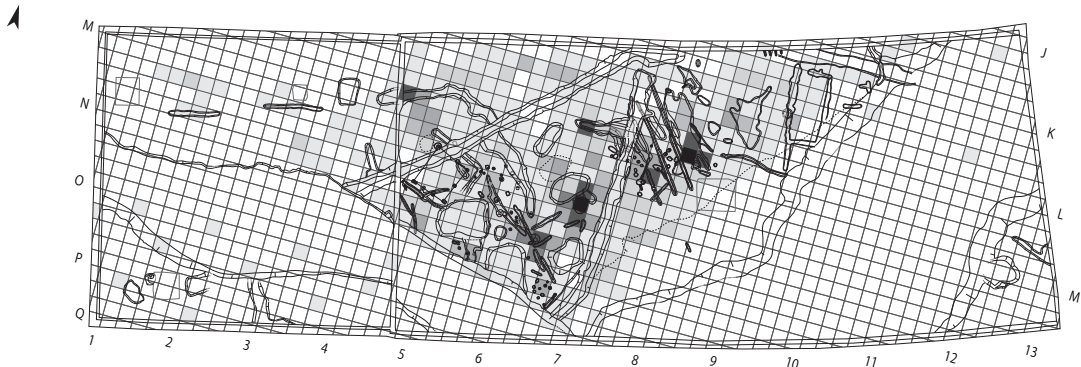
各種出土遺物の重量分布図（第11～16図）をみると、遺物はV層～VII層の確認面で検出された遺構群とほぼ重なるエリアから出土している。I区では調査区北側で削平が見られ、南側ではSD976・SD981等の河川跡が認められたため、川岸の一部を除き遺物は殆ど出土しなかったが、中央部の7Nから8Lにかけては遺物包含層が良好に残されており、遺物は集中的かつ多量に出土した。この部分は掘立柱建物と古代の河川が隣接する場所にあたり、建物周辺での活動痕跡を物語る資料群として評価できる。またII区では、後世の耕作による攪拌や河川氾濫の影響のためか、良好な遺物包含層は認められなかった。しかし、V層中～VII層で検出された遺構を中心として良好な資料が出土し、I区と同様に掘立柱建物の性格や年代を示唆するものとして評価されよう。

本書ではこうした遺物のうち、主要な遺物1,554点の実測図を掲載した。掲載にあたり、土器については可能な限り全体を把握できるよう、出土量の多い器種は残存率のよいものを優先し、細片であっても特徴的なものはなるべく図化することとした。ただし、竈材については図化を行っておらず、重量分布図の作成にとどめることとした（第14図）。

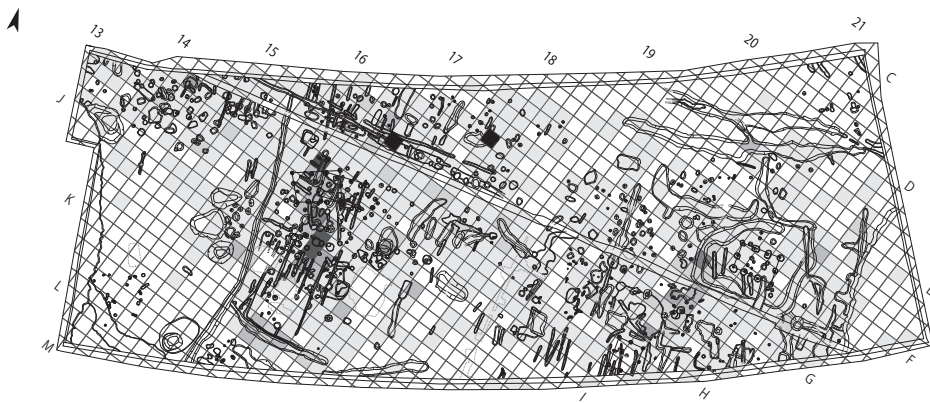
時 代	種 別	古墳前～後期	古墳後期	古 代				中 世	近 世	時期不明	
		土師器	須恵器	土師器	須恵器	施釉陶器等	円筒形土製品*	竈 材	陶磁器	陶磁器	土師器等
I 区	II～IV層包含層 V層検出遺構	159.9	0.0	89,165.5	72,071.0	20.1	2,225.3	15,155.4	1,974.0	1,289.2	170.1
	V・VI層包含層 VI層検出遺構	3,093.9	11.7	56,026.5	44,073.3	37.6	1,654.1	13,387.8	185.7	0.0	24.0
	その他 (攪乱・排土等)	0.0	0.0	152.7	612.3	0.0	0.0	0.0	104.0	73.2	0.0
I区小計		3,253.8	11.7	145,344.7	116,756.6	57.7	3,879.4	28,543.2	2,263.7	1,362.4	194.1
II 区	II～IV層包含層 V層検出遺構	1,810.2	0.0	90,136.1	59,805.7	0.0	1,470.5	3,053.8	994.8	19.8	154.4
	V層包含層 V層中検出遺構	4,109.5	0.0	39,727.9	23,497.3	0.0	44.9	2,477.1	0.0	3.2	0.0
	VI層包含層 VII層検出遺構	16,992.2	0.0	19,044.5	13,773.2	0.0	0.0	2,034.2	0.0	0.0	0.0
	その他 (攪乱・排土等)	0.0	0.0	1,300.9	887.5	0.0	0.0	0.0	25.6	146.4	0.0
II区小計		22,911.9	0.0	150,209.4	97,963.7	0.0	1,515.4	7,565.1	1,020.4	169.4	154.4
種別重量		26,165.7	11.7	295,554.1	214,720.3	57.7	5,394.8	36,108.3	3,284.1	1,531.8	348.5

(*製塩土器を含む 単位：g)

第3表 出土遺物の重量内訳

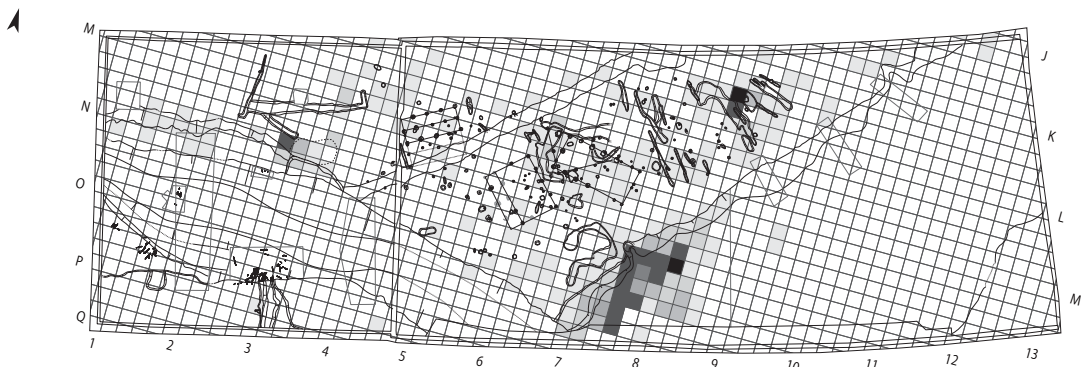


(I区)

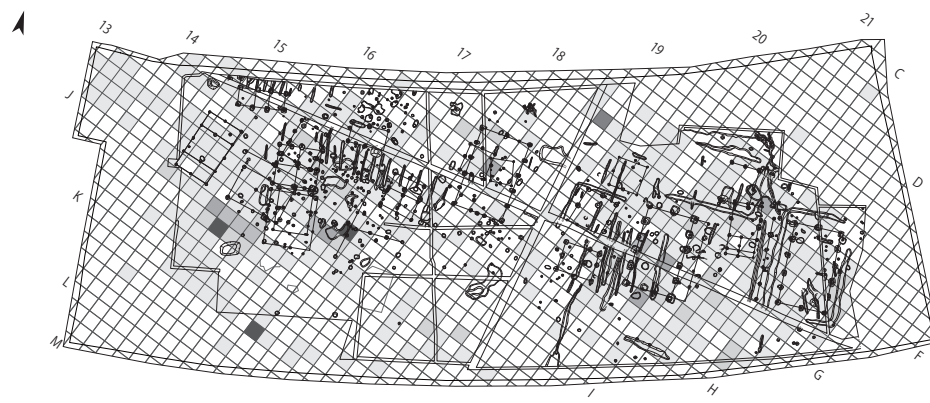


(II区)

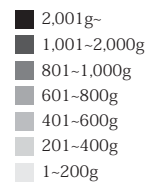
IV層包含層・第1確認面検出遺構出土



(I区)

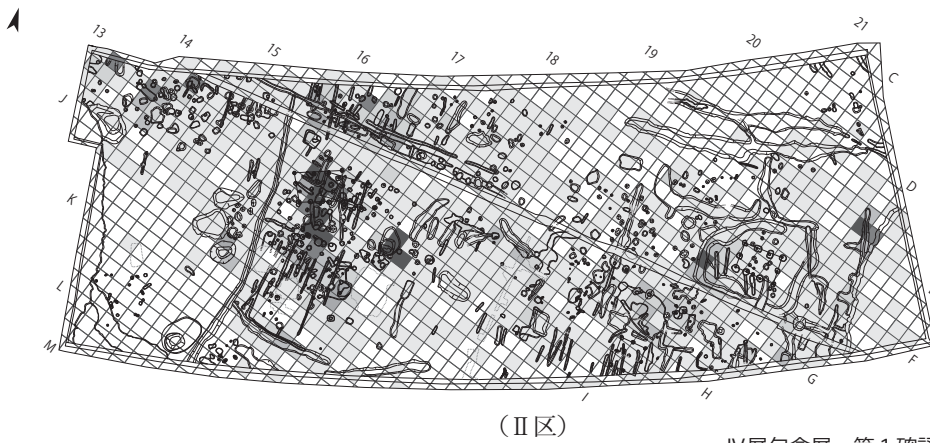
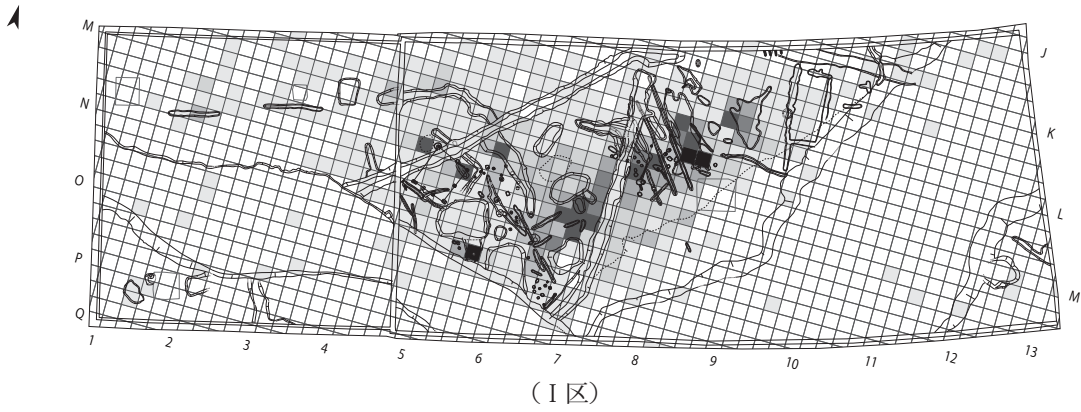


(II区)

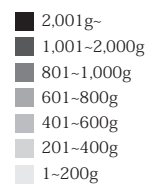
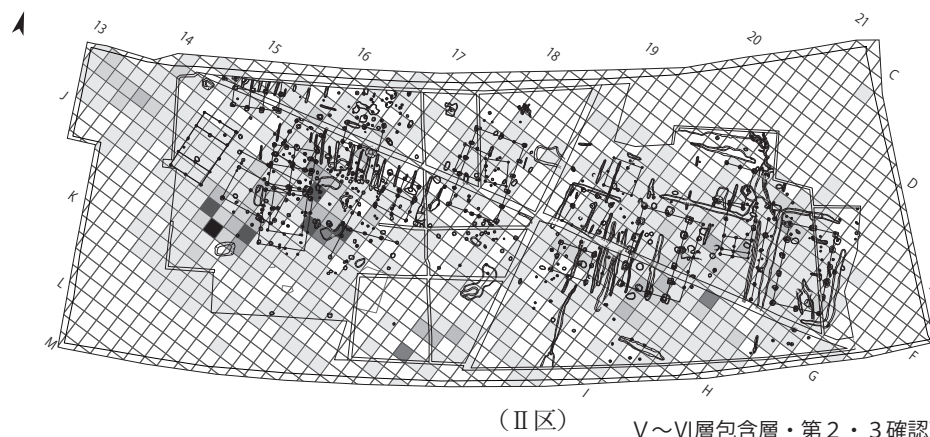
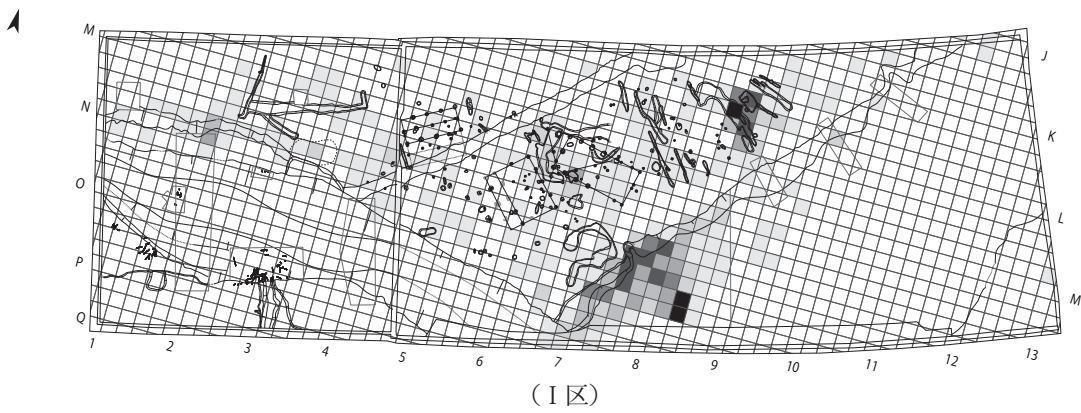


V~VI層包含層・第2・3確認面検出遺構出土

第11図 須恵器重量分布図

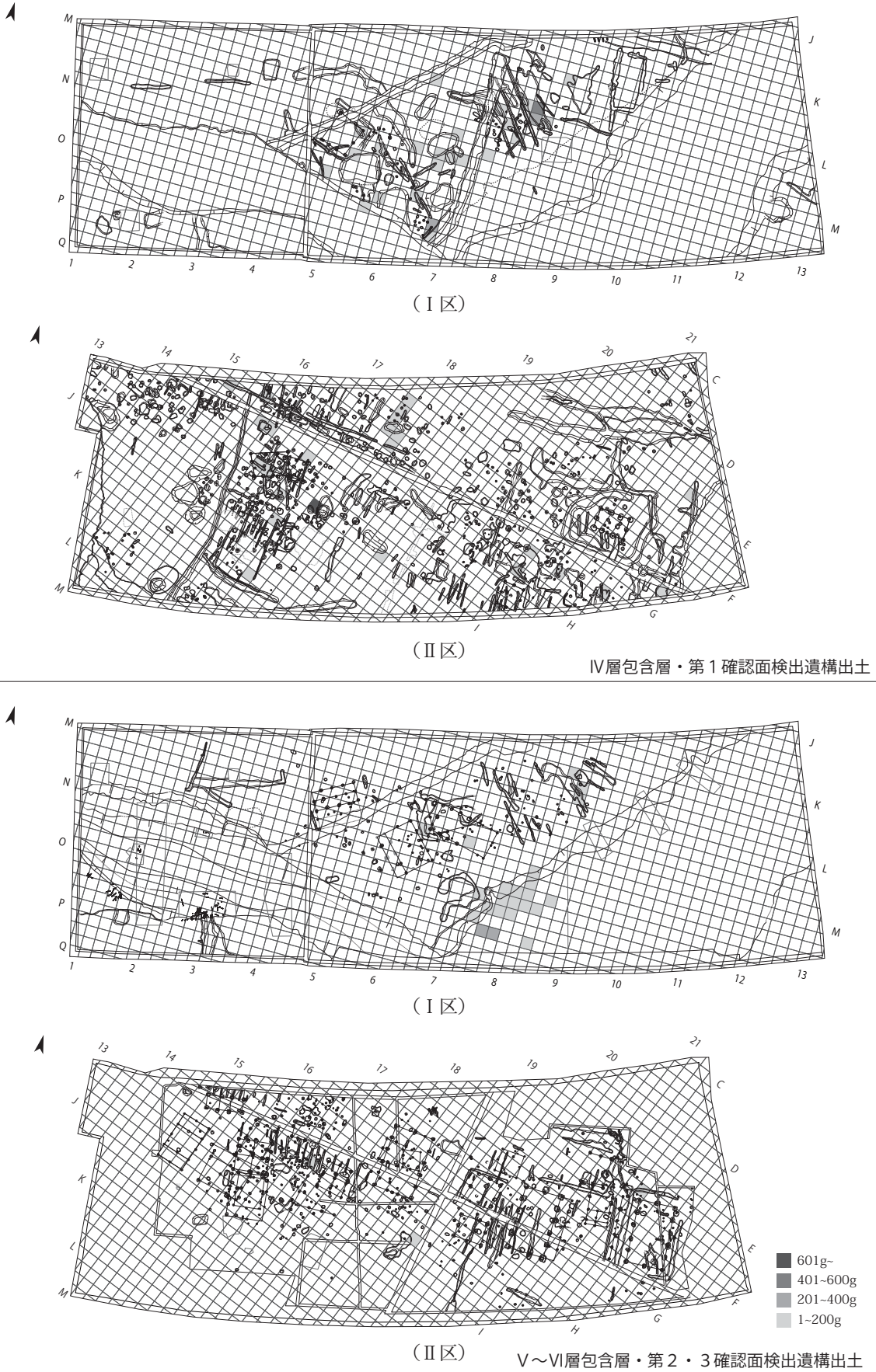


IV層包含層・第1確認面検出遺構出土

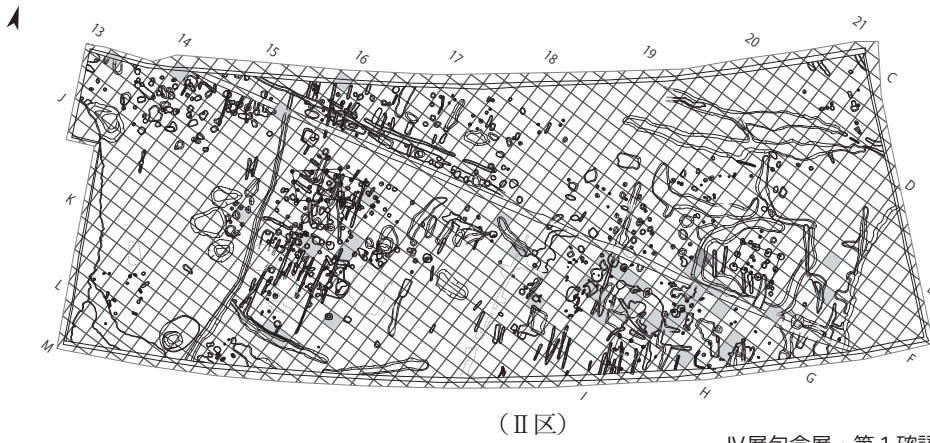
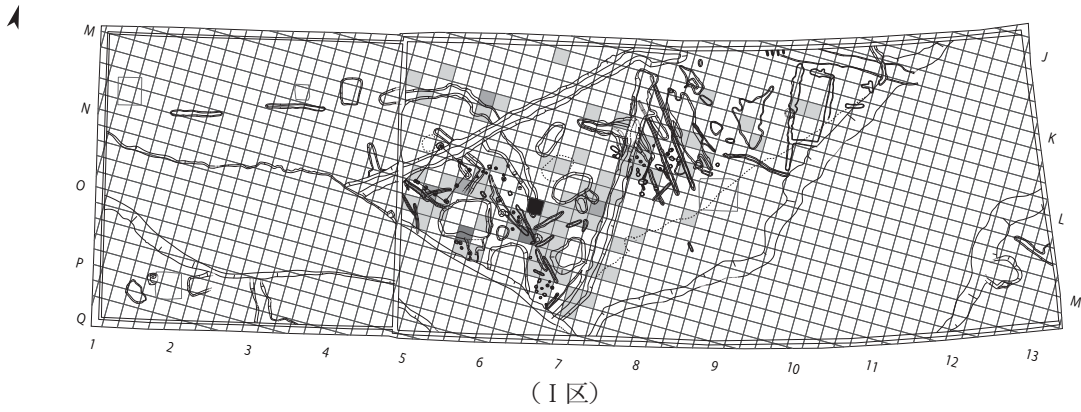


V~VI層包含層・第2・3確認面検出遺構出土

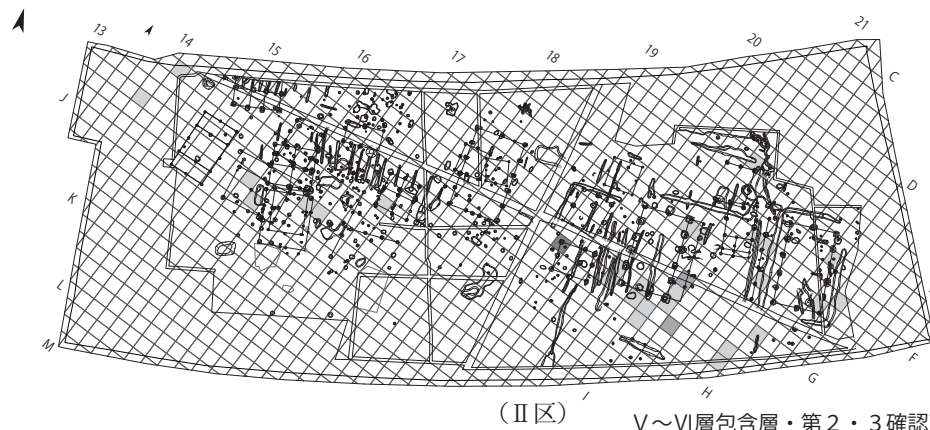
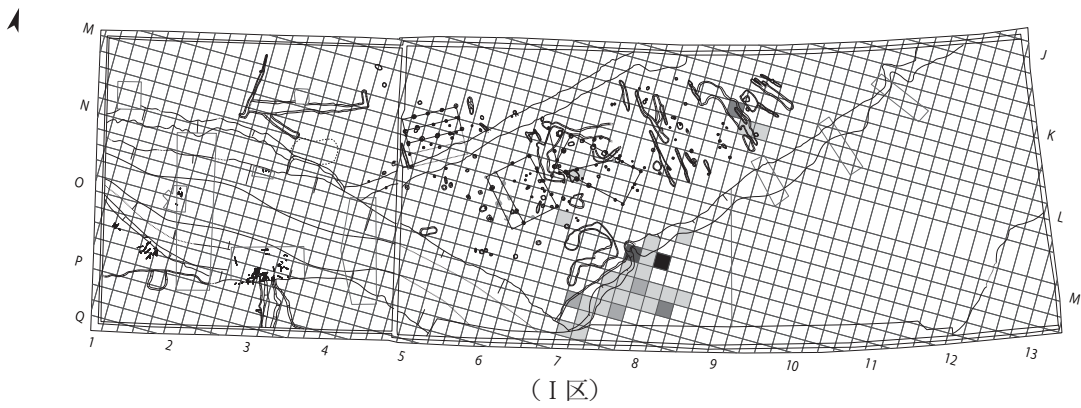
第12図 土師器重量分布図



第13図 円筒形土製品重量分布図



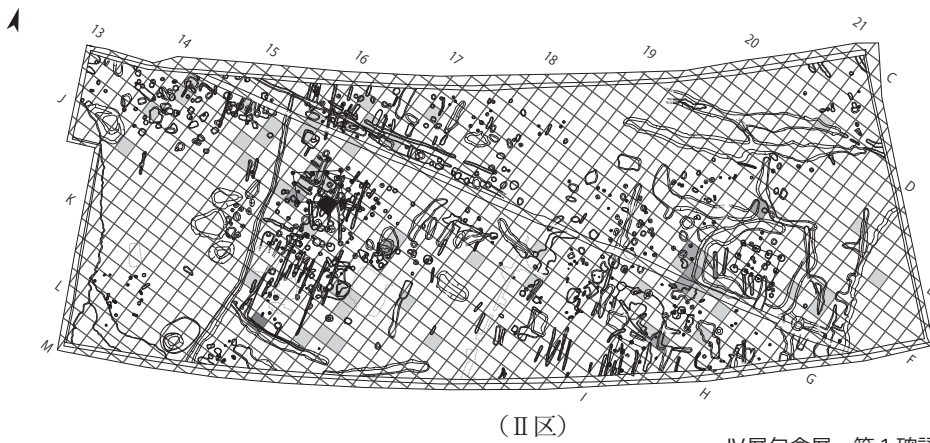
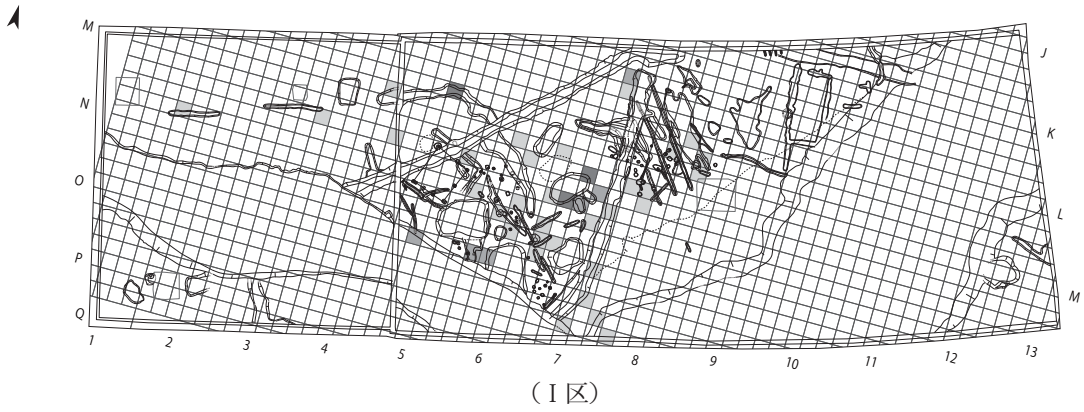
IV層包含層・第1確認面検出遺構出土



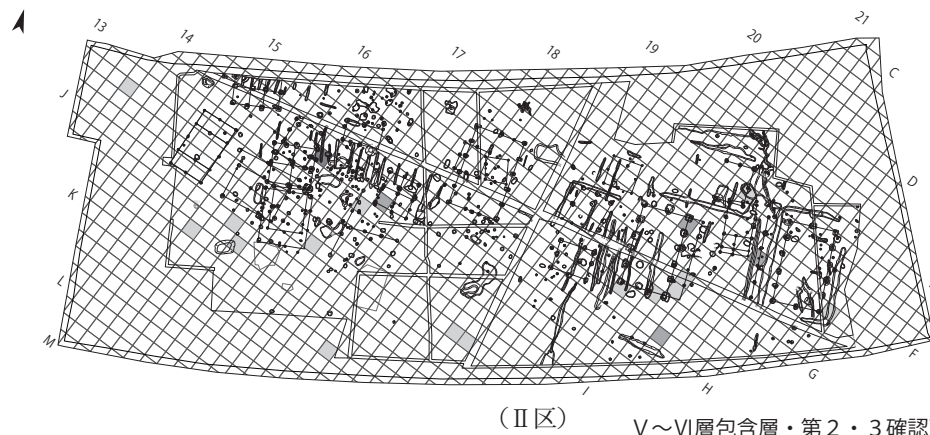
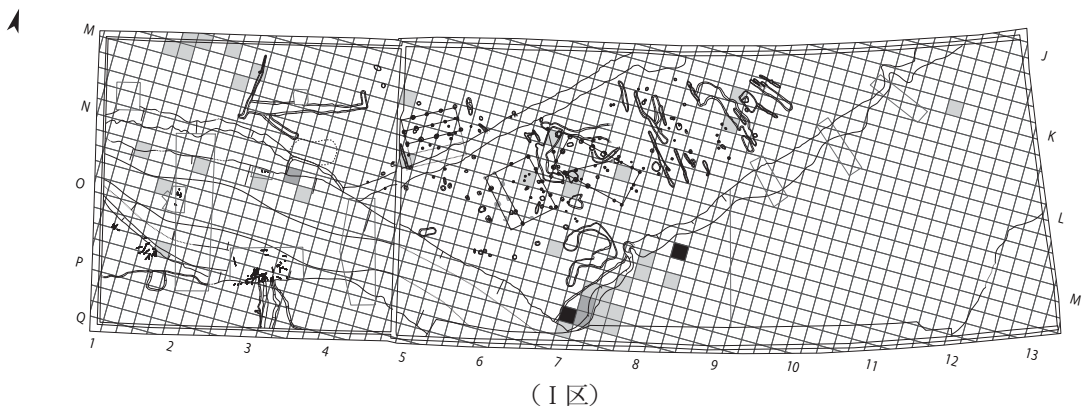
V~VI層包含層・第2・3確認面検出遺構出土

第14図 甕材重量分布図

- 3.001g~
- 2.001-3.000g
- 1.001-2.000g
- 501-1,000g
- 1-500g

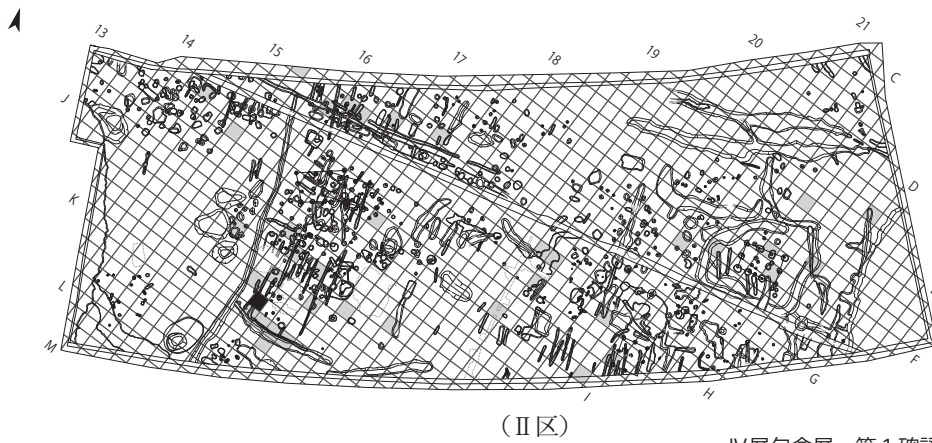
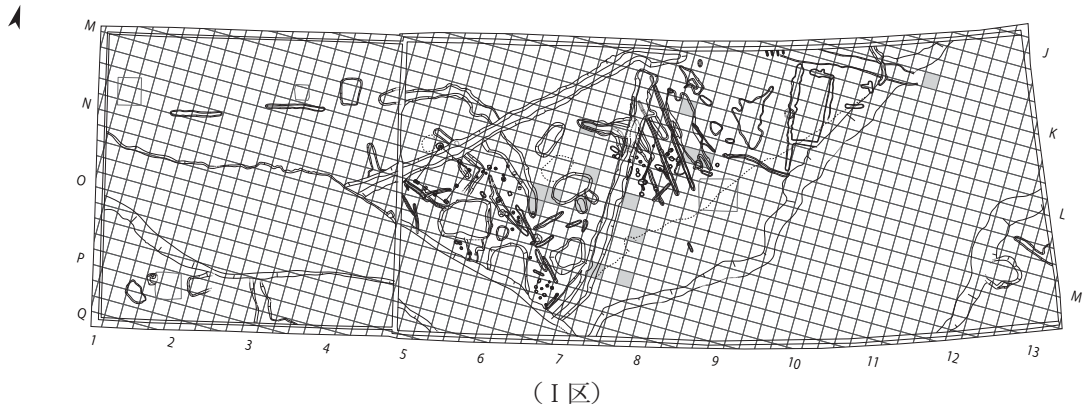


IV層包含層・第1確認面検出遺構出土

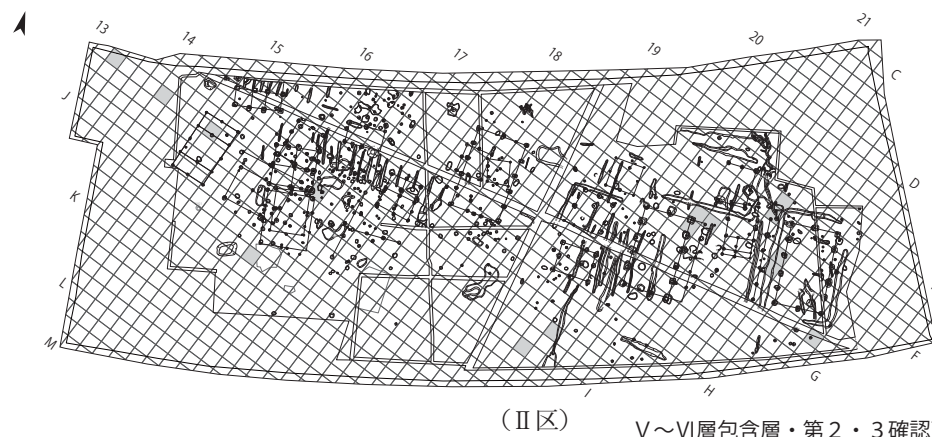
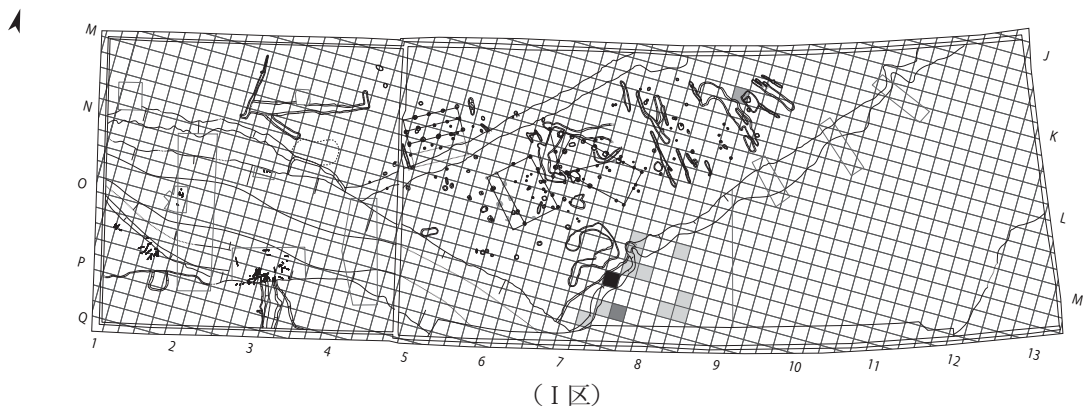


V~VI層包含層・第2・3確認面検出遺構出土

第15図 砥石重量分布図



IV層包含層・第1確認面検出遺構出土



■ 2,001g~
 ■ 1,501-2,000g
 ■ 1,001-1,500g
 ■ 501-1,000g
 ■ 1-500g

V~VI層包含層・第2・3確認面検出遺構出土

第16図 鍛冶関連遺物重量分布図

第2節 弥生・古墳時代

1 概要

弥生時代の遺物では石鏃、古墳時代の遺物では須恵器坏蓋・坏身、土師器器台・壺・坏・高坏・甕・甑が出土した。当該期の遺物はⅡ区で検出された河川SD466を中心に出土しているが、全出土遺物に対する割合は小さい。また古代の遺構からも少量出土しているが、これは重複または近接する河川SD466からの混入と考えられ、河川SD466のほかに古墳時代に帰属する遺構は認められない。

2 各説

(1) 古墳時代前期の土器 (図版150・155～157、図版290・294・295)

Ⅱ区河川出土土器 (1094)

1094は広口の甕である。口縁部から体部までが断片的に残存する資料で、口縁端部は欠損する。河川SD466覆土上面とその直上に当たるⅥ層出土のものが接合した。また同一個体片が同地点より出土している。口縁部は有段状を呈し、段部には半裁竹管による連続刺突文を施す。外面調整は口縁部がナデ、頸部付近はハケメで、体部にはR L縄文が施文される。内面は摩滅しており不明である。器壁は薄く、胎土は黄色味を帯びた浅黄橙色である。東北地方の系譜をもつ土器で古墳時代初頭前後の所産と考えられる。

Ⅱ区遺構出土土器 (1003・1010・1095～1100)

1003は胴張短頸壺で、口縁部が大きく外反する。口縁部は横ナデで、体部外面はヘラミガキ、体部内面はハケ調整と見られるが摩滅しており不鮮明である。SB6 - P369、SB7 - SD389、SX511など古代の遺構から出土しているが、これは重複する古墳時代の河川SD466からの混入によるものと考えられる。1010はSB9 - P553より出土した二重口縁壺である。頸部が外反して立ち上がり、口縁部は直立する。残存部破片には口縁の加飾等は認められない。新潟シンボ編年の6～7期に比定される。1003同様に河川SD466からの混入と考えられる。1095～1100は河川SD466より出土した。1095は小型の器台で、外面は赤彩される。脚部の三方に透孔を持つ。新潟シンボ編年8期前後の所産と考えられる。1096は有段口縁の壺である。内外面ともハケ調整で赤彩はされない。1097は有段口縁壺で、口縁部は長く直立する。外面全体と口縁部内面が赤彩される。内外面ともミガキ調整され、底部内面付近にはヘラケズリと指頭圧痕がみられる。1096・1097とも新潟シンボ編年5期頃に比定される。1098～1100は甕である。1098は受け口状の口縁を呈する。1099・1100は口縁がコの字状を呈し、端部には面を作出する。1099は外面ハケ調整で内面には指頭圧痕が残る。1100は内外面ともハケ調整される。3点とも新潟シンボ編年5～6期の所産と考えられる。

Ⅱ区遺構外出土土器 (1107)

1107は甕で23G 3・4グリッドⅣ層及びⅥ層から出土した。頸部はくの字に折れ、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は丸い。古墳時代前期後半の所産か。

(2) 古墳時代後期の土器 (図版109・124・125・146・155～157、図版262・273・287・293～295)

Ⅰ区遺構出土土器 (337・338・341～343)

337・338はSX1238より出土した。337は土師器甕である。口縁部は外反し、胴部は張らない。外面調整は口縁部が横ナデ、体部は縦ハケである。338は底部を欠くが口縁部がゆるく開く甑と考えられる。内外面ともハケ調整され、輪積痕が残る。337は7世紀第2四半期、338は7世紀第3四半期の所産と考

えられる。341～343は河川SD976より出土した。341は須恵器環G類の坏蓋で、口縁部内面にはカエリが付く。7世紀中葉、TK217～TK46型式に比定される。342は口縁部を欠く須恵器環H類の坏身で、体部外面に蓋受けのカエリが付く。6世紀後半、TK43型式に比定される。343は土師器坏で、口縁部は強く外反する。内面は黒色処理される。7世紀前半の所産と考えられる。

I 区遺構外出土土器 (574・585)

574は小型の土師器甕で、8M8グリッドのV層より出土した。口縁部が短く、くの字に折れて外反する。類例が見当たらず、現時点では詳細な所属時期は不明である。585は土師器甕で、8L25グリッドのVI層より出土した。くの字口縁を呈し、胴部最大径はやや下半に寄る。6世紀後半の所産と考えられる。

II 区遺構出土土器 (1087・1101～1106)

1087はSD975より出土した土師器甕である。胴は張らず、口縁部は短いコの字状を呈する。内外面ともハケ調整で、外面底部付近はヘラケズリされる。1101～1106は河川SD466より出土した。1101は土師器坏で、口縁部は強く外反し端部付近でわずかに内湾する。内面全体が黒色処理され、口縁部は横方向に、体部は放射状にヘラミガキされる。1102は土師器高坏である。坏部の一部と脚部が残存する。裾部は屈折して外に開く。坏部内面は黒色処理される。脚部は内外面ともハケ調整される。1101・1102とも6世紀後半から7世紀前半頃の所産と考えられる。1103～1105は土師器甕で、いずれも胴が張るタイプだが1105は張りが弱い。1103は口縁部が緩やかなコの字状を呈する。調整は外面口縁部が横ナデ、体部が縦方向にハケが入る。内面は口縁部が横ハケで体部はヘラケズリされる。1104は口縁部が直立気味にゆるく外反し、最大径となる。体部は球胴気味である。頸部外面には指頭圧痕が入り、体部外面はハケ調整される。1105はくの字口縁で、端部は緩やかな面を持つ。外面は斜め方向のハケ調整で、内面は口縁部が横ナデ、体部上半は縦ハケで下半がヘラケズリとなる。1106は甕で、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。底部は筒状に抜ける。内外面とも頸部付近をヘラケズリしたのち全面にハケ調整を施す。1087・1103～1106はいずれも7世紀初頭から前半頃の所産と考えられる。

II 区遺構外出土土器 (950・1108)

950・1108は土師器坏である。950は17J25グリッドV層より出土した。口縁部の外反は弱い。内外面とも黒色処理され、横・斜め方向にヘラミガキされる。1108は20H24グリッドVI層より出土した。口縁部が強く外反し、内外面とも黒色処理される。外面は横・斜め方向に、内面は口縁部を横方向、体部を放射状にヘラミガキする。950は6世紀代、1108は7世紀前半の所産と考えられる。

(3) 石製品 (図版186、図版314)

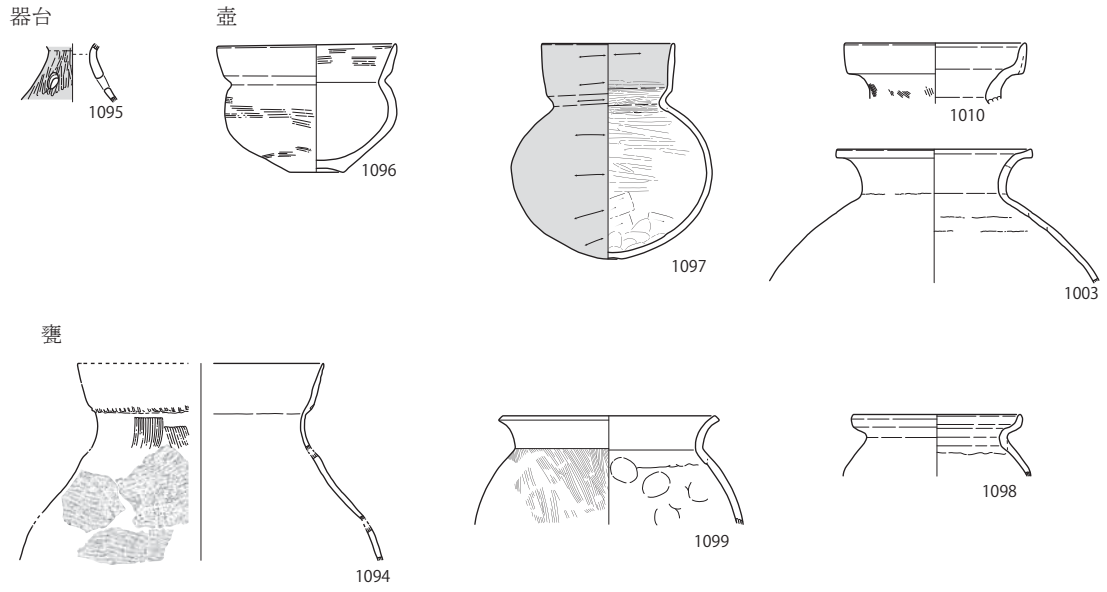
石鏃 (1494)

1494は基部が凹状を呈し茎を有する凹基有茎鏃である。身部両側縁は直線状で、断面形はレンズ状を呈する。石材は珪質頁岩である。形態から、弥生時代に帰属するものと考えられる。なお同形状の石鏃が、本遺跡に近い弥生時代の遺跡であるイブケ入遺跡や上桐神社裏遺跡等で出土している [和島村 1996]。

(4) 木製品 (図版179、図版310)

杭 (1422～1424)

1422～1424は河川SD466出土の杭状の木製品である。いずれも先端が尖った割材を利用したもので、加工を施すものは認められない。

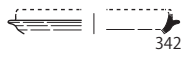


(古墳前期)

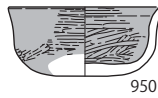
須恵器
坏蓋



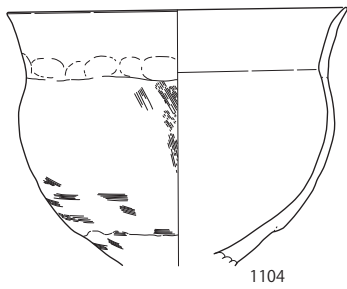
坏身



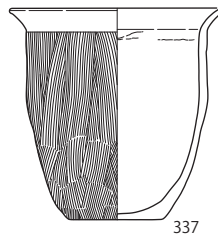
土師器
坏



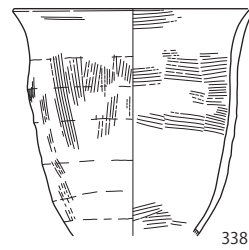
球胴甕



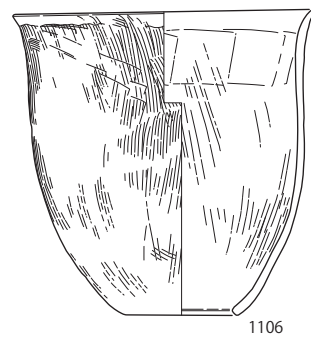
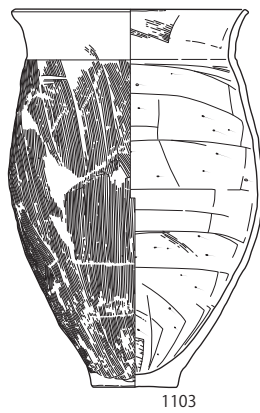
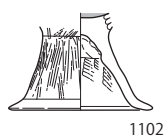
甕



甗



高坏



(古墳後期)

第17図 古墳時代の土器分類図

第3節 平安時代

1 土器

(1) 土器の観察

出土土器の評価や編年的な時期の特定にあたっては、先行研究を参考にしながら土器の観察・分類を行い、所見を作成した。ここでは、観察・分類の際に着目した諸要素のいくつかを挙げる。

A 胎土

土器の胎土は、種別によって以下のとおり分類できる。

須恵器

A群 胎土に石英・長石を多量に含み、器面が粗くざらついているもの。笹神丘陵の窯跡群など阿賀北地域が産地と推定される。

B群 胎土に白色の小粒子を多く含み、器面が滑らかなもの。色調は青灰色のものが多く、器面には焼成時に黒色鉱物が噴出した斑点が見られるものがある。佐渡小泊窯跡群が産地と考えられる。

C群 A群・B群以外のものを一括した。胎土は精良だが5mm前後の大きな長石を少量含む。推定される産地としては、類似した胎土や器形が存在する上越地域、あるいは古志郡内の在地窯の可能性があろう。

土師器

A群 粘土質の胎土で、角が丸い礫が混じるもの。色調は茶褐色～褐色・桃色を呈するもので、長甕や小甕に多い。

B群 粘土質の胎土で、硬質な焼成のもの。白色・黒色を呈するもので、砂を多めに含む。

C群 精良な粘土質の胎土で、軟質の焼成のもの。

D群 精良な粘土質の胎土で、少量の砂や海綿骨針を含む。無台椀の精製品や黒色土器にみられる。

E群 シルト質の胎土で、赤色や白色の粒子を多く含む。礫はほとんど含まない。須恵器製作技法を用いた土師器を中心にみられる。

F群 シルト質の胎土で、多量の砂と礫も含む。E群より粒子が粗いもので、煮炊具に多い。

B 製作技法

切離し技法 製作した生乾きの土器を密着した製作台から切り離す方法として、ヘラ切りと糸切りの技法が存在する。ヘラ切りはロクロ（または回転台）を使う回転ヘラ切り、糸切りは回転糸切りと静止糸切りがある。本書では、両者とも特に断りのない限り「回転」の用語を省略する。本遺跡では、須恵器はヘラ切り、土師器は糸切りが主体的である。ただし、須恵器食膳具の一部には糸切りが定量認められるものもある。切離し技法は技術的系譜の違いを端的に表しており、その系譜を探る上で重要な要素である。出土量の多い食膳具の分類に当たっては特にこの違いを区別するため、「h」＝ヘラ切り、「i」＝糸切りとしてアルファベットを大別名称の後に付した。

C 器壁の厚さ

須恵器食膳具の器壁の厚さは、必ずしも口径（法量）の大小で決まるわけではなく、時代が下るにつれ

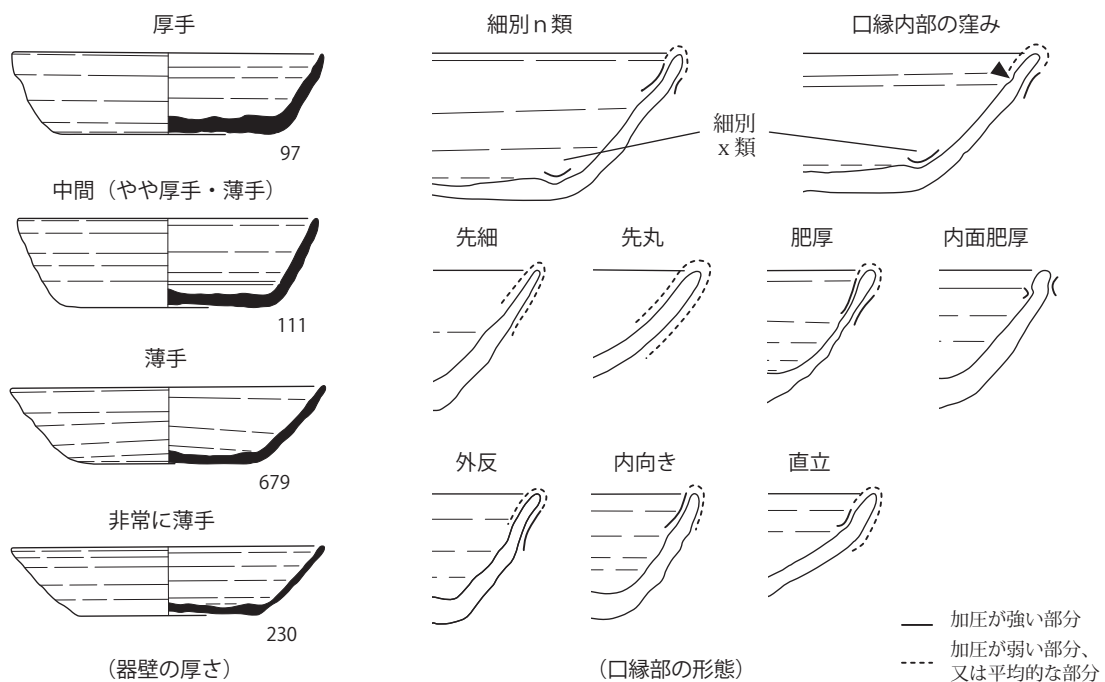
薄手になる傾向が指摘されている [坂井ほか 1991・笹澤 2011]。このため、器壁の厚さがその年代特定の指標になる可能性があると考えられる。ここではB群ヘラ切りで、ロクロ目の凹凸が少ない無台杯の個体を中心に平均的な数値を見ていきたい (第18図)。部位別にみると、底部6～7mm・体部5mm前後の厚手、底部5mm・体部4mm前後の中間的なもの、底部3～4mm・体部3mm前後の薄手、さらに底部・体部ともに3mm未満の非常に薄い作りのもも存在する。ただし器壁の厚さは、①底部が厚く体部から口縁部にかけて次第に薄くなるもの、②各部位がほぼ一定の厚さのもの、③底部に比べ体部から口縁部の厚さが薄いもの、があり一様ではない。しかし、③の逆すなわち底部だけが薄くなるものは確認されないため、底部の厚さから全体の器壁の厚さを推測することも可能であろう。

D ロクロ目の幅

本遺跡の須恵器無台杯では器壁が厚いものはロクロ目が細かく入り、薄いものは太い傾向にあるようである。また、厚手・薄手を問わずロクロナデによる器面調整が丁寧に行われロクロ目が目立たないものもある。一方、土師器無台碗では太いものが多いが、門新遺跡のようなロクロ目が粗く粗雑な調整のものは見られない。一般的にロクロ目が粗いものは土器製作における簡略化・粗雑化に関連すると考えられる。

E 底部と体部の接続

無台杯の見込みには、盛り上がった部分と薄い部分が輪状に巡るものがある。ちょうど底部と体部の接続部分である。これは、成形時に円形の粘土板をつくり、この外周に体部の粘土紐を重ね底部内面外周を強くロクロナデした際の痕跡と考えられている [坂井 1989]。本遺跡では、この輪状の凹凸は薄手のものに特に顕著に認められ、明確に段差として残るもの (72・680など) も存在する。この特徴に着目して細別x類と表記した。



第18図 須恵器無台杯の諸要素

F 口縁部の形態

第18図のように様々な形態があるが、特徴的な2点に注目する。一つ目は、口縁端部を整形する際に指の腹で強く押さえたことにより有段状となり、ナベ形の外観を呈するもので細別n類とした(384・385など)。二つ目は口縁端部が丸くやや肥厚し、内面が窪んで凹線状に巡るものがある。この成因は、成形段階における口縁端部処理の際に内側へ折り返し気味に丸めることで生じるもの、あるいはロクロナデにおける指の押さえ方によるものと考えられる。総体的には窪みが明確なものと単なるロクロ目である場合があるようだが、その区別が難しいため分類項目としては挙げることができなかつた。これら2点の特徴は薄手のものに多く見ることができ、前項で述べた細別x類とした特徴を伴うことが多い。

G 使用痕と転用の諸痕跡

ここでいう使用痕とは、本来の用途として使用されたことによって生じる種々の痕跡のことである。特定部位における器面の摩耗(スレ)や炭化物、ススの付着などがこれにあたる。一方、転用は本来の用途とは異なった使い方をするものであり、観察の結果以下のような痕跡が認められた。

煤・油煙痕 坏・椀類の口縁部に筋状の煤や油煙痕が付着したものが見られる。灯芯が炭化して口縁部に固着したものもある。このように灯芯の燃焼した痕跡が見られるものは「灯明皿」として記載した。また、煮炊具の器面には、過熱したことにより付着した煤・炭化物が認められる。本書では、火を受けて黒く煤けたものを「スス」、内容物が加熱されて炭化したものを「オコゲ」とした。なお、「オコゲ」は基本的に小甕で見られ長甕では見られないため、小甕は煮る道具、長甕は蒸す道具とされている[坂井1989]。

墨痕 坏・椀・蓋などの内面や高台内一面に墨痕が見られる。墨を磨って墨汁をつくる硯と墨汁を取り分けるための墨溜めがあるが、破片資料も多いため本書では一括して転用硯として分類した。

漆膜付着 漆膜が土器外面に付着したものは別に、坏蓋内面を漆パレットとして使用されたものが1点確認された。漆膜には刷毛の痕跡を見ることができる。なお、四柳嘉章氏の指摘により、塗膜が均質で漆を塗布したと考えられるものを「漆塗り須恵器」として区別した(第VI章第6節参照)。

研磨痕 須恵器の割れ口で研磨したような痕跡が見られるものがある。土器の原形を大きく変えるほど研磨されたものではない。刃物を須恵器片で一時的に研いだ可能性がある。

打ち欠き 主に口縁部などを連続的に打ち欠いたものである。残った破片は先の尖った波状となる。打ち欠いた割れ口断面は、土圧で割れたものに比べ鋭角的となることから、人為的な打撃が加えられた可能性が高い。その用途について荒木志伸氏は、祭祀行為に伴うもの、あるいは転用するために必要な調整加工や廃棄処理のための破壊行為など、多様な場面での想定が可能であるとしている[荒木1999]。なお、実測図における打ち欠きの表示は、荒木氏の論稿を参考に、打ち欠きの単位を平面図上に点線で表記した。

(2) 器種分類

器種分類には、従来のとおり形態的特徴と推測される用途を重視した器種名を設定した。大まかな形態や製作技法からさらに分類ができる場合は大別し、出土量が多いものについては法量や身の深さ(径高指数)によってさらに細別を行った(第4表)。法量はローマ数字(I・II…)、径高指数はアラビア数字(1・2…)を用いて、数値の大小によって細別した。基本的に本章での分類表記は、煩雑さを避け大別までとしているが、細別まで言及する場合は大別と細別の間に「-」(ハイフン)を入れ、A h - II 1類などと表すこととする。なお、口縁部の形態による区分も可能ではあるが、多様な形態を有する器種も多く概要を把握し

づらくなると考え、分類名は設定していない。ただし前項Fのとおり特徴的なものについては、それぞれ個別に言及する。

A 須恵器

食膳具と貯蔵具に大別され、食膳具には坏蓋・有台坏・折縁坏・有台碗・無台坏・金属器模倣の鉢があり、貯蔵具には壺蓋・短頸壺・広口壺・長胴短頸壺・小型壺・長頸瓶・甕・横瓶・水瓶・括れ鉢がある。貯蔵具の横瓶以下3器種や金属器模倣の鉢については、祭祀や仏事などでの特殊な用途も想定される。

有台坏 高台を持つ坏。蓋を伴う浅身のA類（坏部径高指数35未満が主体）、口径13～16前後で深身のB類（同35以上主体）、口径10～11cm前後で深身のC類（同35以上主体）がある。A類は坏部径高指数により細分でき、指数が30未満のもの（1）は胎土B群・C群に存在し、同様に30～35となるもの（2）は胎土C群に存在する。B類は口径の大きさにより細分でき、口径13～14cmのもの（I）と15～16cmのもの（II）がある。C類の口径に対応する坏蓋はほとんど見られないことから、基本的にC類は無蓋であった可能性が高い。底部の切り離しは、C類に糸切りがあるほかはヘラ切りである。

坏蓋 有台坏に伴う蓋。有台坏A類やB類の口径に対応し、12～16cm程度に含まれるものが多い。形態的には天井部に平坦面を持つA類、天井部が丸く全体が山笠形となるB類、偏平なC類がある。A・C類はヘラ切り、B類はヘラ切りのほか糸切りでも製作されたと考えられるが、切離し痕跡が不明なものも多いため、技法上の細分は行っていない。

折縁坏 高台を持つ坏で体部は丸く湾曲し、口縁端部が有段状、または折り返されるもの。胎土A群にみられる。

有台碗 体部が丸く湾曲する有台器種。胎土B群のものがある。

無台坏 高台を持たない坏。体部が直線的で箱形・逆台形になるA類、体部が湾曲して丸みを持つB類、底部が丸底風になるC類がある。口径は12cm未満（I）・12～13cm（II）・13cm以上（III）に細別でき、また身の深さも径高指数23未満（1）・23～28未満（2）・28以上（3）に細別できる。いずれもヘラ切りが主体であるが、B群には糸切りのものが定量認められ、本遺跡内において特徴的な一群である。

壺蓋 口縁部が大きく屈曲し、壺の口縁部に被さるものがある。短頸壺の蓋とみられる。

短頸壺 肩の張る体部に短く口縁部が直立するもの。

広口壺 口縁部から頸部にかけて広く開口するもの。

長胴短頸壺 体部に比べ短く口縁部が立ち上がるもの。体部は甕と同様、長胴になると考えられる。

小型壺 体部最大径が10cm程度の小型品を一括した。

長頸瓶 筒形の長い頸部を持つもの。

横瓶 俵形の体部に短い口縁部がつくもの。体部側面の閉塞方法は片側と両側の2通りがある。

水瓶 球形の体部に口径の細い頸部がつくもの。頸部は細く長いものが直立すると考えられる。

鉢 深身の体部に口縁部が短く開くもの。体部側面には2条の沈線が巡ることから金属器模倣と考えられる。

括れ鉢 平底の底部から体部が湾曲しながら立ち上がり、頸部で短く屈曲するもの。

甕 倒卵形の体部で底部は丸底となる。口縁部は、「く」の字状に短く開くものや長く伸びて開くものがある。口径の大きさに比例して容量も大きくなると考えられ、本遺跡では法量により4つに細分され、口径20cm前後をI類、30cm前後をII類、40cm前後をIII類、60cm前後をIV類とする。

B 土師器

食膳具と煮炊具、貯蔵具に大別される。食膳具には無台碗・無台坏・坏蓋・盤があり、煮炊具には甑・長甕・小甕・鍋がある。貯蔵具では壺がある。他に、仏具の可能性のある鉢やミニチュアの短頸壺がある。

無台碗 高台を持たない碗。体部が直線的に開くA類、体部が湾曲して開くB類に大別される。法量は、身の深さにより径高指数28未満・28～35未満・35以上の3区分、口径は12cm未満から20cm以上までの5区分に細分される。A類・B類ともに底部糸切り無調整を主体とした通常品と内外面にミガキを施した一群が認められる。後者には、焼成が堅緻でミガキが入念に施された精製品のほか、外面のミガキが一部にとどまりロクロナデの痕跡が残る半精製品がある。ただ、ミガキを施す無台碗の製作技法は黒色土器無台碗と共通したものであるため、何らかの理由で発色しなかった可能性も考えられる。また、赤色塗彩された無台碗も少数ながら認められる。

無台坏 ヘラ切りの須恵器無台坏と同一技法によって製作されたもの。須恵器のものに比べ径高指数30以上の深身のものが多い。

坏蓋 須恵器坏蓋と同一技法によって製作されたものがある。

有台坏 須恵器技法により製作された、高台を持つ深身の坏形土器。口縁部が欠損しているがコップ形須恵器を想起させるものである〔井上 1994〕。ただし、底部には焼成前に穿孔されており、通常の容器としての機能は想定できず、具体的な用途は不明である。

盤 平底の底部から体部が短く開くもの。底部はヘラ切り痕がみられる。

鉢 平底の底部から湾曲して立ち上がるもの。無台碗に比べ底部は大きい。内外面ミガキが施される。

短頸壺 口径6.8cmのごく小型の短頸壺で須恵器製作技法のものである。

壺 平底を呈する底部が確認された。2次焼成は認められないため、小甕とは異なる。長胴気味で「く」の字状口縁を呈する壺形土器を想定している。輪積成形とロクロ成形がある。

甑 下端部が開き、体部が直立する円筒形のもの。有段口縁の長甕に比べ、一回り厚手の作りである。

小甕 輪積成形のA類、ロクロ成形のB類に大別できる。A類はハケメ調整、B類はロクロナデ・カキメを主体とし、底部糸切りを主体とする。またB類のうち、ハケメ調整を用いる西古志型も少数存在する。口径は、10～12cm（Ⅰ）、12～15cm（Ⅱ）、15cm以上（Ⅲ）の3つに細分できる。

長甕 小甕の分類を適用可能で、本遺跡ではB類のみ確認された。体部をタタキ成形しカキメやロクロナデを施した須恵器技法を用いるものや体部をハケメ調整する西古志型甕も少数存在する。いずれも丸底になると考えられる。口径は17cm未満（Ⅰ）、17～22cm（Ⅱ）、22cm以上（Ⅲ）の3つに細分できる。

鍋 長甕と同様に、本遺跡ではB類のみ確認された。体部の張り出しと頸部の括れ具合に違いがある。また、口径は30cm未満（Ⅰ）、30～40cm（Ⅱ）、40cm以上（Ⅲ）の3つに細分できる。

C 黒色土器

食膳具の無台碗・有台碗・有台皿・高盤があり、内面はミガキと黒色処理が施されている。

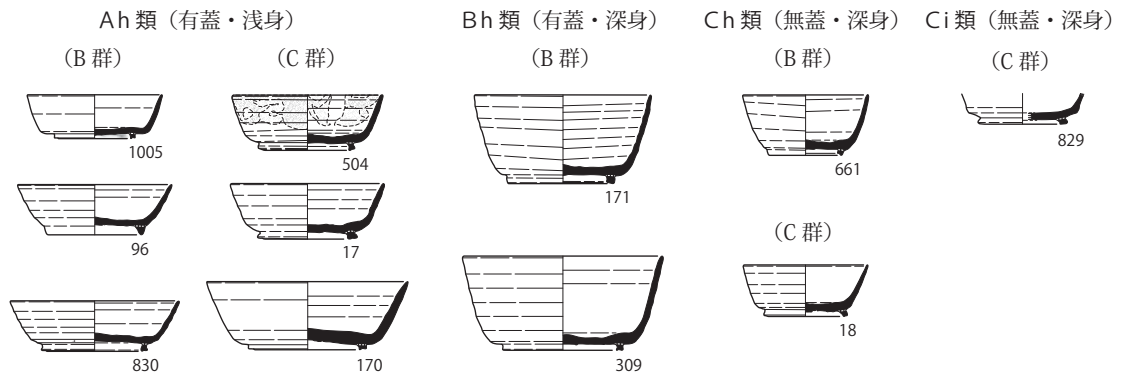
無台碗 高台を持たない碗。外面赤彩のものもある。器形は体部が直線的に開くA類、体部が湾曲して開くB類に大別できる。法量は土師器無台碗の口径分布と同様であるが、深身のタイプが中心となる。

有台碗 高台をもつ碗。口径12cm未満である。高台は貼り付けられている。

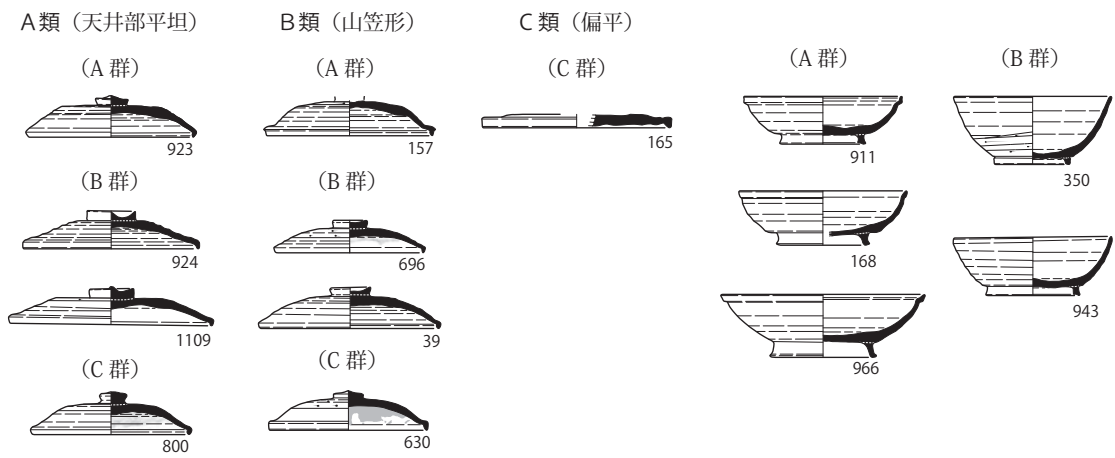
有台皿 高台をもつ皿。口径11～12cm、器高3cm前後である。高台は貼り付けられている。

高盤 浅身の盤に脚部が接続するもの。

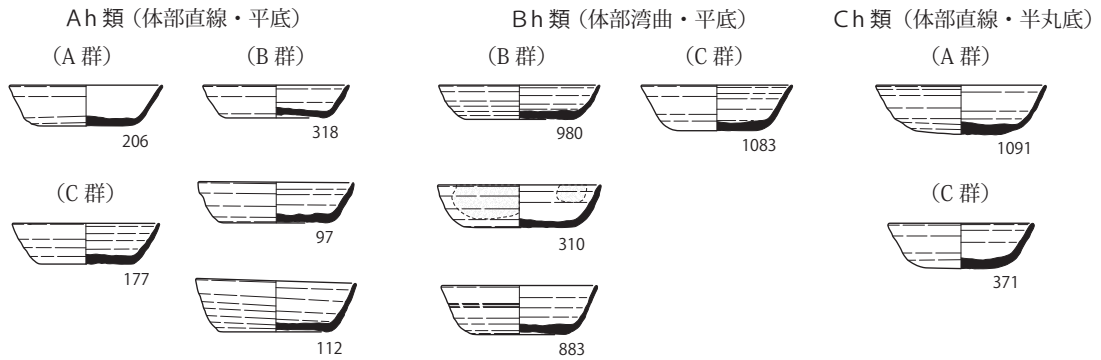
有台坏



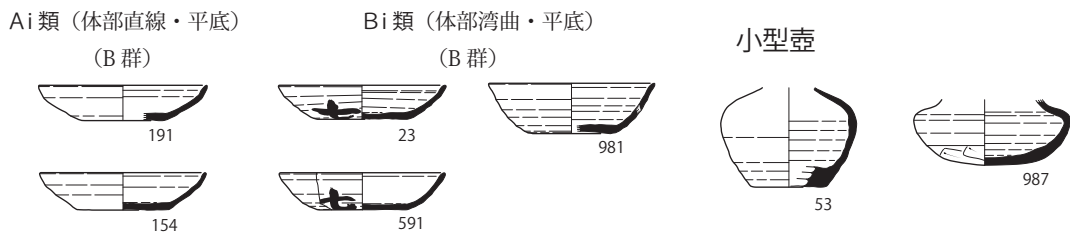
坏蓋



無台坏

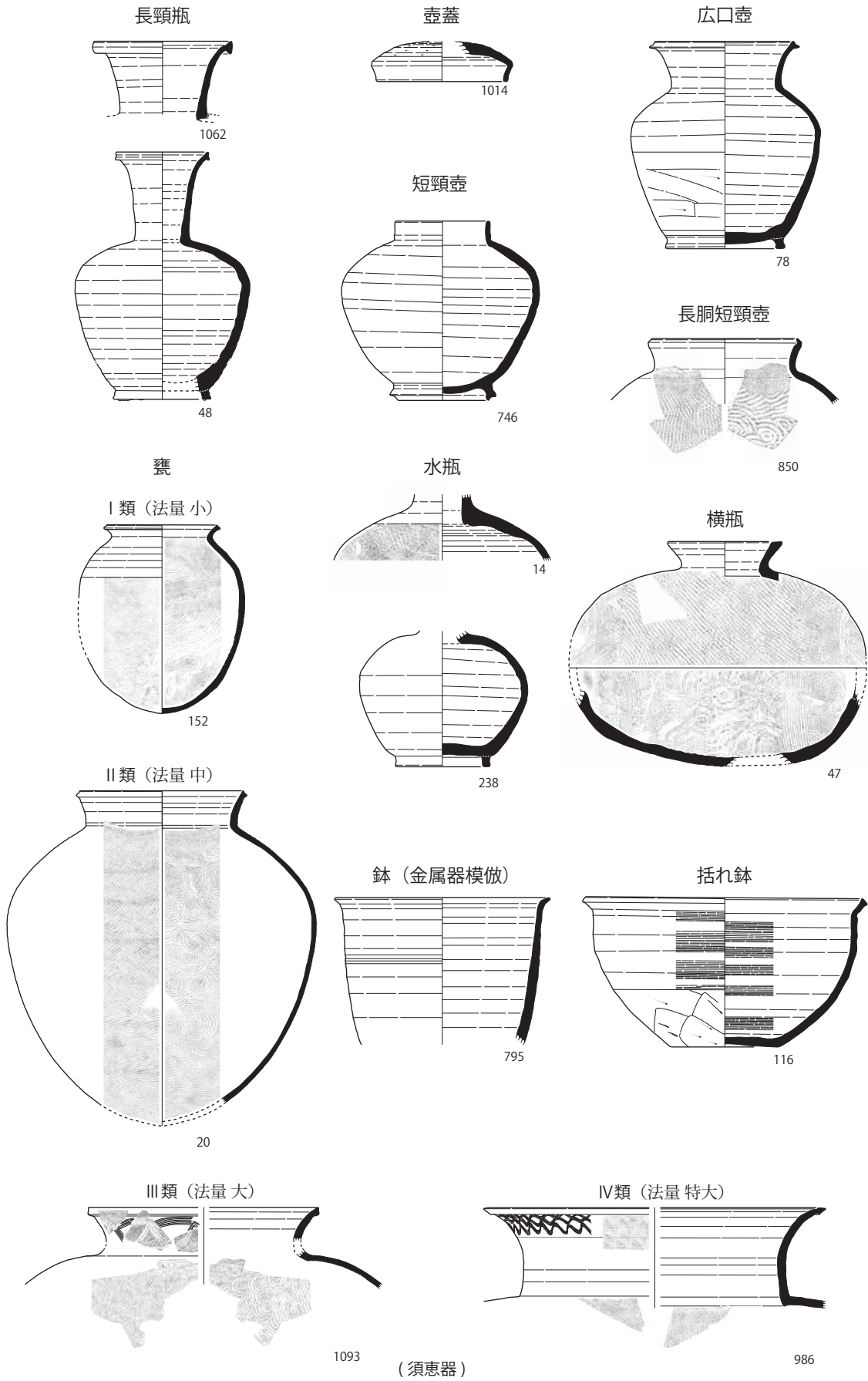


無台坏



(須恵器)

第19図 器種分類図(1)



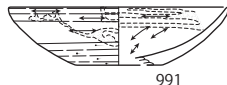
第20図 器種分類図(2)

無台椀

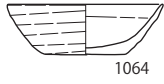
Ai類 (体部直線)



441



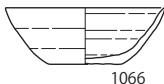
991



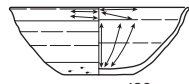
1064



437

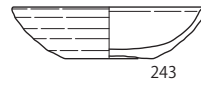


1066

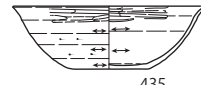


438

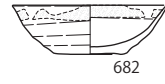
Bi類 (体部湾曲)



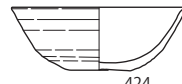
243



435

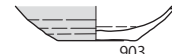


682



424

(赤彩)



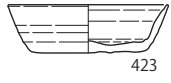
903

無台坏

A類 (体部直線)



691

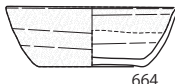


423

B類 (体部湾曲)



665



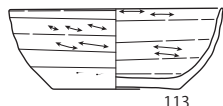
664

盤



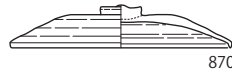
868

鉢



113

坏蓋



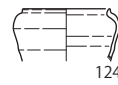
870

有台坏



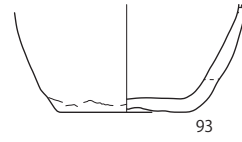
246

短頸壺



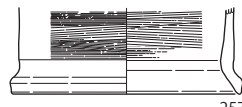
124

壺



93

甌

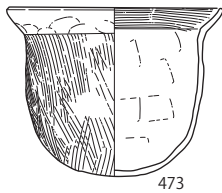


257

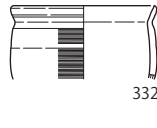
小甕

A類 (輪積成形)

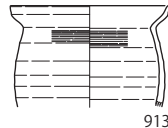
B類 (ロクロ成形)



473



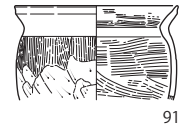
332



913



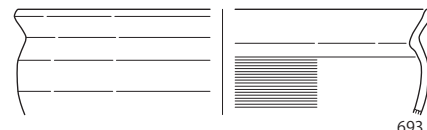
468



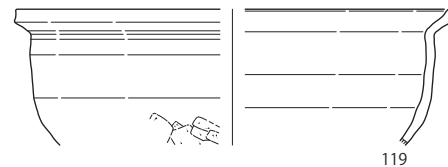
91

鍋

B類 (ロクロ成形)



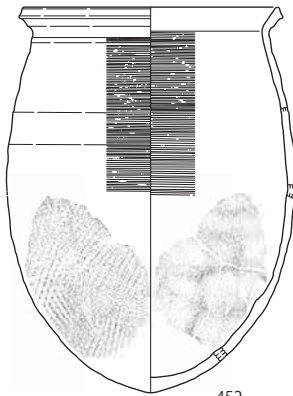
693



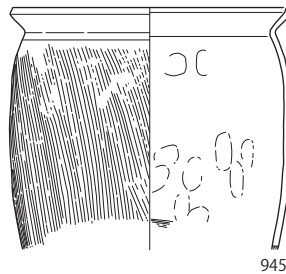
119

長甕

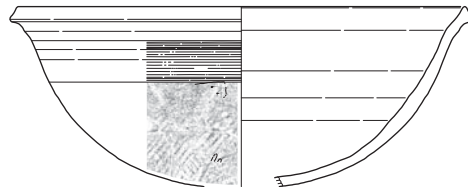
B類 (ロクロ成形)



452



945



910

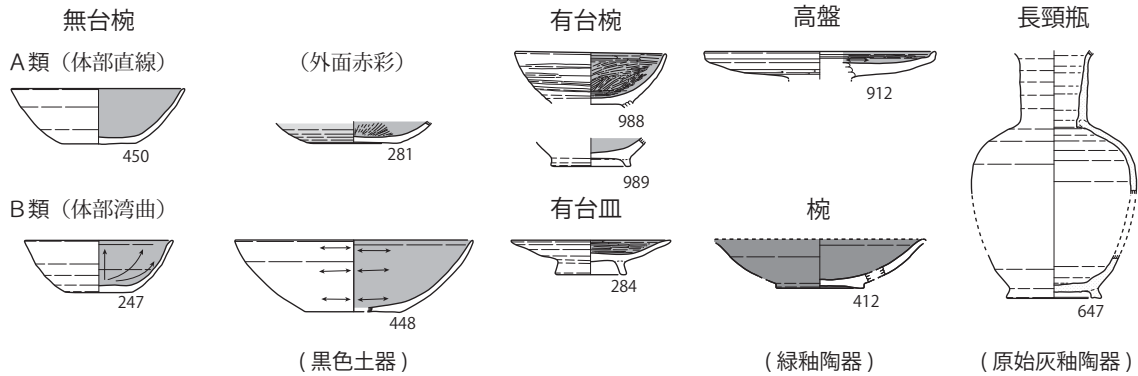
(土師器)

第21図 器種分類図(3)

D 施釉陶器

緑釉陶器(椀) 削り出し高台の椀。産地は京都産と考えられる。

原始灰釉陶器(長頸瓶) 自然降灰を利用した原始灰釉といわれる長頸瓶である。



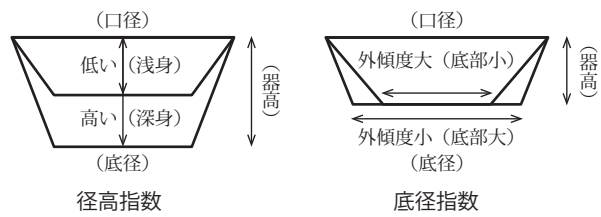
第22図 器種分類図(4)

種別・器種	大別	細別	その他細別	技法		
須恵器	有台環	A 浅身(有蓋、坏部径高指数35未満)	1 坏部径高指数30未満 2 坏部径高指数30~35	-		
		B 深身(有蓋、坏部径高指数35以上)	I 口径13~14cm前後 II 口径15~16cm前後			
			C 深身(無蓋、坏部径高指数35以上)			I 口径10~11cm前後
	無台環	A 体部直線、平底	1 径高指数23未満 2 径高指数23~28 3 径高指数28以上	見込み周縁に輪状の凹線(x) 口縁部有段状・ナベ形(n)		
		B 体部湾曲、平底	I 口径12cm未満 II 口径12~13cm III 口径13cm以上			
		C 体部直線、半丸底	I 口径12~13cm II 口径13cm以上			
	坏蓋	A 天井部平坦	I 口径14cm未満	-		
		B 天井部丸い、山笠形	II 口径14~16cm			
		C 扁平	III 口径16cm以上			
	甕		I 口径20cm前後	-		
			II 口径30cm前後			
			III 口径40cm前後			
			IV 口径60cm前後			
	土師器	無台椀	A 体部直線	1 径高指数28未満 2 径高指数28~35 3 径高指数35以上		内外面ミガキ(精製・半精製) ミガキなし(通常) 外面赤彩
B 体部湾曲				I 口径12cm未満 II 口径12~13cm III 口径13~15cm IV 口径15~18cm V 口径20cm以上		
				A 体部直線	1 径高指数23未満 2 径高指数23~28 3 径高指数28以上	
B 体部湾曲			I 口径10~12cm II 口径12~15cm III 口径15cm以上			
			小甕	A 輪積成形、ハケメ・ケズリ	I 口径10~12cm II 口径12~15cm III 口径15cm以上	
長甕		B ロクロ成形、ロクロナデ、カキメ			I 口径17cm未満 II 口径17~22cm III 口径22cm以上	
			鍋	I 口径30cm未満 II 口径30~40cm III 口径40cm以上	-	
						無台椀

第4表 土器分類基準表

(3) 記述の方法

古代土器の記載については、調査区別・遺構別・層位別に記述し、種別ごとに分類した大別を文中に示した。食膳具については、径高指数・底径指数（小数点以下、切り捨ての値）を必要に応じて記載し、全体的な器形把握の目安とした。例えば、それぞれの土器が同じ口径の場合、径高指数の値が高いほど身が深く、底径指



第23図 径高指数・底径指数

数の値が高いほど底径も大きいことから体部の傾き（外傾度）が小さいことを表す。また、同地点で同種のものが多い場合、個々の説明は省き概要を示した。各部位の計測値や調整法などは巻末の遺物観察表を参照いただきたい。土器の胎土については生産地を想定して須恵器のみ記載した。胎土B群が大多数を占めるため特に断りのない限り、B群を指すものとする。土器の編年の位置付けは、第七章第1節2で設定した編年区分（1～7段階）を用いて記述する。

(4) I区出土土器各説

A I区第1確認面（V層）遺構出土（図版90～98、図版250～255）

S B 24（1～9）

1～5は柱穴P1017、6はP1046からの出土である。1・2は須恵器無台坏A h類である。1は口径12.2cm、2は13.8cmで、底径指数はともに70以上を示し、体部は逆台形状となる。3は土師器無台碗A i類、4はB i類である。3は口径17.2cmと大型である。底部の厚さは1cmと厚めで体部は直線的に開き口縁端部は上方へひきだす。内面見込み付近にミガキがみられる。4は口径15.8cm、径高指数35・底径指数45を示し、やや深身である。5は土師器小甕B類である。口縁部が短く開き体部は張らない。口縁端部はつまみ上げ内傾する。7は周溝SD1007、8・9はSD1031からの出土である。8は須恵器有台坏、7は長頸瓶とみられる瓶類、9は横瓶で胎土A群の可能性はある。

P1017は他の柱穴と比べても出土遺物が多いため、切り合いのあるSD1015からの混入も考えられ、1～3は3段階、4・5は新しく6段階頃に位置付けられよう。

P 1055（10）

10は須恵器無台坏である。底部外面に墨書がみられる。

P 1057（11・12）

11は須恵器坏蓋A類の転用硯である。胎土はC群である。12は土師器小甕B類である。口径13.0cmを測り、口縁部が短く開く。

P 1138（13）

13は須恵器有台坏で、幅の狭い高台が平坦な底部に貼り付けられている。時期は2～3段階であろう。

P 1133（14）

14は水瓶である。体部外面はタタキ成形の痕跡が微かに残る。産地は不明である。

S K 1019（15・16）

15・16は須恵器無台坏B h類である。いずれも口径12cm前後で、径高指数24・底径指数55を示し、体部は外傾する。本資料は6段階（新）に位置付けられる。

S K 1038 (17~21)

17は須恵器有台坏A h類、18は有台坏C h類で、ともに胎土C群である。18の底部外面には「×」とヘラ書きされる。19は須恵器無台坏で底部外面に「#」と墨書される。20は須恵器甕で口径28.0cmを測る。21は土師器長甕B類で口径18.0cmを測り、口縁端部に面をとる。本資料は2~3段階頃と考えられる。

S K 1039 (22~25)

22・23は須恵器無台坏である。22はA h類で、口径12.3cm、器高2.9cmを測る。薄手で直線的に体部が開く。23はB i類で碗形を呈する。口径13.0cm、器高2.7cmを測り、底部から体部にかけて「七」の墨書が記される。口縁部内面には凹線状の窪みがみられる。24・25は須恵器瓶類の破片で、長頸瓶と考えられる。本資料は6段階(新)に位置付けられる。

S K 1059 (26)

26は須恵器無台坏の底部片で糸切り痕がみられる。薄手の作りで、底径7.0cmを測る。23同様に「七」の墨書が記される。6段階頃のものであろうか。

S K 1064 (27~30)

27は須恵器坏蓋A類の転用碗である。口径14.9cmを測り、平坦な天井部に環状の紐が付く。端部のカエリはやや丸みを帯びる。28~30は須恵器無台坏B h類である。いずれも口径12cm台、器高3cm前後で、薄手の碗形を呈する。本資料は6段階(新)に位置付けられる。

S D 977 (31~33)

31は須恵器無台坏A h類である。口径11.7cm、器高3.2cmを測り、体部が直線的に開く。32は須恵器瓶類の頸部片である。外面に墨書がみられる。33は土師器無台碗A i類である。口径11.4cm、径高指数31・底径指数47で底部は小さく、体部は直線的に開く。

S D 978 (34~37)

34は須恵器坏蓋A類である。口径15.2cmを測り、扁平な体部に鏝状を呈する口縁部となる。端部のカエリはやや丸い。35・36は須恵器無台坏A h類である。35は口径12.8cm、器高3.3cmを測り厚手で箱形に近く、36は口径11.6cm、器高3.2cmを測り薄手で逆台形を呈する。37は黒色土器無台碗である。口径約16.2cmを測り、薄手である。

S D 979西 (38)

38は須恵器無台坏B i類である。口径13.5cm、器高3.1cmと法量が大きく、体部が湾曲して開く。23同様に底部から体部にかけて「七」と墨書される。

S D 982 (39~52)

39は須恵器坏蓋B類、40は坏蓋A類である。ともに口径14~15cmで、紐の中央がやや窪むボタン状・環状を呈する。41~46は須恵器無台坏A h類である。42の底部の厚さが5mm前後とやや厚手であるほかは3~4mmほどと薄い。41~45は、口径12cm前後で径高指数24~27・底径指数65前後が中心となる。43は底部から体部にかけて外面にススが付着する。44は口縁端部の内面がやや窪み凹線状に巡る。46は径高指数22・底径指数58を示し、他のものに比べ浅身で口縁部の開きが大きい。底部の屈曲部はやや丸みを帯び、ロクロ目の幅は広くナデは斉一である。47は横瓶で胎土A群である。湾曲した俵形の体部に逆ハの字形の口縁部が付く。体部はタタキ成形、カキメを施し、内面には両側面を閉塞した痕跡が見られる。体部肩部外面には「大」の刻書がある。48は須恵器長頸瓶である。口径9.4cmで、頸部は細く締まり口縁部にかけてやや広がる。体部は肩が張り、高台は外側に広がる。焼成は堅い。

49は土師器無台坏A h類である。底部にヘラ切り痕がみられ、須恵器技法による製作である。口径11.6cm、器高3.7cmで径高指数31・底径指数63を示し、深身の逆台形となる。50は無台椀B i類である。口径12.2cm、器高4.0cmで径高指数32・底径指数49を示す深身の椀である。外面全体がススに覆われる。51は土師器鍋B類で口径27.7cmを測る。口縁部は短く開き、端部は上下に拡張する。体部は肩が張らずそのまま丸底となるものである。52は須恵器括れ鉢である。胎土C群で口径36.4cmの大型品である。短く直立した口縁部に丸く湾曲した体部となり、外面はタタキ成形ののちカキメを全体に施す。体部の内面はロクロを使用しないハケメ、口縁部はカキメである。

本資料は、概ね4段階に位置付けられる。

S D 1006 (53~55)

53は須恵器小型壺で体部に比べ底部の器壁はかなり厚い。54は須恵器無台坏B類である。55は無台坏B h類で、口径12.6cm、器高2.8cmを測り、非常に薄手で体部の開きが大きい。底部側縁は丸い。

本資料は6段階（古）に位置付けられる。

S D 1014 (56~58)

56は須恵器坏蓋A類である。口径14.0cmで口縁端部は丸く潰れる。57は須恵器無台坏B h類である。口径11.5cm、器高2.7cmで底部は丸みを帯びる。58は土師器長甕B類で、口径19.6cmを測り有段状の口縁部をもつ。本資料は6段階（古）に位置付けられる。

S D 1015 (59・60)

59は須恵器無台坏A h類で胎土C群である。口径12.4cm、器高3.5cmで、底径指数75を示す箱形で、底部外面にはヘラ書きの刻書が見られる。60は土師器鍋B類、口径43.2cmを測り口縁部が短く開く。

S D 1020 (61~63)

61・62は須恵器無台坏である。ともに底径7.6cmで、薄手である。62の底部外面には墨書がみられる。63は須恵器坏蓋A類である。口径14.6cmを測り、平坦な天井部は広く、やや長めのカエリが付く。外面に墨書がみられる。内面は硯に転用されている。

S D 1018 (64)

64は須恵器無台坏B h類で口径11.7cm、器高2.9cmを測り、浅い椀形を呈する。本資料は5段階頃に位置付けられる。

S D 1021 (65~76)

65~67は須恵器有台坏の底部片である。65は高台が丸く潰れている。66はC類、67はB類と推測される。68~74は須恵器無台坏である。68~72はA h類、73・74はB h類である。口径12cm台、13cm台の法量があり、径高指数22~25・底径指数57~63を示し、体部が開く。いずれも細別x類の要素がみられる。73・74は浅身で底部が丸く口縁部が有段状になる細別n類である。75は須恵器甕の体部片である。76は土師器鍋B類で、断面三角形の口縁部が短く開くものである。本資料は6段階（新）に位置付けられる。

S D 1024 (77・78)

77は須恵器短頸壺である。口径12.1cmを測り、口縁部が短く直立する。78は須恵器広口壺である。口径14.3cm、器高21.4cmを測る。口縁部は罅状に拡張し、ゆるく湾曲しながら体部へ至り、大きく膨らむ。

S D 1022 (79・80)

79は須恵器無台坏B h類である。口径12.5cm、器高3.3cmで径高指数26・底径指数64を示し、逆台形状となる。80は土師器小甕B類である。口径13.6cmを測り、口縁部はくの字に屈曲する。本資料は3段

階頃に位置付けられる。

SD 1027 (81~84)

81は須恵器長頸瓶の体部破片である。底径12.4cm、体部が張らないものである。82~84は須恵器無台坏 B h 類である。いずれも口径12cm台で、径高指数24・27・底径指数54~58を示し、83は深身のものである。84は体部外面に記号状の墨書がみられる。本資料は概ね5~6段階と考えられる。

SD 1033 (85)

85は土師器無台碗 B i 類である。口径12.5cm、器高3.7cmで径高指数29・底径指数34を示し、底部がかなり小さい。本資料は7段階相当のものと考えられる。

SD 1037 (西・東含む) (86~120)

86は須恵器有台坏 A h 類で、胎土 C 群である。口径11.3cm、坏部径高指数35を示し、A 類の中ではやや深身のものである。高台は幅が狭く、内端接地である。87は須恵器横瓶である。口縁端部はわずかに上方へつまみ上げる。88は須恵器瓶類の体部破片とみられ、外面に漆が付着する。89は須恵器甕である。口縁部と底部を欠損する。内外面にはタタキやカキメ、当て具痕が明瞭に残る。90は土師器長甕 B 類である。口径20.2cmを測り、内外面にロクロナデとカキメが残る。91・92は土師器小甕 B 類で、ともに口径12.8cmを測り、口縁部内面にはオコゲが付着する。91は西古志型甕で内外面ハケメ調整、体部下半はケズリ、口縁部はナデとなる。93は土師器壺である。底径10.8cmを測り、底部は平底で輪積み成形されている。

94は須恵器有台坏で高台径6.7cmを測る。95は有台坏 B h 類、口径14.3cmを測る大ぶりなものである。96は有台坏 A h 類で、口径12.2cm、坏部径高指数27を示す。底部にヘラ切り痕を残し、高台は断面三角形で面を持たない。

97~112、117・118は須恵器無台坏である。97~99・102~105・109~112・117・118は A h 類、100・101は B h 類である。全体的に器形は箱形、あるいは逆台形のものが多い。器壁の厚さは、底部が厚くなる個体があるものの、4~6mmほどが主体である。97~100・109~112は箱形器形に近く、口径12cm前後、器高3cm前後を測る。底径指数は63~73を示し、口径に比して底径が大きい割合を示す。109~112は径高指数26~32と総体的に深身のタイプとなる。101~105・117は底径指数53~66で体部の傾きが大きめとなる。101は口径12.6cm、底径6.7cmと底径指数は小さいが、底部が7mmほどやや厚い作りである。前面にススが付着する。111はやや薄手の作りで口縁部が直線的に長くのびる。底面には漆が付着する。112は111と同様の器形であるが、さらに深手で厚手の作りである。底面には「山□」の墨書が微かに認められる。

113は土師器鉢で、口径16.8cmを測る大型品である。外面、口縁部内面にススが付着し、ロクロナデのちヘラケズリを施す。土師器では本遺跡で唯一の鉢形である。114は土師器小甕 B 類で、口径12.1cmを測り、内傾する口縁部の内外面にスス・オコゲが付着する。やや薄手の作りである。115は土師器長甕 B 類である。口径20.1cmを測り、口縁部は面をもって短く開く。116は須恵器括れ鉢である。口径28.4cm、器高15.4cmを測り、ロクロナデ・カキメのち、底部側縁付近にヘラケズリを施す。119は土師器鍋 B 類で、口径34.3cmを測る。外面底部付近はヘラケズリを行い、内外面にはススが付着する。体部は張り出さず口縁部が最大径となる。120は土師器長甕 B 類で、くの字の口縁部を呈し端部を僅かにつまむ。

本遺構の出土土器は、概ね2~3段階と考えているが、101~105・111・117はやや薄手のもので、底径指数が小さくなることから新しい要素とみて4段階(古)までを含む可能性がある。

SD 1216 (121)

121は土師器無台坏である。口径12.8cmを測り、底部側縁は丸みを帯びる、口縁部が直線的に伸びる。

SD1219 (122)

122は土師器長甕B類の体部片である。外面には平行タタキがみられる。

SD1049 (123~126)

123は有台坏C h類である。口径10.9cm、器高4.5cmを測る。体部は薄手で直線的に体部が開き、高台は内向する。底部側縁は丸みを帯びる。124は小型の土師器短頸壺で、口径6.8cmである。125・126は土師器長甕B類である。ともに口径16cm台で、前者は口縁部がゆるく開き端部に面をもつもの、後者は口縁部が短く屈曲して、端部が丸くなるものである。

SX984 (127)

127は須恵器坏蓋A類の転用硯である。口径は14.0cmである。

SX985 (128~135)

128~133は須恵器無台坏である。128・132・133はB h類、129~131はA h類である。法量は口径11~13cm台のものがある。128・132は体部が丸みを帯び口縁部が開くもの、129・131は底部側縁の稜があり体部が直線的に伸びるもので、いずれも大・小の法量がある。130は径高指数18と非常に浅く、皿状を呈する。133は口径12.8cm、径高指数21を示す浅身で、底部側縁が丸くなる。口縁部は有段状になる細別n類である。134は底径5.8cmを測る土師器無台碗でB i類と考えられる底部片である。本資料は概ね6段階（新）に位置付けられる。

SX1066 (136・137)

136は須恵器無台坏A hである。口径11.9cm、器高3.3cm、やや深身で逆台形状となる。137は土師器小甕B類で、口径14.8cmを測り口縁部は有段状となる。本資料は2~3段階頃に位置付けられる。

SX1072 (138~140)

138は須恵器坏蓋A類である。口径15.9cmを測る大型品で、口縁端部のカエリはシャープである。139・140は土師器無台碗A類で底部はケズリで再調整される。139は口径12.1cmを測り、口縁端部は尖り気味で、身は浅い。本資料は2~3段階に位置付けられる。

SX1241 (141・142)

141は須恵器無台坏A h類である。口径11.9cmを測り薄手である。径高指数26・底径指数68を示し逆台形状となる。142は同じくA h類である。口径11.6cmを測る。径高指数29・底径指数70を示し、体部は急角度で立ち上がる。本資料は3段階頃に位置付けられる。

SX1240 (143~151)

143は土師器鍋B類である。口径41.4cmを測る。口縁部は短く開き、浅身で丸底になると考えられる。体部下半はタタキ整形となる。144~149は須恵器無台坏A類である。144~148は口径11~12cmでやや浅身、薄手である。149は口径13cmほどで深身、やや厚手である。150・151は無台坏B h類である。口径12cm前後で薄手、碗形傾向にある。151の口縁端部は外反する。無台坏では細別x類の要素をもつものが多い。本資料は6段階に位置付けられる。

I区包含層・SK1083ほか (152)

152は須恵器甕である。口径18.8cm、器高32.3cmを測る。体部下半は外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕があり、頸部から口縁部はロクロナデがみられる。本資料はSK1083のほか、SD1037・河川SD976など8K~N・9Kグリッドに存在する遺構や包含層から出土しており、その同一個体破片は広範囲に散っていた。

B I 区Ⅱ～Ⅳ層出土（図版98～104、図版255～259）

Ⅱ層（153・154）

153は須恵器坏蓋A類である。環状の紐を持ち、口縁部は打ち欠きされる。内面にヘラ記号「×」がみられる。154は須恵器無台坏A i類である。口径13.0cm、器高3.0cmとやや浅身で体部は直線的に外へ開き、口縁端部は上方へ立ち上がる。本資料は6段階頃のものと考えられる。

Ⅳ層（156～261）

156～166は須恵器坏蓋である。156は坏蓋B類で、胎土C群である。天井部外面はケズリが施される。157は坏蓋B類で胎土A群、道婦窯産と考えられる。口径13.2cmを測る。天井部は湾曲し、カエリはシャープである。158～164は坏蓋A類である。口径は161・163が13cm台、その他は14cm台である。158のカエリはやや丸みを帯び、159では垂直に作りだしている。160～163・166のカエリは小さく、内側を向き潰れ気味のものが多い。また164の紐は大型の環状である。165は胎土C群の坏蓋で口径14.8cmを測る扁平なものである。161・162・165・166は硯に転用され、164は口縁に連続的な打ち欠きがみられる。

167は口縁部に重ね焼き痕がみられることから有台坏と考えられ、口縁端部をつまみ上げる。168は体部が湾曲して立ち上がる折縁坏で、胎土A群・道婦窯産と考えられる。口径13.2cmを測り、口縁部は肥厚して端部をつまみ上げは鈍い。高台はやや高めである。坏蓋157と168は近接した位置から出土し、口径が同サイズであることからセットをなす可能性がある。

169～176は須恵器有台坏である。169は有台坏A h類で、胎土C群である。口径12.3cm、器高3.8cmを測る。高台は外向きである。170は同じくA h類、胎土C群で、口径15.9cm、器高5.4cmを測る大型品である。高台は低く内端接地である。本資料のみ8世紀第3四半紀頃と考えられる。171・172は有台坏B h類で、171は口径13.9cmで厚手、172は口径12.8cmで薄手である。173～176は有台坏C h類でいずれも口径10cmほどである。173・175は体部が直立し口縁部がやや開くもの、174・176は体部が開くものである。

177～224は須恵器無台坏である。口径は12cm台が多いが11cm・13cm台も存在し、浅身で底部が小さく体部の外傾度が大きいものが多い。177～187は無台坏A h類である。177は胎土C群である。口径11.5cm、器高3.3cmを測り、器高はB群のものに類似する。178～185は口径12cm台、器高2.9～3.6cmを測り、深身で逆台形状を呈するもので、径高指数24～29・底径指数60～67を示す。186・187は、底径指数55前後で、底部が小さく体部が直線的に開くものである。182・185～187は細別x類である。188・189は無台坏B h類で、どちらも細別x類である。190は無台坏B i類・191は無台坏A i類である。

192～212・222～224も同じく無台坏A h類である。192・193は厚手、これ以外は比較的薄手で細別x類のものも多い。192～194・199～201・206は器高3cm以上、径高指数25～27・底径指数61～71を示し、深身・箱形器形に近い。195・196・222は径高指数23～25・底径指数65～70を示し、前者と比べ相対的に浅身となる。197・198は器高3cm未満のもので、浅身で体部の外傾度が大きい。202・203・224は薄手、逆台形状となるもので、径高指数23～24・底径指数63～67である。204・205は口径11cm前半台の小法量のものである。204は薄手で箱形、205は底部が小さく体部が直線的に開くものである。206は胎土A群で道婦窯産と考えられる。207～212は薄手で底部が小さく体部が開くものである。このうち211・212は浅身のものである。207・208・210・223は底部側縁が丸みを帯びる。210・223は口径13cm台と大法量である。

213は無台坏C類で、胎土C群である。口径11.8cmを測る。

214～221は無台坏B h類で、口径12cm台が多い。214・215は器高3.2cmを測る深身で、径高指数26を示す。底部側縁が丸く体部は湾曲して立ち上がる。216～219は底径指数55～61を示す。220・221は

前者に比べ底径が小さいもので底径指数50～53を示す。222には底部外面に漆、223・224にはススが付着している。225～231は墨書土器でいずれも須恵器無台坏である。225「文」、226「仲」、227「田庄」、230「大」、231「七」など河川SD976出土墨書土器と共通した内容をもっている。

232～238は須恵器瓶類である。232は提瓶で口径5.1cmを測る。233・234は小型の瓶類の口縁部・体部である。233は胎土A群で直立した小型瓶類の口縁部、234は長頸瓶と考えられる体部片である。235・236は長頸瓶と考えられるやや大型の体部・底部片である。237は口径11.4cmを測り、頸部が広口の長頸瓶である。238は水瓶である。体部は低く丸みを帯び、頸部は細く締まる。口縁部は欠損している。239は須恵器甕Ⅲ類で口径38.8cmを測る大型品である。頸部には櫛描波状文がみられる。240・241は加工円板である。タタキ成形をした須恵器貯蔵具の破片を2cmほどに打ち欠いたもので、破断面には研磨痕がみられる。

242～244は土師器無台碗である。242はA類で口径12.5cmを測る。浅身で底部は大きい。243はB類で口径15.2cmを測る。浅身で底部は小さい。244はB類で口径11.6cmを測る。深身で底部は小さい。

245は緑釉陶器の破片である。胎土は淡黄色で軟質である。246は土師器有台坏である。高台径5.4cmを測り、須恵器技法で製作されたもので、形態はコップ形を呈する。ただし、底部は焼成前穿孔されており、その用途は不明である。247・248は黒色土器である。247は無台碗B類で口径11.7cm、器高4.2cmを測る深身のもので、内面・底部外面はミガキが施される。248は有台皿で高台は低い。

249～252は土師器長甕B類である。249は口径23.0cmを測り、口縁部が短く開き、体部に最大径をおくものである。口縁端部は上方・外方につまみ上げられる。250～252は口縁部が短く開き最大径となるものである。250は口縁端部をつまみ上げ、251・252は面をもつものである。253～255は土師器小甕B類である。いずれも口径14cm台で、ロクロナデのみの調整である。

256は土師器小甕A類である。口縁部は短く開き底部は丸底となる。ハケメ調整は確認されない。257は甑と考えられる。底径18.0cmを測り、内外面にカキメが施される。

258～261は土師器鍋B類である。いずれも口縁端部をつまみ上げる。258は口径41.5cmを測り、やや薄手である。259は口径36.8cmを測り、体部下半にはタタキ成形の痕跡がみられる。260・261は口径40cm台で、体部にケズリ調整がされている。

本資料は時期幅があり、3～6段階頃のものと考えられる。

C I区第2確認面（Ⅵ層）遺構出土（図版104～109、図版259～262）

S B 25（262～288）

262～266は柱穴からの出土である。262はP1090出土の須恵器有台坏である。高台径は6.6cmでC類と考えられる。263はP1094出土の須恵器坏蓋である。カエリは潰れており、端部が肥厚する程度である。264はP1091掘方から出土した精製品の土師器無台碗である。口径18.9cmを測る大型品で、器壁が薄く仕上げられている。265・266はP1093出土の須恵器無台坏・土師器長甕である。265はやや厚手の作りで体部は湾曲気味である。266はB類で口縁部が上方へつまみ上げられる。

267～288は周溝SD1078出土である。267～277は須恵器無台坏である。267・270・273・274は須恵器無台坏A h類、268・269・272・276・277はB h類、271・275は欠損のため不明である。口径は270が13.1cm、そのほかは12cm台以下である。272・273・277は器高3cm以上、径高指数25以上の深身で、そのほかは器高3cm未満、径高指数25未満の浅身となる。いずれも薄作りで、272・276・277などは底部側縁が丸みを帯びる。269は口縁部内外面にススが付着する灯明皿である。底部は6.5cmと小さく、口

縁端部は内側からの加圧で内湾気味となる。270は内面に墨痕、底部外面には墨書が微かに見える。271は転用碗で内面には墨痕がある。272は外面の体部から底部にかけて記号様の墨書が記される。273は細別x類で、口縁部が直線的に開く。底部外面に墨書がある。274は比較的浅身で、口縁部が直線的に開く。器厚は1.5～3mmほどと非常に薄い作りである。底部外面に「中」と墨書される。275は糸切りの底部片で、器壁は6mmと厚手である。体部外面に墨書（七カ）が記される。276は口縁部がナベ形となる細別n類で、体部外面に記号墨書が見える。277では「×」の墨書が体部外面に見える。278は須恵器瓶類で体部から底部が残存する。長頸瓶と考えられ、やや丸みを帯びた器形である。279は須恵器横瓶の体部破片で、胎土C群である。平行タタキと同心円状の当て具痕が明瞭に残る。

280は土師器無台碗B i類である。小さな底部から体部が折れ気味に開く。口縁部の内外面にはススが付着し、灯明皿として使用されている。281・282は黒色土器無台碗である。281の外面は赤彩が施される。283は高台貼付け部分が残存することから有台皿と考えられる。284は有台皿である。口径12.2cmで体部はほぼ直線的に開く。高台は高めである。黒色土器はいずれもミガキで丁寧に仕上げられている。

285～287は土師器長甕B類である。285・286の口縁部は短く開き、端部は僅かにつまむ。287は須恵器技法による薄手の作りで、タタキと当て具痕が明瞭に残る。288は土師器鍋B類である。口縁部は短く開き、体部はボウル状を呈すると考えられる。

本遺構出土土器は269が7段階、276が6段階（古）に近い要素を含むが、概ね6段階（新）に位置付けられる。

S B 26 (289)

289はP1106出土の須恵器無台坏である。口縁部は薄手の作りで、外傾度が大きい。底部側縁は丸くなると考えられる。6段階頃の遺物であろう。

P 1199 (290)

290は土師器小甕B類である。口径13.0cmを測り口縁部は短く開き、上方へつまみ上げられる。

P 1124 (291)

291は須恵器無台坏A h類である。口径12.9cmと大きい。径高指数24・底径指数71を示し、扁平・箱形に近い器形である。本資料は2段階に位置付けられる。

P 1211 (292)

292は須恵器坏蓋A類である。内面には墨痕がみられ、転用碗と考えられる。

S K 1083 (293～301)

293は須恵器坏蓋B類で、胎土C群である。口径13.0cmを測る。小さいボタン状の紐が付き、大きく屈曲するカエリが内向きに伸びる。294～299は須恵器無台坏である。297はB h類、そのほかはA h類である。294・295・297・298は口径12cm前後を測り、器高3.2～3.5cmの深身で立ち上がり角度が急な逆台形状を呈する。297の底部外面には小さく細い文字で「九」と墨書される。296・299は口径12.5cm前後の大法量で、器高3cm以下の浅身のものである。300は土師器長甕B類である。口径18.2cmを測り、口縁部は短く開いて端部をつまみ上げる。301は土師器小甕A類で口径13.0cmを測る。口縁部は短く開き、端部は丸みを帯びる。内外面ハケメ調整である。本資料は3段階に位置付けられる。

S K 1136 (302・303)

302は須恵器有台坏B h類である。口径14.3cm、器高7.0cmを測る。底部側縁は丸みを帯び、高台は細く外端接地である。303は無台坏の底部片で、体部外面には墨書が一文字分みられる。

S D 1080 (304)

304は須恵器有台坏でA h類であろう。高台は細く低いもので、内側を向く。2段階頃のものであろう。

S D 1082 (305)

305は須恵器無台坏B h類である。口径11.6cmの小型品でやや厚手の作りである。径高指数25・底径指数64を示す。本資料は3段階のものである。

S D 1085 (306~330)

306は須恵器环蓋B類で、胎土C群である。擬宝珠形の紐を持ち、天井部はケズリを施し、口縁部は全周を打ち欠きされている。307~309は須恵器有台坏で、307・308はC h類、309はB h類である。307は口径9.5cm、口縁部は直立する。308はやや薄手で、口径10.1cm、底部周辺はケズリによって明瞭な稜をもつ。高台は丁寧な作りでやや内向きである。309は口径15.8cmを測る大型品で平坦な底部に体部が直立する。

310~320は須恵器無台坏である。310は無台坏B h類、口径12.9cmの大型品で径高指数26・底径指数69を示し、体部の立ち上がりは急である。311~313はA h類で口径12cm台、器高3.2cm以上を測り、深身で逆台形状を呈する。314は同じくA h類、相対的に小ぶりで口径11.7cm、器高3.0cmの浅身である。315は無台坏B h類、器高2.9cmの浅身で箱形の器形である。316・317は口径12cm台、器高3.4~3.6cmの深身で逆台形状を呈する。318~320は無台坏A h類である。口径11cm台で箱形の318は浅身、319は相対的に深い。320は口径12.9cmの大型品でやや深く、逆台形状を呈する。

321~326は土師器長甕B類である。口径は326が28.8cmを測るほかは、20cm前後である。327~330は小甕B類である。いずれも口径は13cm前後である。口縁部形態・調整技法は長甕・小甕で共通し、321・322・324、327・328は口縁端部をつまみ上げ尖らせるものである。326・329では端部が長くなる。調整はロクロナデ・カキメのものが多い。323は口縁端部を面取りし、内外面ハケメ調整となる西古志型甕に類似する。本資料は2~3段階に位置付けられる。

S D 1098 (331)

331は須恵器無台坏の底部片である。薄手で見込み周縁を凹線状の窪みが巡る。「×」と墨書される。

S D 1126 (332・333)

332は土師器小甕B類である。口径11.2cmで、口縁部は僅かに開き端部がつまみ上げられる。333は黒色土器有台皿である。やや湾曲して開く坏部に小さな高台が付く。口径11.6cm、器高2.9cmを測る。

S D 1226 (334)

334は土師器鍋B類である。口径36.4cmを測る。僅かに開く口縁部は三角形状となり、体部はカキメの後、ケズリが施される。

S X 1077 (335・336)

335は土師器小甕B類で、全面ロクロナデである。くの字状口縁で、体部は球形に張りだす。336は土師器長甕B類である。口径17.9cmを測る。口縁部はくの字状となり、体部外面にはハケメがみられる。

S X 1238 (339・340)

339・340は須恵器瓶類の体部片で、長頸瓶と考えられる。339は底部が小さく高台は外方へ張り出す。340はやや長めの体部で高台は低く下方を向く。

D I 区河川出土 (図版109~123、図版262~272)

河川S D 976 (344~559)

344～346は須恵器坏蓋A類である。いずれも口径14cm前後で環状の紐が付く。344は天井部に螺旋状に巡るヘラ状の工具痕がみられる。345は口縁部が細かい単位で打ち欠きされる。346は無台坏を逆さにしたような形状を呈する。大型の紐と潰れたカエリをもつ。天井部内面にはヘラ記号「×」が施される。

347～349は須恵器有台坏である。347は有台坏C類である。口径9.5cm、器高5.0cmを測り、口縁部は直線的に伸びる。高台は内向きとなる。348・349は、須恵器有台坏B類である。ともに口径13cm前後、器高7cm前後を測り、体部は丸みをもって立ち上がる。口縁端部は僅かに外側へ反る。高台端部は鈍い。

350は須恵器有台碗である。体部下半の外側はロクロケズリされる。口径12.4cm、器高5.4cmを測り、細身で低い高台がつく。

351～370・399～404・411は須恵器無台坏A h類で、口径12cm前後を測る。351は口径11.8cm、器高3.8cmで深身・箱形を呈する。径高指数32・底径指数67を示し厚手の作りである。352～358・360・362～370・399～404・411は相対的に中間的な身の深さのもので径高指数23～27、底径指数54～69を示す。366～368など底部が小さく体部が大きく外傾するものもある。359・361は浅身のもので、径高指数19～21、底径指数65～66を示し、体部は直線的に開く。353は胎土A群で平坦な底部から直線的に体部が開く。365・367・368は細別n類、369はx類である。401は内外面にスス・タールが付着し、口縁端部に炭化した灯芯の痕跡が3か所ほど確認される。402はほぼ全面にススが付着する。411は口縁部が打ち欠きされている。

371は須恵器無台坏C h類で底部は丸みを帯びる。酸化焰焼成で赤味掛った色調を呈する。

372～374・377～398・408～410は須恵器無台坏B h類である。口径は12cm台が多いが、11cm台や13cm台も定量存在する。379・390～392・395～398・408～410は相対的に身が浅く径高指数21～23を示す。体部の傾きは底径指数51～63となり、碗形に開く。器壁は3mm前後の薄手が多い。372～374・377・378・380～389・393・394は相対的に身が深いもので径高指数24～27を示す。373は底部で厚さ6mmほどを測る厚手の作りである。碗形の体部で口縁部は上方へ立ち上がる。377・405は立ち上がり急で箱形を呈する。374・391・408は口縁部が外反する。384・385は底部側縁が丸みを帯び口縁部が有段状を呈する細別n類である。細別x類が多く認められる。n類・x類ともナデの幅は広い。

412は緑釉陶器碗である。削り出し高台の京都産と考えられる軟質、黄灰色の胎土で、釉調は褐色味の強い濃緑色である。

413は須恵器短頸壺である。口径9.4cmを測り、外面には自然釉が認められる。414は須恵器長頸瓶である。頸部は細く締まり口縁部にかけて大きく広がる。415は須恵器瓶類の高台部分である。内面には逆位に「オ」の字状のヘラ書きがみられる。416～419は須恵器横瓶である。416は体部に漆が付着する。

420～422は須恵器甕である。420は酸化焰焼成のため浅黄～黄灰色を呈す。外面底部付近は使用によるスレがみられる。いずれも外面には平行タタキ、内面には同心円状の当て具痕が明瞭に残る。421は口径24.8cmのI類である。口縁部は連続的に打ち欠きされている。422は胎土A群で自然釉が肩部に掛る。

423は土師器無台坏A h類である。須恵器技法によって製作され、底部外面には板状圧痕が残る。口径12.5cm、器高3.8cmを測り、箱形・深身の器形である。

424～447は土師器無台碗である。424～427・431・434～437・440・442～444・446はB類、428～430・432・433・438・439・441・445・447はA類である。424は口径13.8cm、器高5.0cmを測り、やや深身で底部が小さいものである。425～427は口径12.0cm未満の小型品で、底径は5～6cm前後である。428～433・447は口径13cm前後を測り、底部が5cm台の小さいもので、径高指数29～34、底径指数は431が34、ほかは40前後となる。434は口径13.4cm、器高3.8cmを測り、ほかのものに比べ身が浅い。435

～438・442・443は精製・半精製品である。口径は15～17cm、20～21cmの2法量がある。435・436は内外面に横方向のミガキを施す精製品である。435は器壁も薄く軽い仕上がりである。437は、外面の口縁部・底部付近と内面にミガキを施す半精製品である。底部外面にはススが付着する。438は底径指数38を示す深身の作りである。内外面に横と縦方向のミガキが認められる半精製品である。442は内外面に横方向のミガキを施した精製品で、薄手の作りである。443は半精製品、口径20.4cmを測る大型のものである。内外面にススが付着する。439はやや厚手の作りで口径15.5cmを測る深身の椀である。440は低い高台状の小さな底部がつく椀である。441は口径14.7cmを測る大型品で口縁部が直線的に開く。器形は無台坏に近い。444～447は口縁部を中心にススが付着する灯明皿である。口径12～13cmを測り、底部は5.0～6.7cmまでである。

448～450は黒色土器無台椀である。448はB類で口径18.7cm、器高5.7cmを測り、底部外面にもミガキを施す。449は底径5.6cmを測る。底部側縁は丸く、内外面にミガキを施す。450はA類で、口径13.7cm、器高4.4cmを測り、体部は直線的に外へ開く。底部糸切りである。

451は土師器壺である。底径7.8cmを測り、底部は平坦で静止糸切りである。

452～459は土師器長甕B類である。口径は18～23cm台がある。452は体部上半にロクロナデやカキメ、下半にタタキと当て具痕が残る。外面はススが非常に厚く付着する。453はつまみ上げた口縁端部がやや内側を向く。454～456は口縁端部を上方につまみ上げ、面を持つ。457はロクロナデの後、体部外面に縦方向のハケメ、内面に横方向のハケメを施す西古志型甕である。458は口縁部内面に横方向のハケメが残る。口縁端部は面を持たず丸く仕上がる。459はタタキが鮮明に残る体部片である。

460～473は土師器小甕で、口径10～16cm台までである。460～472はB類、473はA類である。概ね内外面にはススが付着する。460はくの字状の口縁部の先端をつまみ上げ、内傾し、内面にオコゲが厚く付着する。462は薄い作りで、口縁端部が内折する。463・467は口縁先端を内傾させる。463の内部にはオコゲが付着する。464は口縁端部を上方に引き出し体部が張らない。465はくの字状の口縁部の先端を上方につまみ上げる。466・468は口縁の段部が不明瞭で端部が丸くなるものである。469～472は平底で糸切り無調整のものである。470の底部内面には炭化物塊が付着する。473は内湾気味に開く口縁部に丸底の体部が付く輪積成形の小甕A類である。体部外面は縦方向、口縁部内面は横方向のハケメ調整である。形態と製作技法は佐渡型甕に類似する。出土状況から、須恵器無台坏357・542とともに、一括して廃棄された可能性が高い。類例は、門新遺跡外割田地区SD07出土土器(報告No.22)に見ることができる[田中1996]。

474～480は土師器鍋B類である。474～476・479・480は口縁部が短く開くもので、口径30cm台と40cm以上のものがある。480は体部にタタキ成形の痕跡がみられ、丸底となる。477・478は口縁部がほとんど括れないもので、口径40cm台である。

481～502は転用硯である。481～490・500～502は須恵器坏蓋A類に分類されるもので、いずれも内面を利用している。485・488が口径14cm台、482・483・489～491が口径14cm未満である。紐は上面中央が窪んだ環状のものが多く、カエリの先端が内側を向くものや丸くつぶれるものが多い。また、482は内面に墨痕と重なり漆が付着する。485は内面にヘラ記号「×」がある。また、表面の風化により墨痕が確認できない部分がある。487・491は口縁部が打ち欠きされる。492～496は須恵器有台坏で内面や底部外面を利用したものである。492・495はB h類で496はC h類に分類される。495は口径13.5cm、器高5.6cmを測り、底部側縁が丸みを帯びるものである。高台はためて低い。496は口径10.3cm、器高5.1cmを測り体部が直線的に広がるものである。497～499は須恵器無台坏の転用硯である。墨溜めの用途で使用されたと考えられる。およそ口径12cm、器高3cmを測り薄手で、底径が小さく体部が開くものである。

500～502は墨書がみられる坏蓋の転用硯である。500は口径15.1cmを測り、偏平な体部に環状の紐がつく。カエリの先端は内側を向く。501・502はカエリが丸くつぶれるもので、口径14cm前後である。501は外面に「足」、502は口縁部と紐が打ち欠きされ、外面に「仲」が墨書される。

503～559は墨書土器である。503は須恵器小型瓶類で、底部付近に打ち欠きが行われ、わずかに体部と高台が残存する。体部外面と底部外面に墨書がある。文字ではなく記号あるいは文様であると考えられる。504は須恵器有台坏A類、胎土C群である。底部外面に「入」とある。口径11.8cm、器高4.4cmを測り、やや深身の坏部に内端接地する高台が付く。内外面にススが付着し灯明皿に転用されている。505～508は有台坏B類である。いずれも口径13cm前後、器高6cmほどである。505は薄手の作りで底部側縁が丸みを帯びる。底部外面には「仲成」とある。506・507は体部片で、外面にそれぞれ「大」、「奉」と記される。508の体部外面には「氷」と記される。薄手の作りで体部が湾曲気味に開く。509～527・531～559は須恵器無台坏である。509・515・516・519・532・534・539・541～543・551・553・554はB類、510～512・531・533・536・544～546・555～558はA類、他は欠損し未分類である。口径12cm台が多く、11cm台、13cm台が少数ある。薄手で底部側縁が丸く、細別x類となるものが多い。509は厚手の作りで、口縁部が長めに直立する。体部外面には連続的に縦線を引いた墨書が認められる。510は体部外面に「×」、「木□」がある。511は薄手の作りで、底部と体部の境に凹線が巡る。体部外面に「×」と記す。512は深身の無台坏である。口縁部が打ち欠きされ、体部外面にはススが付着し「↓」と墨書される。513・514は非常に薄手の作りで、体部外面に「七」、「床」とある。516～518はBi類である。517の体部外面に「七」と墨書する。516・518も「七」と考えられる。515も同様に椀形であることから、「七」であろうか。519は口径12.1cm、器高3.0cmを測る薄手の作りで、底部がやや丸みを帯びる細別x類である。体部外面の対角線上2か所に「五」と墨書される。523は底部外面に文字が記されるが、釈文は不明である。524～526は底部外面に「仲」と記す。531～559は比較的薄手の作りで体部が外へ開くものが多い。細別x類も多くみられる。531「山」、532「大」、534「方」、535「本」、536「前」、544「田」、553「太」、554「仲」など一字墨書が多くみられる。また、541～543など記号様のものもある。545～548は二文字で「田庄」とある。555・556・559には、「文」が記号化したようなものがある。

須恵器以外の墨書土器では、黒色土器・土師器がある。528は黒色土器碗で、内面は丁寧なミガキ調整が施される。外面は「七」、「七」、「□」と記す。529は土師器無台碗である。小型の底部は糸切りで、見込に墨書がみられる。530は土師器長甕B類の頸部片である。外面に人の目を表現したような墨書が認められる。

本資料は2～7段階までのものが認められ、そのうち6段階のものが多数を占める。

河川S D981 (561～566)

561～563は須恵器無台坏Ah類である。561は口径12.2cmを測り、やや深身で立ち上がりが急なものである。562は口径13.2cmを測る大型品である。浅身で体部の外傾度が大きい。薄手で細別x類となる。563は厚手の作りで体部は丸みを帯びて開く。564は土師器無台碗B類である。口径16.2cmと大型で底部付近はヘラケズリで再調整される。565は土師器長甕B類で、内外面にハケメがみられる。566は土師器小甕B類である。前面ロクロナデ調整とみられる。

E I区V～VI層出土(図版124・125、図版273)

V層 (575～584)

575・576は須恵器坏蓋A類である。いずれも環状の紐を持ち、内面に墨痕の残る転用硯である。575

は口縁端部を全周打ち欠きする。577～581は須恵器無台坏である。577・579はA h類、578・581はB h類である。577は口径12.8cmを測り、箱形の器形である。578は口径12.2cmを測り、浅身の椀形を呈し、細別x類である。579・580は底部外面に墨書がみられるが、内容は不明である。581はやや厚手の作りで体部は逆台形状を呈する。底部外面には「長」と墨書される。口縁部は打ち欠きが見られる。

582は土師器無台椀B i類である。口径13.0cm、径高指数26・底径指数43を示し、底部は口径に比して小さく、体部の外傾度は大きい。583・584は土師器小甕である。583はB類で器壁は厚く、口縁部が短く開いて体部は球形状となる。584はくの字状に口縁部が屈曲し面をとる。

本資料は3～6段階頃のものと考えられる。

VI層 (586～596)

586は須恵器坏蓋A類である。口径14.4cmを測り、口縁端部のカエリは丸く潰れている。内面に墨痕が残る転用硯である。587～591は須恵器無台坏である。587はA h類で、口径12.0cm、器高3.5cmの深身・箱形の器形である。588～590はB h類である。588・590は口径12cm前後、器高3cm前後のものである。590の底部外面には漆が付着する。589は底径指数が52と数値が低く体部の外傾度が大きいもので、細別x類である。591はB i類である。口径13.0cm、器高3.0cmの整った椀形で底部側縁周辺に「七」と墨書される。592は土師器無台椀で底径5.4cmを測る。593・594は黒色土器である。594は有台皿で284よりやや深身で口縁部の反りが強いものである。595・596は土師器長甕B類である。595はくの字口縁の面取りされたものである。596は全面ロクロナデのもので、口縁部は有段状となり上方へつまみ上げられる。

本資料は3～6段階頃のものと考えられる。

(5) II区出土土器各説

A II区第1確認面 (V層) 遺構出土 (図版126～138、図版274～282)

S B 1 (597・598)

597・598は周溝SD1出土の須恵器無台坏である。いずれも口径12cm台である。597はB h類である。浅身のもので、体部は外傾して開く。598はA h類で、深身、体部は逆台形状を呈する。本資料は4段階(新)に位置付けられる。

S B 3 (599)

599はP176出土の土師器鍋B類である。口径22.3cmを測る。口縁部はゆるやかに屈曲して開き、口径と体部径がほぼ同じ大きさとなる。

S B 5 (600～602)

600はP180出土の須恵器無台坏A h類である。口径12.2cm、器高3.3cmを測る。深身で体部は逆台形状を呈する。601はP206出土の須恵器無台坏で、非常に薄手の作りである。602はP209出土の須恵器有台坏B h類である。口径14.2cm、器高6.3cmを測る。高台は低く内端接地である。602は3段階頃に位置付けられよう。

S B 6 (603・604)

603はP361、604はP365出土の須恵器無台坏である。604はA h類で、口径は13.7cm、器高2.9cmと大きく浅身である。

P 72 (605～607)

605・606は須恵器無台坏A h類である。605は口径12.4cm、器高3.5cmを測る深身のもので、立ち上

がりは急である。底部外面はケズリが施される。606は口径12.5cm、器高3.2cmを測り、逆台形状を呈する。薄手の作りで、底部側縁はやや丸みを帯びる。607は須恵器甕の体部片で、胎土C群である。

P 90 (608)

608は須恵器坏蓋で内面に墨痕が残り、転用硯と考えられる。

P 116 (609~612)

609は須恵器坏蓋で、偏平な紐である。610は胎土A群、道婦窯産の須恵器折縁坏と考えられる。高台径6.8cmを測り、脚が長いもので端部は内端接地である。坏部内面は墨痕が認められ硯に転用されている。611は須恵器有台坏で、口縁部は薄く長く伸びる。612は土師器小甕B類である。口縁部が短く開く。

P 120 (613~616)

613~615は須恵器無台坏A h類である。613は相対的に深身で底部が小さいもの、614は底部が大きく、体部が立ち上がるものである。615は口径13.2cmと大法量で、体部が立ち上がり口縁部が短く外反する。616は土師器鍋B類で、口縁部は鐙状に屈曲し端部は丸い。4段階（古）頃と考えられる。

P 159 (617)

617は土師器鍋B類である。口径46.0cmを測る。口縁部は短く開き、端部はつまみ上げられる。

P 137 (618)

618は須恵器坏蓋である。薄手で小さなカエリが付く。硯に転用されている。

P 150 (619)

619は須恵器無台坏A h類である。器高3.2cmのやや深身で、逆台形状を呈する薄手の作りである。本資料は4段階（新）に位置付けられよう。

P 148 (620)

620は土師器長甕B類である。口径18.6cmを測り、有段状の口縁で端部をつまみ上げる。

P 162 (621)

621は須恵器坏蓋である。口縁端部のカエリが明瞭に作りだされている。内面には墨痕がみられる。

P 167 (622)

622は須恵器有台坏B類である。口径16.4cmを測り、薄手の作りである。

P 178 (623・624)

623は須恵器有台坏C類である。口径10.0cmを測り、器高は4.3cmと低めである。底部は平坦に仕上げられ、底部側縁は明瞭な稜線がみられる。体部は開き気味に立ち上がる。624は土師器無台碗で外面は赤彩される。底径7.5cmを測り、体部は大きく開く。口径も大きなものになると考えられる。

本資料は3段階頃のものと考えられる。

P 179 (625~627)

625は須恵器有台坏B h類である。底部は平坦に仕上げられ、高台は太いものが付く。626は須恵器無台坏B h類である。口径12.1cmで体部は箱形を呈する。627は須恵器無台坏A h類である。口径11.6cmで体部は逆台形状となる。いずれも器面の凹凸はほとんどない。本資料は2~3段階頃と考えられる。

P 201 (628)

628は須恵器有台坏B h類である。口径13.8cmを測り、高台は内端接地する。3段階と考えられる。

P 204 (629)

629は土師器長甕B類である。口径19.2cmを測り、口縁部はくの字に開く。

P 205 (630~634)

630・631は須恵器坏蓋B類である。630は胎土C群で、口径12.4cmを測り、偏平な擬宝珠形の紐が付く。内面には漆が一面に付着している。漆パレットとして利用されており、一部には刷毛で伸ばした痕跡がみられる。631は口径15.3cmを測る。カエリが明瞭に作られている。632は須恵器有台坏B類である。薄手の作りで口径15.0cmを測り、底部付近は丸みを帯びる。633・634は須恵器無台坏である。633は厚手の底部片で、底径7.0cmを測る。634は無台坏A h類である。口径11.7cmを測る。体部は逆台形状を呈し、口縁端部は上方に立ち上がる。本資料は3段階頃と考えられる。

P 240 (635)

635は土師器鍋B類である。口径33.9cmを測り、口縁部は面を持ち短く開く。

P 251 (636)

636は須恵器無台坏で、底径7.8cmを測る。口縁部は連続的に打ち欠きされる。

P 349 (637)

637は須恵器無台坏A h類である。口径12.2cm、器高2.6cm、径高指数21を測る。浅身で体部が直線的に開くものである。

P 388 (638)

638は須恵器有台坏B h類である。口径11.8cmを測り、体部は湾曲しながら直立する。

P 422 (639・640)

639は須恵器有台坏である。底径8.6cmでB類と考えられる。底部外面は「千」と墨書され、その後に転用硯として利用されている。底部外面の表面には摩耗がみられる。640は須恵器無台坏A h類である。口径11.4cmを測る小法量で、深身のものである。径高指数27・底径指数65を示し、逆台形状を呈する。

P 490 (641)

641は須恵器坏蓋A類の転用硯である。口縁部には打ち欠きがみられる。

P 444 (642~644)

642~644は須恵器無台坏である。642はA h類で底径6.6cmと小型で体部の外傾度が大きい。643は底部側縁が丸みを帯び薄手の作りである。644は無台坏の底部片で底径6.8cmを測り、薄手のものである。硯に転用されたと考えられる。本資料は6段階頃のものであろう。

S E 3 (645~654)

645は須恵器坏蓋A類である。口径14.6cmを測り、天井部は広く平坦でケズリがみられる。646は須恵器長頸瓶で口縁端部が上下に拡張し外へ開く。647は原始灰釉陶器の長頸瓶である。胎土は白色系の灰色をした精良なものである。作りは薄手で、焼成は硬質である。自然釉は全体にかかっており、頸部から肩部にかけて厚く垂れ落ちている。産地は不明であるが、国域を超えた搬入品であろう。648~651は須恵器無台坏A h類である。648は底部が平坦で比較的薄手のものである。649は口径11.5cmの小法量で体部は逆台形状となる。650は口径12.5cm、器高3.7cmの深身で底部は平坦、体部は逆台形状となる。651は650とほぼ同法量で体部がやや内湾し、底部に凹凸がみられる。底部外面に「大市」と墨書される。652は甕の体部片である。平行タタキと同心円の当て具痕が明瞭に見える。653はSE3上層から出土した完形の土師器無台椀A類である。口径12.6cm、底径3.8cm、器高3.7cmを測り、径高指数29・底径指数30と浅身で体部の開きが大きい。体部のロクロ目の幅はかなり広い。654は黒色土器無台椀B類である。口径21.0cmを測る大型品である。底部付近はケズリがされ、内面及び体部外面上半はミガキが施される。

本資料は653が7段階以降のほかは、概ね4段階（新）と考えられる。

S K 125 (655)

655は須恵器無台坏A h類である。口径11.7cmを測り、薄手で体部は逆台形状となる。本資料は4段階（新）に位置付けられる。

S K 217 (656~660)

656・657は須恵器坏蓋である。656は坏蓋A類で、口径16.6cmの大型品である。内面には墨痕があり、硯に転用されている。657は胎土C群の坏蓋B類、転用硯である。658は須恵器有台坏C類である。口径9.3cmの小型品で、平坦な底部から体部は直立する。高台は小型でシャープな端部をもち、内端接地する。659・660は須恵器無台坏A h類である。659は口径12.3cm、器高3.4cmの深身で体部は逆台形状となる。660は口径12.9cm、器高2.8cmと大型で浅身のものである。本資料は概ね3段階に位置付けられる。

S K 294 (661~671)

661は須恵器有台坏C h類である。口径9.9cm、器高4.8cmの小型品で、高台は低く内側へ向く。662・663は須恵器無台坏ではほぼ同法量である。662はA h類で、体部は逆台形状を呈する。663はB h類で、体部は湾曲して立ち上がる。664・665は土師器無台坏B類である。須恵器無台坏を写したのと考えられる。664は口径13.6cm、器高4.8cmを測る深身のものである。体部外面と、口縁部内面にススが付着する。器面は二次焼成のためか荒れており褐色～黒褐色を呈し、灯明皿に利用されたとみられる。底面は平坦な作りとなる。665はB h類で口径12.6cm、器高4.1cmを測る。深身で体部は逆台形状となる。内外面にはススが付着し、灯明皿と考えられる。外面底部は板状圧痕が残る。666・667は土師器長甕B類である。666は口径19.0cmを測り、口縁端部がつまみ上げられる。667は口径23.0cmを測る。面を持つ口縁部が短く開き、体部はやや膨らみながら下方へ伸びる。体部下方は内外面ハケメ調整である。668~670は土師器小甕B類である。いずれも口径13cm台、ロクロナデ調整である。口縁部内面にはオコゲ、底部付近の外面にはススが付着する。670は底部付近の外面をケズリで再調整する。671は土師器鍋B類である。口径30.7cmを測る。面を持つ口縁部が短く開き、体部はなだらかに湾曲する。本資料は3段階に位置付けられる。

S K 299 (672)

672は須恵器有台坏C h類である。口径9.6cm、器高4.6cmの小型品で体部は直線的に開く。

S K 321 (673)

673は須恵器坏蓋A類である。擬宝珠形の紐が付く。口縁部は全周にわたって打ち欠きがされる。

S K 300 (674)

674は須恵器甕I類である。口径は23.8cmを測る。口縁部は屈曲して開き、端部は鏝状となる。大きく膨らむ体部の外面は平行タタキ・カキメ、内面は同心円の当て具痕がみられる。

S K 323 (675)

675は須恵器長頸瓶である。頸部が広口で長く伸びるもので大型になると考えられる。

S K 380 (676~683)

676は須恵器有台坏C h類である。口径は10.5cmで薄手の作りである。高台は低く潰れ気味で、体部は直線的に開く。677は須恵器長頸瓶である。口縁端部は凹線状に窪む。678~681は須恵器無台坏である。678・680・681はB h類で、679はA h類である。いずれも薄手で口径12cm、器高3cm、底径7cm前後とほぼ同じ法量である。678は底部側縁が丸く、口縁部が外へ開きナベ形を呈する細別n類である。口縁部は打ち欠きがみられる。679は体部が直線的に開く。底部と体部の境が輪状に窪む細別x類である。

680は粗雑な作りで底部の凹凸が目立つ。細別 x 類の要素がみられる。本資料は製作時に底部を円盤状に作り、周縁に体部を接合したためか、接合部に食い違いがみられる。682は土師器無台椀 B i 類である。底部は糸切りで内外面の口縁部付近にススが付着する灯明皿である。683は土師器鍋 B 類である。端部をつまみ上げた口縁部が短く開く。本資料は 6 段階（新）に位置付けられる。

S K 342 (684~686)

684は須恵器有台坏 C 類である。口径10.9cmを測り小さめの底部から、体部が直線的に開く。685は須恵器無台坏 A h 類である。口径12.5cmを測り、体部は直線的に開く。686は土師器無台椀 B 類、口径13.0cm、径高指数29・底径指数40と浅身で体部の外傾度が大きい。本資料は 6 段階（古）に位置付けられる。

S K 429 (687~689)

687は須恵器坏蓋 A 類である。口径14.3cmを測る。中央が窪んだボタン状の紐が付き、口縁端部のカエリは丸く潰れ気味である。688は須恵器有台坏 C h 類である。口径10.3cmを測る。薄手で底部側縁は丸みを帯びる。689は須恵器無台坏 B h 類である。口径13.0cm、器高2.9cmを測り、大法量で浅身のものである。細別 x 類の要素をもつ。本資料は 5 段階に位置付けられる。

S K 453 (690)

690は須恵器横瓶である。口径11.7cm、器高22.4cmを測る。口縁部は短く開き、体部は側面が丸い俵形を呈する。体部の閉塞は片側である。体部左側はタタキ痕が残り、右側の閉塞部分にはカキメがみられる。

S K 516 (691~693)

691は土師器無台坏 A h 類である。口径13.6cmを測り、体部は逆台形状を呈する。692は土師器長甕 B 類で、体部外面にハケメを施す西古志型甕である。口縁部は長く開き端部はつまみ上げられる。693は土師器鍋 B 類である。口縁部は斜め上方に開き、体部は球状に張り出す。

S D 6 (694~697)

694は須恵器坏蓋である。口径12.4cmを測り、カエリが明瞭に作り出されている。695は黒色土器無台椀である。底径6.7cmを測り、内面はミガキ処理される。696は須恵器坏蓋 B 類の転用碗である。口径11.6cmとやや小型のもので、湾曲した天井部に中央が窪んだボタン状の紐と鋭角のカエリが付く。697は須恵器甕の体部片で、胎土 C 群である。平行タタキ・同心円の当て具痕がみられる。本資料は 3 段階頃と考えられる。

S D 9 (698~704)

698は須恵器坏蓋 A 類である。天井部はロクロケズリで調整し、端部のカエリは鋭い。699は底径6.4cmを測り、須恵器有台坏 C h 類と考えられる。700は有台坏 C h 類である。口径11.2cmを測り器高は4.7cmと低めである。高台は外向きで内端接地する。701~703は須恵器無台坏 A h 類である。いずれも口径12cm台で、体部は逆台形状を呈する。701・703は器高3cm未満で浅身、702は器高3.4cmで深身である。704は土師器小甕 B 類である。口縁部は面取りされ、短く開く。口縁部内面にはススが付着する。本資料は 3~4 段階頃に位置付けられる。

S D 42 (705・706)

705・706は須恵器無台坏 A h 類である。器壁の厚さは薄い。いずれも口径12cm台後半で器高は3cm未満の浅身、体部の立ち上がり角度は急である。705は碗に転用されている。

S D 31 (707)

707は須恵器有台坏である。口径15.3cm、器高6.4cmと身が浅く A 類の深身タイプと考えることもでき

るが、坯部径高指数が37を示すことからB類の可能性もある。底部は平坦で体部は直線的に立ち上がる。高台は幅の狭い低いものでやや内向きである。

SD21 (708~713)

708・709は須恵器無台坏A h類である。いずれも薄手の作りで、口径12cm台、器高は3cm以上あり、やや深身のものである。708は底径指数72、709が同じく62を示し、後者の方が相対的に底部が小さく体部の外傾度が大きい。710は無台坏B h類である。口径12.1cm、器高は2.6cmと浅身で、底部側縁が丸身を帯び、口縁部がナベ形を呈して内湾する細別n類であり、底部内面には凹線状の窪みがみられる。711は須恵器有台坏B類で、口径13.5cmを測る。712・713は土師器小甕B類である。712は器壁が3mmほどと薄手で、受け口状の口縁部は先端を折りたたむように内傾する。体部外面にススが付着する。713は口縁部の先端を上方につまみ上げ、内面にススが付着する。本資料は4~6段階(古)と考えられる。

SD33 (714)

714は須恵器坏蓋A類である。口径15.2cmを測る。天井部外面はケズリ調整である。内面は硯に転用されている。

SD46 (715)

715は須恵器有台坏C h類である。口径9.8cmを測る小型品で、平坦な底部から直線的な体部が立ち上がる。高台は低く小型である。本資料は3段階に位置付けられる。

SD93 (716)

716は須恵器無台坏A h類である。やや薄手の作りで口径12.2cmを測り、体部は逆台形状を呈する。本資料は4段階頃と考えられる。

SD59 (717)

717は土師器小甕B類である。口径13.0cmを測り、口縁部は内湾気味に立ち上がる。

SD128 (718)

718は土師器長甕B類である。口径18.3cmを測り、面取りされた口縁部が屈曲して開く。

SD231 (719)

719は土師器長甕B類である。口径26.6cmを測り、面取りされた口縁部が開いて最大径となる。

SD274 (720~733)

720は須恵器無台坏A h類である。口径12.1cm、器高3.4cmを測り、深身で体部は逆台形状を呈する。721は無台坏B h類で、口径12.8cm、器高2.8cmを測り浅身で体部の外傾度が大きい。細別x類である。722は口径14.1cmを測る大型品である。底部側縁は丸みを帯び、口縁端部は内面から加圧され微かに有段状となる。体部の開きが大きいものである。723は須恵器無台坏B i類の底部片である。724は須恵器有台坏B h類である。口径12.1cmを測り、底部側縁は丸みを帯び湾曲しながら体部が開く。高台は低いものが付く。725は小型の須恵器長頸瓶である。細い頸部に撫で肩の体部が付くものである。726は須恵器甕で口径18.5cmを測る。口縁部は直立気味に長く立ち上がり、端部で僅かに開く。体部は撫で肩を呈する。727~729は土師器無台碗である。727は無台碗B i類である。口径11.0cmを測る小型品である。728は口径12.2cmを測り、口縁部が若干外反する。729は口径14.9cm、器高3.8cmの大型で浅身のものである。730は黒色土器の無台碗と考えられる。内面は、口縁部は横方向、体部は縦方向のミガキが施される。731は土師器長甕B類である。口径31.4cmを測り、くの字状の口縁部を先端で直角につまみ上げ内傾させる。体部外面は前面にススが付着する。732・733は土師器小甕B類である。732は口径13.7cmを測り、

受け口状口縁となる。733は底径6.5cmを測り、糸切り痕がみられる。

出土資料は6段階（新）と一部7段階のものを含むと考えられる。

S D 279 (734~751)

734・735は須恵器有台坏A h類である。いずれも口径15cm前後のもので、口縁端部のカエリはシャープなものである。736は坏蓋B類の転用硯で、胎土C群である。口径は12.4cmを測りやや小型である。737は坏蓋A類の転用硯で口径14.3cmを測り、カエリはシャープである。738は須恵器有台坏である。口径13.6cm、器高5.8cmと器高が低いものである。707同様にB類の可能性はある。体部は直立気味に立ち上がり、高台はシャープな作りである。

739~742は須恵器無台坏A h類である。739・741・742は口径12cm前後、740は口径10.5cmを測り、大小の法量がある。底径指数は64以上を示し、体部は立ち上がり角度が急である。743はやや厚手の無台坏B h類である。器高2.7cmと浅身で体部が開き気味である。

744・745は須恵器甕である。744の外面には格子状のタタキ、内面には円形の当て具痕がみられる。745は外面は平行タタキ・内面には同心円の当て具痕がみられる。746は須恵器短頸壺である。やや肩の張った体部に短く直立した口縁部と丸底の底部に鏝状にせり出した高台がつく。口径9.8cm、器高18.5cmを測り、外面には自然釉がかかる

747は土師器鍋B類である。口径24.7cmを測り、最大径となる。748は土師器無台碗A類である。口縁端部は尖り気味で、底部周辺はケズリにより再調整される。口径13.6cm、器高3.3cmを測り、浅身で体部の外傾度が大きい。749は黒色土器無台碗である。口径17.1cmを測る大型品である。750は土師器長甕B類である。端部を面取りした口縁部が短く開く。751は土師器小甕B類で、口径12.3cmを測る。口縁端部は丸く、短く開く。本資料は4段階頃のものであろう。

S D 301 (752)

752は須恵器無台坏B h類である。口径12.5cm、器高2.6cmを測り、浅身で体部が内湾して開く。細別x類の要素がみられる。本資料は6段階（新）と考えられる。

S D 302 (753・754)

753は須恵器無台坏B h類である。752と同法量で、底部側縁は丸みを帯び、見込み周縁が窪む細別x類である。754は土師器小甕B類である。口径17.5cmを測る。器壁は非常に薄く内傾した受け口状の口縁部をもつ。本資料は6段階（新）以降と考えられる。

S D 306 (755・756)

755は須恵器有台坏B h類である。口径13.8cm、器高8.0cmを測る。平坦な底部から体部が直線的に立ち上がる。高台は幅が狭く内向きに付く。体部外面に墨書がみられる。756は有台坏の底部片で、平坦な底部に低い高台が付く。本資料は3段階頃と考えられる。

S D 317 (757~761)

757は須恵器有台坏B類である。口径13.5cmを測る。薄手の作りである。758は土師器長甕B類である。口縁部はつまみ上げられ、短く開く。759~761は須恵器無台坏である。759・760は無台坏A h類で、底径指数は前者が52、後者が60を示し、前者の方が体部の傾きが大きい。761はB h類で口径11.8cm、器高2.5cmを測り、法量が小さく浅身である。いずれも薄手の作りである。本資料は6段階（古）に位置付けられる。

S D 343 (762・763)

762は須恵器無台坏A h類である。口径12.2cm、器高2.7cmを測る。浅身で体部が逆台形状を呈する。

763は土師器小甕B類である。口径14.7cmを測り、口縁端部は内側につまみ出される。

S D 350 (764~772)

764・765は須恵器坏蓋A類である。いずれも口径14cm台である。天井部はロクロケズリで調整され、口縁端部のカエリはシャープである。766は須恵器有台坏で、胎土C群である。坏部の底部は12cmほどで、高台は底部の内側に内端接地する。767は須恵器無台坏A類で、口径11.8cmを測る薄手のものである。768は無台坏の底部片で内面に漆を塗る漆塗り須恵器である。769・771は土師器長甕B類である。769は口径20.0cmを測る。端部を面取りした口縁部が内湾気味に開き、緩やかに張る体部が付くものである。体部外面下半にはタタキがみられる。771は口径21.3cmを測る。面取りした口縁部が開いて、最大径となるものである。770・772は土師器小甕B類である。770は口径15.6cmを測り、面取りした口縁部が短く開く。本資料は2~3段階と考えられる。

S D 360 (773~779)

773は須恵器有台坏である。薄手の作りで、体部外面はロクロ目の凹凸が目立つ。高台は小型のものが底部外周に付く。774~777は須恵器無台坏である。774・775はB h類である。774は口径12.1cmを測り、底部は小さく底径指数は56を示す。775は口径11.7cm、器高3.3cmを測り、底部は大きく底径指数65を示す。776は口径12.2cm、底径8.4cmと底部が大きく、浅身で体部の立ち上がりが急である。口縁部は連続的な打ち欠きが認められる。777は口径12.2cm、底径7.7cmを測り、相対的に底部が小さく体部が傾くものである。底部外面には墨書がみられる。778は土師器長甕B類である。口径18.7cmを測り、口縁部はくの字状を呈する。体部はタタキ成形され、丸底である。779は土師器鍋B類である。口径は26cmほどで面取りした口縁部が外側へ開く。本資料は5~6段階に相当する。

S D 378 (780~799)

780~782は須恵器坏蓋である。780はA類で、口径16.2cmである。窪んだ円柱状の紐が付き、端部は若干外反して長めのカエリが付く。天井部はロクロケズリの後ロクロナデ調整する。781は、短めの端部が丸く収まる。782は扁平な作りで、端部は長めに屈曲する。783~785は須恵器有台坏である。783はC h類、784もC類になると考えられる。783は薄手の作りで口径10.0cmを測る。体部は直線的に伸び、高台は小さいものが内向きに付く。784は高台接地面が強く内傾する。785は有台坏B h類である。薄手の作りで口径13.0cm、器高6.1cmを測り、平坦な底部から体部はやや湾曲して開く。高台は小さく内向きに付く。

786~790・792は須恵器無台坏A h類である。786は口径12.4cmを測り、他のものに比べ相対的に厚手のものである。径高指数26・底径指数61を示しやや深身で、体部は逆台形状を呈する。787・788はほぼ同法量の口径12cm台で、径高指数27前後・底径指数60前後を示し、どちらも薄手である。788は底部側縁が丸みを帯び、内面に凹線状の窪みを持つ細別x類である。789・790は788と同様のプロポーションで相似形を示すが、法量の大小で区別できる。また、792はさらに底部が小型化したものである。791・793は無台坏B h類である。791は口径13.7cmを測る大型品、793は口径11.7cmの小型品で細別x類である。どちらも底部が丸く仕上げられる。

794は須恵器横瓶である。口縁端部は外向きに面を持つ。795は金属器模倣の須恵器鉢で、胎土C群である。口径21.8cmを測り、口縁部が短く外に開く。寸胴の体部には2条の沈線が巡る。796は土師器無台椀A類である。口径12.7cmを測り、径高指数26・底径指数52を示し、底部がやや多く体部が逆台形状を呈する。797は土師器小甕B類で、薄手で内湾状を呈する口縁部を持つ。798は土師器長甕B類である。口縁端部は上方につまみ出して面を持つ。799は土師器鍋B類である。面取りした口縁部が短く開き、丸

みを帯びた体部が付くものである。

本資料は坏蓋780や有台坏783・785、無台坏786が4段階頃、土師器無台椀796もこれに相当すると考えられる。その他の須恵器無台坏787～793は、これより明らかに新しい要素で、6段階（新）を中心とするものである。

S D 442 (800～802)

800は須恵器坏蓋A類で、胎土C群である。口径12.3cmを測り、小さく背が高い擬宝珠形の紐が付く。内面は硯に転用されている。801は須恵器有台坏B類である。口径15.6cmを測る大ぶりのものである。802は須恵器無台坏B h類である。口径12.9cmで、径高指数25・底径指数70を示し、底部が大きいものである。本資料は2段階を中心としたものであろう。

S D 426 (803)

803は須恵器坏蓋A類である。口径15.3cmを測りやや扁平な器形である。カエリは太めでやや丸い。

S X 131 (804～806)

804は須恵器有台坏A h類である。口径11.7cm、器高3.4cmで、坏部は扁平な箱形を呈する。幅の細い高台は内側をつまみ尖らせるものである。805は須恵器無台坏B h類である。口径12.1cm、器高3.3cmを測るやや深身で、体部は逆台形状を呈する。806は土師器長甕B類である。薄手の作りで口縁端部はつまみ上げられる。本資料は2～3段階のものである。

S X 111 (807)

807は須恵器有台坏である。底径6.3cmを測り、C類になると考えられる。平坦な底部から体部が開く。高台は幅が狭く、端部内側をつまみ、内側を向く。

S X 5 (808)

808は須恵器甕である。体部外面は平行タタキ・カキメ、内面は同心円の当て具痕がみられる。

S X 157 (809～811)

809は須恵器有台坏で口径13.1cmを測る。810は須恵器無台坏A h類である。口径11.8cmを測り、径高指数26・底径指数72を示す。箱形の器形である。811は土師器小甕B類である。口径10.4cmを測る。本資料は3段階と考えられる。

S X 377 (812～815)

812は須恵器有台坏で底径6.1cmを測る。高台は丸みを帯びている。酸化焰焼成で赤い色調である。813は須恵器無台坏B h類である。口径11.2cmを測る小形品である。814は須恵器長頸瓶の口縁部片である。口径9.8cmで口縁端部はつまみ上げられる。815は土師器無台椀B類である。口径15.5cm、器高6.0cmを測り、深身の椀である。

S X 420 (816)

816は須恵器無台坏A h類である。やや薄手で、口径11.9cmを測り、体部が逆台形状を呈する。

B II区IV層・整地層出土（図版138～141、図版282～284）

IV層 (821～862)

821～828は須恵器坏蓋である。821～827は坏蓋A類である。821・822は、上面を窪ませた環状の紐を持つ。823は口径13.7cmを測るもので、カエリは小さめで内側を向く。824・825は口縁部を打ち欠きするもの、826・827は口縁部を打ち欠きし、内面を硯に転用したものである。825は口径16.0cmを測る

大型品で、窪んだ擬宝珠状の紐が付くものである。826は天井部が丸みを帯び、口縁部が反り上がる帽子状を呈する。827は連続的に打ち欠きを行い、縁辺部が鋸歯状を呈する。828は薄手の坏蓋B類でカエリは薄く鋭い。内面に「足」と墨書される。

829～838は須恵器有台坏である。829は糸切りの有台坏で、胎土はC群である。底部側縁に明瞭な稜を持ち、高台は内側をつまみ内端接地する。830は有台坏A h類である。口径13.3cm、器高4.0cmを測り、坏部は直線的に立ち上がる。831は有台坏B h類である。口径15.4cm、器高8.2cmを測る大型品である。底部側縁はケズリで稜を持ち、体部は直立して伸びる。底部側縁には重ね焼きの際に融着した別個体の口縁部片がみられる。832・833・836は有台坏C h類である。口径11cm台、器高5cm、坏部底径8cm前後のもので、C類の中では横に長いものである。高台は幅が細いもので、内側をつまみ上げられ内端接地する。836は底部外面を利用して硯に転用している。834・835・837・838は有台坏B h類である。834は口径12.5cm、このほかは口径13cm台である。838は坏部径高指数35で、他の3点が42前後であるのに比べ身が浅い。

839～848は須恵器無台坏である。839・840は無台坏B h類である。厚手の作りで口径12cm前後、径高指数26・底径指数71以上を示し、体部の立ち上がり急なものである。841は無台坏A h類である。839・840とほぼ同じ法量であるが、底部が小さく底径指数は70未満である。842～845はいずれも薄手の作りである。842・843は無台坏B h類である。842は口径11.3cm、843は口径12.1cmで大小の法量がある。いずれも細別x類で、842の底部側縁は丸く口縁部が外反し、843は内湾する。844・845は無台坏A h類で、口径12cm台のほぼ同じ法量である。846は無台坏B h類の転用硯で、口径12.1cm、器高2.9cmの浅身である。847は無台坏A h類で口径12.2cmを測る。径高指数27・底径指数70を示し、深身・箱形の器形である。底部外面には「春」と墨書される。口縁部に打ち欠きが見られる。848は無台坏B h類で、口径13.0cmを測る。径高指数25・底径指数65を示し、深身・逆台形の器形である。口縁部に連続的な打ち欠きが見られる。

849は須恵器短頸壺である。口径10.0cmを測る。850は須恵器長胴短頸壺、851は須恵器甕である。いずれも口縁部がくの字に屈曲するものである。852・853は加工円盤である。須恵器貯蔵具の破片を加工し2cm四方の小片を作り出している。854は口径4.4cmを測る須恵器瓶類の口縁部である。

855～857は須恵器長頸瓶である。口径は10～13cm前後まであり、法量に差がある。858は須恵器瓶類で胎土A群である。長頸瓶の可能性はある。底径14.6cmを測る。859・860は須恵器横瓶である。859は口径10.0cmを測る。860は胎土A群である。861は須恵器瓶類の底部で高台径は11.6cmを測る。高台は外方へ広がり内端接地する。862は土師器小甕B類である。口縁部は有段状となり口径12.2cmを測る。内外面にはススが付着する。

本資料は2～7段階まで各時期のものが存在する。

整地層 (863～870)

863～866は須恵器無台坏である。863は無台坏A h類で口径11.1cm、径高指数24・底径指数70を示す。864は無台坏B h類で口径12.7cm、径高指数21・底径指数71を示す。どちらも浅身・箱形の器形である。865・866は無台坏B h類で、径高指数26～29・底径指数63～67を示し、底径が小さく逆台形状を呈する。867は須恵器横瓶の口縁部で、口径11.0cmを測る。868は土師器盤である。口径17.8cm、器高2.3cmを測り、底部はヘラ切りである。869は土師器長甕B類である。面取りした口縁部が短く開く。870は土師器坏蓋A類である。口径17.3cmを測りカエリはシャープな作りである。本資料はSX511・SX707上部の層位に位置しており、これらの遺構と同様に3～4段階(古)に位置付けられる。

C II区第2確認面（V層中）遺構出土（図版142～146、図版284～287）

P 893 (871)

871は須恵器坏蓋A h類の転用碗である。口径14.5cmを測りカエリはやや丸い。

S K 510 (872～910)

872～874は須恵器坏蓋A類である。872は擬宝珠形の紐をもつ。873・874は環状の紐をもち、カエリは内向きでやや丸い。875・877は須恵器有台坏C h類で、876もC類の可能性が高い。いずれも口径約10cm、器高5cm以下となる。875・876は底部が平坦で角張り、877は底部側縁が丸みを帯びる。

878～899は須恵器無台坏である。878～882は無台坏A h類である。口径12cm前後、器高3cm以上を測り、径高指数26前後・底径指数63～69を示し、やや深身で逆台形状を呈する。883～891は無台坏B h類である。883・884は、口径12cm台、器高4cm未満の深身を呈するものである。口縁部は直線状と外反するものがある。885～887は、口径12cm前後、底径指数64～69を示すやや深身で体部の立ち上がり之急なものである。888・889はやや薄手で浅身のもので、口径は12cm台である。890・891は底径指数51～54を示す体部の外傾度が大きいものである。やや薄手で底部側縁が丸みを帯びる。

892～894は無台坏A h類である。口径12cm台でほぼ同じ法量で、径高指数23～25・底径指数65～66を示し、体部は逆台形状を呈する。892は口縁部が外反、その他は直線状に開く。895は無台坏B h類、896はA h類で、口径11.9cm・器高2.6～2.8cmの浅身のものである。口縁端部は上方へ立ち上がる。897～899は無台坏B h類で、口径12cm台、径高指数22・底径指数60～62とほぼ同一である。薄手で底部側縁が丸みを帯び、898・899は細別x類である。

900は須恵器瓶類で底径10.2cmを測る。やや胴長で細身の高台がつく。901は加工円盤で、須恵器貯蔵具の破片で加工されている。

902～904は土師器無台碗である。902は無台碗B類である。口径12.0cm、径高指数29・底径指数51を示し、体部はやや浅身で碗形に開くものである。903は外面赤彩の無台碗である。底径6.3cmを測り、体部は底部付近から大きく開くもので、口径は大型になると考えられる。904は無台碗A類である。口径14.9cm、器高5.8cmを測る、やや大型の深身の碗である。内外面ミガキ、底部周辺はケズリで再調整される。

905～909は土師器長甕B類である。905は口径22.8cm、906～909は口径17.0～20.3cmを測る。905・907は口縁部を面取りし短く開くもの、906・909は口縁端部をつまみ上げるもの、908は口縁部が内折するものである。909は体部外面をケズリ調整する。

910は土師器鍋B類である。口径35.4cmを測る。口縁部はわずかに開き、体部は張らずに底部が丸底になる。口縁部はナデ、頸部はカキメ調整、底部はタタキ成形である。

本資料は872・878～881・883～887などは3段階を中心とする時期、873・893・896は4段階頃、874・877・890・891・897～899は6段階と考えられる。

S K 520 (911・912)

911は須恵器折縁坏で胎土A群と考えられる。口径12.5cm、器高3.8cmを測り、やや偏平な碗形の体部から受け口状に伸びた口縁部が付く。口縁の段部は明瞭である。高台は端部をつまんだ細身のもので底部内側に付く。912は黒色土器の高盤である。坏蓋を裏返したような浅身の盤に、脚部がつくと考えられる。内面にはミガキが施される。

S D 519 (913)

913は土師器小甕B類である。口径12.5cmを測り、有段状の口縁にやや膨らむ体部がつく。

S D 709 (914)

914は土師器無台坏A h類である。口径11.4cm、器高3.6cmを測り、深身で体部が急角度で立ち上がるものである。須恵器製作技法によるものである。

S D 525南 (915~922)

915は須恵器坏蓋A類である。口径15.1cmを測る。環状の紐を持ち、内面に墨痕が残る転用碗である。端部の割れ口には研磨痕がみられる。916~919は須恵器無台坏である。916・917はB h類である。法量に大小の差があり、916は口径11.7cmで相対的に深身、917は口径13.5cmで浅身となる。918・919はA h類である。口径12cm台で底径指数64~68を示し、体部は逆台形状となる。919は薄手の作りで、底部に凹凸が認められ、見込み周縁に凹線状の窪みをもつ細別x類である。920~922は土師器長甕B類である。920は口径20.4cmで口縁部に面をとり短く開くもの、921は薄手の作りで口径18.8cm、口縁端部をつまみ上げ尖らせるものである。922は平底の底部で厚手の作りである。底径5.6cmを測る。本資料は4段階(古)に位置付けられる。

S X 511 (923~937)

923・924は須恵器坏蓋A類である。923は胎土A群で口径13.1cmを測り、平坦な天井部に擬宝珠形の紐が付く。カエリの先端は鋭角で内側を向く。924は口径13.5cmを測り、環状の紐が付く。カエリの先端はシャープである。925は須恵器有台坏B h類である。口径14.4cmを測り、やや厚手の体部は直線的に立ち上がる。高台は幅が狭く小さなものが付く。底部側縁にはケズリ調整がされる。

926は須恵器無台坏B h類で、胎土C群である。口径11.8cm、器高3.6cmを測る。口縁部は直線的に開く。

927~931は須恵器無台坏B h類である。927は口径11.8cm、器高3.4cmを測り、深身で箱形の器形となるものである。928~930は口径12cm前後で、径高指数25~26・底径指数70前後を示しほぼ同一器形となるものである。929の底部外面は凹凸が無く、滑らかで丁寧な作りである。930は薄手の作りで、口縁端部に凹線状の窪みが内面に残る。931は薄手の作りで、口径11.7cm、器高2.8cmを測る。浅身で体部が開くものである。

932~934は土師器小甕B類である。932は口径12.2cmで口縁端部を上方へつまみ上げて面を持つ。口縁部内面にはオコゲが付着する。933は体部外面にススが付着し、底部から2cm程離れた範囲に認められる。934は口径15.3cmを測る。体部にハケメ調整が施されており、西古志型甕とみられる。口縁端部内外面の狭い範囲にススやオコゲが付着する。

935~937は土師器長甕B類で、口径20cm前後である。935はくの字状の口縁先端をわずかに上方へつまみ上げ、端部は凹線状にやや窪んだ面を持つ。936・937は内外面にハケメ調整が認められる。特に937は細かい単位のハケメ調整で、調整がやや粗く器面に凹凸がみられる。本資料は931が新しい要素をもっているが、その他は概ね3段階と考えられる。

S X 517 (938)

938は須恵器無台坏B h類である。口径12.0cm、径高指数25・底径指数61を示し、体部が外傾する。

S X 521 (939~942)

939は須恵器有台坏B h類である。口径13.7cmを測り平坦な底部から直線的に体部が開く。口縁端部は先細りしてシャープな作りである。940~942は須恵器無台坏で、薄手の作りである。940は口径12.0cm、径高指数25・底径指数63を示し、体部は開き気味に立ち上がる。941は口径13.4cm、径高指数22・底径指数58を示し、浅身で体部は直線的に開く。942は口径12.8cm、径高指数22・底径指数59を示し、浅身

の椀形を呈する。本資料は5段階と考えられるが、941は新しい要素を持ち6段階頃と考える。

S X 529 (943~945)

943は須恵器有台椀である。口径は12.4cm、器高4.6cmを測る。底部は平坦で体部が湾曲する。高台は幅が狭く長めで、外端で接地する。本資料は釈迦堂遺跡X層出土の有台椀(報告No.282)よりも深身である[江口・小濱ほか2000]。944は須恵器無台坏B h類である。やや薄手の作りで体部の立ち上がりが急なものである。945は土師器長甕でハケメ調整の西古志型である。本資料は4段階(古)頃であろう。

S X 532 (946)

946は須恵器無台坏B h類である。口径10.5cmの小型品で身が深く、体部の立ち上がりが急である。

S X 541 (947)

947は須恵器坏蓋A類である。口径15.3cmを測り、扁平な体部に上面が窪んだ紐がつく。カエリはシャープに作りだされている。

S X 707 (948・949)

948は須恵器有台坏C h類である。口径9.7cmを測り平坦な底部から直線的に体部が開く。高台は小さなものが付く。949は須恵器無台坏A h類である。やや薄手の作りで、口径11.5cmを測り、直線的に体部が開く。本資料は4段階(古)頃と考えられる。

D II区V層出土(図版146~149、図版287~289)

V層(951~997)

951は須恵器長頸瓶で、口径8.8cmを測る小型品である。952は須恵器横瓶で、外面平行タタキ・内面同心円の当て具痕がみられる。SB20・P806、SD9、P72からも同一個体が出土した。953~961は須恵器坏蓋である。953~955・958~961は坏蓋A類である。953~955は口径15cm台を測り、953は擬宝珠形、954は環状の紐を持つ。カエリは先端部が鋭角である。956・957は坏蓋B類で、胎土C群である。いずれも口径15cm台である。カエリは先端部が鋭角である。また、958~961は、内面に墨痕が残る転用硯である。959は口径12.7cmと小型のものである。胎土C群である。960は口径14.6cm、961は口径15.0cmを測る。960のカエリは丸く潰れ気味である。どちらも口縁端部を打ち欠きする。

962~965は須恵器有台坏である。962・963はA h類で、体部の立ち上がりは急である。962は口径11.0cm、坏部径高指数26を示し、浅身である。963は胎土C群、厚手の作りで、口径11.8cmを測る。964は有台坏C h類である。口径10.9cm、坏部径高指数33を示し、浅身で体部が開き気味に立ち上がるものである。高台は低く内端接地する。965は有台坏B h類である。口径12.7cm、器高6.3cmを測る大型・深身のものである。体部は長く直線的に立ち上がる。高台は内向きに付く。

966は須恵器折縁坏である。胎土A群で、口径16.0cm、器高5.0cmを測る大型品である。底部は平坦でヘラ切り痕がみられる。体部はわずかに湾曲して有段状の口縁部を作る。高台は底部外周に幅が狭く高脚の高台を貼り付けている。

967~984は須恵器無台坏である。967は無台坏A h類である。口径12.4cm、器高3.6cmを測る深身で箱形の器形である。968~974は無台坏B h類である。そのうち968~970は口径12cm前後で、体部が開いて伸びるもので、径高指数26~30・底径指数61~62を示す。971・972は口径13cm前後、径高指数24~25を示す。971は厚手で体部の立ち上がりが急なもの、972は薄手でやや開き気味に立ち上がるものである。973・974はともに口径12.4cmを測り、同一法量である。底部側縁はやや丸みを帯びる。975~977・

979は無台坏A h類、978・980はB h類である。いずれも口径12cm前後で975は径高指数23、976～980は径高指数23未満で身の深さに差異がある。体部の傾きはほとんど差がない。981は無台坏B i類である。口径13.1cm、器高4.0cmを測り、径高指数30・径高指数47を示す。類例は山三賀Ⅱ遺跡SI1出土土器（報告No.672）と類似するが、産地は頸城末野窯と想定されており〔坂井ほか1989〕、本資料とは異なる胎土である。

982～984は無台坏の墨書土器である。982・983は口径12cm台で、径高指数24～25・底径指数70～71を示し、体部はやや開き気味に立ち上がる。982は記号、983は「九」と底部外面に墨書される。984は口径12.7cm、径高指数25・底径指数66を示し、体部は開く。底部外面に「大市」と墨書される。

985・986は須恵器甕である。985は胎土A群かと考えられる甕の体部片である。986は胎土C群で口径58.6cmを測るIV類である。口縁部外面には櫛描波状文を施す。口縁部の割れ口には漆継痕とみられる付着物が認められる。口縁端部は断面が矢印状で先細りになる。

987は須恵器小型壺である。口縁部は欠損し、体部は極端に張り出す。底部外面はケズリで調整する。

988・989は黒色土器有台碗である。988の底部は糸切りとなる。内外面はミガキ調整を施す。989は内面と底部に赤彩がされている可能性がある。底部は糸切りである。

990は須恵器貯蔵具破片を利用した加工円盤である。

991は土師器無台碗B i類である。口縁部は口径17.4cmを測る大型品で、浅身の碗である。内外面はミガキ調整を施す。ススが付着している。

992～994は土師器長甕B類で、口径20cm前後である。992は口縁端部に面を持ち、頸部の括れが少なく体部は張らない。993・994はくの字状口縁部を持つ。995～997は土師器鍋B類である。995は口径31.2cmを測る。口縁部先端をわずかに内側につまみ出し、面を持つ。体部は頸部付近から張り出す。内外面はロクロナデのほか、ハケメで調整する。996は口径30.9cmを測る。口縁端部は、くの字に括れ体部は球形に張り出す。997は口径37.4cmを測る。口縁端部を下方に若干つまみ出し、外向きの面を持つ。頸部は括れがほとんどなく、浅身になると考えられる。

本資料は2～6段階に位置付けられるが、中心は2～4段階である。

E II区第3確認面（Ⅶ層）遺構出土（図版149～155、図版289～293）

SB7（998～1002・1004～1009）

998は柱穴P573出土の有台坏と考えられる。薄手でロクロ目の凹凸が顕著な個体である。口縁端部は内側に折り込む様に玉縁状となる。類例は上田遺跡SK16出土土器（報告No.24）に見ることができ、坏部の形態が類似する〔安藤2005〕。999はP956出土の須恵器坏蓋A類である。環状の紐を持つ。

1000～1002はSD389東出土の須恵器無台坏である。1000・1002は無台坏A h類である。1000は口径13.0cmで浅身、1002は口径12.4cmで深身の器形で逆台形状を呈する。1002の口縁部は打ち欠きされている。1001は口径12.3cm、器高2.9cmと浅身で、体部は湾曲して開く。底部外面に墨書がみられる。

1004～1009はSD389西出土である。1004は須恵器坏蓋A類で環状の紐が付く。1005は口径10.6cm、器高3.5cmの須恵器有台坏A h類である。箱形の坏部に幅が狭く低い高台が底部内側に付く。底部外面に墨痕が残る転用硯である。1006～1008は須恵器無台坏A h類である。口径12cm台のものと11cm台のものがある。1008は他のものに比べ体部が薄手の作りである。口縁部上端付近で内面に2条の凹線が巡る。1009は須恵器長頸瓶である。口径8.3cmを測る。肩部は丸味をもって張り出し、細く締まった頸部から大きく開いて口縁部をなす。

本資料は1002・1005を3段階、999・1000・1006～1008を4段階、1001・1004を6段階と考える。

S B 9 (1011～1031)

1011～1015は柱穴 P553出土である。1011・1012は須恵器坏蓋 A 類である。1011はカエリがつぶれ内側を向き、1012は下方にカエリの先端部が伸びる。1013は須恵器無台坏 B h 類である。口径12.4cmを測る浅身のもので、底部側縁は丸みを帯び口縁端部付近はやや膨らみをもつ。細別 n 類と考えられる。1014は須恵器壺蓋で短頸壺のものと考えられる。口径13.2cmを測り、丸い天井部から下方にカエリが長く伸びる。1015は土師器長甕 B 類である。口径15.8cmを測る。口縁部は肥厚して面を取り、短く開く。

1016は柱穴 P569、1017は P611、1018は P615、1019は P391 (P611上層部)、1020～1025は P613からの出土である。1016は須恵器無台坏 A h 類、1017は B h 類である。いずれも薄手の作りで、口径12cm台で同じ法量である。1018・1019は須恵器坏蓋 A 類である。1019は口径14.6cmでカエリの先端部は鋭角である。1020・1021は須恵器無台坏で、前者は B h 類・細別 n 類である。いずれも非常に薄手の作りで、体部の外傾度は大きく、口縁部を強めに引き出すものである。1022・1023は須恵器甕である。1022は口径21.0cmを測り口縁端部はつまみ上げられる。1024は土師器鍋 B 類である。口径は34.6cmを測り、口縁部はわずかに開く。1025は外面赤彩の土師器無台碗である。底径7.0cmを測る。

1026・1027は P631の出土の瓶類である。いずれも長頸瓶と考えられる。1026は高台径5.8cmの小型品で、内外面と割れ口にススが付着する。

1028は P633、1029は P639、1030は P644、1031は P346 (P614上層部) から出土の須恵器無台坏である。いずれも薄手の作りをした B h 類である。1028は口径13.4cm、器高3.5cmを測り、大型、深身を呈する。底部側縁が丸みを帯び、口縁部が有段状を呈する細別 n 類である。底部外面には記号の墨書がみられる。1029は口径12.3cm、器高3.2cmを測り、やや深身となる。1030は底径6.3cmを測る小型の底部片で、外面には墨書がみられる。1031は口径12.2cm、器高2.5cmを測る浅身の無台坏で、口縁部が外反する。1031には、見込み周縁を凹線状の窪みが輪状に巡る細別 x 類の特徴がみられる。

本資料は1016・1017が4段階(古)頃で1012・1019がそれ以前の3段階と考えられ、1011・1020・1021・1028～1031は6段階(新)以降に位置付けられる。

S B 11 (1032)

1032は柱穴 P640出土の須恵器有台坏 B 類である。口径13.7cmを測り、非常に薄手である。底部側縁は丸みを帯びたものとなるだろう。口縁上端の内面には、凹線状の窪みが巡る。

S B 12 (1033～1037)

1033は柱穴 P687出土の須恵器無台坏である。口径12.8cmを測る。1034は P692出土の土師器鍋 B 類である。口縁部が短く開く。1035～1037は P695出土の須恵器である。1035は有台坏の底部片で、底部外面に墨書がみられる。1036・1037は須恵器無台坏 B 類である。1036は口縁部付近の内外面にわずかにススが付着している。1037は口径12.5cmを測る。やや浅身で湾曲して体部が開き、口縁端部が加圧され上方へ向く。底部外面に「山」と墨書される。本資料は4段階頃と考えられる。

S B 18 (1038・1039)

1038・1039は柱穴 P873出土である。1038は須恵器坏蓋 A 類の転用硯である。口径15.3cmを測る。1039は土師器小甕 B 類である。底径7.8cmを測る。本資料は4段階頃と考えられる。

S B 19 (1040～1045)

1040は柱穴 P784出土の土師器長甕 B 類である。口径16.7cmを測り、口縁端部はつまみ上げられる。

1041・1042はP785出土である。1041は土師器小甕B類で底径6.9cmを測る。1042は須恵器横瓶である。体部右側面に閉塞痕がみられる。1043・1044はP786出土須恵器である。1043は坏蓋A類で口径16.0cmを測り、扁平な体部である。1044は無台坏で、口径12.3cmを測る。1045はP790出土の瓶類で胎土A群、道婦窯産と考えられる。高台径6.7cmを測る幅の細い高台が付く。本資料は4段階頃と考えられる。

S B 20 (1046)

1046はP806出土の須恵器有台坏である。高台径8.7cmを測る。平坦な底部に、幅の狭い高台が付く。

S B 30 (1047・1048)

1047・1048はP971出土である。1047は須恵器有台坏B h類である。口径13.4cm、器高6.6cmを測り、体部は湾曲気味に開き、口縁端部で先細りとなる。1048は土師器無台碗である。須恵器に似た質感を持つもので、酸化焰焼成のため浅黄色を帯びる。本資料は4段階頃（新）と考えられる。

S B 23 (1049~1051)

1049・1050はP851出土の土師器である。1049は土師器長甕B類で、口径19.6cmを測る。口縁部は短く開き、端部は面取りされる。1050は土師器小甕B類である。口径14.0cmを測る。口縁部は短く開き、端部は丸い。体部は緩やかに張り出す。ロクロナデの後、内外面をハケメで調整する西古志型甕である。口縁部内面はオコゲが付着する。1051はP835上層部のP460から出土した須恵器有台坏C h類、胎土はC群である。口径10.6cm、器高5.0cmを測り、体部は湾曲して立ち上がる。高台は外側へ開く。

P 877 (1052)

1052は須恵器無台坏A h類である。口径12.4cm、器高2.6cmの浅身である。平坦な底部に体部が開き、口縁端部は上方へ引き出される。

P 940 (1053)

1053は須恵器坏蓋である。内面には墨痕があり、硯に転用されている。

S E 555 (1054)

1054は須恵器有台坏B h類である。口径14.9cm、器高6.9cmを測る。薄手の作りで、平坦な底部に体部が直線的に長く開く。高台は外側に向く。

S E 856 (1055~1061)

1055は須恵器坏蓋A類である。口径は15.5cmと大きく、カエリは断面三角形を呈し先端は鋭い。1056は須恵器有台坏B類である。口縁端部は上方へ引き出し若干窪む。1057は須恵器無台坏A h類である。口径12.4cm、器高3.1cmを測る。体部は薄手であるが、相対的に底部は厚く、体部への立ち上がり部分が有段状となる。底部外面には墨書がみられる。1058・1060は土師器長甕B類である。1058は口縁部がくの字となり、端部が上方につまみ上げられる。1060はタタキ痕の残る体部片である。1059は土師器小甕B類である。底部に糸切り痕が残る。1061は土師器鍋B類である。頸部の括れは緩やかである。

S K 630 (1062・1063)

1062は須恵器長頸瓶である。口径14.2cmを測り、口縁端部は上下に拡張する。1063は須恵器甕の体部片で外面平行タタキ・内面同心円状の当て具痕がある。

S D 525北 (1064~1066)

1064~1066は土師器無台碗A i類である。いずれも口径12cm台を測り、径高指数32~35・底径指数47~52を示す。1066は比較的深身である。1064や1065のように体部が直線的に開き、口縁端部が先細りとなる器形は、日水遺跡SI386出土資料に類例がある〔今井ほか2007〕。本資料は5段階に相当しよう。

S D 557 (1067)

1067は須恵器無台坏B h類である。口径12.5cm、器高3.4cmを測り、やや大型で深身のものである。体部及び底部外面に墨書がある。本資料は4段階頃に位置付けられる。

S D 556 (1068~1072)

1068は須恵器坏蓋A類の転用硯である。大きめの環状紐が付く。1069~1071は須恵器無台坏である。いずれも薄手の作りである。1069・1070はA h類で細別x類である。口径12cm台、器高3cmほどで体部は逆台形状である。1071はB h類で、口径13.1cm、器高3.3cmを測る大法量である。1072は須恵器瓶類で、高台径9.4cmを測る。底部側縁に台形状の高台が外向して付く。本資料は6段階（新）に位置付けられる。

S D 566 (1073~1077)

1073は須恵器有台坏で、胎土C群である。高台径8.2cmを測る。1074は須恵器無台坏B h類である。口径11.7cm、器高3.4cm、径高指数29・底径指数72を示し、深身で体部が直立するものである。1075は無台坏A h類である。薄手の作りで、口径13.2cm、器高3.6cmを測り、大型で深身のものである。1076は須恵器甕IV類である。胎土C群で、口径59.6cmを測る大型品である。口縁部は大きく開き端部はつまみ出される。頸部は2条の沈線と櫛描波状文が施される。1077は土師器無台碗B類である。口径12.8cmを測り、体部は湾曲して立ち上がる。本資料は3段階に位置付けられる。

S D 620 (1078)

1078は須恵器有台坏の転用硯である。高台径8.6cmを測る。低い高台が付き、体部は直線的に開く。

S D 754 (1079)

1079は須恵器有台坏である。高台径9.0cmを測る。幅の狭い高台が平坦な底部に付く。底部外面に墨書がみられる。本資料は3段階と考えられる。

S D 754南 (1080~1082)

1080・1081は須恵器無台坏A h類である。1080は口径11.5cm、器高3.4cmを測り、深身のものである。1081は口径13.0cmを測る大型品である。底径指数は66~69で体部の立ち上がりはどちらも急である。1082は須恵器甕の体部片で、外面平行タタキ・内面同心円の当て具痕がみられる。本資料は3段階に位置付けられる。

S D 760 (1083)

1083は須恵器無台坏B h類で、胎土C群である。口径11.9cm、器高3.6cmを測る深身のものである。本資料は3段階のものと考えられる。

S D 775 (1084~1086)

1084は須恵器無台坏A h類で、胎土C群である。口径12.5cm、器高3.3cmを測り、平坦で大きめな底部から、直線的に体部が開く。1085・1086は土師器小甕B類である。1085は口径13.4cmを測り、端部をつまみ上げた口縁部が短く開く。1086は底径5.6cmを測り、胴長の体部となる。底部付近はケズリで再調整される。本資料は3段階のものと考えられる。

S X 833 (1088・1089)

1088は須恵器有台坏A h類で、胎土C群である。口径11.9cm、器高4.2cmを測り、坏部はやや深身である。体部は上方へ立ち上がる。底部側縁は丸みを帯び、端部をつまみ出した高台が付く。底部外面には墨痕がみられ、硯に転用されている。1089は須恵器無台坏B h類である。口径12.4cm、器高3.4cmを測り、やや深身で体部が逆台形状を呈する。底部外面には墨書がみられる。本資料は3段階に位置付けられる。

S X 925 (1090~1092)

1090は須恵器灯蓋A類である。天井部にケズリ調整がされる。外面には「酒」と墨書される。1091は須恵器無台坏C h類で、胎土A群である。道婦窯産と考えられる。口径13.4cm、器高3.9cmを測り、やや深身のものである。1092は土師器長甕B類で、口径18.2cmを測り口縁端部を面取りする。

II区包含層・SB1・SB7ほか (1093)

1093は須恵器甕Ⅲ類である。口径39.4cmを測り、端部を面取りした口縁部が開く。頸部には3条1組の三角形の沈線文が施されている。本資料は21E~Hグリッド等を中心に包含層・SB1・SD1・SB7・SD389東等多数の遺構から出土した。

F II区VI層出土 (図版157、図版295)**VI層 (1109~1121)**

1109・1110は須恵器灯蓋A類である。いずれも上面が窪んだ紐と先端が尖り気味のカエリが付く。1109は口径16.0cm、1110は口径14.9cmである。1111は須恵器無台坏A h類である。口径12.0cm、器高2.9cmを測り、体部は箱形を呈する。底部外面には「大市」と墨書される。また、口縁部内外面にはススが付着する。1112は須恵器無台坏である。底径8.7cmを測る。体部側面は全周にわたり、打ち欠きされる。見込みには墨書が記される。1113~1116は須恵器無台坏B h類である。1113は口径11.9cm、器高2.8cm、浅身で体部が湾曲して開く。1114は口径12.3cmを測り、薄手で細分x類である。底部側縁は丸みを帯びる。1115は径高指数26・底径指数66を示し、体部の立ち上がりが急なものである。1116は焼歪みが大きいものである。1117~1119は土師器無台碗A類である。1117は口径12.2cm、器高3.8cmを測り、体部が湾曲して立ち上がるものである。1118は口径12.4cm、器高3.9cmを測るもので、薄手で体部が湾曲して開くものである。1119は口径12.7cm、器高4.4cmを測る深身のものである。1120は土師器小甕B類である。口径15.4cmを測る。口縁部が短く開き、端部はつまみ上げられる。1121は土師器長甕B類である。口径22.0cmを測る。口縁部が短く開き、端部はつまみ上げられる。

本資料はおよそ、1109・1110が2段階、1113・1115が3段階頃、1111が4段階(古)、1114が6段階以降のものと考えられる。

2 土製品 (図版158~160、図版296・297)**(1) 円筒形土製品・製塩土器**

円筒形土製品は中空の器台状のものである。内面は粘土紐の接合痕を明瞭に残し、外面は粗雑なナデ調整がみられる。図化したものは、I区で12点、II区で2点である。全形を復元できたものは1点で、その他は破片資料である。製塩土器は平底の底部となるものが1点ある。

SB24 - P1017 (1122)・SD1015 (1124)

1122は底径約12cmを測る、筒抜けの底部片である。底面端部は平坦な作りで、透孔が1か所残存する。当初は口縁部も残存していると考えたが、上端部を輪積み部分で外れた擬口縁とする場合、1124の下部と接合するとみなすことも可能である。接合した場合、透孔は直径2cm程と推測される。2点ともに胎土は砂粒を多く含む。

SD1014 (1123)

1123は両端が欠損している。体部片であろうか。赤色粒子を比較的多く含む。

SD1037東 (1125・1126)

1125は筒抜けの底部片で、底径17.0cmを測る。端部は平坦に作られ、内湾気味となる。全体に厚い作りで砂粒を多く含む。1126は口径14.5cmを測る。底部は欠損し、口縁端部は平坦な作りである。外面の凹凸は部分的に面を持ち、板状の工具で成形した痕跡とみられる。砂粒の他に赤色粒子も多く含む。

I区IV層 (1127)

1127は端部に面を持ち、若干先細りで外反する口縁部破片であろうか。透孔が1か所認められる。砂粒を多く含む。

SK1083 (1134)

1134は両端が欠損し、剥離面も多い体部片で、楕円形の透孔が1か所残る。直径は13.8cmを測る。直径3mm程の比較的大きい砂粒を多く含み、色調は他に比べて白色気味である。

SD1085 (1135)

1135は端部に面を持ち、透孔が1か所認められる。色調や胎土は1134と類似する。

河川SD976 (1136~1140)

1136~1138、1140はいずれも筒抜けの底部片とみられる。1136は底径10cmを測り、端部は平坦で内面が肥厚する。外面は板状の工具で縦方向にナデの痕跡が残る。砂粒を多く含む。1137は底径9cmを測り、体部は内湾する。内面調整がほとんどされておらず、明瞭に輪積み痕が残る。1138は底径13.5cmを測り、内面と底部にハケメ調整が残る。端部は平坦であるが、他とは異なりわずかに内端接地となる。1139は底径25.2cmを測る平底の製塩土器である。欠損しているため全体の形状は不明で、外面の底部付近に指頭圧痕が多く残る。器面は内外ともに赤褐色が強い。2次焼成を受け表面が硬化している。1140は外面から底部にかけてススが付着する。調整は粗く器面の凹凸が目立つ。端部はわずかに内面へせり出す。赤色粒子を多く含む。残存部分が少ないが、底径は17.4cm程である。

SK110 (1148)

1148は全形が伺える唯一のものである。口径13.2cm、底径13.5cm、器高14.4cmを測る。底部に向かって厚みを増し、底部端面は平坦で安定した作りとなる。透孔は欠損しているが、ほぼ均等な間隔で4か所残存し、長軸4.9cm、短軸3.3cm程の楕円形を呈す。

II区整地層 (1149)

1149は口縁部破片と考えられ、口径12.8cmを測る。器面は荒れており、調整は不鮮明である。

(2) 土錘

I区から4点、II区から60点が出土した。全て土師質である。形態から以下の3類に分類できる。

A類 管状で太型のもの(1130~1132)。粘土紐を棒に巻きつけた後、成形したものである。長さ6~7cm、重さは30~50gほどである。

B類 管状で細型のもの。製作技法はA類と同様であるがA類に比べ小型で軽量である。B類のうち細長い作りのB1類(1129、1141~1144)、短く小型で中央部分が膨らむ形状のB2類(1151~1202)に分けられる。B1類は長さ5cmほど、重さ7~8gほどのもの、B2類は長さ2~4cm、重さ2~8gほどである。

C類 球状のもの(1133、1145~1147)。粘土塊をあらかじめ球状に整形した後、棒状工具で穿孔したものである。直径3cmほど、重さ30gほどである。

I 区IV層 (1129)

1129は欠損部分が大きく摩耗も激しいため全形は不明であるが、残存部分よりB 1類と推測できる。胎土は橙色を基調とする。

S D 977 (1130~1132)

1130~1132はA類で、1130、1131は形態、重量がともに近い。1131は押しつぶしたような、断面楕円形を呈す。1132は他の2点に比べてやや大振りな作りで、胎土も砂粒が多く表面は粗い。

II 区VI層 (1133)

1133はC類である。表面は成形時の指頭圧痕が目立つ。

S D 378 (1141~1144)

1141~1144はB 1類で、全体的に胎土に含まれる砂粒は少ない。1141、1142は端部が薄く剥離しており、製作時に棒状のものに胎土を巻き付けた痕跡が確認される。黒斑が多い。1143、1144は半分以上が欠損している。摩耗が激しいため断定できないが、同一個体の可能性がある。

P 205 (1145)

1145はC類で他の球状土錘に比べて白色基調を呈す。表面は球体を意識した作りである。

S K 294 (1146)

1146はC類である。穿孔の直径が両端で若干広がる。表面は砂粒が多い。

S X 119 (1147)

1147はC類である。表面は砂粒が多い。他に比べて作りがやや縦長である。

S K 510 (1151~1202)

1151~1202は全てB 2類で、ほとんどが完形品である。長さは3 cm台のものが全体の3分の2を占める。孔の直径は0.3~0.4 cmでほぼ揃っている。重量は3 g台が12点で最も多く、次に4 g台、5 g台がそれぞれ11点ある。大きさや重量など、規格を揃えて作られている印象を受ける。胎土は全体的に砂粒が少なく、軟い焼成のものが多い。黒斑のあるものもみられるが、概ね灰白色を基調とする。本出土品は同一地点から密集して出土したもので、本来は網一式分の土錘であった可能性が高い。

(3) 土製紡錘車**I 区IV層 (1128)**

1128は直径10.5 cm、厚さ1.2 cmを測る円盤状の土製品であり、形状から紡錘車と考えられる。全体の4分の3程が残存する。中央に直径1 cmの孔が焼成前に穿たれており、表面は3条の溝が約1 cm間隔で規則的に巡る。両面ともに平坦な作りで、厚さはほぼ一定であるが円の外側に向かってわずかに薄くなる。縁は斜めに整えられている。土師質で、胎土は径2~3 mmの砂粒が目立つ。

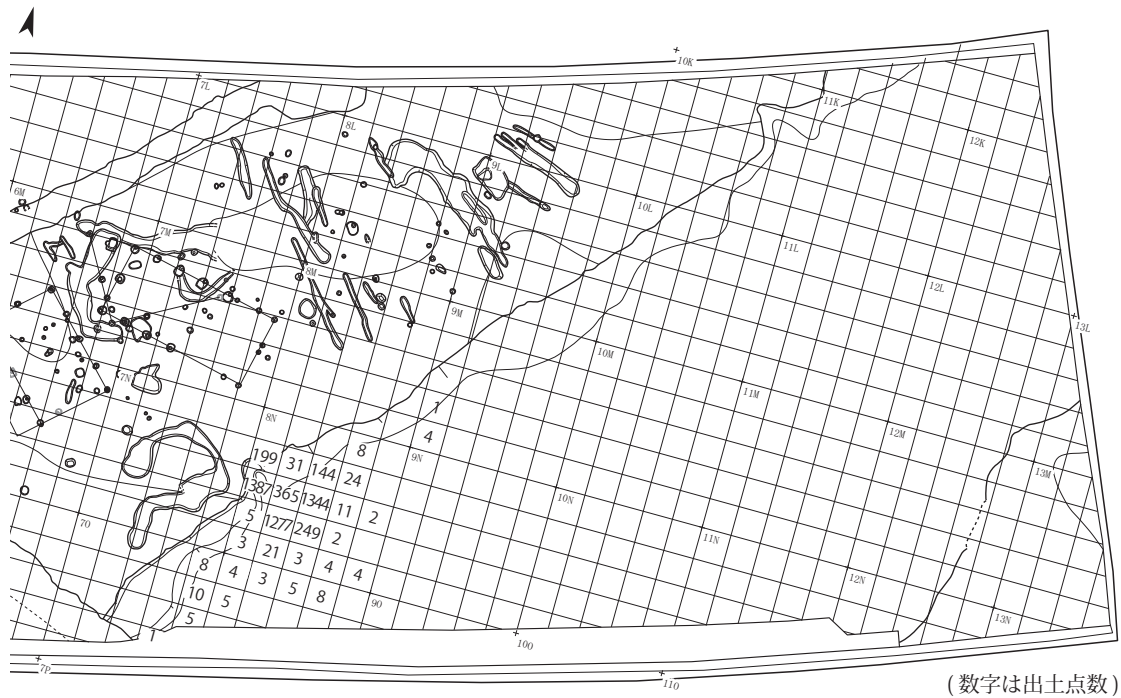
II 区IV層 (1150)

1150は直径4.5 cm程を測り、若干剥離や欠損が見られるがほぼ全形を残す。中央に直径0.7 cmの孔が穿たれ、厚さは1.3 cmを測る。裏面の直径は3 cmを測り、指頭圧痕が多く残る。土師質で、胎土は径1 mm以下の砂粒がやや多くザラザラとした質感である。

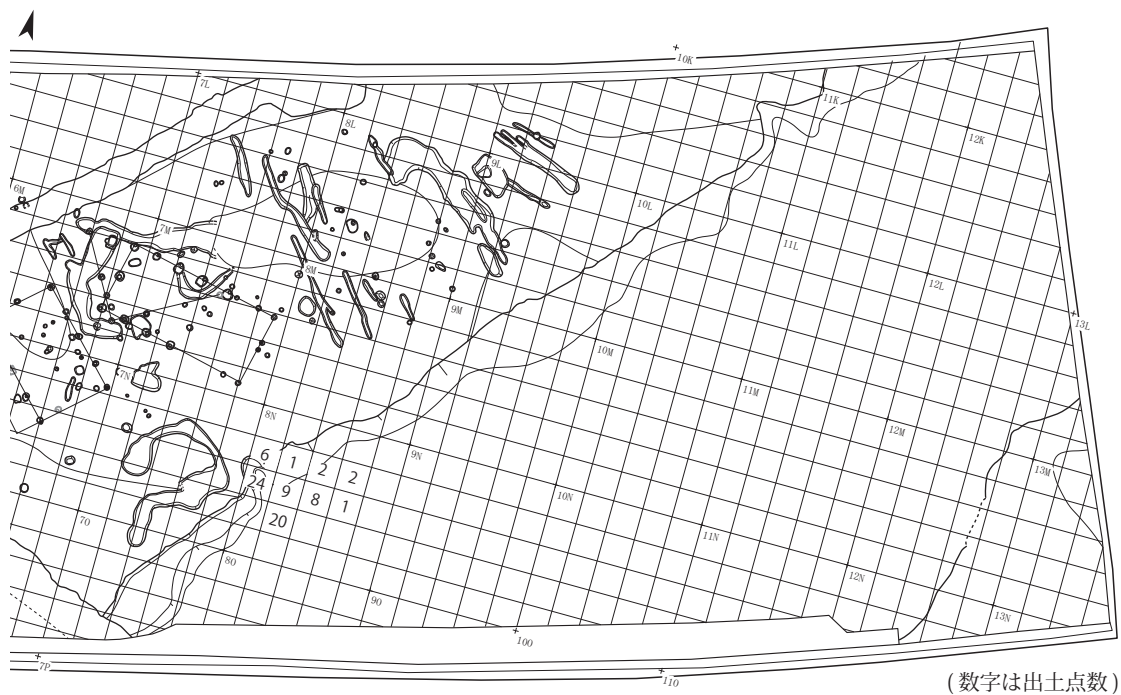
3 木製品

(1) 概要

建築部材・木製品および未製品・端材等の加工痕が観察できる資料が、全体で5,405点出土した。容器等の形が復元できるものや用途が推定できるものは少数で、個体数の9割にあたる4,897点は端材等の小片で占められる。河川SD976・SD981から出土したものが主体であり、その他は柱穴から柱根が計38点出土している（第24・25図、第5・6表）。本項では古代の流路跡である河川SD976を中心に取り扱う。



第24図 木製品・加工材・端材出土分布図



第25図 サクラ樹皮出土分布図

(2) 分類と記述の方法

用途が想定できる遺物は、[奈良国立文化財研究所 1985・1993] および [伊東ほか編 2012] を参考に分類を行った。加工材・端材等は形状および用材により分類した(第26図)。サクラ樹皮の分類・観察では、浦蓉子氏による指導を仰ぎ、八日市地方遺跡における調査成果 [浦 2014] を参考にした。長さ・幅・厚さに関しては、原形を留めない部材または端材が多いため、残存部位で最大となる長さを測定し、観察表に記載した。容器については、口径・底径・器高および器壁の厚さが復元できるものに関して記述を行った。また、実測図における上下左右は便宜的なものであり、一部の用途不明品および加工材・端材に関しては本来想定されるべき向きとは異なる可能性がある。

A 柱根

形状によって以下のとおり細分することが可能である。1. 底面を平坦に加工するもの。2. 底面を平坦に加工し、底面付近に抉り(溝)を巡らすもの。3. 底面が斜めに切削され杭状を呈するもの。4. 底面の劣化が著しく形状不明のもの。木取りは丸木および辺材の2通りがある。

B 杭

先端部の加工が明瞭であるもの、打設された状況が認められるものを一括した。古墳時代の杭は河川SD466出土の3点で、加工痕の不明瞭な粗割材状であるが、古代の杭は丸木材を用い先端部を3または4方向から切削することによって尖らせたものと、1238のように板材を用い左右両側面より斜めに切削することによって先端部を作出するものが認められる。中世の杭は41点あり、先端加工を行うものと先端加工の不明瞭な焼杭の2種が認められた。

C 容器

挽物および曲物がある。挽物が2点、曲物は復元可能な側板が1点出土し、その他は部材と考えられる。底板または蓋板が2点、側板破片は4点ある。細片化の進んだ個体は加工材・端材と区別するのが困難であるため、後述する加工材のうち薄手で柃目材の個体には曲物側板であったものを含む可能性がある。また、曲物の綴じ方に関しては[奈良国立文化財研究所 1985]に依った。

D 木製品

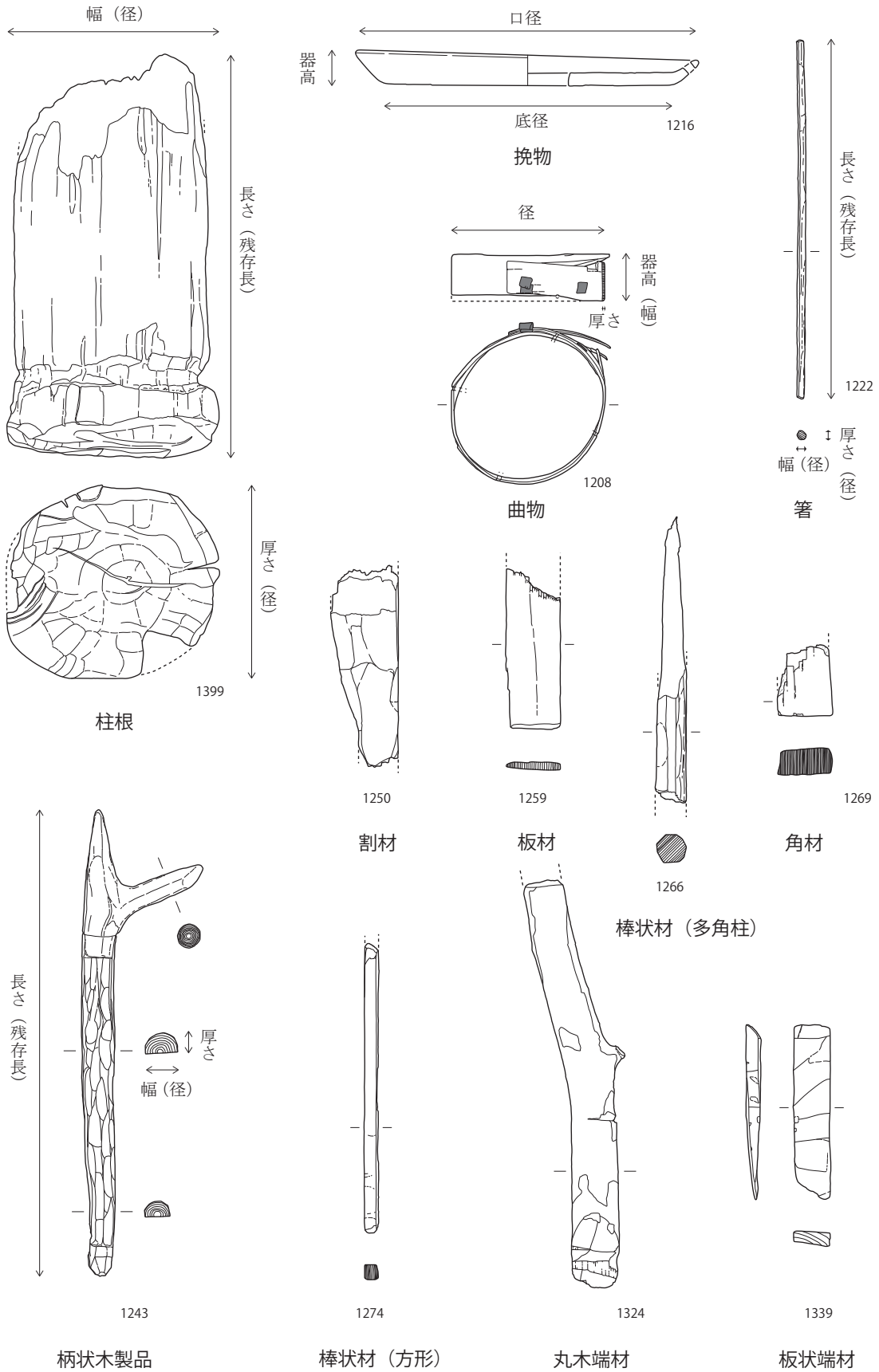
箸・斎串・部材・柄状木製品・その他木製品がある。形状・法量が個体毎に異なり細分が困難であるものが多いため、形態的特徴の類似した個体を一括した。

E 加工材

製材の工程段階を想定して割材・板材・角材・棒状材に分類した。なお、割材・板材の中には製材時や製品製作時に生じた端材、棒状材の中には2次加工部材を一部含むと考えられる。

割材 法量が比較的大きく、粗割のまま側面が未調整である。切削痕の単位も粗雑であるものを一括した。

板材 幅と厚さの比が2:1以上となる薄板状のものを一括した。木簡の一部や指物等、異なる用途のものを含む可能性がある。



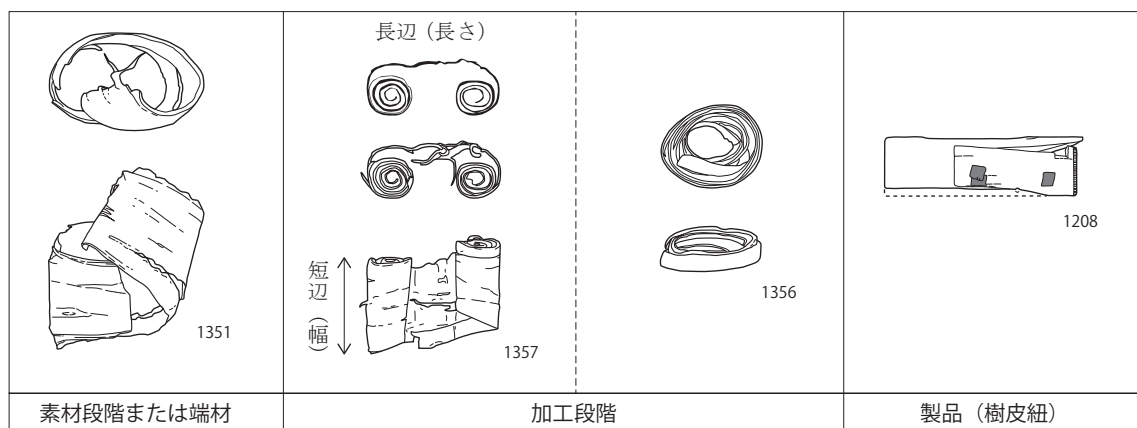
第 26 図 主な木製品および加工材・端材

角材 幅と厚さの比が2：1未満となる厚板状のものを一括した。端部断面の切断角度により、長軸に対し直交するものと斜めに切断されているもの、両端が欠損するものに分けられる。

棒状材 断面が多角形のものや方形のものがある。側面調整を行い多角柱となる棒状材は、端部を欠損している個体が多く、残存長を記載した。幅・厚さに関しては便宜的なものであり、より長い方をとって最大径とする。未成品または柄の一部としての用途が考えられる。断面が方形となる棒状材は、用材により指物等の部材である可能性があるものを含む。端部を欠損しているものも多く、法量の記述にあたっては残存長を記載した。

端材 形状や加工痕の観察から、主に木製品製作時に不要となった切削屑や木片、または製品部材や未成品として想定し難い個体を一括して端材とした。結果として、今回の調査で最も多い4,862点を数える。断面形状により丸木端材と板状端材に細分した。丸木端材は、丸木材の中で端部が斜めに切断されているものを一括した。枝の処理や切削痕の角度から杭としての用途が想定されないものが主体である。板状端材は、辺材で端部を斜めに切断されているものを一括した。断面形が長方形を呈し全体の形状が薄板状を呈するものが多い。また、長軸の両端共に切断痕が認められるものを含む。図化にあたっては便宜的に長軸を上下方向にとり、残存長を長さとして記載した。

サクラ樹皮 河川 SD976内 SX1209周辺に集中して出土する傾向が見られる(第25図)。浦氏の分類[浦2014]に準拠し、1. 素材段階または端材、2. 加工段階に大別した(第27図)。加工段階とした資料の中には、製品としての可能性が考えられる個体も含まれる。ただし、既に製品化され曲物の一部として出土した個体については扱わない。樹皮の性質上、資料は樹皮の両端から長辺方向に丸まった状態で出土することが多い。このため、記述にあたっては樹皮の長辺の長さを測定し記述した。長辺端部と記述した場合、繊維方向に沿った辺それぞれ自体を指す。また、繊維方向(長辺)に長く成形される樹皮製品の形状から、短辺の長さに関しては幅と呼称する場合がある。短辺端部と記述した場合、繊維方向に直交する辺それぞれ自体を指す。図化にあたっては上下および左右に関しては便宜的なものであり、原木からの剥ぎ取り時や製品としての向きはこれと異なる個体も含まれる可能性がある。長辺端部には、原木から素材を剥ぎ取る際や手で裂いた際に断面が層状を呈するという[浦2014]。この痕跡を浦氏の分類に準拠し、「剥ぎ取り痕」と呼称する。同様に、加工の際に刃物で切り取られた際に形成された平滑な痕跡に対して「断ち切り痕」とする。端部が不整形の場合、「割れ」とした。各説における曲物の項で綴じ方に言及する際、特に断りが無い限り製品に対しては「樹皮紐」と呼称する。



第27図 サクラ樹皮における樹皮紐製作工程

(3) 各説

A I区遺構出土(図版161、図版298)

S B 25 - P 1094 (1203)

1203は残存長29cm、最大径9.1cmを測る柱根である。丸木材が使用されている。腐食が進んでおり、上下端部とも折損し、一部空洞化している。

S B 26 - P 1103・P 1107 (1204・1205)

1204は残存長37.1cm、幅20.8cm、厚さ14cmを測る柱根である。ミカン割り辺材で、断面形状は不整な長方形を呈する。上端は中央に向かい斜行しており、切損している可能性がある。下端は腐食によるためか、不整形である。側面に整形時の切削痕が残る。1205は残存長18.5cm、最大径14.7cmを測る柱根である。丸木材で、腐食により芯は空洞化が進む。上下端部とも折損しており、加工痕は不明瞭である。

P 1177 (1206)

1206は柱根である。残存長35.7cm、最大径10.2cmを測る。上下端部とも折損しており、加工痕は不明瞭である。

S D 977 (1207)

1207は用途不明の木製品で、底面付近から出土した。長さ12.7cm、幅2.7cm、厚さ2.4cmを測る。上端は一部欠損し、下端部は蛤歯状を呈する。左右側面には長軸方向に沿う溝がある。表裏の調整は平滑で、加工痕は不明瞭である。

B I区河川出土(図版161~171、図版298~304)

河川 S D 976 (1208~1366)

板杭、容器(挽物・曲物)、木製品(箸・斎串・部材・柄状木製品)、加工材(割材・板材・角材・棒状材)、端材(丸木端材・板状端材)、サクラ樹皮が出土した。なお、SX1209の範囲に含まれる遺物も河川SD976と合わせて記述する。

1238は残存長30cm、幅5.5cm、厚さ1cmを測る板杭である。短軸方向の断面は長方形を呈する。上端は折損しており、下端は先端部に向け細くなるよう左右側面から加工されている。加工痕は不明瞭である。

1216・1217は挽物の盤である。1216は口径22.8cm、器高2.4cm、底径19cmを測る。平底で体部が直線的に広がる。内外面とも直線状の使用痕が残る、底部外周にはロクロ挽きの凹凸が認められる。横木取りである。中央付近に径5.3cmの孔が穿たれており、口縁部直下にも3mm程度の小孔が2か所ある。蓋として転用されたと考えられる。1217は底部および体部下部のみ残存する。復元底径は21.8cmを測る。内外面とも平滑に調整されている。平底で体部の立ち上がりは緩やかに内湾する。

1208~1213・1234は曲物およびその部材である。1208は口径10.2cm、器高3.1cmを測る。側板下部に4か所の木釘孔が残る。綴じは2列ある。図面中央の綴じ方は、側板端部が細くなるよう加工されている可能性があり、外綴じと考えられる。図面右側の綴じ方は内2段綴じか。1209は側板である。木目に沿って短冊状に割裂しており、上下端部とも欠損する。2列の樹皮紐により各破片が繋がりを保っている状況である。右側端部に側板端部が一部残存、角を取る加工が行われている。1210はケビキ痕が残る板材で曲物側板の一部と考えられる。1211は幅(器高)2.9cmの板材である。上下端部とも側面は平滑である。左右端部は共に折損している。長軸方向に湾曲しており、曲物側板の一部と考えられる。1212・1213は底板である。1212は復元径33.6cm、厚さ1cmを測る。表裏および側面の一部が平滑に加工されている。

1213は径18.3cm、厚さ0.9cmを測る。板目材で、側面は平滑に調整されている。1234は表面にケビキ痕が認められる。厚さは0.3cmを測る。左右側面は平滑に調整されている。曲物側板の一部と考えられる。

1218～1232は箸で、河川SD976内では92点出土し、15点を図示した。1221および1222は両端部が残存しており、長さは各々20.6cmと23.8cmを測る。1218～1220は上端を欠損しているが、残存長が20cm前後あり、比較的遺存状況は良好である。断面形は円を志向した多角形が主体で、1221・1231のように偏平なものも含む。1218は同一グリッド内(8N11)で3点に分割した状態で出土した。折損時の影響か、湾曲している。1219は2片に折れた状態で出土した。1220は下端部が細くなるよう加工されている。1221は側面の加工痕が明瞭で、下端部が細く調整される。図面における正面の加工単位が大きく、断面形が偏平である。1222は上下端部とも丸みをもって収められている。直径は一樣である。1223・1228は1220同様、下端部が細く調整されている。1226・1227・1229・1231・1232も下端部を細く調整する意図が認められるが、1223・1228ほど顕著ではない。1228は下端部付近で折れている。

1239～1241は斎串である。1239は完形で、長軸方向に湾曲している。上端部中央には方形の突出部を持つ。上端付近では表裏面調整時の切削痕が残る。1240は下端部付近のみ残存し、更に半割した状態で出土した。下端部は切削痕が認められ、平坦面を持つ。1241も下端部付近のみ残存する。先端部は摩耗し丸みを帯びている。

1235は部材で、残存長13.5cm、幅2.9cm、厚さ1.6cmを測る。両端とも折損している。断面形は表裏面が広い楕円形を呈する。残存部位のほぼ中央には長軸1.6cm、短軸1.1cmの方形を呈する柄穴が穿たれている。辺材を使用している。調度等の部材と考えられる。

1237・1242～1244は柄状木製品である。1237は両端を欠損、1242～1244の3点は両端が遺存している。4点とも短軸の断面形が半円形を呈する棒状の加工材である。1237は残存長52.5cm、幅3.2cmで辺材が使用されている。長軸方向の長い加工痕により面取り加工が行われ、表面は平滑に調整されている。下端部付近は欠損しており、断面形は長方形を呈する。1242は長さ59.7cm、径3.4cmを測り、丸木材が用いられている。上端付近は枝を利用してY字状に成形されており、長軸方向に樹皮を剥離した痕跡が認められる。上端付近は断面形が円形を呈し丸木のまま使用されているのに対し、柄部と考えられる下半においては、断面形が半円状を呈している。Y字部と柄部の境界には長さ7.8cmに渡り抉り加工が行われており、細くなっている。また、表面下端部も同様に7.3cmに渡り抉り加工が行われている。裏面においてはY字部以外が平坦に調整され、上記2か所の欠込み部の裏面のみ、僅かに他の部材が圧着していた痕跡が認められる。1243は長さ46.6cm、径3.4cmを測り、丸木材が用いられている。1242同様に枝を利用してY字部が成形されているが、1243の場合はY字の片側が柄部主軸の延長線上にあり、左右のバランスが均等ではない。Y字部の調整は枝の長軸方向に沿って行われている。また、柄部との境界には、長さ2.4cmに渡り断面を方形に成形した部位がある。1243の柄部成形にあたっては長軸に沿う点で1242と類似するが、加工単位の長さは短い。また、裏面の加工痕は比較的明瞭に残る。下端部から長さ3.5cmの範囲は柄部より太く、端部に面取りを行うことで丸く成形している。1244は長さ45.8cm、幅3.1cmを測り、丸木材が用いられている。両端共に断面が長方形を呈し、柄部が半円形を呈する。表面と両側面には樹皮を剥離した際の長軸に沿う細かな加工痕の他、成形時の単位の大きな加工痕が明瞭に残る。裏面は全体的に単位の大きな加工痕が認められる。1242～1244の詳細な用途は不明であるが、それぞれ類似した製作技法を有していることから、同一製品の部材である可能性もある。

1245～1256は割材である。割材は17点出土、12点を図示した。1245は辺材が使用されている。断面

は三角形を呈する。表裏面とも切削痕が不明瞭で、粗割時のまま未調整である可能性が高い。上下端部は長軸に対し斜めに切断された痕跡が残る。1246は原木をミカン割りにした辺材が使用されている。断面は台形状を呈する。裏面にあたる樹皮側は腐食のため凹凸が著しい。下端部は長軸方向から斜めに切断されている。1247は柾目材で残存長13.4cmを測る。表面全体が炭化している。上端は折損であろうか。下端部は斜めに切断されている。1248は断面が扇形を呈する芯持材である。側面は長軸方向に沿った加工痕が明瞭である。断面方形を志向して行われた可能性が考えられる。上下端部とも切断痕が認められる。1249は表面全体が炭化しており、上下端部とも被熱または被熱後に欠損したと考えられる。裏面は生木状態であり、本資料は燃え残りであると考えられる。1250は表裏面および側面の加工痕が明瞭な資料である。下端部に向けて、表面および左右側面の3方向から刃物痕が認められ、先端部は折損する。切断時の痕跡と考えられる。1251は表裏面平滑で、上端部が斜めに切断されている。原木をミカン割りにした厚板状の加工材で、断面は不整な台形状を呈する。1252は残存長96.1cmを測る。断面は不整な方形を呈しており、原木をミカン割りにした辺材が使用されている。上端部は加工痕が認められている。上端から19.2cm下方には相欠き状の欠損部が認められるが、加工痕は不明瞭である。下端部は欠損しており、より長い状態で建築部材等に使用された可能性が考えられる。1253は断面が不整形を呈する。上下端部とも折損、右側側面も欠損する。加工痕は不明瞭である。1254・1255は共に辺材が使用されている。2点とも上端部は平坦で、下端部は折損している。左右側面は分割時のまま調整が行われていない可能性がある。1256は断面が不整な三角形を呈する。上端部は加工痕が明瞭に残り、下端部は折損している。

1214・1215・1236・1257～1264は板材である。板材は43点出土、11点を図示した。1214は表裏・左右側面とも平滑に調整されている。1215は左右を平滑に調整している。表裏面とも切削痕が認められる。1257は表裏面ともにリング状の断ち割り痕が残る。側面は右側のみ加工痕が明瞭に残り、平坦面を形成する。板成形時の端材の可能性はある。1258は長さ28.9cm、幅6.7cm、厚さ1.3cmを測る。腐食によって表面は平滑ではない。断面形は長方形を呈していたと考えられる。右側面の一部に平坦面が残る。1259は幅3.6cm、厚さ0.6cmの柾目材である。左右側面および下端部は平滑に調整されている。表裏面は加工痕が不明瞭であるが、長軸方向に切削されていた可能性がある。1260は1259とほぼ同じ法量をとるが、板目材である点が異なる。表面および上端部を欠損する。1261は下端を斜めに欠損する。表裏面とも平滑に調整されている。1262は表裏面を平滑に調整し、上下端部が斜めに切断されている。ほぼ長軸方向に向かい加工が施されている様子がうかがえる。表面中央付近には3mm程度の小孔が認められる。1263は上端部を斜めに切断されている。下端部は摩耗によるものか、隅丸形状を呈する。板目材である。1264は上端部を折損している。加工痕は不明瞭である。

1269～1271は角材である。角材は14点出土、3点を図示した。1269は下端から4.8cmの長さが残存する。各側面は平滑に調整されており、上端部を欠損する。欠損か所に炭化が認められる。1270は表裏面および右側面が平滑に調整されている。上下端部とも欠損する。1271は各側面が平滑に調整されている。表面・裏面に長軸方向に沿った加工痕が認められる。下端部は表面側から斜めに切断されている。

1265～1268・1272～1315は棒状材である。多角柱を呈する棒状材は12点出土、4点を図示した(1265～1268)。2次加工された部材と考えられる。1265は断面形が不整な七角形を呈する。辺材が使用されている。上端部は炭化しており、何らかの要因で被熱した燃え残りと考えられる。加工痕は長軸方向に施される。1266は断面形が九角形を呈する。辺材が使用されている。上端部は斜めに割けた状態である。1267は断面形が八角形を呈する。辺材が使用されている。上端部は1266同様に斜めに折損している。下

端部はやや丸みのある平坦面が遺存する。加工方向は長軸に沿っている。1268は断面形が不整な七角形を呈する。辺材が使用されている。加工は長軸に沿って行われ、下端付近では工具の当たりが強すぎたことによる段差を生じている。角柱状の材は89点出土、44点を図示した(1272~1315)。1272は上下端部とも折損、表面は平滑に調整されている。1273は上下端部とも欠損する。上端部付近でわずかに湾曲している。1274は上端部のみ折損している。下端部は丸みを持った平坦面が作出されている。表裏面は平滑に調整されており、調度等の部材と考えられる。1275は左側面が未調整または欠損している可能性がある。1276は上下端部および側面に切削痕が認められる。下端部は表裏面側から斜めに加工され、先端部が細くなっている。1277は上下端部とも折損している。左側側面も調整の痕跡が不明瞭で、欠損している可能性がある。1278は下端部に加工痕が認められ、先端部を細く作出しようとしていた可能性がある。箸等の未成品か。1279は上下端部が折損している。下端部に向けて2方向から斜めに加工され、先端部が細くなっている。より長い部材の切断された端材か。1280は上下端部とも折損している。1281は下端部に平坦面を持つ。表面および側面が断ち割り時のままか。1282は上下端部とも折損している。下端部付近の側面には刃物痕が残る。1283は上端部が欠損している。平坦面を持ち、切断された可能性がある。下端部は斜め方向に切断されている。1284は表裏面および側面が平滑に調整されている。上下端部とも折損しており、下端部付近には表裏面からの切削痕が認められる。1285は上端部が折損している。表裏面および側面は平滑に調整されている。下端部は先端付近が炭化し、斜めに欠損している。部材の燃え残りか。1286は3破片が接合した。上下端部とも折損している。表面は平滑に調整されている。1287は断面が平行四辺形を呈する破片である。上下端部とも折損している。1288は2破片が接合した。上下端部とも折損している。表裏面および側面は平滑に調整されていたと考えられるが、表面は劣化して凹凸がある。板目取りである。1289は上下端部とも折損している。表裏面および側面には長軸方向に沿った切削痕が残る。1290は上下端部とも折損している。表面は平滑で、側面は木目に沿って割れが生じている。1291は側面の一部および下端部を面取りしている。そのため、上半では断面が六角形を呈し、下半では断面が方形を呈する。上端部は折損している。1292は3点が接合した。断面形は不整な三角形を呈する。上端は折損、下端は長軸に対し直交して切断されている。表裏面には長軸方向に沿った加工痕が残る。1293は2点が接合した。表面は長軸方向に沿った加工痕が残り、木目が一部ささくれ立つ。断面形は不整形を呈するが、側面および裏面が平滑に調整されていることから、断面が方形を呈する調度等の部材であった可能性が考えられる。1294は表裏面が平滑に加工されており、側面はリング状に波打つ平坦面が作出されている。上端部は折損しており、下端部は左右から斜めに切削されている。1295は左右側面が平滑に調整されている。表面は折損時によるものか、凹凸が残る。上端部は折損し、下端部は斜めに切断されている。1296は下端部が折損されている。表面は平滑に調整されている。1297は上下端部とも折損している。表裏・両側面ともに平滑に調整されている。表面下端部付近には長軸方向に沿った加工痕が認められる。左右側面とも面取りが行われており、断面形は不整な六角形を呈する。1298は表面が平滑に加工され、下端部は長軸に直交して折損している。上端部はささくれ立っており、折損か。1299は右側面が平滑、左側面は破面となる。下端部には斜め方向の切断痕が残る。1300・1301は共に表裏面平滑で上下端部とも折損している。1302は表裏面が平滑に調整され、断面形は方形を呈する。上端部に対して4方向から斜めに切削しており、先端部は山形に尖る。切断時の痕跡か。1303は上端部が折損し、下端部は斜めに切断されている。側面は平滑に調整されている。1304は3破片が接合した。下端部は長軸に対してほぼ直交する平坦面を持ち、切断された可能性が考えられる。幅1.5cmの板材として捉えるべきか。1305は下端部に平坦面を持つ。1306・1307は上下端部に表

裏面から挟りが入り、両端共に丸い先端部が作出されている。共に長さ8cm台、幅0.7cm、厚さ0.4cmを測り、近似した形状・法量を呈する。断面は方形で、表裏および両側面は平滑に調整されている。調度の部材又は浮子と考えられる。1307は2破片が接合した。1308は上端が折損し、下端が切断されている。表裏および両側面は平滑に調整されている。1309は3破片が接合した。表裏および側面は平滑に調整されている。上端部は破面が平滑で切断された可能性が考えられる。1310は上端が切損している。下端部は折損か。表面は腐食による凹凸が認められるが、本来は平滑面となるよう調整されていたと考えられる。1311は2破片が接合した。表裏面は平滑に調整されている。両端部とも残存か所は平坦である。1312は2破片が接合した。上端部は折損しており、下端部は4方向から斜めに切断している。側面は上半がささくれ立ち、下半には切削痕が残る。1313は、断面が三角形を呈する。上端部は折損しており、下端部は薄くなるよう斜めの加工痕が認められる。1314は両端とも折損する。側面に長軸方向に沿って施された加工痕が残る。1315は断面形が台形または三角形を呈する小破片である。腐食により丸みの強い個体である。

1316～1327は丸木端材である。下端部に鋭角の切削面があり、上端部が折損となる個体が多い。丸木端材は36点出土し、12点を図示した。1316～1318の3点はSX1209から出土した。1316と1317は共に同一個体と考えられるが、接合しない。1316および1318はSX1209または河川SD976底面に直立した状態で出土しており、杭である可能性も考えられる。2点とも残存長36.3～48.1cm、幅9.8～10cmを測り、法量は近似する。また、両者とも上端部が折損し、下端部が長軸に対して斜め方向からの切削痕により加工されている。1316は先端部の加工が表裏の2方向から行われている。2点の加工に際して、加工痕で観察できる刃こぼれの位置から、同一工具を用いたと考えられる。1317は一部に樹皮が残る。1318は上端部付近に枝の痕跡が残り、折損している。下端部は大別して3方向からの切削痕が認められる。先端部は腐食によるためか、欠損する。側面の大部分は樹皮が残る。杭としての可能性も考えられる。1319は図面左寄りに湾曲する枝の一部で、扁平な丸木材が用いられている。上端部は折損、下端部は斜めに切削されている。木材加工時の端材か。1320は半割状の端材である。上端部および下端部は斜めに切削されている。1321は裏面が破面となっている。上端部は折損、下端部は斜めに切削されている。1322は3破片が接合した。上下端部とも長軸に対し直交する切削面を持つ。切削痕は3方向から施されている。1323は下端部が斜めに切削されている。先端部は有段状で、工具が止まった痕跡と考えられる。上端部は先端部付近が炭化しており、焼き損じたと考えられる。1324は全体に樹皮が残る。下端部は前後2方向から斜めに切削されており尖る。側面の中ほどに枝を裁ち落とした痕跡が認められる。杭として使用されていた可能性が考えられる。1325は下端部に向け細かな切削痕が巡る。鉛筆の芯を削り出すような加工で、先端部が折損する。棒状材切削時の端材か。1326は断面が半割状を呈する。下端部は大別して4方向からの細かな加工痕で作出されている。1327は全体が炭化している。下端部は大別して5方向からの細かな加工痕で作出され、先端部は加工痕が不明瞭である。棒状材切削時の端材と考えられる。

1328～1344は板状端材である。上下端部とも鋭角となるものを一括した。手斧などの切削くずや割り裂き時のブロックであると考えられる。板状端材は4,826点出土し、17点図示した。1328は上下端部ともに斜めから切削されている。1329は表面が平滑で、上下端部とも折損している。1330は表面に切削痕が残る。1331は接合しない2破片がある。表面は平滑で1331bは端部が斜めに切削されている。裏面は割裂時のままと考えられる。1332は下端部が斜めに切削されている。1333は節目付近の材である。断面方形に加工されている。下端部は表裏面から斜めに切削されている。1334・1335は表面に加工痕が明瞭に残る。上下端部に向け斜めに切削されており、木製品製作時の端材と考えられる。1336は表面長軸

方向に沿って施された加工痕が明瞭に残る。厚さは3mmと薄い。1337はブロック状の加工材である。上下・左右ともに加工痕が残る。1338は3破片が接合した。断面が三角形を呈する端材である。1339は表面および側面に長軸方向に沿った加工痕が残り、断面長方形に成形されている。上端部は斜めに切削されている。1340は2破片が接合した。表面上端部付近に長軸4.5cm程度の箱型の抉りが認められる。下端は斜めに切削されている。1341は表裏面とも斜めに切削されている。端部の尖り厚さが5mmと薄く、木製品切削時の端材だと考えられる。1342は上下端部に向けた切削痕がある。1343は表面下端部および裏面に切削痕が認められる。1344は上下端部とも斜めに切削されている。

1345～1366はサクラ樹皮である。74点が出土し、22点を図示した。この内、1348・1349・1351・1352の4点は素材段階または残材と考えられる。その他は加工段階と捉えられ、工程により1345～1347・1350・1354・1355・1357・1362・1364～1366の11点はより素材に近い段階、1353・1356・1358～1361・1363の7点はより製品に近い段階に分けられる。1345は長辺および短辺の両端が直線的に断ち切られる。短辺端部は一部欠損する。1346は上半の一部が裂けて二重に巻く。長辺両端とも剥ぎ取り痕が認められ、短辺端部は巻きの外側が断ち切りで内側は割れである。1347は斜めに巻いている。長辺上端には剥ぎ取り痕が認められる。巻きの外側にあたる短辺端部は断ち切り痕がある。1348は長辺上端に剥ぎ取り痕が認められる。下端は割れであろうか。短辺端部は両端共に割れている。表面には皮目が残っており、残材の可能性が高い。1349は両短辺から巻き込んでいる。長辺は両端とも剥ぎ取り痕が認められる。短辺端部は形状が判然としない。1350は短辺の端部は断ち切り痕が認められる。先端部に向け幅が細くなっており樹皮の幅が一定しないため、未製品と考えられる。1351は長辺両端共に剥ぎ取り痕が認められる。短辺は割れており、残材の可能性が高い。1352は左右端部から巻き込んでいる。長辺両端共に剥ぎ取り痕、短辺は右側端部が割れ、左側端部は断ち切り痕が認められる。皮目が残り表面には凹凸があり、加工の早い段階における残材である可能性が考えられる。1353は長辺の長さ20cm、幅0.23cmを測り、紐状を呈する。厚さは2mmで、製品とするには厚い。1354は幅7.2cmの樹皮が左右から巻き込んでいる。短辺長から、加工段階でもより素材に近い段階に位置するものと考えられる。1355は樹皮が左右から巻き込んでいる。1356は残存長28.5cm、幅0.4cmを測り、紐状を呈する。製品に近い段階と捉えられる。1357は左右から巻き込んでいる。長辺上端は一部層状を呈する。下端および短辺端部には断ち切り痕が認められる。1358は短辺両端とも割れている。厚さは1mmと厚く、加工段階と捉えられる。1359は幅0.24cmの紐状樹皮が縛られたような状態で出土した。製品に近い段階と考えられる。1360は幅が1cmから0.3cmの間で推移する。幅が均等とはならず、加工段階のものと考えられる。1361は短辺両端とも断ち切り痕が認められる。製品とするには最大幅が1.6cmと広く、一定しない。加工段階と考えられる。1362は短辺両端が割れている。1363は残存長6.7cm、幅0.6cm、厚さ0.6mmの紐状を呈する。図面右側の短辺は断ち切りにより成形されている。折り曲げられたような圧痕から、製品段階の可能性が高いと考えられる。1364は割れの大きな細片である。加工時の残材と考えられる。1365は短辺が割れている。1366は長辺・短辺とも断ち切りが行われている。

C II区遺構出土(図版174～179、図版307～310)

S B 7 - P 573～P 576・P 955 (1394～1397)

柱根4点を図示した。1394は残存長33cm、最大径22.9cmを測り、断面は円形を呈する。辺材が用いられており、側面調整が施されていたと考えられるが、加工痕は不明瞭である。底面の加工痕は比較的明瞭に残り、平坦面が成形される。1395は残存長40cm、最大径27.3cmを測り、断面は円形を呈する。丸木材

が用いられている。底面は平坦に調整されている。側面下部には上下方向に沿った切削痕が認められる。また、底面付近には、横位の刃物痕が残る。原木切り離し時の痕跡か。1396は腐食が著しく、底面付近のみが残存する。最大径は27.2cmを測る。丸木材が用いられており、芯より腐食が進んだ結果、放射状に割裂している。1397は残存長28.6cm、幅26cm、厚さ17.7cmを測る。芯持材で断面形はミカン割り状を呈する。底面に向けて3方向からの切削痕があり、底面は杭状に尖る。

SB9 - P612・P615・P617・P632・P716 (1398~1402)

柱根5点を図示した。1398は残存長24.8cm、最大径25.4cmを測る。断面形は円形で、丸木材が用いられている。芯付近は腐食が進み空洞化しており、2破片に分裂した状態で出土した。底面は平坦に調整されており、底面の立ち上がりでは面取り加工状の加工痕が認められる。また、底面から10cm付近の高さで幅4cm程度の溝が巡る。抉りは柱根の上位から下位に向けて施され、木材搬出時の縄掛け用と考えられる。1399は残存長53.7cm、最大径28.1cmを測る。断面形は円形で、丸木材が用いられている。底面は平坦に調整されている。底面から5.4cm付近の高さで幅4.8cm程度の抉りが巡る。抉りは1398同様に、柱根の上位から下位に向けて施されている。1400は残存長34.4cm、最大径32cmを測る。断面形は楕円形で、丸木材が用いられている。芯を通る割れがあり、2破片に分かれた状態で出土した。底面は平坦に加工され、図面左側では立ち上がりが斜めに切削されている。伐採後の切り口や、原材切り出し時に発生したささくれや割れを処理した結果である可能性が考えられる。1401は残存長12cmを測る。腐食により大部分が欠損している。底面は平坦に調整されていたと考えられる。1402は残存長55.3cm、最大径33.8cmを測る。断面形は円形で、丸木材が用いられている。上端部は腐食して鉛筆の先状に細くなっており、加工痕は不明瞭だがSB9廃絶時に切断された可能性がある。底面は平坦に調整されている。刃こぼれの痕跡から、底面調整は図面左上から右下に向けて加工が施された状況がうかがえる。底面から9.6cm付近の高さで浅い抉り状の圧痕が認められる。幅は0.48~3.6cm程度で幅は不均一である。このため、抉りとして直接加工されたものではなく、欠損の可能性もある。

SB10 - P647 (1403)

1403は残存長44.7cm、最大径23.5cmを測る。断面形は七角形で丸木材が用いられている。底面は大別して3方向から先端を尖らせるように切削されており、杭状を呈する。

SB12 - P683・P688・P696 (1404~1408)

1404は残存長26.4cm、最大径21.2cmを測る柱根である。断面は円形で、丸木材が用いられている。芯部は腐食が進んでおり、大部分が欠損する。1405~1407はP696から出土した木片で、礎板と考えられる。覆土中に散在していた。1405は長軸25.9cm、短軸11.9cm、厚さ5.1cmを測る。表面および左右側面、下面に加工痕が残る。表面の加工痕は斜めに施されているものがあり、これにより断面形は台形状を呈する。1406は長さ13cm、幅19.5cm、厚さ8.4cmを測る。芯持ち材が用いられている。上下端部には加工痕が残り、表裏面は割裂面である。1407は長さ43.7cm、幅8.5cm、厚さ5.5cmを測る。断面形は扇形を呈し、辺材が用いられている。表面は樹皮付近が原形を留め、左側面および裏面は割裂した状態である。下面は斜めに切断されている。1408は残存長41.5cm、幅29.2cm、厚さ19cmを測る。原木をミカン割りにした状態で使用されている。芯部は腐食によるためか、欠損する。底面は長軸に対し30°の角度で斜めに切断され、一部加工痕の明瞭な平滑面が残る。側面には面取り加工を行った痕跡が認められる。

SB14 - P666 (1409)

1409は残存長18.1cm、最大径14cmを測る柱根である。丸木材が使用されたと考えられるが、断面は腐

食のためか半円状を呈する。底面は平坦に調整されている。

S B 15 - P 738 (1410)

1410は残存長37.6cm、最大径9.2cmを測る柱根である。裏面は腐食によるためか、平坦な割裂面である。このため、断面形は不整な円形を呈する。底面は平坦に調整されており、左右側面の立ち上がりは面取りが行われる。

S B 21 - P 881 (1411)

1411は残存長23cm、最大径10.4cmを測る柱根である。芯持ちの丸木材であったと考えられるが、腐食により芯部が欠損し空洞化が進む。

S B 22 - P 862 (1412)

1412は残存長29cm、最大径20.5cmを測る柱根である。断面形は不整な円形を呈し、芯持ちの丸木材が用いられている。底面は長軸に対し71°の角度で斜めに切断されている。

S A 29 - P 821 (1413)

1413は残存長15.8cm、幅14.6cmを測る柱根である。辺材が用いられており、断面は不整形である。上端部は切損しており、底面は大半が欠損している。

S B 13 - P 673・P 675・P 677・P 680 (1414～1417)

4点ともに柱根である。1414は残存長48.8cm、最大径27.7cmを測る。側面には、長軸方向に沿った面取り加工の痕跡が残る。このため、断面形は13角形の多角柱状を呈する。辺材が用いられている。底面は平坦に調整されており、側面の立ち上がりに斜め方向からの加工が施される。1415は残存長47.2cm、最大径24cmを測る。断面形は10角形であり、辺材が用いられている。底面は平坦に調整されている。底面調整の加工痕の向きは図面の上下方向で一定する。1416は残存長34.2cm、最大径21.8cmを測る。断面形は9角形であり、辺材が用いられている。底面は平坦に調整されており、立ち上がりに斜め方向からの加工が施されている。また、底面から9.3cm付近には幅6cmの抉りが巡る。抉りの加工は、柱根上位から下位に向けて施されている。1417は残存長58cm、最大径12.7cmを測る。側面には枝の根元が残っている。丸木材を使用し、断面形は不整な円形を呈する。底面は前後2方向から斜めに切断され杭状となる。

S B 18 - P 871 (1418)

1418は残存長29.7cm、最大径18.2cmを測る柱根である。底面は平坦に調整されている。丸木材が使用されており、断面形は円形を呈する。腐食により芯部から空洞化が進んでいる。

S E 931 (1419・1420)

1419は棒状の加工材である。残存長29.2cmを測る。断面形は台形状で、表裏面および右側面が残存する。上下端部とも折損している。1420は板状の加工材である。幅2.5cm、厚さは0.7cmを測る。表面は平滑に調整されている。

S E 3 (1421)

加工材が出土した。1421は残存長14cm、幅1.0mを測る。断面形は方形を呈する。表裏面および両側面は平滑に調整されている。上端部は炭化している。

4 漆製品 (図版163・192、図版299・318・319)

古代の漆製品は小盤・手箱がある。本項では事実記載を中心に各説を行うこととする。本製品の自然科学分析や歴史的評価の詳細については四柳嘉章氏の分析(第VI章第6節)を参照いただきたい。

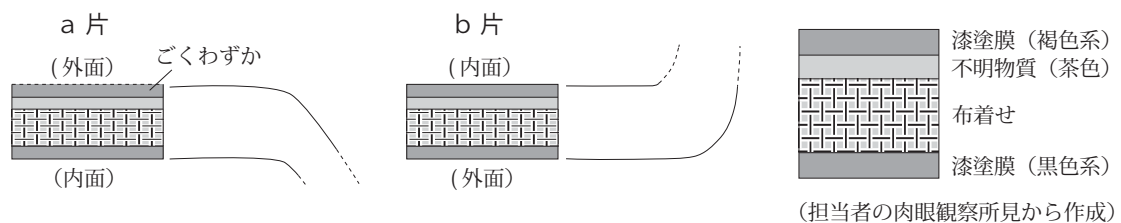
小盤 (1233)

河川SD976から古代の土器などとともに出土した。総黒色系の小盤である。非常に薄手で精巧なつくりで、器形は口縁部が短く外反するほかは大きめの底部が全体を占める。口径15.1cm、底径12.2cm、器高0.9cmを測る。塗膜は厚く光沢がある。

手箱 (1554a・b)

Ⅱ区18H10グリッドV層直上から、土圧によって押しつぶされ多数の破片となった状態で出土した。その一部は既設の水路によって調査前に消滅していたが、接合作業によって実測図を作成することができた。遺物は2片の破片a・bに大きく分かれ、それぞれは現段階では接合しない。どちらも厚さ1～2mmほどであるが、a片はb片に比べわずかに薄い。平面性が低く若干うねりがある。長軸方向にはゆるい立ち上がりが見られる。b片は1辺35cmほどの方形形状を呈し、平面性が保たれやや厚い。残存する3辺には帯状に剥離痕が認められ、直角に立ち上がるものと考えられる。四柳氏の分析によれば、以上の状況からこの遺物は箱状の漆製品(手箱)で蓋または身の部分であると指摘されている。この前提に基づいて、破片の一面を内面、その裏面を外面と想定し、担当者の所見を以下のとおり記述する。

1554は、破片の断面を見ても肉眼観察では木胎は見られず、漆で内外両面から塗り固められた目の粗い布が内部に認められる。この布着せはa片・b片ともに見ることができる。a片の外表面には塗膜がごくわずかに残り、やや褐色を帯びている。剥離した部分には、茶色い物質が露出しており、この面には線状の擦痕が見られる。内面側は黒味を帯びた塗膜で、その内側に布着せが存在する。a片は、布着せが見える面を上として立ち上がりが認められる。b片の外表面は黒味を帯びた塗膜が残存する。剥離部分では漆の塗り固めた状況がみられ、布目が浮き出ている。内面にはa片の外表面で見られた茶色い物質が褐色系の塗膜の下にあり、その下に布着せが認められる。b片の立ち上がりは、a片とは逆に茶色い物質が見える方に認められる。以上の状況から、両片は同じ技法で製作された製品であるものの、同一の部材であるとは考えにくい。四柳氏の指摘のとおり、この遺物がそれぞれ蓋と身である可能性が高いと考えられる。



第28図 手箱の断面模式図

5 石製品 (図版180～187、図版311～314)

(1) 概要

古代の石製品には砥石や石帯のほか、鍛冶関連遺物の金床石がある。砥石は調査区全体で123点、約33.8kgが出土した。このうち、A1類8点、A2類37点、B1類10点、B2類19点、C類1点を図示した。石材は凝灰岩製が多く、砂岩製や泥岩製、軽石製のものも一定量認められた(第7表)。

(2) 分類と記述

分類は器種で大別し、形態・機能で細分した(第29図)。砥石は数が多いため、主要・特徴的なものを図示した。使用痕跡については、種別によってスクリーントーンを使い分け、凡例を頁毎に示してある。また、断面図中における使用痕跡部分については矢印で示した。部位の名称については鍛冶関連遺物にならい、図正面を上面、その裏側に当たる面を下面とし、側面は上下左右側面と呼称する。

	A1類	A2類	B1類	B2類	C類	合計
流紋岩		1				1
安山岩		2	1			3
花崗岩				1		1
斑れい岩				1		1
礫岩				1		1
砂岩		4	3	4		11
泥岩		8				8
頁岩		1		1		2
黒色頁岩		1				1
凝灰岩	7	11	6	11	1	36
軽石	1	9				10
合計	8	37	10	19	1	75

第7表 砥石の分類・石材別点数(掲載遺物)

砥石

山三賀Ⅱ遺跡の分類[坂井ほか1989]を参考に、重量や形態によって以下のとおり分類した。

A類 概ね300g以下で幅が6cm以下の手持ち砥石と考えられるもの。

B類 A類より大型のもので主に置き砥石と考えられるもの。

C類 紐を通して垂下するための孔がある提げ砥石。

A類・B類は直方体状に成形したものを1類、自然石をそのまま利用したものを2類と細分した。

石帯

腰帯具のうち石製のもの。巡方が3点、丸柄が1点、鉈尾が1点ある。

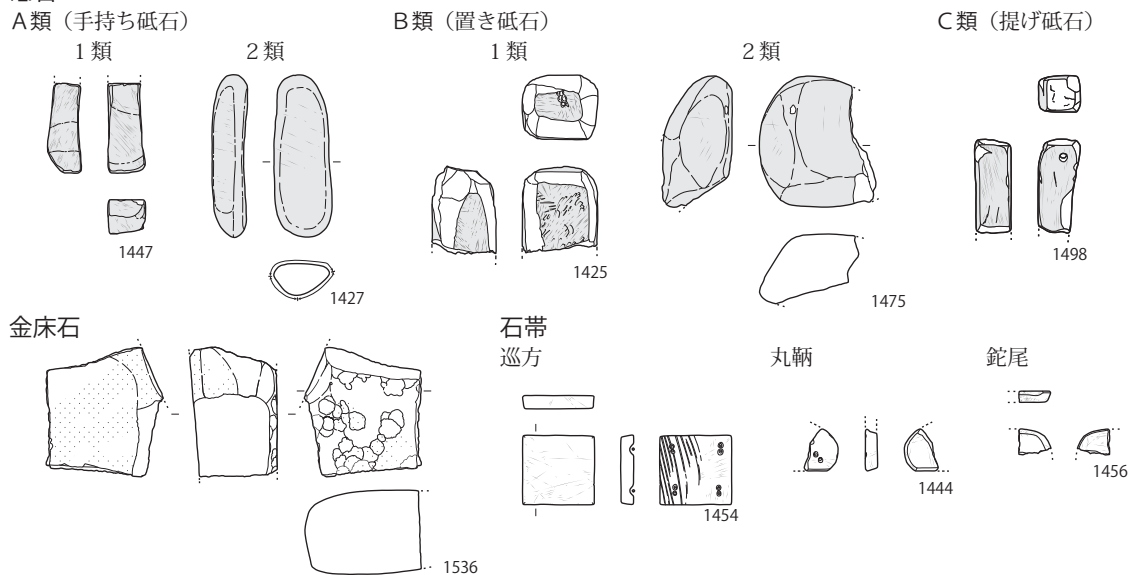
(3) 各説

A 砥石

SK 1038 (1425)

1425はB1類の凝灰岩製砥石で下半部を欠く。角柱状の石材を素材とするが各面の側縁で打ち欠き状の剥離がみられる。砥面は下半部を除く5面で確認されるが、成形時の剥離痕が残る。

砥石



第29図 石製品分類図

S K 1039 (1426)

1426はB 2類で上面に砥面がみられる。砥面には刃物によって生じた筋状の擦痕が認められる。また一部は被熱、吸炭している。石材は礫岩である。

S X 1001 (1427)

1427はA 2類の安山岩製砥石である。全面が砥面となっている。

S X 985 (1428)

1428はB 1類の凝灰岩製砥石で、上面と左側面が砥面となっている。本来直方体を呈したものが、使用により中央部が磨り減って湾曲した形状となっている。

S D 978 (1429)

1429はA 2類で上下を欠く。残存部は全面が砥面となる。石材は流紋岩である。

S D 1021 (1430)

1430は頁岩製の砥石B 2類である。上面と左右側面に敲打痕があり、それ以外は全面が砥面である。

S D 1037東 (1431)

1431は砥石B 2類である。上下側面を除き、全面が砥面である。欠損後に全体が吸炭し、被熱している。石材は凝灰岩である。

S D 1037西 (1432)

1432は砂岩製砥石でA 2類とした。元々偏平な石材を利用したものと考えられ、全面が砥面となる。

I 区II層 (1433・1434)

1433はA 1類で上下面・上側面・左右側面が砥面である。上側面は欠損後に使用されたと見られ、元はB 1類の直方体状の砥石であったと考えられる。刃物による筋状の擦痕や敲打痕がみられる。石材は凝灰岩である。1434は軽石製砥石でA 2類とした。上側面・右側面を除いて砥面がみられる。

I 区IV層 (1435～1443)

1439・1440がA 1類、1435～1438・1441がA 2類、1442・1443がB 2類である。1440は中央部が擦り減って大きく括れ、よく使いこまれている。上部には刃物による筋状の擦痕が認められる。1442は上面が被熱し淡く赤変する。1443は上面が砥面となっており、下面と右側面にも使用痕跡がかすかに認められる。石材は1435・1439～1443が凝灰岩、1436が軽石、1437・1438が泥岩である。

S B 25 - S D 1078 (1445)

1445は砂岩製砥石でA 2類である。上下面の一部を除き全面が砥面である。

S K 1083 (1446)

1446は泥岩製砥石でA 2類である。長楕円形を呈する偏平な自然石を利用している。4面に砥面がみられ、下部が欠損する。

S D 1085 (1447)

1447はA 1類の凝灰岩製砥石である。欠損した上部を除き各面に使用痕が認められる。上部は欠損する。中央部はわずかに括れる。

河川S D 976 (1448～1453)

1450・1453はA 2類、1451はB 1類、1448・1449・1452はB 2類である。1448は大型の破片を利用したものであるが、使用頻度が低いためか砥面は不明確である。また上面下部には刃物による筋状の擦痕がある。1449は半球状のもので、右側面が大きな破面となっており、割れた後に砥面として

利用されている。1450は板状の石材を素材としたもので、切り出しの痕跡がみられる。先端部には刃物による筋状の擦痕が認められる。また、下面の一部に漆の付着が認められる。1451は本来直方体であったものが剥離したものと捉えB 1類とした。しかし全体が薄く吸炭していることなどから、元は鍛冶の台石等に利用されていたものを砥石として転用した可能性も考えられる。1452は1448同様、使用度が低いためか砥面が判然としない。石材は1448・1450・1452が凝灰岩、1449・1451が砂岩、1453が安山岩である。

河川S D 981 (1457~1461)

1460はA 1類、1461はA 2類、1457~1459はB 2類とした。1457は上下側面の一部を除く面が砥面となっているが、擦痕は不明確である。磨石としての使用も考えられる。また一部には煤が付着し、淡く赤変する。1458は上面の一部が平滑で、ここが砥面と見られる。他にも擦痕が認められるが、これは成形時の痕跡と考えられる。1459は上面と左右側面の一部が残存する。残存する面は平滑である。1460は板状に成形された砥石で、上面と下面が砥面である。側面には切り出し時の痕跡が残る。上面は非常に滑らかで、何らかの製品の製作過程とも考えられる。1461は軽石製砥石で、全面が砥面である。1457は花崗岩、1458・1460は凝灰岩、1459は砂岩である。

I 区V層 (1462~1464)

1462はB 1類の安山岩製砥石で、左側が大きく欠ける。表面は風化により白色を呈する。また一部が淡く赤変する。1463はA 1類の凝灰岩製砥石で上半を欠損する。中央部は擦り減って括れ、よく使いこまれている。1464は泥岩製でA 2類の砥石と考えられる。

I 区VI層 (1465)

1465はA 2類の砂岩製砥石で、上面と右側面の一部に砥面が残る。

S B 3 - P 223 (1466)

1466は軽石製砥石でA 2類とした。砥面は上下面・左右側面に認められ、擦痕がみられる。

P 205 (1467)

1467はB 1類の凝灰岩製砥石である。上下面と左右側面に砥面が残るが、大部分は破面となっている。刃物痕と見られる筋状の擦痕も確認できる。

P 107 (1468)

1468は直方体状に成形されたA 1類の軽石製砥石である。上部を欠損するが、整った直方体を呈する。

P 295 (1469)

1469は砂岩製砥石で上半を欠損する。全体が強く被熱しており、竈材からの転用品と考えられる。転用品であるが直方体状をなさないためB 2類とした。

P 449 (1470)

1470はA 2類の軽石製砥石で全面が砥面となる。

S K 217 (1471)

1471は凝灰岩製砥石である。残存部は直方体状をなすが、全体形状を把握できずA 2類とした。

S K 380 (1472)

1472はB 1類の凝灰岩製砥石で、上下面と左右側面が砥面である。右側面が最も使い込まれ、砥面中央部に敲打痕がみられる面もある。本来は直方体の砥石で、中央部で割れたものを再利用したと考えられる。

S D 306 (1473)

1473はB 1類の凝灰岩製砥石で上半を欠損する。欠損する上側面以外に砥面が残る、部分的に刃物痕

と見られる筋状の擦痕が確認できる。

S D 378 (1474)

1474は凝灰岩製砥石で、上面と左側面に砥面が残りそれ以外は欠損する。B 2類とした。

S D 21 (1475・1476)

1475はB 2類の凝灰岩製砥石で、右側を欠損する。残存する面は全面が砥面となっている。1476はA 2類の軽石製砥石で、上下面には敲打痕が認められる。

S D 161 (1477)

1477は凝灰岩製砥石である。大部分を欠損するが本来は直方体状のA 1類と推測される。

S D 390 (1478)

1478はA 2類の軽石製砥石である。よく使いこまれており板状を呈する。

S D 339 (1479)

1479はB 2類の凝灰岩製砥石である。部分的に砥面が認められるが使用頻度は低い。

II区II層 (1480・1481)

1480・1481はともにA 2類の凝灰岩製砥石である。

II区IV層 (1482～1492)

1482～1491がA 2類、1492がB 2類である。1487は直方体状を成すが、明瞭な切り出し痕跡や成形痕跡が認められず、使用の結果得られた形状と捉えA 2類とした。1492は大部分が欠損し、上面と左側面の一部に砥面が認められる。石材は1482・1485・1487～1489・1492が凝灰岩、1483・1484・1486が泥岩、1490が頁岩、1491が軽石である。

II区V層 (1495～1499)

1495はA 2類の砂岩製砥石で全面が砥面である。1496はA 2類の黒色頁岩製砥石で非常に薄い。指先に乗せて使用し、刃先の仕上げ、あるいは簡易的な砥ぎに使用されたとみられる。1497はB 1類の凝灰岩製砥石である。成形時の剥離面を残しており、使用頻度は低いものと見られる。1498はC類の凝灰岩製提げ砥石で下半を欠損する。上下面と左右側面を砥面とし、上部には垂下用の穿孔がある。穿孔は両面から行われている。1499は竈材から転用されたB 2類の砂岩製砥石で、左側面が砥石としての砥面である。右側面には成形時の工具痕跡が認められる。全体が被熱しており、表面は風化して脆い。

S B 9 - P 616 (1500)

1500は自然石を用いたA 2類の泥岩製砥石で、全面が砥面である。

河川S D 466 (1501)

1501はA 2類の軽石製砥石である。刃物による筋状の擦痕が確認できる。

P 742 (1502)

1502はB 1類の砂岩製砥石で下半を欠損する。上下面と左右側面が砥面である。左側面に刃物による筋状の擦痕が確認できる。

S D 620 (1503)

1503はB 1類の砂岩製砥石である。下面下部には幅1.5mm程の浅い筋状痕跡が数条認められる。

II区VI層 (1504・1505)

1504はB 2類の凝灰岩製砥石で、下面は大きく凹む。上側面には煤が付着する。1505はB 2類の斑れい岩製砥石である。上下側面を欠損する。

B 石帯

I 区IV層 (1444)

1444は5 N14グリッドIV層出土の丸軀である。右側の大部分を欠損する。上面及び側面は丁寧に研磨され艶出しされるが、下面は施されない。2孔1対の潜り孔が1か所残存するが、元は3か所あったと推定される。垂孔は無いものと見られ、田中広明氏の垂孔分類では無孔タイプで、8世紀第4四半期から11世紀代に位置付けられ、10世紀第2四半期を中心とするIV期に当たる。[田中2003]。石材は石英閃緑岩である。

河川S D976 (1454~1456)

1454・1455は巡方である。1454は完形品で、上面と側面が丁寧に研磨・艶出しされる。下面には2孔1対の潜り孔が四隅にある。下面は艶出しが施されず筋状の切り出し痕跡が残る。1455はI区7 O3グリッドV層出土の破片と接合し、左下部分を欠く。1454同様、上面と側面が丁寧に研磨・艶出しされる。下面も比較的丁寧に研磨されるが艶出しはされない。潜り孔は4か所認められるが、欠損部に近い位置の孔はわずかに中心に寄っており、欠損により孔を開け直した可能性がある。2点とも石材は石英閃緑岩でサイズも同じことから、同じ腰帯に用いられていたものと考えられる。田中氏による垂孔分類では無孔タイプで10世紀第2四半期を中心とするIV期に位置付けられる。1456は黒色を呈するチャート製の鉞尾である。一部のみが残存し、大部分は欠損している。上面と残存する側面は非常に丁寧に研磨・艶出しがなされる。下面の研磨も丁寧であるが、艶出しはされない。使用によるためか、縁がやや丸みを帯びている。側面に稜を持つことから、田中氏の分類で8世紀第4四半期を中心とするII期に相当すると考えられ、やや古手の所産と見られる。

II 区IV層 (1493)

1493は18 J 19グリッドより出土した黒色珪質頁岩製の巡方で、大部分を欠損する。上面と側面は丁寧に研磨され艶出しされる。下面も丁寧に研磨されているが艶出しはされない。潜り孔は3か所残存しており、もとは4か所に開いていたものと見られる。また潜り孔の位置からサイズを想定すると、長さ3.1cm×幅3.4cm程度と考えられる。無孔タイプと考えられ、田中氏の垂孔分類でIV期に当たる。

6 金属製品・鍛冶関連遺物 (図版188~192、図版315~317)

(1) 概要

本遺跡から出土した金属製品には、材質の違いから鉄製及び銅製がある。また、刀子や皆折釘、工具状製品、焼印状製品などの鍛造品と帯金具や鍋状製品などの鑄造品が出土した。鍛冶作業を行ったことを窺わせる遺物には、炉壁、羽口、椀形鍛冶滓、鍛冶滓、ガラス質滓、炉内滓、粘土質溶解物、被熱・発泡した土器、金床石、砥石、軽石、被熱・発泡した石、火打石、木炭がある。このうち、報告対象としたのは炉壁、羽口、椀形鍛冶滓、鍛冶滓、炉内滓、粘土質溶解物、金床石である。

金属製品及び鍛冶関連遺物については、この分野に精通している穴澤義功氏に観察を依頼し、氏の指導のもと観察表を作成した。なお、遺物の抽出作業の過程において砥石・竈材についても鑑定頂き、その一部も報告対象とした。各資料の詳細な観察所見は巻末の観察表を参照いただきたい。

(2) 整理作業手順

鍛冶関連遺物の整理作業に当たっては、以下のとおり作業を行った。

①遺物の抽出・分類

金属製の遺物、及び鍛冶関連遺物に係る可能性のある遺物について全点を実見し、種別に分類した。分類作業では諸属性を記入するカード（個表）を作成し、遺物の状態や評価によって5ランクに分けた。

②遺物の属性計測

属性計測では出土位置、層位、遺物名、計測値（長・幅・厚・重量）、磁着度、メタル度、ランクなどをカードに記入した。磁着度測定には標準磁石を用いて数値化した。値が大きいほど磁着性が強いことを示す。メタル度の測定には特殊な整準をした小型の埋蔵文化財用特殊金属探知器を用い、反応感知度順に、H（○）、M（◎）、L（●）、特L（☆）に分類した。また、錆化したものは錆化（△）とした。最初から金属鉄を含まないものについては「なし」とした。

③遺物の構成と構成図の作成

遺物の種別構成を把握するため、高いランクのものを抽出し構成図を作成した（第30図）。

④分析対象遺物の選択・実測・写真撮影・詳細観察表の作成

分析対象遺物7点の詳細観察表を作成し、あわせて遺物の実測、写真撮影を行った。

⑤分析依頼

第VI章第5節のとおり、金属学的な分析調査を日鉄住金テクノロジー株式会社八幡事業所・T A Cセンターの大澤正巳氏と鈴木瑞穂氏に依頼した。

⑥構成遺物の実測・トレース・写真撮影・一般観察表の作成

構成図に掲載した遺物から分析資料7点を除いた資料の一般観察表を作成し、写真撮影を行った。また実測図を作成し、トレースを行った。

⑦遺物の評価・遺跡の性格検討

分析結果や作成した分布図に基づき遺物の評価・遺跡の性格を検討した。

(3) I区出土遺物

A 遺構出土遺物

S K 1083 (1508)

1508は鍛造の皆折釘である。断面は方形から長方形をなす。中間部で折れ曲がることから使用品と考えられる。頭部は小さく折り曲げられ平坦面をつくるが、現状は開き気味である。

S D 1085 (1509~1511・1532)

1509・1511は鍛造の棒状不明品で同様の断面形をもつ棒状の製品である。1511の断面形は長方形状で、下方の端部は平坦となり先端部が細いへら状になっている。火箸の可能性が指摘されている。1510は工具状鉄製品である。平面形は両関をもつ刀子状を呈し厚さはほぼ一定である。先端は厚さが一定で刃部が作りだされていないことから刀子の未製品である可能性がある。1532は、製鉄炉の炉壁片である。全面に破面がみられるものである。

S D 982 (1525)

1525は小型の椀形鍛冶滓である。

S D 1037東 (1526)

1526は炉内滓である。大きめの気孔と連続的な破面に覆われているもので椀形鍛冶滓の可能性もある。滓部内の木炭のかみ込みや木炭痕がやや目立つ。

河川S D976 (1512・1514～1516・1533～1537)

1512・1514～1516は古代に属する金属製品で、1514が铸造品の他は鍛造品である。1512は飾金具で平面形は方形を呈すると考えられる。両面黒漆塗りと考えられ、裏金具の可能性もある。1515は焼印状不明品で被熱の影響で錆化が著しい。1516は刀子である。刃部と茎の先端は欠損している。1514は銅製巡方の表金具である。内面には目釘が見える。1533～1537は鍛冶関連遺物である。1535は羽口、1536は金床石、1533・1534は粘土質溶解物、1537は鍛冶炉の炉壁である。周辺遺構において鍛冶が行われたことを示す。

B 遺構外出土遺物

I 区II層 (1527)

1527は羽口である。羽口としてはやや細身のものと推定される。

I 区IV層 (1506・1507・1528～1531)

1506は鍛造の鉄製刀子である。刀子は茎部で柄と推定される木質部がわずかに残っている。1507は铸造の鍋である。口縁部片でやや厚みをもって断部を形成している。このほか1528は極小の椀形鍛冶滓、1530・1531は中型の椀形鍛冶滓、1529は完形の鍛冶滓である。

(4) II区出土遺物

A 遺構出土遺物

S B 6 - P 363 (1538)

1538は小型の椀形鍛冶滓である。

P 457 (1539)

1539は完形の椀形鍛冶滓である。浅い椀形の形態をもつ。僅かに木炭痕や木炭の喰い込みが確認される。

S D 279 (1540)

1540は羽口先が溶着した粘土質溶解物である。

S X 1214 (1553)

1553は鍛冶炉跡 SX1214から検出された金床石である。上下面ともに打痕を示すうろこ状の剥落が多数認められる。被熱痕は認められない。

B 遺構外出土遺物

II 区II層 (1541)

1541は製錬炉の炉壁である。

II 区IV層 (1522～1524・1542～1549)

鉄製品では、1522が铸造の鉄鍋、1523が鍛造の鎌の刃部と考えられる。1524は薄板状の遺物で用途は不明である。鍛冶関連遺物では、1542・1543が羽口の先端部、1544～1549は極小から中型の椀形鍛冶滓である。

II 区V層 (1550～1552)

1550は炉内滓とみられるもの、1551は鍛冶関連遺物の羽口先端部、1552は椀形鍛冶滓である。

7 文字資料

(1) 木簡 (図版171、図版304)

河川SD976 (1367~1373)

木簡とした7点はすべてI区河川SD976からの出土である。そのうち、文字が記されているものが3点、木簡の削屑が1点、文字ではなく墨線がみられるものが2点である (第31図)。

1367は文字の部分に境に急角度で折れ曲がっている。折れ目から下に六文字以上が認められる。中間部分には「里真志」とある。この上部は「口」「又」とあり、「又」の上で目印の合点を入れた可能性も考えられるが断定はできず、現時点では2文字または3文字であると考えておく。最下部の一文字右側には「并」が見える。比較的墨痕が濃く、判読できた文字もあるが、文意の把握には至らなかった。






1368は角材が割れ断面三角形をなす。文字の左半分が欠損しているが五文字分が認められる。確認できる部分は一文字目から順に、「御」「郷」「郡」といった「尸」または「卩」がつくもの、「根」「銀」「浪」などの「良」または「良」がつくもの、「人」などの右にはらうもの、「色」または「施」などの右部分が考えられるが、釈文としては挙げていない。五文字目は「前」の可能性が高い。筆の線は細く墨痕は薄い。

1369は墨線あるいは「ㇿ」(てへん)と考えられるが詳細は不明である。長さは3cm以上ある。

1370・1372の資料はいずれも直線状あるいは格子状に墨線が認められるものである。

1371は木簡の削屑である。墨痕は鮮明である。右側は「平」で、左側は不明である。二行にわたって削られている可能性が高い。

1373は赤く彩色された木片に墨痕が認められるものであり、特殊な遺物と考えられるが小片のため詳細は不明である。

1367	 里真志□	(150) × 10 × 15	081 型式
1368	 (前カ)	(102) × (14) × (12.5)	081 型式
1369		(108) × (27) × 3	081 型式
1370	・(墨線) ・(墨線)	(70) × (10) × 2	081 型式
1371	平 	(14) × (8) × 0.1	091 型式
1372	・(墨線)	(60) × (25) × 2	081 型式
1373	 」	(22) × 6 × 2	081 型式

第31図 出土木簡の釈文

(2) 墨書土器 (図版90~157、図版250~295・320~322)

A 観察・分類

資料の観察・分類にあたっては、[江口・小濱ほか 2000] 及び [相沢 2009] を参考に、墨書する部位・方向、文字そのものの大きさと太さに着目して行った。また、墨書内容には文字として容易に認識できるものや幾何学的な図形を表した記号、人の顔を描いた絵画等がみられる。しかし、形は文字と似通っていても、とめ・はらいなどの筆使いに変化がなく文字か記号かその判断が難しいものもある。こうした資料は、まず遺跡内において同様な資料の有無を確認したのちに、文字であるのか記号であるのか、その墨書内容を考える必要がある。その手がかりの一つとして筆使いについても着目して観察を行った。具体的な観察項目や分類、個々の資料の観察所見については巻末の墨書土器観察表を参照いただきたい。

B 概要

墨書土器は調査区全体で122点が出土した(第8表)。I区は92点、II区は30点で、I区が7割以上を占める。I区のうち60点が河川跡のSD976から出土した。このほかは、I区・II区ともに建物を含む遺構や包含層からで、それぞれ30点ほどが出土している。種別では、不明品を除いて須恵器無台坏が92点で最も多く、部位別では底部外面が最も多く72点であった。墨書内容では、漢字が69点と最も多く、記号は19点であった(ともに可能性のあるものを含む)。文字数は一文字が多く、その内容は不明な点が多いが、具体的な意味を推定できる2文字墨書もあり、遺跡の性格を考える上で重要な資料である。

C I区の墨書文字(第32~34図)

七(23・26・38・231・513・517・591)

23はSK1039出土の須恵器無台坏B i類で、体部側面中位から底部付近に正位で墨書される。文字の大きさは40mm前後と大きく、線も太い。文字の輪郭は丸みを帯びる。このほか、「七」と墨書されるものには26(SK1059)・38(SD979西)・231(IV層)・517(河川SD976)などがある。器形は須恵器無台坏B i類に分類され、文字の特徴や墨書部位なども含め共通する部分が多い。こうした共通性からみて墨書が不鮮明なものでも、B i類で体部側面に墨書されるものは「七」である可能性が高いと考えられる。なお、体部側面中位に倒位で墨書する須恵器無台坏(513)も存在するが、文字は相対的に小さく線が細い。破片のため器形は不明確であるが、形態的にみてB i類ではないだろう。

山□(112)

SD1037西出土の須恵器無台坏A h類で、墨書部位は底部外面中央寄りである。墨痕は薄い、筆跡は比較的明確である。一文字の大きさは40mm前後と大きく、線も太めである。二文字目は図化できたものの、これに相当する文字を特定できなかった。

文(225)

IV層出土の須恵器無台坏で、墨書部位は底部外面上半である。文字の大きさは50mmほどと大きい、線は適度な太さである。四画目には二度書きが見られる。書き出しがやや上寄りとなり、文字のバランスが悪くなると考えたのか途中で止め、その下方から書き直している。全体的には、とめ・はらいが明確に行われている。四画目のはらいはかなり長く特徴的である。

仲(226・502・524~526・554)

226はIV層出土の須恵器無台坏で、墨書部位は底部外面左である。表面風化のため墨痕は薄い。文字の

大きさは20mmほどで、線は一画目が太いほかは適度な太さである。「イ」（にんべん）が大きく、縦画が左側に湾曲するのが特徴的である。また河川 SD976からは5点が出土している（502・524～526・554）。502は須恵器坏蓋A類で、墨書部位は体部外面左側である。「イ」の一画目は長く、「中」の終画は縦にはらわれている。525は須恵器無台坏で、墨書部位は底部外面左側である。文字の大きさは中程度である。「イ」が小さく「中」が大きく縦に長い。526は須恵器無台坏で、墨書部位は底部外面左側である。文字の大きさは小さい。筆先はよく整えられているようで、線の太さは相対的に太いものから細いものまでである。縦画は左側へ湾曲する。554は須恵器無台坏B h類で、墨書部位は底部外面上半左寄りである。「中」の横画と縦画は鋭角的で、終画は縦に長くはらわれている。524も同様の特徴を持つとみられる。

田庄（227・545～548）

227はIV層包含層出土、これ以外は河川 SD976出土である。すべて須恵器無台坏、墨書部位は底部外面上半である。文字の大きさは20mmほど、太さは1～3mmほどである。いずれも「田」の二画目が縦画と横画で連続し、左へはらう特徴がみられる。その一方で、「庄」の字体には相違点がみられ2つのタイプに分かれる。一つ目は545の例で墨痕が薄く不鮮明な部分があるが、「庄」の字は通常みられる字体である。二つ目は、独特の運筆をするものである。546の二文字目は「广」（まだれ）の二画目と「土」の横画が連続しており、終画を縦にはらう独特のものである。遺存状態が良く鮮明な墨書で、筆致は全体的に細く滑らかな印象を受ける。227・547・548も同様の運筆をしているが、「庄」の終画は、はらわれずにとめられている。「庄」の字体に相違点がみられるが「田」の特徴が一致し、かつ複数点存在していることから、これらの資料についても「庄」と考えておきたい。

大（230・506・532）

230はIV層出土の須恵器無台坏A h類で、墨書部位は底部外面左側である。終画のはらいは長い。506・532は河川 SD976出土である。506は須恵器有台坏B類で、墨書部位は体部外面である。文字は正位に書かれ、線は細い。532は須恵器無台坏B h類で、墨書部位は底部外面上方である。筆先が割れたまま書き切っている。墨痕は濃く、状態良く残っている。

中（274）

SB25 - SD1078出土の須恵器無台坏A h類で、墨書部位は底部外面上部である。筆をゆっくりと動かし、一画ずつ丁寧な筆使いを行っている。

九（297）

SK1083出土の須恵器無台坏B h類で、墨書部位は底部外面上部である。文字の大きさは小さい。一画目は、はらわずにとめている。

足（501）

河川 SD976出土の須恵器坏蓋A類で、墨書部位は体部外面である。墨痕は見え難いが、文字上半部の「口」、下半部には終画で上へはねる部分がみられることから「足」と判断した。

仲成（505）

河川 SD976出土の須恵器有台坏B h類で、墨書部位は底部外面左寄りである。実測図については、墨痕が薄いため「成」の戈（ほこづくり）の部分に不正確さを残すが、釈文としては「成」でよい。「仲成」は人名を表すと考えられる。IV層や河川 SD976から出土している「仲」墨書土器は、この省略形の可能性がある。

入（504）

河川 SD976出土の須恵器有台坏A h類で、墨書部位は底部外面左寄りである。二画目のはらいは一画

目に比べ太く長い。なお、本資料は灯明皿としても転用されている。

奉 (507)

河川 SD976 出土の須恵器有台坏 B 類で、墨書部位は体部外面に倒位で記されている。文字は 30mm とやや大きく、線は 1～2mm 程度である。それぞれの点画は湾曲気味となり、軽い筆使いである。

氷 (508)

河川 SD976 出土の須恵器有台坏で B h 類、墨書部位は体部外面に正位で記されている。文字は 25mm とやや大きく、線は 2mm 程度である。始筆から終筆までそれぞれの点画は、変化に乏しい筆使いである。

五 (519)

河川 SD976 出土の須恵器無台坏 B h 類で、墨書部位は体部外面である。文字は正位で 2 か所に記され、それぞれが対向する位置にある。文字は 25mm ほど、線は 1～3mm ほどである。いずれも一画目が短く、終画のとめが下方へ折れる特徴があることから、同一の書き手によるものであろう。

天 (522)

河川 SD976 出土の須恵器無台坏で、墨書部位は底部外面上半右寄りである。書き出し前半の横画は太く、終画の右はらいは筆先が割れている。

袴カ (529)

河川 SD976 出土で、小型の底部をもつ土師器無台椀である。墨書部位は見込み中央に大きめに書かれている。線の太さはそれぞれの点画で異なり筆の弾力を生かした筆使いがされている。

人面墨書土器 (530)

河川 SD976 出土の土師器長甕の頸部で、外面に墨書がみられる。小片で全体の様相は不明であるが、横長の目と眉を表現していると考えられる。類例としては、緒立 C 遺跡 [渡辺 1994] や船戸桜田遺跡 2 次 [水澤 2001] からの出土があり、いずれも頸部周辺に目が配置されている。

山 (531)

河川 SD976 出土の須恵器無台坏 A h 類で、墨書部位は底部外面左である。二画目は連続せずに縦画と横画で筆を離しており、最終的に四画で記されている。

方 (534)

河川 SD976 出土の須恵器無台坏 B h 類で、墨書部位は底部外面中央左である。しっかりとした線で記され、二画目、三画目が連続している。

本 (535)

河川 SD976 出土の須恵器無台坏で、墨書部位は底部外面上方である。「大」の後に「十」を書くタイプのものである。三画目の右はらいが上方へ向いているのが特徴的である。線は全体的に細い。

前 (536)

河川 SD976 出土の須恵器無台坏 A h 類で、墨書部位は底部外面中央右寄りである。比較的早い筆運びで書かれ、点画のつながりがみられる。線は 1.5mm ほどとほぼ一定で細い。

田 (544)

河川 SD976 出土の須恵器無台坏 A h 類で、墨書部位は底部外面左である。文字の大きさ・太さは中程度である。一筆ずつ横画と縦画を使い分けているが、線の交わる部分ではみ出している部分がある。

下口 (549)

河川 SD976 出土の須恵器無台坏で、墨書部位は底部外面右寄りである。3mm 前後の比較的太い線で書

かれている。二文字目は欠損のため不明であるが、三画分の筆跡が認められる。

太 (553)

河川 SD976出土の須恵器無台坏 B h 類で、墨書部位は底部外面上半である。文字の大きさはかなり大きく、40×60mmほどである。三画目の右はらいは長く、右下へ大きく伸びている。筆は送筆の方向に対しほぼ垂直で、とめ・はらいの部分に厚みがみられない。終画の点も長めである。

長 (581)

V層出土の須恵器無台坏 B h 類で、墨書部位は底部外面中央上寄りである。墨痕の薄い部分もあるが、文字の下部は比較的良く残っている。横画のとめはそれぞれ不揃いである。

D II 区の墨書文字 (第34図)

千 (639)

P422出土の須恵器有台坏で、墨書部位は底部外面左である。文字は肉厚の線で記されている。なお、底部外面は硯としても利用されている。

大市 (651・984・1111)

651はSE3出土の須恵器無台坏 A h 類で、墨書部位は底部外面右である。文字は太めの線で、大きく記されている。「市」の一画目は左へ抜け、二画目以降は連続する。終画は左へ若干折れながら長く下方へ伸びる。984はV層出土の須恵器無台坏 B h 類で、墨書部位は底部外面左である。文字は細い線で、大きさは651に比べ小さい。「市」の運筆は651と同様である。1111はVI層出土の須恵器無台坏 A h 類で、墨書部位は底部外面左である。文字は前2者の中間的な太さで、文字の大きさは984と同程度である。「市」の運筆は651と同様である。

足 (828)

IV層出土の須恵器坏蓋 B 類で、墨書部位は体部内面右である。文字の大きさ・太さとも中間程度である。全体的に墨痕は薄いですが字形が整っており、終画はしっかりとらわれている。

春 (847)

IV層出土の須恵器無台坏 A h 類で、墨書部位は底部外面左寄りである。文字の大きさは中程度、幅の細いものと太いものがある。各々の点画は始筆から終筆まで変化に乏しく、配置もまばらな印象を受ける。

九 (983)

V層出土の須恵器無台坏 A h 類で、墨書部位は底部外面上である。I区出土の297と同様に文字は小さく、線は細い。また筆使いも同様の特徴を持っており、一画目をとめている。

山 (1037)

SB12 - P695出土の須恵器無台坏 B h 類で、墨書部位は底部外面上である。文字は小さめで、線の太さは中程度である。運筆の速度が速いのか、二画目以降は連続して書かれている。

酒 (1090)

SX925出土の須恵器坏蓋 A 類で、墨書部位は体部外面である。文字は大きさ・太さともに中程度である。「𠂔」(さんずい)は二画目が縦画になり、「酉」の画数は省略されている。

E 墨書記号など

前項でも触れたとおり、本書では幾何学的な図形を表したものと文字として認識できない単純な線を引

いたものを「記号」としておく。幾何学的図形には19・276・277・331・509・511・512・982・1028などがある。「×」は土器を正位に置いた時の方向から「十」と判別できるが、底部や見込みにある場合は、筆の方向を考慮しなければならず注意を要する。文字として認め難いものには63・84・272などがある。

このほか、点画を意識した筆使いを行いながら判読できないもの(543・551・555・556・559)や筆使いに変化がなく記号と文字との区別が難しいもの(542)などがある。556は「文」とみてもよいが崩れた形であり、555・559もほぼ同形であるが一画目の点がみられない。こうしたことから、この3点は「文」が変異して半ば記号化したと考えることもできよう。



(縮尺：等倍)

第32図 主要墨書文字集成図(1)



第33図 主要墨書文字集成図(2)



(縮尺：等倍)

第34図 主要墨書文字集成図(3)

第3節 平安時代

墨書内容	No.	点数	内 訳											備考	
			地点別(点)		種 別 (点)					墨書部位別 (か所)					
			I区	II区	須恵器 無台坏	須恵器 有台坏	須恵器 坏蓋	土師器 無台碗	その他	体部 外面	底部 外面	体部 内面	見込		
足	501・828	2	1	1			2				1		1		
大市	651・984・1111	3		3	3							3			
大	230・506・532	3	3		2	1					1 (有坏)	2 (無坏)			
大カ	533	1	1		1							1			
九	297・983	2	1	1	2							2			
五,五	519	1	1		1						1				
氷	508	1	1			1					1				
七	23・26・38・ 231・513・ 517・591	7	7		7						7				
七カ	275・515・ 516・521	4	4		4						4				
七,七,□	528	1	1						1		1				黒色土器碗
十カ	62	1	1		1							1			
千	639	1		1		1						1			
酒	1090	1		1			1				1				
下□	549	1	1		1							1			
太	553	1	1		1							1			
田	544	1	1		1							1			
田庄	227・545～548	5	5		5							5			
庄カ	550	1	1		1							1			
代カ	1035	1		1		1						1			
長	581	1	1		1							1			
天	522	1	1		1							1			
伸成	505	1	1			1						1			
伸	226・502・524 ～526・554	6	6		5		1				1 (坏蓋)	5 (無坏)			
中	274	1	1		1							1			
中カ	270	1	1		1							1			
日カ	541	1	1		1							1			
入	504	1	1			1						1			
袴カ	529	1	1					1						1	
春	847	1		1		1						1			
文	225	1	1		1							1			
文カ	555・556・559	3	3		3							3			「文」の 変異形?
奉	507	1	1			1					1				
方	534	1	1		1							1			
方カ	229	1	1		1							1			
本	535	1	1		1							1			
前	536	1	1		1							1			
聖カ	1030	1		1		1						1			
不カ	542	1	1		1							1			
山□	112	1	1		1							1			
山	531・1037	2	1	1	2							2			
床	514	1	1		1						1				
木□,×	510	1	1		1						1				
×	277・331・511	3	3		3							2	1		
×,□	503	1	1						1		1	1			
□	523・543・551	3	3		3							3			判読不能
(記号)	19・63・84・ 272・276・509・ 512・982・1028	9	7	2	8		1				6 (坏蓋1) (無坏5)	3 (無坏3)			
(記号?)	500・540・1112	3	2	1	2		1				1 (坏蓋)	1 (無坏)		1 (無坏)	
(人面墨書)	530	1	1						1		1				土師器長甕
(不明)	10・32・228・ 273・303・518・ 520・527・537 ～539・552・ 557・558・ 579・580・ 755・777・ 1001・1057・ 1067・1079・ 1089	23	16	7	20	2			1		7 (瓶類1) (無坏5) (有坏1)	17 (無坏16) (有坏1)			1067:底部・ 体部外面墨 書のため点 数と墨書部 位別数は一 致しない。
(小片)	未掲載遺物	10	1	9			(不明)					(不明)			
合計		122	92	30	92	9	6	1	4		39	72	1	2	

第8表 墨書土器集計表

第4節 中・近世

1 土器・陶磁器 (図版98・123・124・138、図版255・272・282)

河川SD976 (560)

560は珠洲焼の甕胴部片で、外面にやや細い櫛歯状工具による平行叩き目が認められる。胎土は精良で、吉岡康暢氏の編年Ⅲ期(13世紀後半)の所産と考えられる[吉岡1986・1994]。

河川SD981 (567~573)

567・569~573は珠洲焼である。567は叩き中壺で、胴部が湾曲しており外面に平行叩き目が認められる。胎土は微細な砂粒を多く含むが焼成は堅緻で、吉岡Ⅱ~Ⅲ期(13世紀)の所産と考えられる。569・570は共に片口鉢の破片と考えられる。569は口縁端部が内傾する。胴部上半まで引き上げられた、一目3mm程度の粗い卸し目が認められる。吉岡Ⅳ期新段階~Ⅴ期(14世紀後半~15世紀前半)の所産か。570は胴部のみの破片である。櫛歯状工具による8目一単位、幅2cmの卸し目がやや密に施入されている。吉岡Ⅳ期か。571は中甕の口縁部破片で、短く「く」の字に屈曲する形状で、端部は僅かに外反しつつ円頭を呈する。肩部に張りが無く、吉岡Ⅳ期の所産と考えられる。572・573は甕の胴部破片である。572は器壁が1.6cmと厚く復元法量は中甕以上である可能性が考えられる。2点とも、胎土は砂礫を多く含む粗く、吉岡Ⅳ期以降の所産か。568は青磁である。盤の体部と考えられる。釉調はオリブ灰色を呈し、内面には細蓮弁文が施されている。胎土は精緻で灰白色を呈する。また、口縁部側の破面には漆継ぎの痕跡が認められる。龍泉窯系、14~15世紀代の所産と考えられる。

I区II層 (155)

155は叩き壺胴部破片で、外面に平行叩き目が施されている。叩き調整後に「二」の字状のへら状工具による線刻が施されている。器形は直線的で器壁はやや厚く、吉岡Ⅳ期(14世紀)の叩き大壺と考えられる。

II区II層 (817~820)

817・818は片口鉢である。817は胴部下半のみ残存する。卸し目は、一単位2cm程度で目の太い櫛歯状工具によって密に施入されている。胎土は砂礫が多く混ざり、非常に粗い。吉岡Ⅴ期の所産であろう。818は片口の一部が残存する。胎土は微細な砂粒を多く含むやや粗い。一目1.5~2mm程度の卸し目が下部から上部にかけて引き上げるようにして施されており、卸し目毎の間隔は広い。器形から吉岡Ⅱ~Ⅲ期と考えられる。819は中世土師器である。手づくね成形の皿で、坂井秀弥氏のA類[坂井ほか1987]にあたる。口縁は、軽くつまみ上げられ端部は細い。口縁部と体部との境界には僅かに稜が認められ、器形は内湾気味で、口径に対する底径の大きな箱形を呈する。口縁端部から体部上半にかけてススが付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。820は唐津の陶器皿で、口縁部を欠損する。高台は露胎で、兜巾状を呈する。見込みに胎土目が1か所確認でき、大橋康二氏の編年におけるⅠ期(16世紀末~17世紀初頭)[大橋2000]に比定される。

2 漆器 (図版172、図版305)

河川SD981 (1374~1376)

1374は内外面とも黒色系漆が塗布された椀で、平坦な底部は露胎である。1375は低い高台を持つ椀で、内外面に黒色系漆が塗布、見込みに赤色漆による文様が認められる。鎌倉後期から南北朝期に属する。1376は椀の口縁部破片で、外反気味に開く。内外面とも黒色系漆が塗布、外面に赤色漆による文様が認められる。

3 木製品 (図版172・173、図版305・306)

河川SD981 (1377~1393)

下駄歯・箸・蓋・曲物側板・指物部材が出土した他、南北岸付近では計3か所において杭列が出土した。1377は差歯下駄の歯で、縦断面は台形である。台部との結合面には断面が四角形を呈する柄穴が2か所認められる。また、接地面には砂粒の付着が認められる。1378・1379は箸状木製品である。全長は21.5~21.6cmでほぼ等しい。両端が細くなるよう側面の加工が行われている。

1380・1383は共に、曲物の蓋と考えられる。1380は平面が湾曲した方形を呈する。板部は四隅が丸く加工され、輪花状の挟りが認められる。表裏面には外周に沿ってケガキがある。表面には2条の浅い溝が掘り込まれ、把手となる部材が嵌め込まれている。また、表裏面ともに刃物痕が多数認められ、表裏面の中央部付近が一部炭化している。2本の把手は左側がわずかに長い。2本とも、両端が高くせり出している。柁目材で製作されている。1383は大部分が欠損しているが、円形の蓋板であると考えられる。2か所に直径1cm程度、円形に穿孔されている。1381は曲物側板である。器壁が1cmと厚く内面にはケビキが入る。また、図上の左側が細くなるよう、上下端部が斜めに切られている。1382は小型の曲物である。上下端ともに平滑で器高は4cm程度、口径8.2cmを測る。樹皮紐による綴じ方は、1列外4段綴じ〔奈良国立文化財研究所1985〕であったと考えられる。1384は面取り加工が行われた柄状木製品で、柄を持つ。端部は面取りが行われている。

1385は指物部材で、表裏の一部が炭化する。箱の底板と考えられ、右側面には木釘痕が確認できる。

1386~1393は杭である。1386は北岸付近の杭列に用いられていた杭である。一部樹皮が残存、上端は折損とみられる。先端部は断面方形となるように4方向から切削されている。1387~1389は南東の杭列に用いられていた杭である。3本とも表面全体が炭化していることから火災によるものではなく、腐食を防ぐため炭化処理を施した焼杭であると考えられる。1390~1393は南西の杭列に用いられていた杭である。1390は先端部を4方向から切削、1391・1392は先端部に樹皮付近の丸みを残した面が認められる。1393は先端部に切削痕があり杭と考えられるが、全体の形状が大きく「く」の字に屈折する。

4 金属製品 (図版188、図版315)

河川SD976 (1513)

1513は馬鍬の歯である。鉄製で、長軸21.2cm、短軸2.1cmを測る。河川SD976覆土上面からの出土で、珠洲焼等の中世陶磁器とほぼ同一レベルから出土したことから、中世に属するものである。

河川SD981 (1517)

1517はヤスと考えられる。残長10.9cm、幅0.6cm、厚さ0.4cmを測る。基部側は欠損している可能性がある。断面は方形、先端部は尖るように加工されている。

5 銭貨 (図版189、図版315)

銭貨はI区で1点、II区で3点が遺構外から出土した。

1518は景德元寶(初鑄年1004年)である。I区II層から出土した。1519は大観通寶(初鑄年1107年)で、II区調査時の表採資料である。1520は皇宋通寶(初鑄年1038年)で、II区IV層出土である。1521も同様にII区IV層出土である。下半の「元寶」のみ判読が可能で、銭種の判別は困難である。一文字目は「景」字で、1518同様に景德元寶である可能性が考えられる。

第Ⅵ章 自然科学分析

第1節 珪藻・花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

新潟県長岡市島崎地内に所在する浦反甫東遺跡は、寺泊丘陵と和島丘陵との間に形成された谷底平野（島崎川低地）に立地する。本遺跡の発掘調査の結果、平安時代の掘立柱建物や井戸跡をはじめとして、古墳時代、古代及び中世以降の流路などが確認されている。

本報告では、浦反甫東遺跡における平安時代頃の古環境（植生、堆積環境）の検討を目的として、珪藻分析、花粉分析を実施した。

2 試料

試料は、調査区Ⅰ区及びⅡ区の基本土層（Ⅰ区4N25、Ⅱ区23G13ほか、19J）、流路跡（Ⅰ区河川SD976）及び井戸跡（Ⅱ区SE856）の4地点から採取した土壌である。以下に各地点の概要を記す。

（1）基本土層

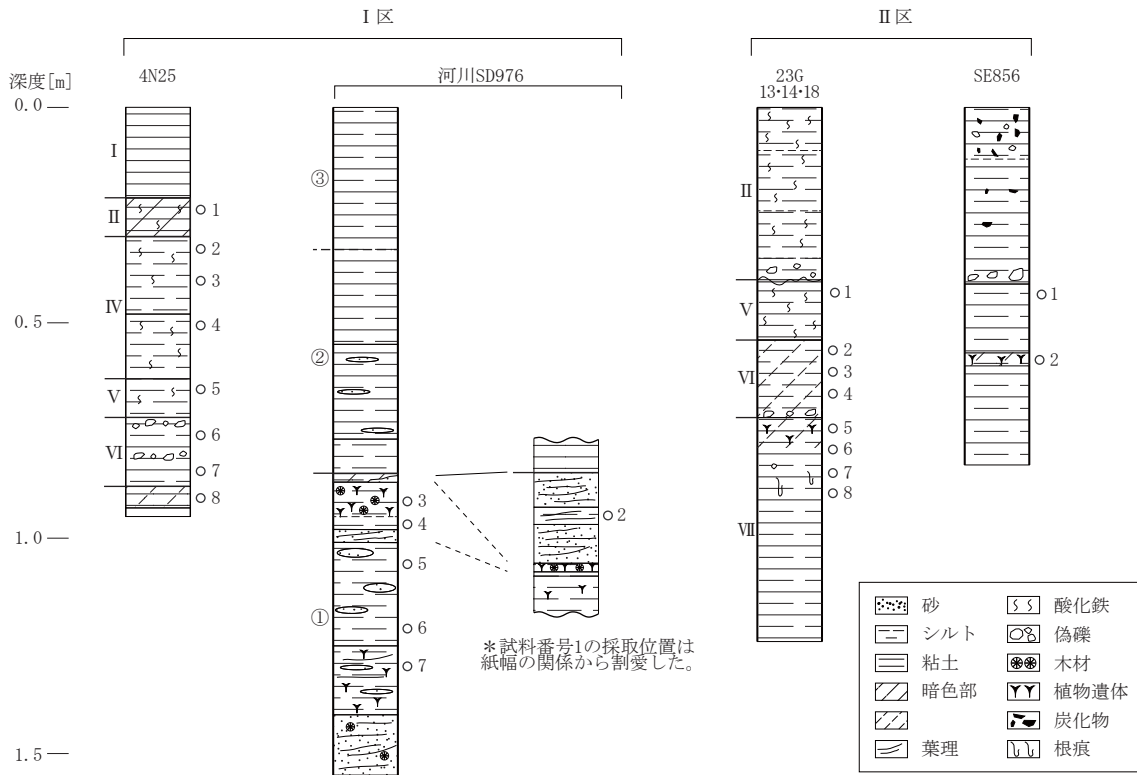
基本土層は、Ⅰ区・Ⅱ区ともにⅠ～Ⅶ層まで区分されている。Ⅰ区基本土層（4N25）は、下位より黒灰～暗灰色泥（Ⅶ層）、青灰～暗青灰色泥（Ⅵ層）、青灰～褐灰色泥（Ⅴ層）、褐灰色泥（Ⅳ層）、黒灰～暗灰色泥（Ⅱ層）、暗灰色泥（Ⅰ層）からなる。

Ⅱ区基本土層（23G13・14・18、以下13ほかとする）は、下位より青灰色泥（Ⅶ層）、灰～暗灰色泥（下部）及び暗灰色泥（上部）（Ⅵ層）、青灰色泥（Ⅴ層）、暗灰色泥（Ⅱ層）、近世以降の盛土（0層）からなる。なお、23G13ほかを含む調査区南壁の堆積層の側方変化を確認したところ、Ⅵ層は調査区中央付近で色調が淡くなり、19Jではこれに相当する堆積物は確認できなかった。また、19JではⅤ層上位に黒～黒灰色泥（Ⅳ層）が確認できるが、23G13ほかではⅣ層は確認できなかった。なお、19JのⅣ層とⅤ層は、いずれも泥からなり、色調が上方に向かって漸移的に暗色化する。23G13ほかのⅤ層は上位の堆積層（Ⅱ層）が不整合に覆われ、層界が乱れることから、擾乱等によりⅣ層が不明瞭となっている可能性がある。

Ⅰ区及びⅡ区における平安時代の遺構の確認面は、Ⅰ区では2面、Ⅱ区では3面存在し、Ⅰ区ではⅤ層上面・Ⅵ層上面、Ⅱ区ではⅤ層上面・Ⅴ層中・Ⅶ層上面がこれに相当する。

（2）流路跡（Ⅰ区河川SD976）

流路跡（Ⅰ区河川SD976）は、調査区中央よりやや東側に位置し、流路跡に相当する凹地の幅はⅥ層の遺構確認面で約20mを測る。調査区南壁に作製された土層断面の観察では、下位より植物遺体が混じる砂及び泥の互層からなる堆積層（以下、①層）、植物遺体をほとんど含まない砂及び泥の互層からなる堆積層（以下、②層）、さらに下部が泥を基質として植物遺体が混じる堆積物、上部がみかけ塊状をなす泥を基質とする堆積物からなる堆積層（以下、③層）と大きく区分できる。このうち①層は上部が②層によって削剥されており、不整合に覆われる。②層は側方（西側）で砂と泥の層界が明瞭かつ砂の淘汰が良好と



第35図 各地点の模式柱状図および試料採取位置

地区	Gr	遺構名	試料番号	対応層位	備考	分析項目		備考	
						花粉分析	珪藻分析		
I区	4N25 (①)		1	II層	遺構覆土	-	-	I区 基本土層	
			2	IV層上部		○	○		
			3	IV層中部		-	-		
			4	IV層中部		○	○		
			5	V層		○	○		
			6	VI層上部		○	○		
			7	VI層下部		○	○		
			8	VII層		○	○		
I区	8021 (②)	河川 SD976	1	植物遺体層		-	-	流路跡 埋積物	
			2	褐灰泥		○	○		
			3	植物遺体層		-	-		
			4	褐灰泥		○	○		
			5	褐灰泥上部		○	○		
			6	褐灰泥下部		-	-		
			7	褐灰泥(砂混じり)		○	○		
II区	23G 13・14・18 (④)		1	V層上部		○	○	II区 基本土層	
			2	VI層上部		○	○		
			3	VI層上部		-	-		
			4	VI層中部		○	○		
			5	VI層下部		○	○		
			6	VI~VII層		-	-		
			7	VII層上部		○	○		
			8	VII層上部		-	-		
		23G-19J		1	VI層下部	(23G 西側)	-	-	
		19J (③)		1	IV層		○	○	
	17H	SE856	1	覆土中部	偽礫集中下部	-	-	井戸跡 埋積物	
2			覆土中~下部	植物遺体混じる 褐灰泥層	○	○			

第9表 分析試料一覧



第36図 土壌サンプル採取位置

なる傾向を示す。③層は、下に凸となる外形を為すと推定され、下部に植物遺体が混じる砂質泥～泥質砂の互層が発達し、中～上部はみかけ塊状をなす泥を基質とし、上部はやや暗色を呈する。

なお上記した①～③層では、①層下部の砂層より平安時代の須恵器坏や木質の遺物が多量に出土する。

(3) 井戸跡 (Ⅱ区 SE856)

井戸跡 (Ⅱ区 SE856) はⅥ層の遺構確認面より検出された遺構であり、埋積物の観察は深度約83cmまでを対象とした。井戸埋積物は、基本土層と同様に泥を基質とするが、植物遺体、炭化物 (炭化材) 及び偽礫 (ブロック) 等の混入によって特徴付けられ、下位より灰色泥、植物遺体が混じる褐灰泥、暗灰色泥、青灰色泥の偽礫が主体をなす層、炭化物が混じる暗灰色泥、炭化物が多く混じる褐灰泥が累重する。

今回の自然科学分析調査では、調査担当者によって選択された地点・層位の試料を優先し、さらに微化石類の保存が良好と想定される試料を加えた計17点の土壌を分析に供した。各地点の模式柱状図及び試料採取位置を第35図に、採取試料の詳細及び分析に供した試料の内訳を第9表に示す。

3 分析方法

(1) 珪藻分析

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返した後、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプレウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1,000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数する。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は、示準種等の重要な種類の見落とし

がないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt (1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot (1985 ~ 1991)、Desikachary (1987)等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び主要珪藻化石群集の層位分布図として表示する。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類(第10表)し表に示す。堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石が100個体以上検出された試料について図示する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、1%以上の出現率を示す分類群についてのみ表示する。なお、総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を「+」で表示するに留めている。また、図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度についても図示する。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉(1973)、中村(1980a)等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類を「-」で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

4 結果

(1) 珪藻分析

結果を第11~16表、第37図に示す。流路跡(I区河川SD976)の4試料(試料番号2・4・5・7)からは、堆積環境を検討する上で有意な数量の珪藻化石が産出したが、他の13試料は33個体及びそれ未満と化石の産出が少ない。産出分類群数は、合計で58属159分類群である。

流路跡(I区河川SD976)の4試料(試料番号2・4・5・7)は、産出種を塩分濃度に対するカテゴリで類別すると淡水域に生育する淡水生種(以下、水生珪藻)が全体の約70%と優占する。また、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好气的環境に耐性のある陸生珪藻や淡水～汽水生種、海水生種等も産出する。淡水生種の生態性(塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性)の特徴は、貧塩不定性種、好+真アルカリ性種、流水不定性種が優占する。主要種は、多産するものはないが4試料とも近似する。堆積環境を検討する上で重要なファクターとなる流水に対する適応性では、流水にも止水にも生息する流水不定性で付着性の *Amphora copulata*、*Gyrosigma procerum*、*Gomphonema parvulum*、*Eunotia minor*、流水性で付着性の *Meridion constrictum*、*Planothidium lanceolatum*、*Gyrosigma scalproides*、陸生珪藻では耐乾性の高い陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys*、海水浮遊性の *Paralia sulcata*、*Thalassionema nitzschioides* 等が産出する。このうち、流水付着性種の多くは、河川中～下流

部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することからそのような環境を指標することのできる中～下流性河川指標種群とされるものである。

一方、化石の産出が少ないⅡ区23G13ほかの5試料（試料番号1・2・4・5・7）、Ⅱ区19J（試料番号1）及びⅡ区SE856（試料番号2）、Ⅰ区4N25の6（試料番号2・4～8）からは、*Paralia sulcata*、*Thalassionema nitzschioides*、*Chaetoceros* spp.等の海水生種が産出するが、その大部分は壊れていた。また、第三紀絶滅種とされる *Actinocyclus ingens*、*Thalassionema hirosakiensis*、*Stephanodiscus schenckii*、*Thalassiosira praeyabei* 等も幾つかの試料で出現する。

（2）花粉分析

結果を、第17・18表、第38図に示す。流路跡（Ⅰ区河川SD976）と井戸跡（Ⅱ区SE856）では花粉化石が豊富に産出したが、基本土層（Ⅰ区4N25、Ⅱ区23G13ほか）からは古植生の解析に有意な個体数は得られなかった。

流路跡（Ⅰ区河川SD976）では、試料番号7は花粉化石の産状がやや悪いものの、全体的に豊富に産出し、保存状態も良好である。木本花粉群集は、いずれの試料もスギ属、ハンノキ属、ブナ属、ニレ属－ケヤキ属が多産し、マツ属、サワグルミ属、クマシデ属－アサダ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、トチノキ属等を伴う。試料番号4からはフウ属も確認された。草本花粉は、イネ科が多産し、カヤツリグサ科、クワ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ヨモギ属等を伴う。この他、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、コウホネ属、ゴキヅル属等の水湿地生植物に由来する花粉も検出される。また、いずれの試料からも栽培種のイネに由来する花粉（イネ属型）が検出され、イネ科花粉における割合は試料番号2が約16.5%、試料番号4が約29.0%、試料番号5が約29.7%、試料番号7が約30.7%であった。

井戸跡（Ⅱ区SE856）の花粉化石群集は、草本花粉の割合が高く、イネ科が優占する。多産したイネ科花粉中にはイネ属型が多く認められ、イネ科花粉における割合は約24.8%であった。この他、カヤツリグサ科、アカザ科、セリ科、ヨモギ属等が伴い、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属等の水湿地生植物の花粉も検出される。木本花粉では、スギ属、ハンノキ属、ブナ属、ニレ属－ケヤキ属等が多く産出し、マツ属、サワグルミ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属等を伴う。また、第三紀消滅種のフウ属も僅かに検出される。

花粉化石がほとんど検出されなかった基本土層（Ⅰ区4N25、Ⅱ区23G13ほか）は、前出の2地点と比較すると保存状態も悪い。確認された分類群は、木本花粉ではツガ属、マツ属、スギ属、ハンノキ属、ブナ属、ニレ属－ケヤキ属等が、草本花粉ではイネ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、アカザ科、ヨモギ属、キク亜科等が挙げられる。Ⅰ区4N25では、すべての試料から栽培種のイネ属型が検出されたほか、試料番号2からソバ属が僅かに確認された。

5 考察

（1）堆積環境

Ⅰ区及びⅡ区基本土層は、珪藻化石の産出が少なくその生態性から堆積環境を推定することは困難であった。一方、流路跡（Ⅰ区河川SD976）を埋積する堆積物の4試料（試料番号2・4・5・7）からは、100個体以上の珪藻化石が産出し、堆積環境についての知見を得ることができた。これらの試料からは *Amphora copulata*、*Gyrosigma procerum* 等の流水不定性種が多く産出したが、*Meridion constrictum*、

Planothidium lanceolatum 等の中～下流性河川指標種群や好流水性の *Gyrosigma scalproides* も比較的多く認めることができた。これに対して止水環境に生息する止水性種は流水性種と比較すると種数は極少なかったことから、①層堆積層の形成段階は流水のあった環境が示唆される。また、海水生種や陸生珪藻等の環境の異なる種類は、集水域や河川周辺の堆積物が削剥され、本地点に二次堆積したものと推測される。

なお、基本土層（Ⅰ区4N25、Ⅱ区23G13ほか・19J）試料において化石が少なかった理由としては、①堆積速度が速かったことにより相対的に堆積物中に含まれ難かったこと、②堆積後に分解消失したこと、③珪藻化石が死後シルト粒子以下の微細粒子と挙動を共にすることから砂が堆積するような流速の速い環境では堆積し難い（小杉, 1988）ことなどが考えられる。今回の場合、層相が泥（シルト～粘土）を主とすることや化石の保存が悪かったことから、①や②が原因として考えられる。また、少ないながらも第三紀絶滅種を含む海水生種が多く含まれていた。これらの海水生種は、遺跡の立地から丘陵を構成する海成層が河川などの影響で削剥されて遺跡の基本土層の母材となっているためと考えられる。また、井戸跡（Ⅱ区SE856）埋積物（試料番号2）も基本土層と同様な組成を示し、水の存在を裏付けるような水生珪藻はほとんど産出しなかった。おそらく、基本土層と同様に低地堆積物を母材としていることが考えられる。

（2）古植生

花粉化石が豊富に産出した流路跡（Ⅰ区河川SD976）及び井戸跡（Ⅱ区SE856）試料は、木本花粉群集が類似し、スギ属、ハンノキ属、ブナ属、ニレ属－ケヤキ属等が多く認められた。ブナ属は冷温帯性落葉広葉樹林の主要構成要素であることから、周辺の丘陵や山地部にコナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹と共に森林を形成していたと考えられる。ハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属等は河畔林や湿地林を形成する種類であり、トチノキ属、トネリコ属なども同様である。遺跡周辺及び流路の集水域にはこれらの分類群からなる林分が分布しており、サワグルミ属、クルミ属、クマシデ属－アサダ属、コナラ亜属、シナノキ属等も生育したと推定される。スギ属は、水分や養分の供給が十分で、水はけの良い土壌で生育するとされていることから、おそらく前述した河畔・湿地林に混じって、部分的にスギ属も林分を形成していたと想定される。この他、マツ属等の針葉樹、コナラ属アカガシ亜属、シイ属等の常緑広葉樹なども、周辺の丘陵地などに生育していたと考えられる。

なお、本遺跡より西方の丘陵縁辺及び開析谷に立地する吉沢遺跡では、古代の遺構埋積物及び古代の整地以前の堆積層を対象とした分析調査結果から、周辺の丘陵にブナ属などの冷温帯性落葉広葉樹林が成立しており、近傍の丘陵にはコナラを含むコナラ亜属やクリ属が、河畔や低湿地などにはヤナギ属、ニレ属－ケヤキ属等が、丘陵の谷沿いや低地等にスギ属が生育していた可能性が指摘されている（丸山ほか2012）。本遺跡と吉沢遺跡とでは多産する分類群に若干の差異が認められるが、おそらく遺跡の立地の違いを反映していると考えられ、概ね同様の植生が推定される。

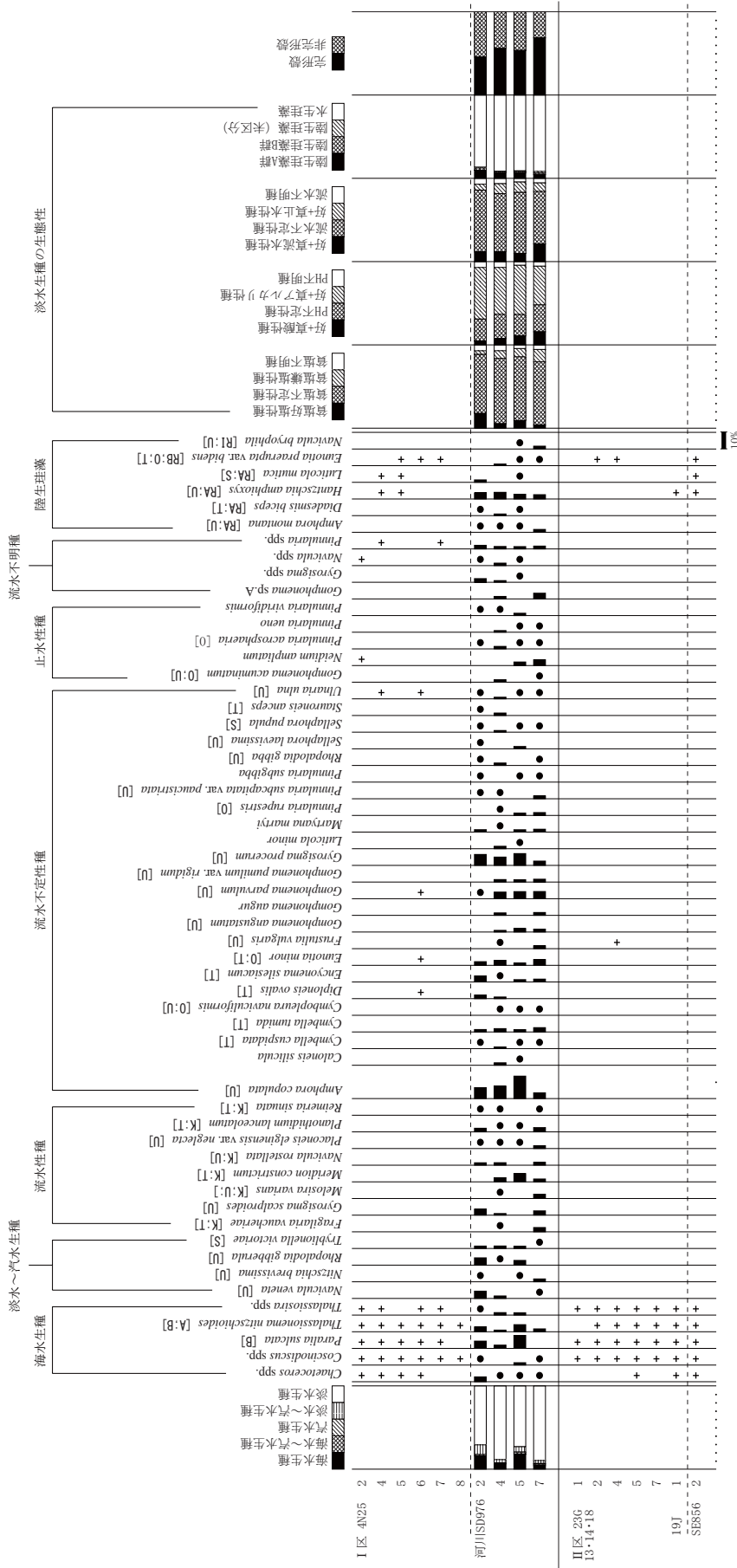
草本類では、イネ科が多産し、カヤツリグサ科、クワ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ヨモギ属等が認められた。これらは、開けた明るい場所に生育する人里植物を含む分類群であることから、調査地周辺及び流路跡周辺の草地に由来すると考えられる。また、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属等の水湿地生植物は、流路跡内や井戸跡周辺の湿地部に生育したと考えられる。なお、流路跡と井戸跡とを比較すると、井戸跡では草本花粉の割合が高く、イネ科の多産を特徴とする。流路堆積物は珪藻分析からも推定されるように集水域の影響を反映していると考えられる一方、井戸跡試料はより局地的、すなわち集落周辺の植生を反映していると考えられる。

ところで、流路跡（I区河川SD976）と井戸跡（II区SE856）の各試料から栽培種のイネ（イネ属型）、I区4N25（試料番号2）からソバ属の花粉が検出された。中村（1980b）によれば、現在の水田耕土に含まれるイネ属花粉の割合は30%以上の比率であることから、イネ属の割合が30%以上を示す場合、少なくともその付近で現在に近い集約度の稲作が行われていたとみなせると述べている。また、イネの花粉は、生産される花粉の1/4がもみ殻内に残留することが知られている（中村，1980b）。今回の分析結果から、周辺域で稲作やソバ栽培が行われていたことが推定される。とくにI区河川SD976の①層下部とII区SE856等の流路跡の遺物包含層に近い堆積層や遺構埋積物に相当するため、集落近傍における稲作や集落内における利用後のイネのもみ殻等の廃棄の可能性が示唆される。

塩分濃度に対する区分		塩分に対する適応性		生育環境（例）
海水生種：	強塩生種 (Polyhalobous)	塩分濃度が 40.0‰以上に出現するもの		低緯度熱帯海域、塩水湖など
	真塩生種 (Euhalobous)	塩分濃度が 40.0～30.0‰に出現するもの		一般海域（ex. 大陸棚及び大陸棚以深の海域）
汽水生種：	中塩生種 (Mesohalobous)	塩分濃度が 30.0～0.5‰に出現するもの	強中塩生種 (a-Mesohalobous)	河口・内湾・沿岸・塩水湖・潟など
			弱中塩生種 (b-Mesohalobous)	
淡水生種：	貧塩生種 (Oligohalobous)	塩分濃度が 0.5 パーミル以下に出現するもの		一般陸水域（ex. 湖沼・池・沼・河川・川・沼沢地・泉）
塩分・pH・流水に対する区分		塩分・pH・流水に対する適応性		
塩分に対する適応性	貧塩－好塩性種 (Halophilous)	少量の塩分がある方がよく生育するもの		高塩領域（塩水遡上域・温泉・耕作土壌）
	貧塩－不定性種 (Indifferent)	少量の塩分があってもこれによく耐えることができるもの		一般陸水域（湖沼・池・沼・河川・沼沢地など）
	貧塩－嫌塩性種 (Halophobous)	少量の塩分にも耐えることができないもの		湿原・湿地・沼沢地
	広域塩性種 (Euryhalinous)	低濃度から高濃度まで広い範囲の塩分濃度に対応して出現するもの		一般淡水～汽水域
pHに対する適応性	真酸性種 (Acidobiontic)	pH7.0 以下に出現、特に pH5.5 以下の酸性水域で最もよく生育するもの		湿原・湿地・火口湖（酸性水域）
	好酸性種 (Acidophilous)	pH7.0 付近に出現、pH7.0 以下の水域で最もよく生育するもの		湿原・湿地・沼沢地
	pH－不定性種 (Indifferent)	pH7.0 付近の中性水域で最もよく生育するもの		一般陸水（ex. 湖沼・池沼・河川）
	好アルカリ性種 (Alkaliphilous)	pH7.0 付近に出現、pH7.0 以上の水域で最もよく生育するもの		
	真アルカリ性種 (Alkalibiontic)	特に pH8.5 以上のアルカリ性水域で最もよく生育するもの		
流水に対する適応性	真止水性種 (Limnobiontic)	止水にのみ出現するもの		流入水のない湖沼・池沼
	好止水性種 (Limnophilous)	止水に特徴的であるが、流水にも出現するもの		湖沼・池沼・流れの穏やかな川
	流水不定性種 (Indifferent)	止水にも流水にも普通に出現するもの		河川・川・池沼・湖沼
	好流水性種 (Rheophilous)	流水に特徴的であるが、止水にも出現するもの		河川・川・小川・上流域
	真流水性種 (Rheobiontic)	流水にのみ出現するもの		河川・川・流れの速い川・溪流・上流域
陸生珪藻	好気性種 (Aerophilous)	好気的環境 (Aerial habitats) 水域以外の常に大気に曝された特殊な環境に生育する珪藻の一群で、多少の湿り気と光さえあれば土壌表層中やコケの表面に生育可能、特に、土壌中に生育する陸生珪藻を土壌珪藻という。		<ul style="list-style-type: none"> ・土壌表層中や土壌に生えたコケに付着 ・木の根元や幹に生えたコケに付着 ・濡れた岩の表面やそれに生えたコケに付着 ・滝の飛沫で湿ったコケや石垣・岩上のコケに付着 ・洞窟入口や内部の照明の当たった所に生えたコケに付着

*塩分に対する区分は Lowe(1974)、pH と流水に対する区分は Hustedt(1937～1938) による。

第 10 表 珪藻の生態性



＜環境指標種＞
 A: 外洋指標種, B: 内湾指標種, C1: 海洋藻場指標種, C2: 汽水藻場指標種, D1: 海水砂質干潟指標種, D2: 汽水砂質干潟指標種, E1: 海水泥質干潟指標種, E2: 汽水泥質干潟指標種, F: 淡水底生種群(以上は小杉, 1988) G: 淡水浮遊生種群, H: 河口浮遊生種群, J: 上流性河川指標種, K: 中〜下流性河川指標種, L: 最下流性河川指標種群, M: 湖沼浮遊性種, N: 湖沼沼沢地指標種, O: 沼沢地付着生種, P: 高層湿原指標種群(以上は安藤, 1990) S: 好汚濁性種, U: 広適応性種, T: 好清水性種(以上はAsai and Watanabe, 1996) RI: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, 伊藤・堀内, 1991) 海水〜汽水〜淡水生種産出率・各種産出率は全体基数・完形産出率の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。●は2%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第37図 主要珪藻化石群集の層位分布

第 1 節 珪藻・花粉分析

種類	生態性			環境 指標種	I 区									
					基本土層					流路跡				
	塩分	pH	流水		4N24					SD976				
					2	4	5	6	7	8	2	4	5	7
<i>Diademsis confervacea</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RB,S	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Diademsis contenta</i> (Grun.ex Van Heurck)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	1	-	-	3	2	-	-
<i>Diploneis parva</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Encyonema mesianum</i> (Kholnoky)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
<i>Encyonema silesiacum</i> (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	5	1	2	2
<i>Epithemia adnata</i> (Kuetz.)Brebisson	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Epithemia sores</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-bi	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
<i>Eunotia implicata</i> Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Eunotia minor</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O,T	-	-	-	1	-	-	3	6	2	4
<i>Eunotia praeurupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Eunotia praeurupta</i> var. <i>bidens</i> (Ehren.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	-	-	1	1	1	-	-	2	1	1
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria capucina</i> Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-	1	-	3
<i>Frustulia rhomboides</i> (Ehr.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	P,U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2
<i>Frustulia weinholdii</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Gomphonema rhombica</i> (Fricke)Merino et al.	Ogh-ind	ind	r-bi	J	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	-	-	-	-	-	-	3	-	1
<i>Gomphonema affine</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	2	3	2
<i>Gomphonema angustum</i> Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Gomphonema augur</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	3	-	2
<i>Gomphonema augur</i> var. <i>gautieri</i> V.Heurck	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	3	-	-
<i>Gomphonema augur</i> var. <i>turris</i> (Ehr.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	2	1	-
<i>Gomphonema lagenula</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	r-ph	S	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Gomphonema micropus</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	1	-	-	1	8	6	5
<i>Gomphonema pseudoaugur</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Gomphonema pumilum</i> var. <i>rigidum</i> E.Reichardt et Lange-B.	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	3	2	2
<i>Gomphonema</i> sp.A	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	3	-	4
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Gyrosigma procerum</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	9	10	10	3
<i>Gyrosigma scalproides</i> (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	5	2	-	3
<i>Gyrosigma</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	3	2	1	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	-	1	1	-	-	-	5	8	4	3
<i>Luticola goeppertiana</i> (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-hil	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
<i>Luticola minor</i> (R.M.Patrick)Mayama	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	3	1	-
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	-	1	1	-	-	-	2	-	1	-
<i>Martyana martyi</i> (Heribaud)Round	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	2	1	2	2
<i>Melosira varians</i> Agardh	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	-	-	-	-	-	-	1	-	3
<i>Meridion constrictum</i> Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	-	-	-	-	-	-	-	5	7	2
<i>Navicula bryophila</i> J.B.Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	RI,U	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2
<i>Navicula cryptocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Navicula cryptotenella</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
<i>Navicula kotschyi</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Navicula lanceolata</i> (Agardh)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula nipponica</i> (Skv.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Navicula oppugnata</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula pseudocurcicula</i> H.Kobayasi	Ogh-unk	unk	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula rhyngocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Navicula rostellata</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	-	-	-	-	-	2	3	-	2
<i>Navicula symmetrica</i> Patrick	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
<i>Navicula tokyoensis</i> H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Navicula trivialis</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rostrata</i> Skv.	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	1	3	1	-
<i>Neidium affine</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ind	r-bi		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	ind	RA	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-
<i>Neidium amplatum</i> (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-	-	-	-	3	4
<i>Neidium tokyoensis</i> H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Nitzschia umbonata</i> (Ehr.)Lange-B.	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	1	3	1	1
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia brevicostata</i> var. <i>sumatrana</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-

第 12 表 珪藻分析結果 (2)

種類	生態性			環境 指標種	I区																
					基本土層					流路跡											
	塩分	pH	流水		4N24					SD976											
					2	4	5	6	7	8	2	4	5	7							
<i>Pinnularia divergens</i> var. <i>decrescens</i> (Grun.)Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia divergens</i> var. <i>elliptica</i> (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia lundii</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia macilenta</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia mayeri</i> Krammer	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Pinnularia nobilis</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	2	-	-
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
<i>Pinnularia subcapitata</i> var. <i>paucistriata</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	2
<i>Pinnularia subgibba</i> Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1	-
<i>Pinnularia substomatophora</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
<i>Pinnularia ueno</i> Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	1	1	-
<i>Pinnularia viridiformis</i> Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	2	-	-	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O,U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3	2	2	-	-
<i>Placoneis elginensis</i> (Greg.)E.J.Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Placoneis elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krasske)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	2	-
<i>Plagiotropis lepidoptera</i> var. <i>proboscidea</i> (Cleve)Reim.	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
<i>Planothidium lanceolatum</i> (Breb. ex Kuetz.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	1	1	3	-
<i>Pseudostaurosira brevistriata</i> (Grun.)Williams & Round	Ogh-hil	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-
<i>Reimeria sinuata</i> (W.Greg.)Kocielek et Stoermer	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	-
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i> (C.Agardh)Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-	-	1	-
<i>Rhopalodia operculata</i> (Agardh)Hakansson	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Sellaphora bacillum</i> (Ehr.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Sellaphora laevissima</i> (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	-	-
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	1	1	-	-
<i>Sellaphora pupula</i> var. <i>subcapitata</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-
<i>Stauroneis acuta</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-	-	-	-
<i>Stauroneis nobilis</i> Schumann	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Staurosira construens</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Surirella minuta</i> Brebisson	Ogh-ind	ind	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Surirella tenera</i> Gregory	Ogh-hob	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Ulnaria ulna</i> (Nitzsch)Compere	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	2	1	1	-	-
海水生種					6	14	12	17	9	8	22	13	25	5							
海水～汽水生種					1	0	0	1	0	0	0	1	3	2							
汽水生種					0	0	0	0	0	0	2	1	1	1							
淡水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	16	8	9	4							
淡水生種					2	6	4	6	2	0	97	177	103	104							
珪藻化石総数					9	20	16	24	11	8	137	200	141	116							

第 13 表 珪藻分析結果 (3)

第 1 節 珪藻・花粉分析

種類	生態性			環境 指標種	II区							
					基本土層					井戸跡		
	塩分	pH	流水		23G		19J		SE856			
					1	2	4	5	7	1	2	
<i>Actinocyclus ingens</i> Rattray	Euh				1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Actinocyclus ochotensis</i> Jouse	Euh				-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Actinoptychus senarius</i> (Ehr.)Ehrenberg	Euh			A	-	-	-	1	-	1	-	-
<i>Azpeitia nodulifera</i> (A.Schmidt)Fryxell et Sims	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Chaetoceros</i> spp.	Euh				-	-	-	2	-	4	5	-
<i>Cocconeis pseudomarginata</i> Gregory	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Coscinodiscus marginatus</i> Ehrenberg	Euh				-	1	-	4	-	-	-	-
<i>Coscinodiscus</i> spp.	Euh				1	1	1	2	2	2	1	-
<i>Grammatophora macilenta</i> W.Smith	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Grammatophora marina</i> (Lyng.)Kuetzing	Euh				-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Grammatophora</i> spp.	Euh				2	-	1	-	-	-	-	-
<i>Hyalodiscus scoticus</i> (Kuetz.)Grunow	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Melosira albicans</i> Sheshukova-Poretzkaya	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Melosira sol</i> (Ehr.)Kuetzing	Euh				1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Paralia sulcata</i> (Ehr.)Cleve	Euh			B	1	2	1	2	1	3	3	-
<i>Pseudopodosira</i> spp.	Euh				-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Rhizosolenia</i> spp.	Euh				1	1	-	-	1	2	-	-
<i>Stephanopyxis schenckii</i> Kanaya	Euh				-	-	-	2	-	-	-	-
<i>Stephanopyxis</i> spp.	Euh				-	-	-	-	-	2	1	-
<i>Stephanopyxis turris</i> Grev. and Arn.	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Thalassionema hirosakiensis</i> (Kanaya)Schrader	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Thalassionema nitzschioides</i> (Grun.)Grunow	Euh			A,B	-	1	3	1	2	3	4	-
<i>Thalassiosira gravida</i> Cleve	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Thalassiosira nidulus</i> (Tempere et Brun)Jouse	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Thalassiosira oestrupii</i> (Ostenfeld)Proshkina-Labrenko	Euh			A	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Thalassiosira praeeyabei</i> (Schrader)Akiva et Yanagisawa	Euh				-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Thalassiosira</i> spp.	Euh				1	1	1	3	1	3	4	-
<i>Triceratium</i> spp.	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis scutellum</i> Ehrenberg	Euh-Meh			C1	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Cyclotella striata</i> (Kuetz.)Grunow	Euh-Meh			B	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Cyclotella striata-C. stylorum</i>	Euh-Meh			B	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis bombus</i> Ehrenberg	Euh-Meh				-	-	-	1	1	1	1	-
<i>Diploneis smithii</i> (Breb. ex W.Smith)Cleve	Euh-Meh			E1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia dubia</i> W.Smith	Euh-Meh				-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula peregrina</i> (Ehr.)Kuetzing	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Tryblionella levidensis</i> W.Smith	Meh			S	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Tryblionella littoralis</i> (Grunow)D.G.Mann	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Tryblionella plana</i> (W.Sm.)Pelletan	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Anomoeoneis sphaerophora</i> (Kuetz.)Pfitzer	Ogh-Meh	al-bi	ind		-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gyrosigma exilis</i> (Grun.)Reimer	Ogh-Meh	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Tryblionella victoriae</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes inflata</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthidium exiguum</i> (Grunow)Czarnecki	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthidium japonicum</i> (H.Kobayasi)H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-bi	J,T	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora copulata</i> (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora ovalis</i> (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Aulacoseira granulata</i> (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	1	-	-	-	-	1	-	-
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis minuta</i> (Grunow)Ohtsuka et Fujita	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis truncatula</i> (Grunow)	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis euglypta</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis lineata</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Craticula ambigua</i> (Ehr.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Craticula cuspidata</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymatopleura solea</i> (Breb.)W.Smith	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella aspera</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella cuspidata</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella tumida</i> (Breb.)Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbopleura naviculiformis</i> (Auerswald)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O,U	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diadesmis biceps</i> Arnott ex Grunow in Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	-	-	-	-	-	-	-

第 14 表 珪藻分析結果 (4)

種類	生態性			環境 指標種	II区						
					基本土層					井戸跡	
	塩分	pH	流水		23G		19J		SE856		
1				2	4	5	7	1	2		
<i>Diademsis confervacea</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RB,S	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diademsis contenta</i> (Grun.ex Van Heurck)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	-	-	-	-	-	1
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis parma</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-
<i>Encyonema mesianum</i> (Kholnoky)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Encyonema silesiacum</i> (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Epithemia adnata</i> (Kuetz.)Brebisson	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	1	-
<i>Epithemia sores</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-bi	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia implicata</i> Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia minor</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O,T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> (Ehren.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	-	-	1	2	-	-	1
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria capucina</i> Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Frustulia rhomboides</i> (Ehr.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	P,U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1	-	-	-	-
<i>Frustulia weinholdii</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonensis rhombica</i> (Fricke)Merino et al.	Ogh-ind	ind	r-bi	J	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema affine</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema angustum</i> Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema augur</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema augur</i> var. <i>gautieri</i> V.Heurck	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema augur</i> var. <i>turris</i> (Ehr.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema lagenula</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	r-ph	S	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema micropus</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema pseudoaugur</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema pumilum</i> var. <i>rigidum</i> E.Reichardt et Lange-B.	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema</i> sp.A	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gyrosigma procerum</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gyrosigma scalproides</i> (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gyrosigma</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	-	-	-	-	-	2	6
<i>Luticola goeppertiana</i> (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-hil	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	-
<i>Luticola minor</i> (R.M.Patrick)Mayama	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	-	-	-	-	-	-	1
<i>Martyana martyi</i> (Heribaud)Round	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-
<i>Melosira varians</i> Agardh	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Meridion constrictum</i> Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula bryophila</i> J.B.Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	RI,U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula cryptocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula cryptotenella</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula kotschyi</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula lanceolata</i> (Agardh)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula nipponica</i> (Skv.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula oppugnata</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula pseudocurcicula</i> H.Kobayasi	Ogh-unk	unk	l-ph		-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula rhyngocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula rostellata</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula symmetrica</i> Patrick	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula tokyoensis</i> H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula trivialis</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rostrata</i> Skv.	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium affine</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ind	l-bi		-	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium amplatum</i> (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium tokyoensis</i> H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia umbonata</i> (Ehr.)Lange-B.	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	-	-	-	-	-	-	1
<i>Pinnularia brevicostata</i> var. <i>sumatrana</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-

第 15 表 珪藻分析結果 (5)

第1節 珪藻・花粉分析

種類	生態性			環境 指標種	II区						
					基本土層					井戸跡	
	塩分	pH	流水		23G		19J		SE856		
1				2	4	5	7	1	2		
<i>Pinnularia divergens</i> var. <i>decrescens</i> (Grun.)Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia divergens</i> var. <i>elliptica</i> (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia lundii</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia macilenta</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia mayeri</i> Krammer	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	S	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia nobilis</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> var. <i>paucistriata</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia subgibba</i> Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia substomatophora</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia ueno</i> Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia viridiformis</i> Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O,U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-
<i>Placoneis elginensis</i> (Greg.)E.J.Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Placoneis elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krasske)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Plagiotropis lepidoptera</i> var. <i>proboscidea</i> (Cleve)Reim.	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-
<i>Planothidium lanceolatum</i> (Breb. ex Kuetz.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pseudostaurosira brevistriata</i> (Grun.)Williams & Round	Ogh-hil	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Reimeria sinuata</i> (W.Greg.)Kocielek et Stoermer	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i> (C.Agardh)Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rhopalodia operculata</i> (Agardh)Hakansson	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sellaphora bacillum</i> (Ehr.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sellaphora laevisima</i> (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sellaphora pupula</i> var. <i>subcapitata</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	S	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis acuta</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis nobilis</i> Schumann	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-
<i>Staurosira construens</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Surirella minuta</i> Brebisson	Ogh-ind	ind	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Surirella tenera</i> Gregory	Ogh-hob	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Ulnaria ulna</i> (Nitzsch)Compere	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
海水生種					8	7	7	18	8	20	21
海水～汽水生種					0	0	0	1	2	1	2
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0
淡水生種					1	2	3	0	0	4	10
珪藻化石総数					9	9	10	19	10	25	33

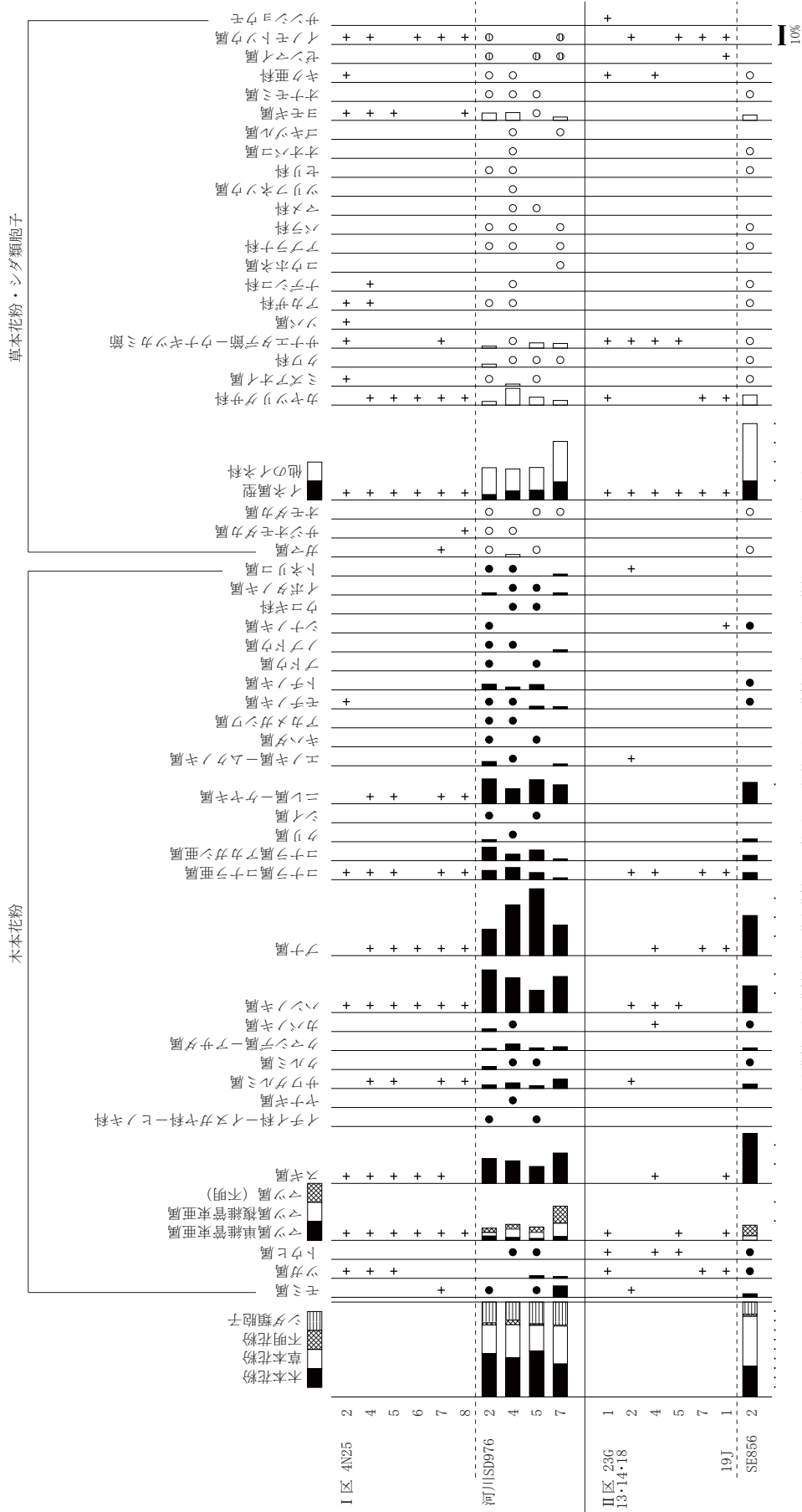
[適応性]

塩分濃度	pH: 水素イオン濃度	流水
Euh: 海水生種	al-bi: 真アルカリ性種	l-bi: 真止水性種
Euh-Meh: 海水生種 - 汽水生種	al-il: 好アルカリ性種	l-ph: 好止水性種
Meh: 汽水生種	ind: pH 不定性種	ind: 流水不定性種
Ogh-Meh: 淡水生種 - 汽水生種	ac-il: 好酸性種	r-ph: 好流水性種
Ogh-hil: 貧塩好塩性種	ac-bi: 真酸性種	r-bi: 真流水性種
Ogh-ind: 貧塩不定性種	unk: pH 不明種	unk: 流水不明種
Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種		
Ogh-unk: 貧塩不明種		

[環境指標種]

A: 外洋指標種 . B: 内湾指標種 .
 C1: 海水藻場指標種 . C2: 汽水藻場指標種 .
 D1: 海水砂質干潟指標種 . D2: 汽水砂質干潟指標種 .
 E1: 海水泥質干潟指標種 . E2: 汽水泥質干潟指標種 .
 F: 淡水底生種群 . (以上は小杉,1988)
 G: 淡水浮遊性種群 . H: 河口浮遊性種群 . J: 上流性河川指標種 .
 K: 中～下流性河川指標種 . L: 最下流性河川指標種群 .
 M: 湖沼浮遊性種 . N: 湖沼沼沢湿地指標種 . O: 沼沢湿地付着生種 .
 P: 高層湿原指標種群 . Q: 陸域指標種群 . (以上は安藤,1990)
 S: 好汚濁性種 . U: 広適応性種 . T: 好清水性種 .
 (以上は Asai & Watanabe,1995)
 R: 陸生珪藻 (RA:A 群 . RB:B 群 . RI: 未区分 . 伊藤・堀内,1991)

第 16 表 珪藻分析結果 (6)



木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。
 ○●は1%未満、+は木本花粉100個未満の試料において検出された種類を示す。

第38図 主要花粉化石群集の層位分布

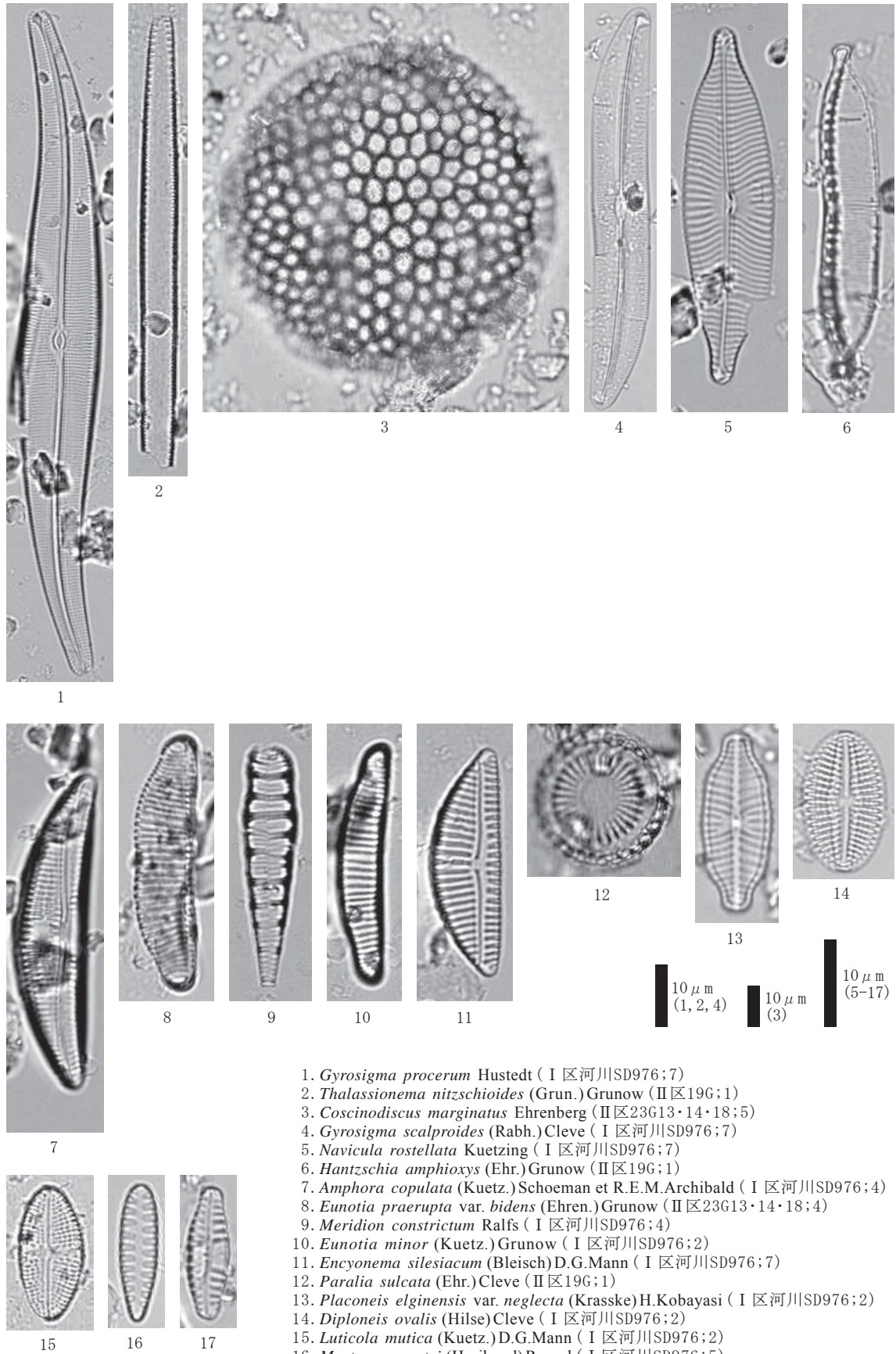
第1節 珪藻・花粉分析

種類	I区										II区						
	基本土層					流路跡					基本土層			井戸跡			
	4N24					SD976					23G			19J SE856			
	2	4	5	6	7	8	2	4	5	7	1	2	4	5	7	1	2
マキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
モミ属	-	-	-	-	1	-	1	-	2	6	-	1	-	-	-	-	4
ツガ属	1	3	1	-	-	-	-	-	3	1	3	-	-	-	2	2	2
トウヒ属	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	2	-	1	1	-	-	1
マツ属単維管束亜属	-	-	-	-	-	-	6	3	2	2	-	-	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	-	2	-	1	-	-	5	9	7	7	1	-	-	-	-	5	5
マツ属(不明)	5	1	1	1	2	3	6	5	6	9	4	-	-	1	-	11	12
コウヤマキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
スギ属	5	1	2	1	1	-	35	24	19	16	-	-	1	-	-	1	56
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤナギ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サワグルミ属	-	3	1	-	1	1	5	6	3	5	-	1	-	-	-	-	5
クルミ属	-	-	-	-	-	-	4	1	2	-	-	-	-	-	-	-	2
クマシデ属-アサダ属	-	-	-	-	-	-	3	7	3	2	-	-	-	-	-	-	3
カバノキ属	-	-	-	-	-	-	4	2	-	-	-	-	1	-	-	-	1
ハンノキ属	1	2	2	1	3	2	60	37	25	19	-	1	4	2	-	-	30
ブナ属	-	3	3	1	3	8	37	54	75	16	-	-	2	-	1	1	45
コナラ属コナラ亜属	1	1	1	-	1	1	13	13	8	1	-	1	2	-	1	2	8
コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	-	-	-	19	7	12	1	-	-	-	-	-	-	6
クリ属	-	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	3
シイ属	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	-	2	1	-	3	1	35	16	27	10	-	-	-	-	-	-	24
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	-	-	6	2	-	1	-	1	-	-	-	-	-
ヤドリギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
フウ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
カラスザンショウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
コクサギ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キハダ属	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	1	-	-	-	-	-	1	1	3	1	-	-	-	-	-	-	1
ニシキギ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	-	-	-	-	-	-	8	3	6	-	-	-	-	-	-	-	1
ブドウ属	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ノブドウ属	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
シナノキ属	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハインキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
イボタノキ属	-	-	-	-	-	-	3	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-
トネリコ属	-	-	-	-	-	-	2	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-
スイカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-

第17表 花粉分析結果(1)

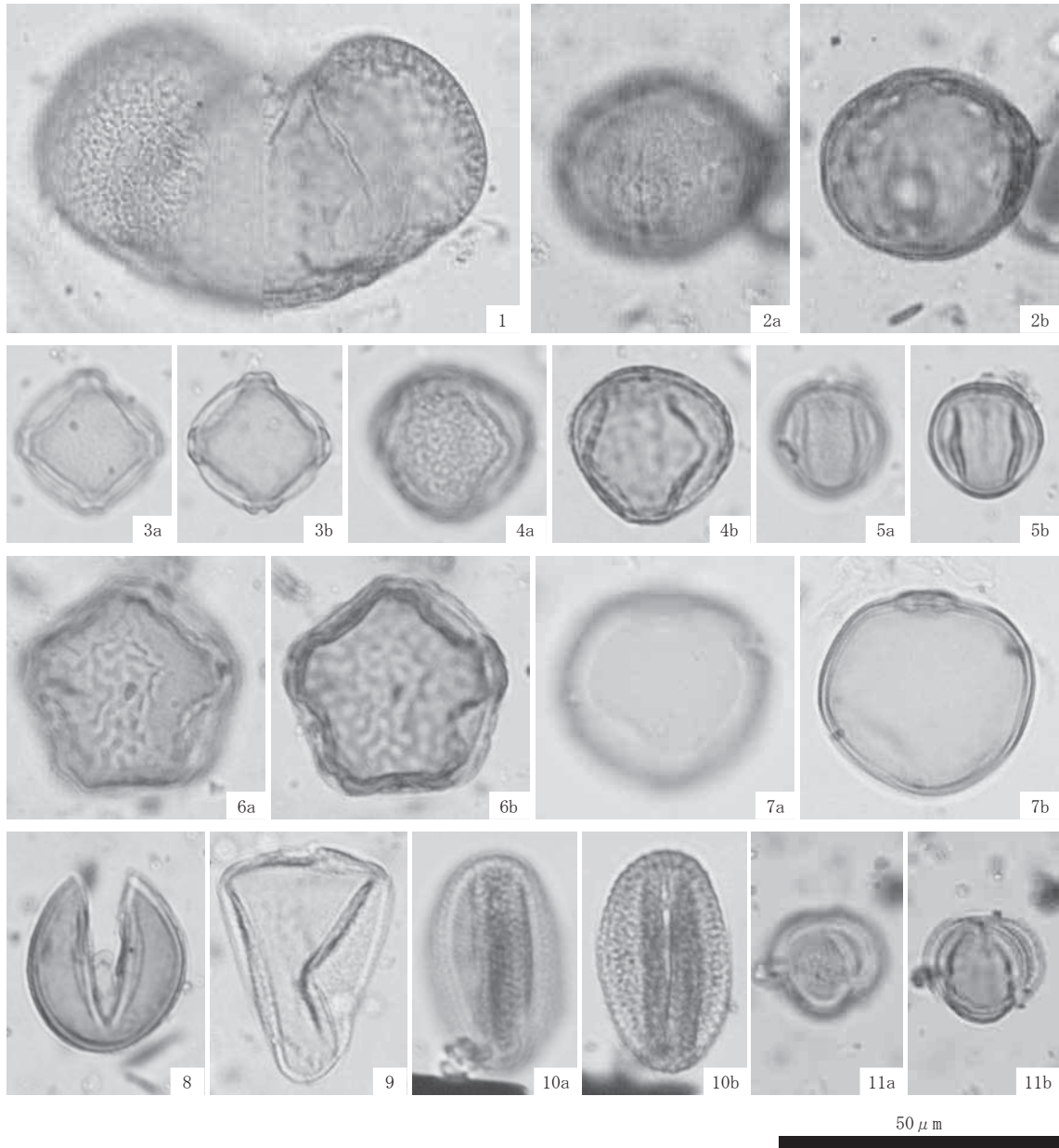
種類	I 区										II 区							
	基本土層					流路跡					基本土層			井戸跡				
	4N24					SD976					23G			19J SE856				
	2	4	5	6	7	8	2	4	5	7	1	2	4	5	7	1	2	
草本花粉	ガマ属	-	-	-	-	3	-	5	6	3	-	-	-	-	-	-	-	1
	サジオモダカ属	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	オモダカ属	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	5
	イネ属型	1	1	1	2	1	1	16	22	22	27	-	-	-	-	-	7	64
	他のイネ科	12	11	13	7	4	6	81	54	52	61	1	3	2	2	1	29	194
	カヤツリグサ科	-	4	2	3	4	4	11	41	18	7	1	-	-	-	1	3	34
	ミズアオイ属	1	-	-	-	-	-	5	5	2	-	-	-	-	-	-	-	2
	ユリ科	-	-	-	-	-	-	4	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
	クワ科	-	-	-	-	-	-	9	3	1	2	-	-	-	-	-	-	2
	ギンギシ属	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	サナエタデ節-ウナギツカミ節	1	-	-	-	1	-	6	1	12	7	2	1	1	1	-	-	3
	タデ属	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ソバ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	アカザ科	1	3	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	5
	ナデシコ科	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	2
	コウホネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
	カラマツソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
	アブラナ科	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	3
	バラ科	-	-	-	-	-	-	1	2	-	1	-	-	-	-	-	-	1
	マメ科	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
	ツリフネソウ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	セリ科	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	6
	オオバコ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	ヤエムグラ属-アカネ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ゴキツル属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
	ツルニンジン属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ヨモギ属	1	1	1	-	-	3	22	19	4	5	-	-	-	-	-	-	18
オナモミ属	-	-	-	-	-	-	1	3	1	-	-	-	-	-	-	-	1	
キク亜科	1	-	-	-	-	-	3	2	-	-	1	-	1	-	-	-	2	
タンポポ亜科	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
不明花粉	-	1	-	1	-	1	13	24	7	3	1	1	1	1	-	1	15	
シダ類孢子	ヒカゲノカズラ属	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
	ゼンマイ属	-	-	-	-	-	-	3	-	1	2	-	-	-	-	-	1	-
	イノモトソウ属	1	1	-	1	2	2	2	-	-	1	-	1	-	1	2	2	-
	サンショウモ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
	他のシダ類孢子	73	59	39	39	22	37	122	93	98	67	75	36	42	30	46	34	84
合計	木本花粉	14	18	12	5	15	17	267	202	213	100	10	6	11	4	5	25	213
	草本花粉	19	21	17	12	13	15	175	170	118	115	5	4	4	3	2	39	344
	不明花粉	0	1	0	1	0	1	13	24	7	3	1	1	1	1	0	1	15
	シダ類孢子	74	60	39	40	24	39	128	93	101	70	76	37	42	31	48	37	84
	合計 (不明を除く)	107	99	68	57	52	71	570	465	432	285	91	47	57	38	55	101	641

第 18 表 花粉分析結果 (2)



1. *Gyrosigma procerum* Hustedt (I 区河川SD976;7)
2. *Thalassionema nitzschioides* (Grun.) Grunow (II 区19G;1)
3. *Coscinodiscus marginatus* Ehrenberg (II 区23G13・14・18;5)
4. *Gyrosigma scalproides* (Rabh.) Cleve (I 区河川SD976;7)
5. *Navicula rostellata* Kuetzing (I 区河川SD976;7)
6. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (II 区19G;1)
7. *Amphora copulata* (Kuetz.) Schoeman et R.E.M. Archibald (I 区河川SD976;4)
8. *Eunotia praerupta* var. *bidens* (Ehren.) Grunow (II 区23G13・14・18;4)
9. *Meridion constrictum* Ralfs (I 区河川SD976;4)
10. *Eunotia minor* (Kuetz.) Grunow (I 区河川SD976;2)
11. *Encyonema silesiacum* (Bleisch) D.G. Mann (I 区河川SD976;7)
12. *Paralia sulcata* (Ehr.) Cleve (II 区19G;1)
13. *Placoneis elginensis* var. *neglecta* (Krasske) H. Kobayasi (I 区河川SD976;2)
14. *Diploneis ovalis* (Hilse) Cleve (I 区河川SD976;2)
15. *Luticola mutica* (Kuetz.) D.G. Mann (I 区河川SD976;2)
16. *Martyana martyi* (Heribaud) Round (I 区河川SD976;5)
17. *Reimeria sinuata* (W. Greg.) Kociolek et Stoermer (I 区河川SD976;2)

写真1 珪藻化石



- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 1. マツ属 (I 区河川SD976;2) | 2. ブナ属 (I 区河川SD976;2) |
| 3. ハンノキ属 (I 区河川SD976;2) | 4. コナラ属コナラ亜属 (I 区河川SD976;2) |
| 5. コナラ属アカガシ亜属 (I 区河川SD976;2) | 6. ニレ属一ケヤキ属 (I 区河川SD976;2) |
| 7. イネ科 (I 区河川SD976;5) | 8. スギ属 (II 区SE856;2) |
| 9. カヤツリグサ科 (I 区河川SD976;2) | 10. ソバ属 (I 区4N25;2) |
| 11. ヨモギ属 (II 区SE856;2) | |

写真2 花粉化石

第2節 樹種同定

株式会社 吉田生物研究所

1 試料

試料は長岡市浦反浦東遺跡から出土した服飾具1点、容器1点、建築部材13点、土木具2点の合計17点である。

2 観察方法

試料 No.51、52 は、数mm立方の試料をエポキシ樹脂に研磨して、木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の薄片プレパラートを作製した。その他の試料は、剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡（OPTIPHOTO-2, Nikon DS-Fi1）で観察して同定した。

3 結果

樹種同定結果（針葉樹1種、広葉樹2種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

（1）スギ科スギ属スギ（*Cryptomeria japonica* D.Don） （試料 No.20）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

（2）ブナ科クリ属クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.） （試料 No.2～12,25,51,52）

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（～500 μ m）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

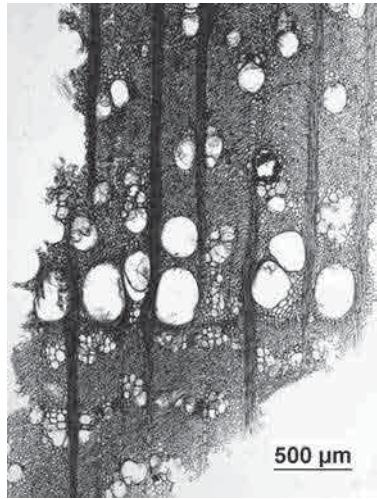
（3）ニレ科ケヤキ属ケヤキ（*Zelkova serrata* Makino） （試料 No.1,28）

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（～270 μ m）が1列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（インシアル柔組織）。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1～3列のものと大部分を占める6～7細胞列のほぼ大きさの様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部

分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

品 名		試料 No.	報告 No.	樹 種
SB7-P573	木柱	11	1394	ブナ科クリ属クリ
SB7-P574	木柱	7	1395	ブナ科クリ属クリ
SB7-P576	木柱	5	1397	ブナ科クリ属クリ
SB9-P612	木柱	12	1398	ブナ科クリ属クリ
SB9-P617	木柱	1	1402	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
SB9-P632	木柱	2	1399	ブナ科クリ属クリ
SB9-P716	木柱	6	1400	ブナ科クリ属クリ
SB10-P647	木柱	10	1403	ブナ科クリ属クリ
SB13-P673	木柱	3	1414	ブナ科クリ属クリ
SB13-P675	木柱	4	1415	ブナ科クリ属クリ
SB13-P677	木柱	8	1416	ブナ科クリ属クリ
SB22-P862	木柱	9	1412	ブナ科クリ属クリ
SB26-P1103	木柱	25	1204	ブナ科クリ属クリ
9026	下駄歯	20	1377	スギ科スギ属スギ
9176	盤	28	1216	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
51	杭	51	1388	ブナ科クリ属クリ
52	杭	52	1389	ブナ科クリ属クリ

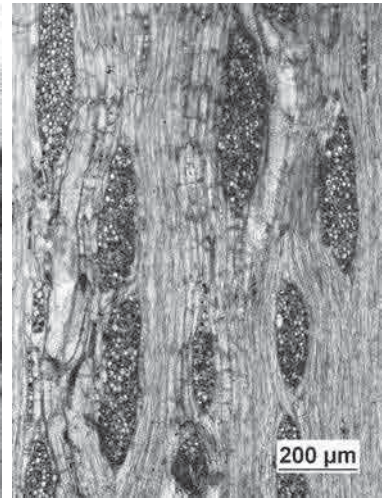
第 19 表 木製品樹種同定表



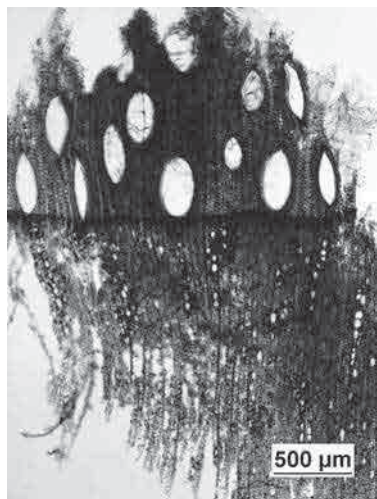
No-1 木口
ニレ科ケヤキ属ケヤキ



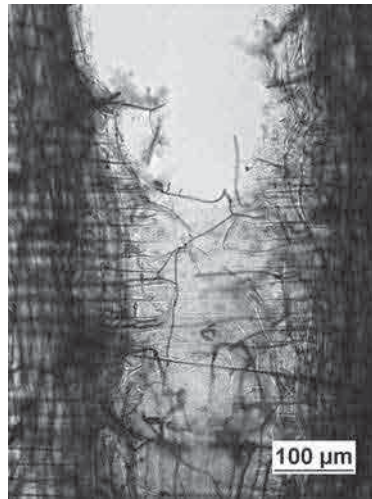
杣目



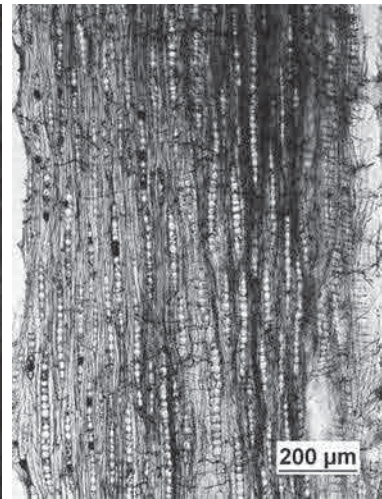
板目



No-2 木口
ブナ科クリ属クリ



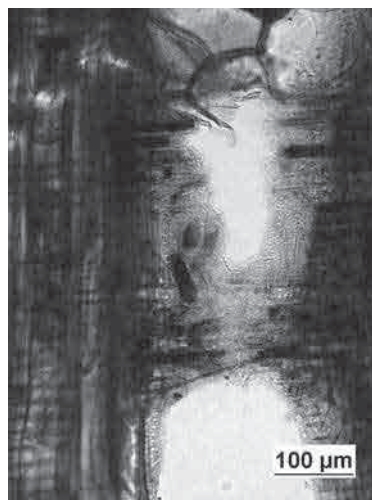
杣目



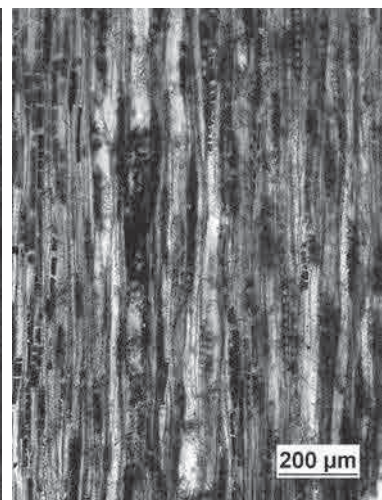
板目



No-3 木口
ブナ科クリ属クリ

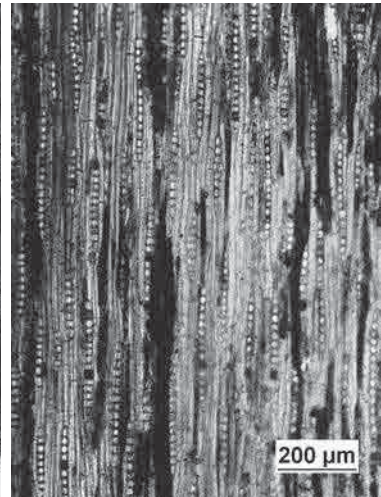
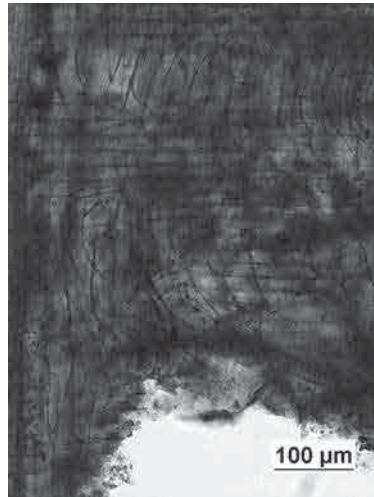
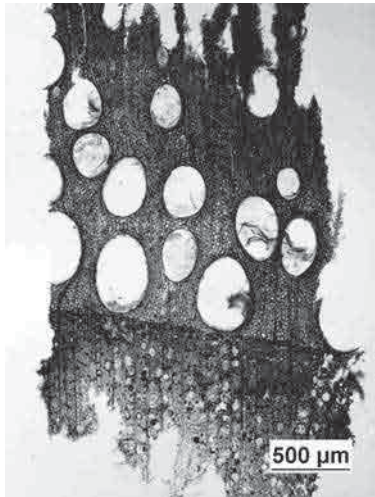


杣目



板目

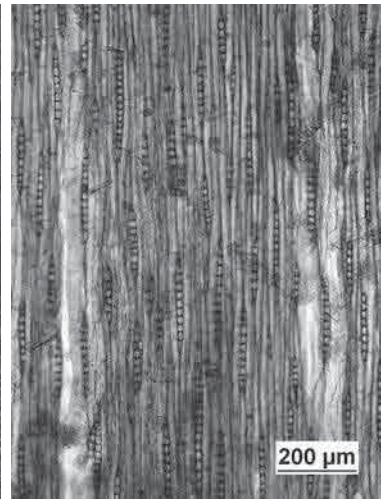
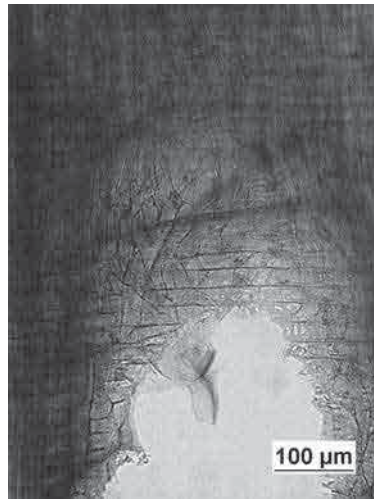
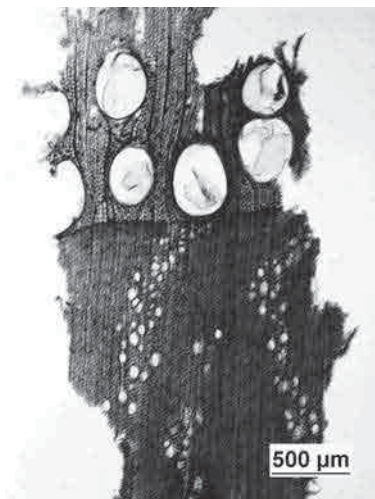
写真3 樹種同定顕微鏡写真(1)



No-4 木口
ブナ科クリ属クリ

柁目

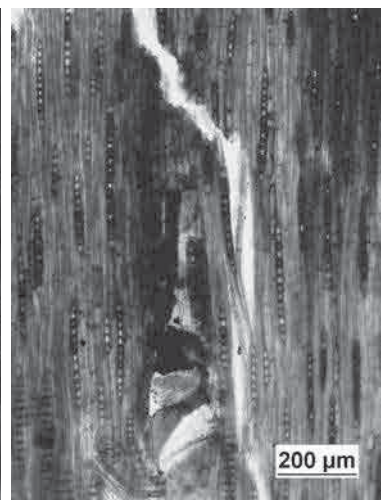
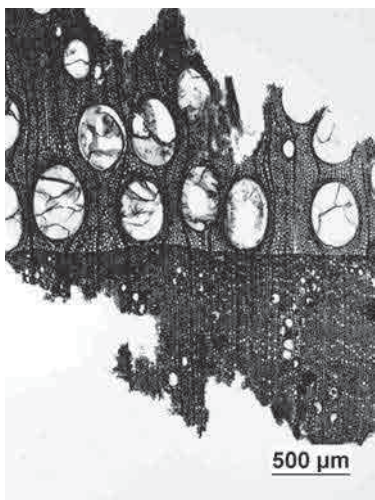
板目



No-5 木口
ブナ科クリ属クリ

柁目

板目

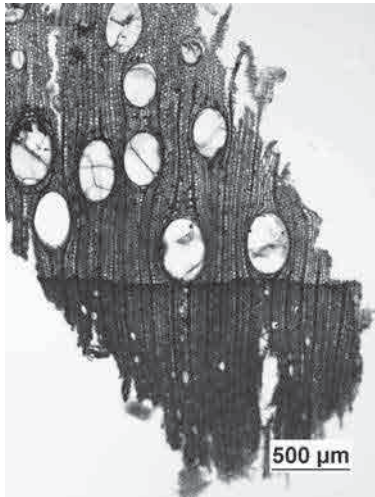


No-6 木口
ブナ科クリ属クリ

柁目

板目

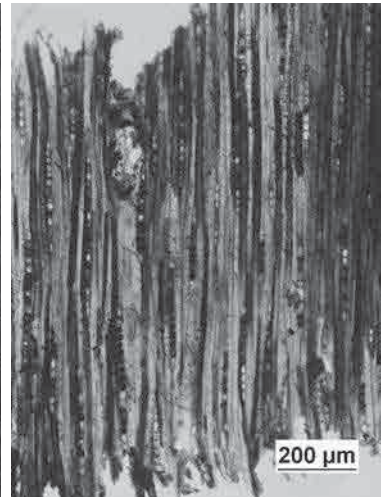
写真4 樹種同定顕微鏡写真(2)



No-7 木口
ブナ科クリ属クリ



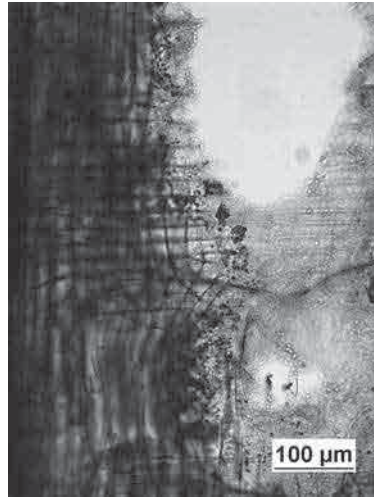
杣目



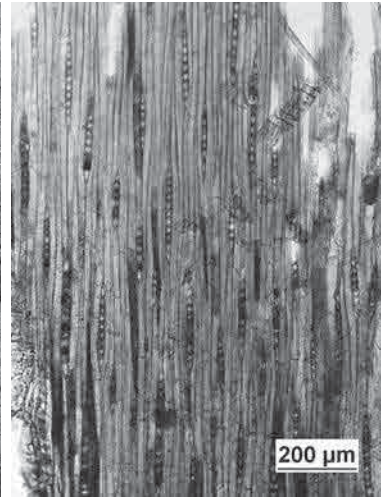
板目



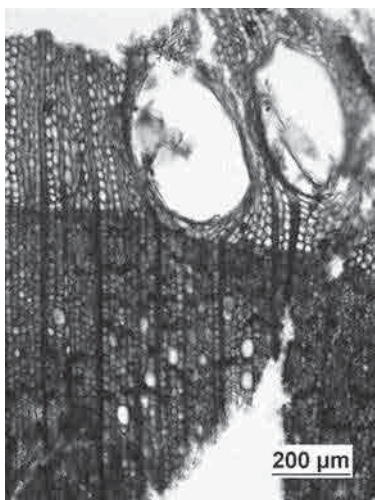
No-8 木口
ブナ科クリ属クリ



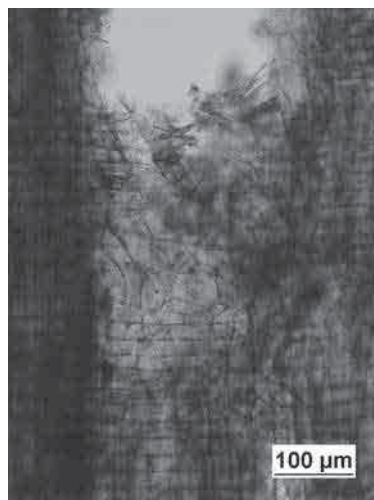
杣目



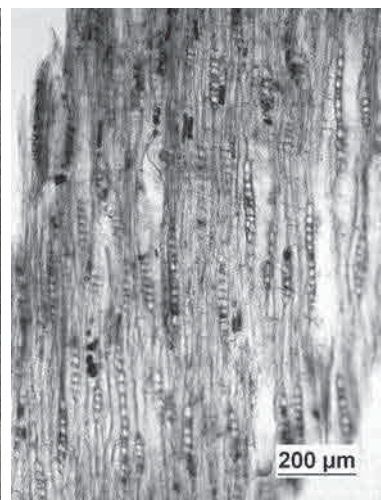
板目



No-9 木口
ブナ科クリ属クリ

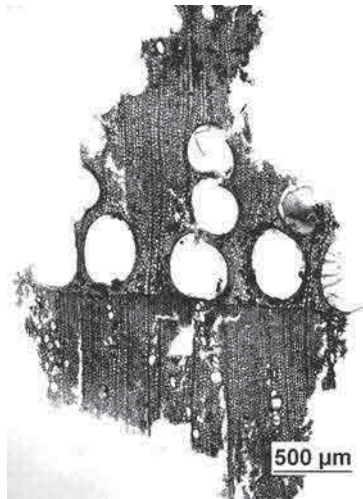


杣目

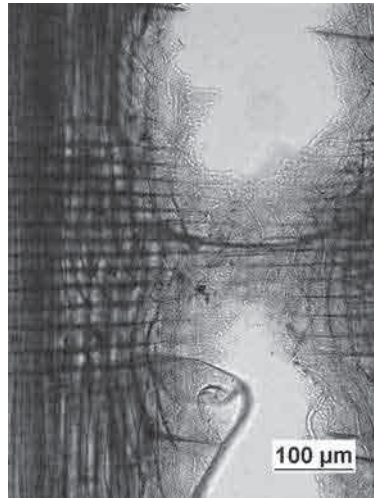


板目

写真5 樹種同定顕微鏡写真(3)



No-10 木口
ブナ科クリ属クリ



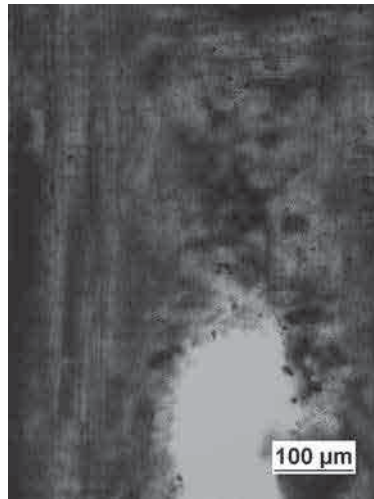
杣目



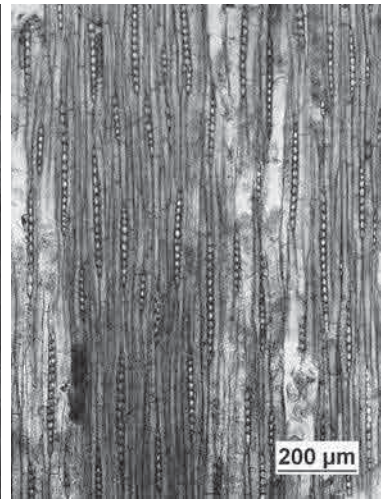
板目



No-11 木口
ブナ科クリ属クリ



杣目



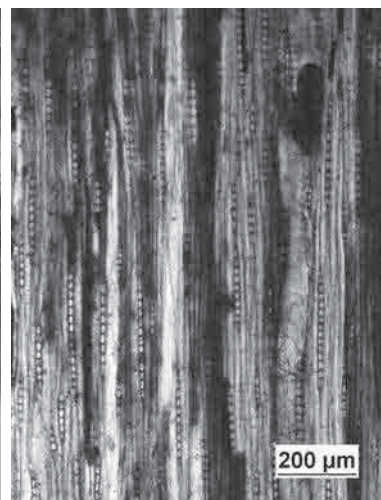
板目



No-12 木口
ブナ科クリ属クリ

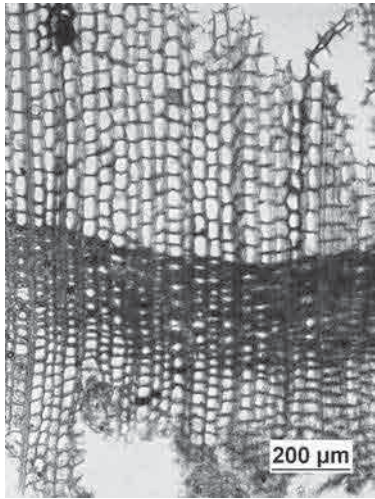


杣目



板目

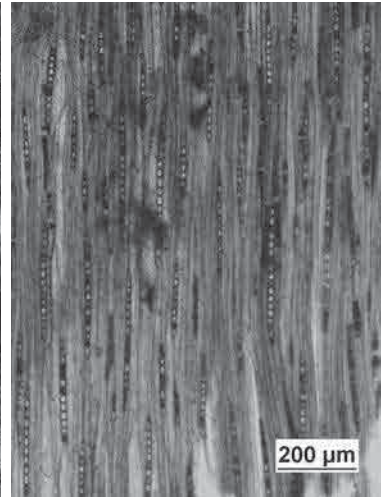
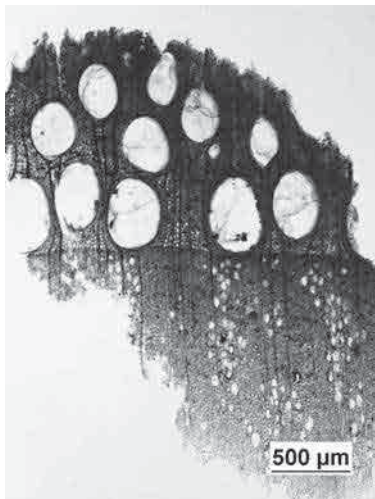
写真6 樹種同定顕微鏡写真(4)



No-20 木口
スギ科スギ属スギ

杣目

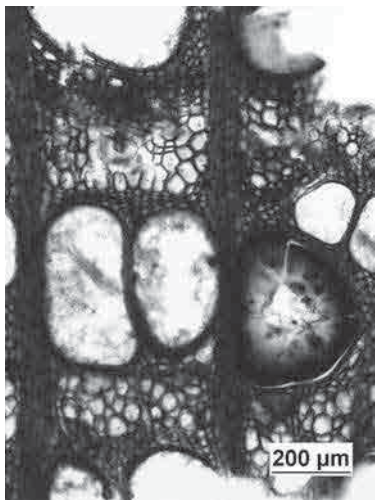
板目



No-25 木口
ブナ科クリ属クリ

杣目

板目



No-28 木口
ニレ科ケヤキ属ケヤキ

杣目

板目

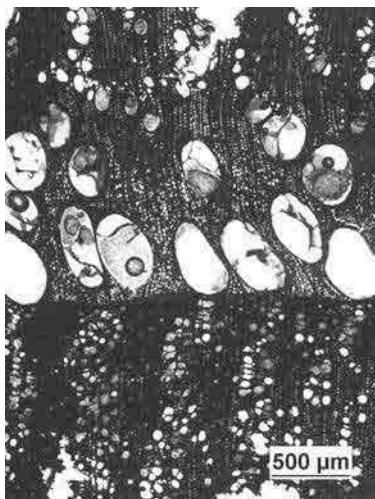
写真7 樹種同定顕微鏡写真(5)



No-51 木口
ブナ科クリ属クリ

杣目

板目



No-52 木口
ブナ科クリ属クリ

杣目

板目

写真8 樹種同定顕微鏡写真(6)

第3節 植物遺体同定

株式会社 吉田生物研究所

1 試料

長岡市浦反甫東遺跡から出土し、AMS（放射性炭素年代測定）を実施した灯明皿の炭化物に混じていた植物遺体の同定結果を以下に報告する。調査したのは水漬け状態の植物遺体1個体である。

2 調査方法

試料を実体顕微鏡下で観察し、その形態から種の同定を試みた。その際、石川茂雄（1994年）、大井（1978年）、北村・村田（1979年）、中山・井之口・南谷（2000年）を参照した。

3 結果

1種（木本1種）が認められた。同定結果を第20表に示し、種の観察内容を記す。和名の順位、学名は牧野（1989年）によった。

（1）モモ (*Prunus Persica* Batsch) の核

半裁されたやや楕円体の核には、表面に縦方向の短い溝と多数の凹みが見られる。大きさは2.2×1.8cmであった。



写真9 モモの核

No.	和名	科名	学名	種類	部位	個数
15	モモ	バラ	<i>Prunus Persica</i> Batsch	木本	核	1

第20表 植物遺体同定表

第4節 放射性炭素年代測定

株式会社 吉田生物研究所

1 はじめに

長岡市浦反甫東遺跡より検出された建築部材14点、容器1点、土木具2点、用途不明品2点の合計19点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第21表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3 結果

第22表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代（yrBP）の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09…試料No.1～8、10～16、IntCal13…試料No.9、17～19）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

試料 No.	試料データ	前処理
1	種類：木材 状態：wet 備考：SB7-P573 (1394)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
2	種類：木材 状態：wet 備考：SB7-P574 (1395)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
3	種類：木材 状態：wet 備考：SB7-P576 (1397)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
4	種類：木材 状態：wet 備考：SB9-P612 (1398)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
5	種類：木材 状態：wet 備考：SB9-P617 (1402)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
6	種類：木材 状態：wet 備考：SB9-P632 (1399)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
7	種類：木材 状態：wet 備考：SB9-P716 (1400)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
8	種類：木材 状態：wet 備考：SB10-P647 (1403)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
9	種類：木材 状態：wet 備考：SB12-P688 (1404)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
10	種類：木材 状態：wet 備考：SB13-P673 (1414)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
11	種類：木材 状態：wet 備考：SB13-P675 (1415)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
12	種類：木材 状態：wet 備考：SB13-P677 (1416)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
13	種類：木材 状態：wet 備考：SB22-P862 (1412)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
14	種類：木材 状態：wet 備考：SB26-P1103 (1204)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
15	種類：炭化物 状態：wet 備考：灯明皿（401）内の炭化物	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N） 処理備考：状態悪い
16	種類：炭化物 状態：wet 備考：漆膜（1554a・b）	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
17	種類：木材 状態：wet 備考：蓋か（1380）	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
18	種類：炭化材 状態：wet 備考：杭（1388）	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
19	種類：炭化材 状態：wet 備考：杭（1389）	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

第21表 対象試料一覧

試料 No.	$\delta^{13}\text{C}$	暦年較正用年代	^{14}C 年代	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
	(‰)	(yrBP $\pm 1\sigma$)	(yrBP $\pm 1\sigma$)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
1	-27.26 ± 0.24	1236 ± 18	1235 ± 20	709AD (35.8%) 747AD 766AD (16.2%) 783AD 790AD (15.1%) 810AD 849AD (1.1%) 852AD	690AD (43.0%) 751AD 762AD (52.4%) 870AD
2	-27.59 ± 0.29	1170 ± 19	1170 ± 20	782AD (5.2%) 789AD 811AD (27.4%) 847AD 856AD (35.6%) 893AD	778AD (88.2%) 897AD 922AD (7.2%) 942AD
3	-28.36 ± 0.29	1176 ± 19	1175 ± 20	782AD (5.6%) 789AD 810AD (30.5%) 848AD 855AD (32.1%) 890AD	777AD (92.7%) 895AD 926AD (2.7%) 936AD
4	-31.19 ± 0.22	1147 ± 18	1145 ± 20	880AD (24.8%) 900AD 918AD (43.4%) 961AD	782AD (1.3%) 789AD 813AD (7.2%) 845AD 858AD (86.8%) 972AD
5	-30.10 ± 0.22	1179 ± 17	1180 ± 15	782AD (6.0%) 789AD 811AD (30.6%) 846AD 856AD (31.5%) 888AD	777AD (95.4%) 893AD
6	-29.91 ± 0.26	1192 ± 17	1190 ± 15	783AD (6.1%) 790AD 810AD (62.1%) 877AD	778AD (95.4%) 885AD
7	-28.18 ± 0.22	1208 ± 18	1210 ± 20	778AD (44.6%) 828AD 839AD (23.6%) 866AD	730AD (1.0%) 735AD 771AD (94.4%) 886AD
8	-30.81 ± 0.27	1146 ± 21	1145 ± 20	879AD (22.4%) 900AD 918AD (45.8%) 965AD	782AD (1.7%) 789AD 810AD (9.1%) 847AD 856AD (84.6%) 973AD
9	-27.15 ± 0.23	1164 ± 19	1165 ± 20	778AD (11.8%) 791AD 806AD (7.0%) 818AD 823AD (11.5%) 842AD 861AD (30.4%) 895AD 929AD (7.5%) 940AD	774AD (82.0%) 900AD 921AD (13.4%) 950AD
10	-28.30 ± 0.24	1294 ± 18	1295 ± 20	673AD (42.9%) 709AD 747AD (25.3%) 766AD	666AD (59.8%) 726AD 737AD (35.6%) 772AD
11	-27.98 ± 0.25	1263 ± 18	1265 ± 20	693AD (60.6%) 749AD 764AD (7.6%) 771AD	681AD (95.4%) 778AD
12	-30.95 ± 0.24	1203 ± 20	1205 ± 20	779AD (43.6%) 829AD 839AD (24.6%) 867AD	730AD (0.7%) 735AD 771AD (94.7%) 889AD
13	-27.52 ± 0.24	1157 ± 18	1155 ± 20	784AD (1.6%) 787AD 826AD (8.6%) 841AD 863AD (36.5%) 899AD 921AD (21.6%) 945AD	781AD (4.1%) 791AD 806AD (61.7%) 901AD 917AD (29.5%) 965AD
14	-30.02 ± 0.24	1177 ± 18	1175 ± 20	782AD (5.8%) 789AD 811AD (30.3%) 847AD 856AD (32.1%) 889AD	777AD (94.4%) 895AD 929AD (1.0%) 933AD
15	-31.07 ± 0.30	1298 ± 20	1300 ± 20	670AD (35.1%) 695AD 700AD (8.3%) 708AD 748AD (24.8%) 766AD	664AD (62.1%) 724AD 739AD (33.3%) 771AD
16	-30.60 ± 0.24	1204 ± 19	1205 ± 20	779AD (43.7%) 828AD 840AD (24.5%) 866AD	772AD (95.4%) 887AD
17	-23.65 ± 0.32	949 ± 22	950 ± 20	1030AD (17.6%) 1049AD 1084AD (38.5%) 1125AD 1137AD (12.1%) 1150AD	1025AD (95.4%) 1155AD
18	-23.15 ± 0.22	618 ± 18	620 ± 20	1302AD (28.4%) 1321AD 1349AD (26.4%) 1367AD 1382AD (13.4%) 1392AD	1295AD (37.3%) 1330AD 1338AD (58.1%) 1398AD
19	-25.02 ± 0.21	614 ± 20	615 ± 20	1302AD (27.7%) 1324AD 1345AD (27.2%) 1367AD 1382AD (13.4%) 1394AD	1296AD (95.4%) 1399AD

第 22 表 放射性炭素年代測定結果一覧

第5節 製鉄・鍛冶関連遺物の分析調査

日鉄住金テクノロジー株式会社八幡事業所・TACセンター

大澤正己・鈴木瑞穂

1 いきさつ

浦反甫東遺跡は新潟県長岡市島崎に所在する。平安時代の掘立柱建物跡、溝、河道などの遺構群が検出された。それに伴いI区東側の溝から、鉄滓、砥石、鉄製品等の遺物も出土している。遺跡の位置する旧島崎川流域には、奈良～平安時代の官衙遺跡である八幡林遺跡・下ノ西遺跡なども分布しており、古代古志郡のなかでも重要な地域である。そこで当遺跡での鉄器生産の実態を検討する目的から、調査を実施する運びとなった。

2 調査方法

(1) 供試材

第23表に示す。製鉄・鍛冶関連遺物計7点の調査を行った。

(2) 調査項目

A 肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を簡単に記載した。

B マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

C 顕微鏡組織

滓中に晶出する鉱物及び金属部の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μm と1 μm で順を追って研磨している。なお金属鉄部の調査では、3%ナイトル(硝酸アルコール液)を腐食(Etching)に用いた。

D ビッカース断面硬度

鉄滓中の鉱物と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は50または200gfで測定した。

E EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定を目的とする。

分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

F 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

- ・全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO)：容量法。
- ・炭素 (C)、硫黄 (S)：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。
- ・二酸化硅素 (SiO₂)、酸化アルミニウム (Al₂O₃)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K₂O)、酸化ナトリウム (Na₂O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO₂)、酸化クロム (Cr₂O₃)、五酸化磷 (P₂O₅)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム (ZrO₂)：ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

3 調査結果

(1) I区出土遺物

A URA-1：炉壁

a 肉眼観察：内面に分厚い滓が溶着した製鉄炉の炉壁片（788.3g）である。内外面および側面も全面破面である。炉壁部分は全体に熱影響が強く、灰褐色の粘土質である。また胎土中には小礫が多量に混和されている。滓部と炉壁の間には、最大長さ 1.5cm程の木炭や木炭痕が多数みられる。滓部は暗灰色で、上面側にやや大きめの気孔が散在するが緻密で重量感のある滓である。

b 顕微鏡組織：写真10①～③に示す。①左上は滓部で、②③はその拡大である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル (Ulvöspinel: 2FeO・TiO₂)、白色針状結晶イルミナイト (Ilmenite: FeO・TiO₂) が晶出する。比較的高温下で生じた砂鉄製錬滓の晶癖である（注1）。また③は熱影響を受けて、還元・滓化した砂鉄（含チタン鉄鉱（注2））である。内部に点在する微細な明白色粒は金属鉄 (Metallic Fe) である。

c ビッカース断面硬度：写真10③の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は 641Hv、693Hvであった。ウルボスピネルと推定される（注3）。

d 化学組成分析：第24表に示す。全鉄分 (Total Fe) 38.59% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.06%、酸化第一鉄 (FeO) 34.88%、酸化第二鉄 (Fe₂O₃) 16.33% の割合であった。造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) は 27.80% で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は 3.09% であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン (TiO₂) は 14.64%、バナジウム (V) も 0.75% と高値である。また酸化マンガン (MnO) は 0.45%、銅 (Cu) は < 0.01% と低値であった。

当炉壁は付着滓の鉱物組成から、砂鉄製錬に用いられたことが明らかとなった。滓部のチタン (TiO₂) 含有率は高く、火山岩起源の高チタン砂鉄が製鉄原料であったと推定される。地域周辺の製鉄遺跡から、鍛冶原料（製錬鉄塊系遺物）に混じって遺跡内に搬入された可能性が考えられる。

B URA-2：椀形鍛冶滓

a 肉眼観察：椀形鍛冶滓（139.7g）の破片である。滓の色調は灰褐色で、表面は風化が進む。上下面と

側面の一部が本来の表面で、側面4面は破面である。破面には微細な気孔が若干点在するが緻密である。また表面には部分的に茶褐色の鉄錆化物が付着しているが、特殊金属探知器での反応はなく錆化が考えられる。

b 顕微鏡組織：写真10④～⑥に示す。④上側は滓部で、白色粒状結晶ウスタイト（Wustite：FeO）、淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite：2FeO・SiO₂）が晶出する。⑤はその拡大である。一方④下側の暗色部はガラス質滓で、鍛冶炉床土と推測される。⑥はその拡大で、淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO・TiO₂）が晶出する。また灰褐色多角形結晶はマグネタイト（Magnetite：FeO・Fe₂O₃）、またはマグネタイトとウルボスピネルの中間組成のチタノマグネタイト（Titanomagnetite）と推定される。

c ビッカース断面硬度：写真10⑤の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は242Hv、334Hvであった。ウスタイトの文献硬度値（450～500Hv）と比較すると非常に軟質である。これは素地部分の風化が進んでいるためと考えられる。

さらに⑥の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した、硬度値は639Hvで、ウルボスピネルと推定される。また灰褐色多角形結晶の硬度値は529Hvであった。マグネタイトの文献硬度値（500～600Hv）の範囲内であり、マグネタイトの可能性が高い。ただし微量チタン（TiO₂）を固溶するチタノマグネタイトの可能性も配慮すべきだろう。

d 化学組成分析：第24表に示す。全鉄分（Total Fe）42.08%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.07%、酸化第1鉄（FeO）31.19%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）25.40%の割合であった。造滓成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O）25.37%で、このうち塩基性成分（CaO+MgO）は1.07%と低い。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO₂）は1.56%、バナジウム（V）0.11%であった。また酸化マンガン（MnO）は0.13%、銅（Cu）は<0.01%と低値である。

当鉄滓の滓部（上側）は鉄チタン酸化物の晶出がなく鍛錬鍛冶滓の特徴を有するが、下側のガラス質滓中にはウルボスピネルが晶出している。チタン（TiO₂）含有率も1.56%とその影響を残す。まだ製鉄原料の砂鉄起源の不純物（砂鉄製錬滓または精錬鍛冶滓）残存の鍛冶原料を熱間で加工したと推測される。

（2）Ⅱ区出土遺物

A URA-3：炉壁

a 肉眼観察：熱影響を受けて内面全体が黒色ガラス質化した炉壁の小破片（36.3g）である。外面側に若干残る炉壁粘土部分は砂質で真砂（花崗岩の風化砂）やスサを多量に混和している。

b 顕微鏡組織：写真11①～③に示す。内面表層の黒色ガラス質滓部分である。内部には炉壁粘土中に混和された砂粒（石英・長石類など）が多数点在する。また滓中に多数点在するごく微細な明白色粒は金属鉄（Metallic Fe）である。

当炉壁の内面表層には非常に微細な金属鉄粒が多数溶着しており、鉄生産に伴う炉材であることが確認された。

B URA-4：羽口

a 肉眼観察：ごく小形の鍛冶羽口の先端部破片（12.8g）と推定される。外面は強い熱影響を受けて黒色ガラス質化している。また内側には通風孔部が残存しており、先端付近にはごく薄く滓が溶着している。羽口粘土は赤褐色～明褐色の粘土質で、有機質の混和物が若干確認される。

b 顕微鏡組織：写真11④～⑥に示す。暗色部は羽口先端の黒色ガラス質滓で、上側と右下の滓部は通風孔部の付着滓である。淡褐色多角形結晶はマグネタイト、白色針状・不定形結晶はヘマタイト（Hematite： Fe_2O_3 ）と推測される。いずれも鉄酸化物であり、鍛冶原料を熱間で加工した際、鉄素材の表層が酸化して生じたものと考えられる。

C URA - 5：椀形鍛冶滓？（含鉄）

a 肉眼観察：やや小形で椀状の含鉄鉄滓（137.8g）である。全体に錆化による割れが著しく、表面は一部剥落している。特殊金属探知器の特L（☆）で反応があり、内部には金属鉄が良好に残存すると考えられる。

b マクロ組織：写真12①に示す。表層に若干滓が付着するが、ほぼ鉄主体の遺物であった。3%ナイタルで腐食したところ、共析組織～亜共晶組成白鑄鉄組織（ $\text{C} < 4.26\%$ ）が確認された。

c 顕微鏡組織：写真12②～⑦に示す。④左側および⑤は付着滓部分の拡大である。淡褐色片状結晶ルチル（Rutile： TiO_2 ）が素地の暗黒色ガラス質滓に晶出する。高温下で生じた砂鉄製錬滓の晶癖である。また②③は亜共晶組成白鑄鉄組織、④および⑥⑦は過共析組織～亜共晶組成白鑄鉄組織部分の拡大である。[ただし微細パーライトが部分的に観察されるが、素地部分はマルテンサイト（Martensite）とベイナイト（Bainite）の中間組織を呈しており、製鉄炉の操業後に水冷されたものと判断される。]

d ビッカース断面硬度：写真12④の金属鉄部の硬度を測定した。上側は蜂の巣状のレデブライト（Ledebulite）が晶出する亜共晶組成白鑄鉄組織で、硬度値は607Hv、742Hvであった。またその右側の白色針状のセメンタイト（Cementite： Fe_3C ）が析出する部分（ $\text{C} > 0.77\%$ ）の硬度値は452Hv、下側の素地部分の硬度値は464Hv、493Hvであった。この硬度値からも、完全な焼入れ組織（マルテンサイト）ではなく、ベイナイトとの中間組織と判断される。

e EPMA 調査：写真13①に付着滓の反射電子像（COMP）を示す。淡褐色片状結晶は特性X線像ではチタン（Ti）に強い反応がある。定量分析値は81.2% TiO_2 - 5.0%MgO - 2.8% Al_2O_3 - 1.6%FeO（分析点10）であった。チタン酸化物（ TiO_2 ）主体で、ルチル（Rutile： TiO_2 ）に近い組成の化合物である。また素地部分の定量分析値は46.0% SiO_2 - 14.1% Al_2O_3 - 28.0%CaO - 2.8%MgO - 2.3% K_2O - 1.0% Na_2O - 10.0% TiO_2 - 1.3%FeO（分析点11）であった。非晶質珪酸塩である。

もう1視野、鉄中非金属介在物の調査を実施した。写真13②に反射電子像（COMP）を示す。中央の黄褐色異物は特性X線像をみると硫黄（S）に強い反応がある。定量分析値は68.5%Fe - 19.7%S（分析点3）であった。硫化鉄（ FeS ）である。また周囲の共晶組織部分は特性X線像では磷（P）に反応がある。定量分析値は90.2%Fe - 15.0%P（分析点4）であった。ステダイト（Steadite： $\text{Fe} - \text{Fe}_3\text{C} - \text{Fe}_3\text{P}$ ）に同定される。

f 化学組成分析：第24表に示す。炭素（C）は3.22%であった。上述の金属組織観察結果では、比較的低碳素域（共析組織～過共析組織）も確認されるが、成分的には鑄鉄（ $\text{C} > 2.1\%$ ）の範疇に入る。また磷（P）は0.106%とやや高めで、硫黄（S）は0.073%であった。ともに鍛造鉄器製作の際には鍛接不良や、製品の脆化等の要因となる元素であるが、この程度であれば大きな問題はないと考えられる。またチタン（Ti）0.07%、バナジウム（V）0.03%は付着滓を反映したものと推測される。

調査前の段階では椀形鍛冶滓の可能性が指摘されていたが、付着物の鉞物組成は高温下で生じる砂鉄製錬滓であり、鍛冶原料（製錬鉄塊系遺物）であることが明らかとなった。また炭素量は部位によるばらつきも大きいと全体が高く、成分的には鑄鉄の範疇に入る（ $\text{C} : 3.22\%$ ）。当遺跡内で「卸し」（銑を脱炭して鍛打加工可能な鋼に変える）作業を行って、鍛造鉄器を製作していたと推察される。

D URA-6：椀形鍛冶滓（含鉄）

a 肉眼観察：小形でやや扁平な椀形鍛冶滓（40.5g）である。側面に小さな破面が3面みられるがほぼ完形に近い形状と考えられる。滓の地の色調は灰褐色で、全体に風化が進んでいる。下面には5mm大の木炭痕が散在する。また表面には広い範囲で茶褐色の鉄錆化物が付着するが、特殊金属探知器での反応はなく、まとまった鉄部が存在する可能性は低いと考えられる。

b 顕微鏡組織：写真13③～⑤に示す。滓中には白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また③のごく微細な明白色部は金属鉄で、⑤はその拡大である。3% ナイタルで腐食したところ、炭素をほとんど含まないフェライト単相（Ferrite： α 鉄）の組織が確認された。

c ビッカース断面硬度：写真13④の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は464Hv、470Hvであった。ウスタイトの文献硬度値（450～500Hv）の範囲内であり、ウスタイトと推定される。また⑤の金属鉄部（フェライト単相）の硬度測定も実施した。硬度値は116Hv、127Hvと組織から予想されるよりもやや硬質であった。金属鉄部が非常に微細なため、周囲の滓部の影響を受けた可能性が考えられる。また磷（P）などの硬度を上昇させる元素を微量固溶している可能性もある。

d 化学組成分析：第24表に示す。全鉄分（Total Fe）55.36%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.70%、酸化第1鉄（FeO）43.74%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）29.54%の割合であった。造滓成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O）は7.69%と低く、塩基性成分（CaO+MgO）も1.66%と低値である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO₂）は0.16%、バナジウム（V）も0.01%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）は1.15%と高値で、銅（Cu）は<0.01%と低い。

当鉄滓は製鉄原料（砂鉄）起源の脈石成分（TiO₂、V）の低減傾向が顕著であり、鍛錬鍛冶滓に分類される。

E URA-7：椀形鍛冶滓（含鉄）

a 肉眼観察：中形の椀形鍛冶滓の破片（137.3g）である。側面6面が破面。上面は平坦で、表面には黄褐色の土砂が付着する。また下面は気孔が多数散在しており、風化も進んでいる。

b 顕微鏡組織：写真14①～③に示す。①は滓部である。滓中には白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また②③の青灰色部は錆化鉄である。断面には亜共析組織（C<0.77%）痕跡が残存する。

c ビッカース断面硬度：写真14①の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は486Hv、485Hvであった。ウスタイトの文献硬度値（450～500Hv）の範囲内であり、ウスタイトに同定される。

d EPMA調査：写真14④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。白色粒状結晶は特性X線像では鉄（Fe）、酸素（O）に反応がみられる。定量分析値は97.2%FeO-0.7%TiO₂（分析点13）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。またチタン（TiO₂）がごく微量含まれている。淡灰色柱状結晶は特性X線像では珪素（Si）に強い反応がある。定量分析値は68.9%FeO-29.9%SiO₂-1.7%P₂O₅（分析点14）であった。ファヤライト（Fayalite：2FeO・SiO₂）に同定される。素地部分の定量分析値は35.7%SiO₂-16.5%Al₂O₃-13.1%CaO-6.9%K₂O-3.5%Na₂O-25.8%FeO（分析点15）であった。非晶質珪酸塩である。

e 化学組成分析：第24表に示す。全鉄分（Total Fe）は65.95%と高値である。このうち金属鉄（Metallic Fe）0.06%、酸化第1鉄（FeO）63.01%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）24.18%の割合であった。造滓成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O）は6.74%と低く、塩基性成分（CaO+MgO）も0.36%と低値である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO₂）は1.75%、バナジウム（V）は0.07%であった。

また酸化マンガン (MnO) は 0.05%、銅 (Cu) < 0.01% と低値である。

当鉄滓の鉱物組成をみると、鉄チタン酸化物の結晶がなく、通常は鍛錬鍛冶滓にみられる特徴を有する。しかし化学組成をみるとチタン (TiO₂) 含有率が 1.75% あり、製鉄原料の砂鉄起源の不純物 (砂鉄製錬滓または精錬鍛冶滓) が十分除去された鍛冶原料を熱間で加工していたとはいえない。以上の特徴から精錬鍛冶工程末期～鍛錬鍛冶初期の反応副生物の可能性を提示しておきたい。

4 まとめ

浦反東遺跡の出土製鉄～鍛冶関連遺物を分析調査した結果、当遺跡の鍛冶原料は周辺地域の砂鉄製錬による生成鉄塊であった可能性が高い。また遺跡内では精錬鍛冶～鍛錬鍛冶作業が連続して行われたことが明らかとなった。詳細は以下の通りである。

<1> I区からは砂鉄製錬滓の固着した製鉄炉の炉壁片 (URA-1) が検出された。この炉壁付着滓のチタン (TiO₂) 含有率は 14.64% と高値傾向を示す。新潟県下の製鉄遺跡では、チタン (TiO₂) 含有率が 10% 前後の火山岩起源の砂鉄を製鉄原料としており、この炉壁もそうした砂鉄製錬炉の炉壁と推察される。

またII区から出土した炉壁 (URA-3) には製錬滓が付着していなかったが、ごく微細な金属鉄が多数溶着しており、鉄生産に関連する炉材の破片と考えられる。

<2> 鉄塊系遺物 (URA-5) は、付着滓の鉱物組成から、砂鉄製錬による生成小鉄塊であることが明らかとなった。地域の製鉄遺跡から鍛冶原料として搬入されたと推定される。さらに金属組織の観察結果から、製鉄炉の操業後、炉内生成物を取り出す際の水冷処理も判明した。また鉄中の炭素量は部位によってばらつきが見られるが、全体に高く成分的には鑄鉄の範疇に入る (C: 3.22%)。当遺跡内ではこうした鍛冶原料鉄の「卸し」(銑を脱炭して鍛打加工可能な鋼に変える) 作業も行い、鍛造鉄器を製作したものと推測される。

<3> 椀形鍛冶滓 2点 (URA-2, 7) はチタン (TiO₂) 含有率が 1% を越えており、まだ製鉄原料の砂鉄起源の不純物 (砂鉄製錬滓または精錬鍛冶滓) が十分除去されていない鉄素材を熱間で加工した可能性が高いと考えられる。精錬鍛冶滓か鍛錬鍛冶滓かの断定は難しいため、精錬鍛冶工程末期～鍛錬鍛冶工程初期の反応副生物の可能性を提示しておきたい。

一方、椀形鍛冶滓製鉄原料 (砂鉄) 起源の脈石成分 (TiO₂, V) の低減傾向が顕著であり、鍛錬鍛冶滓 (URA-6) に分類される。

今回調査を実施した椀形鍛冶滓中には、チタン (TiO₂) を数% 含むような、鍛冶原料 (鉄塊系遺物) の不純物 (砂鉄製錬滓) の除去を行ったことが明らかな精錬鍛冶滓は確認されなかったが、上述したような製鉄炉の炉壁片や鉄塊系遺物の出土状況を見ると、精錬鍛冶～鍛錬鍛冶作業が連続して行われていた可能性は高いと考えられる。特に URA-6, 7 の造滓成分の 7% 台の数値は今後十分に検討すべきと考える。

<4> 羽口 (URA-4) の先端には、鉄酸化物主体の滓が付着していた。これは鉄素材の酸化に伴う吹き減りで生じたものと考えられる。熱間での鍛打作業に用いられた鍛冶羽口と推定される。

第5節 製鉄・鍛冶関連遺物の分析調査

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		調査項目									
				大きさ (mm)	重量 (g)	磁着度	メタル 度	マクロ 組織	顕微鏡 組織	ビッカース 断面 硬度	X線 回折	EPMA	化学 分析	耐火度	加-
URA-1	I区 SD1085 覆土上面	炉壁 (滓付・含鉄)	9c 前半 ～ 10c 初頭	110 × 99 × 60	788.3	6	錆化 (△)		○	○			○		
URA-2	I区 7N-2 IV層	椀形鍛冶滓 (含鉄)		60 × 70 × 35	139.7	4	錆化 (△)		○	○			○		
URA-3	II区 16J-12 II層	炉壁 (製錬炉)		29 × 45 × 26	36.3	1	なし		○						
URA-4	II区 15H-15 IV層	羽口(鍛冶) 先端部		25 × 33 × 15	12.8	3	なし		○						
URA-5	II区 17I-10 IV層	椀形鍛冶滓? (含鉄)		39 × 38 × 37	137.8	6	特L (☆)	○	○	○		○	○		
URA-6	II区 21H-11 IV層	椀形鍛冶滓 (含鉄)		43 × 50 × 15	40.5	4	錆化 (△)		○	○			○		
URA-7	II区 22E-21 V層	椀形鍛冶滓 (含鉄)		55 × 74 × 32	137.3	3	錆化 (△)		○	○		○	○		

第23表 供試材の履歴と調査項目

* * * * *

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミナ (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガニン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO ₂)	造滓成分		注	
																							Total Fe	Total Fe		
URA-1	I区 SD1085 覆土上面	炉壁 (滓付・含鉄)		38.59	0.06	34.88	16.33	16.53	7.03	1.61	1.48	0.89	0.26	0.45	14.64	0.29	0.048	0.52	0.10	0.75	<0.01	-	27.80	0.720	0.379	
URA-2	I区 7N-2 IV層	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	9c前半 ~ 10c初頭	42.08	0.07	31.19	25.40	15.32	7.82	0.47	0.60	0.64	0.52	0.13	1.56	0.10	0.031	1.65	0.55	0.11	<0.01	0.03	25.37	0.603	0.037	
URA-6	II区 21H-11 IV層	椀形鍛冶滓 (含鉄)	10c初頭	55.36	0.70	43.74	29.54	3.86	1.90	1.33	0.33	0.08	0.19	1.15	0.16	0.02	0.035	0.23	3.17	0.01	<0.01	0.01	7.69	0.139	0.003	
URA-7	II区 22E-21 IV層	椀形鍛冶滓 (含鉄)		65.95	0.06	63.01	24.18	3.87	2.48	0.10	0.26	0.02	0.01	0.05	1.75	0.12	0.019	0.46	0.27	0.07	<0.01	0.02	6.74	0.102	0.027	

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	炭素 (C)	珪素 (Si)	マンガニン (Mn)	磷 (P)	硫黄 (S)	銅 (Cu)	クロム (Cr)	バナジウム (V)	砒素 (As)	コバルト (Co)	
URA-5	II区	椀形鍛冶滓? (含鉄)	9c後半 ~ 10c初頭	3.22	0.11	0.18	0.106	0.073	0.01	0.02	0.07	0.03	<0.01	0.03

第24表 供試材の化学組成

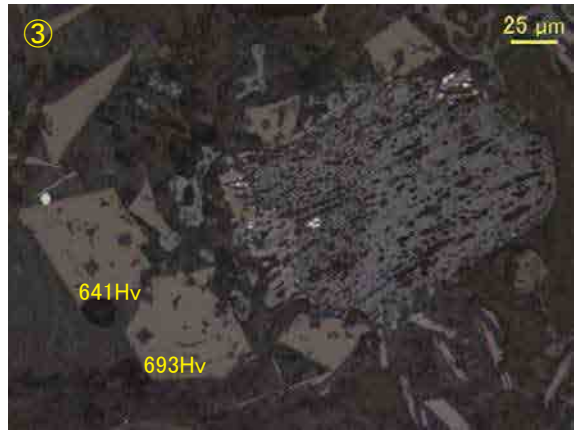
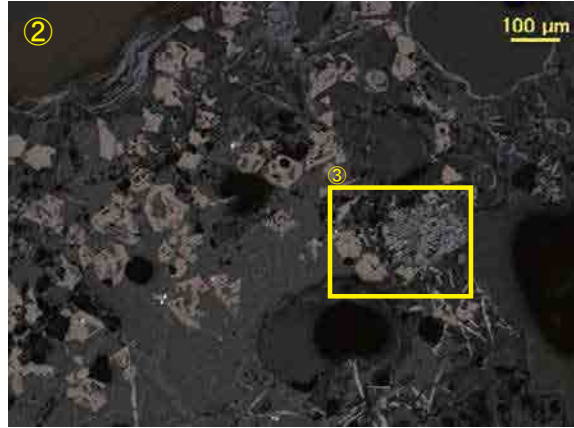
符号	出土位置	遺物名称	推定年代	化学組成 (%)										所見
				Total Fe	Fe ₂ O ₃	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	造滓成分	Cu			
URA-1	I区 SD1085 上面	炉壁 (滓付・含鉄)		38.59	16.33	3.09	14.64	0.75	0.45	27.80	<0.01	製鉄炉の炉壁片 (原料:火山岩起源の高炉砂鉄、高温製鉄)		
URA-2	I区 7N-2 IV層	椀形鍛冶滓 (含鉄)		42.08	25.40	1.07	1.56	0.11	0.13	25.37	<0.01	精錬鍛冶末期~鍛錬鍛冶初期の反応副生物		
URA-3	II区 16J-12 II層	炉壁 (製鉄炉)		-	-	-	-	-	-	-	-	鉄生産に関連する炉材破片、鉄物結晶は未検出。		
URA-4	II区 15H-15 IV層	羽口(箱治) 先端部	9c前半 ~ 10c初頭	-	-	-	-	-	-	-	-	鉄素材を熱間で鍛打加工する際に用いられた鍛冶羽口		
URA-5	II区 17I-10 IV層	椀形鍛冶滓? (含鉄)		C 3.22	Si 0.11	Mn 0.18	P 0.106	S 0.073	Cu 0.01	Cr 0.02	Ti 0.07	鍛冶原料 (製鉄塊系遺物、原料:火山岩起源の高炉砂鉄、高温製鉄)、炭素含有率:3.22%		
URA-6	II区 21H-11 IV層	椀形鍛冶滓 (含鉄)		55.36	29.54	1.66	0.16	0.01	1.15	7.69	<0.01	鍛錬鍛冶滓		
URA-7	II区 22E-21 IV層	椀形鍛冶滓 (含鉄)		65.95	24.18	0.36	1.75	0.07	0.05	6.74	<0.01	精錬鍛冶末期~鍛錬鍛冶初期の反応副生物		

U:Ulvöspinel (2FeO·TiO₂), H:Ilmenite (FeO·TiO₂), W:Wüstite (FeO), M:Magnetite (Fe₃O₄), Hc:Hematite (Fe₂O₃), F:Fayalite (2FeO·SiO₂)

第25表 出土遺物の調査結果のまとめ

URA-1 炉壁

- ①暗灰色部：炉壁粘土、明灰色部：砂鉄製錬滓
- ②③滓部拡大、ウルボスピネル・イルミナイト、被熱砂鉄(含チタン鉄鉱)還元・滓化進行



URA-2 椀形鍛冶滓

- ④滓部：ウスタイト・ファアライト、微小金属鉄粒散在、下側：鍛冶炉床土(被熱：ガラス質化)、ウルボスピネル
- ⑤滓部拡大、硬度：50gf
- ⑥鍛冶炉床土(ガラス質滓)拡大、硬度：10gf

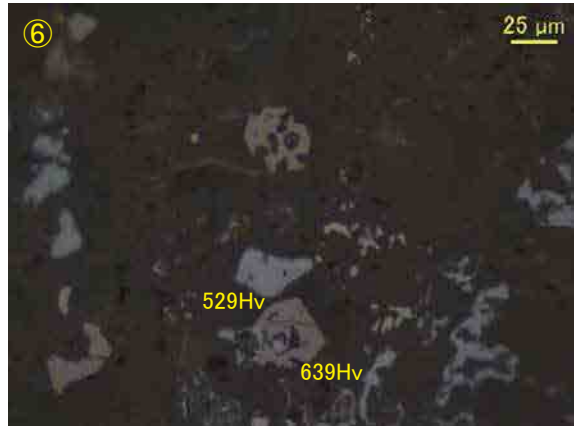
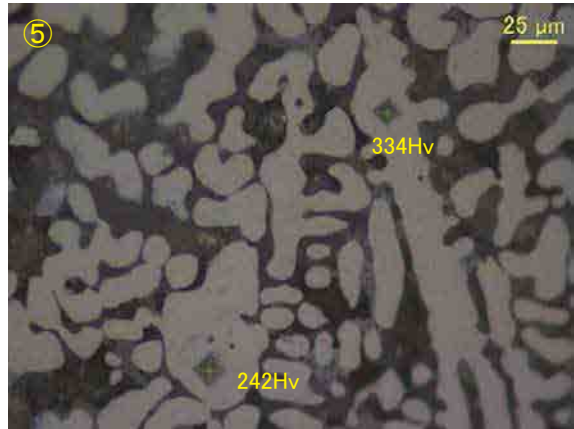
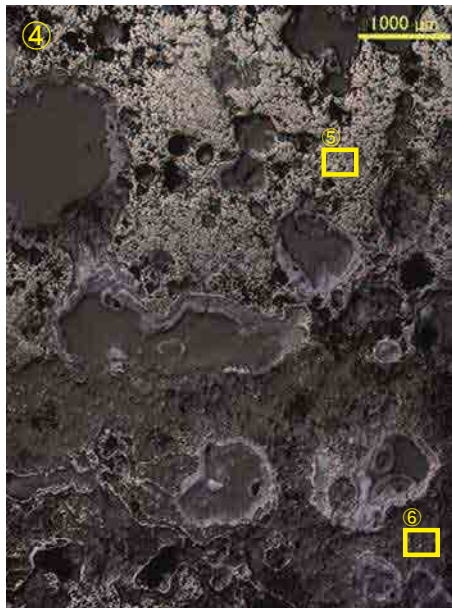
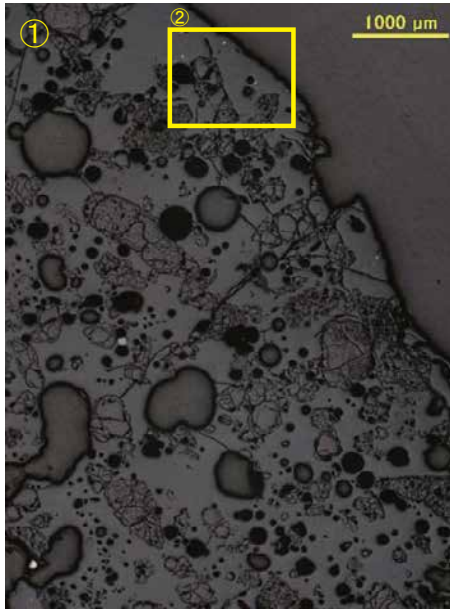


写真10 炉壁・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

URA-3 炉壁

①～③内面表層：ガラス質滓、微小
明白色粒：金属鉄



URA-4 羽口

④上側・右下明色部：附着滓、下側暗
色部：外面表層ガラス質滓
⑤⑥附着滓部拡大、マグネタイト・
ヘマトイト

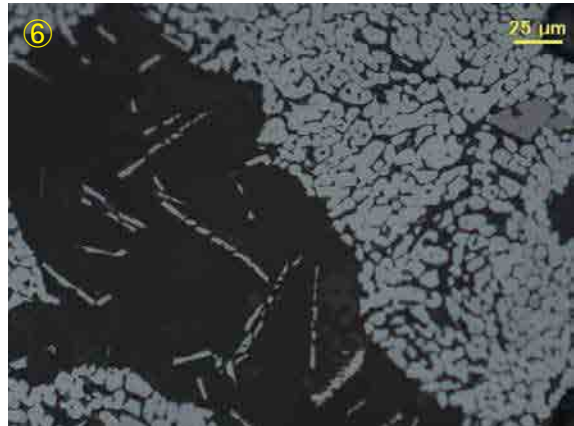
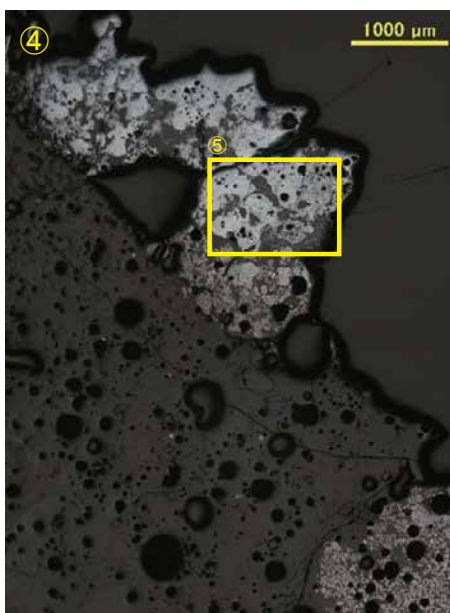
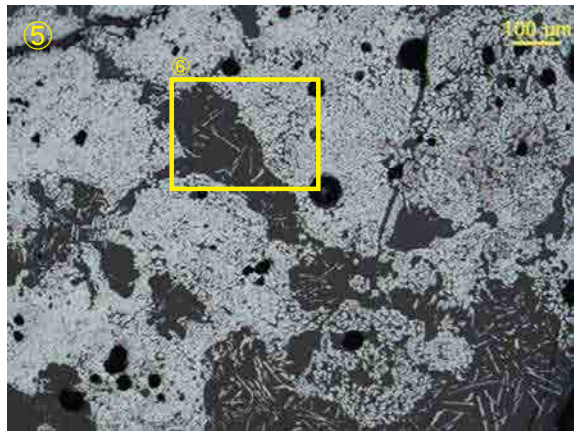


写真 11 炉壁・羽口の顕微鏡組織

URA-5 椀形鍛冶滓？

- ①マクロ組織、ナイトル etch
- ②③亜共晶組成白鑄鉄組織、④左下
- ⑤附着滓：ルチル、
- ④金属鉄部：過共析組織～亜共晶組成白鑄鉄組織（水冷痕跡）、
- ⑥⑦金属鉄部拡大、硬度：200gf

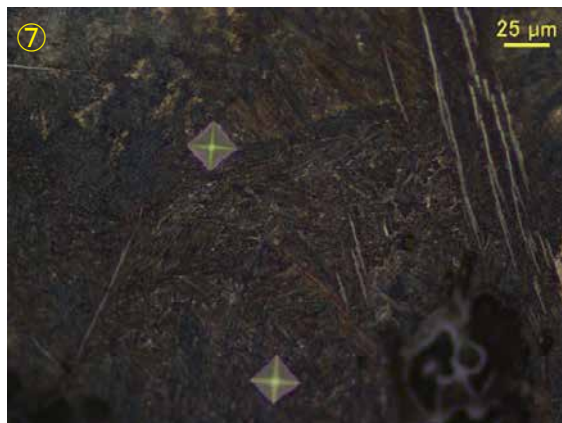
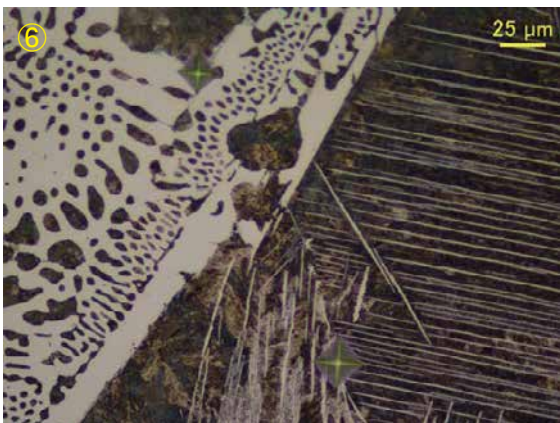
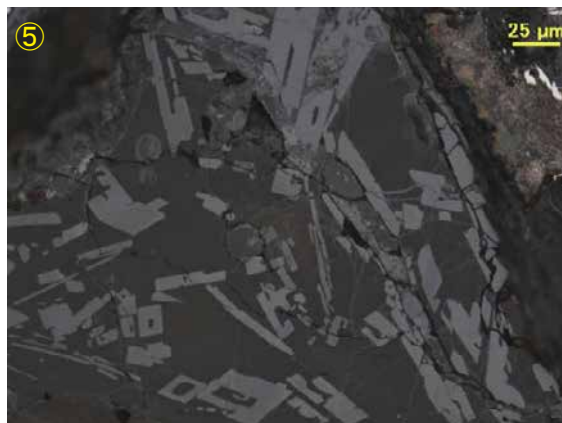
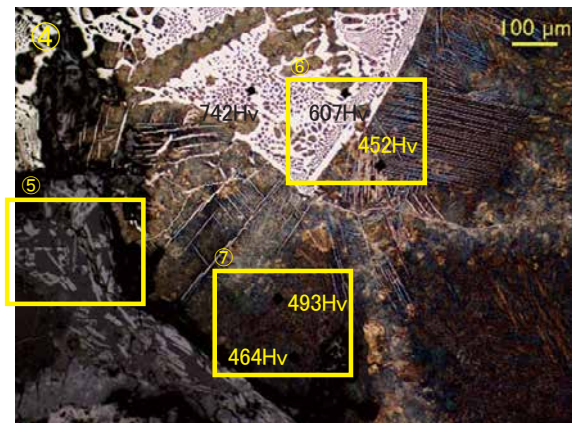
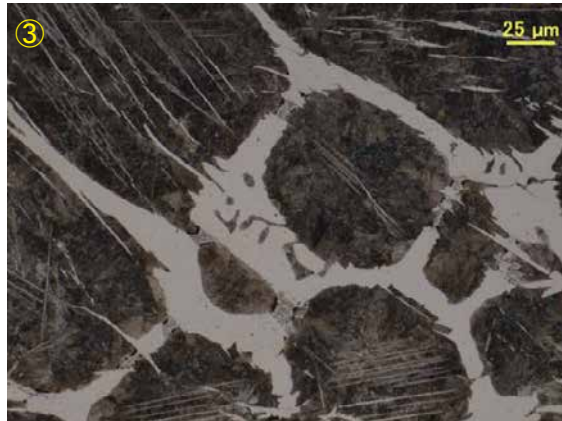
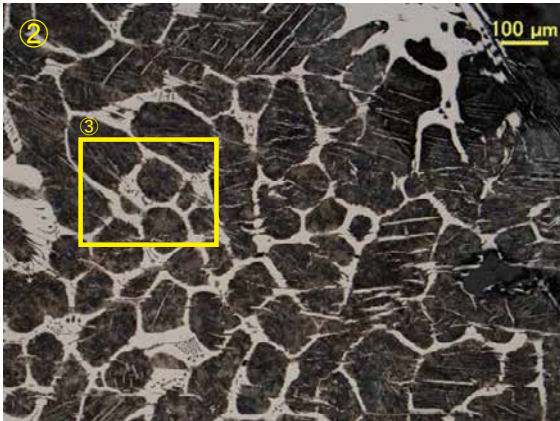
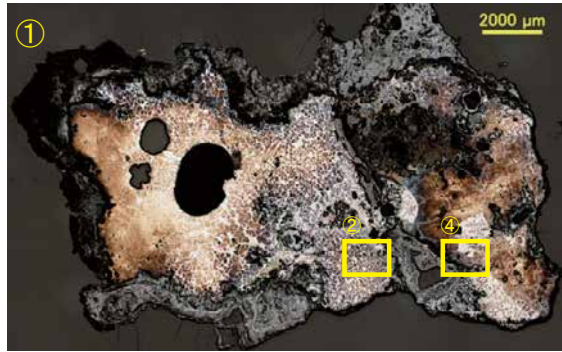
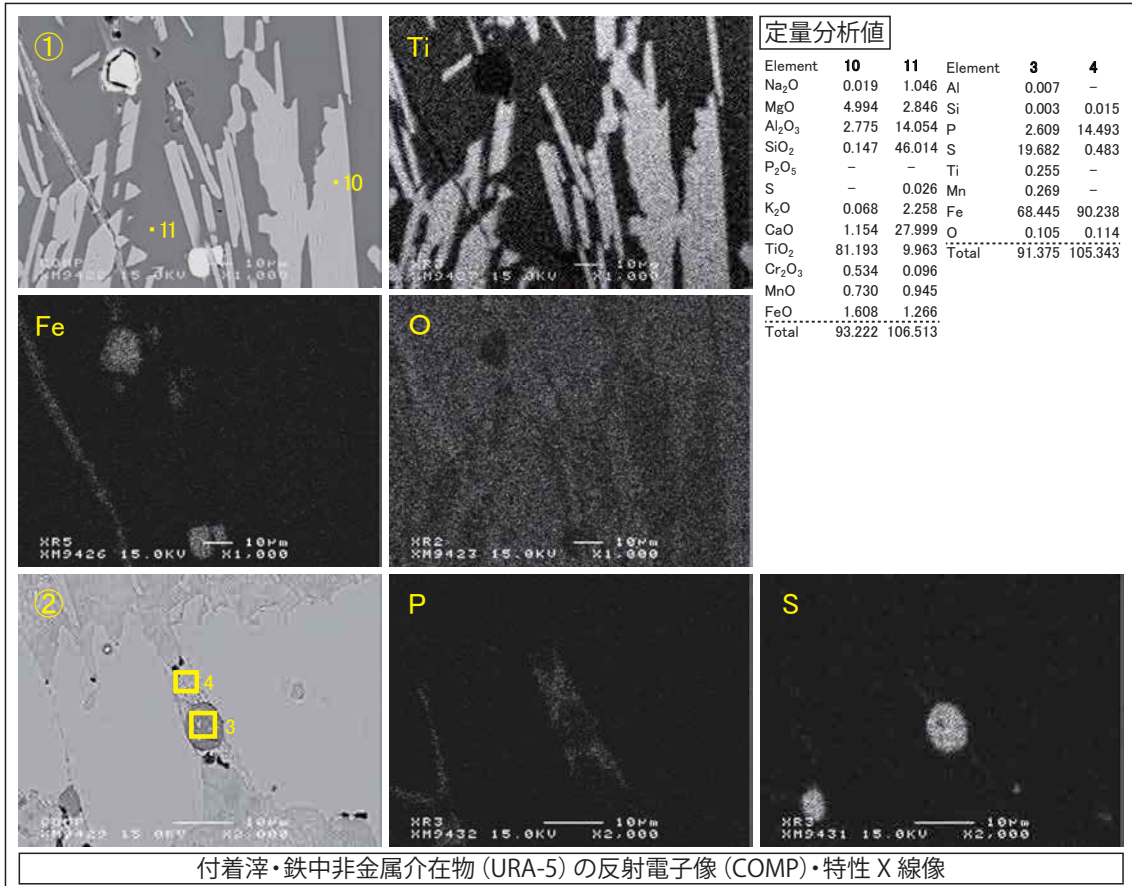


写真 12 椀形鍛冶滓？の顕微鏡組織



URA-6 椀形鍛冶滓

- ③滓部: ウスタイト・ファヤライト、金属鉄
- 部: ナイタル etch フェライト単相
- ④滓部拡大、⑤金属鉄部拡大、硬度: 50gf

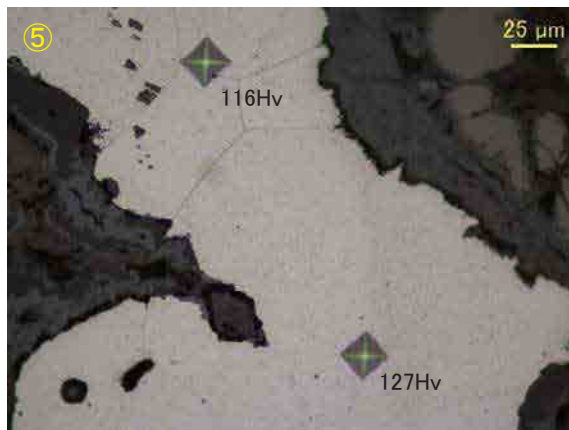
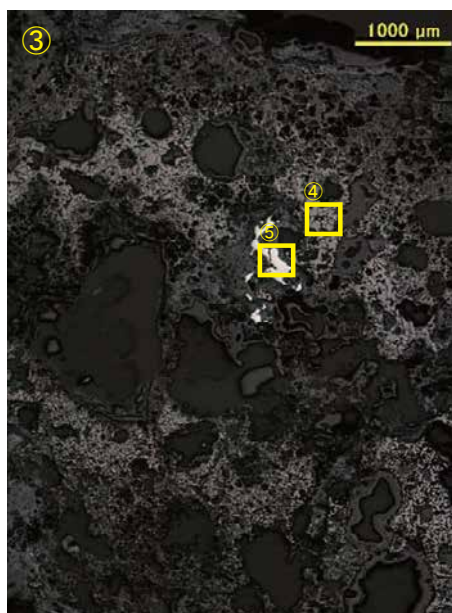
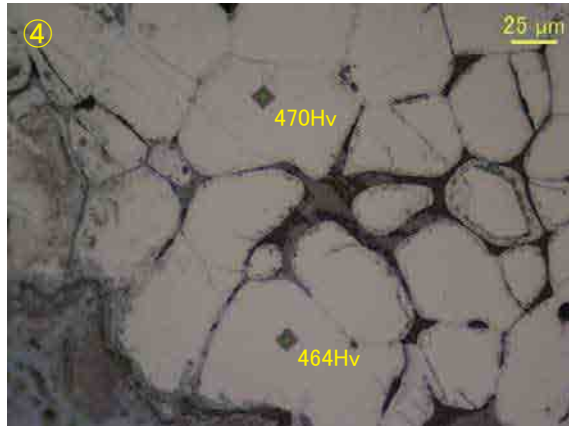
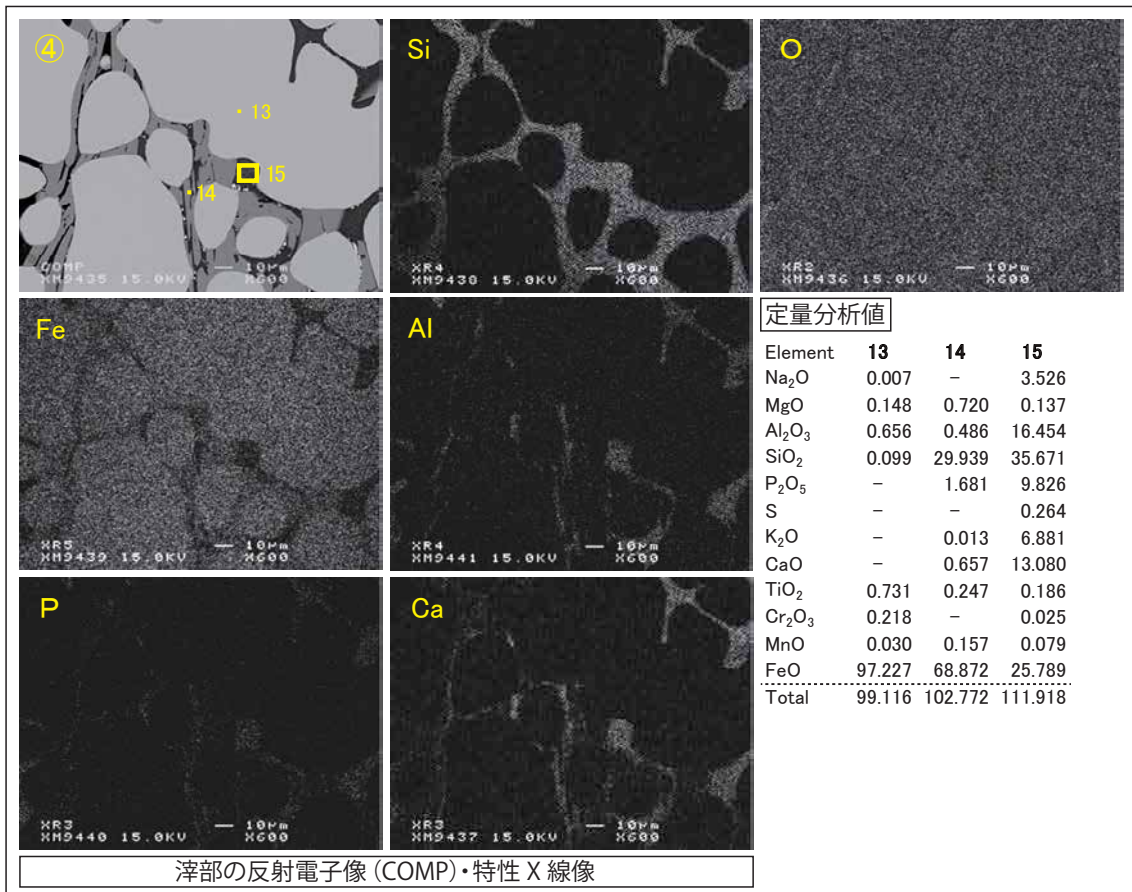
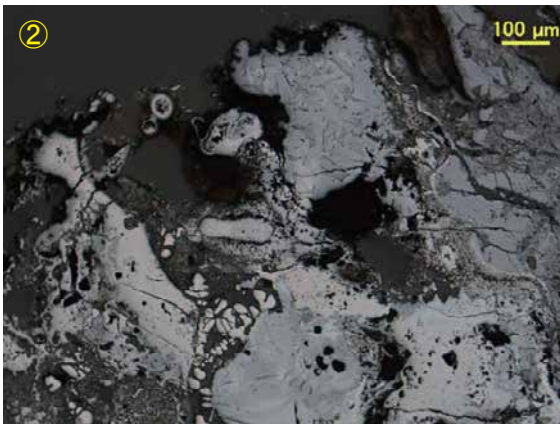
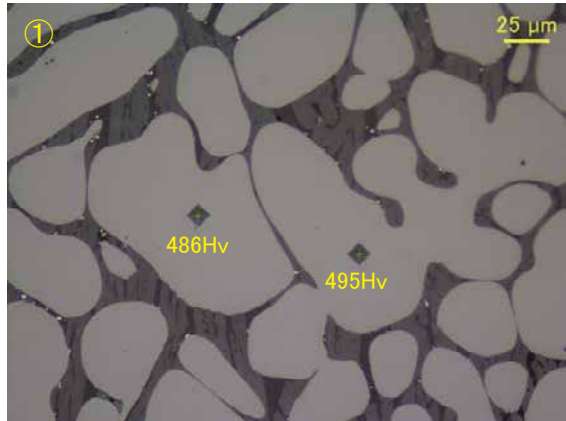


写真 13 椀形鍛冶滓の EPMA 調査結果・顕微鏡組織

URA-7 椀形鍛冶滓

- ①滓部:ウスタイト・ファヤライト、
硬度:50gf
- ②③滓部:ウスタイト、青灰色部:
錆化鉄、亜共析組織痕跡



滓部の反射電子像 (COMP)・特性 X 線像

写真 14 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA 調査結果

第6節 長岡市浦反甫東遺跡出土漆器の科学分析

漆器文化財科学研究所 四柳嘉章

1 はじめに

郷本川（旧島崎川）右岸の微高地に立地する長岡市浦反甫東遺跡は、古代は信濃川の支流である西川と合流して新潟港に通じ、「大市」の墨書土器に示唆されるように河川交通の要衝であった〔丸山 2013〕。本遺跡からは漆器や漆パレット、漆付着土器など官衙や富豪層の居館に共通する資料が出土しており、今回中世漆器も含めて科学分析を行ったので、漆器考古学的考察も加えて報告する。

2 分析の方法

漆器は階層や価格に応じて各種の製品が生産され、その品質の解明が考古学的には所有階層復元の手がかりとなる。この品質差を材料や技術的側面から評価する場合、肉眼による表面観察では使用や廃棄後の劣化を含めた表面の塗りと加飾部分でしか判断できず、それも専門的な経験に左右される。しかし漆器本来の耐久・堅牢性は塗装工程にあり、この塗膜の下に隠された情報は塗膜分析によって引き出される。

塗膜分析は漆器の内外面数箇所から数mmの塗膜片を採取し実体顕微鏡で観察した後、ポリエステル樹脂に包埋後その断面を研磨のうえプレパラートに接着し、さらに研磨を加えて（#100～3000）金属・偏光顕微鏡で観察する方法である。サンプルである手板試料と比較検討しながら塗装工程や下地材料の同定を行うが、これによって表面観察ではわからない時代的地域的な塗装工程の特色、製品の品質が把握できるので、遺跡における所有階層の推定やデータが集積されれば製品の流通問題にも迫ることができる。塗料・下地の直接的な分析は、赤外線を固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて照射し、分子構造を解析するフーリエ変換赤外分光法（FT-IR）を用いた（後述）。

なお、本稿で用いる用語のうち、意味が曖昧で誤解をまねくものについては、以下のように規定して使用する。

①黒色漆と黒色系漆

上塗漆が黒色の場合、黒色顔料の有無によって2種類に分けられる。炭素粒子（油煙）や鉄系化合物粒子などの黒色顔料を含むものを「黒色漆」、黒色顔料を含まないものを「黒色系漆」として区別する。黒色系漆においては、黒色顔料を含まずとも漆自体の表層が茶黒色に変質し、さらに下地色を反射して肉眼では黒色に見える。筆者の調査では古代以来こうした方法が一般的と考えられるので、品質の判別や、材料科学の上からも両者の区別が必要である。未同定の場合は、はじめに「黒色漆（未同定）」とことわる。内外面とも黒色漆の場合は「総黒色漆」、同じく黒色系は「総黒色系漆」（いわゆる「総黒」は両者を含む）、内面赤色外面黒色は「内赤外黒色漆」、同じく「内赤外黒色系漆」とする。赤色顔料が同定されている場合は「内朱外黒色漆」あるいは「内赤（ベンガラ）外黒色漆」などと呼称する。

②下地の分類

一般の粗い鉱物粒子を用いたものは「地の粉漆下地」、珪藻土使用は「珪藻土漆下地」、より細かい砥の粉類似は「サビ（鏝）漆下地」、膠使用は「地の粉またはサビ（鏝）膠下地」、炭粉は漆を用いたものは「炭粉漆下地」、柿渋を用いたものは「炭粉渋下地」とする。

3 分析結果

塗膜分析を行った漆器は1資料につき、内外面複数の試料を作成し平均値を算出した。したがって必ずしも図版のスケールとは一致しない。「表層変質」とあるものは、酸化劣化防止層の形成を意味する。下地の炭粉粒子は下記のように3分類する。

細粒…破碎工程が中粒炭粉より細かく炭粉粒子は均一で、針葉樹などの木口組織を全くとどめないもの。

中粒…炭粉粒子は $1\sim 2\mu\text{m}\times 5\sim 10\mu\text{m}$ 程度の針状粒子と長径 $5\mu\text{m}$ 前後の多角形粒子などからなり、針葉樹などの木口組織はごく一部にしか認められないもの。

粗粒…破碎工程が粗く針葉樹などの木口組織を各所にとどめるもの。炭粉粒子は不均一で各種形状のものを含み、長径 $30\mu\text{m}$ 前後の針状ないし棒状粒子を含むことが多い。

以下、木胎(木地)から順に番号(①～)を付して説明する。

(1) 塗膜分析

A 古代

a 試料No.8548 (河川SD976 - 1233、写真16・第42図) 小盤

器形・表面観察

フラットな底部から外反する総黒色系の小盤(小皿)。薄手で光沢のある形状の美しいもの。ヨコ木(柾目)取り。

塗膜分析

内外面①地の粉漆下地層。最大層厚 $150\mu\text{m}$ 。地の粉(鉱物粒子)は石英・長石・有色鉱物からなり、大きなものは $115\times 78\mu\text{m}$ 。平均して $70\mu\text{m}$ 前後のものが粗く分散している。②炭粉漆層。最大層厚 $61\mu\text{m}$ 。中粒。③漆層。層厚 $29\mu\text{m}$ 前後。表層 $5\mu\text{m}$ が変質(酸化劣化防止層の形成)。

b 試料No.2500 (Ⅱ区V層直上 - 1554、写真16・17・第42図) 手箱(総黒色系)

器形・表面観察

本例はおよそ30cm四方の平板な形状で、素地は残っていないが、箱の側板と判断される直線状の箔離痕がある。平板であることは箱の身ないし蓋の甲板であり、ゆるやかなカーブを有するものは、蓋のコーナー部分の、いわゆる塵居ちりいの上に相当すると考えられる。粗い布着せと地の粉および漆塗装がある等々から、漆塗りの手箱と考えられる。塗膜表面は黒褐色及び劣化して褐色を呈する部分もある。剥離部分が多く、下地の地の粉と布着せがよく観察できる。布は顕微鏡の断面観察から苧麻と判断され、目合は約2mm四方の粗いもので、1本超え1本潜り。

なお素地については、下地に木理が付着した部分はなく、皮革の可能性も残されている。

塗膜分析

内外面①布着せ層。最大層厚 $1500\mu\text{m}$ (1.5mm)前後。布は断面の形状から見て苧麻と思われる。漆が全体に浸み込んでいるが、ヨコ糸に地の粉の付着が認められる部分もある。②地の粉漆下地層。層厚 $100\sim 150\mu\text{m}$ 。地の粉は $50\mu\text{m}$ 前後の粗い石英・長石・有色鉱物を含む泥質なもの。漆の分量はわりと少ない。③漆層。層厚 $15\sim 50\mu\text{m}$ 。表層 $9\mu\text{m}$ が変質。

c 試料No.2850 (SD350 - 768、写真16・第42図) 漆塗り須恵器坏

器形・表面観察

須恵器内面全体に生漆特有の大きな縮み皴もなく均質で、黒色の強い精製漆が塗られている。漆器の代用品としての位置づけかもしれない。

塗膜分析

内面①漆層。層厚 49 μm 前後。表層 20～29 μm が変質している。生漆にみられるゴム質水球は確認できない。

d 試料No.2275 (Ⅱ区 P205 - 630、写真16・第42図) **須恵器漆パレット**

器形・表面観察

須恵器蓋の内面全体に縮み皴の少ない精製漆が付着している。刷毛の痕跡が認められることから、精製漆のパレットと判断できる。

塗膜分析

内面①漆層。最大層厚 441 μm 。表層がかなり変質している。下層は 1 μm 以下の細かなゴム質水球が分散している。

*以上のほかに須恵器坏、須恵器壺ないし甕などに漆が付着。

B 中世

a 試料No.1 (SD981 - 1374、写真16・第42図) **椀(総黒色系)**

器形・表面観察

ゆるやかに立ち上がる大ぶりの総黒色系の椀。高台はベタ底で露胎。体部内外面にカンナ目をとどめている。ヨコ木(柾目)取り。

塗膜分析

内外面①炭粉漆下地層。層厚 68 μm 前後。炭粉粒子は中粒だが細かい方である。表層 9 μm が分離。②漆層。層厚はごく薄く 5 μm 前後。③漆層。層厚 32 μm 前後。表層 5 μm が変質。④漆層。層厚 17 μm 前後。表層 10 μm が変質。

b 試料No.7 (河川 SD981 - 1376、写真16・第42図) **椀(総黒色系)**

器形・表面観察

ゆるやかに斜上方に立ち上がる総黒色系の椀の口縁部片。体部外面に赤色漆絵が加飾されているが、意匠などは不明。ヨコ木(柾目)取り。

塗膜分析

①炭粉漆下地層。層厚 100 μm 前後。炭粉粒子は中粒。表層 5 μm が分離。②漆層。層厚 25 μm 前後。表層 5 μm が変質。

*河川 SD981からは、みこみに漆絵のある大ぶりの椀(図版172 - 1375、総黒色系)が出土しているが、意匠は不明。

(2) 赤外分光分析

分光学(Spectroscopy)は「光と物質との相互作用によって生じる光の強度やエネルギー変化を調べる

学問」[尾崎 1997]と定義され、固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて赤外線照射してゆくと、分子の固有振動と同じ周波数の赤外線が吸収され、分子構造に応じたスペクトルが得られる。このスペクトルから分子構造を解析する方法を赤外線吸収スペクトル法 (Infrared Absorption Spectroscopy) という [山田 1988]。漆塗膜の分析にはフーリエ変換赤外分光法 (Fourier Transform Infrared Spectroscopy FT-IR) を用いた。赤外光は近赤外 (波数 $14000 \sim 4000 \text{ cm}^{-1}$ 、波長 $700 \text{ nm} \sim 2.5 \mu\text{m}$)、普通赤外 (波数 $4000 \sim 400 \text{ cm}^{-1}$ 、波長 $2.5 \sim 25 \mu\text{m}$)、遠赤外 (波数 $400 \sim 10 \text{ cm}^{-1}$ 、波長 $25 \mu\text{m} \sim 1 \text{ mm}$) に分けられるが、ここでは普通赤外光を用いる。波数は 1 cm 当たりの波の数で、振動数を光速度で割ったものであり、波長の逆数である。

FT-IR は普通赤外の場合は波数 $4000 \sim 400 \text{ cm}^{-1}$ の光を2つの光束に分割し、1つは固定し (固定鏡、ミラーA)、他方の光路長は可動ミラー (可動鏡、ミラーB) を用いて変化させる。つまり干渉計から位相の異なる光が出るわけで、2つの光束間の距離が変化すると干渉の結果、加え合わさった部分と差し引かれた部分の系列が生ずることによって、強度の変化が起こる。すなわち干渉図形が得られる。フーリエ変換という数学的操作を行うと、干渉図形は時間領域から振動数領域のスペクトル点の1つに変換される。ピストンの長さを連続的に変化させ、ミラーBの位置を調節し、光束Bの光路を変化させる。この変化させた各点において、次々とフーリエ変換を行うと完全な赤外スペクトルが得られる [SILVERSTEIN・WEBSTER ほか 1999]。このようにして得られたスペクトルをあらかじめ得られている基準のスペクトルと比較検討することによって、塗装液及び顔料の同定ができる。

分析用試料は $1 \sim 2 \text{ mg}$ を採取し KBr (臭化カリウム) 100 mg とともにメノウ鉢で磨り潰して、これを錠剤成形器で加圧成形したものを用いた (錠剤法)。条件は分解能 4 cm^{-1} 、積算回数 16、アポダイゼーション関数 Cosine。こうして測定した赤外線吸収スペクトルを第 39～41 図に掲載した (第 39・40 図はノーマライズ)。縦軸は吸光度 (Abs)、横軸は波数 (カイザー) である (測定機器は日本分光製 FT-IR420)。

第39図はNo. 2275 (須恵器漆パレット②)、No. 6002 (須恵器坏付着物①)、No. 7244 (須恵器壺ないし甕付着物④) と、同定の基準データである岩手県浄法寺産漆塗膜 (1992年作製③) の吸収を重ねた赤外線吸収スペクトルである。①がブロードな吸収を示すほかは全体として 3400 cm^{-1} (水酸基、OH伸縮)、 2925 cm^{-1} 、 2850 cm^{-1} 、 $1720 \sim 1718 \text{ cm}^{-1}$ (カルボン酸)、 $1650 \sim 1630 \text{ cm}^{-1}$ (糖タンパク)、 1465 cm^{-1} (活性メチレン基)、 1280 cm^{-1} (フェノール)、 1070 cm^{-1} (多糖/ゴム質) 付近の吸収が認められるので漆と同定される。 1070 cm^{-1} (多糖/ゴム質) 付近の大きな吸収もないので、経年変化による劣化も少なく、紫外線による劣化もあまりない。なお、①については、ブロードな吸収をしめすものの、漆であることを否定するものではない。

第40図はNo. 2500の手箱(③)、No. 8548の小盤(④)と新潟県田上町道下遺跡出土の漆パレット(②、10世紀)及び前述の基準資料の吸収を重ねた赤外線吸収スペクトル。ここで特徴的なことは手箱(③)と小盤(④)の吸収は、 1070 cm^{-1} (多糖/ゴム質) 付近の吸収が極めて増大していることに比べて、ほかの漆同定要素の吸収が少ないことである。つまり紫外線劣化はないものの、使用と経年変化による劣化が著しいものがある。これと近似した例が道下遺跡の漆パレットの吸収であり、両者は重なる部分が多い。

(3) 蛍光X線分析

蛍光X線分析は試料にX線を当てると、元素特有のX線(特性X線ないし固有X線)が発生(放出)する。この波長と強度を測定することによって元素の定性や定量分析を行う方法。

分析対象：No. 2500 (手箱) 漆下地の分析 (第41図)

使用機器：PANalytical / PW4025、エネルギー分散型蛍光X線分析装置。

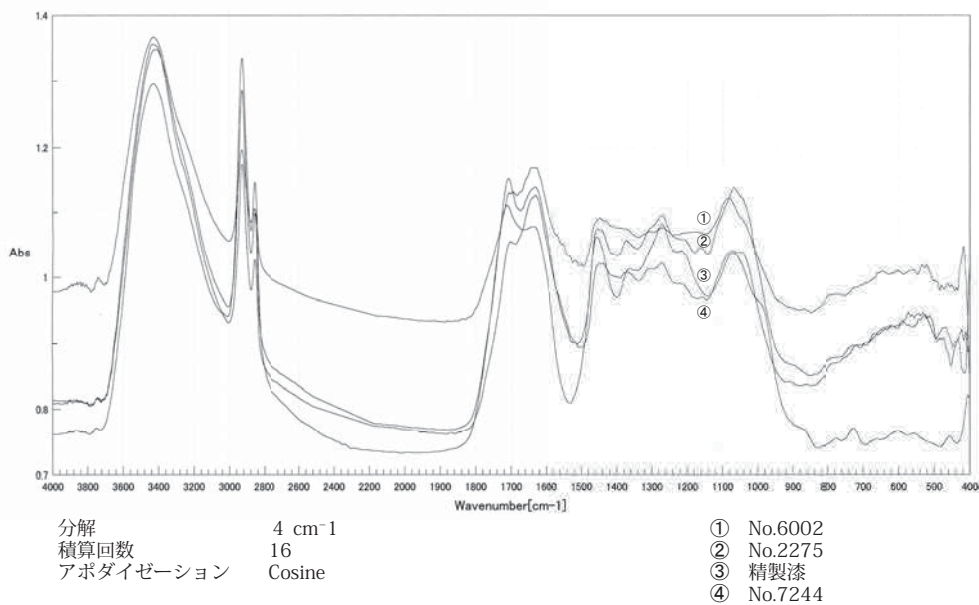
使用管球：Rh ターゲット 9 W。

検出器：高分解能電子冷却 Si 半導体検出器。

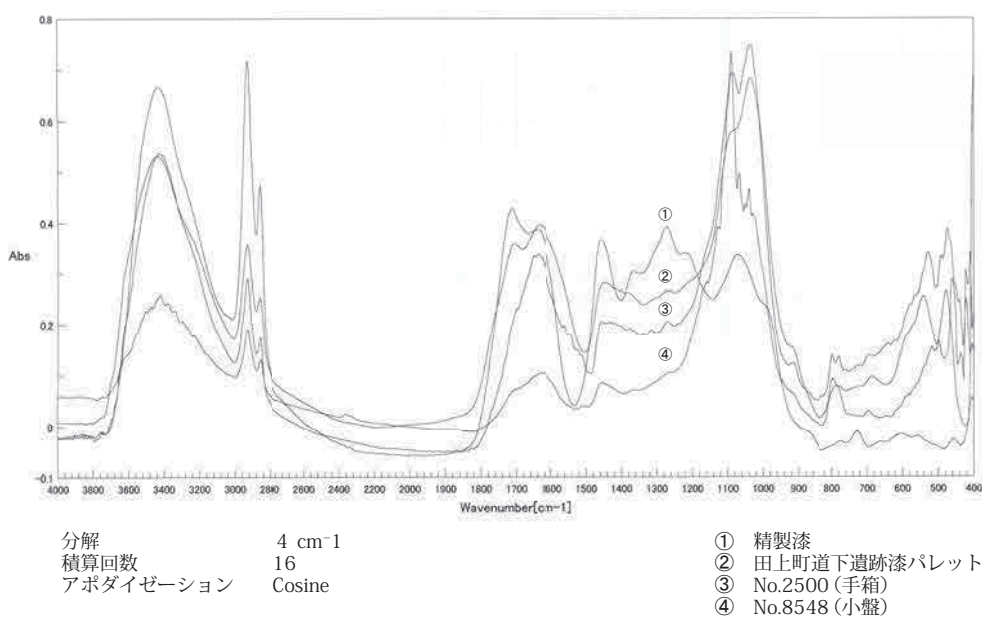
測定条件：30kV、20 μ A、フィルター Kapton、100sec。

測定室雰囲気：大気。測定部径は 1 mm。サンプルカップに入れて測定。

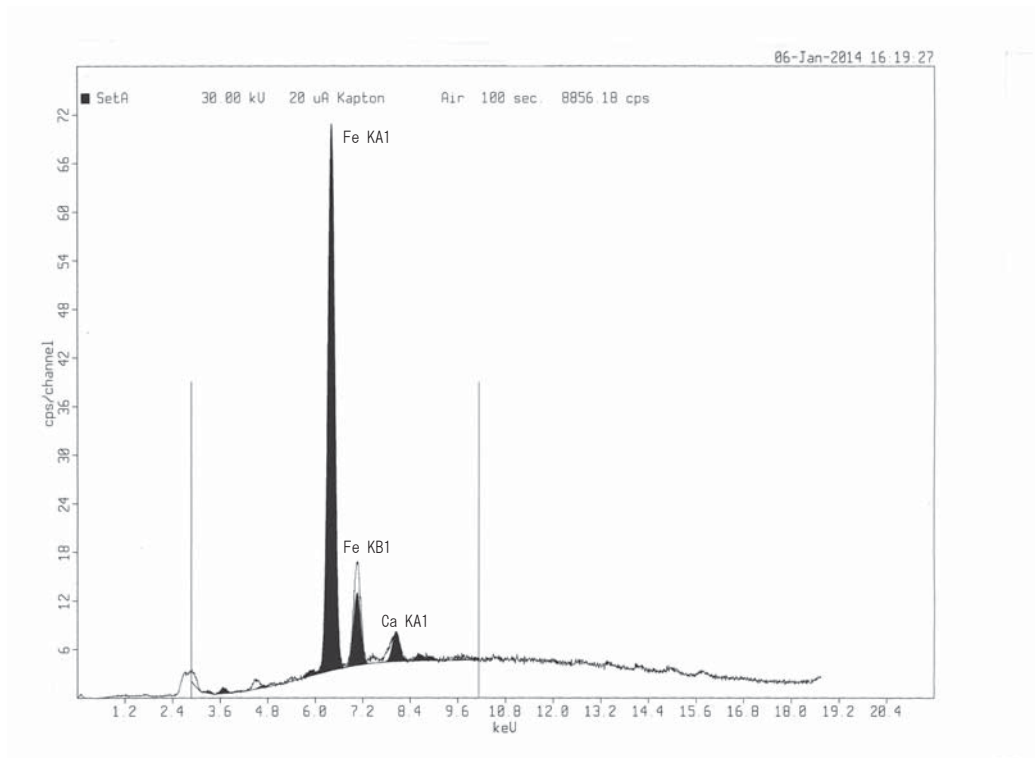
測定結果：第41図は定性分析のスペクトルであるが、励起条件を幅広く設定しているため、重元素である Fe (Fe_2O_3) などのピークが強く出ている (Fe は漆からも)。このためエネルギーの弱い軽元素は感度が低く、半定量値では CaO、CuO、MnO などが確認できる。



第 39 図 赤外線吸収スペクトル(1)



第 40 図 赤外線吸収スペクトル(2)



第 41 図 蛍光 X 線定性分析スペクトル (No.2500, 下地)

4 おわりに

以上、浦反甫東遺跡出土漆器の分析結果を報告してきたが、漆器考古学的観点からまとめをしておきたい。遺跡の年代としては考古学および放射性炭素による年代測定（暦年校正）値の検討から、9世紀後半を中心として、上限は9世紀前半、下限は10世紀初めと考えられている。

以前、浦反甫東遺跡に隣接する八幡林遺跡（「沼垂城」「郡司符」木簡などの発見で古志郡家関連遺跡と考えられている）出土漆器を紹介したことがある〔四柳 2006・2009〕。越後の漆器生産遺跡として欠かせない重要な遺跡であり、浦反甫東遺跡とは至近距離にあることから、比較上平成5年度調査I地区の貢進伝票（第25号木簡、8世紀末～9世紀前半）及び出土漆器の分析結果を紹介したい。木簡は長さ36cm、幅4.8cmの長大なもので、以下のような墨書がある〔田中^{ほか} 1994〕。

「
 頭付壺拾漆隻 河□腊一古 干穴十六□
 □物□鮭貳拾肆隻 頭无漆隻 鳥腊二古 牒思佐良八口
 穴腊四古 佐目腊一古 米一斗八升 □□

木簡の中央に越後特産の鮭24隻（匹）、その内訳は頭付き17隻、頭なしが7隻。ほかに穴肉（鹿猪）、佐目（鮫）、鳥の干物、米がある。そして漆器のうえで注目したいのは「牒思佐良」である。牒思は『法隆寺資材帳』（天平17年）などにみえており、『和名類聚抄』（『和名抄』）では「ウルシヌリノサラ」とよんでいる。「佐良」は^{さら}盤（皿）であるから、漆塗りの皿8枚ということになる。これらの物品は郡に貢進されたことが明らかな24号木簡と同様の記載であることから、漆器も在地で製作されていたことは疑いない。それは在り地生産を示す挽物容器の未製品や漆刷毛の出土だけでなく、漆器からも在り地産であることが証明できる。

出土漆器はすべて総黒色で、鏡筒の可能性のある大型の蓋（口径38.8cm）、薄手の小盤（口径15.6cm）、

長頸壺（器高 14.9 cm）、宝珠形つまみが付いた蓋（口径 9.4 cm）がある。とくに体部の接合がいわゆる印籠作りの長頸壺は、幅広の底部、押しつぶされたような体部、太い頸部と口縁部（玉縁）は正倉院や平城京跡出土品と比較した場合、かなりローカル色が強く、器形からも中央の工房作でないことは明白である。

塗装工程について塗膜分析を実施したところ、大型の蓋は、地の粉漆下地層（粒度の細かい鉱物粒子）＋黒色漆層（油煙の黒色顔料が含まれた漆層）＋漆層＋漆層の順、内面では黒色漆層が省略されていた。長頸壺は、布着せ層＋地の粉漆下地層（一辺地、粗い鉱物粒子）＋地の粉漆下地層（二辺地、細粒の鉱物粒子）＋黒色漆層（油煙の黒色顔料が含まれた漆層で、表層に研ぎあり）＋漆層＋漆層の順。基本的には蓋と同じであるが、大きい分下地の作りが厚い。いずれも最高級品として最も丁寧な作りである。宝珠形つまみ付きの蓋（薬壺の蓋）は、炭粉漆下地層＋漆層。薄手の小盤は内外面ともに、炭粉漆下地層＋炭粉漆下地層＋漆層の順であった。

浦反甫東遺跡No. 8548（写真 16・第 42 図 1233、9 世紀代）の小盤では地の粉漆下地層＋炭粉漆層＋漆層であり、八幡林遺跡にはない事例が追加された。見た目では薄く体部が反った大変上品な器形であり、ローカル色の強い八幡林遺跡とは明らかに異なっている。

次にNo. 2500（写真 17・第 42 図 1554）の手箱を取り上げたい（暦年較正值で 772～887AD）。塗装工程は布着せ層＋地の粉漆下地層＋漆層であったが、この塗装工程とよく似た例が、石川県金沢港に程近い金沢市戸水大西遺跡（8～9 世紀）から出土している〔出越茂和 2000〕。戸水大西遺跡は越前国から加賀立国前年にあたる「弘仁十三年」（822）の木簡や多数の墨書土器（「大市・中庄・中家・西家・宿家・吉成」など）、木製祭祀具が出土していること、漆器では漆革箱^{うるしかわぼこ}・稜椀・高杯・合子蓋・盤・漆塗曲物や漆パレットが出土しており、極めて重要な官衙関連遺跡と考えられている。漆革箱は一般的に漆工用語では「漆皮」とよばれてきたもの。しかしこの呼称に疑問があることは、小林行雄博士以来指摘されてきたところであるが〔小林 1962〕、この点について漆工史学者荒川浩和氏は広く古代文献を検証して、皮箱と革箱は厳密な区分は無いものの、「漆皮」という用例は奈良・平安時代の記録には見当たらないこと、『倭名類聚抄』^{こやしつぐ}膠漆具の条の解釈では、皮は毛の付いたもの、革は毛を取り去ったもの（ツクリカワ）、韋は柔らかくしたもの（オシカワ）とあることから、「革箱」が字義に即しているとされている〔荒川 1981〕。

戸水大西遺跡出土品を漆革箱（手箱）と判断した根拠は、塗膜面がフラットであることは甲板であり、隅がカーブをなしていることは隅丸の形状を示していること、そして鬘^{かつら}が確認できたことにある。更に裏面の布着せには、通有付着している木質痕がまったくみられないことである。塗膜色は茶色を帯びた黒色で、赤外線撮影で表面（甲板）に馬か犬のような動物画が確認された。肉眼ではよく観察できないが、漆のような盛り上がりはまったく確認できないので、大方の研究者は墨で描かれたものと考えている。塗装工程（写真 15）の分析は甲板外面で、胎（素地）から順に番号（①～）を付して説明する〔四柳 2003・2006・2009〕。

①布着せ層。経糸繊維束幅は部分によって 200～800 μm ほどの差がある。緯糸は円形や楕円形をなすが、後者では繊維束長径 500 μm 、短径 367 μm 。繊維断面形は五角形を基本とし、苧麻と考えられる。②ベンガラ（ Fe_2O_3 ）主体の漆層。層厚 49～98 μm 。ベンガラ粒子は 0.5 μm 以下の微粒子。③漆層。層厚 24～50 μm 。この層は明確に分離観察できる部分とそうでない部分があるので、後者の場合は②層の上層ということになる（ベンガラが沈殿）。④ベンガラ（ Fe_2O_3 ）主体の漆層。層厚 58 μm 前後。粒度は②層と同じ。この②～④層は布目を埋め、木地との段差をなくする工程。①層の布によく染み込んで間隙のないものに仕上がっている。⑤地の粉漆下地層。層厚 270 μm 前後。凹凸部分は漆で充填されている。表層は地研ぎと思われる部分と凹凸の部分が観察される。地の粉（鉱物粒子）は石英・長石・有色鉱物からなるが、全体に粗く石英の大きなものでは長径 147 μm 、短径 83 μm をはか

る。⑥漆層（地固め）。層厚 $24\mu\text{m}$ 前後。表層 $2\sim 3\mu\text{m}$ が変質（酸化劣化防止層の形成）。⑦漆層（上塗）。層厚 $7\sim 17\mu\text{m}$ 。酸化によって全体がやや変質し黒色を帯びている。要するに布着せの凹凸を埋めるためにベンガラを用いているが、その上は地の粉+漆層+漆層という簡素なもの。粗い布着せや簡略化された髹漆（塗装工程）は浦反甫東遺跡例と類似している点は注意しておきたい。

中世ではNo. 1（第42図1374）の椀（総黒色系）の塗装工程は炭粉漆下地層+漆層+漆層+漆層で、地の粉漆下地ではないものの上質品である。No. 7（第42図1376）の椀（総黒色系）は炭粉漆下地層+漆層の典型的な普及型漆器（渋下地漆器）である。時期的にはゆったりとした大ぶりの器形と短脚で太めの畳付からみて鎌倉後期～南北朝期と思われる。

末筆ながら本稿作成に当たっては、長岡市教育委員会丸山一昭氏、大石組文化財事業部諸氏から何かとご教示をえている。厚く御礼申し上げたい。

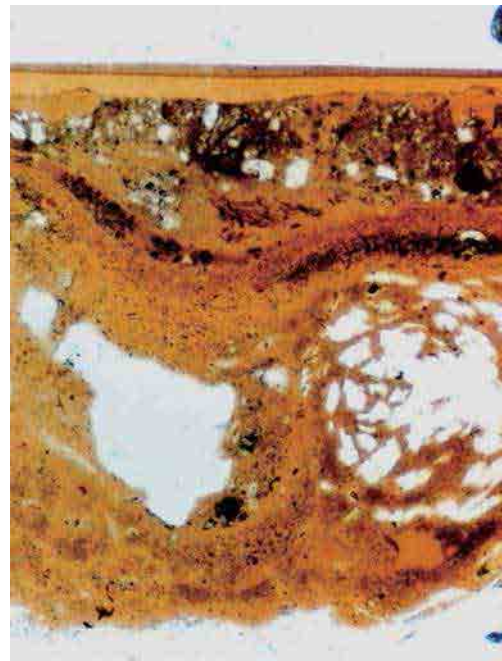
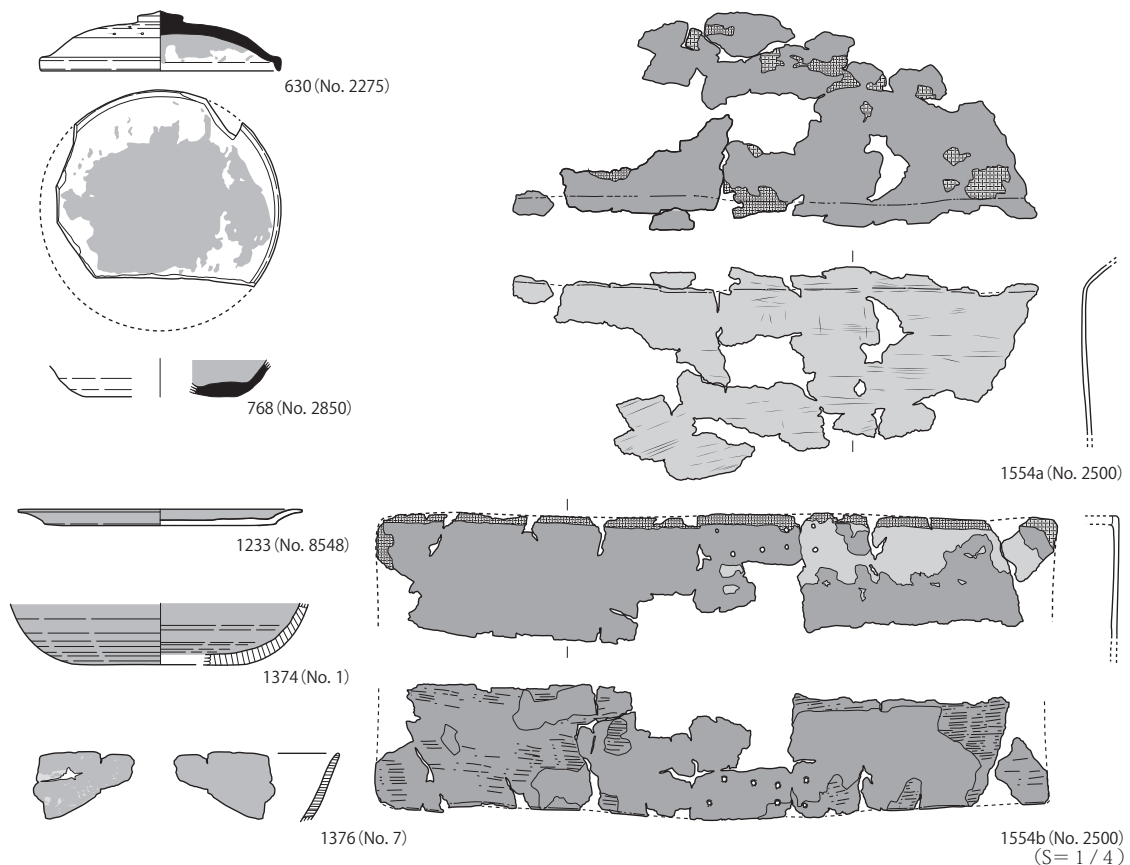
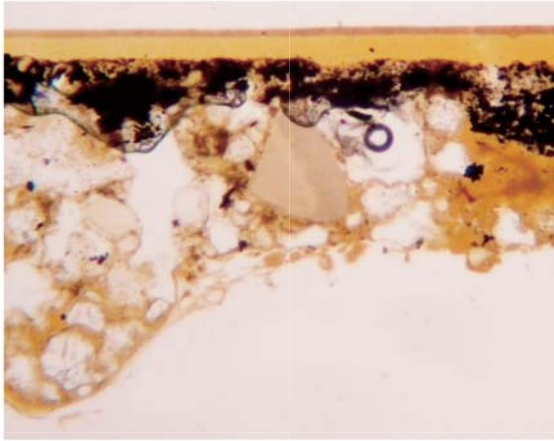


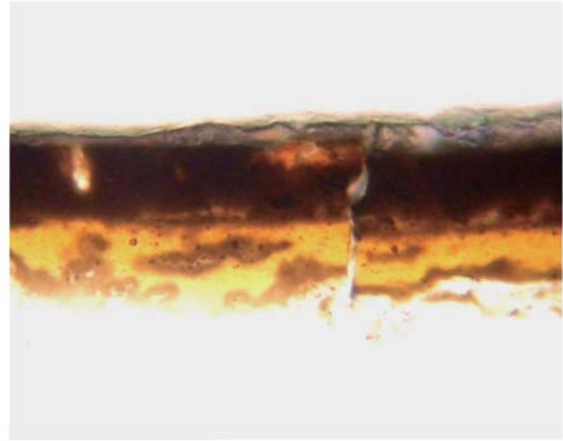
写真15 金沢市戸水大西遺跡出土漆革箱の塗装工程
(原図：四柳嘉章)



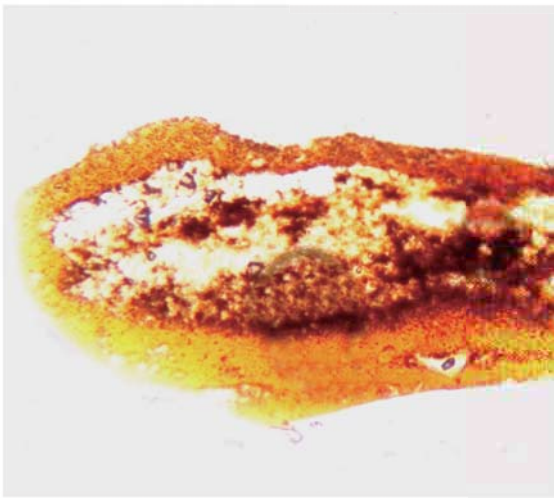
第42図 分析試料実測図



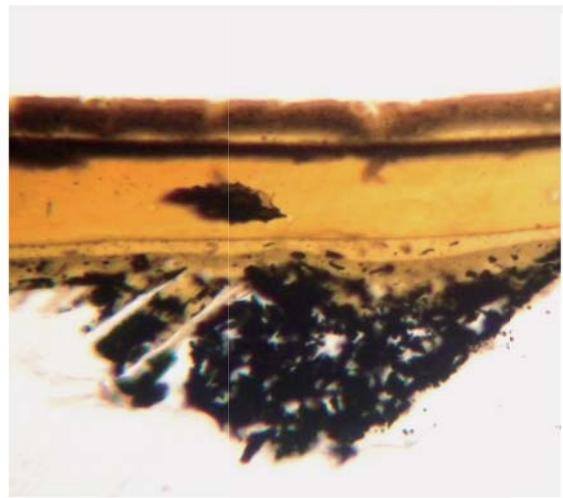
No.8548 (小盤) ×100



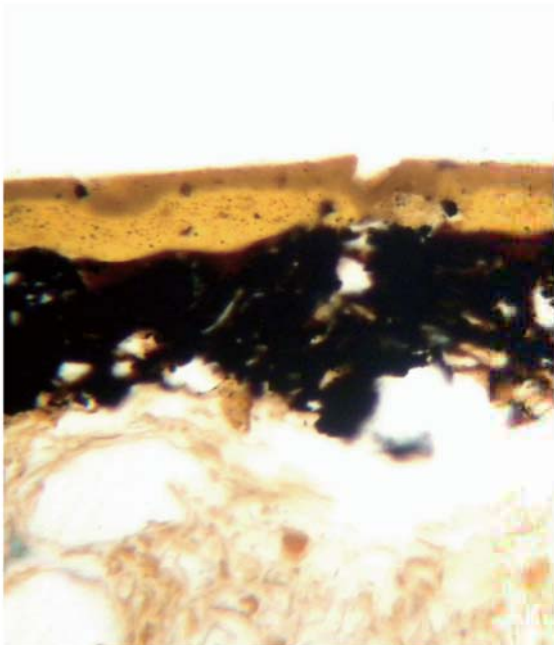
No.2850 (漆塗り須恵器坏) ×400



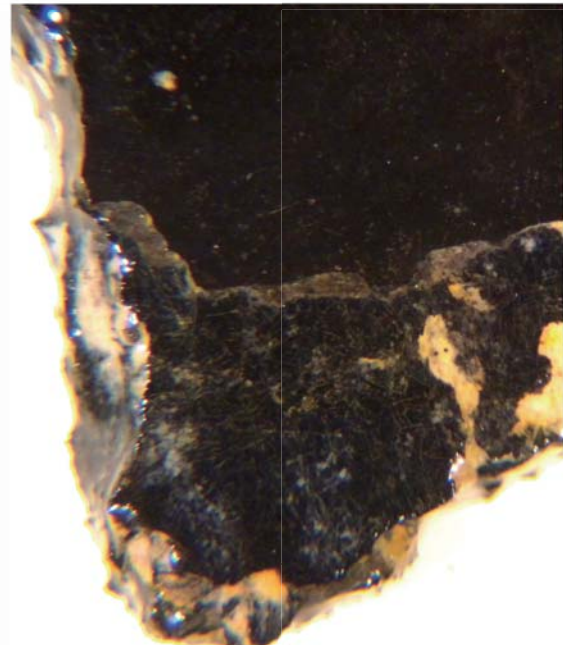
No.2275 (須恵器蓋内面付着漆) ×100



No.1 (中世漆椀) ×400

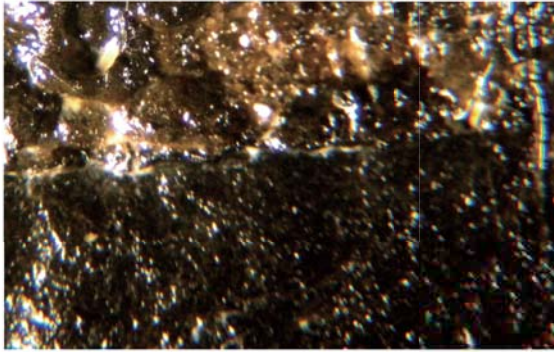


No.7 (中世漆椀) ×200

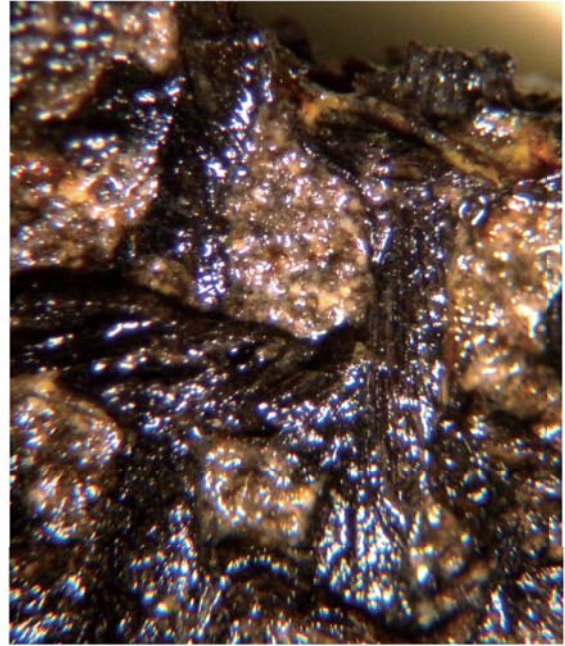


No.2500 (手箱、外面) ×10

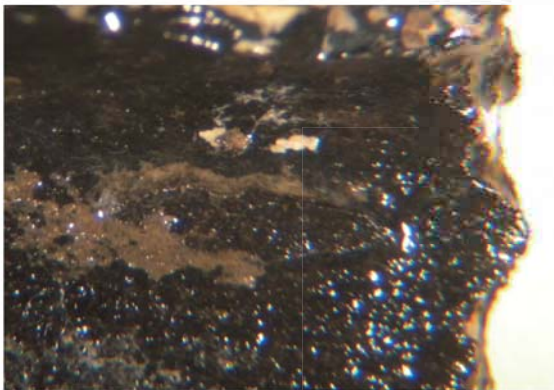
写真 16 漆器塗膜層断面顕微鏡写真



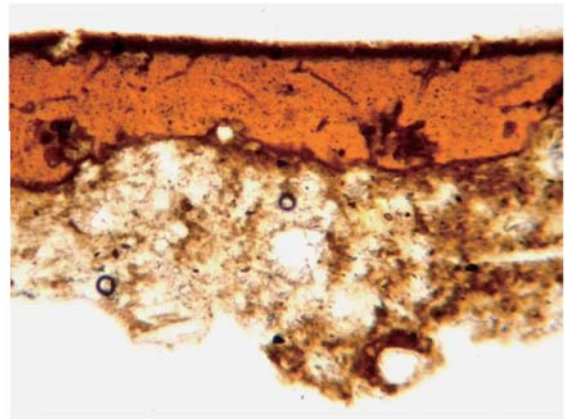
直線状剥離部分 (内面) ×10



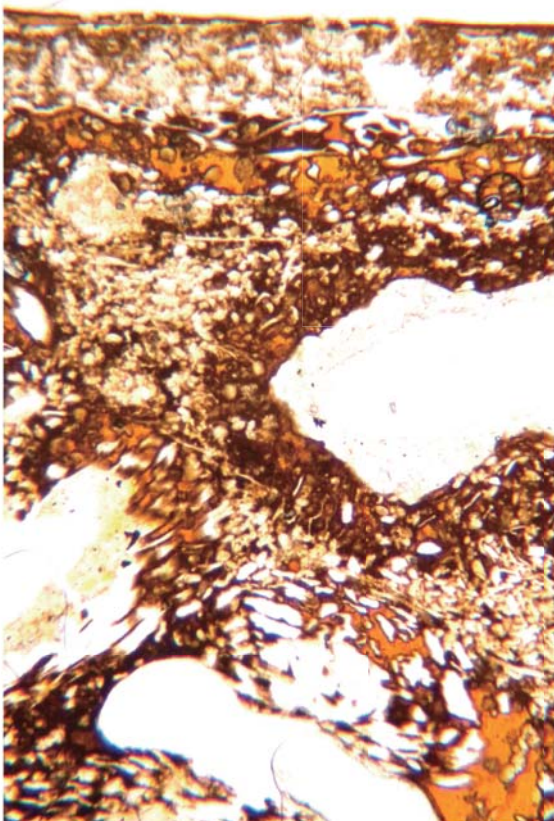
布着せ部分 ×20



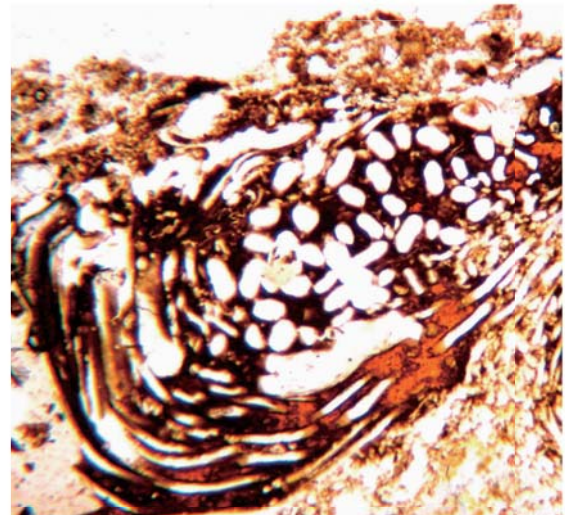
立ちあがり部分 (内面) ×10



上塗り・地の粉拡大 ×200



塗膜全体 ×100



布着せ部分 ×100

写真 17 漆器塗膜層断面及び実体顕微鏡写真 (No.2500 手箱)

第Ⅶ章 まとめ

第1節 平安時代

1 出土土器の編年的位置付け

(1) 検討方法

本遺跡から出土した平安時代の土器は、種別で見ると須恵器799点、土師器253点、黒色土器21点、施釉陶器3点（掲載資料点数）であり、そのほとんどが須恵器である。須恵器はそのうち胎土が判明したものがA群17点、B群727点、C群47点あり、佐渡小泊窯跡群産が主体を占める。このことから、所属年代は小泊産須恵器が越後で全域的に確認される9世紀から10世紀初頭頃と考えられる。

まず当該期の土器を概観するため、遺構出土遺物のうち土器が定量存在し統計的な検討に耐えうるものを対象として、器種構成比率等を算出しグラフに表した（付表11、第57～59図）。土器の機能をみると、主要遺構の多くで食膳具が70%以上を占めることが分かった。食膳具は須恵器が70%以上を占めるものがほとんどで、無台坏が食膳具の主体をなしている。土師器無台碗を出土した遺構も僅かにあるが、その個体数は1～2点程度である。したがって本遺跡の場合、土器の編年的位置比定にあたっては小泊産須恵器、特に食膳具を中心とした編年を基軸に検討していく必要がある。

小泊産須恵器の編年研究は、土師器等も含めた越後における古代土器編年の中心的な骨格をなしている。小泊窯の編年的序列は、坂井秀弥氏らにより下口沢窯→カメ畑1～3号窯→江ノ下窯という大枠が設定され（注4）[坂井ほか1991]、古代全時期を通じた統一的な土器編年案も提示された[春日1999]。その後、川村尚氏によるK402窯を下口沢窯に、フスベ1号窯を江ノ下窯に先行させる見解[川村2005]を受け、春日氏は自身の編年との併行関係を示し、以後県内各地の遺跡を編年的に位置付ける作業を継続的に行っている。また、旧島崎川流域の地域的な土器編年は、田中靖氏による八幡林遺跡・門新遺跡・下ノ西遺跡の報告を基に春日氏[春日2001]が構築し、後に田中氏が下ノ西遺跡の新たな調査成果を加えて補強した[田中2003a]。その後、春日氏は自身の編年と田中氏の編年、及び坂井氏によって設定された今池遺跡編年[坂井1984]・山三賀Ⅱ遺跡編年[坂井1989]との対比を行い、他地域との併行関係についても検討を加えた[春日2005]。春日氏と田中氏の編年観は、一部の出土資料を除きほぼ相違はなく、両氏の研究が現在も本地域における土器編年の基準として有効なものとなっている。

一方、笹澤正史氏は七社遺跡発掘調査報告書において、春日氏の編年上の問題点を指摘した上で小泊産須恵器食膳具の器種構成上の変化、及び形態的な変化に着目し、新たな編年観を提示した[笹澤2011]。詳細は後段に譲るが下口沢窯からカメ畑窯を経てフスベ1号窯・江ノ下窯という従来の変遷を継承しながら、カメ畑窯（2・3号窯）を引き上げ大木戸窯と同時期としたこと、これに後続する1段階を設定しさらにカメ畑1号窯を後続段階として、下口沢窯以降を5段階区分したことが従来との相違点である。笹澤氏による基準資料序列の見直しと時期の細分によって、小泊産須恵器の変遷はより明快な説明が可能になったと筆者は考える。本遺跡出土土器の大部分は小泊産須恵器であり、食膳具が卓越した状況にあることから、本報告では笹澤氏による小泊産須恵器食膳具の変遷案を参考として土器の編年的位置付けを行っていく。

(2) 本遺跡出土土器の変遷案

小泊産須恵器の基本的な変化の流れは、「有台坏A類の消滅と有台坏B類の法量分化、坏A類（無台坏：筆者注）の2法量分化を経て、坏形器種が減少し椀形器種が増加（坂井・春日ほか1991）する器種構成上の変化と、坏類の小型化と口縁部の外傾化、底部の丸底化、薄作りが進行する器形の変化で説明できる。」とされる〔笹澤2011〕。この変化を念頭に小泊窯跡出土資料との比較を通じ（注5）、本遺跡出土土器の編年的位置を以下のように考えた（第43～49図）。

1段階 小泊窯ではK402窯を標識とし、底部全面ロクロケズリ調整が卓越するとされる〔笹澤2011〕。本遺跡における当該期の小泊産須恵器は確認されていない。

2段階 胎土B群須恵器が下口沢窯表採資料に比定される。「大型の有台坏B類」（本書分類のB類に相当）が存在し、無台坏のロクロケズリ調整が消滅する段階である〔笹澤2011〕。I区SD1037やSD1085の一部、包含層出土資料等に見出すことができるが、遺構単位の出土資料でみると断片的で3段階の資料と混じる場合が多い。本遺跡の坏類は器壁が厚手で、体部が直立して偏平な箱形器形となるものが多い。坏類の底部は平坦に仕上げられ、特に有台坏底部側縁の稜線が比較的明瞭に認められる。坏蓋は大型の有台坏B類に対応し大型で、端部がシャープなカエリとやや窪んだ擬宝珠形の紐を持つものがある。

3段階 カメ畑2・3号窯資料に比定される。有台坏が小型化し、無台坏A類が深身化する段階である〔笹澤2011〕。I区SK1083、II区P205・SK217・SD566・SK294・SX511などが相当する。このほかSD1037やSD1085の一部、包含層出土資料にも定量みることができる。本遺跡の坏類では器壁が前段階に比べやや薄手のものがある。体部の立ち上がりは2段階のものと同様のものであるが、やや開き逆台形状を呈するものが多い。

4段階 古相として下口沢1号窯体内、新相としてK344窯表採資料を標識とする。有台坏A類が消滅し、各器種の小型化の進行と底径の縮小、外傾器形が増加する段階である〔笹澤2011〕。I区SD982、II区SE3・SD279・SD525南などが相当する。本遺跡では無台坏で小型のものが多く、前段階に比べ薄手となり、底径は縮小し口縁部が外傾するものが多い。坏蓋は偏平でカエリが内側を向くものがある。

5段階 カメ畑1号窯体内・南のそで窯跡資料を標識とする。薄作りが進み、無台坏の底径が縮小、小型化する段階である〔笹澤2011〕。II区SK429・SX521などが相当すると考えるが、遺構出土資料はごくわずかである。本遺跡の無台坏では、体部が丸く湾曲したものや口縁部内面と見込み外周に凹線状の窪みをもつ細別x類の要素が確認されはじめる。坏蓋のカエリはやや丸く鈍い形となっている。

6段階 古相にフスベ1号窯体内、新相として江ノ下窯採集資料が標識とされる段階。盤の消滅、椀器形（器種）の増加、無台坏の2器種化と丸底器形の増加する段階である〔笹澤2011〕。I区SB25・SD1078・SX1240、SK342・SK380・SD274・SD317のほか、SB9柱穴や河川SD976の多くが相当する。本遺跡の坏類は底部側縁が丸味を帯び、椀形の器形を呈するものが目立つ。細別n類など口縁端部付近を内外側面から加圧し、ロクロ目が認められるものが多い。また、5段階に引き続き細別x類が顕著にみられる。坏蓋はカエリが丸く潰れ退化傾向が著しく、紐は口径が大型化し環状となる。

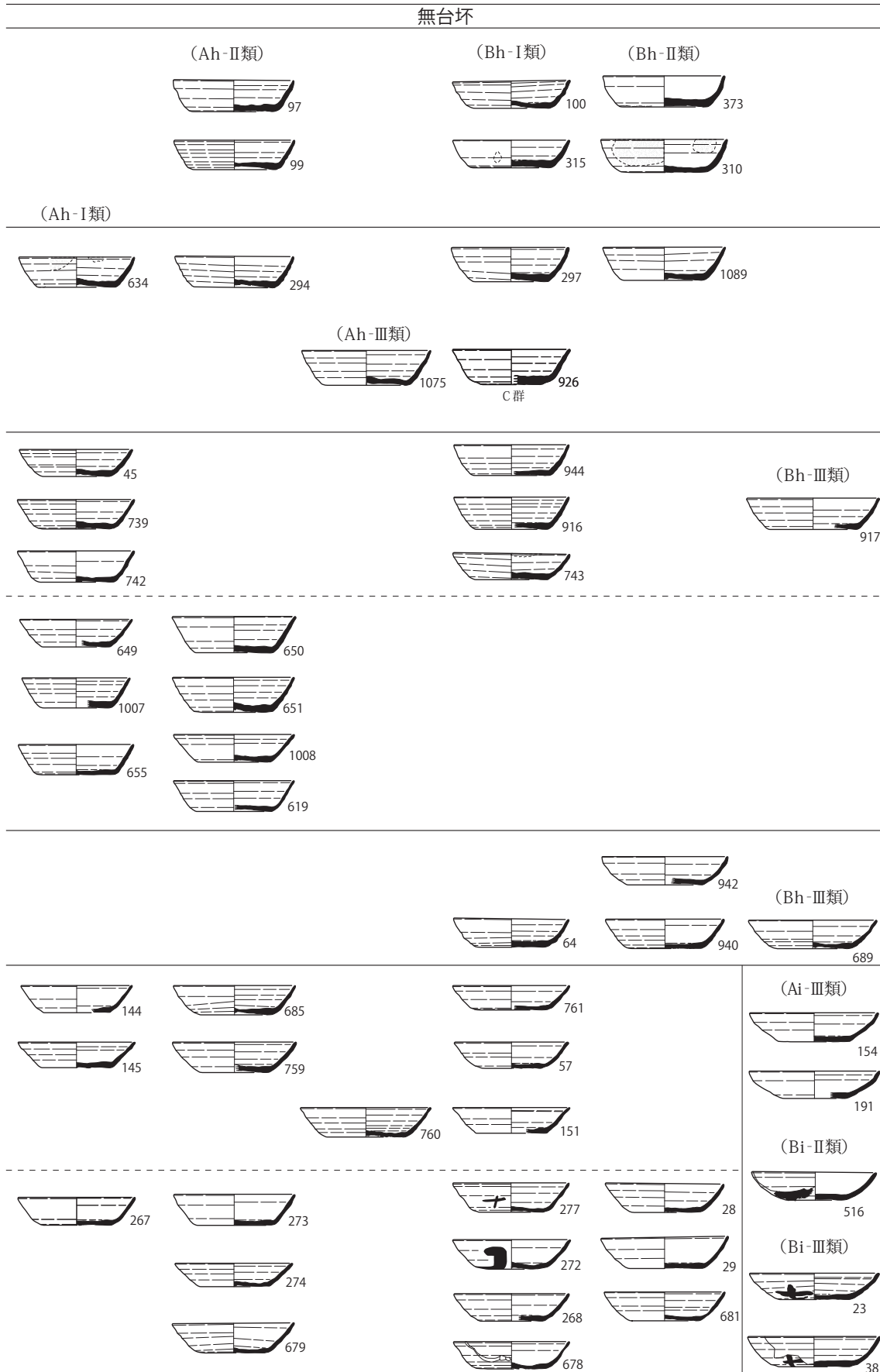
7段階 6段階に続く窯跡資料は未確認であるが、消費地遺跡では高野遺跡出土資料がこれに相当すると考えられる。本遺跡出土の須恵器では良好な一括資料は見当たらないが、無台坏の中には丸底に近い資料も断片的に認められることから、本段階を設定した。また、河川SD976上層で一括廃棄された可能性が高い土師器無台椀（428・429・431）はこの段階に伴うものと考えられる。

時期	食膳具		時期	食膳具		
	遺物番号	遺構名		遺物番号	遺構名	
2	3	SB24 - P1017	6 (古)	56・57	SD1014	
	96・97・99・100	SD1037		144・145・151	SX1240	
	309・310・315	SD1085		160	I区IV層	
	373	河川SD976		684・685・686	SK342	
	804	SX131		757・759・760・761	SD317	
	830・831	Ⅱ区IV層	6 (新)	23	SK1039	
	962・963	Ⅱ区V層		27・28・29	SK1064	
	1109・1110	Ⅱ区VI層		38	SD979西	
3	139	SX1072		154	I区Ⅱ・Ⅳ層	
	294・297	SK1083	191	I区IV層		
	602	SB5-P209	267・268・272・273・274 277・280・282・284	SB25 - SD1078		
	630・634	P205	346・348・485・496・505・516	河川SD976		
	658	SK217	676・678・679・681・682	SK380		
	664・665	SK294	727・728・729・730	SD274		
	755	SD306	7	430・431・432	河川SD976	
	902・903・904	SK510	貯蔵具・煮炊具			
	911	SK520	2 (古)	20	SK1038	
	923・924・925・926	SX511		91・93・116・119	SD1037	
	1088・1089	SX833		152	I区包含層・SK1083	
1075・1077	SD566	300・301		SK1083		
4 (古)	39・40・45・49	SD982		3	322・323・324・327・329	SD1085
	500	河川SD976			666・667・671	SK294
	645	SE3	934・937		SX511	
	739・742・743・748・749	SD279	1076	SD566		
	916・917	SD525南	4	47・48・52	SD982	
	943・944	SX529		616	P120	
4 (新)	483	河川SD976		646・647	SE3	
	619	P150		746・747	SD279	
	649・650・651・654	SE3		795	SD378	
	655	SK125		920・921	SD525南	
	1047	SB30 - P971	945	SX529		
1007・1008	SB7 - SD389西	5	692・693	SK516		
5	64	SD1018	6	278・279・288	SB25 - SD1078	
	350	河川SD976		25	SK1039	
	586	I区VI層		53	SD1006	
	687・688・689	SK429		58	SD1014	
	939・940・942	SX521		77・78	SD1024	
	1064・1066	SD525北		143	SX1240	
				462・463・464・473・480	河川SD976	
				1026	SB9 - P631	
				725・726	SD274	
				754	SD302	

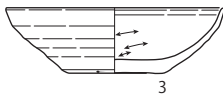
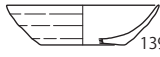

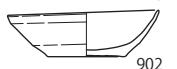
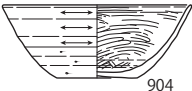
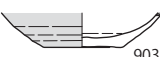
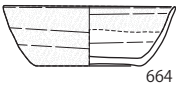
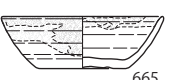


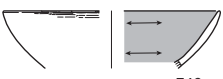
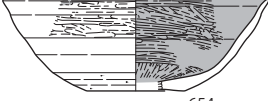



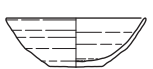
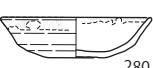


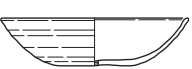

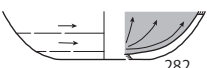
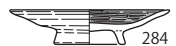
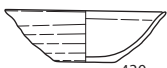

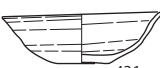
第26表 編年図出典

	有台坏			坏蓋
2 段階	(Ah-1類)		(Bh-II類)	(A-II類)
3 段階	折縁坏	(Ah-2類)	(Bh-I類)	(A-I類)
4 段階 (古)	有台椀			(A-I類)
4 段階 (新)			(Bh-I類)	(A-I類)
5 段階			(Ch-I類)	(A-II類)
6 段階 (古)				(A-II類)
6 段階 (新)		(Bh-I類)	(Ch-I類)	(A-II類)
	<p>(S=1/6) 須恵器胎土分類の表示がないものはB群</p>			

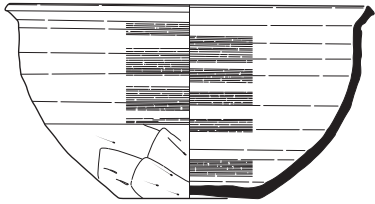
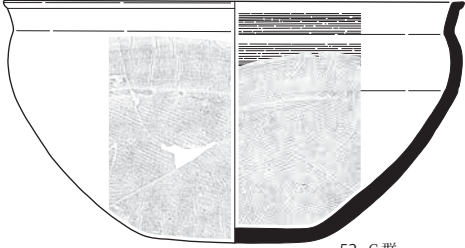
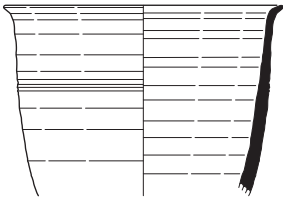
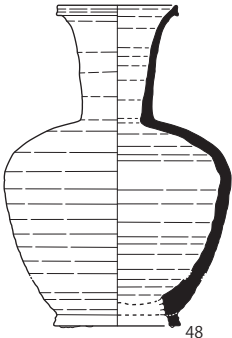
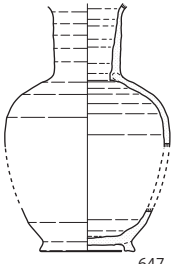


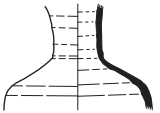
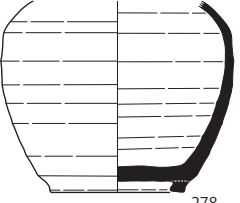
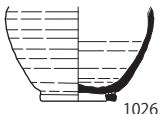
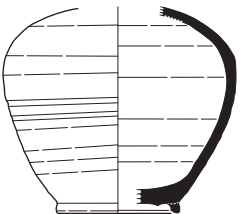
第43図 出土土器編年案（須恵器食膳具1）



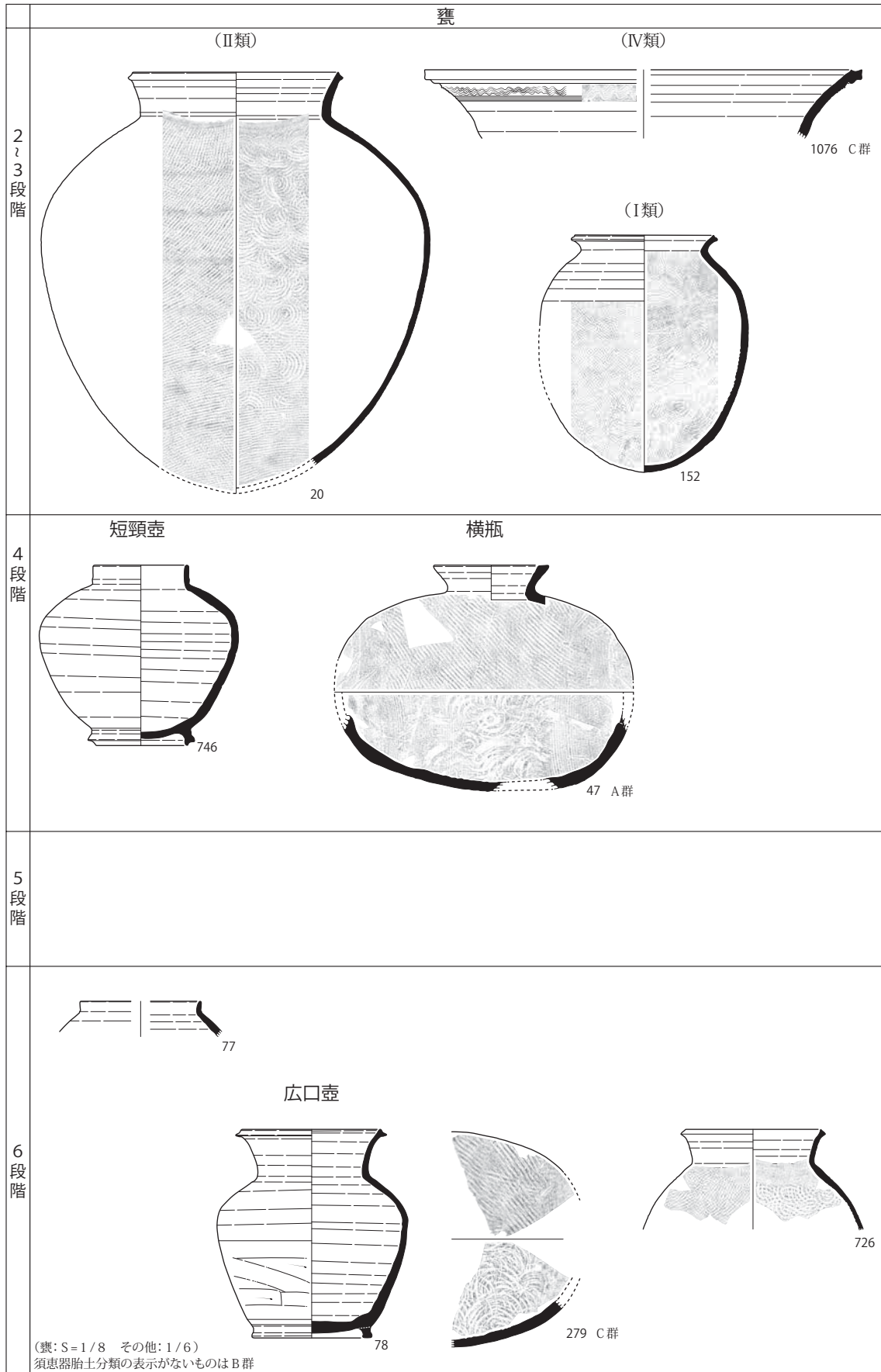
第 44 図 出土土器編年案 (須恵器食膳具 2)

	無台椀	無台杯	無台椀		
2 段階	(Ai-IV類)  3				
3 段階	(A-II類)  139	(B-II類)  1077  902	(半精製)  904 (赤彩)  903	(B-III類)  664 (Bh-II類)  665	
4 段階 (古)	(A-III類)  748	(Ah-I類)  49	 749		
4 段階 (新)			 654		
5 段階	(A-II類)  1064  1066				
6 段階 (古)		無台椀 (B-III類)  686			
6 段階 (新)		(Bi-I類)  727  280	(Bi-II類)  682  728	(Bi-III類)  729	 730  282 有台皿  284
7 段階	(Ai-II類)  430	(Ai-III類)  432	(Bi-II類)  431		

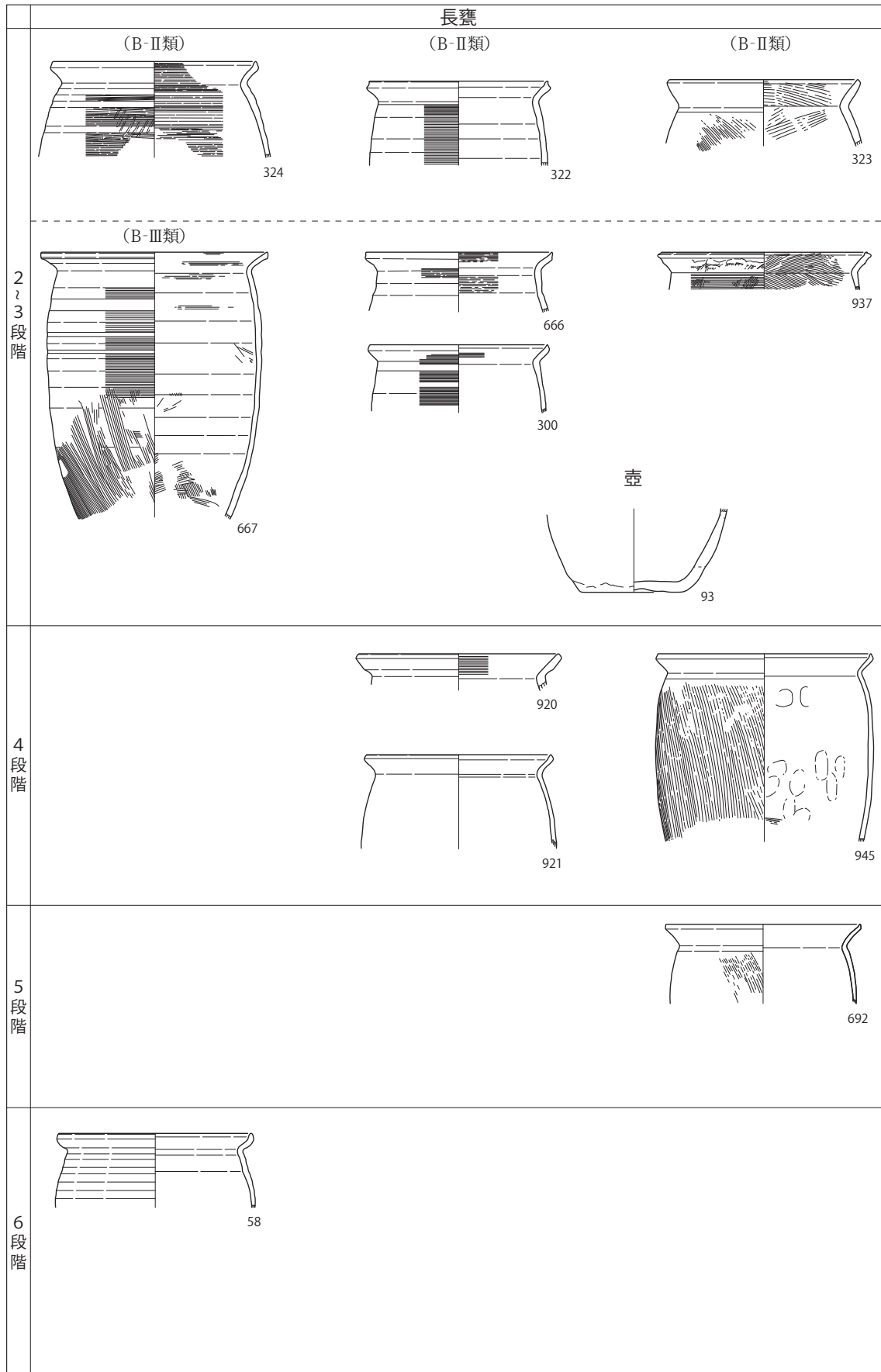
第45図 出土土器編年案（土師器・黒色土器食膳具）

	括れ鉢	長頸瓶・瓶類
2 3 段階	 <p>116 A群</p>	
4 段階	 <p>52 C群</p>	<p>鉢</p>  <p>795 C群</p> <p>(原始灰釉陶器)</p>  <p>48</p>  <p>647</p>  <p>646</p>
5 段階		
6 段階	<p>小型壺</p>  <p>53</p>	 <p>725</p>  <p>278</p>  <p>1026</p>  <p>25</p>
	<p>(S=1/6) 須恵器胎土分類の表示がないものはB群</p>	

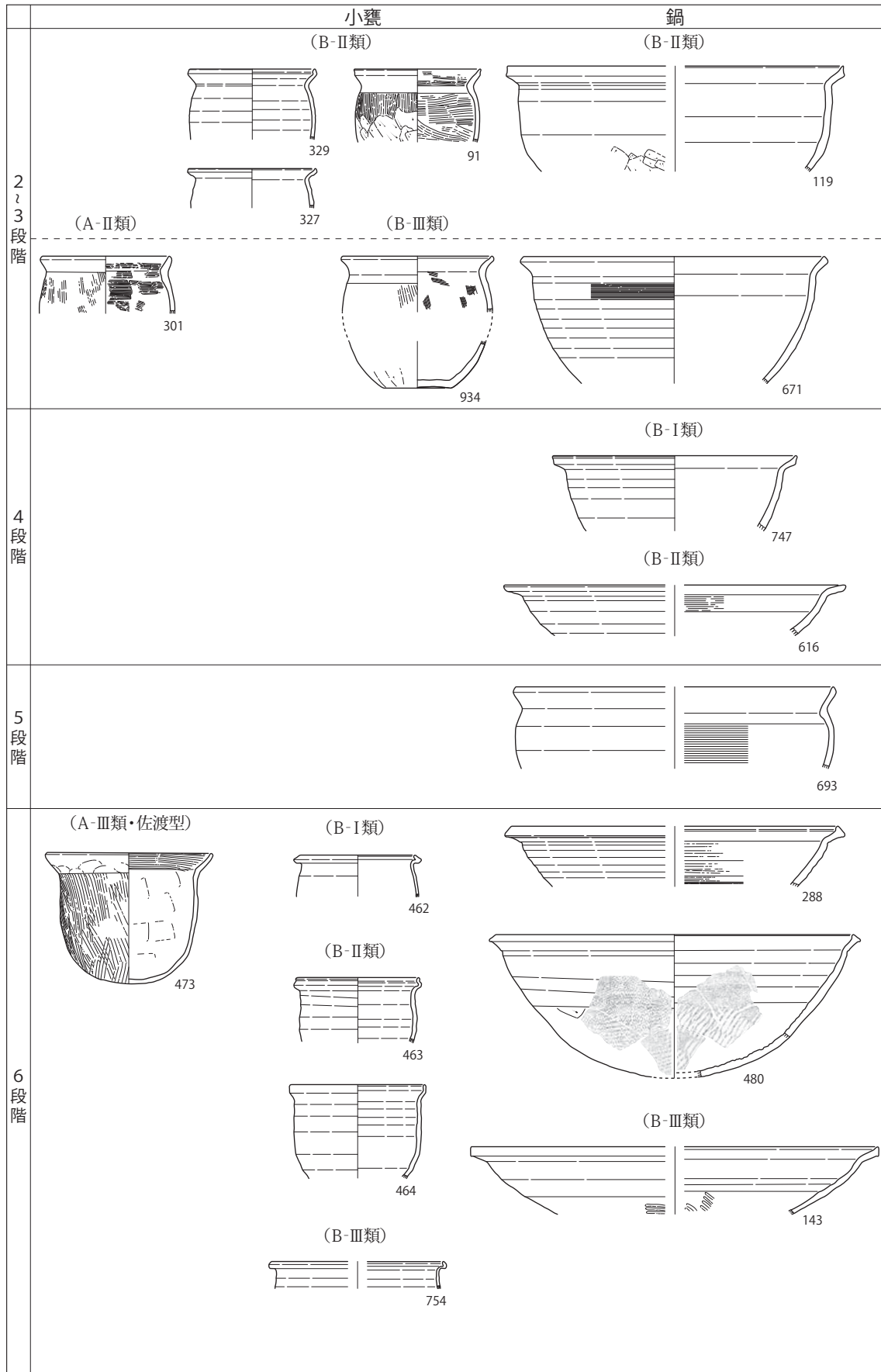
第46図 出土土器編年案（須恵器等貯蔵具1）



第47図 出土土器編年案（須恵器等貯蔵具2）



第 48 図 出土土器編年案（土師器煮炊具等 1）



第49図 出土土器編年案（土師器煮炊具等2）

(3) 土器の検討

以下では、主要な遺構出土資料について、須恵器・土師器食膳具における編年的位置付けの対比を行う。本遺跡は消費地遺跡であるため時期幅をもち、窯跡資料の様相と直接連動しないが、概ねの編年的位置を把握できると考えられる。なお、土師器食膳具の時期区分は〔春日 2005・2008〕に準拠する。

SD 1037 (西・東を含む) (86~120)

食膳具は須恵器有台坏・無台坏があり、土師器はみられない。有台坏は身の浅いA h - 1類 (96) などのほか、深身のB h - I類 (95) がある。86はC群で、そのほかはB群である。無台坏はやや厚手で、107・108がC群のほかはB群である。B群の無台坏の法量は口径12cm未満のI類、12cm台のII類がある。径高指数では多くが25前後の2類に分類され、28以上の深身となる3類がわずかにある。底径指数は65以上の立ち上がり急なもの、60~65の逆台形状のもの、例外的に55以下で外傾度が大きいものがみられる。以上の点から須恵器食膳具は概ね2~3段階と考えられるが、やや薄手で底径指数が小さいもの(101~105・111・117)は新しい要素とみて4段階(古)までを含む可能性がある。煮炊具は土師器長甕B II類(90・115・120)や西古志型を含む小甕B - II類(91・92・114)、鍋B - II類(119)がある。煮炊具の口縁端部は面取りするものが多い。このほか仏具的な性格が考えられる鉢(113)や括れ鉢(116)がある。これらの煮炊具・鉢は八幡林遺跡I地区Ⅲ層出土土器〔田中ほか 1994〕にも存在し、V期に区分される。

SD 1085 (306~330)

食膳具は須恵器坏蓋・有台坏・無台坏があり、土師器はみられない。坏蓋(306)が胎土C群であるほかは、B群である。有台坏は大ぶりのB h - II類(309)や小型のC h - I類(307・308)がある。無台坏はやや厚手で、法量はI・II類ともに存在する。径高指数はSD1037同様に2類を主体に3類が存在するほか、扁平で箱形を呈する1類(318)もみられる。煮炊具は土師器長甕B - II・III類や小甕B - II類がある。いずれも口縁端部を面取りするものや、つまみ上げるものである。これらの資料は、須恵器は2~3段階、土師器はV期に相当すると考えられ、西に隣接するSD1037とほぼ同時期のものと考えられる。

SK 1083 (293~301)

食膳具は須恵器坏蓋・無台坏があり、土師器はみられない。坏蓋の293が胎土C群のほかは、B群である。無台坏はやや厚手のA h類が主体でB h類は297のみである。やや薄手のつくり(296・299)もみられる。法量はI類・II類が存在する。径高指数は2類と3類が主体であり、底径指数は65~70の間に納まる。いずれも箱形器形に近い形態である。煮炊具は非口クロ輪積成形の土師器小甕A - II類(301)があり、内外面ハケメ調整を施す。これらの資料は、須恵器が3段階、土師器も概ねV期前後と考えられる。なお本遺構の西にはSD1085・SD1037が隣接し、これらの遺構と併存したと考えられる。

SX 511 (923~937)

食膳具は須恵器坏蓋・有台坏・無台坏があり、土師器はみられない。坏蓋の923が胎土A群、無台坏の926が胎土C群で、そのほかはB群である。有台坏(925)は厚手のB h - I類である。B群無台坏(927~931)の法量はI類・II類があり、径高指数は2類と3類がある。底径指数は931以外が69以上の箱形器形となる。煮炊具は土師器長甕B - II類・小甕B - I類・B - III類がみられ、口縁端部を面取りする。これらの資料は須恵器が3段階、土師器がV期頃と考えられる。

SD 566 (1073~1077)

食膳具は須恵器有台坏(1073)・無台坏(1074・1075)、土師器無台椀(1077)がある。須恵器は有台坏(1073)・甕(1076)が胎土C群のほかは、B群である。無台坏は1074がB h - I 3類、1075がA h - III

2類でいずれも深身の傾向にある。1077は無台椀B - II2類で浅身のものである。これらの資料は須恵器が3段階、土師器がV期頃と考えられる。

SK510 (872~910)

食膳具は須恵器坏蓋・有台坏・無台坏、土師器無台椀がある。須恵器はすべて胎土B群である。坏蓋(873・874)はやや偏平のA - II類でカエリが内側を向き丸味を帯びている。有台坏(875・877)はCh - I類、底径指数は50台で体部は外側へ開く。無台坏は多数の個体が出土している。口径はI類・II類があり、径高指数は25前後の2類が多数を占めるが、30以上で深身の3類(883・884)、23未満の1類(896)もある。底径指数では65~70が多く、次いで60~65(883・884・887・898)があり、55以下のもの(890・891)も存在する。以上のことから、近隣のSX511と同様に須恵器無台坏は3段階のものを含むが、底径指数が55以下と明らかに新しい要素のものも含まれている。また、坏蓋や有台坏の形態も相対的に新相を示している。このことから878~880・883~887などは3段階を中心とする時期、873・893・896は4段階頃、874・877・890・891・898は6段階と考えられる。土師器無台椀は902がB - II2類でやや浅身のもの、904がA - III3類で深身である。いずれもV期頃のものと考えられる。

SD982 (39~52)

食膳具は須恵器坏蓋・無台坏、土師器無台坏・無台椀がある。須恵器の食膳具はすべて胎土B群で、横瓶(47)がA群・括れ鉢(52)がC群である。坏蓋は39がB - II類、40がA - II類で口径14~15cm台のものである。無台坏はAh - I類・II類がある。径高指数は23未満の46が1類のほかは、2類である。底径指数は、65~70にあるものが多いが、60以下のもの(46)がみられる。須恵器食膳具は偏平な坏蓋があることや薄手で体部が開く無台坏があることから、3段階とした資料よりも新相と考えられ4段階ととらえておく。また、土師器無台椀(50)はBi - II2類で、底部はやや大きいものの、前段階の無台椀SD566 - 1077よりも身が深くなっており、4段階以降の新しい要素を持つ。

SE3 (645~654)

食膳具は須恵器坏蓋・無台坏、土師器無台椀、黒色土器無台椀がある。須恵器は胎土B群である。無台坏はAh - I2類・II3類がある。身が深く作りが薄手で、体部の外傾度が大きめであることから4段階(新)と考えられる。また、645の坏蓋はカエリが明瞭にあることから4段階(古)に近い。653は土師器無台椀A - II2類で、底径指数30と底部が小さく、7段階以降と考えられる。654は口径21cmの大ぶりの黒色土器無台椀で、下ノ西遺跡SE669の資料に形態が類似することからVI1期頃のものであろう。

SD279 (734~751)

食膳具は須恵器坏蓋・有台坏・無台坏、土師器無台椀・黒色土器無台椀がある。須恵器は736が胎土C群のほかはB群である。坏蓋はA - II類、B - I類がある。有台坏はB - I類かと考えられる。無台坏はAh - I類(739・740・742)・Ah - II類(741)・Bh - I類(743)があり740は身の深いものである。740・741・742は底径指数68~75と立ち上がりが急であるが、やや薄手の作りで法量が小さいことから4段階頃と考えられる。土師器無台椀(748)はA - III1類で法量が大きく身が浅いもので、黒色土器無台椀(749)とともにV期頃に位置付けられる。

SK429 (687~689)

須恵器坏蓋・有台坏・無台坏がある。須恵器はすべて胎土B群である。687はカエリが丸く潰れ気味の坏蓋A II類、688は薄手で体部が開き、底部側縁が丸味を帯びた有台坏Ch類である。689は無台坏Bh - III1類である。身は浅く、薄手の作りで体部が湾曲して開くものである。4段階としたSD982出土土器

よりも、新相の要素を持つことから、5段階と考えられる。

SD525北 (1064~1066)

土師器無台椀が3点ある。1064・1065はA - II2類で底径指数50前後、SD982の無台椀(50)とほぼ同形である。1066はA - II3類で径高指数35の深身、底径指数は47で底部がやや小さく新しい要素をもつ。1064・1065は、日水遺跡SI386出土資料〔今井ほか2007〕に類似することから、本資料はVI1期頃に相当すると考えられる。なお本遺構はSB9に伴う溝の可能性が高く、5~6段階に機能したと考えられ、SB9の存続期間の上限を示すものの一つとなろう。

SX521 (939~942)

須恵器有台坏・無台坏があり、いずれも胎土B群である。939は有台坏B h - I類で体部が直線的に外へ開く。940は無台坏B h - II2類、942はB h - II1類、底径指数は60前後で体部は湾曲して開く。全体的に薄手となり底部が7.6cmと小型である。941は6段階以降と考えられるが、その他は5段階と考えられる。

SK342 (684~686)

須恵器有台坏・無台坏、土師器無台椀があり、須恵器は胎土B群である。684は有台坏C h類、薄手で体部が大きく開く。底径指数は55と低い。685は無台坏A h - II2類、底径指数は58と体部が丸味をもって開く。以上の特徴はフスベ1号窯の資料に類似し6段階(古)と考えられる。686は土師器無台椀B - III2類で、底径5.2cm、底径指数40とSD525北の無台椀に比べ底部が小型なことからVI2期頃であろう。

SK1064 (27~30)

須恵器坏蓋・無台坏があり、胎土B群である。27は坏蓋A - II類で、環状を呈する大きな紐が付き、カエリは丸く潰れる。無台坏(28~30)はいずれもB h - II2類、底径指数は60前後で体部は丸い。江ノ下窯出土資料に類似することから6段階(新)と考えられる。

SB25 - SD1078 (267~288)

食膳具は須恵器無台坏、土師器無台椀、黒色土器無台椀・有台皿がある。無台坏の口径はI類・II類が主体でIII類は1点である。器壁は非常に薄く底部側縁が丸いものが多い。また、細別n類(269・276・277)やx類(267・273)となるものが定量認められる。269は底径指数が55未満で外傾度が大きく、非常に薄手であることから7段階頃のものと考えられるが、多くは江ノ下窯出土資料に類似し、6段階(新)のものである。糸切の無台坏(275)は墨書がみられ「七」である可能性が高いことから、Bi類は本段階を中心に存在した可能性が高い。280の土師器無台椀、284の黒色土器有台皿はVI2・3期以降のものであろうか。このほか、煮炊具では口縁端部に面を取り上下に拡張した鍋B - II類(288)などがありほぼ同時期のものと考えられる。

SK380 (676~683)

食膳具は須恵器有台坏・無台坏、土師器無台椀がある。676は有台坏C h類で、器壁が非常に薄く底部側縁は丸みを帯びる。高台は丸く低い。無台坏の口径は678がI類のほかはII類である。678は細別n類、679・680は細別x類である。底部が丸みを帯び、口縁端部付近の加圧が比較的明瞭に認められる。676はフスベ1号窯に近いが、無台坏は江ノ下窯に類似することから概ね6段階(新)のものと考えられる。土師器無台椀(682)はBi - II2類、底径指数47を示し、VI2・3期に相当する。

SD274 (720~733)

食膳具は須恵器有台坏・無台坏、土師器無台椀がある。724は有台坏B h - I類で底部側縁が丸く湾曲して開くものである。無台坏はA h - II3類の深身のもの(720)とB h - II1類の浅身のもの(721)がある。

722は細別n類、723は糸切りである。土師器無台椀にはBi-I3類(727)・II類(728)・III1類(729)があるほか、黒色土器無台椀とみられる口縁部もある。いずれも下ノ西遺跡SX852出土資料(VI2・3期)に類似し、須恵器食膳具は江ノ下窯とも類似することから6段階(新)のものと考えられる。

河川SD976

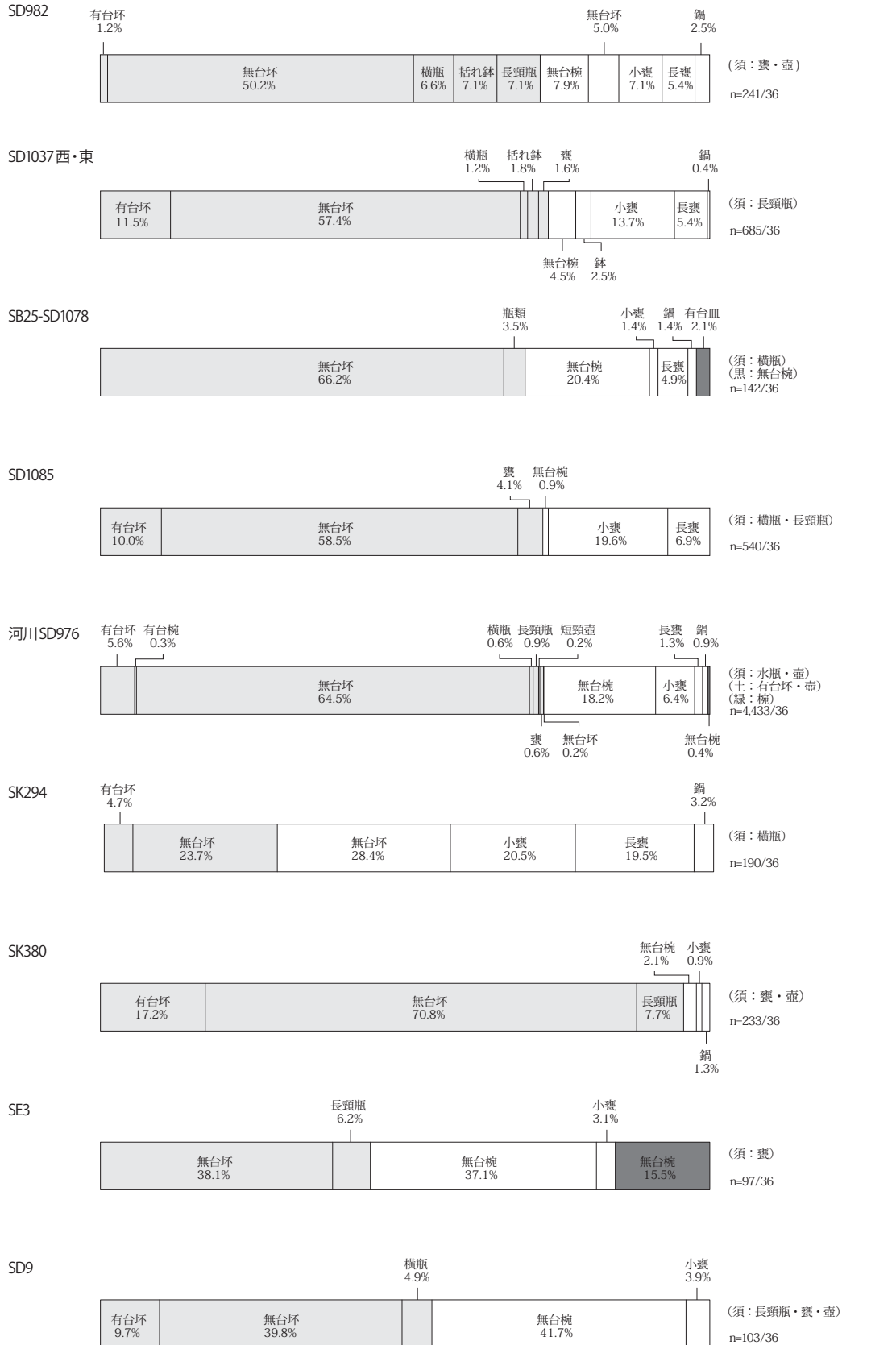
上面の8N16グリッド付近から集中的に出土した土師器無台椀の中には、Ai-II2類(428・430)がある。付近から出土した429・432・447もほぼ同様の法量・器形である。これらの土器は、下ノ西遺跡SE956・SX998・SE1009出土資料に類似することから、下ノ西編年10期相当のVII1期と考えられる。

(4) 編年の対応関係

上記の検討から本書設定の2段階(下口沢窯)・3段階(カメ畑2・3号窯)とした須恵器食膳具にはV期の土師器が伴い、6段階(古相:フスベ1号窯・新相:江ノ下窯)ではVI2・3期の土師器が伴うことは比較的容易に把握できる。一方、新たに設定された4段階は、SD279でV期頃の土師器・黒色土器の無台椀と須恵器胎土C群の坏蓋が伴い、SE3ではVI1期相当の黒色土器無台椀がある。5段階とした資料では土師器の共伴は見出せないが、SD525北の土師器無台椀がVI1期に相当し、日水遺跡SI385・386ではカメ畑1号窯と同器形の須恵器食膳具が共伴する。このことから4段階は、V期の新相となるV2期頃からVI1期頃の間で新旧に分けられ、続く5段階はVI1期のなかでも新しい時期に相当すると考えられる(注6)。これをまとめると第27表のようになろう。しかし、筆者の力量不足もあり不明な部分も残る。4・5段階比定資料の抽出・対比や胎土A群土器との対応関係が今後の課題である。なお各段階の暦年代は、VI1期が貞観五年(863)を中心とした時期に比定されることから[田中ほか1994・春日2005]、5段階が9世紀第3四半期頃、6段階が9世紀第4四半期~末頃、7段階が10世紀初頭頃と考えられる。

田中2003a	春日2005資料(下ノ西)		主要遺構出土資料(浦反甫東)	本 書	小泊窯跡資料[笹澤2011]	
6期	IV3	SK504 SB71周辺		(1段階)	K402 窯表採資料	
7期	V1	SE201		2段階	下口沢窯表採資料	
+	V2		P205・SK1083・SX511 SX833・SD566・SK294 SK217	SD1037 SD1085	3段階	カメ畑2・3号窯体内
			SD279		4段階(古)	下口沢1号窯体内
8期	VI1	SE203 SE669	SE3	SD982	4段階(新)	K344窯表採資料 カメ畑4号関連(1T-0)
			SK429・SX521 SD525北		5段階	カメ畑1号窯体内 南のそで窯
9期	VI2・3	SX852	SK342・SD317		6段階(古)	フスベ1号窯体内
			SB25・SD1078 SK380・SD274	SX1240	6段階(新)	江ノ下窯表採資料
10期	VII1	SE202	河川SD976(806周辺)		7段階	(高野遺跡[坂井ほか1991])

第27表 編年対照表

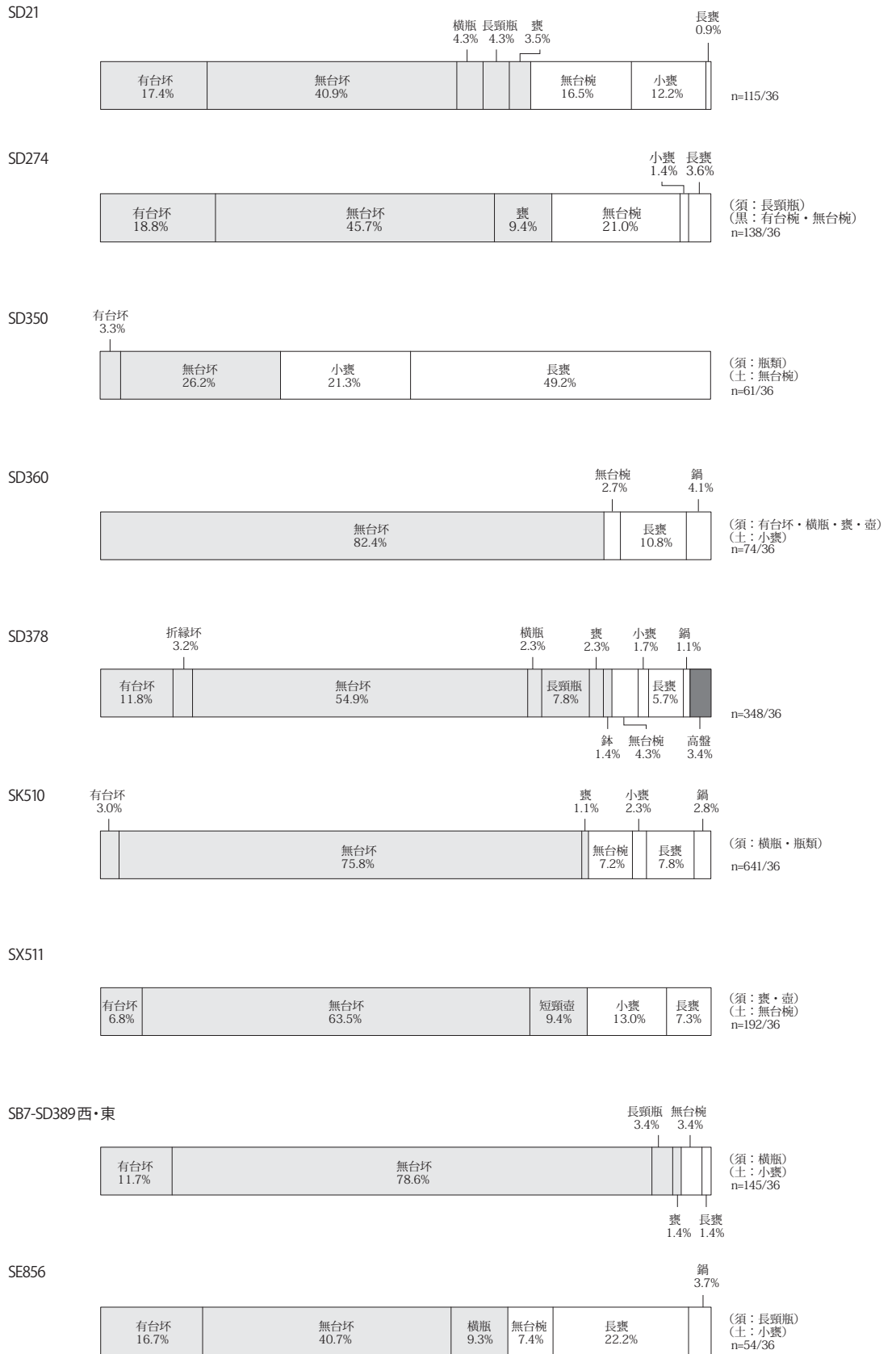


(注)
・グラフは付表 11 の計測値から作成した。
・口縁部以外の破片がある場合は () で示した。

須恵器 土師器 黒色土器

第 50 図 器種構成比率 (1)

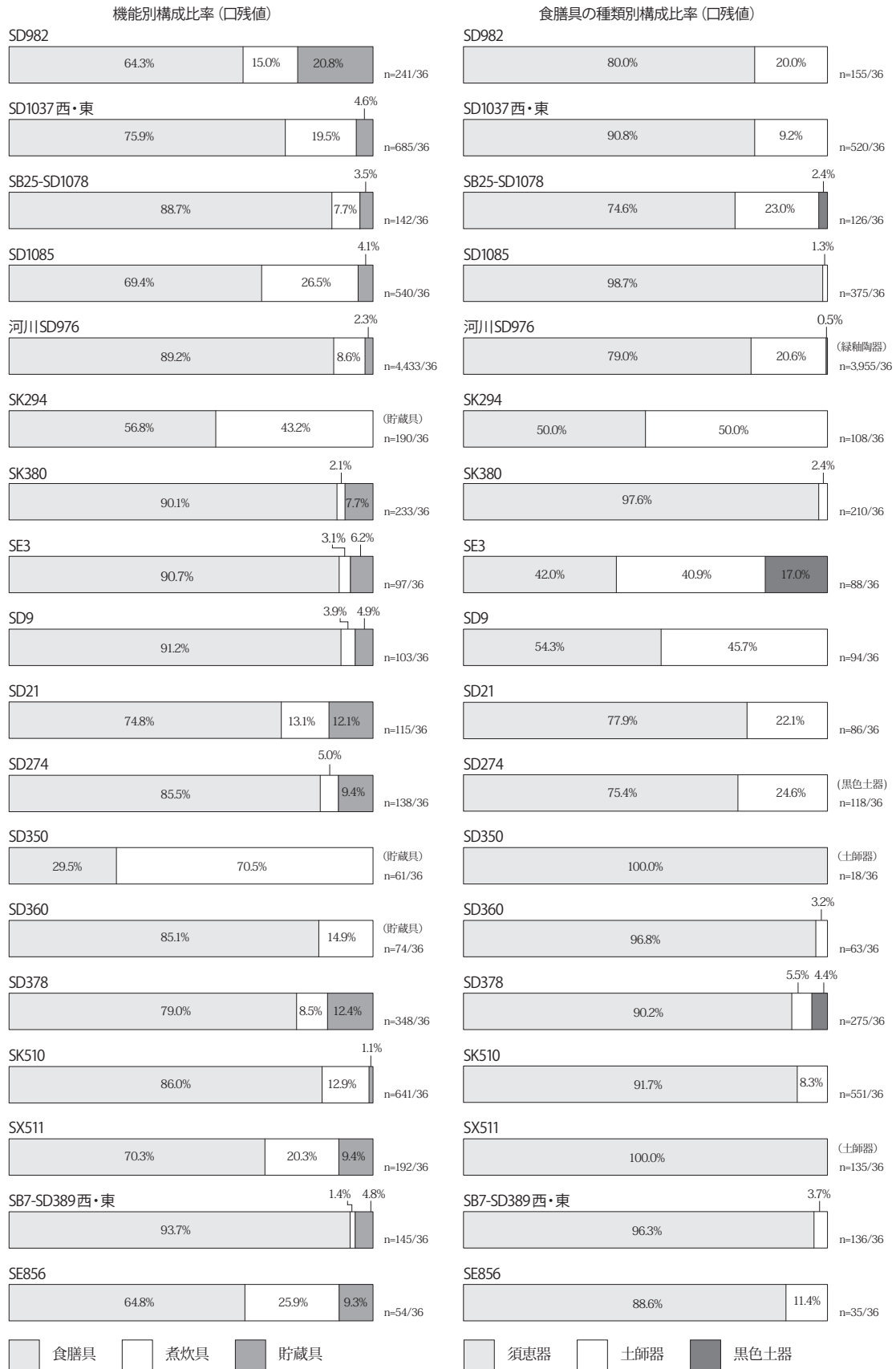
第1節 平安時代



(注)
 ・グラフは付表11の計測値から作成した。
 ・口縁部以外の破片がある場合は()で示した。

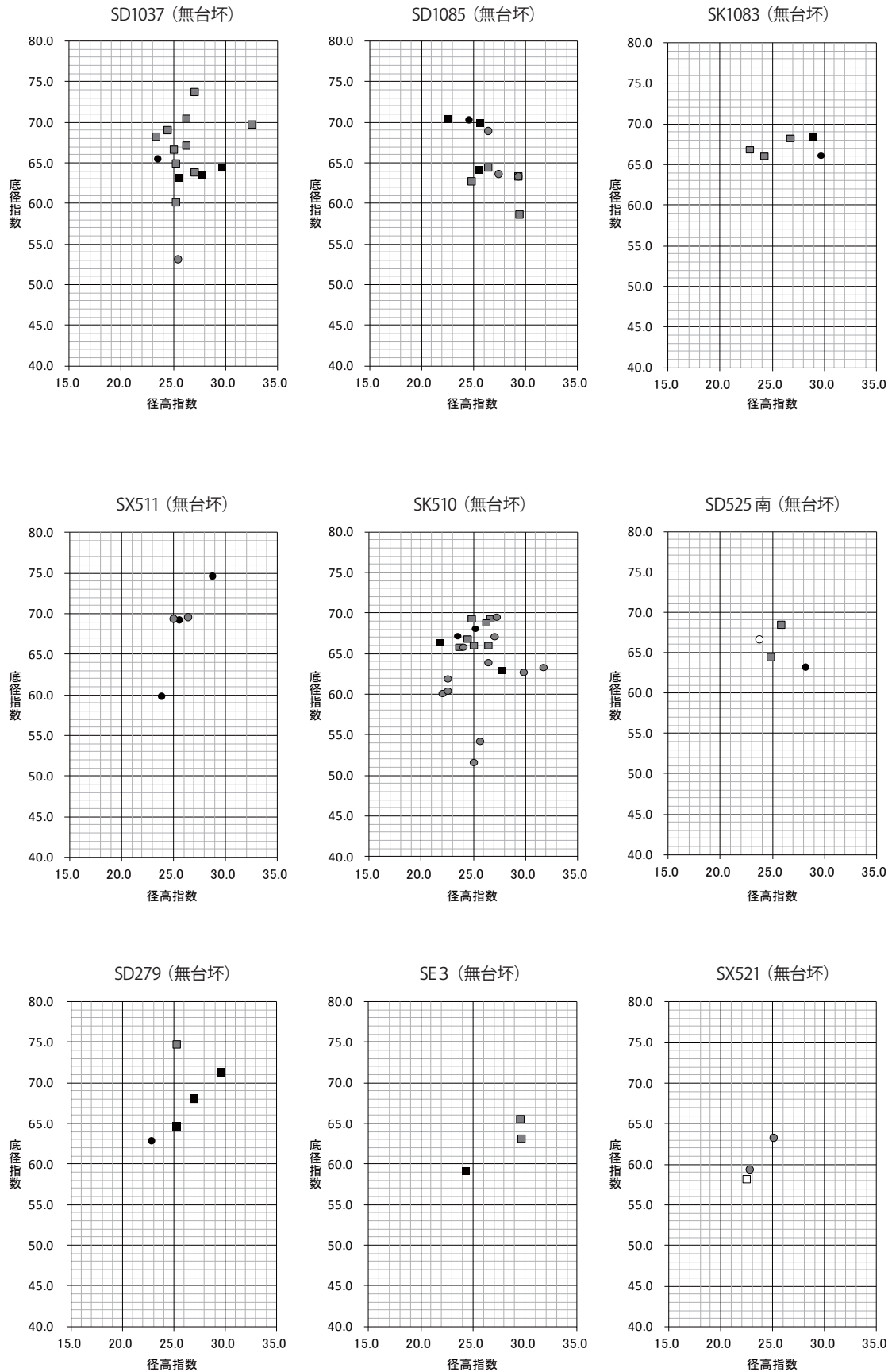
須恵器 土師器 黒色土器

第51図 器種構成比率(2)



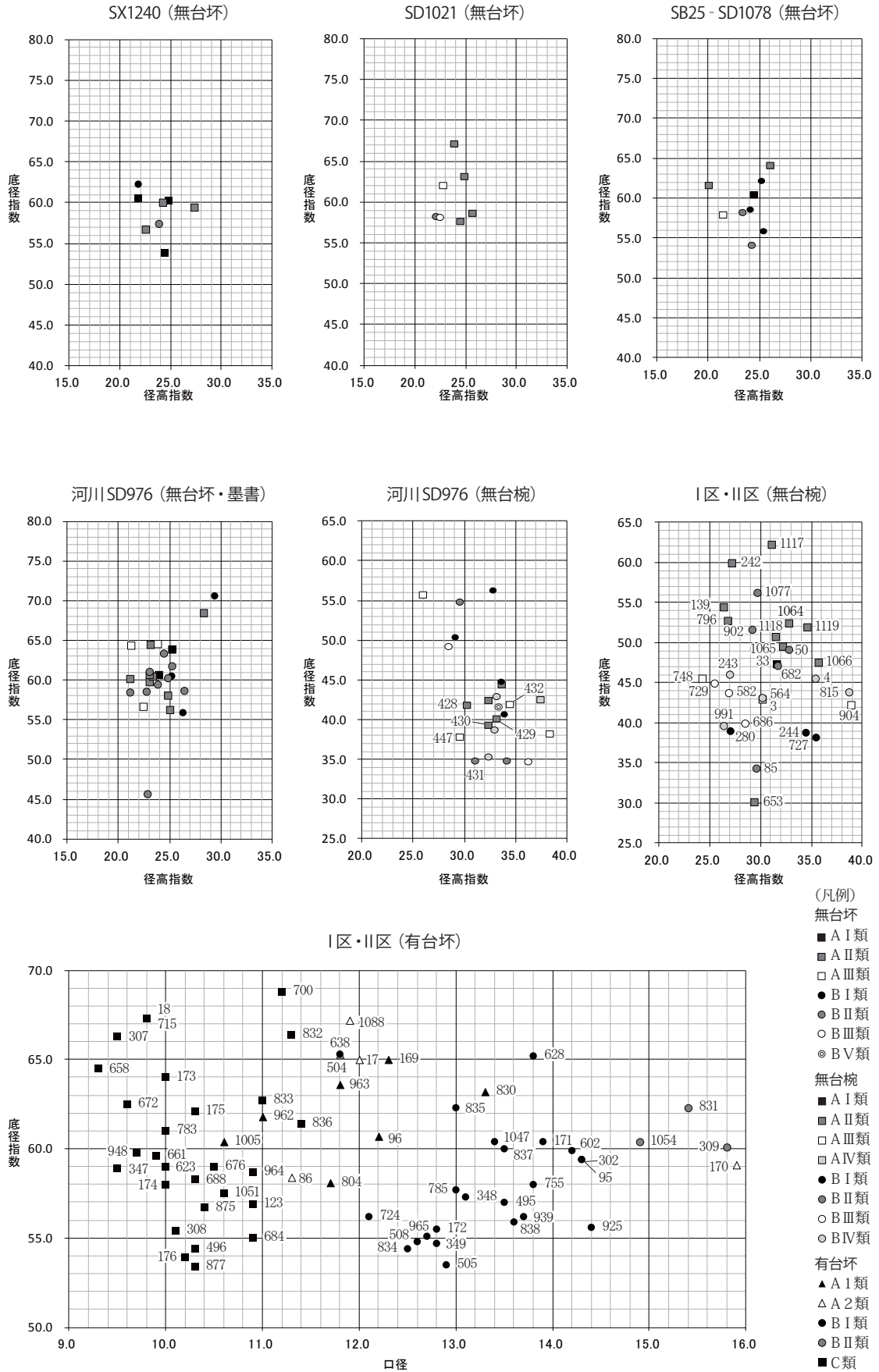
(注)
 ・グラフは付表 11 の計測値から作成した。
 ・口縁部以外の破片がある場合は () で示した。

第 52 図 機能別・食膳具の種類別構成比率



(凡例は第54図を参照)

第53図 食膳具の指数分布(1)



第 54 図 食膳具の指数分布 (2)

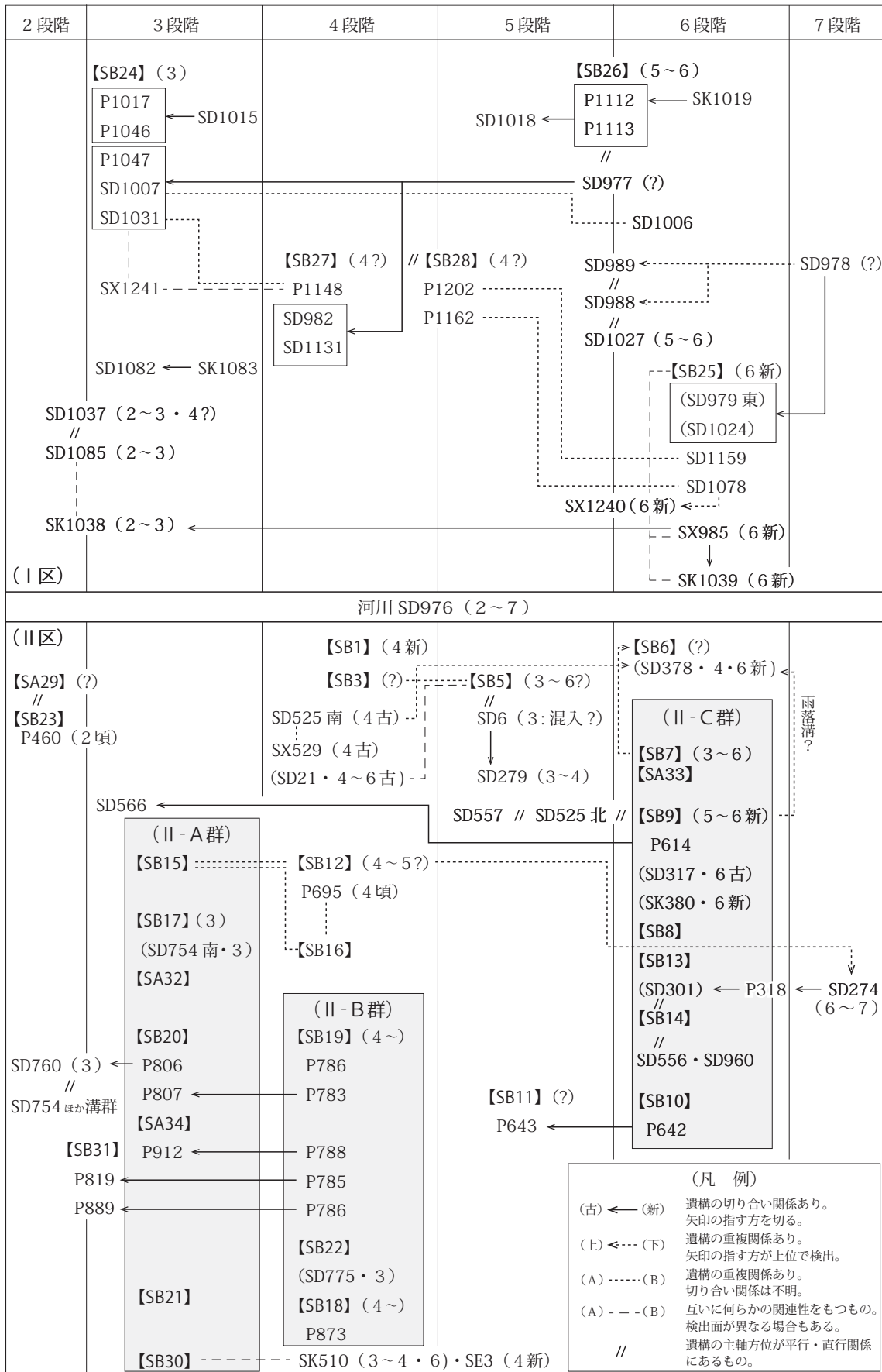
2 建物群について

(1) 建物の編年的位置

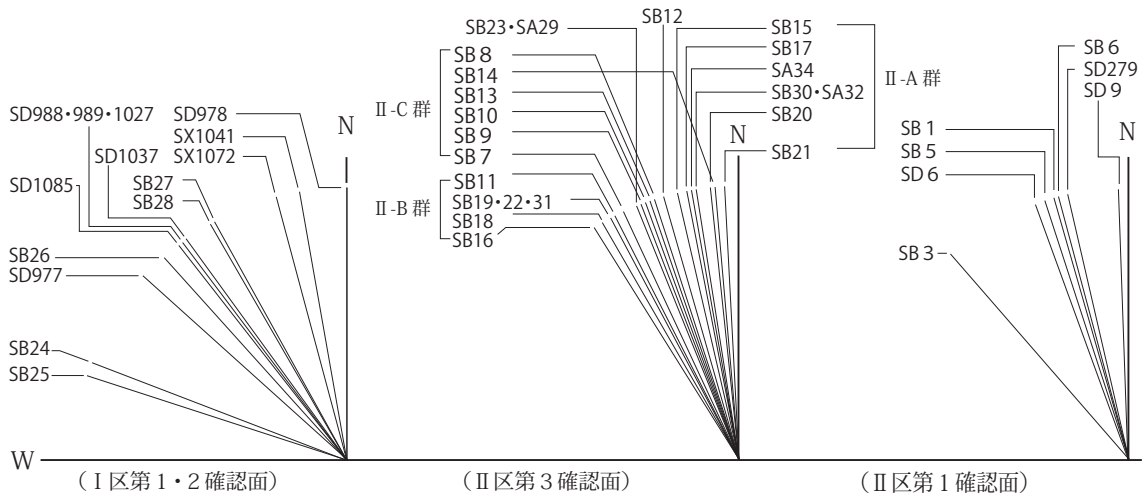
建物の変遷をとらえるため、遺構の切り合い関係と出土遺物の所属時期に着目した相関図を第55図に示した。I区で検出された建物は5棟である。SB24は柱穴から3・6段階の遺物が出土し、3段階頃の遺物を含むSD1015が切っていることから、本建物は3段階頃に機能したと考えられる。SB27は検出面が異なるがSD982を伴う可能性が高く4段階の遺物を含むことから、本建物も4段階に機能したと考えられる。北東-南西方向へ直線的に伸びるSD977はSB24・27を切っており、これより新しい溝である。この溝に平行する建物がSB26である。SB26は5段階のSD1018を切り、6段階のSK1019に切られることから5～6段階の間に機能したことになる。SB25は周溝SD1078から6段階（新）を中心とした遺物が出土しており、存続期間は当該期を中心とした時期である。

SB28は直接時期が判明する遺物は出土していないがSB27と同じ方位であることから、同時併存した可能性も考えられる。また、SB24に先行する遺構として大型の溝2基（SD1037・SD1085）が隣接し、2～3段階（一部4段階）に位置付けられる。検出面が異なるが、両遺構から同一個体の遺物が出土しており同時併存した可能性が高い。また、両者を一体として考えた場合、コの字形の配置となることから建物に伴う周溝の可能性もある。以上のことから、I区では3～6段階の建物が存在し、2段階に遡る可能性をもつものもある。各時期の建物は1棟で構成されたものがほとんどである。

II区で検出された建物は23棟、柵列は4基である。第1確認面では西側にSB3・5、東側にSB1・6が存在する。西側の遺構は2～4段階に属し、3段階のものが多い。SB5は3段階頃の遺物を含む区画溝SD6と同方位で、柱穴からも3段階頃の遺物が出土したことからこれが上限となる。西側には4・6段階の遺物を含むSD21が隣接し、これに伴うものとするれば下限は6段階頃となる。SD6は後述するII区建物群A・Bの上部を縦断して検出されていることから、これら建物群よりも新しい。東側の遺構は2～6段階に属し、6段階のものが多い。SB1は周溝の遺物から4段階に属すると考えられる。周辺で明確な関連性をもつ遺構は見当たらないが、SB12やSD279とほぼ同方位・同時期にあたる。SB6の時期は不明な点があるがSB7の上位にあり、SD378が5～6段階のSD360を切ることから6段階以降の可能性もある。第3確認面で検出されたII区の建物は、分布状況からSB12周辺を境に東西の建物群に分けることができる。西側ではSB21からSB12までの12棟が分布し、建物の主軸方位でさらに2つに分けることができる。一つは主軸方位N-3～13°-Wの範囲にあるものでSB21・SB20・SA34・SB30・SB17・SA32・SB15で構成され、建物II-A群とする。SB17は平行する溝SD754南の遺物から3段階と考えられる。SB30は、柱穴から4段階（新）の遺物が、また隣接するSK510（第2確認面検出）から3段階を中心に4・6段階の遺物も出土した。SD754・SK510ともに3段階の遺物が多く、これ以外の遺物を建物廃絶後のものと考えれば本建物群は3段階頃に属すると考えられる。もう一つは主軸方位がN-27～32°-Wの範囲にあるもので、SB18・SB19・SB22・SB31・SB16で構成され、II-B群とする。東側のSB11も同方位であることから、これに含めることができる。所属時期はSB19がSB20とSA34を切ることや、SB18・19柱穴出土土器からその上限は4段階前後と考えられる。また、SB19とSB22・31の間隔が非常に狭いことやSB19の柱穴がSB31の柱穴を切ることから、建物II-B群で新旧を分けることも可能である。SB23・SA29は、建物II-A・B群と異なる方位をとるものでSB9などと同方位である。SB23の柱穴からは2段階頃の遺物が出土し、存続期間もその頃と考えられる。SB12は柱穴から4段階頃の遺物が出土した以外に、関連する遺構や遺物は見出せなかった。建物の方位は東西建物群の中間的な様相を示している。



第 55 図 遺構の編年的位置及び相関図



第56図 遺構の主軸方位

東側ではSB11を除くSB7からSB14までの6棟が分布し、これを建物II-C群とする。このうち切り合い関係が判明しているのはSB10・SB11で、SB10の方が新しい。SB11の時期は不明であるが西側の建物群SB18・19・22等と同方位にある。SB10の存続時期は区画溝SD556の出土遺物から6段階（新）である。SB10と区画溝を共有するSB9は、小型のSB8・13・14を伴う桁行5間の片面廂付建物である。本建物は5段階頃の溝であるSD525北を伴い、柱穴に6段階（新）以降の遺物が出土したことから、5～6段階に機能し7段階には廃絶したと考えられる。SB7も同様に桁行5間の大型建物で、柵列SA33を伴う。周溝SD389からは3～6段階の時期幅をもつ遺物が出土しており、SB9よりも先行するものがある。建物の方位がSB9と比べ4°西へ傾くことと妻側の柱筋が揃わないことから、SB7は構築時期が異なる可能性がある。

また、先述したSB5に隣接するSD6は建物II-A・B群の上部にあり、その区画を無視した配置をとる。SD6出土遺物を周辺からの混入と考えた場合、3～4段階頃のSD279を切り、SD21の下限が6段階頃であることから新しい遺構と考えられ、建物II-C群に伴う区画溝の可能性はある。

(2) 建物の形態と規模

本遺跡で検出された建物は宮本長二郎氏の分類〔宮本2002〕でいう梁間1間型建物・梁間2間（律令）型建物・総柱型建物がある。この分類をもとに平面積・桁行の間数でさらに以下のとおり細分できる。

梁間1間型建物 梁方向に棟持柱を持たないもの。

A-1類 平面積10㎡台のもの。SB23がある。

A-2類 平面積30㎡台のもの。SB30がある。

梁間2間（律令）型建物

B-1類 桁行2間・平面積10㎡前後で、桁・梁の柱間寸法がほぼ同じで平面形が正方形を呈する1a類と、平面積20㎡前後の1b類がある。1a類にはSB8・15・16が、1b類にはSB13・14・31がある。SB1は1a類又はC類の可能性があり、SB24は2×3間、平面正方形を呈するもので桁・梁の判別が困難であるが周溝の開口方向を梁とすれば1b類となろう。

B-2類 桁行3間・平面積20㎡前後となるものの2a類と平面積40㎡台の2b類がある。2a類ではSB3・5・6・20があり、2b類ではSB22がある。

B-3類 桁行4間・平面積20㎡台の3a類と平面積40㎡前後（身舎部分）の3b類がある。3a類には

SB11、3b類にはSB21・SB26がある。SB11・SB21は床束をもつと考えられる。SB26は廂付建物で廂を含めると50㎡を超えるものである。

B - 4類 桁行5間・平面積70㎡（身舎部分）前後のものがある。本類にはSB7・9・12がある。SB7は柵列、SB9は廂やA類を伴う位置関係にある。SB9は廂部分を含めるとおよそ90㎡を測る。

B - 5類 桁行6間になる可能性のあるものとしてSB25を本類に分類した。ただし東側の柱穴は西側のものと異なり掘方を伴わないことから、西側4間分が身舎、東側が付属的な構造物である可能性もある。平面積は50㎡を超える。

総柱型建物

C - 1類 2×2間、平面正方形を呈するもの。平面積20㎡前後の1a類、30㎡前後の1b類がある。1a類にはSB17、1b類にはSB19がある。

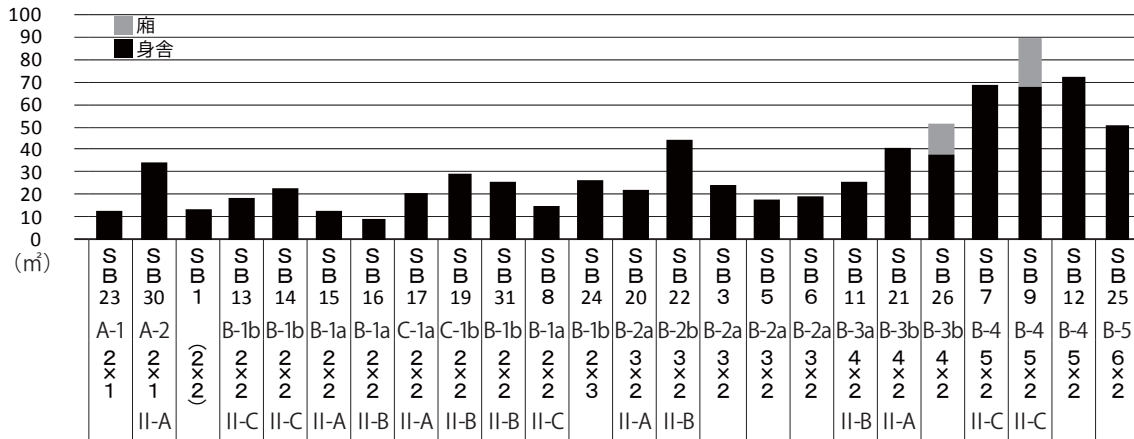
C - 2類 桁行または梁行が2間以上となるもの。建物全体を検出できたものはないがSB27は現存値で22㎡以上を測る。

建物の付属的な遺構としてはB類に柵列や周溝（区画溝・雨落溝）を伴い、身舎の平面積40㎡前後のものから廂を伴うものが確認できる。また、Ⅱ区SB9・12・22の南側妻は、いずれも棟持柱が2本または3本確認される。類例として県内事例は管見に触れなかったが、群馬県三ツ木遺跡SB4に認められる〔群馬県教育委員会1977〕。これらの棟持柱は梁方向の中心から等間隔に配置され、何らかの構造的要因によってこのような形態をとっていると考えられる。建物の南側には旧河川が流れていた可能性が高く、河川に直交する方向に主軸をとることから、妻入りとして河川からの出入口を想定するのが妥当であろう。また、古墳時代の河川SD466の上に構築されることから軟弱地盤に対する補強対策である可能性もあるが、柱穴配置の規格性を考慮して前者を積極的に考えておく。

前項の建物の編年的位置からみるとB - 4類は4～6段階、B - 5類は6段階（新）に出現する。B - 4類のSB9はB - 1類を伴う中心的な建物である。また、SB18・19はともにC類でB - 2類のSB22等と同じ主軸方位を示し、その配置に規格性がみられる。次に建物の規模について比較してみたい。本遺跡における中心的な建物はおよそ30～40㎡（SB21・22・26・30）、50㎡（SB25）、70㎡（SB7・9・12）の数値を示す。山中敏史氏の統計〔山中2003〕では一般集落では10～40㎡を示すものが多く、本遺跡における70㎡前後の建物は別格であり、豪族居宅の示すピークの値に近い。また、倉庫と考えられる総柱建物のC - 1類は20～30㎡を示すが、地方官衙、豪族居宅または一般的集落のピークと比較してもほぼ同規模の値を示す。

(3) 柱根について

柱根は本遺跡で38点が出土し、建物B - 1類（SB13・14・15）、B - 2類（SB22）、B - 3類（SB21・26）、B - 4類（SB7・9・12）、B - 5類（SB25）、C - 1類（SB17）、C - 2類（SB18・27）で確認された。樹種は対象試料のうち殆どがクリであるが、ケヤキが1点確認された。木取りは丸木・ミカン割り・削り出しがあり、底面の形態も平坦なもの・斜めに加工されたものなどがある。同一建物の中でも使用する柱の樹種・木取り・加工方法は様々である。柱の太さ（幅・厚さ）は、B - 1～3類では10～27cmほどのものがあるが、同一分類の中でも平面積が大きいb類の方が相対的に太いものを使用している。また、B - 4類のSB7・12では太さ25cm前後、SB9では30cmを超えるものも存在し、B - 1～3類との間に格差が認められる。なお、B - 1b類としたSB13の側柱は太さ20～27cmでよく揃っており、B - 4のものと同色ない



第 57 図 掘立柱建物の平面積

太さである。また、I 区の SB25は太さ10cm未満の細いものを使用しており、例外的なものも存在する。

柱根は樹種同定とともに放射性炭素年代測定も行った。測定した柱根は SB7・9・10・12・13・22・26である。測定結果は SB7 - P573・SB13 - P673・P675で7世紀後半～8世紀後半までを示したが、このほかは概ね9世紀代を含む年代を示し、出土土器の編年観と整合する。同一の建物内で異なる樹種や形態の柱を使用することも考えると、年代が異なるのは柱の再利用が行われたことに起因するものであろうか。

なお、柱根の底面付近には、明瞭に加工痕（刃痕）を残すものが多い。古代・中世における製材方法は基本的に鑿とクサビを用いた打割製材であったことが指摘されており、鋸は小型で柱などの大材の切断には適していなかった。このことから柱の伐木・切断も斧を使用したものであり、切断後の加工・調整は手斧や鑿で行われた [渡邊 1999・2002、植村 2009・2013]。今後はこうした加工痕から、使用された木工具の形状復元等の研究が進展することを期待したい。

3 生産・生業関連遺物について

(1) 鍛冶関連遺物・砥石について (第28～30表)

本遺跡ではⅡ区で金床石を伴う鍛冶炉 SX1214が検出され、周辺で鍛冶が行われたことが判明した。また、椀形鍛冶滓・羽口など鍛冶関連遺物は多量に出土した土器と同様、建物周辺を中心に出土しており、建物周辺で行われた活動痕跡の一端と見ることができる。製鉄・鍛冶関連遺物の科学的分析によると、本遺跡の鍛冶原料は周辺地域の砂鉄製錬により生成された鉄塊であった可能性が高く、遺跡内では精錬鍛冶から鍛錬鍛冶作業が連続して行われたことが判明した。I 区 SD1085・SD1037・SK1083はほぼ同時期の遺構で近接し、出土土器に同一個体がみられることから密接な関連を示す遺構である。これらの遺構から、棒状製品 (1511等)・皆折釘 (1508)・刀子の未製品状金属製品 (1510)、炉内滓 (1526)・炉壁 (1532)・砥石 (1431・1432) が出土している。また、Ⅱ区では SX1214周辺で鍛冶関連遺物や砥石が出土しており、上記の結果を裏付けるものとなる。

砥石は図示したもので手持ち砥石が45点、置き砥石が29点、掘り砥石が1点である。一方、連続する小溝群が調査区全体で見られる状況から、遺跡内での耕作が経常的に行われたことがうかがわれる。また、遺跡内を貫く直線的な溝 (SD6・9・977・978等) の掘削や建物の構築には多くの労働力と土木関連工具が必要であったと考えられる。本遺跡における砥石の出土量は、一連の鍛冶作業のほかに遺跡内の諸施設の構築・維持、農耕などに使用された金属製農工具が存在したことを示すものであろう。

項目	主要素	新潟県長岡市浦反甫東遺跡（うらたんぼひがしいせき）				
調査	調査概要	調査年：2011（平成23）年～2013（平成25）年 / 調査組織：長岡市教育委員会・（株）大石組 調査原因：二級河川郷本川河川改修事業 / 整理：長岡市教育委員会・（株）大石組				
		・浦反甫東遺跡は二級河川郷本川河川改修事業に伴い発掘調査が行われた。現地調査は平成23～25年度、整理作業は平成25～27年度に実施された。 ・鍛冶関連遺物は、I区・II区の包含層・遺構からコンテナ25箱ほど出土した。砥石は180点と多く特徴的である。				
文献	文献資料	長岡市教育委員会 2010 『平成21年度 長岡市内遺跡発掘調査報告書』 長岡市教育委員会 2011 『平成22年度 長岡市内遺跡発掘調査報告書』 長岡市教育委員会 2013 『平成24年度 長岡市内遺跡発掘調査報告書』 丸山一昭 2013 「長岡市 浦反甫東遺跡の調査」『新潟県考古学会 第25回大会 研究発表会発表要旨』				
遺構情報	主要鉄関連遺構	(1) 掘立柱建物 (2) 鍛冶炉 (3) 土坑 (4) 溝 (5) その他				
	主要鉄関連遺構・遺物の情報	I区 SK1083	立地・規模	標高13.5mの微高地に立地 土坑/長軸2.75m×短軸1.65m×深さ0.22mの平面不整な隅丸長方形	鉄関連遺物	132.0g
		I区 SD976	立地・規模	標高13.7～13.9mの微高地に立地 旧河道/全長72m以上×幅30.1m×深さ1.86m以上	鉄関連遺物	12,350.1g
		I区 SD1037	立地・規模	標高13.8mの微高地に立地 溝/全長11.6m×幅3.4m×深さ0.27～0.53mでSD1085とほぼ平行する	鉄関連遺物	605.0g
		I区 SD1085	立地・規模	標高13.5～13.7mの微高地に立地 溝/全長12.5m×幅0.5～2.35m×深さ0.1～0.54mでSD1083とほぼ平行する	鉄関連遺物	928.0g
		II区 SB3	立地・規模	標高13.8～13.9mの微高地に立地、SB5と重複する 掘立柱建物/桁行6.28m×梁間4.02m、面積は24.48㎡	鉄関連遺物	106.6g
			構成遺構	P176～P276まで主柱穴9基、2×3間（遺物出土ピットはP223）		
		II区 SB5	立地・規模	標高13.8～13.9mの微高地に立地、SB3と重複する 掘立柱建物/桁行5.47m×梁間3.27m、面積は17.89㎡	鉄関連遺物	0.0g
			構成遺構	P180～P277まで主柱穴8基、2×3間		
		II区 SB6	立地・規模	標高13.7～13.8mの微高地に立地 掘立柱建物/桁行5.46m×梁間3.7m、面積は18.91㎡	鉄関連遺物	963.3g
			構成遺構	P361～P370まで主柱穴10基で2×3間（遺物出土ピットはP363） 周溝SD378が周囲を巡る		
		II区 鍛冶遺構 SX1214	立地・規模	標高13.8mの微高地に立地 鍛冶炉/長軸0.26m×短軸0.21m×深さ0.04mで、炉の1.01m南西から金床石（構成No.25）出土	鉄関連遺物	5,800.0g
		II区 SD279	立地・規模	標高13.8～13.9mの微高地に立地 溝/全長15.46m以上×幅0.45～1.4m×深さ0.2～0.35m	鉄関連遺物	1,482.5g
遺物情報（遺構出土）	鍛冶関連遺物全体構成	総重量52,497.8g、炉壁（製錬炉）849.7g、炉壁（鍛冶炉）98.0g、炉壁（不明）13.8g、羽口（鍛冶）97.3g、椀形鍛冶滓（中～極小）1309.9g、鍛冶滓14.6g、ガラス質滓（鍛冶）2.4g、炉内滓295.2g、鉄製品（鍛造品）241.5g、鉄製品（鋳造品）13.8g、鉄製品（不明品）39.8g、銅製品（鍛造品）4.5g、銅製品（鋳造品）8.9g、粘土質溶解物（鍛冶）48.4g、土器（被熱・発泡）3.9g、金床石10,289.1g、砥石38,761.4g、軽石32.9g、石（被熱・ガラス質滓付き）43.5g、石（被熱・発泡）0.5g、火打石17.9g、木炭310.8g				
	主要鍛冶関連遺物（包含層・遺構別）	SK1083：総重量132.0g、鉄製品（鍛造品・皆折釘）18.7g、砥石112.0g、木炭1.3g				
		SD976：総重量12,350.1g、炉壁（製錬炉）25.1g、炉壁（鍛冶炉）21.5g、羽口（鍛冶・粘土質溶解物付き・先端部・滓付き）41.4g、椀形鍛冶滓（極小）28.1g、鉄製品（鍛造品）96.0g、銅製品（鍛造品）4.5g、銅製品（鋳造品）8.9g、粘土質溶解物（鍛冶）27.3g、土器（被熱・発泡）3.9g、金床石4121.0g、砥石7818.8g、軽石1.1g、石（被熱・発泡）0.5g、木炭152.0g				
		SD1037：総重量605.0g、炉内滓203.2g、砥石400.1g、木炭1.7g				
		SD1085：総重量928.0g、炉壁（滓付き・含鉄）788.3g、鉄製品（鍛造品）75.3g、砥石62.2g、木炭2.2g				
		SB3：P223からは砥石（軽石）が1点（106.6g）が出土				
		SB5：無し				
		SB6：P363からは椀形鍛冶滓（小）45.3g、周溝SD378からは総重量918.0g、砥石917.3g、木炭0.7g				
		鍛冶遺構SX1214：鍛冶炉を1基検出、金床石5,800.0g				
SD279：総重量1,482.5g、粘土質溶解物（鍛冶）4.9g、砥石1,477.6g						

（作表：穴澤義功・丸山一昭・（株）大石組文化財事業部）

第28表 浦反甫東遺跡まとめ表（1）（主要要素一覧表）

遺物情報 (遺構外出土)	主要 鍛冶関連遺物 (包含層・遺構別)	遺構外(II層):	総重量 854.7g、炉壁(製錬炉) 36.3g、羽口(鍛冶・先端部・滓付き) 11.6g、椀形鍛冶滓(極小) 57.3g、金床石? 18.3g、砥石? (被熱・吸炭) 20.8g、砥石 710.4g			
		遺構外(IV層):	総重量 8,282.2g、炉壁(鍛冶炉) 36.0g、炉壁(不明) 13.8g、羽口(鍛冶) 25.5g、椀形鍛冶滓(中~極小) 859.6g、鍛冶滓 12.9g、ガラス質滓(鍛冶) 1.7g、鉄製品(鍛造品) 43.2g、鉄製品(鑄造品・鍋口縁部?) 13.8g、鉄製品(棒状不明品) 9.6g、粘土質溶解物(鍛冶) 10.6g、金床石? 125.3g、砥石 6987.8g、軽石 4.0g、石(被熱・ガラス質滓付き) 43.5g、火打石? 14.7g、木炭 80.2g			
	主要 鍛冶関連遺物 (包含層・遺構別)	遺構外(V層):	総重量 3,292.0g、炉壁(鍛冶炉) 29.2g、羽口(鍛冶・先端部) 10.1g、椀形鍛冶滓(中~極小) 181.8g、炉内滓?(含鉄) 92.0g、鉄製品(不明品) 30.2g、金床石 1.9g、砥石 2905.1g、軽石(不明) 26.5g、木炭 15.2g			
		遺構外(VI層):	総重量 2,512.1g、炉壁(鍛冶炉?) 1.3g、羽口(鍛冶・先端部) 8.7g、椀形鍛冶滓(極小) 6.1g、ガラス質滓(鍛冶?) 0.7g、粘土質溶解物(鍛冶) 4.8g、金床石?(被熱) 10.0g、砥石 2,478.9g、木炭 1.6g			
工程差と滓類種別	遺構別工程差	<ul style="list-style-type: none"> ・ I区下層の河川 SD976 より出土した7点の木簡や墨書土器、緑釉等は9世紀後半段階の公的な施設を窺わせる内容で、I区・II区とも、VI・VII層の大型掘立柱建物群が施設の本体であろう。 ・ I区・II区とも上層を中心に高チタン砂鉄を原料に用いた製錬系の資料が散発的に出土しているが遺構は認められなかった。その一部は周辺の丘陵部からの持ち込みと流れ込みの可能性大。 ・ 構成された鍛冶関連資料と金属学的な分析結果によれば椀形鍛冶滓2点はチタンの含有率が1%を越えて高く、まだ製鉄原料由来の砂鉄起源の不純物が十分除去されていない精錬鍛冶滓的なものから、脈石成分の低減傾向が顕著な鍛錬鍛冶滓的な工程の資料迄が含まれているが、後者が主体的であったと推定される。 				
	鍛冶関連遺物 種別動向 (分析資料7点中)	I区: URA-1 炉壁(滓付き・含鉄): 砂鉄製錬系遺物 URA-2 椀形鍛冶滓(中・含鉄): 鍛錬鍛冶系遺物	II区: URA-3 炉壁(製錬炉): 製錬系遺物 URA-4 羽口(鍛冶・先端部): 鍛錬鍛冶系遺物 URA-5 椀形鍛冶滓?(中・含鉄): 製錬鉄塊系遺物 URA-6 椀形鍛冶滓(極小・含鉄): 鍛錬鍛冶系遺物 URA-7 椀形鍛冶滓(中・含鉄): 精錬鍛冶~鍛錬鍛冶系遺物	I区・II区ともに製錬系遺物は少数で、鍛錬鍛冶系遺物が大半を占める。		
鉄種別	鍛冶関連遺物 種別動向 (分析資料5点中)	URA-1の炉壁(含鉄)の鉄部は金属鉄 URA-2の椀形鍛冶滓(中・含鉄)の鉄部は微小金属鉄粒 URA-5の椀形鍛冶滓?→製錬系鉄塊系遺物の鉄部は共析組織~過共析組織の鑄鉄 URA-6の椀形鍛冶滓(極小・含鉄)の鉄部はフェライト単相(軟鉄) URA-7の椀形鍛冶滓(中・含鉄)の鉄部は亜共析組織の鋼				
	年代	●考古資料: 出土土器・木柱・須恵器付着炭化物・漆膜によれば平安時代前期の9世紀前半から中世の14世紀代が想定される ●放射線炭素年代測定(AMS): 試料No.1(SB9-P617) 1180±15BP/AD777-893、試料No.2(SB9-P632) 1190±15BP/AD778-885、試料No.3(SB13-P673) 1295±20BP/AD666-726、試料No.4(SB13-P675) 1265±20BP/AD681-778、試料No.5(SB7-P576) 1175±20BP/AD777-895、試料No.6(SB9-P716) 1210±20BP/AD771-886、試料No.7(SB7-P574) 1170±20BP/AD778-897、試料No.8(SB13-P677) 1205±20BP/AD771-889、試料No.9(SB22-P862) 1155±20BP/AD806-901、試料No.10(SB10-P647) 1145±20BP/AD856-973、試料No.11(SB7-P573) 1235±20BP/AD762-870、試料No.12(SB9-P612) 1145±20BP/AD858-972、試料No.13(SB26・8284) 1175±20BP/AD777-895、試料No.14(SB12-P688) 1165±20BP/AD774-900、試料No.15(SD976出土灯明皿付着炭化物) 1300±20BP/AD664-724、試料No.16(遺構外(V層直上)漆製品漆膜) 1205±20BP/AD772-887 分析/解析: 株式会社吉田生物研究所				
分析 点数	分析 点数	●金属学的分析: 7点 炉壁(滓付き・含鉄)・椀形鍛冶滓(中・含鉄)・炉壁(製錬炉)・羽口(鍛冶・先端部)・椀形鍛冶滓?(中・含鉄)・椀形鍛冶滓(極小・含鉄)・椀形鍛冶滓(中・含鉄) 同分析項目: 肉眼観察・マクロ組織・顕微鏡組織・ビッカース断面硬度・EPMA・化学組成 分析/解析: 日鉄住金テクノロジー(株)八幡事業所・TACセンター(大澤正己・鈴木瑞穂)				
		遺構名/工程/遺物名	鉄製錬(TiO2)	鉄精錬(TiO2)	鉄鍛錬前半(TiO2)	鉄鍛錬後半(TiO2)
分析資料 (全7点中)	()内はTiO2値 (-)は分析せず	SD1085	I区: URA-1 炉壁(滓付き・含鉄)(14.64)	—	—	—
		遺構外(II層)	II区: URA-3 炉壁(製錬炉)(-)	—	—	—
		遺構外(IV層)	II区: URA-5 椀形鍛冶滓?(中・含鉄)(Ti = 0.07)	—	I区: URA-2 椀形鍛冶滓(中・含鉄)(1.56) II区: URA-4 羽口(鍛冶・先端部)(-)	II区: URA-6 椀形鍛冶滓(極小・含鉄)(0.16)
		遺構外(V層)	—	—	II区: URA-7 椀形鍛冶滓(中・含鉄)(1.75)	—
保存 活用部分	郷本川河川改修事業のため、発掘調査後に記録保存。	遺構	遺物			
			鍛冶関連全出土遺物(A~D保存) 合計: (52,497.8) g			
			A保存: 金属学的分析資料	(7)点 / (1,292.7) g	(2.5%)	
			B保存: 報告書掲載資料(構成資料)	(35)点 / (6,988.7) g	(13.3%)	
			C保存: 屋内管理資料	(887)点 / (44,216.4) g	(84.2%)	
	D保存: 屋外一般管理資料	(0)点 / (0) g	(0%)			

(作表: 穴澤義功・丸山一昭・(株)大石組文化財事業部)

第29表 浦反浦東遺跡まとめ表(2)(主要要素一覧表)

	地域名	旧市町村名	遺跡名	検出遺構／遺物	時期	備考
新潟県下(周辺の主な遺跡)	長岡市	和島村	八幡林遺跡	製鉄炉1基 鉄滓	9世紀後半か	官衙関連遺跡
	長岡市	和島村	門新遺跡	羽口 鉄滓	10世紀前半	開発領主層の居宅
	長岡市	和島村	吉沢遺跡	掘立柱建物4棟 土坑 ビット 須恵器 土師器 円面硯 鉄滓 砥石	8世紀前半～ 9世紀後半	官衙関連遺跡 製鉄遺跡
	長岡市	和島村	立野大谷 製鉄遺跡	製鉄炉1基 木炭窯9基 焼土坑5基 排滓場1か所 土坑7基 ビット 羽口 鉄滓 須恵器 土師器	10世紀後半～ 13世紀前半	製鉄遺跡
	長岡市	和島村	姥ヶ入 製鉄遺跡	木炭窯1基 焼土坑3基 土坑4基 ビット 羽口 鉄滓 須恵器 土師器	木炭窯:11世紀 ～12世紀	製鉄遺跡
	出雲崎町		金谷川内 製鉄跡	鉄滓 須恵器 木炭片	8～9世紀	製鉄遺跡
	出雲崎町		合清水製鉄跡	製鉄炉1基 鉄滓 羽口	8～9世紀	製鉄遺跡
	出雲崎町		谷地製鉄跡	木炭窯3基 竪穴住居1棟 土坑 ビット	9世紀	製鉄遺跡
概要と評価	遺構・遺物	<ul style="list-style-type: none"> Ⅰ区Ⅵ層検出の河川SD976やSD1085からは製錬系の炉壁と鍛冶炉の炉壁や羽口に加えて、鉄製品として焼印状不明品や釘・刀子・棒状不明品等が出土している。また、少なくとも18点の砥石のほかに古代の官人が用いた銚帯の付属品である石製巡方4点と銅製銚帯金具1点の出土も極めて注目される。すぐ北側にはSB25・26・27という大型の掘立柱建物があり、この施設に関わる資料と想定される。 Ⅱ区Ⅴ層から検出された主要遺構としては西側にSB3・SB5掘立柱建物と鍛冶遺構SX1214のグループがあり、東側にはSB1とSB6掘立柱建物というもう一つのグループがある。この東西2群の遺構を中心にして少なくとも製錬系の炉壁や鉄塊系遺物と鍛冶系の羽口に加えて焼形鍛冶滓7点や鉄製品・石製巡方等が出土しており、砥石の出土も目立つ。 Ⅱ区Ⅴ層中から検出された確実な鉄関連遺構には鍛冶炉1基と金床石を伴う鍛冶遺構SX1214があり、背後には砥石を多量に出土するエリアに掘立柱建物SB3・SB5が確認されている。 				
	整理・解析	<ul style="list-style-type: none"> 整理方法は、保存活用までを視野に入れたA・B・C・Dの4ランク個票付け方式で行い、全体量52,497.8gの中から、A保存(分析試料)を7点(1,292.7g)、B保存(報告書掲載資料)を35点(6,988.7g)、C保存(屋内管理の非構成資料)を44,216.4gとして、D保存(屋外管理資料)は0gとした。 分析に用いたA保存の資料は全体量(A～D保存)52,497.8g中の1,292.7g(2.5%)、報告書に掲載したB保存の資料は6,988.7g(13.3%)、C保存の資料は44,216.4g(84.2%)にあたる。A:B:C:D保存の比率は2.5:13.3:84.2:0で、約3:13:84:0となる。 				
	製錬関連	<ul style="list-style-type: none"> 浦反東遺跡から出土した鉄関連遺物の主体は鍛冶関連遺物であるが、製錬系の資料も3点出土している。Ⅰ区Ⅵ層から検出されたSD1085からは製錬系の炉壁が、Ⅱ区Ⅱ・Ⅳ層からも同様の炉壁資料と製錬系の鉄塊系遺物各1点の出土が確実である。いずれもが金属学的な分析対象になっており、確実である。この内、鉄塊系遺物については鍛冶遺構SX1214のすぐ北側からの出土であり、精錬鍛冶作業を行うための原材料として周辺の丘陵部に予想される未知の製鉄遺跡から持ち込まれた可能性があろう。 				
	鍛冶関連	<ul style="list-style-type: none"> 製錬系と判明した3点を除けば、本遺跡のⅠ～Ⅱ区出土の鉄関連遺物の大半は少量の鍛冶炉の炉壁や羽口に加えて、多量の焼形鍛冶滓や鉄製品・砥石であった。但し、焼形鍛冶滓についてはⅠ区Ⅴ層以下からの出土は見られず、Ⅱ区Ⅱ・Ⅳ層からの出土が7点、Ⅱ区Ⅴ層出土が1点と大きく偏っている。この理由は鍛冶遺構SX1214が存在するためであろうと考えられる。 また、Ⅱ区Ⅴ層では鍛冶遺構SX1214周辺以上に、西側のSB3・SB5とされた2棟の掘立柱建物に加えて、東側のSB6掘立柱建物の周囲を取り巻くように砥石の出土傾向が目立つ。これはⅡ区では西側の鍛冶遺構SX1214の他に東側に未検出(調査区外)の鍛冶遺構がもう1軒存在した疑いがある。また、砥石を多出する東西2棟の掘立柱建物跡性格は工人の鍛冶工房と研ぎを中心にした背後の仕立て工房(住居)であった場合に最も整合性がある配置形態であろう。 				
時期	<ul style="list-style-type: none"> 鍛冶関連遺構から出土した土器類の年代観は、平安時代の9世紀後半が中心と見られる。 C14放射線炭素年代測定(AMS法)によれば、出土した木の暦年較正年代は7世紀から10世紀までの幅広い年代幅が示された。 					
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> Ⅰ区Ⅵ層・Ⅱ区Ⅶ層検出の主要な掘立柱建物は規模が大き目で、建物の向きに加えて鍛冶関連遺物や砥石の出土が少なく官人が関わる何らかの公的施設の可能性が濃厚と考えられる。その根拠は延暦年間(AD782-806年)以降に使用が許可された「白石」を用いた銚帯部品が廃棄された形で周辺部の遺構から出土しているからである。 Ⅰ区・Ⅱ区Ⅴ層検出の掘立柱建物は全般に規模も小さく、Ⅵ・Ⅶ層検出の建物群とは建物の向きが異なっている。Ⅱ区の建物は東西の2群に別れる可能性が強く、西側の建物の前庭には鍛冶工房SX1214がセットを成すような形で配置されている。出土資料から見ると、鍛冶工房SX1214と北側の掘立柱建物2棟に加えて東側の建物周辺からは鍛冶関連遺物と極めて多量の砥石の出土傾向が認められる。従って、Ⅱ区Ⅴ層の掘立柱建物の性格としては鍛冶工房を伴い砥石を多用する鉄製品の仕立て工房を窺わせる内容を持っていることになる。 Ⅰ区検出の河川SD976やSD1085等からは数多くの鍛冶関連遺物や砥石に加えて古代官人の身分を示す銚帯等の部品を一定量出土しているが、時期的には9世紀前半から10世紀初頭の公的な性格を持つ大型建物施設と工房群に伴う廃棄場所が重複しているものと判断されよう。 古代古志郡の官衙関連遺跡である八幡林遺跡から下ノ西遺跡へ中核的な官衙エリアが移行する9世紀前半から9世紀後半段階に営まれた浦反東遺跡は、9世紀前半頃から集落が営まれた後、9世紀後半に入って整然と配置された大型建物等の遺構群と遺物が検出された。後の門新遺跡への橋渡しの役割を果たすことになったものと考えられ、近接の川東遺跡と合わせて機能したものと判断される。 					

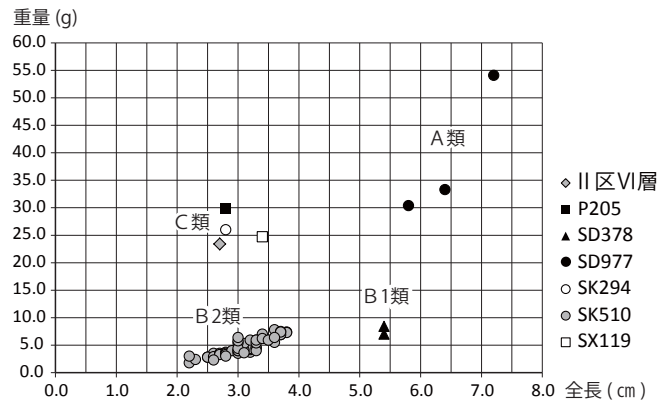
(作表: 穴澤義功・丸山一昭・(株)大石組文化財事業部)

第30表 浦反東遺跡まとめ表(3)(主要要素一覧表)

(2) 生業関連遺物について

A 土錘

土錘は本遺跡で60点以上の出土があった。遺構出土が多くみられ、遺構ごとに大きさ・重量がまとまっていることが特徴的である。SD977出土例はA類に分類され最も大型のものである。SD378ではB1類が、SK510ではB2類が出土し、特に後者は全長2～4cmの間で揃っており同一の網に使用されたものと考えられる。P205・SK294などではともに



第58図 土錘の全長・重量分布図

C類が出土し、異なる遺構からも同規格のものが確認されている。土錘の大きさ・重量からいくつかの形態に分類できることから、それぞれ異なる漁法、あるいは大型魚や小型魚などといった漁獲対象の大きさに合わせた漁具が存在したと考えられる。新潟市の場遺跡の事例をみると、土錘は100～200g前後を測るものも定量出土しており、本遺跡例よりも重いタイプが存在し、木簡の記載内容からもサケ漁が行われていたとされる [小池・藤塚 1993]。また、古代の網漁でも木製の浮子を使用されているが、本遺跡では1306・1307がその可能性がある。

また、SK510の一括的廃棄状況は、周辺に漁労を行える河川が平安時代にも存在したことを示し、I区検出の河川SD976がこれに相当すると考えられる。土錘の編年的位置付けは、SD378が4段階または6段階（新）であり、P205・SK294が3段階、SK510が3段階を中心に4あるいは6段階頃に位置付けられる。

B 円筒形土製品・製塩土器

本遺跡からは円筒形土製品と呼ばれる器台形土器が図示した点数で14個体出土した。強く熱を受けており未調整の粘土紐接合部分で欠損したものがほとんどである。法量は、口径または底径で10cm前後～25cmまでの大小がある。1148のように楕円形の透孔をもつものが主体を占める。本遺跡例は口縁部が直線的に伸び端部を面取り、あるいは丸く収めるもので、調整が粗雑なナデ調整となるものが多いことから、春日氏分類 [春日 2003a] のD1・2d類となろう。本分類の類例は八幡林遺跡 [田中ほか 1994・田中 2005]、出雲崎町梯子谷窯跡 [春日 2001]・番場遺跡 [坂井ほか 1987]・寺前遺跡 [高橋ほか 2008] など旧島崎川流域で特徴的にみられる。寺前遺跡では掲載分で17個体があり、本遺跡はこれに次ぐ出土数となる。

円筒形土製品は東海・北陸以東の東日本に主に分布し、竈構築材、あるいは小型の一部は竈支脚として用いられたと考えられている [春日 2003a]。本遺跡から一定量出土した竈材の分布域が円筒形土製品の分布域と一部重複する状況は、この見解を裏付けることになろう。また、本遺跡における円筒形土製品の編年的位置付けは、SD1015・1037・1085、SK1083などから出土していることから2～3段階にあたり、春日氏の古代V期とする類例遺跡と整合する。

河川SD976からは熱により赤く変色した製塩土器 (1139) が出土した。明確に判別できたものはこの1個体のみであり、本遺跡に持ち込まれたものと考えられる。所属時期は多くの出土土器と同様に9世紀後半を中心とするものであろう。近隣で確認されている製塩遺跡としては、上太遺跡、七ツ石遺跡、出雲崎町久田製塩遺跡 [出雲崎 1988] などが海岸に面して立地しており、直線距離にして5km圏内にある。

(3) 手工業関連遺物について

本遺跡からは土製紡錘車・漆パレット・曲物製作関連遺物（サクラ樹皮）が出土している。土製紡錘車は2点（1128・1150）出土した以外に紡績作業を示す資料は確認されていない。八幡林遺跡ではⅠ地区Ⅲ層からの糸巻の部材が多量に出土している。漆パレットは3段階頃の須恵器坏蓋（630）を利用したもので、内面全体に漆膜が付着している。漆膜には刷毛でならした痕跡を見ることができる。本遺跡から出土した漆器（1233）は分析結果から在地色の強い八幡林遺跡の漆器とは異なる様相のもので、遺跡内で漆工が行われたかは不明である。しかし、漆塗りの須恵器（768）のほか漆が付着した土器も数点出土しており、漆を利用していたことは疑いない。河川SD976の遺物集中域からは樹皮紐と考えられるサクラ樹皮が74点出土している。樹皮の加工度合いから素材～加工段階のものや、曲物容器の製品（1208等）も認められる。このことから、サクラ樹皮を曲物の綴じ紐として製作し、容器に使用していた可能性が高いと考えられる。また、挽物の盤や指物等に利用される多数の棒状部材や端材が出土しており、木製品は主に遺跡内で製作されていたと考えられる。

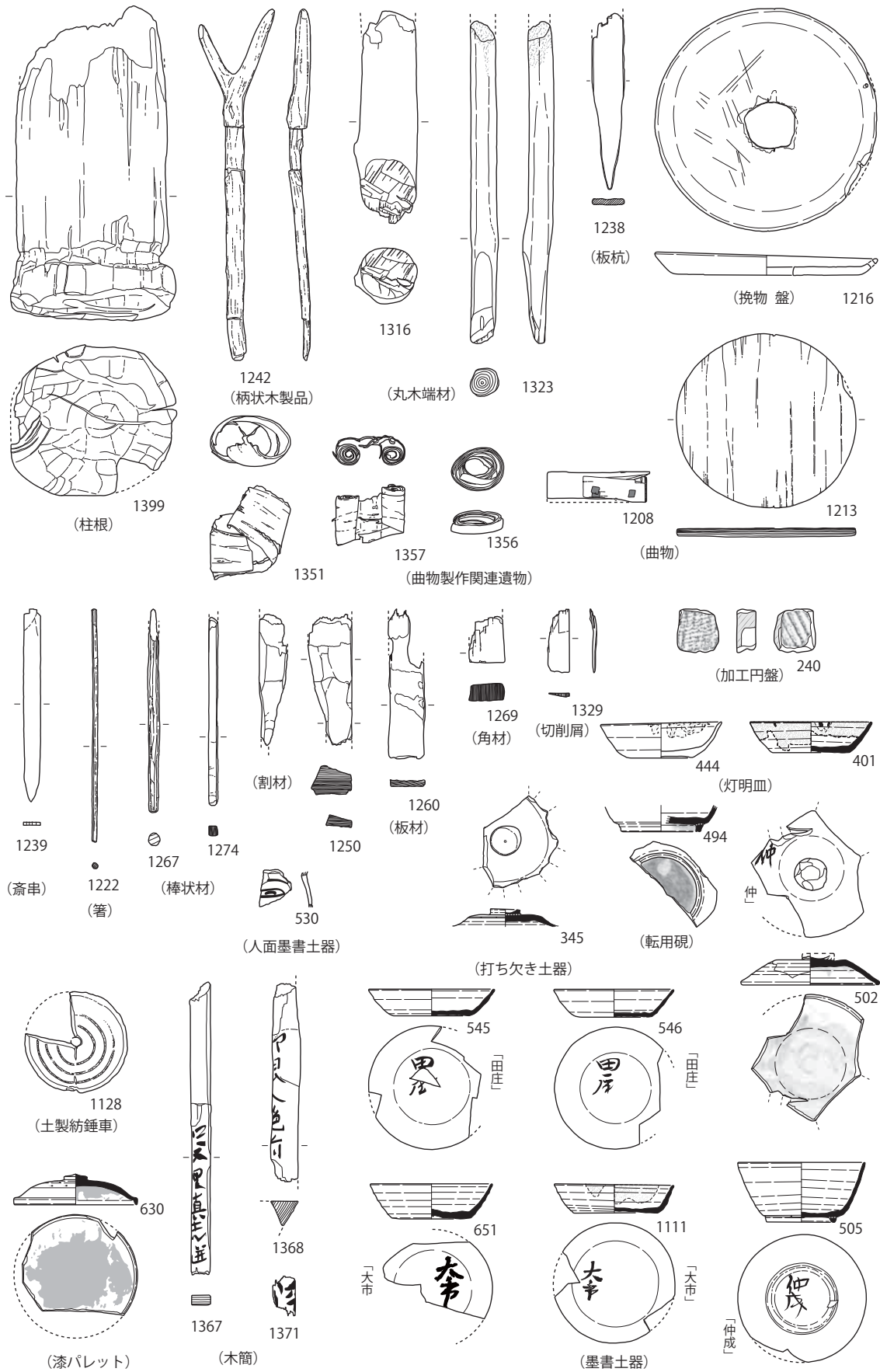
4 特殊遺物について

ここでは、遺跡の性格を示す遺物として腰帯具・漆塗製品・焼印状鉄製品について触れることとする。

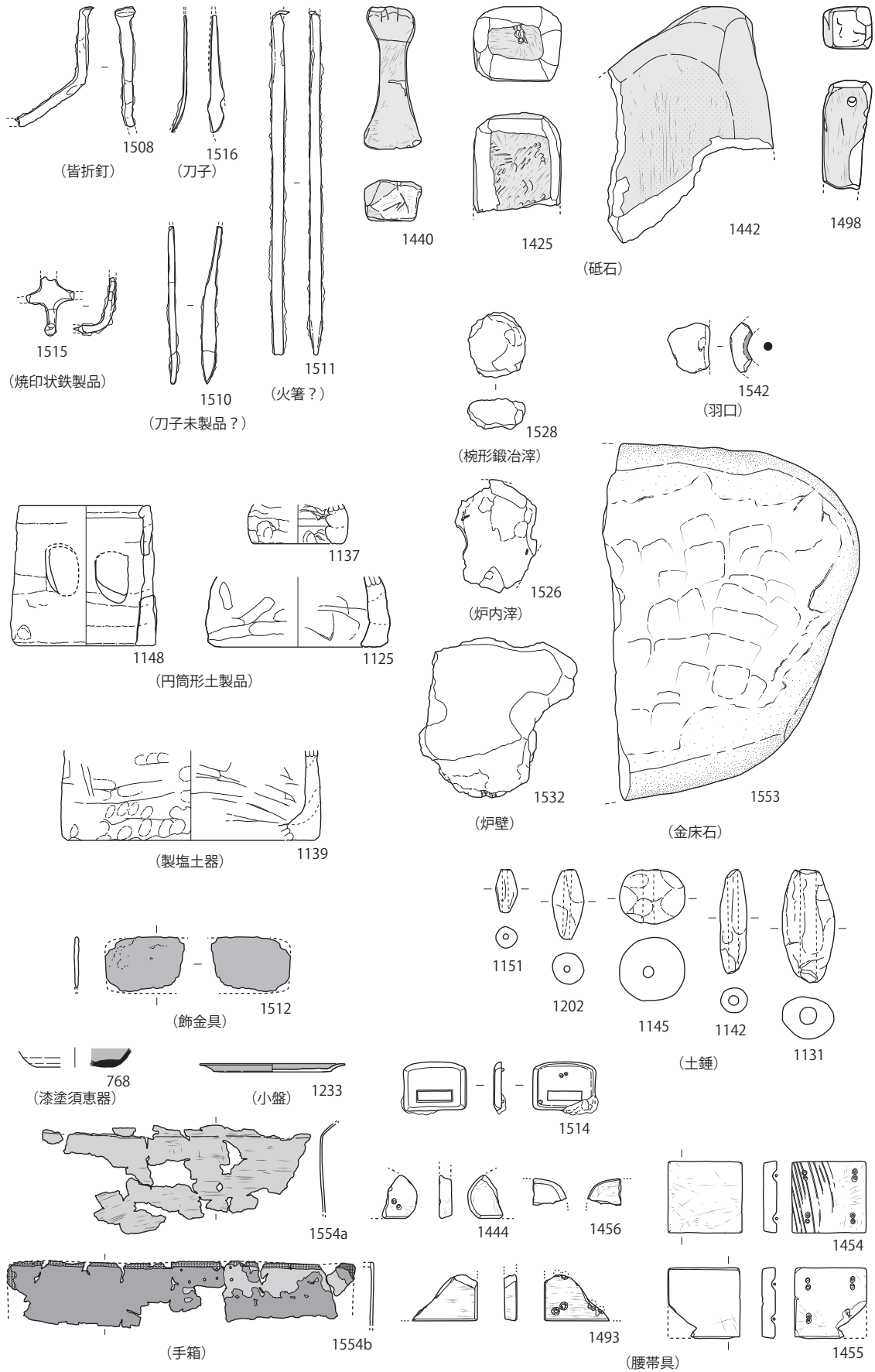
腰帯具は官衙や役人との関わりを直接的に示唆する遺物である。腰帯具は6点出土し、古志郡内の遺跡では最多である。その内訳は銅製巡方1点、石製巡方3点・丸軋1点・鉞尾1点で、1493がⅡ区Ⅳ層出土であるほかは河川SD976出土である。石製巡方の1454・1455はともに3.7×3.8cmを測り同一の腰帯につけられたものであろう。銅製巡方の1514は3.4×2.7cmを測り、下ノ西遺跡出土例よりも小型である。また、飾り金具とされた銅製品（1512）は内外面黒漆塗りと考えられ、腰帯具の裏金具の可能性をもつ。

漆塗製品には前述の漆器小盤・飾り金具のほか漆塗りの須恵器無台坏や手箱がある。四柳氏によれば、漆塗り須恵器（768）は黒色の精製漆が均質に塗られたもので、漆器の代用品の可能性があるとされるものである。SD350からの出土で2～3段階に位置付けられる。また、手箱（1554）はⅡ区18H10グリッドⅤ層直上出土で、ちょうどSB12の内部にあたる位置関係にある。手箱の作りは苧麻を用いた粗い布着せに漆塗りを施したもので、素地に皮革を用いた可能性をもつ。正倉院宝物にも見える漆革箱（通称、漆皮箱）は、遺跡からの出土例はごく少ない。管見に触れたものでは金沢市戸水大西遺跡〔出越 2000〕や長岡京跡左京六条一坊十三町（長岡京跡左京第557次調査）〔(公財)長岡京市埋蔵文化財センター 2013〕があるに過ぎない。現存する漆革箱は8世紀代のものが中心とされ、本資料も放射性炭素年代測定の結果は8世紀後半～9世紀後半の年代を示した。漆は律令期のはじめ、越後や北陸諸国などから都へ貢納されていたが、8世紀以降は需要の増加とともに八幡林遺跡のように在地での漆器製作が行われるようになった〔四柳 2006〕。漆塗り製品はその原料となる漆樹液の生産量に限りがあることから貴重視され、これを所持することは在地豪族にとって重要な意味をもち、威信財の一つであったと考えられる。

焼印状鉄製品とされた1515は、繰り返し熱を受けたためか表面が赤く変色し錆化が著しい。これが焼印であるとする茎部から上部の柄は欠損しており、印面が遺存していることになる。焼印は牧で飼育する牛馬に押されるもので、古代においては官衙によって管理されていたものである。出土例は関東甲信地方にみられ、特に群馬県での出土が多い。ただし、木器に押される例もあることから直ちに牧用ととらえることはできず、集落遺跡からの出土もあるという〔高島 2000・川原 2011〕。



第59図 浦反甫東遺跡出土遺物集成(1)



第 60 図 浦反甫東遺跡出土遺物集成 (2)

5 文字資料と関連資料

本遺跡からは7点の木簡と122点に及ぶ墨書土器のほか、文字と判別できる刻書土器が1点出土している。ここでは、主要な墨書土器と文字資料に関連して転用硯について述べる。

A 「七」(23・26・38・231・513・517・591)

糸切り須恵器無台坏に「七」と墨書されたものが、判別できるもので7点ある。糸切りの無台坏自体は全体で40点あり、33点がI区出土である。「七」墨書土器は新潟市小丸山遺跡で底部外面に記されるものがあり、左右反転して鏡文字となるものもある〔小池ほか1995〕。この椀形を呈する無台坏は胎土B群、Bi類に分類され6段階を中心とするものである。加茂市馬越遺跡SB8でもBi類に相当するものが1点あり春日氏のVI2期に位置付けられ〔伊藤2005〕、八幡林遺跡でも底部破片であるが1点が確認される〔田中2005〕。このような状況から、本遺跡における出土数は特異と言うべきものである。器形や字形も似通っていることから一括的に搬入され、同一人物あるいは集団の手によって記された可能性もある。

B 「大市」(651・984・1111)

II区SE3・包含層から出土した須恵器無台坏で、3点確認された。時期は4段階に位置付けられる。読みはオオイチ、またはオオチで類例は2例ある。一つ目は地名を示すものである。この場合は、古くから物流の拠点や交通の要衝があったことに由来する名称であろう。三河国碧海郡や播磨国揖保郡、大和国城上郡に大市郷、能登国鳳至郡や播磨国揖保郡に大市駅、能登国羽咋郡に邑知郷などがみられる。二つ目は、人名・氏姓の例である。管見に触れるものでは「大市王」「邑知王」「大市連」「大市造」のほか、天平五年(733)の「越前国郡稲帳」には「能登国史生少初位大市首国勝」の名が見える。もう一つの可能性として、文字どおりの「市」あるいは公的な物流の拠点を示すものと見ることもできよう。ただし、この場合は都城のように官司の「市司」が関わる公的な市場をそのまま本遺跡に当てはめることは難しい。しかし、「市」墨書土器を出土した遺跡の検討から地方官衙(国府・郡家)周辺で、かつ交通上の要衝には市が置かれた可能性があり、そこでは国・郡・庄・一般民衆が利用し、市の運営には郡が関与していたと想定されている〔竹森2007〕。

墨書土器の出土例では、9世紀前葉頃の「大市」墨書土器が12点確認された金沢市戸水大西遺跡がある。戸水大西遺跡は加賀郡の大野湊に関わる官衙の関連遺跡で「津宅」に比定され、「大市」墨書土器の存在から水陸交通の結節点に立地した市や物資の集積施設などが想定されている〔出越2000〕。一方、浦反甫東遺跡は、旧島崎川と荒巻川などの合流点付近に接しており、周辺には墨書土器「大家驛」が出土し北陸道の存在を裏付ける八幡林遺跡や古志郡家に比定される下ノ西遺跡が存在する。このことを考慮すれば、「大市」は戸水大西遺跡同様に市あるいは物流施設等を示すもので(注7)、そこには古志郡あるいは郡に関わる豪族層の関与が想定できる。

C 「仲成」(505)「仲」(226・502・524~526・554)

I区河川SD976・包含層から出土しており、6段階の須恵器無台坏・有台坏・坏蓋に記される。「仲成」は人名である。古志郡内で出土した墨書土器では八幡林遺跡で「足嶋」1点、「野人」とその省略とみられる「野」が合計8点、五百刈遺跡〔鳥居2005〕で「東人女」1点が確認される。また、新潟市市場遺跡〔小池・藤塚1993〕では「乙長」と「乙」や、「真長」と「真」、加茂市馬越遺跡〔伊藤2005〕では「是人」と「是」の墨書土器がみられ、これらの遺跡との共通性が窺える。

D 「田庄」(227・545～548)

I区河川SD976・包含層出土で、6段階頃の須恵器無台坏に記される。「田庄」の読みはタトコロ・ナリトコロで、宅=ヤケとともに本来は農業経営の拠点を意味し、そこを拠点に経営された田畠を含む意味に拡大されていった[小口・吉田1991]。「田庄」の類例は墨書土器では見られないが、『日本書紀』大化二年正月条や白雉元年二月条に見える。これに関連して八幡林遺跡[高橋ほか1993]では「庄」、川東遺跡[山賀2012]では「泉田西庄」が確認され、いずれも9世紀後半～末頃(5～6段階)と考えられる。「泉田」は門新遺跡SE10出土有台鉢[田中1995]にもあり(注8)、長岡市島崎東部から上桐一体を含む地名と考えられる。方位+庄の墨書土器は上荒屋遺跡の「東庄」、富山県じょうべのま遺跡・北高木遺跡で「西庄」がみられる。「庄」は一定の建物・土地を含んだ施設を意味する墨書とされることから[出越2006]、本遺跡の「田庄」も泉田という地名にある庄の拠点的施設を示すと考えられる(注9)。

E 転用硯について

本遺跡における文字資料の多さを反映するように文房具である硯は河川SD976を中心に調査区全域で92点出土した。硯はすべて須恵器食膳具を転用したものであるが、隣接する川東遺跡では小型の円面硯1点が確認されている[山賀2012]。本遺跡で転用硯としたものには、擦った墨を取り分けて使用する墨溜めも少なからず含まれるが、破片資料もあるため一括している。ただ、墨を擦るのに適するものは主に有台坏を逆さにして高台内を使用したもの(492～496・639・1005等)と考えられ、高台内に摩耗が認められるものもある。坏類や坏蓋の内面に墨痕があるものの多くは墨溜めではないかと考える。坏蓋は有台坏の上に乗せ逆さにして机上で使用したのだろう。

須恵器食膳具の硯への転用率は河川SD976出土で7.3%であった。比較資料がないため断定できないが、八幡林遺跡や下ノ西遺跡では転用硯は定量あるものの円面硯や風字硯もみることができる。本遺跡で転用硯が多いのは、室内の文書作成事務のみならず立ちながらの現場作業も伴うため持ち運びに便利な食膳具が使用されたのではなかろうか。もちろん斎串や墨書土器などとともに川岸で転用硯が出土している状況から、祭祀や儀礼に伴うものもあるだろうが、墨が非常に厚く残存するものもあり、日常的に行われた文書実務に使用されたことが想定される。

6 集落の動態

以上の検討を踏まえ、ここでは周辺遺跡との関連性についても触れながら、平安時代における遺跡の変遷と性格付けを行い、本節のまとめとしたい。記述にあたっては2～3段階を9世紀前半、5～6段階を9世紀後半～末、4段階をその中間として9世紀中葉、7段階を10世紀前半と捉え、4時期に区分した。

浦反甫東1期(2～3段階・9世紀前半)

当該期は平安時代における浦反甫東遺跡の成立期にあたる。建物関連遺構出土の土器をみると、2段階の遺物が単独で出土した遺構はほとんどなく、3～4段階の遺物が出土する例が多い。このことから本格的な集落の形成は3段階以降と考えられる。I区ではSB24のほか、SD1037・SD1085が建物の周溝になる可能性がある。遺構の分布はまばらで主軸方位に規則性はなく、一般的な集落の建物であったと考えられる。

また、II区では主に西側で建物群が展開する。始めは畝状の連続溝群(SD754周辺)があった場所に、倉庫を含む5棟の建物と柵列2条からなるII-A群(SB21～SB15)が造営される。

一方、本遺跡の上流部に位置する下ノ西遺跡は古志郡家と考えられ、I区やV区で計画的に配置された官衙風建物群が確認されている。特にV区の建物群は水・陸上交通の要衝に置かれた「大家駅」である可能性が指摘されている〔田中 2003a〕。一方、八幡林遺跡C・I地区では四面廂付建物SB12やその附属施設が検出され、多量に出土した文字資料から、『大領館』の想定がされている〔田中 2005〕。また、周辺からは漆器優品や帯金具・皇朝銭・太刀外装具・円面硯・風字硯など上級官人に関わる遺物も出土し、在地的有力豪族層の実像が明らかになった。

こうした状況を踏まえ当該期における浦反甫東遺跡を見ると、建物群は小規模で配置に規格性はみとめられるものの、官衙の様相はみとめられない。遺物はP205から漆パレットが出土したものの、SB30南東側にあたるSK510から多量に出土した土錘や土器群は一般的な集落と変わらないものである。以上のことから、当該期の建物群は基本的に集落そのものと言えるが、II区では規則的な建物配置がみられ、漆を扱っていることから古志郡を治めた有力豪族層との関わりも否定できない。

浦反甫東 2期（4段階・9世紀中葉）

I区・II区ともに平面積20㎡以上の総柱建物C-2類を含み、同一の主軸方位をとり規格性をもった建物群が広範囲で確認される。I区ではSB27がSB24に重複して構築され、SB28も併存した可能性がある。II区では建物II-B群（SB18～SB22・SB15・SB11）がII-A群に重複して造営される。倉庫としたSB19は浦反甫東1期のSB17よりも大型化し、総柱型建物SB18と棟筋を通すなど計画的な配置が取られている。またSB22やSB31など何回か建物の更新が行われた形跡も認められる。このほか、調査区中央には平面積70㎡を超えるSB12や小型の建物SB1が主軸方位を同じくして確認される。SB1は4段階（新）に比定され、SB12は遺構の相関関係から4～5段階に収まると考えられる。両者の関連性を示すものは見出せず、現時点では不明な点が多い。ただ、SB12と同規模の大型建物が後続段階でも確認できることから、その前段階の建物として注目され、この頃に重要な画期があると考えられる。

周辺遺跡において当該期の資料は確認されていないため詳細は不明であるが、八幡林遺跡I地区出土の「南殿」「南家」が「北殿」「北家」へ変化する頃（注10）、下ノ西遺跡では古志郡最大の四面廂付建物が出現する直前の過渡的な時期に当たると考えられ、こうした建物配置の改変や新たな建物建造への動きが本遺跡にも影響を与えているのではないだろうか。

また、当該期の遺物として注目されるのは、SE3出土の「大市」墨書土器（651）とII区V層から出土した漆塗りの手箱（1554）である。「大市」墨書土器はこのほかに2点（984・1111）確認され、いずれも4段階と考えられる。SE3は建物II-B群南西端に位置し、これに伴う可能性が高い。「大市」墨書土器（984）はSB12北側の隣接地から、手箱はSB12内部に当たる場所から出土した。これらの遺物がSB12に関連すると考えるならば、SB12は旧島崎川を通じた内水面交通と北陸道などの陸路で繋がれた物流の拠点施設を示すことになろう。

浦反甫東 3期（5～6段階・9世紀後半～末）

I区・II区ともに平面積50㎡以上の大型建物があり、廂が付くものが確認される。建物の分布は、I区でやや東へ移動し、II区でも調査区東に集中する。当該期の初期段階にはI区でSB26が造営され、II区のSB7もこの頃には機能していたと考えられる。これに続いてI区SB25や、II区SB9を中心とした建物II-C群が配置される。前段階の建物II-A・B群の区割りを無視した形で縦断する区画溝SD6や

鍛冶工房的性格をもつ SB5 はこの頃に造営された可能性がある。

八幡林遺跡では C 地区の四面廂付建物が廃絶し集落的な様相を呈する。墨書土器は一文字が多数を占めており、「草」「有」などのほか「庄」がある。「庄」は当該期における性格の変化を反映したものであろうか。代わって下ノ西遺跡 I 区東側では古志郡最大となる四面廂付建物 SB17 が造営され、遺跡間を越えた機能移転の可能性が考えられる。また、浦反甫東遺跡から北へ 400m 程の位置にある川東遺跡北区では、部分的ではあるが掘立柱建物が複数検出された [山賀 2012]。出土遺物は浦反甫東遺跡とほぼ同時期の幅があり、互いに連動していた可能性がある。また、柱穴底面からは「泉田西庄」墨書土器が出土し、6 段階頃に比定される。

浦反甫東遺跡 I 区の建物周辺、及び南側に位置する河川 SD976 から出土した「田庄」墨書土器は、川東遺跡の「泉田西庄」との関連を示すものとして注目される。当該期における遺跡周辺一帯には、農業経営の拠点的施設や田畠などの土地を含んだ「庄」が形成されていた可能性が高い。農業経営には、農地開発や田畠の耕作以外にも用水路の掘削や維持管理など多くの労働力を必要とした [三上 2001]。多数の墨書土器は、他の祭祀具とともに、こうした一連の作業に必要な労働力の確保と動員に際して行われた飲食を伴う儀礼的行為を示すのではないだろうか。また、その労働力確保を主導する主体者は、腰帯具を複数保有するような古志郡家の一翼を担う在地の有力豪族であったと考えられる。

浦反甫東 4 期（7 段階・10 世紀初頭～前葉）

当該期における明確な遺構は確認されず、河川 SD976 上層や包含層などで断片的に遺物が出土するのみである。SB9 では抜き取り痕跡のある柱穴 P613 等から 6 段階（新）以降の遺物が出土しており、これらの大型建物はこの頃廃絶した可能性が高い。一方、下ノ西遺跡では四面廂付建物 SB17 に代わって SB20 が機能し、10 世紀前葉には本建物も廃絶したと考えられる。また、浦反甫東遺跡の北に位置する門新遺跡谷地地区（旧河道）でも馬形等の木製祭祀具とともに遺物が多数出土しており、河辺で祭祀行為が行われたと考えられる。こうした状況は、この周辺に集落が存在したことを示唆するものだろう。また、門新遺跡谷地地区ではこの頃既に「コ」の字配置をとる建物群が形成されており、河川交通を利用して積極的な経済活動を行う開発領主の居宅に先行する段階として注目される [田中 1995・藤森ほか 2007]。

年代	9 世紀			10 世紀	
	(前半)	(中葉)	(後半～末)	(初頭～前葉)	(前半)
浦反甫	SB24 建物Ⅱ-A群 漆パレット	SB27・SB28 建物Ⅱ-B群 SB12 「大市」 漆塗手箱	SB26・SB25 建物Ⅱ-C群 「田庄」 腰帯具		
川東			建物 「泉田西庄」		
下ノ西	I・V区:官衙的建物	I区道路	SB17 (四面廂)	SB20 (片面廂) SK01:土器廃棄	
八幡林	SB12(四面廂)・17・18 大領館と付属建物 「大領」「南殿」「南家」	SB12 廃絶 SB20・21・26 「北殿」「北家」	集落的遺構 「由」「草」「有」「庄」		
門新				旧河道・SB03・11 SD07・SK14	SB01 (二面廂) 開発領主居宅 漆紙 (大刀・米・船)

第 31 表 遺跡の動態



第 61 図 建物の変遷案

7 小結

以上、平安時代の土器編年案を通じて集落とその性格の変遷を見てきた。ここでは平安時代全体を通じての性格付けと今後の課題を挙げ、当該期のまとめとしたい。

平安時代の出土遺物は、9世紀前半から10世紀初頭のものが確認され、多種多様な性格を帯びていた。すなわち、土器等の日常的遺物や生業・生産関連遺物、手工業関連遺物のほか、官衙的様相をもつ特殊遺物、祭祀遺物、文字資料等である。一方、検出された建物群は、9世紀前半は一般集落と同等であったものが、中葉頃を期に大型化し規格性をもって配置され、後半～末頃には小型建物を伴う桁行5間の廂付大型建物が出現していることが注目される。しかし、これらの建物群のほかには、単独的な小型建物や畝状の小溝群がみられるなど村落的な様相も帯びている。また、Ⅱ区では建物が群構成をとるのに対し、Ⅰ区ではSB27・28を除き単独で機能した。主軸方位も調査区ごとで異なる。地形的な制約もあるのだろうが、Ⅱ区建物群の方がより規格性をもっており異なる性格を有する可能性もある。このため、その性格付けは難しいが、基本的には在地有力豪族が関与した中心的な集落であったと考えられる。その具体的性格は、「大市」「田庄」墨書土器に端的に表されているといえるだろう。

また、本遺跡における土師器食膳具の割合は全時期を通じ低率で、過半数を占めるとされる9世紀第4四半期に至ってもSB25 - SD1078では23%と非常に低率である。同時期の下ノ西遺跡SX852では約57%、八幡林遺跡C地区17Tでは約65%であるのに比べ格差があまりにも大きい。本遺跡の性格として物流の拠点施設が存在する可能性があることを踏まえると、小泊産須恵器を直接的に搬入できる状況にあったと想定することも可能であり、結果的に須恵器の比率が高い値を示したと言えるのではないかと。この点は本遺跡特有のものであり、建物群の性格を解明する上で重要な要素となろう。

こうした構成要素をもつ9世紀～10世紀初頭の遺跡は、長岡市内では初めてのものであるが、8世紀中頃～10世紀中頃に位置付けられる加茂市馬越遺跡の内容と共通項が多いと考えている。馬越遺跡は「三宅」「妙越庄」「中家」という墨書土器の変遷が北陸の荘園関連遺跡と類似した内容を有することから、荘園の管理や経営に関連した拠点施設として成立・発展した可能性が指摘されている〔伊藤 2009〕。さらに浦反甫東遺跡の「大市」「庄」というキーワードを加えてひも解けば、規模は異なるが金沢市戸水大西遺跡などの戸水遺跡群・上荒屋遺跡・横江庄遺跡など、浦反甫東遺跡の構成要素と共通する点が多い。あくまで推測であるが、浦反甫東遺跡や川東遺跡もこうした古代の荘園に関連した中心的施設であった可能性がある。浦反甫東遺跡は、越後における古代荘園の実態解明に重要な示唆を与えるものと考えられる。

第2節 古墳時代・中近世

本遺跡では平安時代の河川に沿って展開する建物群が検出された。この河川は漁労、農耕、祭祀・儀礼の場として、あるいは水上交通路として利用された。河川跡は川東遺跡・門新遺跡・割田遺跡でも検出されており、旧島崎川あるいはその支流であったと考えられる。今回の調査では古墳時代、中近世の遺構はほぼ皆無であるが、当該期の流路と中世の杭列が確認された。そこで本節では、古墳時代と中近世における河川について述べ、まとめとしたい。

Ⅰ区SD976は調査区東半部を流れる河川である。9世紀後半から末頃を中心とする遺物を多量に含む平安時代の流路は、後世の浸食によって一部分が残っているに過ぎず大部分は中近世の流路である。遺物は中近世や古墳時代の土器も出土しており、川幅や流れをわずかに変えながら少なくとも近世までは存続

していたと考えられる。現在の河川流下方向から推測すると西側が上流、北東側が下流となる。本流路における古墳時代の遺物は、6世紀後半～7世紀前半の土器が平安時代の遺物と混じって川底周辺からわずかに出土した。このため当該期の流路は確認できなかった。中近世の流路は古代の流路よりおよそ8m東へ移動しておりやや蛇行したものとなっている。中世に属する馬鍬の歯は北東部の覆土上層で出土しており、この頃には埋没が進み流路の一部が水田となっていた可能性がある。

I区SD981は調査区西半部を流れる河川である。SD976に比べSD981の川幅は狭く流下方向も異なるが、調査区外の南東側で接続する可能性もある。13世紀末～14世紀代の杭列や13～15世紀代の陶磁器のほか、覆土上層からは戊辰戦争時と考えられる鉛玉が出土している。また、北岸の西側には浅い平坦な部分がある。平安時代の遺物をわずかに含む包含層が落ち込んでいることから、ここに平安時代の流路が残存しており、SD976と同様に川の堆積作用によって流路内側に古い時代の川岸が残ったと考えられる。中世の杭列は、流路の北岸と南岸で検出され、一部ではしがらみ状の小枝を伴っていた。性格は不明であるが、南東杭列はSD1225と接しており、これに伴う可能性がある。

II区SD466は、調査区南側を東西に横断する古墳時代前期～後期の河川である。川幅は2～8mと後世の流路に比べて狭いものである。西側では2筋の流れが合流しており、北西側の流路では杭が3本打設されていた。SD466埋没後には古墳時代後期の遺物を含むSD975が確認されている。

このほかII区調査区の東西両端に近世頃の流路が確認されている。調査区外へ延びており詳細は不明であるが、SD981やSD976に接続する可能性もあろう。

以上、古墳時代から中近世にわたり河川跡が確認され、そこにはわずかながらも人為的な活動痕跡が認められた。また、今回の調査で検出された流路は流れや規模を変えながら中近世まで機能した。その後、近世末期頃には完全に埋没し、現在の島崎集落内を流れるルートが本流になったと考えられる。

要 約

- 1 浦反甫東遺跡は長岡市島崎414-2に所在する。旧島崎川の本流である郷本川右岸の沖積地に所在し、もとは休耕田の河川用地であった。新潟県による二級河川郷本川河川改修事業に伴い、平成23(2011)年～平成25(2013)年に本発掘調査を実施した。
- 2 調査の結果、古墳時代～中近世の河川、及び平安時代の集落に関連した遺構・遺物を検出した。
- 3 遺構は平安時代の掘立柱建物・井戸・土坑・溝・ピットのほか、古墳時代～中近世の河川跡がある。
- 4 出土遺物は小泊窯産須恵器が多数出土した。同窯跡資料と対比しておよそ9世紀前半から末頃に比定され、これを基に本遺跡の土器編年案を作成した。
- 5 平安時代の建物群はI区では単独的に、II区では建物群を形成して分布する。出土土器の時期や建物の切り合い、配置状況等から、その編年的位置は9世紀前半から末頃まで機能したと考えられる。
- 6 出土遺物は土器・木器等の日常用具、生業・生産関連、祭祀関連のほか木簡・墨書土器、官衙的性格を帯びる特殊遺物等が河川の遺物集中域を中心に出土した。
- 7 遺跡の性格は、9世紀前半が周辺地域の中心的な集落、中葉が物資の拠点施設、後半～末が荘園関連施設で、いずれも在地豪族層の関与を示唆している。これは「大市」・「田庄」墨書土器の内容とこれに対比される時期の建物群や遺跡の立地状況・周辺遺跡との関連等から想定したものである。
- 8 検出された河川跡は旧島崎川の一部で、時代とともに流路や規模を変化させながら流れていた。

注

- (1) p165 J.B. Mac chesney and A. Murau : American Mineralogist, 46 (1961), 572
 [イルミナイト (Ilmenite : $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) の晶出は $\text{FeO} - \text{TiO}_2$ 二元平衡状態図から高温化操業が推定される。]
- (2) p165 木下亀城・小川留太郎『岩石鉱物』保育社 1995
 チタン鉄鉱は赤鉄鉱とあらゆる割合に混じりあった固溶体をつくる。(中略) チタン鉄鉱と赤鉄鉱の固溶体には、チタン鉄鉱あるいは赤鉄鉱の結晶をなし、全体が完全に均質なものと、チタン鉄鉱と赤鉄鉱が平行にならんで規則正しい縞状構造を示すものがある。チタン鉄鉱は磁鉄鉱とも固溶体をつくり、これにも均質なものと、縞状のものがある。(中略) このようなチタン鉄鉱と赤鉄鉱、または磁鉄鉱との固溶体を含チタン鉄鉱 Titaniferous iron ore という。
- (3) p165 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968
 ウスタイトは450~500Hv、マグネタイトは500~600Hv、ファイヤライトは600~700Hvの範囲が提示されている。ウルボスピネルの硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン (Ti) を固溶するので、600Hv 以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ (Al) が加わり、ウルボスピネルとヘルシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため700Hv を超える値では、ウルボスピネルとヘルシナイトの固溶体の可能性が考えられる。
- (4) p187 はじめ大木戸窯はカメ畑窯併行とされ [坂井・春日ほか 1991]、のちに下口沢窯併行へ変更された [春日 2003b]。
- (5) p188 佐渡市、及び佐渡市立佐渡博物館のご厚意により小泊窯跡出土資料を実見・観察をさせて頂いた。対象資料は [坂井・春日ほか 1991]・[川村 2002・2005] に掲載された下口沢窯・カメ畑1~3号窯・江ノ下窯・フスベ1号窯・K344窯・高野遺跡出土資料の一部である。補足として各窯跡資料の特徴を挙げると、下口沢窯は有台坯の底部はケズリがみられ底部側縁に明確な稜をもつものがある。カメ畑窯の有台坯もケズリにより同様な稜をもつ。3号窯の無台坯は灰色の色調で、胎土は砂粒が多くざらついた手触りをもつもので、通常見られる小泊産無台坯とは異なる質感である。口径12cm前後のものも多く、体部の立ち上がりは下口沢窯同様に急であるが、相対的に深身である。器形はほぼ揃っており、底部はヘラキリの後ケズリ調整をするものとナデ消すものがある。口縁部は薄く尖り気味で先端はシャープである。江ノ下窯は実見資料が少数であったが、無台坯は非常に薄く器壁は2mmほどのものがある。浦反浦東遺跡で見られる細別x類も存在し、6段階としたものと同様にナデ幅が広い。フスベ1号窯資料は、口縁部が内湾し底部付近が丸く湾曲するものが目立つ。坯蓋も天井部付近で大きく湾曲し、カエリは丸く縁取られている。K344窯の坯類はカメ畑3号窯と器形は同様のものもあるが、器壁が明らかに薄手で底部が小型のものが存在する。底部側縁は丸く稜線は不明瞭である。坯蓋は扁平でカエリの端部は内側を向くものや潰れ気味のものが存在する。
- (6) p200 笹澤氏が提示した小泊窯須恵器食膳具の変遷案は、VI 1期前後を細分することによって器形変化を合理的に把握することができるが、土師器を含めて総合的に見れば4段階(古)はV 2期の様相に近く、4段階(新)や5段階はVI 1期のものに近い。これは、土師器が殆どの場合消費地遺跡での出土に限られるため、例え良好な資料であっても時間幅をもっており、シビアな分類が難しいことに起因するものであろう。とは言え、一連の須恵器食膳具の器形変化自体に問題はないと考える。既往の調査成果がどのように対応するかは今後の課題である。
- (7) p218 相澤 央氏から、市の情景を記した平安末期の歌学書『撰集抄』第六話の一節を御教示頂いた。「過にし比、越後の国したの上村と云方に侍りたりしに、彼の里は海のほとりにて、奥よりの津にて、貴賤集まりて朝の市のごとし、海のうろくづ、山の木の実、絹布のたぐひを、うり買うのみにあらず、人馬のやかからを売買せり(後略)」なお、「したの上村」の比定地は実在の地名かも含め諸説ある [野崎 1991]。
- (8) p219 門新遺跡 SE10出土有台鉢は報告書で「泉内」とされていたものであるが、新潟県立歴史博物館 浅井勝利氏の御教示により「泉田」として差し支えないことを確認した。
- (9) p219 「田庄」を「泉田西庄」の省略形とすることも可能だが、上越市岩ノ原遺跡では「石井庄」を「石庄」とし、性格は異なるが八幡林遺跡では「石屋大領」を「石大」と名称の一文字目を記している。
- (10) p220 八幡林遺跡 I 地区 II 層出土土器 [田中^{ほか} 1994] は須恵器食膳具の形態から4段階(新)~6段階(古)に当たると考えられる。このうち墨書土器の「北家」(報告 No.134・135)及び「北^ノ殿」(No.133)は本書設定の4段階(新)に相当すると考え、このように解釈した。

引用・参考文献

ア

- 相沢 央 2009 「第七章第2節 A 墨書」『駒首瀉遺跡 第3・4次調査』新潟市教育委員会
 相田泰臣 2004 「越後における古墳時代後期を中心とした土器の様相 - 頸城・魚沼地域の土師器を中心として -」『新潟考古 第15号』新潟県考古学会
 浅井勝利 2010 「古代北陸道越後佐渡路に関する諸問題」『新潟県立歴史博物館研究紀要』11 新潟県立歴史博物館
 荒川 隆^{ほか} 2004 「第VI章 遺構」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 青田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 荒川浩和 1981 「漆皮箱の概要」『漆皮箱 - 法隆寺献納宝物特別調査概報Ⅲ』東京国立博物館
 荒木志伸 1999 「墨書土器にみえる諸痕跡について」『お茶の水史学』第43号
 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理42』p.73-88.
 安藤正美 2005 『見附市埋蔵文化財調査報告第20 上田遺跡』見附市教育委員会

イ

- 石川茂雄 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会
 出雲崎町 1988 『出雲崎町史』資料編 I 原始・古代・中世・近世（一）
 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社
 伊藤秀和 2005 『加茂市文化財調査報告（14）馬越遺跡』加茂市教育委員会
 伊藤秀和 2009 『加茂市文化財調査報告（18）馬越遺跡Ⅱ』加茂市教育委員会
 伊藤秀和 2010 『加茂市文化財調査報告（19）馬越遺跡Ⅲ』加茂市教育委員会
 伊藤良永・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『日本珪藻学誌6』p.23-44.
 井上尚明 1994 「コップ形須恵器の考察 - 奈良時代の計量器について -」『考古学雑誌』第79巻第4号 日本考古学会
 今井さやか・相沢 央 2007 『日水遺跡第3次調査』新潟市教育委員会・新潟市埋蔵文化財センター

ウ

- 植村昌子 2009 「建築部材刃痕にみる古代の鑿の形状と工作技術」『竹中大工道具館研究紀要』第20号 財団法人竹中大工道具館
 植村昌子 2013 「斧の刃痕の分析 - 飛鳥時代から鎌倉時代の建築部材刃痕に関する調査報告 その1 -」『竹中大工道具館研究紀要』第24号 財団法人竹中大工道具館
 浦 蓉子 2014 「第XI章 樹皮製品」『八日市地方遺跡Ⅱ - 小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - 第3部 製玉編 第4部 木器編』石川県小松市教育委員会

エ

- 江口友子・小濱 亨^{ほか} 2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第100集 釈迦堂遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

オ

- 大井次三郎 1978 『改訂増補新版日本植物誌 顕花編』至文堂
 大橋康二 2000 「I 九州陶磁概論」『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会
 小口雅史・吉田 晶 1991 「律令国家と荘園」『講座日本荘園史2 荘園の成立と領有』吉川弘文館
 尾崎幸洋 1997 『分光学への招待』産業図書
 小田由美子^{ほか} 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第158集 越巻4号塚・谷地製鉄跡・大慶寺御経塚』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

カ

- 春日真実 1997 「第七章1. B 平安時代」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第87集 上郷遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 春日真美 1999 「第4章 古代 第2節 土器編年と地域制」『新潟県の考古学』高志書院
 春日真実^{ほか} 2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第97集 大武遺跡Ⅰ（中世編）』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 春日真実 2001 「第VI章 まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第104集 梯子谷窯跡』新潟県教育委員会・

- 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実^{ほか} 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第116集 奈良崎遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2003a 「越後出土の円筒形土製品・板状土製品について」『富山大学考古学研究室論集 蜃気楼 - 秋山進午先生古希記念 -』秋山進午先生古希記念論集刊行会 六一書房
- 春日真実 2003b 「消費遺跡出土佐渡小泊産須恵器のロクロ回転方向 - 越後出土の資料を中心に -」『研究紀要』第4号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について - 「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に -」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 春日真実 2006 「越後における7世紀の土器編年」『新潟考古』第17号 新潟県考古学会
- 春日真実 2008 「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』第18号 新潟県考古学会
- 春日真実 2011 「上越市岩ノ原遺跡出土の古代土器について」『研究紀要』第六号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実^{ほか} 2014 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第249集 大武遺跡Ⅱ（古代～縄文時代編）』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤由美子^{ほか} 2011 『五千石遺跡 1区・3区・4区東地区・5区』 長岡市教育委員会
- 加藤由美子 2013 『天王遺跡』 長岡市教育委員会
- 加藤由美子^{ほか} 2013 『浦反甫西遺跡』 長岡市教育委員会
- 川原秀夫 2011 「上野国古代出土文字資料集成(木簡・漆紙文書・印章・紡錘車他)」『明和学園短期大学紀要』21
- 川村 尚 2002 「佐渡郡羽茂町小泊窯跡」『新潟県考古学会第14回大会研究発表会要旨』 新潟県考古学会
- 川村 尚 2005 『小泊窯跡群Ⅰ』 佐渡市教育委員会
- キ
- 北村四郎・村田 源 1964 『原色日本植物図鑑草本編 上・中・下』 保育社
- 北村四郎・村田 源 1979 『原色日本植物図鑑木本編 I・II』 保育社
- 木村宗文 1986 「第5章第5節 交通と運輸」『新潟県史 通史編Ⅰ原始・古代』 新潟県
- ク
- 群馬県教育委員会 1977 『西今井遺跡・三ツ木遺跡』
- コ
- 小池邦明・藤塚 明 1993 『新潟市の場遺跡』 新潟市教育委員会
- 公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 2013 「長岡京跡左京第557次調査現地説明会資料」
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究27』 p.1-20.
- 小林 徳 2012 『坂谷遺跡』 長岡市教育委員会
- 小林行雄 1962 『古代の技術』 塙書房
- サ
- 坂井秀弥 1984 「第Ⅵ章 考察」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥^{ほか} 1987 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集 三島郡出雲崎町番場遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1988 「新潟県における中世考古学の現状と課題」『新潟県考古学談話会』1号 新潟県考古学談話会
- 坂井秀弥^{ほか} 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1989 「第Ⅴ章3A-2) 土器の製作技法」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・鶴岡正昭・春日真実 1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 笹澤正史 2011 「第Ⅶ章2 古代の土器の時期と特徴」『新発田市埋蔵文化財調査報告第42 七社遺跡発掘調査報告書』 新発田市教育委員会
- シ
- 品田高志 1997 「第2節 越後国における土師器の変遷と諸相」『中・近世の北陸 - 考古学が語る社会史 -』 北陸中世土器研究会
- 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集』60p.

島地 謙・伊東隆夫 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣出版
鈴木俊成^{ほか} 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

タ

高島英之 2000 『古代出土文字資料の研究』 東京堂出版
高橋 保^{ほか} 1993 『和島村埋蔵文化財調査報告書第2集 八幡林遺跡』 和島村教育委員会
高橋 保^{ほか} 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第189集 寺前遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
滝沢規朗 2005 「土器の分類と年代」 『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』 第1分冊 新潟県考古学会
竹森友子 2007 「地方市について - 「市」 墨書土器出土遺跡の分類を中心に - 」 『古代都市とその形制』 奈良女子大学21世紀 COE プログラム報告集 Vol.14
田中広明 2003 『地方の豪族と古代の官人 - 考古学が解く古代社会の権力構造 - 』 KASHIWA ライブラリー 01 柏書房
田中 靖^{ほか} 1994 『和島村埋蔵文化財調査報告書第3集 八幡林遺跡』 和島村教育委員会
田中 靖 1995 『和島村埋蔵文化財調査報告書第4集 門新遺跡』 和島村教育委員会
田中 靖 1996 『和島村埋蔵文化財調査報告書第5集 門新遺跡外割田地区』 和島村教育委員会
田中 靖 1998 『和島村埋蔵文化財調査報告書第7集 下ノ西遺跡 出土木簡を中心として』 和島村教育委員会
田中 靖 1999 『和島村埋蔵文化財調査報告書第8集 下ノ西遺跡Ⅱ』 和島村教育委員会
田中 靖 2000 『和島村埋蔵文化財調査報告書第9集 下ノ西遺跡Ⅲ』 和島村教育委員会
田中 靖 2003a 『和島村埋蔵文化財調査報告書第14集 下ノ西遺跡Ⅳ』 和島村教育委員会
田中 靖 2003b 『和島村埋蔵文化財調査報告書第15集 北野丸山遺跡』 和島村教育委員会
田中 靖 2005 『和島村埋蔵文化財調査報告書第16集 八幡林遺跡Ⅳ』 和島村教育委員会
田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店

テ

出越茂和 2000 『戸水大西遺跡Ⅰ』 金沢市教育委員会
出越茂和 2006 「古代における方位墨書土器」 『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』 吉岡康暢先生古希記念論集刊行会 桂書房
寺泊町 1991 『寺泊町史 資料編1 原始・古代・中世』
寺村光晴・久我 勇 1960 『寺泊乃おいたち 先史遺跡について』
寺村光晴^{ほか} 1977 『横滝山廃寺跡発掘調査報告書第一次』 寺泊町教育委員会
寺村光晴^{ほか} 1983 『横滝山廃寺跡発掘調査報告書第二次 昭和57年度調査報告』 寺泊町教育委員会
寺村光晴^{ほか} 1985 『横滝山廃寺跡発掘調査報告書第三次 昭和58年度調査報告』 寺泊町教育委員会
寺村光晴^{ほか} 1986 『横滝山廃寺跡発掘調査報告書第四次 昭和59年度調査報告』 寺泊町教育委員会
寺村光晴^{ほか} 1987 『京田・太屋敷・日光畑遺跡発掘調査概報』 寺泊町教育委員会
寺村光晴^{ほか} 1991 『太屋敷遺跡発掘調査報告書 平成2年度の調査』 寺泊町教育委員会
寺泊光晴^{ほか} 1992 『伊奈胡城跡発掘調査報告書』 寺泊町教育委員会

ト

鳥居美栄 2015 『五百刈遺跡』 長岡市教育委員会

ナ

長岡市教育委員会 2010 『平成21年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』
長岡市教育委員会 2011 『平成22年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』
長岡市教育委員会 2013 『平成24年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』
中村 純 1980a 「日本産花粉の標徴 I II (図版)」 『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集』 91p.
中村 純 1980b 「花粉分析による稲作史の研究」 『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究 - 総括報告書 - 』 文部省科研費特定研究「古文化財」総括班 p.187-204.
中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」 『日本先史時代の¹⁴C年代』 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編 日本第四紀学会 p.3-20.

- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会
- 奈良国立文化財研究所 1985 『奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇』
- 奈良国立文化財研究所 1993 『奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇』
- ノ
- 野崎典子 1991 『『撰集抄』地名考 - 越後国したの上村 - 』『名古屋女子大学紀要 人文・社会編』 37号
名古屋女子大学
- ハ
- 林 昭三 1991 『日本産木材顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所
- フ
- 藤森健太郎・田中 靖・鐘江宏之 2007 「新潟県長岡市門新遺跡出土の漆紙文書」『長岡市立科学博物館研究報告』 第42号 長岡市立科学博物館
- 分水町 2004 『分水町史 資料編 I 考古・古代』
- マ
- 前山精明 1997 『有馬崎遺跡』 分水町教育委員会
- 牧野富太郎 1989 『改訂増補牧野新日本植物圖鑑』 北隆館
- 松島悦子^{ほか} 2010 『燕市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 五千石遺跡2区・4区西地区』 燕市教育委員会
- 丸山一昭 2003 『和島村埋蔵文化財調査報告書第13集 妙満寺遺跡』 和島村教育委員会
- 丸山一昭 2005 『和島村埋蔵文化財調査報告書第17集 門新遺跡谷地地区Ⅱ』 和島村教育委員会
- 丸山一昭^{ほか} 2007 『山田郷内遺跡』 長岡市教育委員会
- 丸山一昭^{ほか} 2012 『吉沢遺跡』 長岡市教育委員会
- 丸山一昭 2013 「長岡市浦反浦東遺跡の調査」『新潟県考古学会 第25回大会研究発表会要旨』 新潟県考古学会
- ミ
- 三上喜孝 2001 「古志田東木簡からみた古代の農業労働力編成」『山形県立米沢女子短期大学紀要』 36号
- 水澤幸一 2001 『中条町埋蔵文化財調査報告第22集 船戸桜田遺跡2次調査』 中条町教育委員会
- 宮本長二郎 2002 「古代未から中世の住居建築」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』 第16号
- モ
- 盛 峰雄 2000 「Ⅱ 肥前（佐賀県）の製品について 陶器の編年 1. 碗・皿」『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』 九州近世陶磁学会
- ヤ
- 八重樫由美子 2000 『寺泊町埋蔵文化財発掘調査報告書 向屋敷遺跡』 寺泊町教育委員会
- 山賀和也 2012 『川東遺跡』 長岡市教育委員会
- 山田富貴子 1988 「赤外線吸収スペクトル法」『機器分析のてびき』 化学同人
- 山中敏史 2003 「Ⅲ官衙建物の遺構 Ⅲ-1 柱穴」・「Ⅶ平面形式・規模・配置 Ⅶ-2 官衙建物の規模」『古代の官衙遺跡』 I 遺構編 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
- 山本 肇^{ほか} 1992 『和島村埋蔵文化財調査報告書第1集 八幡林遺跡』 和島村教育委員会
- ヨ
- 吉岡康暢 1986 『日本海域の土器・陶磁 [中世編]』 六興出版
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 四柳嘉章 2003 「金沢市戸水大西遺跡出土漆革箱の科学分析」『大友西遺跡Ⅲ』 金沢市教育委員会
- 四柳嘉章 2006 『漆 I』 法政大学出版局
- 四柳嘉章 2009 『漆の文化史』 岩波新書
- ワ
- 和島村 1996 『和島村史 資料編 I 自然・原始古代・中世・文化財』
- 渡邊 晶 1999 「古代・中世における建築用主要道具について - 木の建築をつくる技術と道具の歴史に関する調査報告 その1 - 」『竹中大工道具館研究紀要』 第22号 財団法人竹中大工道具館
- 渡邊 晶 2002 「我が国近世以前における伐木・製材用道具について - 木の建築をつくる技術と道具の歴史に関する調査報告 その4 - 」『竹中大工道具館研究紀要』 第14号 財団法人竹中大工道具館
- 渡邊朋和^{ほか} 2001 『八幡山遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会

渡邊裕之 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第208集 立野大谷製鉄遺跡・姥ヶ入製鉄遺跡・姥ヶ入南遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

渡辺ますみほか 1994 『緒立C遺跡発掘調査報告書』 黒埼町教育委員会

A

Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophyllous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.

Desikachary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-10, Plates:22-400A.

B

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

H

Hustedt, F., 1930, Bacillariophyta (Diatomeae). In Pascher, Die Susswasser Flora Mitteleuropas, Part 10, 466p. Jena, G. Fischer.

Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.

Hustedt, F., 1937-1938, Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. *Arch. Hydrobiol. Suppl.*, 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.

Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

K

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. *Bibliotheca Diatomologica*, vol.9, p.250.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(1):876p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2):596p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3):576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4):437p.

L

Lowe, R. L., 1974, Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. In *Environmental Monitoring Ser. EPA-670/4-74-005*. Nat. Environmental Res. Center office of Res. Develop. U. S. Environ. Protect. Agency. Cincinnati. 1-344.

R

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 51, 1111-1150.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

S

SILVERSTEIN・WEBSTER、荒木峻・益子洋一郎ほか訳 1999 『有機化合物のスペクトルによる同定法—MS、IR、NMRの併用 第6版』 東京化学同人

1 遺構観察表

(凡例)

- 1 () 付けの数値は現存値を示す。
- 2 l は延長を表す。

掘立柱建物(1)

遺構名		図版No.		位置		桁×梁	桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構		
S B 1		30	216	Ⅱ区	21H	2×2	3.92	3.5	13.72	側柱?	N-16.5° -W			
構成 遺構	柱掘方					柱痕 / 柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備 考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P411	楕円形	U字状	66	40	32	平底	24×22	32	13.51	P411- P412	1.65	V層上	柱痕 I	
P412	円形	半円状	50	44	24	平底	17	24	13.61	P412- P413	1.85	V層上	柱痕 I	
P413	楕円形	U字状	50	40	30	平底	14	27	13.50	P413- P414	1.93	V層上	柱痕 I	
P414	円形	半円状	42	36	23	平底	21	31	13.51	P415- P416	1.71	V層上	柱痕Ⅱ ?	
P415	方形	階段状	42	40	14	平底	26×24	18	13.71	P416- P417	1.96	V層上	柱痕	
P416	方形	半円状	53	53	20	平底	18	16	13.66	P417- P411	1.96	V層上	柱痕	
P417	方形	不整な弧状	50	(22)	24	尖底	(14)	26	13.62	P417- P418	1.74	V層上	柱痕 I	
P418	円形	半円状	44	(30)	17	平底	25	18	13.69	P418- P414	1.75	V層上	柱痕 I	
構成 遺構	付属遺構		溝			建物～溝の距離(m)			底面標高 (m)			確認面	覆土	備 考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)									
SD1	直線	半円状	224	71	22		1.1		13.67	-		V層上	レンズ状	
SD292	直線	弧状	390	80	10		0.71		13.76	-		V層上	単層	
SD293	湾曲	弧状	l150+150	50	10		0.64		13.57	-		V層上	レンズ状	

遺構名		図版No.		位置		桁×梁	桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構		
S B 3		31	217	Ⅱ区	17I	3×2	6.28	4.02	24.48	側柱	N-41° -W			
構成 遺構	柱掘方					柱痕 / 柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備 考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P214	円形	U字状	48	48	42	尖底	28	40	13.48	P214- P176	2.65	V層上	柱痕 I	
P176	円形	U字状	56	56	56	尖底	26×24	45	13.34	P176- P181	3.66	V層上	柱痕 I	
P181	円形	U字状	55	50	42	尖底	26×24	39	13.39	P181- P276	1.95	V層上	柱痕 I	
P276	方形	漏斗状	(68)	(26)	24	丸底	(24)	40	13.39	P276- P202	2.06	V層上	柱痕 I	
P202	長方形	漏斗状	75	60	45	平底	20	45	13.36	P202- P189	2.72	V層上	柱痕 I	
P189	楕円形	U字状	63	(36)	46	丸底	26×24	39	13.39	P189- P226	1.80	V層上	柱痕 I	
P226	円形	U字状	65	56	43	尖底	24	41	13.48	P226- P223	1.35	V層上	柱痕 I	
P223	楕円形	U字状	65	54	51	丸底	30×24	45	13.39	P223- P215	2.60	V層上	柱痕 I	
P215	円形	U字状	55	52	52	丸底	22	49	13.39	P215- P214	1.36	V層上	柱痕 I	

遺構名		図版No.		位置		桁×梁	桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構		
S B 5		32	217	Ⅱ区	17I	3×2	5.47	3.27	17.89	側柱	N-18° -W			
構成 遺構	柱掘方					柱痕 / 柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備 考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P180	円形	U字状	62	50	36	尖底	32×26	34	13.58	P180- P182	1.48	V層上	柱痕 I	
P182	方形	漏斗状	73	65	26	丸底	32×28	32	13.49	P182- P206	1.88	V層上	柱痕 I	
P206	円形	U字状	54	46	44	尖底	22	43	13.40	P206- P260	2.10	V層上	柱痕 I	
P260	円形	U字状	78	70	42	尖底	24	42	13.38	P260- P277	3.27	V層上	柱痕 I	
P277	楕円形	漏斗状	110	75	30	丸底	28	39	13.38	P277- P209	1.49	V層上	柱痕 I	
P209	方形	弧状	106	90	18	-	-	-	13.62	P209- P199	3.98	V層上	柱痕Ⅲ b	
P199	楕円形	弧状	132	102	22	-	-	-	13.62	P199- P185	1.70	V層上	柱痕Ⅲ b	
(P185)	円形	弧状	(30)	60	21	-	-	-	13.41	P185- P180	1.51	V層上	柱痕Ⅲ d	

遺構名		図版No.		位置		桁×梁	桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構		
S B 6		33	218	Ⅱ区	22F	3×2	5.46	3.7	18.91	側柱	N-15.5° -W		SD378	
構成 遺構	柱掘方					柱痕 / 柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備 考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P361	長方形	半円状	80	58	29	丸底	22×20	27	13.48	P361- P362	1.73	V層上	柱痕 I	
P362	長方形	半円状	107	80	36	丸底?	28×24	34	13.40	P362- P363	1.85	V層上	柱痕 I	
P363	長方形	半円状	112	80	27	丸底	32×30	27	13.46	P363- P364	1.68	V層上	柱痕 I	
P364	円形	半円状	95	85	36	尖底	31×27	34	13.28	P364- P365	2.00	V層上	柱痕 I	
P365	円形	半円状	73	65	25	平底	30×26	21	13.44	P365- P366	1.70	V層上	柱痕 I	
P366	楕円形	漏斗状	75	53	26	丸底	28×24	35	13.40	P366- P367	1.90	V層上	柱痕 I	
P367	円形	半円状	98	85	31	丸底	26	31	13.41	P367- P368	1.94	V層上	柱痕 I	
P368	円形	弧状	95	88	26	丸底	30	23	13.50	P368- P369	1.62	V層上	柱痕 I	
P369	楕円形	弧状	112	95	20	丸底	24	18	13.54	P369- P370	1.65	V層上	柱痕 I	
P370	円形	弧状	78	75	29	丸底	26	29	13.50	P370- P361	1.76	V層上	柱痕 I	

掘立柱建物(2)

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 7		60	230・231	Ⅱ区 22F		5×2		10.81	6.38	68.97	側柱	N-25° -W	SA33・SD620	
構成遺構	柱掘方					柱痕/柱根			底面標高(m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P574	楕円形	台形状	110	82	48	平底	27.3×25.2	68	12.70	P574-P573	3.05	Ⅶ層	柱根 I	
P573	楕円形	台形状	100	78	45	尖底	22.9×20.0	57	12.78	P573-P953	3.10	Ⅶ層	柱根 I	
P953	方形	台形状	74	68	54	尖底	20	64	12.72	P953-P954	2.16	Ⅶ層	柱痕 I	
P954	楕円形	台形状	92	78	66	尖底	17	38	12.75	P954-P955	2.29	Ⅶ層	柱根 I	
P955	円形	階段状	70	67	56	平底	27.2×24.0	60	12.88	P955-P956	2.23	Ⅶ層	柱根 I	
P956	楕円形	階段状	115	90	63	-	-	-	12.86	P956-P957	1.87	Ⅶ層	柱痕Ⅲ a	
P957	楕円形	半円状	90	78	59	-	-	-	12.75	P957-P600	2.23	Ⅶ層	柱痕Ⅲ b	
P600	楕円形	箱状	(48)	52	54	平底	(30)×24	48	12.85	P600-P599	3.25	Ⅶ層	柱痕 I	
P599	長方形	階段状	75	60	34	平底	14	50	12.81	P599-P621	3.12	Ⅶ層	柱痕 I	
P621	円形	台形状	74	71	42	平底	28×26	42	12.82	P621-P577	2.05	Ⅶ層	柱痕 I	
P577	円形	階段状	80	68	40	平底	22×18	52	12.82	P577-P576	1.92	Ⅶ層	柱痕Ⅲ b ?	
P576	楕円形	台形状	78	60	40	平底	26.0×17.7	50	12.87	P576-P554	2.50	Ⅶ層	柱根 I	
P554	楕円形	漏斗状	85	70	66	平底	26×22	66	12.89	P554-P575	2.07	Ⅶ層	柱痕 I	
P575	円形	階段状	93	78	34	平底	32×22	62	12.76	P575-P574	2.26	Ⅶ層	柱痕 I	
構成遺構	付属遺構		溝			建物～溝の距離(m)			底面標高(m)			確認面	覆土	備考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)									
SD389東	L字	弧状	ℓ1020+344	104	26	1.29(桁側) 1.32(梁側)			13.14			Ⅶ層	レンズ状	
SD389西	L字	弧状	(ℓ720+100+1255)	120	30	1.47(桁側) 1.62(梁側)			13.20			Ⅶ層	レンズ状	

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 8		59	234	Ⅱ区 20F		2×2		3.92	3.86	15.13	側柱	N-17° -W		
構成遺構	柱掘方					柱痕/柱根			底面標高(m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P609	円形	U字状	24	23	26	尖底	12	26	13.06	P609-P610	2.19	Ⅶ層	柱痕 I	
P610	円形	弧状	28	26	16	-	-	-	13.20	P610-P603	1.73	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	
P603	円形	V字状	30	25	16	-	-	-	13.16	P603-P604	1.98	Ⅶ層	柱痕Ⅲ b	
P604	円形	階段状	24	22	22	尖底	9×7	22	13.12	P604-P605	1.88	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	
P605	円形	台形状	25	25	16	-	-	-	13.25	P605-P606	1.94	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	
P606	円形	弧状	42	40	16	-	-	-	13.26	P606-P607	1.99	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	
P607	円形	半円状	35	35	21	-	-	-	13.25	P607-P608	1.89	Ⅶ層	柱痕Ⅲ	
P608	円形	半円状	25	25	18	-	-	-	13.24	P608-P609	1.98	Ⅶ層	柱痕Ⅲ a	
構成遺構	付属遺構		溝			建物～溝の距離(m)			底面標高(m)			確認面	覆土	備考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)									
SD564	直線	弧状	194	50	10	1.05			13.22			Ⅶ層	レンズ状	
SD589	直線	弧状	336	32	8	0.96			13.53			Ⅶ層	単層	

掘立柱建物(4)

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 12		65	236	Ⅱ区 18H		5×2		10.84	6.66	72.19	側柱+柱柱	N-16.5° -W		
構成 遺構	柱掘方					柱痕/柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)	確認面	覆土	備考	
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P695	不整形	U字状	88	70	67	尖底	27	62	12.74	P695-P696	3.40	Ⅶ層	柱痕I	
P696	楕円形	階段状	90	56	56	-	-	-	12.83	P696-P682	3.27	Ⅶ層	柱痕Ⅲ	
P682	楕円形	U字状	65	53	52	平底	22	47	12.92	P682-P683	2.24	Ⅶ層	柱痕	
P683	長方形	漏斗状	70	45	61	平底	29.2×19.0	48	12.88	P683-P684	2.08	Ⅶ層	柱根I	
P684	長方形	U字状	65	45	60	平底	28×24	67	12.81	P684-P685	2.09	Ⅶ層	柱根I	
P685	楕円形	U字状	80	50	63	尖底	26	68	12.81	P685-P686	2.18	Ⅶ層	柱痕I	
P686	長方形	U字状	63	47	56	丸底	22×20	64	13.00	P686-P687	2.21	Ⅶ層	柱痕I	
P687	円形	台形状	70	65	36	平底	32×24	38	13.02	P687-P688	2.48	Ⅶ層	柱痕	
P688	楕円形	漏斗状	55	45	38	平底	21.2×18.6	28	13.02	P688-P725	0.86	Ⅶ層	柱根I	
P725	方形	弧状	53	45	22	平底	20	22	13.21	P725-P689	0.94	Ⅶ層	柱痕I	
P689	楕円形	半円状	45	35	26	丸底	26	32	13.58	P689-P690	2.39	Ⅶ層	柱痕	
P690	不整形	半円状	80	50	37	丸底	24	46	12.96	P690-P691	2.30	Ⅶ層	柱痕I	
P691	円形	半円状	50	43	35	丸底	23	38	13.08	P691-P692	2.05	Ⅶ層	柱痕I	
P692	円形	U字状	64	58	56	尖底	18	56	12.94	P692-P693	2.16	Ⅶ層	柱痕	
P693	楕円形	漏斗状	73	55	71	平底	18	66	12.77	P693-P694	2.16	Ⅶ層	柱根I	
P694	楕円形	漏斗状	68	45	45	尖底	19	56	12.86	P694-P695	2.09	Ⅶ層	柱痕	
P740	円形	半円状	25	23	19	-	-	-	13.33	-	-	Ⅶ層	柱痕	
P739	円形	弧状	32	28	10	-	-	-	13.40	-	-	Ⅶ層	柱痕Ⅲ e	

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 13		67	237	Ⅱ区 20H		2×2		4.74	3.86	18.30	側柱?	N-19° -W		
構成 遺構	柱掘方					柱痕/柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)	確認面	覆土	備考	
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P677	方形	台形状	60	60	41	平底	21.8×21.3	32	12.76	P677-P706	3.36	Ⅶ層	柱根I	
P706	円形	弧状	57	55	18	-	-	-	12.99	P706-P671	1.33	Ⅶ層	柱痕Ⅲ b	
P671	楕円形	台形状	92	65	58	-	-	-	12.80	P671-P672	1.50	Ⅶ層	柱痕Ⅲ b	
P672	円形	台形状	60	55	41	平底	14×12	34	13.00	P672-P673	2.20	Ⅶ層	柱痕I	
P673	円形	半円状	64	55	62	平底	27.7×24.1	70	12.69	P673-P674	2.39	Ⅶ層	柱根I	
P674	楕円形	階段状	80	65	50	尖底	24×22	51	12.91	P674-P675	2.35	Ⅶ層	柱痕I	
P675	円形	半円状	63	62	72	平底	23.5×20.3	72	12.64	P675-P676	1.90	Ⅶ層	柱根I	
P676	楕円形	半円状	78	(38)	43	-	-	-	12.71	P676-P677	1.86	Ⅶ層	柱痕	
P680	楕円形	不整形台形状	70	56	50	尖底	12.7	86	12.46	-	-	Ⅶ層	柱根I	
構成 遺構	付属遺構			溝			建物~溝の距離(m)		底面標高 (m)	確認面	覆土	備考		
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)									
(SD301)	L字	弧状	(\varnothing 516+214)	260	6	1.5(桁側) 1.38(梁側)		13.79	-	V層	単層	SB13に対応か		

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 14		68	238	Ⅱ区 20G		2×2		5.06	4.55	23.02	側柱	N-5° -W		
構成 遺構	柱掘方					柱痕/柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)	確認面	覆土	備考	
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P623	楕円形	U字状	64	52	40	丸底	14×12	60	12.82	P623-P666	2.09	Ⅶ層	柱痕I	
P666	円形	階段状	64	64	37	平底	14.0×(6.9)	58	12.88	P666-P667	2.28	Ⅶ層	柱根I	
P667	円形	階段状	62	58	32	尖底	8	47	12.94	P667-P668	2.66	Ⅶ層	柱痕I	
P668	円形	階段状	68	60	45	平底	16	45	13.00	-	-	Ⅶ層	柱痕I	
P705	円形	半円状	(20)	30	26	尖底	14	26	13.18	P705-P670	2.37	Ⅶ層	柱痕I	
P670	円形	階段状	62	60	40	尖底	10	48	12.93	P670-P623	2.67	Ⅶ層	柱痕I	
P634	円形	U字状	65	65	43	平底	16×12	44	13.02	-	-	Ⅶ層	柱痕I	
構成 遺構	付属遺構			溝			建物~溝の距離(m)		底面標高 (m)	確認面	覆土	備考		
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)									
SD590	直線	弧状	677	45	4	0.64		13.50	-	Ⅶ層	単層	溝は斜行する		
SD591	直線	弧状	640	60	11	1.23		13.28	-	Ⅶ層	レンズ状	溝は斜行する		

掘立柱建物(5)

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 15		69	235	Ⅱ区 18H		2×2		3.74	3.5	13.09	側柱	N-13° -W		
構成 遺構	柱掘方					柱痕/柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P726	円形	漏斗状	48	(20)	19	丸底	16	28	13.14	P726-P737	1.66	Ⅶ層	柱痕 I	
P737	円形	階段状	44	38	30	平底	12	40	13.06	P737-P731	1.85	Ⅶ層	柱痕 I	
P731	円形	階段状	42	40	36	丸底	9	26	13.10	P731-P732	1.47	Ⅶ層	柱痕 I	
P732	円形	階段状	44	40	21	丸底	22	17	13.25	P732-P733	2.09	Ⅶ層	柱痕	
P733	円形	半円状	40	37	38	尖底	14×10	45	13.11	P733-P738	1.74	Ⅶ層	柱痕	
P738	円形	漏斗状	42	40	30	尖底	9.2×7.2	48	12.88	P738-P728	1.77	Ⅶ層	柱痕 I	
P728	楕円形	台形状	50	35	34	尖底	16×13	33	13.16	P728-P727	1.93	Ⅶ層	柱痕 I	
P727	円形	階段状	45	41	24	平底	10	34	13.10	P727-P726	1.80	Ⅶ層	柱根	

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 16		70	239	Ⅱ区 18G		2×2		3.2	3.02	9.09	側柱	N-32° -W		
構成 遺構	柱掘方					柱痕/柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P744	円形	台形状	30	28	36	-	-	-	13.12	P744-P745	1.46	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	
P745	円形	U字状	32	30	42	-	-	-	13.04	P745-P746	1.56	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	
P746	円形	U字状	25	25	32	-	-	-	13.12	P746-P747	3.20	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	
P747	円形	U字状	26	25	34	-	-	-	13.10	P747-P748	1.54	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	
P748	楕円形	階段状	40	34	40	平底	20×14	41	13.06	P748-P749	1.34	Ⅶ層	柱痕 I	
P749	円形	階段状	30	26	19	平底	17×14	38	13.11	P749-P1244	1.44	Ⅶ層	柱痕 I	
P1244	円形	不明	18	18	7	-	-	-	13.39	P1244-P744	1.56	Ⅶ層	柱痕	

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 17		71	240	Ⅱ区 18H		2×2		4.8	4.53	20.65	総柱	N-11° -W	SD754南	
構成 遺構	柱掘方					柱痕/柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P801	円形	半円状	80	72	38	-	-	-	13.11	P801-P802	2.00	Ⅶ層	柱痕 I	
P802	円形	漏斗状	46	46	20	丸底	18	30	13.19	P802-P795	2.18	Ⅶ層	柱痕 I	
P795	円形	台形状	52	50	46	平底	22	46	13.03	P795-P796	2.17	Ⅶ層	柱痕 I	
P796	円形	台形状	48	44	26	丸底	18	21	13.15	P796-P791	2.63	Ⅶ層	柱痕	
P791	楕円形	台形状	45	35	22	平底	18	18	13.18	P791-P797	2.07	Ⅶ層	柱根	
P797	円形	U字状	48	40	55	-	-	-	12.84	P797-P798	2.46	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	
P798	円形	箱状	43	40	30	平底	22	31	13.09	P798-P800	2.44	Ⅶ層	柱痕 I	
P800	楕円形	V字状	65	45	34	平底	20	32	13.16	P800-P801	2.08	Ⅶ層	柱痕 I	
P803	円形	半円状	50	47	20	丸底	22	19	13.22	-	-	Ⅶ層	柱痕	

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 18		73	241	Ⅱ区 15H		3×2		6.14	(3.67)	(22.53)	総柱	N-30° -W		
構成 遺構	柱掘方					柱痕/柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P867	方形	台形状	65	56	34	平底	36×32	34	13.22	P867-P869	2.20	Ⅶ層	柱痕 I	
P869	方形	半円状	68	67	46	丸底	32	46	13.16	P869-P870	2.07	Ⅶ層	柱痕 I	
P870	長方形	U字状	75	62	31	丸底	40	47	13.14	P870-P871	2.03	Ⅶ層	柱痕	
P871	楕円形	台形状	78	60	42	平底	18.2×18.0	44	13.14	P871-P872	2.05	Ⅶ層	柱根 I	
P872	方形	階段状	65	60	33	丸底	28	36	13.19	P872-P105	2.23	Ⅶ層	柱痕	
P105	長方形	箱状	62	48	29	-	-	-	13.32	P105-P873	1.39	Ⅶ層	不明	
P873	方形	箱状	(70)	82	42	平底	(34)×32	43	13.18	P105-P868	2.23	Ⅶ層	柱痕	
P868	方形	半円状	65	60	42	丸底	23	42	13.18	P868-P866	1.85	Ⅶ層	柱痕 I	
P866	方形	階段状	57	55	27	平底	37	42	13.18	P866-P867	2.07	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	

掘立柱建物(6)

遺構名		図版No.		位置			桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 19		74	242	Ⅱ区 16I			2×2		5.6	5.22	29.23	総柱	N-28° -W		
構成 遺構	柱掘方					柱痕/柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備考	
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)							
P789	円形	半円状	60	55	42	平底	25	42	13.12	P789-P790	2.93	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P790	円形	半円状	80	70	34	丸底	22	34	13.21	P790-P783	2.68	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P783	楕円形	台形状	72	54	43	-	-	-	13.04	P783-P784	2.62	Ⅶ層	柱痕Ⅲ a	柱抜き取りか	
P784	円形	弧状	70	68	28	丸底	21	28	13.21	P784-P785	2.61	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P785	円形	階段状	62	60	30	平底	22	30	13.05	P785-P786	2.81	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P786	楕円形	漏斗状	82	65	24	丸底	25×20	31	13.19	P786-P787	2.80	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P787	円形	漏斗状	55	52	16	平底	22	22	13.27	P787-P788	2.61	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P788	円形	半円状	40	40	20	丸底	22×18	24	13.24	P788-P789	2.62	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P901	円形	U字状	(25)	36	34	-	-	-	13.16	-	-	Ⅶ層	柱痕		

遺構名		図版No.		位置			桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 20		75	243	Ⅱ区 16I			3×2		5.22	4.22	22.03	側柱	N-6° -W	SA34	
構成 遺構	柱掘方					柱痕/柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備考	
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)							
P814	楕円形	U字状	55	40	26	平底	24	43	13.12	P814-P815	2.00	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P815	楕円形	半円状	56	34	24	丸底	24	24	13.29	P815-P806	2.02	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P806	楕円形	U字状	77	48	43	-	-	-	13.10	P806-P807	1.63	Ⅶ層	柱痕		
P807	楕円形	箱状	67	43	28	丸底	30×22	28	13.24	P807-P808	1.62	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P808	円形	半円状	50	48	32	丸底	22	24	13.18	P808-P809	1.79	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P809	楕円形	半円状	73	53	32	平底	42×32	28	13.14	P809-P810	2.23	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P810	円形	台形状	36	30	29	尖底	18	29	13.18	P810-P811	1.97	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P811	円形	台形状	87	58	34	丸底	22	37	13.12	P811-P812	1.67	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P812	楕円形	半円状	55	42	34	-	-	-	13.17	P812-P813	1.70	Ⅶ層	柱痕Ⅲ b		
P813	円形	階段状	50	47	30	平底	22	32	13.24	P813-P814	1.84	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		

遺構名		図版No.		位置			桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 21		76	244	Ⅱ区 15I			4×2		8.34	4.84	40.37	側柱	N-3° -W		
構成 遺構	柱掘方					柱痕/柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備考	
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)							
P780	円形	U字状	32	28	6	尖底	26×15	15	13.37	P780-P781	2.34	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P781	円形	台形状	32	30	24	-	-	-	13.28	P781-P906	2.56	Ⅶ層	柱痕		
P906	楕円形	台形状	48	38	25	平底	18×12	25	13.28	P906-P882	2.09	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P882	円形	階段状	34	33	14	丸底	16×14	36	13.17	P882-P902	2.13	Ⅶ層	柱痕Ⅱ		
P902	円形	U字状	35	35	34	-	-	-	13.17	P902-P881	2.09	Ⅶ層	柱痕	木柱残片	
P881	円形	漏斗状	32	30	24	尖底	10.4×9.6	32	13.21	P881-P927	2.04	Ⅶ層	柱根Ⅰ		
P927	円形	台形状	40	35	22	丸底	13	6	13.23	P927-P928	2.48	Ⅶ層	柱痕		
P928	円形	半円状	32	32	18	-	-	-	13.32	P928-P929	2.37	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d		
P929	円形	半円状	37	35	26	-	-	-	13.37	P929-P904	2.03	Ⅶ層	柱痕Ⅲ b		
P904	円形	弧状	30	30	17	尖底	10	17	13.39	P904-P905	2.16	Ⅶ層	柱根Ⅰ		
P905	楕円形	漏斗状	45	28	16	平底	18	36	13.08	P905-P895	2.01	Ⅶ層	柱痕		
P895	円形	U字状	34	30	30	尖底	17	30	13.15	P895-P780	2.09	Ⅶ層	柱痕Ⅰ		
P894	円形	台形状	45	45	26	-	-	-	13.24	-	-	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d		
P903	楕円形	弧状	45	30	10	-	-	-	13.39	-	-	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d		

掘立柱建物(7)

遺構名		図版 No.		位置		桁×梁		桁行 (m)	梁行 (m)	平面積 (㎡)	構造	方位	関連遺構	
S B 22		77	245	Ⅱ区 17J		3×2		7.15	6.22	44.47	側柱	N-28° -W	SD775	
構成 遺構	柱掘方					柱痕 / 柱根			底面標高 (m)	柱間寸法 (m)		確認面	覆土	備 考
	平面形	断面形	長 (cm)	短 (cm)	深 (cm)	底面形	径 (cm)	深 (cm)						
P884	円形	半円状	50	44	18	平底	20×18	14	13.31	P884-P820	3.62	Ⅶ層	柱痕	
P820	円形	半円状	38	38	20	-	-	-	13.26	P820-P890	2.45	Ⅶ層	柱痕Ⅲ b	
P890	円形	半円状	62	54	28	丸底	28×26	28	13.14	P890-P862	1.73	Ⅶ層	柱痕Ⅰ	
P862	円形	半円状	42	35	26	平底	20.5×17.4	40	13.05	P862-P892	2.18	Ⅶ層	柱根Ⅰ	
P892	円形	台形状	47	44	63	-	-	-	13.01	P892-P891	2.92	V層中	柱痕Ⅲ b	
P891	楕円形	箱状	(30)	40	25	丸底	20	22	13.31	P891-P886	2.55	V層中	柱痕Ⅰ	
P886	円形	台形状	32	30	31	-	-	-	13.16	P886-P885	0.76	Ⅶ層	柱痕Ⅲ b	
P885	円形	半円状	30	30	14	-	-	-	13.22	P885-P876	2.90	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	
P876	楕円形	階段状	63	45	34	丸底	27	35	13.12	P876-P919	3.23	Ⅶ層	柱痕Ⅰ	
P919	楕円形	弧状	70	46	22	平底	26	22	13.23	P919-P887	1.87	Ⅶ層	柱痕Ⅰ	
P887	楕円形	階段状	50	38	20	平底	22×20	31	13.15	P887-P884	2.05	Ⅶ層	柱痕Ⅰ	

遺構名		図版 No.		位置		桁×梁		桁行 (m)	梁行 (m)	平面積 (㎡)	構造	方位	関連遺構	
S B 23		78	239	Ⅱ区 17H		2×1		4.84	2.66	12.87	側柱	N-22° -W		
構成 遺構	柱掘方					柱痕 / 柱根			底面標高 (m)	柱間寸法 (m)		確認面	覆土	備 考
	平面形	断面形	長 (cm)	短 (cm)	深 (cm)	底面形	径 (cm)	深 (cm)						
P835	円形	台形状	60	50	20	平底	25	42	13.03	P835-P840	2.32	Ⅶ層	柱痕Ⅰ	上層に P460
P840	円形	階段状	65	58	47	丸底	22	47	13.05	P840-P851	2.51	Ⅶ層	柱痕Ⅰ	
P851	円形	U字状	35	35	39	-	-	-	13.13	P924-P847	2.27	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	
P924	円形	階段状	64	54	48	丸底	16	48	13.06	P847-P835	2.65	Ⅶ層	柱痕Ⅰ	
P847	楕円形	台形状	55	44	27	丸底	25×23	不明	13.26	-	-	Ⅶ層	柱痕Ⅰ	

遺構名		図版 No.		位置		桁×梁		桁行 (m)	梁行 (m)	平面積 (㎡)	構造	方位	関連遺構	
S B 24		5	202	Ⅰ区 5N		2×3		5.62	4.88	26.16	側柱	N-21° -E	SX1241	
構成 遺構	柱掘方					柱痕 / 柱根			底面標高 (m)	柱間寸法 (m)		確認面	覆土	備 考
	平面形	断面形	長 (cm)	短 (cm)	深 (cm)	底面形	径 (cm)	深 (cm)						
P1047	楕円形	半円状	(65)	52	24	丸底	35×20	36	13.28	P1047-P1046	3.09	V層中	柱痕Ⅱ	
P1046	楕円形	箱状	(65)	54	50	-	-	-	13.22	P1046-P1017	1.79	V層中	柱痕	
P1017	楕円形	階段状	48	(40)	38	平底	15	34	13.23	P1017-P1016	2.55	V層中	柱痕	
P1016	円形	箱状	42	40	22	丸底	20	15	13.46	P1016-P1012	2.70	V層中	柱痕	
P1012	長方形	箱状	47	43	26	丸底	25	19	13.39	P1012-P1011	1.59	V層中	柱痕	
P1011	長方形	箱状	(46)	44	24	平底	30×28	11	13.41	P1011-P1010	1.54	V層中	柱痕	
P1010	長方形	台形状	50	40	34	-	-	-	13.35	P1010-P1008	1.62	V層中	柱痕Ⅲ b	
P1008	円形	台形状	45	40	25	平底	20	34	13.31	-	-	V層中	柱痕Ⅲ d	柱痕のアタリ
構成 遺構	付属遺構		溝			建物～溝の距離 (m)			底面標高 (m)	柱間寸法 (m)		確認面	覆土	備 考
	平面形	断面形	長 (cm)	短 (cm)	深 (cm)									
SD1007	直線	弧状	(633)	50	35	0.83			13.31	-	-	V層中	レンズ状	
SD1031	L字	弧状	(824+352)	100	16	1.39 (桁側) 1.2 (梁側)			13.56	-	-	V層中	レンズ状	

掘立柱建物(8)

遺構名		図版No.		位置			桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 25		14	206	I区 7M			6×3		10.42	4.84	50.43	側柱	N-18° -E	SX1240	
構成遺構	柱掘方						柱痕/柱根			底面標高(m)	柱間寸法(m)	確認面	覆土	備考	
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)							
P1088	円形	箱状	54	54	43	平底	23	43	13.02	P1088-P1089	1.76	Ⅵ層	柱痕 I		
P1089	円形	箱状	55	48	30	平底	22×20	30	13.15	P1089-P1090	1.63	Ⅵ層	柱痕 I		
P1090	楕円形	箱状	75	62	46	平底	16	30	13.00	P1090-P1091	1.77	Ⅵ層	柱痕 I		
P1091	楕円形	台形状	75	63	35	尖底	12	24	13.13	P1091-P1092	1.87	Ⅵ層	柱痕 I		
P1092	円形	階段状	70	68	9	平底	22×20	20	13.24	P1092-P1114	2.19	Ⅵ層	柱痕 I		
P1114	円形	台形状	35	35	14	-	-	-	13.35	P1114-P1115	1.20	Ⅵ層	柱痕Ⅲ d		
P1115	円形	弧状	38	35	12	-	-	-	13.36	P1115-P1116	1.89	Ⅵ層	柱痕Ⅲ d		
P1116	円形	弧状	32	32	15	平底	16×14	10	13.33	P1116-P1117	0.53	Ⅵ層	柱痕		
P1117	円形	U字状	30	28	30	平底	19×14	30	13.13	P1117-P1118	2.44	Ⅵ層	柱痕 I		
P1118	楕円形	台形状	36	32	21	-	-	-	13.23	P1118-P1119	1.20	Ⅵ層	柱痕Ⅲ d		
P1119	円形	弧状	35	32	9	-	-	-	13.34	P1119-P1093	4.01	Ⅵ層	柱痕Ⅲ d		
P1093	円形	台形状	56	55	30	丸底	25×21	15	13.21	P1093-P1076	1.71	Ⅵ層	柱痕		
P1076	円形	階段状	60	54	22	平底	28×22	24	13.24	P1076-P1094	1.73	Ⅵ層	柱痕 I		
P1094	方形	半円状	57	50	26	平底	9.1×8.5	26	13.24	P1094-P1095	1.76	Ⅵ層	柱根 I		
P1095	円形	階段状	60	58	15	平底	25	30	13.19	P1095-P1096	2.38	Ⅵ層	柱痕 I		
P1096	円形	半円状	60	60	33	平底	30	33	13.18	P1096-P1088	2.40	Ⅵ層	柱痕		
構成遺構	付属遺構		溝			建物-溝の距離(m)			底面標高(m)	-	確認面	覆土	備考		
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)										
SD1159	湾曲	弧状	(ℓ 428+435)	240	14	1.16			13.23	-	Ⅵ層	レンズ状	溝は斜行する		
SD1078	L字	弧状	ℓ 400+285+244	170	22	1.95			13.31	-	Ⅵ層	レンズ状			

遺構名		図版No.		位置			桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 26		15	207	I区 6N			4×2 西に廊		7.7	4.9	37.73(51.28)	側柱	N-42° -W	SX1240	
構成遺構	柱掘方						柱痕/柱根			底面標高(m)	柱間寸法(m)	確認面	覆土	備考	
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)							
P1108	円形	箱状	40	35	34	丸底	20×14	32	13.34	P1108-P1109	2.45	V層中	柱痕 I		
P1109	方形	半円状	40	34	7	平底	25	16	13.42	P1109-P1099	2.46	Ⅵ層	柱痕		
P1099	方形	箱状	45	44	24	-	-	-	13.26	P1099-P1100	1.95	Ⅵ層	柱痕Ⅲ d	底面にアタリ	
P1100	円形	半円状	40	35	18	-	-	-	13.35	P1100-P1101	1.82	Ⅵ層	柱痕Ⅲ b		
P1101	楕円形	階段状	50	35	23	平底	18	40	13.08	P1101-P1102	2.14	Ⅵ層	柱痕 I		
P1102	円形	階段状	40	36	15	平底	22×20	24	13.24	P1102-P1103	1.79	Ⅵ層	柱痕 I		
P1103	円形	箱状	38	35	24	平底	20.8×14.0	36	13.09	P1103-P1104	4.90	Ⅵ層	柱根 I		
P1104	楕円形	階段状	46	40	15	平底	16×13	24	13.22	P1104-P1105	1.91	Ⅵ層	柱痕 I		
P1105	楕円形	階段状	55	45	16	平底	17×15	22	13.24	P1105-P1106	2.04	V層中	柱痕 I		
P1106	長方形	半円状	55	45	42	-	-	-	13.26	P1106-P1107	1.94	V層中	柱痕Ⅲ d		
P1107	楕円形	階段状	60	52	42	平底	14.7×14.1	48	13.23	P1107-P1108	1.82	V層中	柱根 I		
P1110	円形	U字状	30	26	36	-	-	-	13.32	P1110-P1111	1.66	V層中	柱痕Ⅲ d		
P1111	方形	箱状	65	55	30	-	-	-	13.37	P1111-P1112	2.34	Ⅵ層	柱痕Ⅲ b		
P1112	方形	U字状	75	65	6	平底	22	30	13.32	P1112-P1113	2.03	V層中	柱痕 I		
P1113	楕円形	箱状	(52)	52	14	-	-	-	13.44	P1110-P1108	1.46	V層中	柱痕		

掘立柱建物(9)

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 27		16・17	208	I区 5M		4×2		7.34	(3.23)	(23.71)	総柱	N-29° -W	SD982・SD1131・SX1071	
構成 遺構	柱掘方					柱痕/柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備 考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P1150	楕円形	階段状	55	50	38	丸底	23	38	13.19	P1150-P1146	1.93	Ⅵ層	柱痕Ⅰ	SB27-2間分伸びる可能性がある
P1146	円形	U字状	42	42	38	平底	22	38	13.20	P1146-P1143	1.98	Ⅵ層	柱痕Ⅰ	
P1143	楕円形	階段状	50	42	24	平底	20	24	13.31	P1143-P1140	1.86	Ⅵ層	柱痕Ⅰ	
P1140	楕円形	半円状	58	48	29	-	-	-	13.23	P1140-P1141	1.50	Ⅵ層	柱痕	
P1141	円形	V字~台形状	42	40	28	-	-	-	13.28	P1141-P1142	1.62	Ⅵ層	柱痕Ⅲ	
P1142	楕円形	U字状~半円状	48	40	22	-	-	-	13.29	P1142-P1145	1.56	Ⅵ層	柱痕Ⅲ	
P1145	円形	階段状	43	40	37	丸底	22	22	13.19	P1145-P1148	1.79	Ⅵ層	柱痕	
P1148	楕円形	階段状	65	52	27	-	-	-	13.36	P1148-P1152	2.13	Ⅵ層	柱痕Ⅲb	
P1152	円形	階段状	63	56	33	-	-	-	13.27	P1152-P1155	1.85	Ⅵ層	柱痕	
P1155	楕円形	半円状	60	42	34	丸底	20	37	13.18	P1155-P1154	1.74	Ⅵ層	柱痕Ⅰ	
P1154	円形	U字状	55	50	41	丸底	10	44	13.12	P1154-P1151	1.70	Ⅵ層	柱痕Ⅰ	
P1151	円形	階段状	60	52	26	丸底	19	40	13.15	P1151-P1147	2.16	Ⅵ層	柱根Ⅰ	
P1147	円形	階段状	35	35	30	平底	18	32	13.23	P1147-P1144	1.76	Ⅵ層	柱痕Ⅰ	
P1144	円形	半円状	35	35	22	-	-	-	13.32	P1144-P1141	1.72	Ⅵ層	柱痕	
P1156	円形	半円状	33	32	20	-	-	-	13.30	P1155-P1156	1.42	Ⅵ層	柱痕Ⅲd	
P1157	円形	台形状	(30)	38	22	-	-	-	13.29	P1156-P1157	1.72	Ⅵ層	柱痕	
P1149	円形	半円状	35	35	15	-	-	-	13.35	-	-	Ⅵ層	柱痕Ⅲd	
(P1153)	円形	半円状	32	29	17	-	-	-	13.33	-	-	Ⅵ層	柱痕Ⅲd	

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 28		18	209	I区 7M		3×2		(7.36)	(6.1)	不明	側柱	N-29.5° -W		
構成 遺構	柱掘方					柱痕/柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備 考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P1202	円形	半円状	40	36	17	丸底	16	20	13.28	P1202-P1166	3.08	Ⅵ層	柱痕Ⅰ	
P1166	円形	階段状	40	40	12	平底	25×20	24	13.24	P1166-P1162	3.03	Ⅵ層	柱痕Ⅱ	
P1162	円形	不明	40	38	26	-	-	-	13.26	P1162-P1163	2.34	Ⅵ層	不明	
P1163	円形	半円状	40	38	24	丸底	25×22	20	13.21	P1163-P1197	2.62	Ⅵ層	柱痕	
P1197	円形	半円状	33	30	17	-	-	-	13.28	P1197-P1239	2.39	Ⅵ層	柱痕	
P1239	円形	不明	36	36	不明	-	-	-	不明	-	-	V層中	不明	

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 30		79	246	II区 16J		2×1		7.38	4.62	34.1	側柱	N-9° -W	SA34	
構成 遺構	柱掘方					柱痕/柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備 考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P880	円形	半円状	46	46	25	-	-	-	13.27	P880-P971	3.73	Ⅶ層	柱痕Ⅲd	
P971	円形	半円状	42	42	24	-	-	-	13.27	P971-P883	3.66	Ⅶ層	柱痕Ⅲd	
P883	楕円形	台形状	50	38	32	-	-	-	13.15	P883-P918	4.61	Ⅶ層	柱痕Ⅲd	
P918	楕円形	半円状	52	36	30	平底	19	30	13.15	P918-P874	3.55	Ⅶ層	柱痕Ⅰ	
P874	円形	箱状	41	40	19	平底	15	19	13.27	P874-P917	3.83	Ⅶ層	柱痕Ⅰ	
P917	円形	半円状	58	52	33	丸底	34×26	33	13.17	P917-P880	4.61	Ⅶ層	柱痕	

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		桁行(m)	梁行(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構	
S B 31		78	246	II区 16I		2×2		5.78	4.46	25.78	側柱	N-28.5° -W		
構成 遺構	柱掘方					柱痕/柱根			底面標高 (m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備 考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P923	楕円形	弧状	60	45	23	丸底	(30)	不明	13.26	P923-P889	2.06	Ⅶ層	柱痕Ⅰ	柱痕は写真からの推測
P889	楕円形	弧状	(25)	35	18	平底	26×(12)	34	13.14	P889-P819	2.41	Ⅶ層	柱痕Ⅲd	
P819	円形	弧状	32	(20)	13.5	-	-	-	13.21	P819-P1245	2.71	Ⅶ層	柱痕Ⅲd	
P1245	楕円形	不明	39	30	15	-	-	-	13.28	P1245-P1246	3.07	Ⅶ層	不明	
P1246	円形	不明	23	23	9	-	-	-	13.32	P1246-P942	2.33	Ⅶ層	不明	
P942	円形	半円状	35	30	22	丸底	不明	不明	13.23	P942-P1247	2.19	Ⅶ層	柱痕Ⅰ	写真のみ
P1247	円形	不明	33	31	12	-	-	-	13.32	P1247-P1248	2.93	Ⅶ層	不明	
P1248	楕円形	不明	68	46	6	不明	28	36	13.13	P1248-P923	2.66	Ⅶ層	不明	

掘立柱建物(10)

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		全長(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構		
S A 29		71・72	247	Ⅱ区 18I		-		6.39	-	-	N-68.5° -E			
構成遺構	柱掘方					柱痕 / 柱根			底面標高(m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P247	円形	弧状	45	40	11	-	-	-	13.41	P247- P821	1.95	Ⅶ層	柱痕	V層でも確認された
P821	楕円形	漏斗状	48	38	32	平底	14	28	13.10	P821- P823	2.23	Ⅶ層	柱根 I	
P823	方形	漏斗状	47	47	10	丸底	24	25	12.99	P823- P824	2.21	Ⅶ層	柱根 I	
P824	円形	弧状	45	40	10	-	-	-	13.16	-	-	Ⅶ層	柱痕	

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		全長(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構		
S A 32		71・72	247	Ⅱ区 17I		-		9.6	-	-	N-9.5° -W			
構成遺構	柱掘方					柱痕 / 柱根			底面標高(m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P1249	円形	不明	44	42	5	-	-	-	13.42	P1249- P846	3.10	Ⅶ層	不明	
P846	円形	U字状	36	35	31	平底	14×10	31	13.09	P846- P935	3.34	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	
P935	円形	台形状	48	46	32	-	-	-	13.12	P935- P1250	3.16	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	
P1250	円形	不明	55	48	24	-	-	-	13.07	-	-	Ⅶ層	不明	

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		全長(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構		
S A 33		60	230・231	Ⅱ区 22F		-		10.96	-	-	N-25° -W	SD620・SB7		
構成遺構	柱掘方					柱痕 / 柱根			底面標高(m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P627	円形	階段状	40	37	44	-	-	-	12.96	P627- P583	2.18	Ⅶ層	柱痕Ⅲ e	
P583	方形	漏斗状	70	65	44	-	-	-	12.95	P583- P584	2.05	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	
P584	楕円形	台形状	52	40	41	-	-	-	13.01	P584- P650	2.36	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	
P650	楕円形	U字状	42	34	38	丸底	35	35	13.12	P650- P635	2.25	Ⅶ層	柱痕 I	
P635	楕円形	U字状	49	40	62	-	-	-	12.80	P635- P636	2.10	Ⅶ層	柱痕Ⅲ d	
P636	円形	U字状	43	43	62	丸底	(24)	60	12.74	-	-	Ⅶ層	柱痕 I	

遺構名		図版No.		位置		桁×梁		全長(m)	平面積(m ²)	構造	方位	関連遺構		
S A 34		79	247	Ⅱ区 16I		-		8.68	-	-	N-80.5° -E	SB30・SB20		
構成遺構	柱掘方					柱痕 / 柱根			底面標高(m)	柱間寸法(m)		確認面	覆土	備考
	平面形	断面形	長(cm)	短(cm)	深(cm)	底面形	径(cm)	深(cm)						
P1251	円形	不明	32	30	22	-	-	-	13.32	P1251- P912	4.20	Ⅶ層	不明	
P912	円形	弧状	(43)	54	26	丸底	30	21	13.24	P912- P832	4.48	Ⅶ層	柱痕 I	
P832	楕円形	半円状	58	42	32	丸底	18	32	13.15	-	-	Ⅶ層	柱痕 I	

柱穴・ピット (P) I 区

図版 No.	遺構番号	位置	確認面	柱掘方			柱痕 / 柱根			底面標高 (m)	備考	
				平面形	長 (cm)	短 (cm)	深 (cm)	底面	径 (cm)			深 (cm)
-	1164	8M3	Ⅵ層	楕円形	65	50	35	平底	17	36	13.05	
19	1177	8L23, 8M3	Ⅵ層	楕円形	50	41	12	平底	10.2	18	13.16	
19	1189	6N20	Ⅵ層	楕円形	65	54	50	-	-	-	13.08	
19	1190	7N6・11	Ⅵ層	円形	70	60	18	-	-	-	13.23	
-	1192	8L16	Ⅵ層	円形	24	24	18	-	-	-	13.18	
-	1193	8L16・21	Ⅵ層	楕円形	(17)	32	22	-	-	-	13.12	
19	1205	6O2	Ⅵ層	楕円形	38	32	24	丸底	9	24	13.19	
19	1210	6N11	Ⅵ層	長方形	86	60	29	平底	26×21	38	13.04	
19	1211	5N15, 6N11	Ⅵ層	楕円形	100	70	25	平底	14×12	34	13.10	
19	1212	5N10	Ⅵ層	円形	55	50	36	丸底	15	50	12.96	
19	1213	5N9・10	Ⅵ層	楕円形	59	41	41	-	-	-	13.05	

柱穴・ピット (P) II 区

図版 No.	遺構番号	位置	確認面	柱掘方			柱痕 / 柱根			底面標高 (m)	備考	
				平面形	長 (cm)	短 (cm)	深 (cm)	底面	径 (cm)			深 (cm)
-	90	15I10	V層	長方形	100	67	14	-	-	-	13.73	
-	109	18I16・17	V層	方形	220	170	不明	-	-	-	不明	上端のみ確認
-	120	17I23, 17J3	V層	円形	112	112	28	-	-	-	13.56	
-	137	18I17	V層	円形	(84)	86	不明	-	-	-	不明	上端のみ確認
-	148	17I22・23	V層	楕円形	(60)	47	34	-	-	-	13.57	
-	150	17I23	V層	円形	85	(57)	30	-	-	-	13.54	
-	159	18I9・10	V層	円形	126	123	18	-	-	-	13.71	
-	163	18I16・17	V層	楕円形	65	52	14	-	-	-	13.56	
-	178	16H25, 16I5	V層	楕円形	99	78	13	-	-	-	13.61	
-	179	16H25, 16I5	V層	円形	68	(60)	20	-	-	-	13.60	
-	201	17I7・8	V層	円形	(98)	94	20	-	-	-	13.60	
-	204	17I12・17	V層	楕円形	116	72	不明	-	-	-	不明	上端のみ確認
36	205	18I11・12	V層	楕円形	(170)	104	35	-	-	-	13.47	
-	227	17I16・17	V層	楕円形	160	(84)	20	-	-	-	13.60	
-	240	17H24	V層	円形	58	56	32	-	-	-	13.46	
-	251	17I18	V層	円形	83	(70)	17	-	-	-	13.70	
44	311	19H12	V層	楕円形	102	101	30	尖底	58×30	29	13.58	
-	349	21G20・25	V層	方形	116	108	10	不明	55×50	26	13.54	
-	444	21G24, 21H4	V層	円形	76	68	28	平底	12	28	15.40	
-	457	16H9	V層	楕円形	77	50	23	平底	12	46	13.28	
-	460	16H14・15	V層	楕円形	(108)	82	19	-	-	-	13.58	
-	490	16J12・13	V層	円形	85	(62)	22	-	-	-	13.72	
-	822	17H20・25	Ⅶ層	円形	65	60	40	平底	19	40	13.02	
80	827	17I20	Ⅶ層	長方形	49	36	41	丸底	12	44	13.07	
80	828	17I20	Ⅶ層	円形	41	37	23	丸底	14×9	36	13.12	
-	839	17H3	Ⅶ層	円形	34	34	30	-	-	-	13.16	
80	850	17H6	Ⅶ層	円形	44	42	32	-	-	-	13.17	
-	864	17H7	Ⅶ層	円形	43	39	36	-	21	36	13.10	
80	877	15I15	Ⅶ層	円形	60	56	40	-	-	-	13.16	

井戸 (SE) II区

図版 No.	遺構番号	位置	確認面	平面形	断面形	覆土	長 (cm)	短 (cm)	深 (cm)	備考
34	2	13・14J	V層	楕円形	漏斗状	レンズ状	620	(350)	42	
35	3	16J	V層	円形	漏斗状	レンズ状	350	278	79	
34	121	16K, 16L	V層	楕円形	漏斗状	レンズ状	572	404	50	
80	555	23F	VII層	円形	漏斗状	レンズ状	(114)	98	78	
80	856	17H	VII層	円形	U字状	レンズ状	142	(118)	164	

土坑 (SK) I区

図版 No.	遺構番号	位置	確認面	平面形	断面形	覆土	長 (cm)	短 (cm)	深 (cm)	備考
6	1019	6N	V層中	円形	台形状	レンズ状	95	80	36	
6	1038	7M, 7N	V層中	楕円形	弧状	レンズ状	(231)	147	29	
6	1039	7M, 7N	V層中	楕円形	弧状	レンズ状	(197)	120	17	
-	1059	6N	V層中	楕円形	弧状	単層	198	161	10	
6	1064	9L	V層中	円形	弧状	レンズ状	130	(56)	16	
19	1083	8・9L	VI層	長方形	弧状	レンズ状	275	165	22	
-	1136	8M	VI層	楕円形	弧状	レンズ状	132	115	8	

土坑 (SK) II区

図版 No.	遺構番号	位置	確認面	平面形	断面形	覆土	長 (cm)	短 (cm)	深 (cm)	備考
35	110	18I	V層	楕円形	弧状	レンズ状	145	108	26	
35	125	16H	V層	楕円形	弧状	レンズ状	196	98	21	
35	217	18I	V層	長方形	台形状	レンズ状	254	103	24	
36	294	18I	V層	楕円形	弧状	レンズ状	384	262	30	
36	299	18G	V層	長方形	弧状	レンズ状	100	62	22	
36	300	18G	V層	楕円形	弧状	レンズ状	146	80	35	
36	321	19・20G	V層	楕円形	弧状	単層	117	78	7	
36	323	21F	V層	円形	弧状	レンズ状	190	175	19	
38	342	23G	V層	長方形	箱状	レンズ状	(157)	106	15	
37	351	20H	V層	不整形	弧状	レンズ状	178	170	11	
37	380	21G	V層	不整形	弧状	レンズ状	(ℓ80+264)	180	20	
37	384	20G	V層	方形	弧状	レンズ状	124	112	12	
38	429	23F, 23G	V層	円形	弧状	レンズ状	185	170	44	
37	453	17H	V層	長方形	弧状	レンズ状	214	118	17	
39	476	20H	V層	方形	弧状	レンズ状	176	154	18	
39	477	20G, 20H	V層	不整形	弧状	単層	145	104	11	
39	491	16J	V層	楕円形	弧状	レンズ状	153	107	23	
50	510	15・16J	V層中	不整形	弧状	レンズ状	620	598	27	
-	516	13・14I	V層中	楕円形	弧状	レンズ状	(152)	118	45	
81	630	21H	VII層	楕円形	弧状	レンズ状	125	95	20	
81	719	18H, 18I	VII層	方形	台形状	レンズ状	145	(124)	18	

溝・河川(SD)I区

図版No.	遺構番号	位置	確認面	平面形	断面形	覆土	長(cm)	短(cm)	深(cm)	備考
21	976	70~12J	V層上	湾曲	弧状	レンズ状	(ℓ 3582+3620)	(3010)	(186)	SX1209を含む
8	977	7・8K, 6・7L, 5・6M, 4・5N	V層上	直線	台形状	レンズ状	(ℓ 4100+694)	243	78	
-	979西	6M	V層上	直線	弧状	単層	522	215	22	
22・23・24	981	0N~7O	II層	直線	弧状	レンズ状	(6900)	(2140)	(240)	杭列、SX1238を含む
7・16	982	4~6M, 6N	V層上	L字	弧状	レンズ状	ℓ 1000+650+1150+271	308	40	
-	988	7・8L, 7・8M	V層上、中	直線	半円状	レンズ状	(1088)	68	31	
-	989	7・8L, 8M	V層上、中	直線	半円状	レンズ状	(1490)	60	55	
-	990	8L	V層上	直線	弧状	レンズ状	478	85	7	
-	995	8・9L, 9M	V層上	蛇行	弧状	レンズ状	(ℓ 300+626)	54	16	
-	1000	10K	V層上	湾曲	弧状	レンズ状	(ℓ 426+130)	110	36	
-	1013	6・7N	V層上	直線	台形状	レンズ状	450	65	27	
-	1014	7N	V層上	直線	台形状	レンズ状	220	50	27	
-	1015	5N	V層中	直線	半円状	レンズ状	230	83	46	
6	1018	6N	V層中	湾曲	弧状	単層	ℓ 360+610	120	8	
-	1020	6・7N	V層上	直線	U字状	レンズ状	278	50	40	
-	1021	7N	V層上	直線	弧状	レンズ状	166	60	17	
-	1022	6N	V層中	直線	半円状	単層	(527)	60	27	
-	1024	7L, 6~8M	V層中	L字	弧状	レンズ状	ℓ 724+465	471	41	
-	1026	8M	V層中	直線	半円状	レンズ状	330	34	24	
-	1027	8M	V層中	直線	弧状	レンズ状	510	50	20	
-	1029	4・5N	V層中	直線	半円状	レンズ状	(310)	37	12	
-	1030	5N, 5O	V層中	直線	半円状	レンズ状	(331)	38	14	
-	1033	6・7N, 6・7O	V層中	直線	半円状	レンズ状	322	74	33	
-	1034	6・7N, 7O	V層中	直線	台形状	水平	398	(48)	30	
7	1037	8L, 8M	V層中	直線	弧状	レンズ状	1168	348	53	
-	1049	5・6N, 5・6O	V層中	直線	弧状	レンズ状	(281)	232	26	
-	1054	7M	V層中	直線	弧状	単層	131	56	8	
-	1082	9L	V層中、下	直線	半円状	レンズ状	(320)	42	18	
-	1084	9L	VI層	直線	台形状	レンズ状	248	93	52	
20	1085	8・9L	VI層	湾曲	弧状	レンズ状	ℓ 1010+253	235	54	
-	1087	9K	VI層	直線	弧状	単層	318	36	10	
-	1098	8・9K, 9L	VI層	直線	弧状	レンズ状	674	110	17	
-	1123	8M	VI層	直線	弧状	単層	191	47	9	
-	1125	7・8L, 7・8M	VI層	直線	弧状	単層	806	67	8	
-	1126	7・8L	VI層	蛇行	弧状	単層	ℓ 350+461	85	15	
-	1130	8M	VI層	直線	弧状	単層	482	33	8	
16	1131	4M, 4N	VI層	直線	半円状	レンズ状	(316)	35	22	
-	1139	7L	VI層	直線	弧状	レンズ状	420	66	16	
-	1167	8M	VI層	直線	弧状	単層	166	36	9	
-	1181	5M	VI層	直線	半円状	レンズ状	(150)	46	26	
7	1216	2・3M	V層上	直線	弧状	単層	786	59	9	
7	1219	1・2N	V層上	直線	弧状	単層	684	80	8	
20	1220	3・4P	V層上	L字	弧状	単層	(546)	194	19	
20	1225	3・4P	VI層	直線	弧状	単層	(636)	429	63	
20	1226	2M~4M, 2N	VI層	L字	弧状	レンズ状	ℓ 1523+200	181	25	

溝・河川(SD)Ⅱ区

図版No.	遺構番号	位置	確認面	平面形	断面形	覆土	長(cm)	短(cm)	深(cm)	備考
39	6	16H~16K, 17J~17L	V層	直線	半円状	レンズ状	(ℓ 1149+620+818+1234)	122	31	
27	9	15~18H	V層	直線	弧状	レンズ状	(2820)	64	20	
-	11	16H	V層	直線	台形状	レンズ状	223	42	18	
-	12	16H	V層	直線	台形状	レンズ状	202	44	17	
39	13	18G, 17・18H	V層	直線	台形状	レンズ状	1296	56	18	
39	14	18G	V層	直線	弧状	レンズ状	422	45	12	
-	17	14・15J	V層	直線	弧状	レンズ状	312	60	18	
-	18	15I	V層	L字	弧状	単層	ℓ 82+40+130	36	7	
-	19	16I	V層	直線	弧状	レンズ状	286	50	15	
-	20	16I	V層	直線	弧状	レンズ状	270	40	14	
40	21	16・17I	V層	L字	弧状	単層	ℓ 240+350	118	10	
40	22	16・17I	V層	直線	台形状	レンズ状	255	47	14	
40	30	16I	V層	直線	弧状	レンズ状	114	50	10	
40	31	16I	V層	直線	弧状	単層	130	45	12	
-	33	16・17J	V層	直線	弧状	単層	(384)	45	6	
42	35	17J, 17・18K	V層	L字	弧状	単層	ℓ 1100+903	61	10	
-	38	17J	V層	直線	弧状	単層	673	43	10	
-	40	17J	V層	直線	弧状	単層	366	56	6	
-	42	17J	V層	直線	弧状	単層	(156)	26	4	
-	43	17J	V層	直線	弧状	単層	501	32	6	
-	44	17J, 17・18K	V層	直線	弧状	単層	1066	40	6	
-	45	17I, 17・18J	V層	直線	弧状	レンズ状	776	37	4	
40	46	17G, 17H	V層	直線	弧状	レンズ状	(450)	145	10	
40	48	17・18G	V層	直線	弧状	レンズ状	490	126	22	
44	53	18H, 18I	V層	湾曲	弧状	レンズ状	ℓ 220+527	142	12	
-	55	19I	V層	楕円形	弧状	レンズ状	496	234	25	
40	59	14I	V層	直線	弧状	単層	304	102	9	
-	89	15H, 15I	V層	直線	弧状	単層	(115)	54	16	
-	93	15H, 15I	V層	直線	半円状	水平	(204)	30	18	
-	94	15I	V層	直線	不明	不明	(276)	32	8	
-	97	15I	V層	直線	弧状	単層	494	37	12	
-	122	16I	V層	直線	弧状	単層	(133)	30	6	
-	124	17I	V層	直線	台形状	レンズ状	472	80	25	
-	126	16H	V層	直線	弧状	レンズ状	(744)	40	17	
-	128	16H	V層	直線	半円状	単層	358	30	14	
-	130	16H	V層	直線	弧状	単層	(154)	55	10	
-	158	18・19I	V層	直線	弧状	単層	200	33	8	
-	161	20H	V層	直線	半円状	その他	(84)	28	17	
-	192	19I	V層	直線	弧状	単層	154	34	6	
-	193	19I	V層	直線	弧状	レンズ状	290	40	15	
-	194	20I	V層	直線	台形状	単層	260	70	14	
-	195	20I	V層	直線	台形状	単層	222	36	8	
-	218	18I, 18・19J	V層	直線	弧状	単層	(536)	72	5	
-	228	16H	V層	直線	弧状	単層	(310)	44	12	
-	231	16G, 16H	V層	直線	弧状	単層	(145)	50	5	
-	233	16H	V層	直線	弧状	レンズ状	(368)	70	13	
44	269	18H, 18I	V層	直線	台形状	レンズ状	307	106	20	

溝・河川(SD)Ⅱ区

図版No.	遺構番号	位置	確認面	平面形	断面形	覆土	長(cm)	短(cm)	深(cm)	備考
43	274	19H	V層	湾曲	台形状	レンズ状	ℓ218+446	150	43	
42	279	17・18K	V層	湾曲	弧状	レンズ状	(ℓ500+1046)	118	35	
-	281	20I	V層	直線	弧状	単層	388	47	12	
-	284	20・21I	V層	直線	弧状	単層	418	30	6	
-	297	17・18G	V層	直線	弧状	レンズ状	147	62	17	
41	301	19・20G, 19・20H	V層	L字	弧状	単層	(ℓ516+214)	260	6	
41	302	20H	V層	直線	弧状	レンズ状	(330)	97	16	
41	304	21・22D, 20・21E	V層	直線	弧状	水平	(2360)	266	20	
41	305	21・22D, 20~22E, 19・20F	V層	直線	弧状	レンズ状	3230	286	14	
41	306	20・21F	V層	コ字	弧状	単層	ℓ460+1140+222	350	8	
44	307	18H, 18I	V層	直線	弧状	単層	378	110	9	
44	309	18・19H	V層	直線	弧状	レンズ状	420	88	10	
44	310	19H	V層	直線	弧状	単層	(350)	110	16	
41	317	20・21H	V層	直線	弧状	レンズ状	470	122	28	
44	331	18・19H	V層	直線	箱状	レンズ状	233	118	30	
45	333	22H	V層	直線	弧状	単層	(300)	92	20	
45	339	21・22H	V層	L字	弧状	レンズ状	ℓ350+430	70	19	
45	340	21・22H	V層	直線	弧状	レンズ状	(140)	64	12	
-	343	22G, 22H	V層	直線	弧状	レンズ状	(278)	120	22	
41	345	21・22E, 21・22F	V層	湾曲	弧状	単層	ℓ524+336+556	172	14	
43	350	23E, 23F	V層	直線	弧状	レンズ状	1444	99	29	
38	360	23F, 23G	V層	不整形	弧状	レンズ状	(ℓ708+340)	200	24	
-	373	21F, 21G	V層	直線	弧状	単層	364	52	13	
-	374	21・22F, 21・22G	V層	直線	弧状	単層	358	42	9	
33	378	22E, 21F~23F, 21G~23G	V層	ロ字	半円状	レンズ状	(ℓ362+700+518+1142+ 190+652+370)	236	32	
45	385	20F, 20G, 20H	V層上	直線	弧状	レンズ状	1502	102	37	
-	426	18H	V層	直線	不明	不明	254	(102)	6	
-	433	15I	V層	直線	弧状	単層	114	36	8	
-	447	23G	V層	直線	台形状	レンズ状	(365)	144	27	
89	466	23F~15I	VⅦ層	蛇行	弧状	レンズ状	(ℓ525+1930+1570+ 1830+2040)	800	77	
61	525北	21F	V層中	直線	弧状	単層	290	42	10	
51	525南	21・22G	V層中	直線	弧状	レンズ状	(1065)	40	18	
82	534	20G, 20・21H	V層中	直線	台形状	レンズ状	1087	88	37	
82	535	20G, 20・21H	V層中	直線	弧状	レンズ状	913	52	11	
61	556	20・21F	VⅦ層	L字	弧状	レンズ状	(ℓ1200+242)	65	20	
82	557	20G, 20H	VⅦ層	直線	弧状	レンズ状	876	80	18	
82	558	20G, 20H	VⅦ層	直線	弧状	レンズ状	1088	34	9	
-	559	20F, 20G	VⅦ層	直線	半円状	レンズ状	584	30	29	
81	561	20F	VⅦ層	直線	弧状	単層	100	42	8	
81	562	20F	VⅦ層	直線	弧状	単層	218	72	8	
82	565	20・21G, 21H	VⅦ層	直線	弧状	単層	858	34	17	
82	566	21G	V層中	直線	弧状	レンズ状	894	94	22	
81	567	21・22H	VⅦ層	直線	弧状	レンズ状	654	102	18	
82	588	20G, 20H	VⅦ層	直線	弧状	レンズ状	1280	50	9	

溝・河川（SD）Ⅱ区

図版No.	遺構番号	位置	確認面	平面形	断面形	覆土	長 (cm)	短 (cm)	深 (cm)	備考
60	620	22F, 22G	Ⅶ層	直線	U字状	ブロック状	1046	55	34	
-	646	20H, 20I	Ⅶ層	湾曲	弧状	単層	ℓ 350+643	70	12	
83	712	18H	Ⅶ層	直線	台形状	単層	(490)	52	10	
83	718	18H	Ⅶ層	直線	弧状	単層	(155)	30	6	
-	743	19H, 19I	Ⅶ層	湾曲	弧状	レンズ状	ℓ 170+480	200	22	
-	753	20G	Ⅶ層	直線	弧状	単層	(118)	25	4	
83	754	17H	Ⅶ層	直線	弧状	単層	(224)	35	6	
83	754南	17H, 17I	Ⅶ層	直線	台形状	レンズ状	275	80	51	
83	755	17H	Ⅶ層	直線	弧状	単層	(313)	48	18	
83	756	17H, 17I	Ⅶ層	直線	半円状	レンズ状	413	23	14	
83	757	17H, 17I	Ⅶ層	直線	半円状	レンズ状	415	40	16	
83	758	16・17H, 17I	Ⅶ層	直線	弧状	レンズ状	394	35	7	
83	759	16H, 16I	Ⅶ層	直線	弧状	レンズ状	230	26	18	
75・83	760	16H, 16I	Ⅶ層	直線	弧状	単層	396	35	8	
75	761	16H, 16I	Ⅶ層	直線	弧状	レンズ状	165	33	14	
75	762	16H, 16I	Ⅶ層	直線	半円状	単層	130	22	15	
-	764	16H	Ⅶ層	直線	半円状	レンズ状	220	24	14	
-	765	16H	Ⅶ層	直線	弧状	単層	(145)	36	8	
-	766	16H	Ⅶ層	直線	弧状	単層	(205)	30	3	
-	767	15H	Ⅶ層	直線	弧状	単層	(190)	30	8	
-	768	15H	Ⅶ層	直線	弧状	単層	(117)	25	6	
-	771	15H	Ⅶ層	直線	弧状	単層	(145)	35	7	
-	773	15H	Ⅶ層	直線	弧状	単層	(78)	35	6	
-	774	15H	Ⅶ層	直線	弧状	単層	(120)	42	8	
77	775	16I, 16J	Ⅶ層	直線	弧状	レンズ状	273	105	25	
83	777	17・18H	Ⅶ層	直線	弧状	単層	(225)	28	12	
83	778	17H	Ⅶ層	直線	弧状	単層	290	28	8	
83	779	17H	Ⅶ層	直線	弧状	単層	388	42	16	
-	793	16I	Ⅶ層	直線	弧状	単層	245	25	7	
-	794	16I	Ⅶ層	直線	台形状	単層	190	30	6	
-	949	21E, 21・22F	Ⅶ層	蛇行	その他	レンズ状	ℓ 300+510+392	(140)	39	
63	960	20・21E	Ⅶ層	直線	弧状	レンズ状	897	126	12	
-	973	22E, 22F	Ⅶ層	直線	U字状	レンズ状	215	52	61	
81	974	22・23F	Ⅶ層	直線	弧状	レンズ状	140	25	13	
89	975	16K	Ⅶ層	不明	弧状	レンズ状	不明	不明	134	

性格不明遺構 (S X) I 区

図版 No.	遺構番号	位置	確認面	平面形	断面形	覆土	長 (cm)	短 (cm)	深 (cm)	備考
-	983	7N, 7O	V層上	不整形	弧状	レンズ状	495	365	38	
8	984	5・6N	V層上	長方形	弧状	レンズ状	702	518	58	
8	985	6・7M, 6・7N	V層上	楕円形	弧状	レンズ状	582	332	26	
8	1041	9・10K, 9・10L	V層上	格子状	山形	-	1428	122	高24	水田畦畔の痕跡か
-	1066	9K, 8・9L	V層中	不整形	弧状	レンズ状	869	393	13	
16	1071	5M	VI層	楕円形	V字状	レンズ状	232	68	30	
8	1072	6N, 6O	V層上	長方形	弧状	レンズ状	(622)	535	(74)	
-	1221	2P	V層上	長方形	弧状	レンズ状	(298)	259	21	
-	1222	2P	V層上	方形	弧状	レンズ状	(111)	151	20	
-	1223	1・2P	V層上	楕円形	弧状	単層	313	207	11	
11	1238	3N	VI層	-	-	-	(630)	(300)	-	
3	1240	6・7M	IV層	-	-	-	(448)	(290)	-	
5	1241	5M	IV層	-	-	-	(250)	(182)	-	

性格不明遺構 (S X) II 区

図版 No.	遺構番号	位置	確認面	平面形	断面形	覆土	長 (cm)	短 (cm)	深 (cm)	備考
-	4	16J	V層	不整形	弧状	レンズ状	470	398	14	
-	5	16J	V層	楕円形	弧状	レンズ状	403	284	20	
-	50	19G	V層	楕円形	弧状	レンズ状	228	153	13	
-	51	18G	V層	楕円形	台形状	レンズ状	343	218	30	
46	111	16・17J	V層	長方形	弧状	単層	(205)	140	10	
-	119	18J	V層	不整形	弧状	レンズ状	225	180	22	
-	131	16・17H	V層	楕円形	台形状	レンズ状	305	(110)	14	
46	157	16H, 16I	V層	方形	弧状	水平	230	192	14	
-	275	16・17H	V層	楕円形	弧状	レンズ状	125	53	11	
-	332	21H	V層	不整形	弧状	単層	290	(223)	14	
-	359	22G, 22H	V層	不整形	弧状	レンズ状	ℓ330+223	220	14	
-	371	20H, 20I	V層	不整形	弧状	レンズ状	424	225	24	
-	377	21G, 21H	V層	不整形	弧状	レンズ状	(830)	476	25	
-	382	22・23G	V層	不整形	弧状	レンズ状	(280)	(210)	28	
46	420	20F	V層	長方形	弧状	レンズ状	320	187	12	
-	473	21F	V層	円形	弧状	レンズ状	280	(186)	20	
52	511	17I, 17J	V層中	方形	弧状	レンズ状	426	410	46	
52	521	21F	V層中	楕円形	弧状	レンズ状	256	90	12	
52	526	22・23G	V層中	長方形	弧状	レンズ状	(310)	260	24	
51	529	21・22G	V層中	円形	弧状	レンズ状	440	(332)	17	
52	707	16・17I	V層中	不整形	弧状	レンズ状	505	405	22	
84	715	18H	VII層	楕円形	弧状	レンズ状	187	92	14	
84	804	15I	VII層	楕円形	弧状	レンズ状	170	125	32	
84	816	18I	VII層	楕円形	弧状	レンズ状	152	91	16	
84	833	17I	VII層	方形	弧状	レンズ状	310	160	14	
84	925	17I	VII層	不整形	弧状	レンズ状	298	140	22	
53	1214	17J, 17K	V層中	-	-	-	-	-	-	鍛冶炉跡

2 土器観察表

(内例)

- 1 還元した数値は () 付で表し、推定値を記した。
- 2 遺構 複数の遺構から採出した資料は主体的に出土した遺構の上に記した。
- 3 径高指数 器高 / 口径 × 100 で表した数値。この場合、土器の扁平具合を示す。
有台器種は器部の径高指数を表す。
- 4 底径指数 底径 / 口径 × 100 で表した数値。食器具を対象とする。この場合、口縁部の開き具合を示す。
- 5 口径値・底径値 ● / 36で残存割合を示した。
- 6 含有物 土器の胎土中に含まれる鉱物等を記した。「石」：石英「長」：長石「赤」：チャート「黒」：雲母「角」：角閃石「海」：海綿骨針「黒」：黒色粒子「赤」：赤色粒子「白」：白色粒子
- 7 調整痕 「R」は「ロクロ」の略称で、ロクロ等の回転台を使用した調整を表す。「→」は調整の順序を示す。
- 8 回転方向 器蓋の回転方向は、天井部の再調整の回転方向を示す。

No.	出土位置		層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			径高指数	底径指数	口径値	底径値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構					グリッド	口径	底径								器高	内面	外面	底面 / 天井部		
1	I	SB24-P1017	5N4	須恵器	無台環	A	12.2	8.9	3.1	73.0	20	35	B	黒・白	並	灰白 / 灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左		
		5M16																				
2	I	SB24-P1017	5N4	須恵器	無台環	A	(13.8)	(9.8)	3.3	(71.0)	3	5	B	白	並	灰白 / 灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左		
3	I	SB24-P1017	5N4	土師器	無台碗	A	17.2	7.4	5.2	43.0	1	36	C	石・赤・赤	並	浅黄～黒褐 / 黒褐	Rナデ・ミナギ	Rナデ	糸切り	右		
4	I	SB24-P1017	5N4	土師器	無台碗	B	15.8	7.2	5.6	35.4	4	28	E	石・赤・赤	並	黄 / 黒褐	Rナデ	Rナデ	ナデ			
5	I	SB24-P1017	5N4	土師器	小甕	B	12.4				5		A	石・長	並	灰白～にぶい糖 / 灰白～にぶい糖	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			
6	I	SB24-P1046	5M24	須恵器	有台環			6.7				12	B	白	並	灰白 / 灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			
7	I	SB24-SD1007	5N17	須恵器	瓶類								B	黒・白	堅	灰白 / 灰	Rナデ	Rナデ				
8	I	SB24-SD1031	5M24	須恵器	有台環		(13.7)				3		B	黒・白	並	灰白 / 灰	Rナデ	Rナデ				
9	I	SB24-SD1031	5M17	須恵器	瓶類		(11.2)				2		A?	長	並	灰白 / 灰白	Rナデ	Rナデ				
10	I	P1055	601	須恵器	無台環			(7.0)				4	B	白	並	灰白 / 灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左	底部外面・器書「口」	
11	I	P1057	505	須恵器	器蓋	A							C	石・白	並	灰白 / 灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	右	転用眼	
12	I	P1057	505	土師器	小甕	B	13.0				5		A	石・赤・海・赤	並	黄灰 / 浅黄	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	右?		
13	I	P1138	5M25	須恵器	有台環			9.0					B	黒・白	堅	灰白 / 灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			
14	I	P1133 (河川SD976)	8N13	須恵器	水瓶									長・白	堅	褐灰 / 灰	Rナデ	Rナデ	タタキ			
15	I	SK1019	6N12	須恵器	無台環	B(x)	11.8	6.6	2.9	24.6	11	11	B	黒・白	並	灰 / 灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			
16	I	SK1019	6N12	須恵器	無台環	B	12.1	6.8	3.0	24.8	6	14	B	黒・白	堅	灰 / 灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			
17	I	SK1038	7N2	土師器	有台環	A	12.0	7.8	4.4	32.5	21	25	C	石・長	並	灰白 / 灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	右		
18	I	SK1038	7N2	土師器	有台環	C	9.8	6.6	4.1	37.8	4	36	C	長・白	堅	灰 / 灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	右	底部外面・ヘラ記号「x」	
19	I	SK1038	7N2	須恵器	無台環			8.4				6	B	黒・白	並	灰白 / 灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			
		(河川SD976)	8M24, 8N5・7・11・12・21・22, 7O4・9, 8O2																			
		(SD978)	7N9																			
		(SD1013)	7N6																			
		(SD1021)	7N7・8																			
		(SK1039)	7M23																			
20	I		20G25, 21G25, 22C21	須恵器	甕	II	28.0				5		B	長・白	堅	灰白 / 灰白	Rナデ	Rナデ	口: Rナデ 体: タタキ			
			21H1・4・15, 15I22, 17I16																			
			9K11, 9L12, 4M25																			
			8M24, 7N6・8・12・20																			
			8N5・6・7, 7O4																			
			22D1																			
			21G18, 9K11, 7O3																			
21	I	SK1038	7N2	土師器	長甕	B	18.0				9		A	石・長・赤	並	にぶい糖 / にぶい糖	Rナデ	Rナデ	Rナデ			
			7M21																			

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	底残値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構	グリッド					口径	底径	器高							内面	外面	底面/天井部	底面		
22	I	SK1039	7M22 7N2	IV	須臾器	無台坏	A	12.3	7.9	2.9	64.2	12	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	右		
23	I	SK1039	7M22	上層	須臾器	無台坏	B(x)	13.0	7.2	2.7	55.4	16	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	糸切り		体部～底部外面: 墨書「七」	
24	I	SK1039	7M22	上層	須臾器	瓶類			11.5				B	長	並	灰白～灰/灰白～灰	Rナデ	Rナデ				
25	I	SK1039	7M22 (SX985) 7M22, 7N2	IV	須臾器	瓶類			9.7				B	長	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
26	I	SK1059	6N18		須臾器	無台坏			7.0				B	黒・白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ	糸切り	右	体部～底部外面: 墨書「七」	
27	I	SK1064	9L9		須臾器	環蓋	A	14.9		2.7	18.1	9	B	黒・白	並	灰/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	左	瓶用配	
28	I	SK1064	9L9		須臾器	無台坏	B	12.0	7.2	3.0	60.0	23	B	黒・白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	右	板状瓦痕	
29	I	SK1064	9L9		須臾器	無台坏	B	12.9	7.8	3.2	60.5	20	B	黒・白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	左		
30	I	SK1064	9L9		須臾器	無台坏	B	12.4	7.9	2.9	63.7	10	B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	左?		
31	I	SD977	5M22		須臾器	無台坏	A	11.7	7.9	3.2	67.5	14	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ		板状瓦痕	
32	I	SD977	4N17		須臾器	瓶類						B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ			頸部外面:墨書「口」	
33	I	SD977	5N1		土師器	無台坏	A	11.4	5.4	3.6	47.4	16	A	石・長・赤	並	浅黄緑/浅黄緑	Rナデ	Rナデ	糸切り	右		
34	I	SD978	7O17		須臾器	環蓋	A	15.2			3	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	右			
35	I	SD978	7M18		須臾器	無台坏	A	12.8	8.2	3.3	64.1	5	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ			
36	I	SD978	7N14		須臾器	無台坏	A	11.6	6.9	3.2	59.5	4	B	石・黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	右?	板状瓦痕	
37	I	SD978	7M9		黒色土器	無台坏		(16.2)			3	D	石・長・海	並	黒/にぶい・橙	ミナギキ	Rナデ	Rナデ				
38	I	SD979	西 不明 6M19	IV	須臾器	無台坏	B	13.5	7.4	3.1	23.0	9	B	黒・白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	糸切り	右	体部～底部外面: 墨書「七」	
39	I	SD982	5M1 5L21, 4M25 5M12, 16, 21	上層 IV	須臾器	環蓋	B	14.2		3.3	23.2	17	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	左		
40	I	SD982	5M20	IV	須臾器	環蓋	A	15.8		2.5	15.8	8	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	左		
41	I	SD982	5M2	上層	須臾器	無台坏	A	12.7	8.5	3.0	66.9	6	B	石・白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	左		
42	I	SD982	6M16	下層	須臾器	無台坏	A	12.3	8.3	3.4	67.5	5	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	左		
43	I	SD982	6M22	上層	須臾器	無台坏	A	12.3	8.5	3.2	69.1	16	B	白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rナデ	左	外面:スス	
44	I	SD982	4M10	上層	須臾器	無台坏	A	12.1	8.1	2.9	24.0	8	B	黒・白	並	灰/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	左		
45	I	SD982	5M15	上層	須臾器	無台坏	A	11.5	7.3	2.8	63.5	9	B	黒・白	並	灰/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	左		
46	I	SD982	5M8 5L23	底面 IV	須臾器	無台坏	A	11.9	6.9	2.7	22.7	19	B	長・黒・白	並	灰/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	左		
47	I	SD982	4M9, 10 5L23, 3M10 4M9, 10, 14, 15, 20, 25 5M1, 3, 16, 17, 23	上層 IV	須臾器	瓶類		11.8		23.1	16	A	長・黒・白	並	灰白/灰白～灰	口: Rナデ 体: タタキ・ カキメ	Rナデ	Rナデ			肩部外面: 刻書「大」	
48	I	SD982	4M9 (河川SD976) 8N12 7M25	上層 IV	須臾器	長脚瓶		9.4	10.0	(25.5)	17	B	黒・白	堅	灰白/暗灰	Rナデ	Rナデ	Rナデ				
49	I	SD982	6M16	下層	土師器	無台坏	A	11.6	7.4	3.7	31.9	12	A	石・長 子・赤	並	橙/橙	Rナデ	Rナデ	Rナデ	左?	須臾器技法	
50	I	SD982	6M16	下層	土師器	無台坏	B	12.2	6.0	4.0	32.8	18	A	石・子	並	浅黄緑/にぶい・黄緑	Rナデ	Rナデ	糸切り	右	外面全体:スス	
51	I	SD982	6M16	下層	土師器	鍋	B	(27.7)			3	A	石・長・赤	並	淡黄緑/淡黄緑	Rナデ	Rナデ	Rナデ				
52	I	SD982	4M9, 5M6 4L24, 6L11, 11, 14 4M9, 15 5M11, 16, 22 3M15	上層 IV	須臾器	托孔鉢		36.4	13.0	19.2	17	C	長・黒・白	並	灰白/灰白	口: Rナデ 体: タタキ・ カキメ カキメ 体: タタキ・ カキメ	Rナデ	Rナデ				
53	I	SD1006	5N12, 13 5N13 5N15 7L22, 5N14	上層	須臾器	小型壺		6.0			17	B	黒・白	堅	灰白/灰～黒	Rナデ	Rナデ	Rナデ				
54	I	SD1006	6N13	上層	須臾器	無台坏	B	12.9			7	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ				
55	I	SD1006	5N13	上層	須臾器	無台坏	B	12.6	6.8	2.8	22.2	8	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ			

遺物観察表（土器）

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底高指数	口径指数	口残値	底残値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考		
	地区	遺構	グリッド					口径	底径	器高								内面	外面	底胎/天井部	背面				
56	I	SD1014	7N7	上面	須臾器	環蓋	A	14.0				3		B	白	並	内/外	Rナデ	Rナデ						
57	I	SD1014	7N7	上面	須臾器	無台環	B	11.5	6.0	2.7	52.2	14	16	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			右		
58	I	SD1014	7N7	上面	土師器	長頸	B	19.6				8		E	石・長・赤	並	灰白/橙	Rナデ	Rナデ						
59	I	SD1015	5N4	上層	須臾器	無台環	A	12.4	9.4	3.5	75.8	5	9	C	石・長・赤	並	橙/にぶい黄褐色	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			右?		
60	I	SD1015	5N4	上層	土師器	鍋	B	(43.2)				2		A	石・長・赤	並	浅黄褐色/にぶい黄褐色	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			左		
61	I	SD1020	6N20		須臾器	無台環		7.6				14		B	白	並	灰/灰			Rヘラ切			左		
62	I	SD1020	6N25		須臾器	無台環		7.6				11		B	石・赤	軟	灰白/灰白			Rヘラ切			左		
63	I	SD1020 (SK1050)	6N25		須臾器	環蓋	A	14.6				18		B	白	並	粉灰/粉灰	Rナデ	Rナデ	Rナデ					
64	I	SD1018	6N12		須臾器	無台環	B	11.7	7.8	2.9	66.7	13	25	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ					
65	I	SD1021	7N12	上面	須臾器	有台環		6.2				8		B	白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切					
66	I	SD1021	7N7	上面	須臾器	有台環		6.2				13		B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			左?		
67	I	SD1021	7N8	上面	須臾器	有台環		7.4				18		B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			右		
68	I	SD1021	7N12	上層	須臾器	無台環	A	12.1	7.1	3.1	58.7	36	36	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			左		
69	I	SD1021	7N7	上面	須臾器	無台環	A(x)	12.3	7.1	3.0	57.7	11	15	B	黒・白	並	灰/灰			Rヘラ切					
70	I	SD1021	7N21	上層	須臾器	無台環	A(x)	12.2	8.2	2.9	23.8	67.2	6	14	B	黒・白	並	灰/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切				
71	I	SD1021	7N12	上層	須臾器	無台環	A(x)	13.2	8.2	3.0	22.7	62.1	7	10	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切				
72	I	SD1021	7N12	上層	須臾器	無台環	A(x)	12.5	7.9	3.1	24.8	63.2	11	26	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			右?	
73	I	SD1021	7N8	上面	須臾器	無台環	B(x)	12.7	7.4	2.8	22.0	58.3	6	10	B	白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			左?	
74	I	SD1021	7N7	上面	須臾器	無台環	B	13.4	7.8	3.0	22.4	58.2	6	11	B	長・白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切				
75	I	SD1020 (SD1022) (P1060)	6N8 6N20 6N19・20 6N19 6N12・19・20・25 6N16・21	IV	須臾器	甕								B	白	堅	灰白/灰			カキメ・タタキ					
76	I	SD1021	7N12	上層	土師器	鍋	B	(33.6)				2		A	石・赤	並	淡黄褐色/淡黄褐色								
77	I	SD1024	7M5	IV	須臾器	短頸甕		(12.1)				2		B	長	並	灰白/灰白								
78	I	SD1024 (SD979 東)	7M1 7M1・2 7M1・2・13	IV	須臾器	広口甕		14.3	12.0	21.4		15	19	B	石・長・黒・白	並	灰白/灰	Rナデ	Rナデ						
79	I	SD1022	6N14・19		須臾器	無台環	B	12.5	8.1	3.3	26.4	64.8	15	26	B	黒・白	並	灰/灰			Rヘラ切			左	
80	I	SD1022	6N14		土師器	小甕	B	(13.6)				2		A	石・長・赤	並	にぶい黄褐色/暗褐色								
81	I	SD1027 (河川SD976) (SD1024)	8M11 8N7・12 7M3	上面	須臾器	瓶類		12.4					2	B	黒・白	堅	灰白/灰	Rナデ	Rナデ・Rケズリ					右	
82	I	SD1027	8M11	上面	須臾器	無台環	B(x)	12.3	7.2	3.0	24.4	58.5	5	14	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			左	
83	I	SD1027	8M11	上面	須臾器	無台環	B	12.2	6.9	3.3	27.0	56.6	26	36	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			右	
84	I	SD1027	8M11	上面	須臾器	無台環	B	12.1	6.6	2.9	24.0	54.5	9	20	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			左	
85	I	SD1033	6N25		土師器	無台碗	B	12.5	4.3	3.7	29.6	34.4	7	36	B	石・長・赤	並	にぶい黄褐色/明黄褐色	Rナデ	Rナデ	糸切り			右	
86	I	SD1037 (SD1037 東) (SD1037 西)	8L16 8L17 8L17 8L16	下層 上層 下層 IV	須臾器	有台環	A	11.3	6.6	4.5	35.4	58.4	27	28	C	石・長・白	並	赤灰/赤灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			右	
87	I	SD1037	8L18	IV	須臾器	樽瓶		10.0				4		B	石・長	堅	灰白/灰	Rナデ	Rナデ						
88	I	SD1037	8M4		須臾器	瓶類								B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ						体部外面・漆分析対象

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	口径値	底径値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構	グリッド					口径	底径	器高								内面	外面	底面/天井部			
89	I	SD1037(40)(SK1083)	8L23、8M4 8L5 9L6 8L23、8M4・9・13	上層 上面 IV	須臾器	甕								B	黒・白	堅	内/外	内面 灰白/灰白	外面 カキメ・タタキ				
90	I	SD1037	8M4	下層	土師器	長甕						4		A	石・チ	並	内/外	内面 灰白/灰白	外面 Rナデ・カキメ				
91	I	SD1037(SD1085)	8L4・23 8L15	下層 上面	土師器	小甕					20			F	石・長・チ	堅	内/外	内面 灰白/灰白	外面 Rナデ・カキメ				西古志野原、内面：オコゲ
92	I	SD1037	8M3	下層	土師器	小甕					5			A	石	並	内/外	内面 灰白/灰白	外面 Rナデ				内面：オコゲ
93	I	SD1037(東・西) 8M3・4 8M4		IV	土師器	甕	10.8							A	石・長・チ・赤	堅	内/外	内面 灰白/灰白	外面 ナデ				
94	I	SD1037西(SD1037)	8M3	上層	須臾器	有台杯	6.7							B	黒・白	堅	内/外	内面 灰白/灰	外面 Rナデ				
95	I	SD1037西(SD1037)	8L23	有台杯	須臾器	有台杯	8.5	7.5	47.6	59.4	11			B	黒・白	並	内/外	内面 灰白/灰	外面 Rナデ				
96	I	SD1037西(SD1037)	8L12 8L12・17 8L15	下層 IV	須臾器	有台杯	7.4	4.0	27.0	60.7	21			B	黒・白	堅	内/外	内面 灰/灰	外面 Rナデ				
97	I	SD1037西(SD1037)	8L23 8M3		須臾器	無台杯	12.2	9.0	27.0	73.8	24			B	白	並	内/外	内面 灰白/灰白	外面 Rナデ・Rケズリ				板状汪痕
98	I	SD1037西(SD1037)	8M3	上層	須臾器	無台杯	12.2	7.8	27.0	63.9	15			B	白	並	内/外	内面 灰白/灰白	外面 Rナデ				
99	I	SD1037西	8L23 8M9	下層 IV	須臾器	無台杯	12.3	8.5	24.4	69.1	13			B	白	並	内/外	内面 灰/灰	外面 Rナデ				
100	I	SD1037西	8M4 8M9	下層 IV	須臾器	無台杯	11.9	7.8	23.5	65.5	36			B	黒・白	並	内/外	内面 灰/灰	外面 Rナデ				
101	I	SD1037西(SD1037)	8L17 8L17	下層	須臾器	無台杯	12.6	6.7	25.4	53.2	9			B	白	並	内/外	内面 灰白/灰白	外面 Rナデ				
102	I	SD1037西	8L23 8L23	上層 IV	須臾器	無台杯	12.3	8.0	3.1	25.2	65.0	7		B	黒・白	並	内/外	内面 灰/灰	外面 Rナデ				
103	I	SD1037西(SD1037)	8M3 8L22		須臾器	無台杯	12.3	7.4	25.2	60.2	11			B	黒・白	並	内/外	内面 灰/灰	外面 Rナデ				板状汪痕
104	I	SD1037西	8M3 8M3	下層 IV	須臾器	無台杯	11.7	7.4	3.0	25.6	13			B	黒・白	堅	内/外	内面 灰/灰	外面 Rナデ				
105	I	SD1037西	8M3	下層	須臾器	無台杯	12.0	8.0	3.0	25.0	13			B	白	並	内/外	内面 灰白/灰白	外面 Rナデ				
106	I	SD1037西	8L23	上層	須臾器	無台杯	7.2			66.7	36			B	白	並	内/外	内面 灰白/灰白	外面 Rナデ				板状汪痕
107	I	SD1037西(SD1037)	8M3	下層	須臾器	無台杯	7.4							C	長・チ・白	並	内/外	内面 灰白/灰白	外面 Rナデ				
108	I	SD1037西	8M3	下層	須臾器	無台杯	6.8							C	長・白	並	内/外	内面 灰白/灰白	外面 Rナデ				
109	I	SD1037西(SD1037)	8M3・9 8M9	上層	須臾器	無台杯	12.2	8.6	3.2	26.2	70.5	11		B	黒・白	並	内/外	内面 灰白/灰白	外面 Rナデ				
110	I	SD1037西	8L23	下層 IV	須臾器	無台杯	12.2	8.2	3.2	26.2	17			B	黒・白	並	内/外	内面 灰/灰	外面 Rナデ				
111	I	SD1037西(SD1037)	8M4 8M9 9L11	下層	須臾器	無台杯	11.8	7.6	3.5	29.7	64.4	6		B	黒・白	並	内/外	内面 灰白/灰白	外面 Rナデ				底部外面：漆、板状汪痕
112	I	SD1037西	8L23、8M4		須臾器	無台杯	12.6	8.8	4.1	32.5	69.8	15		B	黒・白	並	内/外	内面 灰白/灰白	外面 Rナデ				底部外面：墨書
113	I	SD1037西(SD1037)	8L17 8L18・22 8L17	下層	土師器	鉢	16.8	10.1	6.3		17			C	石・チ	並	内/外	内面 にぶい糖/にぶい糖～黒	外面 Rナデ				Rナデ切→Rケズリ
114	I	SD1037西(SD1037)	8M3 8M4	下層	土師器	小甕	12.1				16			B	石・長	堅	内/外	内面 灰白/灰糖	外面 Rナデ・カキメ				内外面：スス・オコゲ
115	I	SD1037西	8L17	下層	土師器	長甕	20.1				5			A	石・長・赤	並	内/外	内面 糖/灰糖	外面 Rナデ・カキメ				

遺物観察表 (土器)

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	底径値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考	
	地区	遺構	グリッド					口径	底径	器高							内面	外面	底面/天井部	底面/天井部			
116	I	SD1037 西 (SK1083)	8M3 8L17・8M3 9L1 9L21・8M3	IV	須恵器	托鉢鉢		28.4	11.2	15.4		12	A	長	並		灰白/灰白						
117	I	SD1037 東 (SK1083)	8L17	上面	須恵器	無台鉢		11.5	7.3	3.2		23	B	黒・白	並		灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左	板状正痕	
118	I	SD1037 東 (SK1083)	8L17	上面	須恵器	無台鉢		12.0	8.2	2.8		25	B	白	並		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左		
119	I	SD1037 東 (SK1083)	8L17・18 8L18	下層	土師器	銅	(34.3)				3	F		石・長 チ・海	並		にぶい糖/にぶい糖	Rナデ	Rナデ	Rナデ			
120	I	SD1037 東 (SK1083)	8L23 8L22・8M3	下層	土師器	長襲		21.1			5	F		石・チ・赤	並		にぶい糖/にぶい糖	Rナデ	Rナデ	Rナデ			
121	I	SD1216	3M23	上面	土師器	無台鉢		12.8	7.4	3.5		10	C	赤	軟		糖/浅黄糖	Rナデ	Rナデ			須恵器技法 酸化燻焼成	
122	I	SD1219	2N6		土師器	長襲						E		石・海	並		浅黄糖/糖	ヨコナデ・ 当て具	ヨコナデ・ タタキ	Rヘラ切		須恵器技法	
123	I	SD1049	601	上面	須恵器	有台鉢		10.9	6.2	4.5		8	B	黒・白	堅		灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			
124	I	SD1049	601		土師器	短頸甕		6.8			12	E		石・長・雲	並		糖/糖	Rナデ	Rナデ				
125	I	SD1049	601	上面	土師器	長襲		16.5			7	A		石・長 チ・赤	並		糖/糖	Rナデ	Rナデ				
126	I	SD1049	505		土師器	長襲	(16.6)				4	E		石・長 雲・赤	堅		糖/浅黄糖	Rナデ・ ハケメ	Rナデ・ カキメ	Rヘラ切		藍用配	
127	I	SX984	5N20	最下層	須恵器	環蓋		14.0			11	B		黒・白	並		灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			
128	I	SX985	7N1		須恵器	環蓋		11.0	5.9	2.7		8	B	黒・白	並		灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			
129	I	SX985	7N1	上面	須恵器	無台鉢		12.6	7.3	3.4		16	B	白	軟		灰白/灰白			Rヘラ切	左		
130	I	SX985	7N1	上面	須恵器	無台鉢		13.3	8.0	2.5		4	B	白	並		灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			
131	I	SX985	7N1		須恵器	無台鉢		10.9	7.1	2.9		5	B	黒・白	並		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			
132	I	SX985	7N1	上面	須恵器	無台鉢		12.4	7.4	2.9		14	B	黒・白	並		灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左		
133	I	SX985	7N1	IV	須恵器	無台鉢		12.8	8.4	2.8		9	B	黒・白	並		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左		
134	I	SX985	7M22	上面	土師器	無台鉢		5.8			17	B		石・赤	並		灰白/灰~浅黄			糸切り			
135	I	SX985 (SK1013) (SK1039)	6N5, 7N1 7M21, 6N5 6N15 7M22 7N2 6M20・25, 7M1・6・ 16・18, 5N10・14 6N1・5・6・10・12・ 14・15・20・25 7N3・5・6・16・701 7N23	上層 IV	須恵器	甕						C		黒・白	軟		灰白/灰白						
136	I	SX1066	9L11		須恵器	無台鉢		11.9	8.7	3.3		5	B	黒・白	並		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左		
137	I	SX1066	9L6		土師器	小甕		14.8			8	A		石・長 チ・赤	並		浅黄糖/褐灰	Rナデ	Rナデ				
138	I	SX1072 (SK1059)	603 6N18		須恵器	環蓋		15.9		3.5	22.0	3	B	黒・白	堅		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ			
139	I	SX1072	603		土師器	無台鉢		12.1	6.6	3.2		5	C	石・長 チ・赤	並		浅黄糖/浅黄糖	Rナデ	Rナデ	Rナデ			
140	I	SX1072	6N23		土師器	無台鉢		6.4			15	C	海・赤	堅		灰白~浅黄糖/ 浅黄糖	Rナデ	Rナデ	Rナデ	Rナデ	右		
141	I	SX1241	5M21・22	IV	須恵器	無台鉢		11.9	8.1	3.1		16	B	白	並		灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左		
142	I	SX1241	5M22	IV	須恵器	無台鉢		11.6	8.2	3.4		22	B	石・白	並		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左		
143	I	SX1240	6M19	IV	土師器	鍋	(41.4)				2	E		石・赤	並		明赤糖/明赤糖	Rナデ・ 当て具	Rナデ・ タタキ	Rナデ		板状正痕	
144	I	SX1240	6M19	IV	須恵器	無台鉢		11.3	6.8	2.8		8	B	黒・白	並		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			
145	I	SX1240	6M20 7M6	IV	須恵器	無台鉢		11.9	7.2	2.6		24	B	長・白	並		灰/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左		
146	I	SX1240	6M19	IV	須恵器	無台鉢		12.0	7.2	2.9		9	B	黒・白	並		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左	不明皿	

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	口径値	底径値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構	グリッド					口径	底径	器高								内面	外面	底面/天井部	内/外		
270	I	SR25-SD1078	6M14	上面	須恵器	無台坏	A	13.1	7.6	2.8	21.4	58.0	6	B	長	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切		底部外面:墨書「□」(中カ). 転用祝	
271	I	SR25-SD1078	6M19 6M23	上面 IV	須恵器	無台坏			6.6				24	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	右	転用祝	
272	I	SR25-SD1078	6M14	上面	須恵器	無台坏	B	11.9	7.4	3.0	25.2	62.2	8	B	石・黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左	体部~底部外面: 墨書「□」	
273	I	SR25-SD1078	6M18	上面	須恵器	無台坏	A(x)	12.3	7.9	3.2	26.0	64.2	8	B	石	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左	底部外面:墨書「□」	
274	I	SR25-SD1078	6M13	上面	須恵器	無台坏	A	12.0	7.4	2.4	20.0	61.7	8	B	石・長	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	右	底部外面:墨書「中」	
275	I	SR25-SD1078	6M14	上面	須恵器	無台坏			7.0				9	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	糸切り	右	体部外面:墨書「□」(七カ)	
276	I	SR25-SD1078	6M14	上面	須恵器	無台坏	B(n)	12.0	7.0	2.8	23.3	58.3	9	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	右	体部外面:墨書「□」	
277	I	SR25-SD1078 (SX1240)	6M14 6M25	上面 IV	須恵器	無台坏	B(n)	11.8	6.6	3.0	25.4	55.9	5	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左	体部外面:墨書「×」	
278	I	SR25-SD1078 (SD1024) 8M11 (SD1027) 9K23 7M15・20, 8M6・11 9K23, 9L8	6M4 7L24 8M11 9K23 7M15・20, 8M6・11 9K23, 9L8	上面 上面 II IV	須恵器	瓶類			10.6				18	B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				
279	I	SR25-SD1078	6M9	上面	須恵器	横瓶								C	白	並	灰/灰	当て具	タタキ				
280	I	SR25-SD1078	6M19 6M18	上面 IV	土師器	無台碗	B	11.8	4.6	3.2	27.1	39.0	26	B	石・赤	並	にぶい糖/にぶい糖	Rナデ	Rナデ	糸切り	右	灯明皿	
281	I	SR25-SD1078	6M9		黒色土器	無台碗			6.8				19	D	石・海・赤	並	黒/灰白	Rナデ ミガキ Rナデ・ ミガキ	Rナデ	ナデ		体部~底部外面:赤彩	
282	I	SR25-SD1078	6M14	上面	黒色土器	無台碗			7.6				7	D	石・長 石・赤	並	黒/淡黄	Rナデ ミガキ Rナデ・ ミガキ	Rナデ				
283	I	SR25-SD1078	6M9	上面	黒色土器	有台皿?								D	石・海	並	黒/淡黄	Rナデ	Rナデ				
284	I	SR25-SD1078	6M14	上面	黒色土器	有台皿			5.5	2.7	13.9	45.1	3	D	石・長 海・白	並	黒/浅黄糖、黒	Rナデ	Rナデ				
285	I	SR25-SD1078	6M18	上面	土師器	長囊	B	15.3					5	A	石・長 石・赤	並	浅黄糖/浅黄糖	Rナデ	Rナデ			外面:スス	
286	I	SR25-SD1078	6M19	上面	土師器	長囊	B	(20.0)					2	A	石・長 石・赤	並	浅黄糖/浅黄糖	Rナデ	Rナデ				
287	I	SR25-SD1078	6M9		土師器	長囊	B							E	石・長	堅	にぶい糖/糖	当て具	タタキ				
288	I	SR25-SD1078	6M19	上面	土師器	鍋	B	(33.3)					2	A	石・赤・雲	堅	浅黄糖/浅黄糖	Rナデ カキメ	Rナデ				
289	I	SR26-P1106	6N7	上面	須恵器	無台坏							3	B	白	並	灰/灰白	Rナデ	Rナデ				
290	I	P1199	7N1	上面	土師器	小囊	B	13.0					6	F	石・長	並	灰白/にぶい糖	Rナデ	Rナデ				
291	I	P1124	9L6	上面	須恵器	無台坏	A	12.9	9.2	3.1	24.0	71.3	6	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左?		
292	I	P1211	6N11	上面	須恵器	坏蓋	A							B	黒・白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rケズリ	左	転用祝	
293	I	SK1083 (SD1085)	9L1 9L1 8L10 8L7	上面 IV	須恵器	坏蓋	B	13.0		3.1	23.8		21	C	長・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切→ Rナデ	左		
294	I	SK1083 (SD1085)	8L5 8L10 8L4	上面 上面 VI	須恵器	無台坏	A	12.0	8.2	3.2	26.7	68.3	19	B	石・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左		
295	I	SK1083	9L1	上面	須恵器	無台坏	A	11.4	7.8	3.3	28.9	68.4	5	B	白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切			
296	I	SK1083 (SD1085)	8L5, 9L1 8L10	上面	須恵器	無台坏	A	12.7	8.5	2.9	22.8	66.9	5	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切		板状瓦痕	
297	I	SK1083	8L5	上面	須恵器	無台坏	B	11.8	7.8	3.5	29.7	66.1	12	B	白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左	底部外面:墨書「九」	
298	I	SK1083	8L5	上面	須恵器	無台坏	A	12.0	8.2	3.2	26.7	68.3	18	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切		板状瓦痕	
299	I	SK1083	9L6 8K25	上面 IV	須恵器	無台坏	A	12.4	8.2	3.0	24.2	66.1	11	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左?	板状瓦痕	
300	I	SK1083	9L1	上面	土師器	長囊	B	18.2					11	A	石・赤 雲・角	並	灰白/浅黄糖	Rナデ カキメ	Rナデ カキメ				

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	口径値	底径値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考	
	地区	遺構	グリッド					口径	底径	器高								内面	外面	内/外	底面/天井部			
301	I	SK1083 (SD1085) (SX1086)	9L1 9L1 9L6 9L6	上面 上面	土師器	小甕	A	13.0				27		F	石・チ・白	並	樽/灰濁	ハケメ	ハケメ					
302	I	SK1136	8M6		須恵器	有台坏	B	14.3	8.5	7.0	44.1	6	11	B	白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ			左	板状圧痕	
303	I	SK1136	8M6		須恵器	無台坏			8.8				8	B	白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ			左	体部分内・墨書「口」	
304	I	SD1080	6M8	上面	須恵器	有台坏	B	11.6	7.5	3.0	25.9	23	25	B	白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ			左		
305	I	SD1082	9L2・7	上面	須恵器	有台坏	B	11.6	7.5	3.0	25.9	23	25	B	白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ			左		
306	I	SD1085 (SD1082)	9L11 9L7	上層 上面	須恵器	坏蓋	B							C	長・黒・白	並	灰白/灰白					右	口縁部・打ち欠き	
307	I	SD1085	9L11 9L21	上面 IV	須恵器	有台坏	C	9.5	6.3	4.7	44.2	10	13	B	黒・白	並	灰/灰					左?		
308	I	SD1085 (SX1086)	8L15 8L15, 9L11 8L15	上面 IV	須恵器	有台坏	C	10.1	5.6	4.7	41.6	30	36	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ・ Rケズリ			左		
309	I	SD1085	8L9 8L5・10 9L16	上面	須恵器	有台坏	B	15.8	9.5	7.5	44.3	14	15	B	白	堅	灰/赤灰	Rナデ	Rナデ			右?	板状圧痕	
310	I	SD1085 (SK1083)	8L10 9L1	上面	須恵器	無台坏	B	12.9	8.9	3.4	26.4	12	11	B	白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ			右	灯明皿?	
311	I	SD1085 (SK1083) (SX1086)	8L10 8L10 8L5 8L10, 9L6	上面 上面	須恵器	無台坏	A	12.6	7.4	3.7	29.4	18	36	B	石・白	並	灰/灰					左	板状圧痕	
312	I	SD1085	8L4	上面	須恵器	無台坏	A	12.3	7.8	3.6	29.3	9	17	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ			左	底部外面・漆	
313	I	SD1085	8L5・10	上面	須恵器	無台坏	A	12.1	7.8	3.2	26.4	22	36	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ			左	板状圧痕	
314	I	SD1085	8L10		須恵器	無台坏	A	11.7	7.5	3.0	25.6	20	36	B	黒・白	並	灰/灰・浅黄緑	Rナデ	Rナデ			左	酸化硫酸成	
315	I	SD1085	8L8 8L8	VI	須恵器	無台坏	B	11.8	8.3	2.9	24.6	6	36	B	長・黒	並	灰/灰					右	外面・スス、 板状圧痕	
316	I	SD1085	9L11 9L17 9L11	上面 上層	須恵器	無台坏	B	12.3	7.8	3.6	29.3	9	16	B	黒・白	堅	灰/灰白	Rナデ	Rナデ			右?	板状圧痕	
317	I	SD1085 (SX1086)	8L10 8L10		須恵器	無台坏	B	12.4	7.9	3.4	27.4	31	36	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ			左	灯明皿?、板状圧痕	
318	I	SD1085	8L10 9L11	上面	須恵器	無台坏	A	11.5	8.1	2.6	22.6	18	33	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ			左	板状圧痕	
319	I	SD1085	9L11		須恵器	無台坏	A	11.3	7.9	2.9	25.7	20	36	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ			左	底面・墨痕?	
320	I	SD1085 (SK1083)	9L6 9L6 9L6 8L10	上面 IV	須恵器	無台坏	A	12.9	8.1	3.2	24.8	23	33	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ			左	板状圧痕	
321	I	SD1085	8L15		土師器	長甕	B	20.0				5		A	石・長 チ・赤	並	樽/樽	Rナデ	Rナデ					
322	I	SD1085	9L11		土師器	長甕	B	18.1				6		A	石・長・赤	並	浅黄/浅黄緑	Rナデ	Rナデ・ カキメ				外面・スス	
323	I	SD1085	8L10, 9L6	上面	土師器	長甕	B	19.2				15		F	石・長 チ・赤	並	樽/樽	ハケメ	ハケメ					
324	I	SD1085 (SD1084)	9L11 9L17 9L16 9L16	上面 上面	土師器	長甕	B	20.7				3		E	石・長 チ・赤	堅	樽/樽	Rナデ・ カキメ	Rナデ・ カキメ					
325	I	SD1085	9L11		土師器	長甕	B							E	石・長 チ・赤	並	浅黄緑/浅黄緑	当て具	カキメ・ タタキ					
326	I	SD1085	8L5, 9L11 8L10	上面 IV	土師器	長甕	B	28.8				5		F	石・長 チ・赤	並	浅黄緑/にぶい	Rナデ・ カキメ	Rナデ					
327	I	SD1085	8L10		土師器	小甕	B	12.9				7		A	石・長 チ・赤	並	にぶい黄緑/ にぶい黄緑							

遺物観察表 (土器)

No.	出土位置		層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	底径	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考	
	地区	遺構					グリッド	口径	底径							器高	内面	外面	底面 / 天井部			
328	I	SD1085	8L5		土師器	B	13.8			10		A	石・長・白	堅	内/外	内面	外面					
329	I	SD1085	9L11	上面	土師器	B	12.8			10		A	石・黒・赤	並	内/外	内面	外面					
330	I	SD1085	8L10	上面	土師器	B		7.7			36	F	石・赤	堅	内/外	内面	外面			左		
331	I	SD1098	9K23	上層	須恵器	無台坏		8.0		6	B	B	黒・白	堅	内/外	内面	外面			左		
332	I	SD1126	7L25		土師器	B	11.2			6	B	B	石・長・赤	並	内/外	内面	外面					
333	I	SD1126	7L19		黑色土器	有台皿	11.6	4.3	2.9	37.1	1	B	石・長・赤	並	内/外	内面	外面					
334	I	SD1226	3M20		土師器	B	(36.4)			4	F	F	石・赤	並	内/外	内面	外面					
335	I	SX1077	7M16	上面	土師器	B	12.5			6	A	A	石・赤	並	内/外	内面	外面					
336	I	SX1077 (SX985) 7M16, 7N1 (SX1073) 7M17 7N8+13 7M16		上面	土師器	B	17.9			4	E	E	石・長・赤	堅	内/外	内面	外面					
337	I	SX1238	3N14	V	土師器	甕	16.8	7.5	16.8	20	E	E	石・長・赤	並	内/外	内面	外面					
338	I	SX1238	3N14	V	土師器	甕	18.9			30	A	A	石・赤	並	内/外	内面	外面					
339	I	SX1238 (SX984) 6N16 6M7		V	須恵器	瓶類	10.2				21	B	B	黒・白	堅	内/外	内面	外面				
340	I	SX1238 (河川SD976) 8N22 (SD1021) 7N7 3N13		V	須恵器	瓶類	10.4				28	B	B	黒・白	並	内/外	内面	外面				
341	I	河川SD976	8O5		須恵器	坏蓋	(9.9)			4			長・黒	並	内/外	内面	外面					
342	I	河川SD976	8O5		須恵器	坏	(12.1)						白	並	内/外	内面	外面					
343	I	河川SD976	8O5		黑色土器	坏	13.6			6			石・赤	並	内/外	内面	外面					
344	I	河川SD976	8N16 5L20, 6L13	IV	須恵器	坏蓋	13.9	3.4	24.5	28	B	B	黒・白	並	内/外	内面	外面					
345	I	河川SD976	7N10		須恵器	坏蓋						B	黒・白	並	内/外	内面	外面					
346	I	河川SD976	8N8		須恵器	坏蓋	14.0	2.7	19.3	13	B	B	黒・白	並	内/外	内面	外面					
347	I	河川SD976	8N11		須恵器	有台坏	9.5	5.6	46.3	11	7	B	B	黒・白	堅	内/外	内面	外面				
348	I	河川SD976	8N16, 7O10		須恵器	有台坏	13.1	7.5	6.3	57.3	7	16	B	B	黒・白	堅	内/外	内面	外面			
349	I	河川SD976	8N3+4+9+14		須恵器	有台坏	12.8	7.0	6.3	44.5	25	36	B	B	黒・白	並	内/外	内面	外面			
350	I	河川SD976	8N2		須恵器	有台坏	12.4	5.9	5.4	47.6	12	36	B	B	黒・白	堅	内/外	内面	外面			
351	I	河川SD976	8O4+5		須恵器	無台坏	11.8	7.9	3.8	32.2	33	36	B	B	胎土精良	並	内/外	内面	外面			
352	I	河川SD976	8N14+18+19		須恵器	無台坏	12.6	8.2	3.4	27.0	65.1	29	36	B	B	白	並	内/外	内面	外面		
353	I	河川SD976	8N18		須恵器	無台坏	12.6	7.8	3.4	27.0	61.9	16	36	A	A	石・赤	堅	内/外	内面	外面		
354	I	河川SD976	8N21, 7O5, 8O1		須恵器	無台坏	12.1	7.4	2.9	24.0	61.2	13	19	B	B	黒・白	並	内/外	内面	外面		
355	I	河川SD976	8O2		須恵器	無台坏	13.2	8.6	3.3	25.0	65.2	2	18	B	B	黒・白	並	内/外	内面	外面		
356	I	河川SD976	8N14+18+19		須恵器	無台坏	12.3	7.9	3.0	24.4	64.2	29	36	B	B	黒・白	並	内/外	内面	外面		
357	I	河川SD976	8N21		須恵器	無台坏	12.6	8.0	3.1	24.6	63.5	36	36	B	B	黒・白	並	内/外	内面	外面		
358	I	河川SD976	8N12, 9N21		須恵器	無台坏	11.9	7.8	2.8	23.5	65.5	35	36	B	B	黒・白	並	内/外	内面	外面		
359	I	河川SD976	8N21, 8O1		須恵器	無台坏	12.8	8.4	2.8	21.9	65.6	14	36	B	B	黒・白	並	内/外	内面	外面		
360	I	河川SD976	8O11		須恵器	無台坏	12.2	7.9	2.8	23.0	64.8	17	19	B	B	黒・白	並	内/外	内面	外面		
361	I	河川SD976	9M16		須恵器	無台坏	12.2	8.1	2.4	19.7	66.4	9	12	B	B	黒・白	並	内/外	内面	外面		

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			径高指数	口径指数	口径値	底残値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構	グリッド					口径	底径	器高								内/外	内面	外面	底面/天井部		
447	I	河川SD976	8N21		土師器	無台碗	A	13.2	5.0	3.9	29.5	37.9	22	E	長・海・赤	並	釉/釉	Rナデ	Rナデ	糸切り	右	灯明皿?	
448	I	河川SD976	8N4・8・9・13・16		黒色土器	無台碗	B	18.7	7.5	5.7	30.5	40.1	15	D	石・長	並	黒/浅黄緑	Rナデ	Rナデ	糸切り			
449	I	河川SD976	8N2・6		黒色土器	無台碗	B	5.6	5.6			29	D	石・赤	並	黒/黄緑	Rナデ	Rナデ	糸切り				
450	I	河川SD976	8N10・15		黒色土器	無台碗	A	13.7	5.8	4.4	32.1	42.3	10	D	石・海・赤	並	黒/にぶい黄緑~淡黄	Rナデ	Rナデ	糸切り			
451	I	河川SD976	8N8・13		土師器	壺			7.8				13	E	石・長・赤・海	堅	釉/淡緑~灰白	Rナデ	Rナデ	静止糸切り			
452	I	河川SD976	8N14・15・18・19・21・23・24・25		土師器	長環	B	20.2		(30.5)			8	E	長・赤	堅	黒釉/黒濁	Rナデ	Rナデ			外面:スス	
453	I	河川SD976	705・14・803・5		土師器	長環	B	18.6					7	E	石・長・赤	並	浅黄緑/黒濁	Rナデ	Rナデ				
454	I	河川SD976	8N4・9		土師器	長環	B	18.2					7	E	石・長・赤	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				
455	I	河川SD976	8N18		土師器	長環	B	(19.8)					3	E	石・赤・白	堅	淡黄/浅黄緑	Rナデ	Rナデ				
456	I	河川SD976	7019		土師器	長環	B	(21.0)					1	E	石・赤	堅	釉/釉	Rナデ	Rナデ			西古志型	
457	I	河川SD976	7N25・708		土師器	長環	B	20.0					17	E	石・長・赤・雲	堅	釉/釉	Rナデ	Rナデ				
458	I	河川SD976	8N12		土師器	長環	B	23.2					1	F	石・長・赤	堅	灰白/浅黄緑	Rナデ	Rナデ				
459	I	河川SD976	8M25・8N4		土師器	長環	B						7	E	石・雲	並	にぶい黄緑/浅黄緑	Rナデ	Rナデ				
460	I	河川SD976	8N25		土師器	小環	B	10.1					7	E	石・白	並	黒/にぶい黄緑	Rナデ	Rナデ			内面:オコゲ	
461	I	河川SD976	8N18		土師器	小環	B	13.6					4	E	石・赤	並	にぶい黄緑/にぶい黄緑	Rナデ	Rナデ				
462	I	河川SD976	8N7		土師器	小環	B	11.7					6	A	石・赤	並	淡緑/淡緑	Rナデ	Rナデ				
463	I	河川SD976	9M16	IV	土師器	小環	B	12.4					34	A	石・赤・赤	並	浅黄緑/にぶい黄緑	Rナデ	Rナデ			内面:オコゲ	
464	I	河川SD976	8N11		土師器	小環	B	13.7					2	E	石・赤	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ			内外面:スス	
465	I	河川SD976	8N13・802		土師器	小環	B	14.0					12	E	石・長・赤	堅	にぶい黄緑/にぶい黄緑	Rナデ	Rナデ				
466	I	河川SD976	8N18		土師器	小環	B	15.3					3	E	石・赤	堅	浅黄/浅黄	Rナデ	Rナデ				
467	I	河川SD976	801		土師器	小環	B	(16.0)					4	E	石・長・赤	堅	にぶい黄緑/にぶい黄緑	Rナデ	Rナデ				
468	I	河川SD976	8N17		土師器	小環	B	15.1					3	E	石・赤・赤	並	釉灰/釉灰	Rナデ	Rナデ				
469	I	河川SD976	8M25		土師器	小環	B	4.1					36	E	石・長・赤	並	にぶい黄緑/暗濁	Rナデ	Rナデ	糸切り	右		
470	I	河川SD976	8N12・19		土師器	小環	B	7.4					30	E	石・長	並	黒濁/釉~黒濁	Rナデ	Rナデ	糸切り	右?内面:オコゲ		
471	I	河川SD976	806		土師器	小環	B	8.7					22	F	石・長・赤	堅	にぶい黄緑/暗濁	Rナデ	Rナデ	糸切り	左		
472	I	河川SD976	8N4・9		土師器	小環	B	6.4					36	E	石・赤・赤	堅	黒/にぶい黄緑	Rナデ	Rナデ	糸切り	左	外面:スス	
473	I	河川SD976	8N21		土師器	小環	A	16.8	5.3	13.5			20	E	石・長	並	暗黄/黄灰~黒濁	Rナデ	Rナデ			内外面:オコゲ	
474	I	河川SD976	8N12		土師器	鍋	B	(53.4)					2	F	石・長・赤	堅	灰白/黒/灰白	Rナデ	Rナデ				
475	I	河川SD976	7N25・8N21		土師器	鍋	B	33.2					8	E	石・長・赤	堅	にぶい黄緑/にぶい黄緑	Rナデ	Rナデ				
476	I	河川SD976	709		土師器	鍋	B	37.2					3	F	石・長・海	堅	釉/にぶい黄緑	Rナデ	Rナデ			須恵器技法, 内面:スス	
477	I	河川SD976	7019		土師器	鍋	B	(42.6)					2	F	石・赤	堅	にぶい黄緑/にぶい黄緑	Rナデ	Rナデ				
478	I	河川SD976	8N12		土師器	鍋	B	(44.3)					2	E	石・長・赤	堅	浅黄緑/浅黄緑	Rナデ	Rナデ				
479	I	河川SD976	8N14・16		土師器	鍋	B	(47.0)					3	F	石・長・赤・白	並	淡緑/淡緑	Rナデ	Rナデ				
480	I	河川SD976	8N7・8・12・13		土師器	鍋	B	36.6		(14.7)			4	E	石・長・赤	並	浅黄緑/浅黄緑、黒	Rナデ	Rナデ				
481	I	河川SD976	8N23		須恵器	環蓋	A							B	白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rナデ	左	転用皿	
482	I	河川SD976	806		須恵器	環蓋	A	13.7		3.8	27.7		12	B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	左	転用皿	
483	I	河川SD976	8N8		須恵器	環蓋	A	13.7		2.6	19.0		11	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	右	転用皿	
484	I	河川SD976	802		須恵器	環蓋	A							B	長・黒・白	堅	灰/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	左	転用皿	

遺物観察表（土器）

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	口径値	底残値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構	グリッド					口径	底径	器高								内面	外面	内/外	底面/天井部		
485	I	河川SD976	8N11・21	須恵器	坏蓋	A	14.4		2.9	20.1		12		B	長・黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rケズリ→ Rナデ	左	胎用脱 内面:へろ記号「X」		
486	I	河川SD976	8N22	須恵器	坏蓋	A								B	白	並	灰/灰	Rナデ	Rケズリ→ Rナデ	左	胎用脱 内面:へろ記号		
487	I	河川SD976	8N16	須恵器	坏蓋	A								B	石・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱 口縁部:打ち欠き		
488	I	河川SD976	8N11・21	須恵器	坏蓋	A	14.3					3		B	黒・白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱		
489	I	河川SD976	8N3	須恵器	坏蓋	A	12.2					3		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱		
490	I	河川SD976	8N21.705	須恵器	坏蓋	A	13.7					4		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱		
491	I	河川SD976	7014	須恵器	坏蓋		13.2					3		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱 口縁部:打ち欠き		
492	I	河川SD976	8N17	須恵器	有台坏	B	6.7					15		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱		
493	I	河川SD976	8N18	須恵器	有台坏		8.0					14		A	石・長	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	右	胎用脱		
494	I	河川SD976	8N25	須恵器	有台坏		7.8					16		B	黒・白	堅	黒/灰~黒	Rナデ	Rナデ	右?	胎用脱		
495	I	河川SD976	8N9・21・22	須恵器	有台坏	B	13.5		7.7	5.6	37.8	22	36	B	白	並	暗灰/暗灰	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱		
496	I	河川SD976	803	須恵器	有台坏	C	10.3		5.6	5.1	44.7	4	11	B	黒・白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱		
497	I	河川SD976	8N16	須恵器	有台坏	A	12.2		7.0	3.0	24.6	27	36	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱		
498	I	河川SD976	8M25	須恵器	有台坏	B	11.8		7.0	3.0	25.4	23	36	B	黒・白	並	灰/暗灰	Rナデ	Rナデ	右	胎用脱 板状狂痕		
499	I	河川SD976	7019	須恵器	有台坏		7.1					36		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱		
500	I	河川SD976	7010	須恵器	坏蓋	A	15.1		2.7	17.9		6		B	白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱 胎部外面:墨書「□」,		
501	I	河川SD976	8011	須恵器	坏蓋	A	14.7					6		B	白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱 胎部外面:墨書「足」,		
502	I	河川SD976	8N9・16・17	須恵器	坏蓋	A	13.8					5		B	長・黒	並	灰白/灰	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱 胎部外面:墨書「仲」,		
503	I	河川SD976	8N14	須恵器	有台坏		6.4					18		B	黒・白	並	灰白/灰白~灰	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱 胎部外面:墨書「仲」,		
504	I	河川SD976	8N12・13・18	須恵器	有台坏	A	11.8		7.7	4.4	33.1	22	36	C	石・白	堅	灰白/灰白~灰	Rナデ	Rナデ	右	胎用脱 胎部外面:墨書「入」,		
505	I	河川SD976	8N21・22	須恵器	有台坏	B	12.9		6.9	6.2	44.2	30	36	B	白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	右	胎用脱 胎部外面:墨書「仲」,		
506	I	河川SD976	705	須恵器	有台坏	B	13.5					2		B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	右	胎用脱 胎部外面:墨書「大」,		
507	I	河川SD976	8N21.801	須恵器	有台坏	B	12.9					11		B	白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱 胎部外面:墨書「拳」,		
508	I	河川SD976	8N3・16・17	須恵器	有台坏	B	12.6		6.9	5.8	42.1	4	25	B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱 胎部外面:墨書「氷」,		
509	I	河川SD976	802	須恵器	有台坏	B	11.9		8.4	3.5	29.4	70.6	36	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱 胎部外面:墨書「□」,		
510	I	河川SD976	803・6	須恵器	有台坏	A	11.9		7.6	3.0	25.2	63.9	11	B	長・赤・白	並	灰/灰白	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱 胎部外面:墨書「□」,		
511	I	河川SD976	8N9	須恵器	有台坏	A	13.0		8.4	3.1	23.8	64.6	9	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	右	胎用脱 胎部外面:墨書「X」,		
512	I	河川SD976	8N7・8・15	須恵器	有台坏	A	12.7		8.7	3.6	28.3	68.5	7	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱 胎部外面:墨書「□」,		
513	I	河川SD976	8N4	須恵器	有台坏		12.4					7		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱 胎部外面:墨書「七」,		
514	I	河川SD976	8N14	須恵器	有台坏		(11.6)					4		B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱 胎部外面:墨書「底」,		
515	I	河川SD976	8N9, 802	須恵器	有台坏	B	(13.1)					4		B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱 胎部外面:墨書「□」,		
516	I	河川SD976	8N20	須恵器	有台坏	B	12.7		5.8	2.9	22.8	45.7	27	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	右	胎用脱 胎部外面:墨書「□」,		
517	I	河川SD976	8N20	須恵器	有台坏		6.5					19		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱 胎部外面:墨書「七」,		
518	I	河川SD976	8N25	須恵器	有台坏		7.4					13		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	右	胎用脱 胎部外面:墨書「□」,		
519	I	河川SD976	8N16	須恵器	有台坏	B(x)	12.1		7.3	3.0	24.8	60.3	26	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	左	胎用脱 胎部外面:墨書「五」,		

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	口径値	底径値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構	グリッド					口径	底径	器高								内面	外面	内/外	内面		
520	I	河川SD976	8N4		須臾器	無台杯							4	B	黒・白	並		内/灰白	Rナデ	Rナデ	底部/天井部		底部外面・墨書「□」 底部外面・墨書「七カ」
521	I	河川SD976	8N4		須臾器	無台杯 か?								B	白	並		灰白/灰白			Rへら切		
522	I	河川SD976	8N4		須臾器	無台杯		6.3					36	B	黒・白	堅		灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「天」, 板状庄痕
523	I	河川SD976	8N21		須臾器	無台杯		6.8					13	B	黒・白	並		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「□」, 底用脱,口縁部:打ち欠き
524	I	河川SD976	8N13		須臾器	無台杯		(7.6)					4	B	白	堅		灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「□」, 底用脱,口縁部:打ち欠き
525	I	河川SD976	8O11		須臾器	無台杯		7.8					14	B	黒・白	並		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「□」, 底用脱,口縁部:打ち欠き
526	I	河川SD976	7O15		須臾器	無台杯		7.7					11	B	黒・白	堅		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「□」, 底用脱,口縁部:打ち欠き
527	I	河川SD976	8N11		須臾器	無台杯								B	白	並		灰/灰			Rへら切		底部外面・墨書「□」, 底用脱,口縁部:打ち欠き
528	I	河川SD976	8N15・19		黒色土器	椀	B	13.6					19	D	石・チ	並		黒/浅黄緑 にぶい黄緑/ にぶい黄緑	ミガキ ミガキ				底部外面・墨書「七」, 七
529	I	河川SD976	8M25		土師器	無台椀		5.2					16	C	石・長・海	並		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	糸切り		見込み,墨書「□」 (稀カ)
530	I	河川SD976	8N25		土師器	長 筒	B							E	石・赤	並		椀/椀	Rナデ	Rナデ			人面墨書土器
531	I	河川SD976	8N17・18		須臾器	無台杯	A(x)	12.1	7.8	2.8	23.1	64.5	13	B	黒・白	並		灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「山」
532	I	河川SD976	8O1・6		須臾器	無台杯	B	12.6	7.5	3.0	23.8	59.5	32	B	黒・白	堅		灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「大」
533	I	河川SD976	8O6		須臾器	無台杯	A	12.2	7.3	2.8	23.0	59.8	17	B	黒・白	堅		灰/灰			Rへら切		底部外面・墨書「□」 (大カ),板状庄痕
534	I	河川SD976	8N14		須臾器	無台杯	B	12.8	7.5	2.9	22.7	58.6	31	B	黒・白	並		灰白/灰白 灰オリーブ～灰/ 灰オリーブ～灰	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「方」, 板状庄痕
535	I	河川SD976	7O15・8O11		須臾器	無台杯		8.1					30	B	石・白	並		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「木」, 口縁部:打ち欠き,板状庄痕
536	I	河川SD976	8N11・12		須臾器	無台杯	A(x)	11.7	7.1	2.8	23.9	60.7	3	B	白	並		灰白/灰白			Rへら切		底部外面・墨書「前」
537	I	河川SD976	8N6		須臾器	無台杯		7.6					7	B	黒・白	堅		灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「□」
538	I	河川SD976	7O14		須臾器	無台杯		7.2					11	B	白	並		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「□」
539	I	河川SD976	8O6		須臾器	無台杯	B	12.3	7.6	3.1	25.2	61.8	11	B	黒・白	堅		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「□」
540	I	河川SD976	8N4 8N3	IV	須臾器	無台杯		7.4					5	B	海・白	並		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「□」, 板状庄痕
541	I	河川SD976	8M25		須臾器	無台杯	B(x)	11.8	6.6	3.1	26.3	55.9	4	B	赤	軟		灰白/灰白			Rへら切		底部外面・墨書「□」 (日カ)
542	I	河川SD976	8N21		須臾器	無台杯	B(x)	12.3	7.2	2.6	21.1	58.5	36	B	長・黒 赤・白	並		灰白/灰白			Rへら切		底部外面・墨書「□」 (稀カ)
543	I	河川SD976	8O6		須臾器	無台杯	B(n)	12.3	7.8	3.0	24.4	63.4	7	B	黒・白	堅		灰/灰			Rへら切		底部外面・墨書「□」
544	I	河川SD976	7O5・8O1		須臾器	無台杯	A(x)	12.9	7.5	3.2	24.8	58.1	15	B	黒・白	並		灰/灰白			Rへら切		底部外面・墨書「田」
545	I	河川SD976	8N7		須臾器	無台杯	A(x)	12.8	7.7	2.7	21.1	60.2	20	B	黒・白	並		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「□」, 田庄
546	I	河川SD976	8N22		須臾器	無台杯	A(x)	12.2	7.4	2.8	23.0	60.7	25	B	黒・白	並		灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「□」 田庄
547	I	河川SD976	8N23		須臾器	無台杯		7.4					23	B	黒・白	並		灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「□」 田庄,板状庄痕
548	I	河川SD976	8N19		須臾器	無台杯		(8.0)					4	B	白	堅		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「□」 田庄
549	I	河川SD976	7O15		須臾器	無台杯		8.0					14	B	黒・白	並		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「□」 下口,板状庄痕
550	I	河川SD976	8O6		須臾器	無台杯		7.6					9	B	白	堅		灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「□」 (庄カ)
551	I	河川SD976	7O10		須臾器	無台杯	B	12.1	7.1	3.2	26.4	58.7	26	B	黒・白	並		灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「□」, 板状庄痕,底部外面: 漆,転用脱
552	I	河川SD976	8N9		須臾器	無台杯		7.0					31	B	黒・白	並		灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	糸切り		底部外面・墨書「□」, 転用脱

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	底径値	口径値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考	
	地区	遺構	グリッド					口径	底径	器高								内面	外面	底面/天井部				
553	I	河川SD976	8M25		須恵器	無台坏	B	12.6	7.7	2.9	61.1	4	23	B	白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへラ切	左?	底部外面: 墨書「太」, 転用祝		
554	I	河川SD976	806		須恵器	無台坏	B(n)	11.9	7.2	3.0	60.5	10	18	B	黒・白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rへラ切	左	底部外面: 墨書「仲」, 転用祝, 口縁部: 打ち欠き		
555	I	河川SD976	8N16		須恵器	無台坏	A	12.8	7.2	3.2	56.3	27	25	B	黒・白	並	灰白/灰白			Rへラ切	右	底部外面: 墨書「口」(文カ), 転用祝		
556	I	河川SD976	8N12		須恵器	無台坏	A(x)	13.4	7.6	3.0	56.7	8	23	B	黒・白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへラ切	右	底部外面: 墨書「口」(文カ), 転用祝		
557	I	河川SD976	7015		須恵器	無台坏	A(x)	13.2	8.5	2.8	64.4	6	12	B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへラ切	右	底部外面: 墨書「口」, 転用祝		
558	I	河川SD976	8N11		須恵器	無台坏	A(x)	12.9	7.8	3.0	60.5	5	12	B	白	並	灰白/灰白			Rへラ切	左	底部外面: 墨書「口」, 転用祝		
559	I	河川SD976	8N11		須恵器	無台坏			7.6				9	B	石・子・赤・黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへラ切	左?	底部外面: 墨書「口」(文カ), 転用祝		
560	I	河川SD976	11L15		須恵器	盤									黒	堅	灰/灰				左			
561	I	河川SD981(古)	1N15		須恵器	須恵器	A	12.2	8.6	3.3	70.5	32	36	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rへラ切	左			
562	I	河川SD981	607		須恵器	無台坏	A(x)	13.2	8.4	2.6	63.6	3	9	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rへラ切	左			
563	I	河川SD981(古)	2N11・12・16・17		須恵器	無台坏	A	12.6	7.8	3.1	61.9	17	31	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rへラ切	左	転用祝		
564	I	河川SD981(古)	2N7・12・17		土師器	無台坏	B	16.2	7.0	4.9	43.2	3	36	C	胎土精良	並	淡黄/淡黄	Rナデ	Rナデ・Rケズリ	Rケズリ	右			
565	I	河川SD981(古)	3N14		土師器	長巻	B	16.8				5	A	石・長・子・赤	並	にぶい黄緑/浅黄緑~靑灰	ハケメ	ハケメ						
566	I	河川SD981(古)	2N6		土師器	小囊	B	16.7				12	E	石・子・角・白・長・海	堅	浅黄緑/灰黄褐	Rナデ	Rナデ						
567	I	河川SD981(新)	1P3		須恵器	壺										堅	灰/灰	当て具					漆継痕	
568	I	河川SD981(新)	1P4		青磁	盤										堅	オリノブ灰(細葉)/オリノブ灰(細葉)							
569	I	河川SD981	5P8	上層	須恵器	須恵器									海・黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ					
570	I	河川SD981(新)	2021		須恵器	須恵器									石・長	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ					内面: 刻目
571	I	河川SD981	608		須恵器	須恵器		(39.8)				3			黒・白	堅	灰白/灰	当て具	当て具					
572	I	河川SD981(新)	3025		須恵器	須恵器									石・長・海・白	堅	灰/灰	当て具	当て具					
573	I	河川SD981	501	上層	須恵器	須恵器									黒・白	並	灰/灰	当て具	当て具					
574	I	-	8M8	V	土師器	須恵器		16.0				6	F	石・子・赤	並	にぶい黄緑/にぶい黄緑	ナデ	ナデ					古墳時代?	
575	I	-	6L22	V	須恵器	環蓋	A							B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへラ切→Rナデ	右	転用祝, 口縁部: 打ち欠き		
576	I	-	7013 704	IV	須恵器	環蓋	A							B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ			転用祝	
577	I	-	9L22	V	須恵器	無台坏	A	12.8	9.6	3.2	75.0	9	14	B	白	並	靑灰/靑灰	Rナデ	Rナデ	Rへラ切	右			
578	I	-	4N20	IV・V	須恵器	無台坏	B(x)	12.2	7.4	2.8	60.7	20	36	B	黒・白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへラ切	左			
579	I	-	606	V	須恵器	無台坏	A		8.2				5	B	長・黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへラ切	左	底部外面: 墨書「口」, 転用祝		
580	I	-	602	V	須恵器	無台坏								B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへラ切?	左	底部外面: 墨書「口」, 転用祝		
581	I	-	5N23	V	須恵器	無台坏	B	11.8	7.1	3.1	60.2	13	36	B	長・黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへラ切	左	底部外面: 墨書「長」, 口縁部: 打ち欠き		
582	I	-	4M16	V	土師器	無台坏	B	13.0	5.7	3.5	43.8	22	36	B	胎土精良	並	淡黄/淡黄	Rナデ	Rナデ	糸切り	左?			
583	I	-	13M8	V	土師器	小囊	B	(10.8)				2	F	石・長・子・白	並	黄/黄	Rナデ	Rナデ						
584	I	-	5N23	V	土師器	小囊	B?	13.6				6	A	石・長・子	並	灰白/にぶい黄緑	ハケメ・ケズリ							器面: 磨滅
585	I	-	8L25	VI	土師器	須恵器		18.4				18	F	石・赤	並	靑灰/にぶい黄緑								古墳後期
586	I	-	7L15	VI	須恵器	環蓋	A	14.4		3.3	22.9	15	B	長・黒・白	並	灰白~灰/灰白	Rナデ	Rナデ	Rケズリ→Rナデ	左	転用祝			
587	I	-	7M21	VI	須恵器	無台坏	A	12.0	7.9	3.5	29.2	6	20	B	白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへラ切	左	転用祝		
588	I	-	7M14	VI	須恵器	無台坏	B	12.2	7.6	2.9	23.8	7	11	B	黒・白	並	灰白/灰	Rナデ	Rナデ	Rへラ切	左	転用祝		
589	I	-	7M9	VI	須恵器	無台坏	B(x)	12.2	6.4	2.9	23.8	17	18	B	黒・白	並	灰/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへラ切	右?			

No.	出土位置		層位	種別	器形分類	法量(cm)			底高指数	口径指数	口残値	底残値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕			回転方向	備考	
	地区	遺構				グリッド	口径	底径								器高	内面	外面	底胎/天井部				
590	I	-	609	VI上面	須恵器	B	11.9	7.5	3.1	26.1	63.0	8	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左	底部:漆		
591	I	-	8L21	VI	須恵器	B	13.0	7.2	3.0	23.1	55.4	11	B	長・黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	糸切り	右	底部~外部外面: 墨書「七」		
592	I	-	7M23	VI	土師器							13	B	石・長	並	浅黄槽/浅黄槽	Rナデ	Rナデ・ケズリ	Rケズリ	右			
593	I	-	7L18	VI	黒色土器							8	D	赤	並	黒/淡黄		Rナデ・ケズリ	Rケズリ				
594	I	-	8L1	VI	黒色土器							1	D	石・長・赤	並	黒/浅黄槽		Rナデ	Rナデ				
595	I	-	10K21	VI	土師器	B	18.2					7	A	石・長・赤	並	灰白~槽/にぶい黄槽	Rナデ	Rナデ	カキマ				
596	I	-	8L21	VI	土師器	B	17.7					5	E	石・海・赤	並	浅黄槽/槽	Rナデ	Rナデ	Rナデ				
597	II	-	SB1-SD1	V直上	須恵器	B	12.6	7.6	2.8	22.2	60.3	1	B	白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切				
598	II	-	SB1-SD1	V直上	須恵器	A	12.5	7.5	3.3	26.4	60.0	1	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切				
599	II	-	SB3-P176		土師器	B	(223)					3	A	石・長 赤	並	浅黄槽/浅黄槽	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切				
600	II	-	SR5-P180		須恵器	B	12.2	7.3	3.3	27.0	59.8	5	B	白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	右?			
601	II	-	SR5-P206		須恵器	B	(107)					2	B	白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rナデ				
602	II	-	SR5-P209		須恵器	B	14.2	8.5	6.3	40.1	59.9	3	B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左			
603	II	-	SR6-P361		須恵器	B	9.5					12	B	黒・白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切				
604	II	-	SR6-P365		須恵器	A	13.7	9.5	2.9	21.2	69.3	3	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切				
605	II	-	P72		須恵器	A	12.4	7.9	3.5	28.2	63.7	2	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切?→ Rケズリ				
606	II	-	P72		須恵器	A	12.5	8.0	3.2	25.6	64.0	10	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切				
607	II	-	P72		須恵器								C	長・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rケズリ→ Rナデ				転用脱
608	II	-	P90		須恵器	A							B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ					
609	II	-	P116		須恵器	坏蓋							B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ					
610	II	-	P116		須恵器	坏蓋	(胴)						15	A	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ					転用脱
611	II	-	P116		須恵器	有台坏	14.9					5	B	白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ					
612	II	-	P116		土師器	B	10.3					5	A	石・赤	並	浅黄槽/黒濁	Rナデ	Rナデ					
613	II	-	P120		須恵器	A	12.4	7.1	3.3	26.6	57.3	11	B	黒・白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左			
614	II	-	P120		須恵器	A	11.7	8.2	3.1	26.5	70.1	13	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左			
615	II	-	P120		須恵器	A	13.2	9.3	3.4	25.8	70.5	11	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	右			板状正痕
616	II	-	P120		土師器	B	(348)					2	A	石・赤	並	黄槽/にぶい槽	Rナデ	Rナデ					
617	II	-	P159		土師器	B	46.0					5	E	石・長・赤	並	浅黄槽/にぶい黄槽	Rナデ	Rナデ					
618	II	-	P137		須恵器	坏蓋	(134)					4	B	白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ					転用脱
619	II	-	P150		須恵器	A	12.3	7.7	3.2	26.0	62.6	14	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切・ ナデ	左			
620	II	-	P148		土師器	B	(186)					4	A	石・長	並	浅黄槽/槽	Rナデ	Rナデ					
621	II	-	P162		須恵器	坏蓋	(128)					4		白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ					転用脱
622	II	-	P167		須恵器	有台坏	16.4					5	B	白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ					
623	II	-	P178		須恵器	有台坏	10.0	5.9	4.3	38.0	59.0	12	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左			底部~外部外面: 赤彩
624	II	-	P178		土師器	无台碗							D	石	並	浅黄槽/槽	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切				
625	II	-	P179		須恵器	有台坏							B	長・白	並	灰/明濁灰	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左			
626	II	-	P179		須恵器	坏台坏	12.1	8.6	3.2	26.4	71.1	5	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左			板状正痕
627	II	-	P179		須恵器	坏台坏	11.6	7.5	3.0	25.9	64.7	9	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左			
628	II	-	P201		須恵器	有台坏	13.8	9.0	6.5	43.5	65.2	5	B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rヘラ切	左			
629	II	-	P204		土師器	坏台坏	19.2					7	A	石・長 赤	並	黄槽/黄槽	Rナデ	Rナデ					

遺物観察表 (土器)

No.	出土位置		層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	口径値	底径値	胎土	含有物	構成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構					グリップ	口径	底径								器高	内面	外面	内/外		
630	II	P205	18112		須臾器	環蓋	B	12.4	3.1	25.0	15		C	長・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rケズリ→ Rナデ	右	内面: 漆 分析対象		
631	II	P205	18112		須臾器	環蓋	B	15.3			4		B	長・白	並	灰白/明褐灰	Rナデ	Rケズリ→ Rナデ	左			
632	II	P205 (P138) P205 (P349)	18112 21025 18112	IV	須臾器	有台環	B	15.0			8		B	白	並	灰白/灰	Rナデ					
633	II	P205 (P168) P205 (P168)	18112 18117		須臾器	無台環			7.0			36		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	左	板状庄痕	
634	II	P205	18111		須臾器	無台環	A	11.7	3.1	26.5	24	36	B	石・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	左	灯明皿, 板状庄痕		
635	II	P240	17H24		土師器	鍋	B	(33.9)			2		E	石・白	並	糖/糖	Rナデ					
636	II	P251	17118		須臾器	無台環			7.8			16		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	左	口縁部, 打ち欠き, 板状庄痕	
637	II	P349	21G25		須臾器	無台環	A	12.2	2.6	21.3	5	14	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	左			
638	II	P388	20G13		須臾器	有台環	B	11.8	7.7	50.0	5	16	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	左			
639	II	P422	21G20		須臾器	有台環	B		8.6			16	B	長・黒	並	灰白/灰白~灰	Rナデ	Rへら切	左	底部外面: 墨書「千ム」, 板用靨		
640	II	P422	21G20		須臾器	無台環	A	11.4	7.5	27.2	4	12	B	黒・白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	左	板状庄痕		
641	II	P490	16112		須臾器	環蓋	A						B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ・ Rケズリ		左	板用靨, 口縁部: 打ち欠き		
642	II	P444	21G24		須臾器	無台環	A	12.1	6.6	24.8	18	18	B	黒・白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	右?			
643	II	P444	21G24		須臾器	無台環	B	11.6	7.3	25.0	4	7	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	左?			
644	II	P444	21G24		須臾器	無台環			6.8			10	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	左	板用靨		
645	II	SE3	16118		須臾器	環蓋	A	14.6			7		B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切・ Rケズリ	左	第3確認面出土		
646	II	SE3	16118		須臾器	長頸瓶		11.6			6		B	黒	堅	灰/灰	Rナデ				第3確認面出土	
647	II	SE3	16124 17H22, 1712 17H2, 1712・18 1614	II IV V	原始灰軸 陶器	長頸瓶			7.5			20			堅	灰白/灰オリーブ	Rナデ			左?	SE3: 第2確認面出土	
648	II	SE3	16123		須臾器	無台環	A		8.2			15	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rへら切	左?	第3確認面出土		
649	II	SE3	16123		須臾器	無台環	A	11.5	6.8	24.3	13	17	B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	左?	第3確認面出土		
650	II	SE3	16119・23		須臾器	無台環	A	12.5	7.9	29.6	5	21	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	左	第3確認面出土		
651	II	SE3	16123 1618	IV	須臾器	無台環	A	12.2	8.0	29.5	8	21	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rへら切	右	SE3: 第3確認面出土 底部外面: 墨書 「大白」		
652	II	SE3	16119		須臾器	環							C	長	並	灰/灰	当て具				第3確認面出土	
653	II	SE3	16123		土師器	無台碗	A	12.6	3.8	29.4	36	36	E	石・長・赤	並	黄粉/黄粉	Rナデ				第1確認面出土	
654	II	SE3	16124		土師器	無台碗	B	21.0	7.8	34.8	8	21	D	石	並	黒/淡黄	ミカキ	Rナデ・ Rケズリ・ ミカキ		左	第2確認面出土	
655	II	SK125	16H17 16H18	VI	須臾器	無台環	A	11.7	7.9	26.5	12	19	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切				
656	II	SK217	18119・20・24 17120	V	須臾器	環蓋	A	16.6			14		B	白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rケズリ→ Rナデ	左	板用靨		
657	II	SK217	18119		須臾器	環蓋	B						C	石・黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rケズリ	右	板用靨		
658	II	SK217	18120		須臾器	有台環	C	9.3	6.0	43.0	7	15	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切?				
659	II	SK217	18120		須臾器	無台環	A	12.3	8.0	27.6	65.0	24	36	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切?	左	灯明皿?	
660	II	SK217	18120		須臾器	無台環	A	12.9	8.9	21.7	69.0	17	36	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	右	板状庄痕	
661	II	SK294 (P205)	1817・12・13 18112		須臾器	有台環	C	9.9	5.9	48	3	32	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	左			
662	II	SK294	1817・12・13		須臾器	無台環	A	12.4	8.4	31	25.0	27	32	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	左		
663	II	SK294	1811・11・12 1813	IV	須臾器	無台環	B	12.4	8.4	30	24.2	67.7	14	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切		板状庄痕	
664	II	SK294	1817・12・13		土師器	無台環	B	13.6	8.4	48	35.3	61.8	33	E	石・長	並	褐/褐・黒褐	Rナデ		左	灯明皿, 須臾器技法, 板状庄痕	
665	II	SK294	1817・12・13		土師器	無台環	B	12.6	7.0	41	32.5	21	36	E	石・長	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	右	板状庄痕	

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底高指数	口径指数	口径値	底残値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構	グリッド					口径	底径	器高								内/外	内面	外面	底胎/天井部		
666	II	SK294	1817-12-13		土師器	長甕	B	19.0				21		E	長・赤・白	並	内/外	内面	外面				
667	II	SK294	1817-12-13		土師器	長甕	B	23.0				7		E	石・長・赤・白	並	内/外	内面	外面				
668	II	SK294	1817-12-13		土師器	小甕	B	13.2				20		A	石・赤・白	並	内/外	内面	外面				
669	II	SK294	1817-12-13		土師器	小甕	B	8.5				25		F	石・赤・白	並	内/外	内面	外面				
670	II	SK294	1817-12-13		土師器	小甕	B	13.7	7.0	(12.5)		11	36	A	石・赤・白	並	内/外	内面	外面				
671	II	SK294	1817-12-13		土師器	鍋	B	30.7				6		F	石・長・赤・白	並	内/外	内面	外面				
672	II	SK299	18G13		須恵器	有台杯	C	9.6	6.0	4.6	42.7	8	15	B	黒・白	並	内/外	内面	外面				
673	II	SK321	20G16		須恵器	杯蓋	A							B	黒・白	並	内/外	内面	外面				
674	II	SK300 (SK310) 16J6 16H5 18G13 (F697) 18G20 18G13-18 19F12 16J11 18G13		上層 II IV V直上 VI	須恵器	甕	I	23.8				7		B	黒・白	並	内/外	内面	外面				
675	II	SK323	21E21-22		須恵器	長頸瓶								B	白	堅	内/外	内面	外面				
676	II	SK380	21G19		須恵器	有台杯	C	10.5	6.2	4.7	40.0	36	36	B	黒・白	並	内/外	内面	外面				
677	II	SK380 21G15 20G14 (SD385) 22G22		下層 IV	須恵器	長頸瓶		10.5				18		B	黒・白	堅	内/外	内面	外面				
678	II	SK380	21G20	IV	須恵器	無台杯	B(n)	11.8	7.3	2.8	23.7	10	36	B	黒・白	並	内/外	内面	外面				
679	II	SK380	21G19		須恵器	無台杯	A(x)	12.3	7.3	3.1	25.2	30	36	B	黒・白	軟	内/外	内面	外面				
680	II	SK380	21G15		須恵器	無台杯	B(x)	12.0	7.9	3.0	25.0	19	36	B	黒・白	並	内/外	内面	外面				
681	II	SK380	21G19		須恵器	無台杯	B	12.3	7.1	3.0	24.4	15	25	B	黒・白	並	内/外	内面	外面				
682	II	SK380	21G20		土師器	無台杯	B	12.3	5.8	3.9	31.7	5	36	F	長・赤	並	内/外	内面	外面				
683	II	SK380	21G19		土師器	鍋	B	(34.7)				3		A	石・赤・白	並	内/外	内面	外面				
684	II	SK342	23G8		須恵器	有台杯	C	10.9	6.0	4.6	36.7	55.0	4	33	B	黒・白	並	内/外	内面	外面			
685	II	SK342	23G7		須恵器	無台杯	A	12.5	7.3	3.0	24.0	38.4	10	36	B	黒・白	並	内/外	内面	外面			
686	II	SK342	23G3		土師器	無台杯	B	13.0	5.2	3.7	28.5	40.0	26	36	C	石	並	内/外	内面	外面			
687	II	SK429 (SD360) 不明		不明	須恵器	杯蓋	A	14.3				29		B	黒・白	並	内/外	内面	外面				
688	II	SK429	23G2	上面	須恵器	有台杯	C	10.3	6.0	5.0	42.7	58.3	7	36	B	黒・白	堅	内/外	内面	外面			
689	II	SK429	23G1		須恵器	無台杯	B(x)	13.0	7.8	2.9	22.3	60.0	9	24	B	白	並	内/外	内面	外面			
690	II	SK453 (SD9) 16H12, 17H8-13 (SD21) 16J10 17H24 (SD754) (SE856) 17H17 18G7, 15H19, 17H13 15J19, 16J4 17H8 21F1-11, 17H4-17 14H10, 14J1 14J4 17H23		IV V直上 VI 整地	須恵器	甕		11.7		22.4		5		B	白	並	内/外	内面	外面				
691	II	SK516	13J20		土師器	無台杯	A	13.6	9.1	3.6	26.5	66.9	7	15	A	石・長・赤・白	並	内/外	内面	外面			

遺物観察表 (土器)

No.	出土位置		層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	底径	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構					グリッド	口径	底径							器高	内面	外面	底面/天井部		
692	II	SK516	1320	土師器	長囊	B	198			7		F	石・長	並	浅黄橙/浅黄橙	Rナデ・ハケメ		西古志型張			
693	II	SK516	1320	土師器	鍋	B	(32.5)			4		A	石・長・赤・白	並	浅黄橙/浅黄橙	Rナデ・カキメ					
694	II	SD6	1619	須恵器	坏蓋		12.4			5		B	白	並	灰/灰白	Rナデ					
695	II	SD6	1613	黒色土器	無台坏		6.7			7		C	右	並	黒/浅黄橙~黒	Rナデ					
696	II	SD6	1619	須恵器	坏蓋	B	11.6		22.4	5		B	黒・白	並	灰/灰白	Rナデ		転用祝			
697	II	SD6	1620	須恵器	囊							C	白	並	灰/灰	当て具・ハケメ		御礼口・御禮痕			
698	II	SD9	17H8	須恵器	坏蓋	A	15.6			8		B	白	並	灰白/灰白	Rナデ					
699	II	SD9	17H13	須恵器	有台坏			6.4				B	白	並	灰白/灰白	Rナデ					
700	II	SD9	16H14	須恵器	有台坏	C	11.2	7.7	37.5	7	12	B	白	堅	灰/灰	Rナデ					
701	II	SD9	17H8	須恵器	無台坏	A	12.5	8.1	22.4	9	15	B	白	並	灰/灰白	Rナデ					
702	II	SD9	17H8	須恵器	無台坏	A	12.3	7.6	3.4	10	14	B	石・長・白	並	灰白/灰白	Rナデ		板状圧痕			
703	II	SD9	17H8	須恵器	無台坏	A	12.1	8.5	2.9	8	8	B	石・長・白	堅	灰白/灰白	Rナデ					
704	II	SD9	17H8	土師器	小囊	B	(17.7)			1		F	石・長	並	浅黄橙/にぶい橙	Rナデ・カキメ		内面:スス			
705	II	SD42	17I13	須恵器	無台坏	A	12.7	8.9	2.7	3	12	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ		底部外面:墨線,板状圧痕			
706	II	SD42	17I13	須恵器	無台坏	A	12.9	8.4	2.9	4	5	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ					
707	II	SD31	16I5	須恵器	有台坏	B?	15.3	9.3	6.4	6	21	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ					
708	II	SD21	17I6	須恵器	無台坏	A	12.6	9.1	3.3	2	10	B	白	並	にぶい橙/灰白	Rナデ					
709	II	SD21	17I6	須恵器	無台坏	A	12.2	7.6	3.4	8	14	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ					
710	II	SD21	17I6	須恵器	無台坏	B(m)	12.1	7.3	2.6	7	13	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ					
711	II	SD21	16I10	須恵器	有台坏	B	13.5			10		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ					
712	II	SD21	17I6	土師器	小囊	B	(16.2)			2		A	石・長	並	にぶい橙/にぶい橙~黒	Rナデ		外面:スス			
713	II	SD21	16I10	土師器	小囊	B	12.5			5		A	赤	並	にぶい橙/にぶい橙	Rナデ		内面:スス			
714	II	SD33	16I4	須恵器	坏蓋	A	15.2			5		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ		転用祝			
715	II	SD46	17G17	須恵器	有台坏	C	9.8	6.6	5.4	14	36	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ					
716	II	SD93	15M	須恵器	無台坏	A	12.2	8.0	3.1	2	15	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ					
717	II	SD59	14I18	土師器	小囊	B	130			3		E	石・長	並	橙/橙	Rナデ					
718	II	SD128	16H15	土師器	長囊	B	18.3			8		E	石・長	並	淡橙/橙	Rナデ					
719	II	SD231	16H5	土師器	長囊	B	(26.6)			2		E	石・長・赤・白	並	橙/橙	カキメ					
720	II	SD274	19H13	須恵器	無台坏	A	12.1	6.8	3.4	28.1	7	20	B	海・赤・白	軟	灰白/灰白	Rナデ		右		
721	II	SD274	19H8・13-14	須恵器	無台坏	B(x)	12.8	7.5	2.8	18	32	B	石・白	並	灰白/灰白	Rナデ		右			
722	II	SD274	19H7	須恵器	無台坏	B(m)	14.1			5		B	石・白	軟	灰白/灰白	Rナデ					
723	II	SD274	19H13	須恵器	無台坏	B(m)	14.1			6		B	白	軟	灰白/灰白	Rナデ		糸切り			
724	II	SD274	19H7	須恵器	有台坏	B	12.1	6.8	5.8	28	36	B	黒・白	並	暗青灰/暗青灰	Rナデ		右?			
725	II	SD274	19H9	須恵器	長脚瓶							B	黒・白	堅	灰/灰白~黒	Rナデ					
726	II	SD274	18H13・18・19 19H18・19・22-23	須恵器	囊	I	18.5			11		B	白	堅	灰/灰	Rナデ・タタキ					
727	II	SD274	19H14-15	土師器	無台坏	B	11.0	4.2	3.9	16	23	B	石・長・赤	並	橙/橙~褐灰	Rナデ		糸切り			
728	II	SD274	19H7	土師器	無台坏	B	12.2			11		B	石・長	堅	淡黄にぶい橙	Rナデ					
729	II	SD274	19H15	土師器	無台坏	B	14.9			2	8	B	石・長・赤	堅	浅黄橙/浅黄橙	Rナデ		糸切り			
730	II	SD274	19H14	黒色土器	無台坏?		(13.5)			4		D	石・長・海	並	黒/浅黄橙	Rナデ					

No.	出土位置		層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	底径	口径	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構					グリッド	口径	底径								器高	内面	外面	底胎/天井部		
731	II	SD274	19H14・15	土師器	長囊	B	31.4			5			E	石・長	並	浅黄釉/靑灰						
732	II	SD274	19H14	土師器	小囊	B	(13.7)			2			A	長・赤	並	釉/明褐	Rナデ					
733	II	SD274	19H14	土師器	小囊	B		6.5					B	石・長・赤	並	浅黄釉/浅黄釉	Rナデ	糸切り	右			
734	II	SD279	18K7	須惠器	环蓋	A	15.0			2			B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ切→	左			
735	II	SD279	17K10	須惠器	环蓋	A	14.8			14			B	黒・白	並	灰/灰白	Rナデ	Rナズリ	左			
736	II	SD279	17K9	須惠器	环蓋	B	12.4	2.9	23.4	7			C	赤・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナズリ	右			
737	II	SD279	17K10・13	須惠器	环蓋	A	14.3			3			B	黒・白	並	灰白/灰	Rナデ	Rナズリ	左	藍用靑		
738	II	SD279	17K9	須惠器	有台环	B?	13.6	8.6	39.0	63.2	5		B	石・長・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナズリ	左	藍用靑		
739	II	SD279	17K15	須惠器	無台环	A	11.9	7.7	3.0	64.7	6		B	白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナズリ	左			
740	II	SD279	17K8	須惠器	無台环	A	10.5	7.5	3.1	71.4	3		B	黒・白	並	灰白/灰白~灰	Rナデ	Rナズリ	左			
741	II	SD279	17K9	須惠器	無台环	A	12.3	9.2	3.1	25.2	74.8	5	B	白	並	灰/灰	Rナデ	Rナズリ	左	板状注痕		
742	II	SD279	17K10	須惠器	無台环	A	11.9	8.1	3.2	26.9	68.1	12	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナズリ	左			
743	II	SD279	17K12・13	須惠器	無台环	B	11.8	7.4	2.7	62.7	21		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナズリ	左	灯明皿?		
744	II	SD279	17K14	須惠器	囊								B	長	並	灰白/灰	当て具	力キヌ・				
745	II	SD279	17K8	須惠器	囊								B	長	並	灰白/灰白	当て具	タタキ				
746	II	SD279	17K13	須惠器	短頸壺		9.8	10.8	18.5	18	30		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ			融着痕,自然釉	
747	II	SD279	17K10	土師器	鍋	B	24.7			8			E	石・長・赤	並	釉/釉	Rナデ	Rナデ				
748	II	SD279	17K13	土師器	無台碗	A	13.6	6.2	3.3	45.6	3		E	石・長・赤	並	釉/釉	Rナデ	Rナデ			右	
749	II	SD279	17K13	土師器	無台碗?		(17.1)			4			D	石・長	並	黒/浅黄釉	三刃キ	Rナデ				
750	II	SD279	17K13	土師器	長囊	B	(21.6)			3			E	石・赤・白	並	浅黄釉/浅黄釉	Rナデ	Rナズリ				
751	II	SD279	18K6	土師器	小囊	B	12.3			5			E	石	並	淡黄/にぶい黄	Rナデ	Rナズリ				
752	II	SD301	20H6	須惠器	無台环	B(x)	12.5	7.4	2.6	20.8	59.2	4	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナズリ			右?	板状注痕
753	II	SD302	20H16	須惠器	無台环	B(x)	12.5	7.4	2.6	20.8	59.2	1	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナズリ			右	
754	II	SD302	20H16	土師器	小囊	B	(17.5)			2			A	赤	並	淡釉/淡釉	Rナデ	Rナズリ				
755	II	SD306	21F9	須惠器	有台环	B	13.8	8.0	7.4	47.8	58.0	5	B	長・黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナズリ			左?	体部外面:墨書「□」
756	II	SD306	21F13	須惠器	有台环	B				18			B	黒・白	硬	灰白/灰	Rナデ	Rナズリ			右	
757	II	SD317	21H10	須惠器	有台环	B	13.5			5			B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナズリ				
758	II	SD317	20H10	須惠器	長囊	B	(18.5)			3			E	長・赤	並	釉/浅黄釉	Rナデ	Rナズリ				
759	II	SD317	21H11	須惠器	無台环	A	12.6	6.6	3.1	24.6	52.4	13	B	石・白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナズリ				
760	II	SD317	21H11	須惠器	無台环	A	13.3	8.0	3.0	22.6	60.2	8	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナズリ				
761	II	SD317	21H6	須惠器	無台环	B(x)	11.8	7.5	2.5	21.2	63.6	3	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナズリ				右?
762	II	SD343	22G25	須惠器	無台环	A	12.2	7.6	2.7	22.1	62.3	4	B	黒・赤	並	灰/灰	Rナデ	Rナズリ				左?
763	II	SD343	22G25	土師器	小囊	B	14.7			5			A	石・長・赤	並	釉/釉	Rナデ	Rナズリ				
764	II	SD350	23E11	須惠器	环蓋	A	14.2		3.2	22.5			B	黒・白	並	灰/灰白	Rナデ	Rナズリ				
765	II	SD350	23F8	須惠器	环蓋	A	14.8			1			B	長	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナズリ				
766	II	SD350	23F13	須惠器	有台环		8.8			13			C	石・長	並	にぶい黄釉/浅黄釉~にぶい濁	Rナデ	Rナズリ				
767	II	SD350	23F8	須惠器	無台环	A	11.8	8.2	3.0	69.5	13		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナズリ				
768	II	SD350	23F8	須惠器	無台环		(7.9)			7			B	黒・白	並	灰白/灰	Rナデ	Rナズリ				

遺物観察表(土器)

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(m)			口径	底径	口径指数	底径指数	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構	グリッド					口径	底径	器高								内面	外面	底面	天井部		
769	II	SD350	23E11・12・17 23E12・17	IV	土師器	長甕	B	20.0				19		A	石・チ・赤	並	浅黄褐色/浅黄褐色	カキス・タタキ	カキス・タタキ				
770	II	SD350	23E12・17		土師器	小甕	B	15.6				6		A	石・チ	並	浅黄褐色/浅黄褐色	Rナデ	Rナデ				
771	II	SD350	23F8		土師器	長甕	B	(21.3)				2		A	石・長・チ	並	淡褐色/淡褐色	Rナデ	Rナデ				
772	II	SD350	23E11		土師器	小甕	B		7.3			25		A	石・長・チ チ・赤	並	褐色/にぶい褐色	Rナデ	Rナデ	静止糸切→ ナデ			
773	II	SD360	23F18		須恵器	有台坏		6.4				8		B	白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				
774	II	SD360	23F22		須恵器	無台坏	B	12.1	6.8	3.0	24.8	56.2		B	石・黒・白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				
775	II	SD360	23F23		須恵器	無台坏	B	11.7	7.7	3.3	28.2	65.8		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				
776	II	SD360	23C4 23C4 23C3	底面 VI	須恵器	無台坏	A	12.2	8.4	2.9	23.8	68.9		B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ			口縁部:打ち欠き	
777	II	SD360	23F22・23 23F23	V	須恵器	無台坏	A	12.2	7.7	3.1	25.4	63.1		B	黒・白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ			底面外面:墨書「□」	
778	II	SD360	23F22・23, 23C4		土師器	長甕	B	18.7				8		A	石・長・チ	並	浅黄褐色/浅黄褐色	Rナデ・タタキ	Rナデ・タタキ			外面:スス	
779	II	SD360	23C4 23C8		土師器	鍋	B	(26.4)				3		A	石・長・チ	並	褐色/褐色	Rナデ	Rナデ				
780	II	SD378	21C4	下層	須恵器	坏蓋	A	16.2		3.2	19.8	23		B	黒・白	並	灰白/灰	Rナデ	Rナデ	Rケズリ→ Rナデ			
781	II	SD378	21C4 23F8・12 21F10	下層 IV VI	須恵器	坏蓋		16.1				11		B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
782	II	SD378	21C4 21C4 22G24	下層 IV V	須恵器	坏蓋		18.5				10		B	白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
783	II	SD378	21C4 21C4 21G9	下層 IV	須恵器	有台坏	C	10.0	6.1	5.0	45.0	61.0		B	石・白	並	灰/灰白	Rナデ	Rナデ				
784	II	SD378	22E25	下層	須恵器	有台坏		5.6				11		B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
785	II	SD378	21C4 22B6 21F10	下層 IV VI	須恵器	有台坏	B	13.0	7.5	6.1	43.1	57.7		B	黒・白	堅	灰白/灰	Rナデ	Rナデ				
786	II	SD378	21C4 21F10 21G15	下層 IV	須恵器	無台坏	A	12.4	7.6	3.3	26.6	61.3		B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
787	II	SD378	21F10 21F5	上層 IV	須恵器	無台坏	A	12.0	7.3	3.3	27.5	60.8		B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
788	II	SD378	22C4 21G4・9 21G2		須恵器	無台坏	A(X)	12.5	7.3	3.3	26.4	58.4		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ			板状庄痕	
789	II	SD378	21C4	IV	須恵器	無台坏	A	11.5	6.8	2.9	25.2	59.1		B	黒	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				
790	II	SD378	21C4	下層	須恵器	無台坏	A(X)	13.6	8.1	3.4	25.0	59.6		B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
791	II	SD378	21C4	下層	須恵器	無台坏	B	13.7	7.6	3.5	25.5	55.5		B	黒・白	並	灰白/灰	Rナデ	Rナデ			板状庄痕	
792	II	SD378	21F24	下層	須恵器	無台坏	A	12.9	6.6	3.0	23.3	51.2		B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
793	II	SD378	21C4	下層	須恵器	無台坏	B(X)	11.7	6.3	2.5	21.4	53.8		B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
794	II	SD378	21G9	下層	須恵器	甕		14.0				8		B	黒・白	堅	灰白/灰	Rナデ	Rナデ				
795	II	SD378	21F24 (P391) 18G2	下層	須恵器	鉢		21.8				5		C	白	並	灰白/灰	Rナデ	Rナデ			金属器模倣	
796	II	SD378	21G9	下層	土師器	無台坏	A	12.7	6.7	3.4	26.8	52.8		E	石・長 海・赤	並	淡褐色/灰白	Rナデ	Rナデ				
797	II	SD378	21C4	下層	土師器	小甕	B	(13.1)				1		A	石・長・赤	並	浅黄褐色/にぶい黄褐色	Rナデ	Rナデ				
798	II	SD378	21C4	下層	土師器	長甕	B	14.6				16		A	石・長 チ・赤	並	灰白/にぶい褐色	Rナデ・カキス	Rナデ・カキス				
799	II	SD378	21C4	下層	土師器	鍋	B	(44.6)				3		A	石・長 チ・赤	並	浅黄褐色/褐色						
800	II	SD442	21G5・10		須恵器	坏蓋	A	12.3		3.4	27.6	15		C	白	並	灰褐色/にぶい褐色	Rナデ	Rナデ	Rへラ切→ Rナデ		瓶用呪	

No.	出土位置		層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	底径値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構					グリッド	口径	底径							器高	内面	外面	底面/天井部		
801	II	SD442	21G5	須恵器	有台环	B	15.6			5		B	白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ			
802	II	SD442	21G5	須恵器	無台环	B	12.9	9.1	3.3	70.5	4	B	白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ			
803	II	SD426	18H19	須恵器	环蓋	A	(15.3)			2		B	黒・白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左		
804	II	SX131 (SX275)	17H11 16H15	須恵器	有台环	A	11.7	6.8	3.4	58.1	19	B	黒・白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ			
805	II	SX131	16H15	須恵器	無台环	B	12.1	7.5	3.3	62.0	5	B	白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ			
806	II	SX131	17H11	土師器	長裏	B	(18.3)			4		A	石・赤	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ			
807	II	SX111	16J10	須恵器	有台环			6.3				B	白	軟	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左		
808	II	SX5	16J7	須恵器	甕							B	石・長・黒	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ			
809	II	SX157	16H23	須恵器	有台环		13.1			6		B	黒・白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ			
810	II	SX157	16H24	須恵器	無台环	A	11.8	8.6	3.1	72.9	12	B	黒・白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左		
811	II	SX157	16H23	土師器	小裏	B	(10.4)			2		E	石	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ			
812	II	SX377	21H9	須恵器	有台环			6.1				B	白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左	酸化磁焼成	
813	II	SX377	21H9	須恵器	無台环	B	11.2	6.8	2.9	60.7	5	B	黒・白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左		
814	II	SX377	21H9	須恵器	長頸瓶		(9.8)			4		B	黒・白	堅	内/外	Rナデ	外面	Rナデ			
815	II	SX377	21H3	土師器	無台碗	B	15.5	6.8	6.0	38.7	2	C	石・長・赤	軟	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左		
816	II	SX420	20F16	須恵器	無台环	A	11.9	7.5	3.0	63.0	1	B	白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ			
817	II	-	20F17	珠洲焼	片口鉢								白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ			
818	II	-	16H9	珠洲焼	片口鉢		(27.4)			4			黒・白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ			
819	II	-	17H25	中世土師器	皿		(11.6)	(8.0)	3.0 (25.9)	4				並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ		灯明皿	
820	II	-	16H12	唐津焼	皿		5.3			23				堅	内/外	Rナデ	外面	Rナデ		胎土目	
821	II	-	16H5	須恵器	环蓋	A						B	黒・白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	右		
822	II	-	21G25	須恵器	环蓋	A						B	白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左		
823	II	-	17J4・5	須恵器	环蓋	A	13.7	2.7	19.7	1		B	黒・白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左		
824	II	-	18G24	須恵器	环蓋	A						B	黒・白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ			
825	II	-	16I5	須恵器	环蓋	A	16.0		3.2	20.0	8	B	黒・白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左		
826	II	-	21F6・11 21F11 21F11	須恵器	环蓋	A	15.4	2.5	16.2	8		B	黒・白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ		口縁部・打ち欠き、 頸れ口・研磨痕？ 口縁部・打ち欠き、 頸れ口・研磨痕？	
827	II	-	17H11	須恵器	环蓋	A						B	白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左		
828	II	-	18G9	須恵器	环蓋	B	14.6			3		B	黒・白	堅	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左		
829	II	-	18H19	須恵器	有台环			7.1			12	C	石・白	軟	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左？		
830	II	-	18F20, 18G2	須恵器	有台环	A	13.3	8.4	4.0	25.6	63.2	3	B	黒・白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左	
831	II	-	17H17	須恵器	有台环	B	15.4	9.6	8.2	46.8	62.3	4	B	黒・白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左	高台前面・別個体の 口縁部分融着
832	II	-	16I9, 17I7	須恵器	有台环	C	11.3	7.5	4.4	35.4	66.4	2	B	長・白	堅	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	右	
833	II	-	17I9・17 17I3	須恵器	有台环	C	11.0	6.9	4.8	39.1	62.7	11	B	黒・白	堅	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	右	
834	II	-	19H7・11	須恵器	有台环	B	12.5	6.8	5.7	42.4	54.4	7	B	黒・白	堅	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左	
835	II	-	17I13	須恵器	有台环	B	13.0	8.1	6.2	43.1	62.3	2	B	黒・白	堅	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左	
836	II	-	16H20, 16I15 16H25	須恵器	有台环	C	11.4	7.0	5.0	39.5	61.4	14	B	黒・白	並	内/外	Rナデ	外面	Rナデ	左	瓶用呪

遺物観察表 (土器)

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底高指数	口径指数	口径値	底値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構	グリッド					口径	底値	器高								内面	外面	底胎/天井部	底胎/天井部		
837	II	-	17J3, 18J11	IV	須恵器	有台坏	B	13.5	8.1	6.2	40.7	60.0	10	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ・Rケズリ	Rへら切	右		
838	II	-	20H10・15 20H10	IV	須恵器	有台坏	B	13.6	7.6	5.2	34.6	55.9	6	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切	右	板状正痕	
839	II	-	14J19	IV	須恵器	無台坏	B	11.9	8.8	3.3	27.7	73.9	28	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切	左	板状正痕	
840	II	-	17H19	IV	須恵器	無台坏	B	12.4	8.8	3.3	26.6	71.0	5	B	黒	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切	右	板状正痕	
841	II	-	22H13	IV	須恵器	無台坏	A	12.2	8.4	3.2	26.2	68.9	10	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切	右		
842	II	-	21G19	IV	須恵器	無台坏	B(x)	11.3	7.0	2.8	24.8	61.9	22	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rへら切	右	灯明皿?	
843	II	-	18H17	IV	須恵器	無台坏	B(x)	12.1	7.5	3.1	25.6	62.0	3	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切・ナデ	右	灯明皿	
844	II	-	21G19	IV	須恵器	無台坏	A	12.1	7.4	3.3	27.3	61.2	22	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切	左		
845	II	-	22G13	IV	須恵器	無台坏	A	12.2	7.5	3.2	26.2	61.5	20	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切	左		
846	II	-	19H6	IV	須恵器	無台坏	B	12.1	6.2	2.9	24.0	51.2	5	B	白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rへら切	右	胎用配	
847	II	-	23E11	IV	須恵器	無台坏	A	12.2	8.6	3.3	27.0	70.5	11	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切	左	底部外面: 墨書「春」, 口縁部: 打ち欠き, 側口: 研磨痕	
848	II	-	19G19	IV	須恵器	無台坏	B	13.0	8.5	3.3	25.4	65.4	5	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切	左	口縁部: 打ち欠き, 板状正痕	
849	II	-	21F24	IV	須恵器	短頸甕		10.0					7	B	黒・白	並	灰白/灰	Rナデ	Rナデ				
850	II	-	18J11・12	IV	須恵器	長頸短頸甕		15.0					15	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ・カキメ・タタキ	カキメ・タタキ				
851	II	-	17G23, 16H5 17H2・8, 17I5・8 17I1 (SD21)	IV	須恵器	甕	I	20.0					4	B	石・長 黒・白	並	灰/灰	Rナデ・カキメ・タタキ	Rナデ・カキメ・タタキ				
852	II	-	21G9	IV	須恵器	加工口甕								C	白	並	灰白/灰白	当て具	当て具				
853	II	-	19H19	IV	須恵器	加工口甕								C	白	並	灰/暗灰	当て具	当て具				
854	II	-	16I10・15	IV	須恵器	瓶類		4.4					5	B	黒・白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
855	II	-	18J20	IV	須恵器	長頸瓶		9.6					25	B	黒・白	堅	褐灰/暗灰~褐灰	Rナデ	Rナデ				
856	II	-	15I23	IV	須恵器	長頸瓶		(12.4)					3	B	黒・白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
857	II	-	18J24	IV	須恵器	長頸瓶		12.8					4	B	黒・白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
858	II	-	16I15, 17I4・5・19・23・24・25, 17I4 18K8 (SD279)	IV 整地 V VI	須恵器	瓶類		14.6						A	黒・白	堅	灰白/灰	Rナデ	Rナデ	Rへらナデ?	左		
859	II	-	16I11 16J1	IV VI	須恵器	横瓶		10.0					6	B	黒・白	並	灰白/灰白	当て具	当て具				
860	II	-	23E12, 22F5 22E10 23F9 (旧河蓮)	IV V直上 V	須恵器	横瓶								A	長・黒	堅	灰白/灰白	Rナデ・カキメ・タタキ	Rナデ・カキメ・タタキ				
861	II	-	17J8	IV	須恵器	瓶類		11.6						B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ	Rへら切→Rナデ	左		
862	II	-	16I18	IV	土師器	小甕	B	12.2	6.2	(11.5)			8	E	石・赤	並	糖/糖	Rナデ	Rナデ		右	内外面: スス	
863	II	-	17I24	整地	須恵器	無台坏	A	11.1	7.8	2.7	24.3	70.3	7	B	白	並	灰/青灰	Rナデ	Rナデ	Rへら切	左		
864	II	-	16I4	整地	須恵器	無台坏	B	12.7	9.1	2.7	21.3	71.7	6	B	黒	並	灰/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切	右	板状正痕	
865	II	-	17I22	整地	須恵器	無台坏	B	12.3	7.8	3.2	26.0	63.4	7	B	白	並	青灰/青灰	Rナデ	Rナデ	Rへら切	右		
866	II	-	17I23	整地	須恵器	無台坏	B	11.2	7.5	3.3	29.5	67.0	19	C	長	堅	灰/青灰	Rナデ	Rナデ	Rへら切	右	板状正痕	
867	II	-	16I14	整地	須恵器	横瓶		11.0					8	B	黒・白	並	灰白/灰	Rナデ	Rナデ				
868	II	-	17I13	整地	土師器	盤		17.8	13.3	2.3	12.9	74.7	3	C	石	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	Rへら切	右		

遺物観察表 (土器)

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	口径値	底径値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考		
	地区	遺構	グリッド					口径	底径	器高								内/外	外面	内面	外面			底面/天井部	
909	II	SK510	1611・17 16117 16117	下層 V	土師器	長巻	B	18.0				7		E	石・長・チ	並	浅黄/にぶい黄	Rナデ Rナデ・ケズリ	Rナデ・ケズリ						
910	II	SK510	16111・16・17 16117	下層	土師器	銅	B	35.4				16		A	石・長・チ・赤	並	黄/にぶい橙	Rナデ Rナデ・カキメ・多々キ	Rナデ・カキメ・多々キ				外面: スス		
911	II	SK520 (SD378) (SD442)	22G19 21F15 不明 22G22, 23C20	上層 IV	須恵器	折縁杯	B	12.5	6.8	3.8	24.0	11	36	A	石・長	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ						
912	II	SK520 (SD373) (SD378)	21G4 21C4 21C4	最下層 下層	黒色土器	高盤	B	18.2				12		F	石・長・チ	並	黒/浅黄橙	Rナデ・Rナデ	Rナデ・Rナデ						
913	II	SD519	23G6	下層	土師器	小囊	B	12.5				9		A	石・長・チ・赤	並	にぶい黄橙/浅黄橙	Rナデ・カキメ	Rナデ・カキメ						
914	II	SD709	17118		土師器	無台杯	A	11.4	6.8	3.6	31.6	19	26	A	石・長・チ・赤	堅	黄/橙	Rナデ	Rナデ						
915	II	SD525南	21G10 21F12	V	須恵器	杯蓋	A	15.1		3.1	20.5	9		B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ・Rナデ						
916	II	SD525南	22G16		須恵器	無台杯	B	11.7	7.4	3.3	28.2	5	18	B	石・白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ						
917	II	SD525南	21G10		須恵器	無台杯	B	13.5	9.0	3.2	23.7	6	11	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ						
918	II	SD525南	22G18		須恵器	無台杯	A	12.1	7.8	3.0	24.8	3	12	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ						
919	II	SD525南	21G10		須恵器	無台杯	A(X)	12.4	8.5	3.2	25.8	3	25	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ						
920	II	SD525南	22G11		土師器	長巻	B	20.4				6		A	石・チ	並	にぶい黄/にぶい黄	Rナデ・カキメ	Rナデ						
921	II	SD525南	22G11		土師器	長巻	B	18.8				7		E	石・長・雲	並	黄/橙	Rナデ	Rナデ						
922	II	SD525南	22G11		土師器	長巻	B	5.6				36		F	石・長・チ	並	浅黄橙/にぶい黄橙	Rナデ	Rナデ						
923	II	SX511	17119		須恵器	杯蓋	A	13.1		3.3	25.2	5		A	石・長	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ						
924	II	SX511	17119		須恵器	杯蓋	A	13.5		3.0	22.2	9		B	黒	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ						
925	II	SX511	17119		須恵器	有台杯	B	14.4	8.0	7.0	45.1	8	11	B	長	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ・Rナデ						
926	II	SX511	17123		須恵器	無台杯	B	11.8	6.0	3.6	30.5	15	19	C	石・長	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ						
927	II	SX511	17119・24		須恵器	無台杯	B	11.8	8.8	3.4	28.8	74.6	27	36	B	黒	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ					
928	II	SX511	17119		須恵器	無台杯	B	11.7	8.1	3.0	25.6	31	36	B	白	並	灰/灰黄~黄灰	Rナデ	Rナデ						
929	II	SX511	17119		須恵器	無台杯	B	12.5	8.7	3.3	26.4	30	36	B	白	並	灰/灰白	Rナデ	Rナデ						
930	II	SX511	17119		須恵器	無台杯	B	12.4	8.6	3.1	25.0	3	6	B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ						
931	II	SX511	17123		須恵器	無台杯	B	11.7	7.0	2.8	23.9	13	14	B	黒・赤	並	淡黄橙/にぶい黄	Rナデ	Rナデ						
932	II	SX511	17119		土師器	小囊	B	12.2				12		A	石・長・赤	並	淡黄橙/淡黄橙	Rナデ	Rナデ						
933	II	SX511	17119		土師器	小囊	B	6.5						A	石・チ・赤	並	淡黄橙/淡黄橙	Rナデ	Rナデ						
934	II	SX511	17119・23・24 1713		土師器	小囊	B	15.3	6.8	(13.5)		10	36	F	石・長・チ	堅	黄/にぶい黄橙	Rナデ・ハケメ	Rナデ・ハケメ						
935	II	SX511	17117 17118		土師器	長巻	B	19.6				8		A	石・チ	並	黄/にぶい黄	Rナデ	Rナデ						
936	II	SX511	17119・24		土師器	長巻	B	19.2				7		A	石・チ・赤	並	灰白~にぶい黄/にぶい黄	Rナデ・カキメ・ハケメ	Rナデ・カキメ・ハケメ						
937	II	SX511	17119		土師器	長巻	B	20.8				4		E	石・白	堅	黄/橙	Rナデ・ハケメ	Rナデ・ハケメ						
938	II	SX517	1512		須恵器	無台杯	B	12.0	7.4	3.1	25.8	61.7	1	7	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ					
939	II	SX521	21F5		須恵器	有台杯	B	13.7	7.7	6.3	41.6	56.2	15	21	B	黒・白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ					
940	II	SX521	21F4		須恵器	無台杯	B	12.0	7.6	3.0	25.0	63.3	13	17	B	白	堅	黄灰/明黄灰	Rナデ	Rナデ					
941	II	SX521	21F4・5 21F4・5	V	須恵器	無台杯	A	13.4	7.8	3.0	22.4	5	36	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ						

遺物観察表 (土器)

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	口径値	底径値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構	グリッド					口径	底径	器高								内面	外面	底面/天井部			
981	II	-	1614 16H14	V IV	須恵器	無台坏	B	13.1	6.2	(4.0)	47.3	6	14	B	海・黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	糸切り	右?			
982	II	-	14I23	V	須恵器	無台坏	B	12.3	8.7	3.0	70.7	4	22	B	長・黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	左	底部外面・墨書「□、 □□」 削れ口・研輪痕?		
983	II	-	19H14	V	須恵器	無台坏	A	12.5	8.9	3.2	71.2	14	32	B	白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	右	底部外面・墨書「九」		
984	II	-	18G4	V	須恵器	無台坏	B	12.7	8.4	3.2	66.1	2	13	B	赤・白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切	左	底部外面・墨書「六行」		
985	II	-	17K13	V	須恵器	甕								A?	石・長 海・白	並	灰/灰	ハケム・ タタキ					
986	II	-	19F13	V	須恵器	甕	IV	(58.6)				2		C	長・黒・白	並	灰/灰	Rナデ・ タタキ			漆線風 口縁部・櫛歯状文		
987	II	(SD196)	20I2 20I22	V	須恵器	小甕 有台坏		6.5					36	A	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	ケズリ				
988	II	-	19I2	V	黒色土器	有台坏		11.9				21	D	石・赤	並	黒/浅黄橙	Rナデ	糸切り	右				
989	II	-	19I24	V	黒色土器	有台坏		6.3				36	C	石・赤	並	黒/浅黄橙	Rナデ	糸切り					
990	II	-	21G8	V	須恵器	加工凹盤								C	白	堅	灰白/灰白						
991	II	-	19I2	V	土師器	無台坏	B	17.4	6.9	4.6	39.7	8	34	E	石・白	並	にぶい黄橙/ にぶい黄橙	Rナデ・ ミガキ	糸切り	右	灯明皿?		
992	II	-	19H10	V	土師器	長甕	B	19.6				5	A	石・長 赤・赤	並	浅黄橙/浅黄橙	Rナデ						
993	II	-	19H10	V	土師器	長甕	B	20.5				8	A	石・長・赤	並	浅黄橙/浅黄橙	Rナデ						
994	II	-	13I25	V	土師器	長甕	B	19.8				5	A	石・長 赤・赤	並	浅黄橙/浅黄橙	Rナデ						
995	II	-	16I3	V	土師器	鍋	B	(31.2)				4	E	石・長	並	灰白/浅黄橙	Rナデ・ ハケム						
996	II	-	17I22	V	土師器	鍋	B	(30.9)				4	A	石・長・赤	並	淡橙/にぶい橙	Rナデ						
997	II	-	16I6	V	土師器	鍋	B	(37.4)				3	E	石・赤	並	灰白/灰白	Rナデ						
998	II	SB7-P573	22E24 23F11	VI	須恵器	有台坏?	A?	(12.2)				3	B	白	堅	青灰/青灰	Rナデ						
999	II	SR7-P956 (SD525 甕)	23F12 22G11		須恵器	环蓋	A			(2.8)			B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rケズリ→ Rナデ	左				
1000	II	SR7-SD389 東	23F18		須恵器	無台坏	A	13.0	9.0	3.1	69.2	6	12	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rへら切	左?			
1001	II	SR7-SD389 東	23F18 23F22	IV	須恵器	無台坏	B	12.3	7.3	2.9	59.3	17	18	B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rへら切		底部外面・墨書「□」		
1002	II	SR7-SD389 東	23F7・12		須恵器	無台坏	A	12.4	8.4	3.4	67.7	6	34	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rへら切	右	口縁部・打ち欠き		
1003	II	(SB6-P369) (SX511)	22F18 22F24 22F21 17I24 22F6・13・20 21F19, 22F1・16・17 21F20 22F14・16・18・23	上層 IV V VI	古式 土師器	甕		15.3				14	E	石・長 赤・赤	並	橙/橙	ヨコナデ	ヨコナデ・ ミガキ				古墳前期	
1004	II	SR7-SD389 西	22G4		須恵器	环蓋	A						B	黒	並	灰白/灰白	Rナデ						
1005	II	SR7-SD389 西	22E23		須恵器	有台坏	A	10.6	6.4	3.5	29.2	15	17	B	黒・白	堅	灰/灰白→灰	Rナデ	Rへら切	左	藍田靨		
1006	II	SR7-SD389 西	22E18		須恵器	無台坏	A	12.4	8.5	3.2	68.5	4	8	B	白	並	灰/灰	Rナデ	Rへら切	左			
1007	II	SR7-SD389 西	22F13		須恵器	無台坏	A	11.0	7.4	3.1	28.2	10	13	B	白	並	灰/灰白	Rナデ	Rへら切		板状庄痕		
1008	II	SR7-SD389 西	22F12		須恵器	無台坏	A	12.3	7.1	2.9	57.7	13	19	B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rへら切	左	板状庄痕		
1009	II	(SD21) (P154) (P155)	22F12 17I6 17I18 17I23 16I15, 17I18・23	IV	須恵器	長頸瓶		8.3				5	B	黒・白	堅	灰白/暗灰	Rナデ						

No.	出土位置		層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底高指数	口径指数	口径値	底残値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構					グリッド	口径	底径								器高	内面	外面	底胎/天井部		
1010	II	SB9-P553	21G23-24	古式土師器	壺		14.3				9		E	石・長・赤	並	内/外	ヨコナデ・ハケヌ			古墳前明		
1011	II	SB9-P553	21G24	須恵器	坏蓋	A	(13.0)				1		B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ					
1012	II	SB9-P553 (SX377)	21G23	須恵器	坏蓋	A	14.5				9		B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ・Rナデ	左	瓶用配		
1013	II	SB9-P553	21G23-24	須恵器	無台坏	B(n)	12.4	7.2	2.9	58.1	15		B	黒・白	並	灰~灰白/灰~灰白	Rナデ	Rナデ	Rナデ	左		
1014	II	SB9-P553 (SK351) (SK380) (P346)	21G23	須恵器	壺蓋		13.2				12		B	黒・白	堅	灰/灰、暗灰	Rナデ	Rナデ・Rナデ			右	自然釉
1015	II	SB9-P553	21G24	土師器	長頸	B	15.8				1		E	石・長	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				
1016	II	SB9-P569	20C4	須恵器	無台坏	A	12.3	7.8	3.2	63.4	2		B	黒・白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
1017	II	SB9-P611	21G8	須恵器	無台坏	B	12.0	7.7	3.0	64.2	1		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				
1018	II	SB9-P615	21G22	須恵器	坏蓋	A							B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ・Rナデ			左	
1019	II	P391	21G3	須恵器	坏蓋	A	14.6				2		B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				
1020	II	SB9-P613	21G18	須恵器	無台坏	B(n)	11.5	5.4	3.0	26.1	4		B	白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
1021	II	SB9-P613	21G18	須恵器	無台坏		13.9				5		B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
1022	II	SB9-P613	21G18	須恵器	甕	I	(21.0)				3		B	黒・白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
1023	II	SB9-P613 (SK477)	21G18	須恵器	甕								B	黒・白	並	灰/灰	当て具	タタキ				
1024	II	SB9-P613	21G18	土師器	鍋	B	(34.6)				3		E	石・長・子・海	並	にぶい褐/にぶい橙	Rナデ	Rナデ・Rナデ				
1025	II	SB9-P613	21G18	土師器	無台碗		7.0				13		C	石・長・子・赤	並	浅黄橙/赤橙	Rナデ	Rナデ				体部~底部外面:赤彩
1026	II	SB9-P631	20G15	須恵器	瓶類		5.8				36		B	黒・白	並	灰白/灰	Rナデ	Rナデ				内外面・割付口:スス
1027	II	SB9-P631	20G15	須恵器	瓶類								B	黒・白	堅	灰白/灰	Rナデ	Rナデ				
1028	II	SB9-P633	21F22	須恵器	無台坏	B(n)	13.4	8.3	3.5	26.1	29		B	長・黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				底部外面:墨書「□」, 灯明皿。口縁部:打ち 欠き
1029	II	SB9-P639 (P464)	21G4	須恵器	無台坏	B	12.3	7.4	3.2	26.0	8		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				左?
1030	II	SB9-P644	20F25	須恵器	無台坏		6.3						B	白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				底部外面:墨書「□」 (部分)
1031	II	P346	21G22	須恵器	無台坏	B(x)	12.2	6.4	2.5	52.5	15		B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
1032	II	SB11-P640	21F9	須恵器	有台坏		13.7				9		B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				
1033	II	SB12-P687	19H7	須恵器	無台坏	B	12.8				7		B	白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ				
1034	II	SB12-P692	18H3	土師器	鍋	B	(40.6)				1		E	石・長・子・赤	並	浅黄橙/灰~浅黄橙	Rナデ	Rナデ				
1035	II	SB12-P695	18G12	須恵器	有台坏		8.2				6		B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				底部外面:墨書「□」 (代カ)
1036	II	SB12-P695	18G12	須恵器	無台坏	B	(11.6)				3		B	黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ				灯明皿?
1037	II	SB12-P695 (SD48)	17G15	須恵器	無台坏	B	12.5	8.2	2.9	65.6	11		B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				底部外面:墨書「山」
1038	II	SB18-P873	15H22	須恵器	坏蓋	A	15.3				6		B	長・黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				瓶用配
1039	II	SB18-P873	15H22	土師器	小甕	B	7.8				6			石・長・子・赤	並	にぶい黄橙/ にぶい黄橙	Rナデ	Rナデ				
1040	II	SB19-P784	16I10	土師器	小甕	B	(16.7)				3		A	石	並	浅黄橙/浅黄橙	Rナデ	Rナデ				
1041	II	SB19-P785	17I11	土師器	小甕	B	6.9				33		A	石・長	軟	浅黄橙/浅黄橙	Rナデ	Rナデ				糸切り

遺物観察表 (土器)

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	底径値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考	
	地区	遺構	グリッド					口径	底径	器高							内/外	内面	外面	底部/天井部			
1042	II	SB19-P785 (SB7-SD389西) SD21) SD360)	1711 2264 1716 2364 16H11・18, 18H22 14H15, 15H10, 16H1・10 17H6・7・17・18, 18H7 17J3・4・9 17K22 17R21, 16H22, 17H11	IV V直上 V	須臾器	横面							B	黒・白	並	灰白/灰	当て具	カキメ・ タタキ					
1043	II	SB19-P786 (SD279) SB19-P790 (P220) 1917 16H15	16H19 17R9 16H19 1917 16H15	II c IV	須臾器	环蓋	A	16.0				4	B	黒・白	並	灰赤/灰赤	Rナデ	Rナデ・ Rケズリ			左	転用祝?	
1044	II	SB19-P786	16H19		須臾器	無台环		(12.3)				1	B	白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ					
1045	II	SB19-P790	16H13		須臾器	瓶頸		6.7				27	A	石・長 白	堅	暗青灰/暗青灰	Rナデ	Rナデ			右		
1046	II	SB20-P806	16H24		須臾器	有台环		8.7				14	B	白	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ					
1047	II	SB30-P971	16H18 16H18	IV・V	須臾器	有台环	B	13.4	8.1	6.6	60.4	2	B	白	軟	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ					
1048	II	SB30-P971	16H18		土師器	無台碗		(14.0)				4	B	石・長	並	淡黄/淡黄	Rナデ	Rナデ				酸化焙焼成	
1049	II	SB23-P851	17H7		土師器	長囊	B	(19.6)				2	A	石・チ・赤	並	糖/糖	Rナデ	Rナデ・ カキメ					
1050	II	SB23-P851	17H7		土師器	小囊	B	14.0				9	A	石・長 チ・赤	並	浅黄糖/浅黄糖	Rナデ	Rナデ・ ハケメ				西古土製 内面:オコグ	
1051	II	P460	16H15		須臾器	有台环	C	10.6	6.1	5.0	40.6	8	B	長・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ			右		
1052	II	P877	15H5		須臾器	無台环	A	12.4	8.0	2.6	21.0	18	C	石・黒・白	並	灰/灰	Rナデ	Rナデ			左?		
1053	II	P940	17H11		須臾器	环蓋						10	B	白	並	灰/灰白	Rナデ	Rナデ・ Rケズリ			左	転用祝	
1054	II	SE555 (SD552) 23F16・17	23F17 23F16・17		須臾器	有台环	B	14.9	9.0	6.9	60.4	14	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ			左		
1055	II	SE856	17H17 17H17 17H17	IV V	須臾器	环蓋	A	15.5				13	B	黒・白	並	褐灰/褐灰	Rナデ	Rナデ・ Rケズリ			左		
1056	II	SE856	17H18		須臾器	有台环	B	14.4				5	B	黒・白	堅	暗青灰/暗灰	Rナデ	Rナデ					
1057	II	SE856	17H17 17H17	V	須臾器	無台环	A	12.4	8.6	3.1	25.0	9	B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				底部外面:墨書「□」	
1058	II	SE856	17H17		土師器	長囊	B	16.4				12	F	石・長・チ	並	にぶい黄糖/ にぶい黄糖	Rナデ	Rナデ				外面:スス	
1059	II	SE856	17H17		土師器	小囊	B		7.5			36	E	石・長 チ・赤	並	にぶい黄糖/ にぶい黄糖	Rナデ	Rナデ			右		
1060	II	SE856	17H17		土師器	長囊	B						A	石・赤	並	糖/にぶい黄糖	Rナデ	Rナデ					
1061	II	SE856	17H17		土師器	鍋	B	(39.6)				2	A	石・チ・赤	並	にぶい黄糖/ にぶい黄糖	Rナデ	Rナデ					
1062	II	SK630 (SD378) 21G15 22G11	21H2 21G15 22G11	下層	須臾器	長脚瓶		14.2				27	B	黒・白	堅	灰白/灰	Rナデ	Rナデ					
1063	II	SK630 (SX529) SK630 (SX377)	21H2 21H9 21H2	上面 VI	須臾器	囊							B	長・黒・白	並	灰/灰	当て具	カキメ・ タタキ					
1064	II	SD525北	21F18		土師器	無台碗	A	12.2	6.4	4.0	32.8	2	F	石・長・赤	並	糖/浅黄糖-淡糖	Rナデ	Rナデ					
1065	II	SD525北	21F18		土師器	無台碗	A	12.1	6.0	3.9	32.2	3	E	石・白	軟	黒-にぶい黄糖/ 灰白-浅黄糖/	Rナデ	Rナデ					
1066	II	SD525北	21F23		土師器	無台碗	A	12.6	6.0	4.5	35.7	4	F	石・赤	並	浅黄糖/	Rナデ	Rナデ					
1067	II	SD557	20G24		須臾器	無台环	B	12.5	8.0	3.4	27.2	1	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ			右	体部外面:墨書「□」, 底部外面:墨書「□」	

No.	出土位置		層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径指数	底径値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構					グリッド	口径	底径							器高	内面	外面	底面/天井部		
1068	II	SD556	21F16	須恵器	坏蓋	A						B	黒・白	並	灰/灰白	Rナデ	Rナデ	左	藍用靨、口縁部：打ち欠き		
1069	II	SD556	21F14	須恵器	無台坏	A(x)	7.1	3.4	27.6	57.7	16	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	右			
1070	II	SD556	21F16	須恵器	無台坏	A(x)	12.7	7.5	30	59.1	11	B	黒・白	並	灰/灰白	Rナデ	Rナデ				
1071	II	SD556	21F12	須恵器	無台坏	B	13.1	8.7	23.2	66.4	10	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				
1072	II	SD556	21F14	須恵器	瓶類		8.4	9.4			20	B	黒・白	堅	灰白/暗灰	Rナデ	糸切り				
1073	II	SD566	21G12	須恵器	有台坏		8.2				10	C	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	右			
1074	II	SD566	21G22	須恵器	無台坏	B	11.7	8.5	29.1	72.6	9	B	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				
1075	II	SD566	21G12	須恵器	無台坏	A	13.2	8.0	27.3	60.6	23	B	白	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	左			
1076	II	SD566	21G12	須恵器	甕	IV	(59.6)				4	C	長・黒	堅	灰/灰	Rナデ	Rナデ		口縁部、瓣部破状文		
1077	II	SD566	21G12	土師器	無台碗	B	12.8	7.2	29.7	56.3	1	A	石・長・赤	並	橙/浅黄橙～黒	Rナデ	Rナデ				
1078	II	SD620	22F17	須恵器	有台坏		8.6				36	B	長・黒	並	灰白/灰白～灰	Rナデ・ナデ	Rナデ	右	藍用靨、破状庄痕		
1079	II	SD754	17H23	須恵器	有台坏		9.0				3	B	黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	左	藍用靨、破状庄痕		
1080	II	SD754南	17H24	須恵器	無台坏	A	11.5	8.0	29.6	69.6	2	B	石・長・赤	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ				
1081	II	SD754南	17H24	須恵器	無台坏	A	13.0	8.6	27.7	66.2	18	C	赤・白	並	浅黄橙/灰白～浅黄橙	Rナデ	Rナデ	左	酸化磁焼成、破状庄痕		
1082	II	SD754南	17H24	須恵器	甕							C	石・長・白	並	灰/灰	当て具	タタキ				
1083	II	SD760	16I5	須恵器	無台坏	B	11.9	7.4	30.3	62.2	6	C	石・長	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	右			
1084	II	SD775	16I23	須恵器	無台坏	A	12.5	8.6	26.4	68.8	26	C	石・長	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	右	酸化磁焼成		
1085	II	SD775	16I3	土師器	小甕	B	13.4				6	A	石・長・赤	並	黄橙/黄橙	Rナデ	Rナデ・カキメ				
1086	II	SD775	16I23	土師器	小甕	B		5.6			14	A	石・長・赤	並	橙～黒/にぶい橙～黒	Rナデ	Rナデ・Rケズリ	右			
1087	II	SD975	16I6	土師器	甕		14.9	7.4	17.9		20	F	石・赤・海	並	にぶい橙/にぶい橙	ハケメ	ハケメ・ケズリ		古墳後期		
1088	II	SX833	17I24	須恵器	有台坏	A	11.9	8.0	4.2	31.9	67.2	C	石・長・赤	並	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	右	藍用靨、破状庄痕		
1089	II	SX833	17I23	須恵器	無台坏	B	12.4	8.4	3.4	27.4	18	B	白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	左	藍用靨、破状庄痕		
1090	II	SX925	17I6	須恵器	坏蓋	A						B	石・黒・白	堅	灰白/灰白	Rナデ	Rナデ	左	藍用靨、破状庄痕		
1091	II	SX925	17I7	須恵器	無台坏	C	13.4	7.1	29.1	53.0	6	A	石・長	並	灰白/明褐色～灰白	Rナデ	Rナデ	右	酸化磁焼成		
1092	II	SX925	17I6	土師器	長甕	B	18.2				11	A	石・赤	並	橙/橙	Rナデ	Rナデ・カキメ				
1093	II	SB1-SD1 SB7-SD389東 SD274 SD373 SD378 河川SD466 SD556 SD960 SX157 SX342 SX377 SX420 P348 P463	21H14 23F18 19H13・14 21G10 21G9 21G23 21F9・13・14 21E17 15I2 23C8 21H9 20F16 21G25 21F5 21E12,19F16,18G12 21G19,22G1・21 19F14,19C4 22E23,20F8・13・18 21F4・5・14 20G24,21G16・25 21E18・24,21F4・5・9 22F1・8	須恵器	甕	III	(39.4)				2	C	黒・白	並	灰白/灰白	Rナデ・当て具	Rナデ・タタキ			頸部：沈線文	

No.	出土位置			層位	種別	器種	器形分類	法量(cm)			底径指数	口径値	底残値	胎土	含有物	焼成	色調		調整痕		回転方向	備考
	地区	遺構	グリッド					口径	底径	器高							内面	外面	底面/天井部			
1094	II	河川SD466	17J24, 17K3・4 17K3 17L4, 17K3	上面 VI	古式土師器	甕		(19.4)			0			石・長・チ	並	浅黄釉/浅黄釉	内面 外面	ハケム・ R L 縄文		古墳時代前期, 頸部 下端: 通線刺突文		
1095	II	河川SD466	22G21	最下層	古式土師器	器台								石・長・赤	並	釉/赤	内面 外面	ミガキ		古墳前期, 外面: 赤彩		
1096	II	河川SD466	19H6		古式土師器	壺		4.2	10.1		29	36	F	石・長・赤	並	にぶい釉/にぶい釉	内面 外面	ハケム		古墳前期		
1097	II	河川SD466	17J24, 17K4 17J23	上面	古式土師器	壺		10.4	1.9	17.1	15	36	F	石・長・海	並	にぶい釉/ 淡黄釉~赤釉	内面 外面	ミガキ		古墳前期, 内外面: 赤彩		
1098	II	河川SD466 (S89 F617)	20G25 20G25, 21H8	下層	古式土師器	甕		13.2			16		A	石・白	軟	にぶい釉/にぶい釉				古墳前期		
1099	II	河川SD466	18I7・8	最下層	古式土師器	甕		16.8			11		F	石・長・チ	並	浅黄釉/浅黄釉	内面 外面	ヨコナデ・ ハケム		古墳前期		
1100	II	河川SD466	17K6		古式土師器	甕		15.6	3.0 (16.0)		28	36		石・長・チ	堅	にぶい釉/釉	内面 外面	ヨコナデ・ ハケム		古墳前期		
1101	II	河川SD466	17I14		黒色土器	環		16.0			12			石・長・海	並	黒/浅黄釉~黒	内面 外面	ヨコナデ		古墳後期		
1102	II	河川SD466	21G25	上層	黒色土器	高坏		11.4				25		石・長・赤	並	淡釉/淡釉	内面 外面	ミガキ・ ハケム		古墳後期		
1103	II	河川SD466	22G9・11 21H15・23 21H7・23, 22H6	上層 V VI	土師器	甕		18.3	6.6	30.0	17	10		石・チ・赤	並	浅黄釉/浅黄釉	内面 外面	ヨコナデ・ ハケム		古墳後期		
1104	II	河川SD466	19H9		土師器	甕		26.8			6			石・チ・赤	並	浅黄釉/浅黄釉~釉	内面 外面	ヨコナデ・ ハケム		古墳後期		
1105	II	河川SD466	18I21		土師器	甕		15.8			2			石・長・チ	堅	にぶい釉/浅黄釉	内面 外面	ヨコナデ・ ハケム		古墳後期		
1106	II	河川SD466	15I22		土師器	甕		23.5	8.9	24.4	33	16		石・長・チ・ 海	並	にぶい釉/にぶい釉	内面 外面	ハケム		古墳後期		
1107	II	-	23C4 23G3	IV VI	古式土師器	小甕		13.5			23			石・チ・赤	並	釉/釉	内面 外面	ヨコナデ		古墳前期		
1108	II	-	20H24	VI	黒色土器	環		15.3			16			石・海	並	黒/にぶい黄釉~黒	内面 外面	ミガキ・ ハケム		古墳後期		
1109	II	-	16I4	VI	須恵器	环蓋	A	16.0	3.1	19.4	19		B	白	堅	灰白/灰白	内面 外面	Rナデ Rケズリ		左		
1110	II	-	22G24	VI	須恵器	环蓋	A	14.9	2.8	18.8	24		B	黒・白	堅	灰白/灰白	内面 外面	Rナデ Rケズリ		左		
1111	II	-	19J9・21	VI	須恵器	無台坏	A	12.0	8.6	24.2	28	35	B	長・チ・白	並	灰白/灰白	内面 外面	Rナデ		左	底部外面: 墨書 「大正」, 刻明皿	
1112	II	-	17K3	VI	須恵器	無台坏			8.7				B	黒・白	並	灰白/灰白	内面 外面	Rナデ		左	見込み: 墨書「□」, 口縁部: 打ち欠ぎ, 頸れ口: 研輪痕, 板状 丘痕	
1113	II	-	17G16	VI	須恵器	無台坏	B	11.9	7.8	23.5	30	36	B	黒・白	堅	灰白/灰白	内面 外面	Rナデ		左	板状丘痕	
1114	II	-	16K1	VI	須恵器	無台坏	B(x)	12.3	8.1	25.2	35	36	B	赤・白	軟	灰白/灰白	内面 外面	Rナデ		左	板状丘痕	
1115	II	-	16J9	VI	須恵器	無台坏	B	11.5	7.6	26.1	16	17	B	黒・白	並	灰白/灰白	内面 外面	Rナデ		左	板状丘痕	
1116	II	-	16H9	VI	須恵器	無台坏	B	12.6	8.2	27.0	12	23	B	黒・白	並	灰白/灰白	内面 外面	Rナデ		左		
1117	II	-	21E22	VI	土師器	無台坏	A	12.2	7.6	31.1	2	36	F	石・長・チ	並	浅黄釉/浅黄釉	内面 外面	Rナデ		右		
1118	II	-	20F20	VI	土師器	無台坏	A	12.4	6.3	31.5	50.8	1	36	E	石・チ・赤	並	淡釉/ 浅黄釉~にぶい赤釉	内面 外面	Rナデ			
1119	II	-	19J21	VI	土師器	無台坏	A	12.7	6.6	4.4	52.0	1	15	B	石・赤	並	浅黄釉~にぶい 黄釉	内面 外面	Rナデ			
1120	II	-	21G22	VI	土師器	小甕	B	(15.4)			4		A	石・赤	並	釉/釉	内面 外面	Rナデ・ カキム				
1121	II	-	19I8	VI	土師器	長甕	B	(22.0)			3		A	石・長・ チ・海	堅	浅黄釉/ 浅黄釉~赤釉	内面 外面	Rナデ				

3 土製品観察表

No	出土位置		種別	器種	法量 (cm)			焼成	含有物	色調	調整痕		重さ (g)	備考
	地区	遺構			グリップ	層位	長さ				幅	高さ		
1122	I	S824-P1017	5N4	土製品	円筒形土製品	-	-	-	石・長・チ・赤	にぶい橙/にぶい橙	板状工具でナデ	-		
1123	I	SD1014	7N7	土製品	円筒形土製品	-	-	-	石・長・赤	にぶい濁/にぶい橙		-		
1124	I	SD1015	5N4	土製品	円筒形土製品	-	-	-	石・長・チ・赤	にぶい橙/にぶい濁		-		
1125	I	SD1037 東	8L23	土製品	円筒形土製品	-	-	-	石・長・赤	にぶい橙/にぶい橙	板状工具でナデ	-		
1126	I	SD1037 東	8L23	土製品	円筒形土製品	口径 14.5	-	-	石・長・赤	にぶい濁/にぶい濁		-		
1127	I	-	6N4	土製品	円筒形土製品	-	-	-	石・長・チ・海・赤	にぶい橙/橙		-		
1128	I	-	8L23 7N7	土製品	土製紡錘車	10.4	10.5	1.2	石・長・チ・赤	-/浅黄橙		105.6		
1129	I	-	8M9	土製品	土鍾	(2.4)	1.2	(1.0)	チ・赤	-/明黄濁		1.7		
1130	I	SD977	4N13	土製品	土鍾	6.4	2.6	2.3	石・長・チ・白	-/灰白		33.3		
1131	I	SD977	4N13	土製品	土鍾	5.8	2.7	2.1	石・長・チ	-/灰白		30.4		
1132	I	SD977	4N14	土製品	土鍾	7.2	3.2	3.2	石・長・チ・赤	-/灰白		54.1		
1133	II	-	16J12	土製品	土鍾	2.7	3.1	3.2	石・長	-/浅黄橙	指オサエ・ナデ	23.4		
1134	I	SK1083	8L5	土製品	円筒形土製品	-	-	-	石・チ	にぶい黄橙/にぶい黄橙		-		
1135	I	SD1085	9L11	土製品	円筒形土製品	-	-	-	石・長・チ	にぶい黄橙/にぶい黄橙		-		
1136	I	河川 SD976	8N17	土製品	円筒形土製品	-	-	口径 10.0	石・チ・赤	にぶい黄橙/灰黄	板状工具でヨコ方向にナデ	-		
1137	I	河川 SD976	8N25	土製品	円筒形土製品	-	-	口径 9.0	石・チ・赤	にぶい赤濁/灰黄	指オサエ	-		
1138	I	河川 SD976	8O5	土製品	円筒形土製品	-	-	口径 13.5	石・長・チ	にぶい黄橙/にぶい黄橙	板状工具でナメ、ヨコ 方向にナデ・指オサエ	-		
1139	I	河川 SD976	8N15 8O1+2	土製品	製楯土器	-	-	口径 25.2	石・長・チ・赤	灰黄~暗赤濁/灰黄~暗赤濁	指オサエ・板状工具でナデ	-		
1140	I	河川 SD976	8N18	土製品	円筒形土製品	-	-	口径 (17.4)	石・チ・赤	にぶい濁/濁灰	板状工具でナデ	-		
1141	II	SD378	21G4	土製品	土鍾	5.4	1.3	1.2	石・海	-/濁灰	指オサエ・ナデ	7.0		
1142	II	SD378	21G4	土製品	土鍾	5.4	1.4	1.3	石	-/灰白	指オサエ・ナデ	8.4		
1143	II	SD378	21G4	土製品	土鍾	(3.1)	1.2	1.2	石	-/にぶい黄橙	指オサエ・ナデ	4.2		
1144	II	SD378	21G4	土製品	土鍾	(2.8)	1.3	1.2	石	-/にぶい黄橙	指オサエ・ナデ	3.4		
1145	II	P205	18I12	土製品	土鍾	2.8	3.3	3.3	石・長・赤・白	-/灰白	指オサエ・ナデ	29.8		
1146	II	SK294	18I12	土製品	土鍾	2.8	3.2	3.0	石・長・赤・白	-/浅黄橙	指オサエ・ナデ	26.0		
1147	II	SX119	18J6	土製品	土鍾	3.4	2.9	2.7	石・長・白	-/灰白	指オサエ・ナデ	24.7		
1148	II	SK110	18I11	土製品	円筒形土製品	口径 13.2	高さ 14.4	口径 13.5	石・長・チ・赤	にぶい橙~濁/にぶい橙		-		

No.	地区	出土位置		種別	器種	法量 (cm)			焼成	含有物	色調	調整痕		重さ (g)	備考
		遺構	グリッド			層位	長さ	幅				厚さ	孔径		
1149	II	-	17H23	土製品	円筒形土製品	口径 12.8	-	-	並	石・長・赤	にぶい・橙/にぶい・橙		指オサエ	-	
1150	II	-	18C14	土製品	土製紡錘車	(4.4)	4.5	(1.3)	並	石・チ・雲・赤・白	-/灰黄		指オサエ・ナデ	22.5	
1151	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	2.2	1.1	0.3	軟	石・長・チ	-/灰白		指オサエ	1.8	
1152	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	2.3	1.2	0.3	軟	白	-/灰白		指オサエ	2.4	
1153	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	2.2	1.4	0.4	並	白	-/灰白		指オサエ・ナデ	3.0	
1154	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	2.5	1.4	0.3	並	石	-/灰白		指オサエ	2.8	
1155	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	2.6	1.4	0.3	並	石	-/灰白		指オサエ	3.5	
1156	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	2.5	1.3	0.4	並	白	-/灰白		指オサエ	2.8	
1157	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	2.6	1.3	0.3	並	白	-/灰白		指オサエ	2.9	
1158	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	2.8	1.4	0.3	並	石・白	-/灰白		指オサエ・ナデ	3.5	
1159	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	2.7	1.3	0.4	並	石・白	-/灰白		指オサエ	3.5	
1160	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	2.7	1.4	0.3	並	石・白	-/灰白		指オサエ・ナデ	3.3	
1161	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	2.8	1.4	0.3	並	チ・海・白	-/灰白		指オサエ	3.7	
1162	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	2.8	1.3	0.3	並	石	-/灰白		指オサエ	3.5	
1163	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	2.6	1.2	0.3	並	白	-/灰白		指オサエ・ナデ	2.3	
1164	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	2.8	1.3	0.3	並	石・白	-/灰白		指オサエ・ナデ	3.3	
1165	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	2.9	1.4	0.3	並	石	-/灰白		指オサエ	4.0	
1166	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.0	1.4	0.4	並	白	-/灰白		指オサエ・ナデ	3.5	
1167	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	2.8	1.3	0.3	軟	白	-/灰白		指オサエ	3.0	
1168	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.0	1.5	0.3	並	石・長・白	-/灰白		指オサエ	4.0	
1169	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.2	1.4	0.4	並	白	-/灰白		指オサエ・ナデ	3.7	
1170	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.1	1.6	0.3	並	石・白	-/灰白		指オサエ	4.8	
1171	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.1	1.6	0.4	並	石・長・白	-/灰白		指オサエ	5.1	
1172	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.2	1.4	0.3	並	石	-/灰白		指オサエ・ナデ	4.2	
1173	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.2	1.4	0.3	並	石・白	-/灰白		指オサエ・ナデ	4.4	
1174	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.0	1.5	0.3	並	石・長・チ・赤・白	-/浅黄橙-黄灰		指オサエ	4.0	
1175	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.1	1.4	0.4	並	石・白	-/灰白		指オサエ	4.1	
1176	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.3	1.4	0.3	並	石・チ	-/灰白		指オサエ	4.5	
1177	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.1	1.5	0.3	並	石・白	-/黄灰		指オサエ	5.3	
1178	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.0	1.7	0.3	並	石・白	-/灰白		指オサエ・ナデ	5.4	
1179	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.3	1.4	0.4	並	白	-/灰白		指オサエ	4.5	
1180	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.0	1.5	0.3	並	石・白	-/灰白		指オサエ	4.4	
1181	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.4	1.7	0.3	並	石・チ・赤	-/灰白		指オサエ	7.0	
1182	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.3	1.6	0.3	軟	石・長・チ・赤・白	-/灰白		指オサエ	5.8	
1183	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.3	1.4	0.3	並	白	-/灰白		指オサエ	4.0	
1184	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.3	1.7	0.3	並	石・赤・白	-/灰白		指オサエ	5.9	
1185	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.2	1.7	0.3	並	石・赤・白	-/灰白		指オサエ・ナデ	5.9	
1186	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.3	1.6	0.4	並	石・長・赤・白	-/黄灰		指オサエ	5.4	
1187	II	SK510	16J17	土製品	土鉢	3.1	1.4	0.3	並	長・白	-/灰白		指オサエ・ナデ	3.6	

No.	出上位置		種別	器種	法量 (cm)			焼成	含有物	色調		調整値		重さ (g)	備考
	地区	選構			グリッド	順位	長さ			幅	厚さ	孔径	内/外		
1188	II	SK510	16117	土製品	土鉢	3.6	1.6	1.5	0.4	並	石	-/黄灰	指オサエ	5.5	
1189	II	SK510	16117	土製品	土鉢	3.0	1.7	1.7	0.3	並	石・長・赤・白	-/灰白	指オサエ	5.8	
1190	II	SK510	16117	土製品	土鉢	3.0	1.8	1.8	0.3	並	石・長・赤・白	-/浅黄橙	指オサエ	6.4	
1191	II	SK510	16117	土製品	土鉢	3.3	1.6	1.6	0.3	並	石・長・赤・白	-/灰白	指オサエ・ナデ	5.9	
1192	II	SK510	16117	土製品	土鉢	3.7	1.7	1.6	0.4	並	石・白	-/灰白~黄灰	指オサエ・ナデ	6.9	
1193	II	SK510	16117	土製品	土鉢	3.4	1.8	1.7	0.3	並	石・長・赤・白	-/灰白	指オサエ	6.8	
1194	II	SK510	16117	土製品	土鉢	3.4	1.7	1.6	0.3	軟	石・赤・白	-/にぶい黄橙	指オサエ	6.2	
1195	II	SK510	16117	土製品	土鉢	3.8	1.7	1.7	0.4	並	石・長・赤・白	-/灰白	指オサエ	7.4	
1196	II	SK510	16117	土製品	土鉢	3.8	1.8	1.7	0.3	並	石・白	-/黄灰	指オサエ	7.3	
1197	II	SK510	16117	土製品	土鉢	3.7	1.7	1.6	0.3	並	石・赤・白	-/灰白	指オサエ	6.9	
1198	II	SK510	16117	土製品	土鉢	3.6	1.7	1.7	0.4	並	石・赤・白	-/灰白	指オサエ	7.8	
1199	II	SK510	16117	土製品	土鉢	3.7	1.8	1.7	0.4	並	石・赤・白	-/灰白	指オサエ・ナデ	7.5	
1200	II	SK510	16117	土製品	土鉢	3.7	1.8	1.7	0.3	並	石・赤・白	-/浅黄橙	指オサエ・ナデ	7.4	
1201	II	SK510	16117	土製品	土鉢	3.5	1.7	1.6	0.3	並	石・白	-/黄灰	指オサエ	5.9	
1202	II	SK510	16117	土製品	土鉢	3.6	1.6	1.6	0.3	並	石・長・赤・白	-/灰白~黄灰	指オサエ・ナデ	6.4	

4 木製品観察表

No.	出上位置		種別	器種	名称	法量 (cm)			木取り	樹種	AMS	保存処理	備考
	地区	選構				グリッド	長さ	幅					
1203	I	SB25-P1094	6M20	建築部材	柱根	(29.0)	9.1	8.5	-	丸木	-	木芯一部欠損、両端折損	
1204	I	SB26-P1103	6N5	建築部材	柱根	(37.1)	20.8	14.0	-	ミカン削り(芯法)	○	底面折損、上端切損か	
1205	I	SB26-P1107	6N1	建築部材	柱根	(18.5)	14.7	14.1	-	丸木	-	木芯欠損、大きく折損	
1206	I	P1177	8M3	建築部材	柱根	(35.7)	-	-	10.2	丸木	-	木芯一部欠損、両端折損	
1207	I	SD977	7L7	木製品	不明品	12.7	2.7	2.4	-	柱目	-	左右側面溝あり、先端部陥凹状	
1208	I	河川SD976	7O15	容器	脚板	-	3.1	0.2	10.2	柱目	○	下端4箇所木釘孔	
1209	I	河川SD976	8N23	容器	脚板	14.4	-	0.2	-	柱目	-	原形を留めていない	
1210	I	河川SD976	8O7	容器	脚板	15.6	(2.2)	0.4	-	柱目	-	端部切損か、折損、表裏面平滑	
1211	I	河川SD976	8N5	容器	脚板	(14.1)	2.9	0.3	-	柱目	-	端部大きく欠損	
1212	I	河川SD976	8N13	容器	底板か	(19.3)	(8.4)	1.0	(33.6)	柱目	-	端部大きく欠損	
1213	I	河川SD976	8O1	容器	底板か	-	-	0.9	18.3	板目	○	2片接合	
1214	I	河川SD976	8O3	加工材	板材	18.2	3.9	0.2	-	柱目	○	両端切損	
1215	I	河川SD976	8N17	加工材	板材	(12.5)	3.7	0.4	-	柱目	○	両端折損、表裏切削痕	
1216	I	河川SD976	8O5	容器	盤(蓋に転用)	器高 2.4	底径 19.0	1.1	口径 22.8	横木取り	○	2片接合、底部中央穿孔、口縁部付近2か所穿孔	
1217	I	河川SD976	8N25	容器	盤	-	底径 21.8	0.8	-	横木取り	-	大きく欠損	

遺物観察表 (木製品)

No.	出土位置		種別	器種	名称	法量 (cm)			木取り	樹種	AMS	保存処理	備考
	地区	遺構				グリッド	長さ	幅					
1218	I	河川 SD976 (SX1209)	食事具		箸	(20.2)	0.6	0.5	-	-	-	側面取、端部折損・生き	
1219	I	河川 SD976	食事具		箸	(18.3)	0.6	0.5	-	-	-	側面取、端部折損・生き	
1220	I	河川 SD976	食事具		箸	(18.2)	0.6	0.5	-	-	-	側面取、端部折損・生き	
1221	I	河川 SD976	食事具		箸	20.6	0.8	0.6	-	-	-	側面取、両端生き、先端尖らせ加工	
1222	I	河川 SD976	食事具		箸	23.8	-	-	0.6	-	○	側面取、両端生き	
1223	I	河川 SD976	食事具		箸	(10.5)	0.6	0.5	-	-	-	側面取、端部折損・生き	
1224	I	河川 SD976	食事具		箸	(10.2)	0.4	0.4	-	-	-	側面取、端部折損・生き	
1225	I	河川 SD976	食事具		箸か	(15.5)	0.4	0.4	-	-	○	断面方形、側面平滑、両端折損	
1226	I	河川 SD976	食事具		箸	(13.6)	0.6	0.5	-	-	-	側面取、端部折損・生き	
1227	I	河川 SD976	食事具		箸	(10.7)	0.5	0.4	-	-	-	側面取、端部折損・生き	
1228	I	河川 SD976	食事具		箸	(8.2)	0.5	0.5	-	-	-	側面取、端部折損・生き	
1229	I	河川 SD976	食事具		箸	(8.9)	0.6	0.6	-	-	-	側面取、端部折損・生き	
1230	I	河川 SD976	食事具		箸	(10.2)	0.7	0.6	-	-	-	側面取、端部折損・生き	
1231	I	河川 SD976	食事具		箸	(10.6)	0.5	0.4	-	-	-	側面取、端部折損・生き	
1232	I	河川 SD976	食事具		箸	(9.6)	0.5	0.5	-	-	-	側面取、端部折損・生き	
1234	I	河川 SD976	容器	曲物	側板か	(4.4)	5.0	0.3	-	-	-	表面ケビキあり、表裏平滑	
1235	I	河川 SD976	部材		部材	(13.5)	2.9	1.6	-	-	○	柄穴、断面方形、両端折損	
1236	I	河川 SD976	加工材		板状木製品	(40.5)	3.0	0.5	-	-	○	両端折損、側面平滑	
1238	I	河川 SD976	木製品	杭	板杭	(30.0)	5.2	2.0	-	-	-	端部折損・生き、断面方形の板か、先端鋭形	
1239	I	河川 SD976	祭祀具		斎串	19.7	1.7	0.3	-	-	○	側面平滑	
1240	I	河川 SD976	祭祀具		斎串か	(5.3)	(1.1)	0.1	-	-	-	表裏平滑、端部折損・生き、先端カット	
1241	I	河川 SD976	祭祀具		斎串か	(5.1)	1.6	0.3	-	-	-	端部折損・生き、表裏平滑、先端カット	
1242	I	河川 SD976	木製品		柄状木製品	59.7	-	-	3.4	-	○	Y字材、側面加工痕あり	
1243	I	河川 SD976	木製品		柄状木製品	46.6	-	-	3.4	-	○	Y字材、側面加工痕明瞭	
1244	I	河川 SD976	加工材		柄状木製品	45.8	3.1	2.1	-	-	○	他1片、両端加工痕明瞭	
1245	I	河川 SD976	加工材		柄材	25.0	13.5	8.3	-	-	-	両端折損	
1246	I	河川 SD976	加工材		柄材	(18.5)	14.1	4.3	-	-	-	端部折損・切損、下端斜めにカット、台形のプロック状	
1247	I	河川 SD976	加工材		柄材	(13.4)	(4.6)	1.7	-	-	-	端部折損・切損先端斜めにカット、表面のみ炭化	
1248	I	河川 SD976	加工材		柄材	7.3	1.9	1.6	-	-	-	端部折損、側面平滑	
1249	I	河川 SD976	加工材		柄材	(16.2)	3.8	3.7	-	-	-	大きく焼損、側面一部平滑	
1250	I	河川 SD976	加工材		柄材	(13.5)	4.6	3.0	-	-	-	両端折損、側面平滑、先端3方カット	
1251	I	河川 SD976	加工材		柄材	(32.7)	7.4	2.9	-	-	-	先端斜めにカット、端部折損・生き	
1252	I	河川 SD976 803・4	加工材		柄材	(96.1)	7.5	5.6	-	-	-	断面方形、端部切損・折損	
1253	I	河川 SD976 803	加工材		柄材	(54.9)	7.7	2.6	-	-	-	両端折損、加工痕あり	
1254	I	河川 SD976 803・4	加工材		柄材	(22.6)	3.7	1.7	-	-	-	端部折損・切損、表面平滑	
1255	I	河川 SD976 803・4	加工材		柄材	(30.6)	4.5	4.9	-	-	-	側面平滑、断面方形、端部折損・切損、下端平らにカット	
1256	I	河川 SD976 806	加工材		柄材	(24.0)	4.8	5.7	-	-	-	側面平滑、端部折損・切損、下端平らにカット	

No.	出上位置		種別	器種	名称	法量 (cm)			木取り	樹種	AMS	保存処理	備考
	地区	遺構				グリッド	長さ	幅					
1257	I	河川 SD976	8N13	加工材	板材	(8.5)	(2.4)	0.9	板目	-	-	-	表裏面削裂痕
1258	I	河川 SD976	8N13・18	加工材	板材	28.9	6.7	1.3	柵目	-	-	-	端部折損・切損、側面一部のみ残存
1259	I	河川 SD976	8N16	加工材	板材	(10.7)	3.6	0.6	柵目	-	-	-	端部折損・切損、下端斜めにカット、側面平滑、木節の可能性あり
1260	I	河川 SD976	8N13	加工材	板材	(15.3)	3.6	0.7	板目	-	-	-	端部折損・生きか、表裏平滑
1261	I	河川 SD976	8N13	加工材	板材	(6.2)	2.7	0.3	柵目	-	-	-	端部切損・生きか、表裏平滑
1262	I	河川 SD976	8N25	加工材	板材	10.6	1.9	0.5	柵目	-	-	-	
1263	I	河川 SD976	8N19	加工材	板材	12.8	1.7	0.4	板目	-	-	-	端部切損・生き、表裏平滑、墨痕かシミあり
1264	I	河川 SD976	8N18	加工材	板材	(10.5)	3.4	0.4	板目	-	-	-	端部折損・切損、下端は斜めにカット
1265	I	河川 SD976	7O10	加工材	棒状材 (多角柱)	(20.6)	1.3	1.2	削出	-	-	-	端部折損・折損、側面面取り
1266	I	河川 SD976	8N7	加工材	棒状材 (多角柱)	(19.0)	-	2.0	削出	-	-	-	両端折損
1267	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11	加工材	棒状材 (多角柱)	(20.8)	-	1.2	削出	-	-	-	側面面取り、端部折損・生き
1268	I	河川 SD976	8N11	加工材	棒状材 (多角柱)	(14.8)	1.6	1.4	削出	-	-	-	両端折損、側面面取り
1269	I	河川 SD976	8N18	加工材	角材	(4.8)	3.7	1.8	柵目	-	-	-	端部折損・生き、炭化材
1270	I	河川 SD976	8N13	加工材	角材	(5.6)	(3.1)	1.4	柵目	-	-	-	両端折損、側面平滑
1271	I	河川 SD976	7O15	加工材	角材	(8.9)	2.4	1.1	柵目	-	-	-	端部折損・切損先端斜めにカット、側面平滑
1272	I	河川 SD976	8N12	加工材	棒状材 (方形)	(10.5)	1.3	0.7	柵目	-	-	-	断面方形
1273	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11	加工材	棒状材 (方形)	(21.1)	1.2	0.9	柵目	-	-	-	両端折損、側面平滑
1274	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11	加工材	棒状材 (方形)	(19.2)	0.9	1.0	柵目	-	-	-	断面方形、側面平滑、端部折損・生き
1275	I	河川 SD976	8N24	加工材	棒状材 (方形)	(21.3)	(0.9)	0.5	柵目	-	-	-	断面方形、両端折損
1276	I	河川 SD976	8N12	加工材	棒状材 (方形)	(8.2)	1.5	1.5	柵目	-	-	-	端部折損・生きか、側面平滑、先端2面カット
1277	I	河川 SD976	8N17	加工材	棒状材 (方形)	(9.7)	(0.8)	0.7	柵目	-	-	-	側面平滑、両端折損、板片か
1278	I	河川 SD976	8N13	加工材	棒状材 (方形)	(6.3)	0.7	0.7	柵目	-	-	-	断面方形、側面平滑、端部折損・生き、先端斜めにカット
1279	I	河川 SD976	8N8	加工材	棒状材 (方形)	(7.1)	1.3	1.2	柵目	-	-	-	両端折損、先端2面カット、側面平滑、断面方形
1280	I	河川 SD976	8N13	加工材	棒状材 (方形)	(6.2)	0.6	0.6	柵目	-	-	-	断面方形、側面平滑、両端折損
1281	I	河川 SD976	8N13	加工材	棒状材 (方形)	(5.8)	1.0	0.6	柵目	-	-	-	断面方形、側面平滑、端部折損・生き
1282	I	河川 SD976	8N16	加工材	棒状材 (方形)	(32.1)	1.0	0.9	柵目	-	-	-	両端折損、側面平滑
1283	I	河川 SD976	8O	加工材	棒状材 (方形)	(9.3)	1.7	0.8	柵目	-	-	-	端部折損・切損、側面平滑
1284	I	河川 SD976	7O10	加工材	棒状材 (方形)	(13.5)	1.4	0.8	柵目	-	-	-	両端折損、先端表裏から斜めにカット、側面平滑
1285	I	河川 SD976	8O4	加工材	棒状材 (方形)	(15.5)	1.8	0.7	柵目	-	-	-	端部折損・脱損、側面平滑、先端斜めにカットか、断面方形
1286	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11	加工材	棒状材 (方形)	(17.1)	1.3	0.9	柵目	-	-	-	断面方形、両端折損、側面平滑
1287	I	河川 SD976	8N12	加工材	棒状材 (方形)	(5.5)	(1.5)	1.3	柵目	-	-	-	両端折損、側面平滑
1288	I	河川 SD976	8N7	加工材	棒状材 (方形)	(15.1)	1.9	0.9	板目	-	-	-	両端折損、側面平滑
1289	I	河川 SD976	8N8	加工材	棒状材 (方形)	(11.9)	1.7	1.2	柵目	-	-	-	両端折損、側面切削痕か
1290	I	河川 SD976	8N12	加工材	棒状材 (方形)	(14.5)	1.8	1.2	柵目	-	-	-	両端折損、側面面取り
1291	I	河川 SD976	7O10	加工材	棒状材 (方形)	(7.0)	1.5	0.9	柵目	-	-	-	端部折損・生き、下端カットあり、断面六角・方形
1292	I	河川 SD976	8N11	加工材	棒状材 (方形)	(23.1)	1.2	0.8	柵目	-	-	-	端部折損・生きか、側面平滑
1293	I	河川 SD976	8N13	加工材	棒状材 (方形)	(22.8)	1.0	0.6	柵目	-	-	-	側面平滑、両端折損、板片か

遺物観察表 (木製品)

No.	出土位置		種別	器種	名称	法量 (cm)			木取り	樹種	AMS	保存処理	備考
	地区	遺構				グリッド	長さ	幅					
1294	I	河川 SD976	8N22	加工材	棒状材 (方形)	(5.7)	1.5	0.8	-	-	-	-	端部折損-生き、先端斜めにカット、側面面取り
1295	I	河川 SD976	8N18	加工材	棒状材 (方形)	(9.2)	0.8	0.6	-	-	-	-	端部折損-切損先端斜めにカット
1296	I	河川 SD976	8N12	加工材	棒状材 (方形)	(8.0)	1.0	0.5	-	-	-	-	側面方形、側面平滑、端部折損-折損
1297	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11	加工材	棒状材 (方形)	(9.7)	1.2	0.9	-	-	-	-	両端折損、側面平滑、断面六角形
1298	I	河川 SD976	8N8	加工材	棒状材 (方形)	(11.4)	1.0	0.6	-	-	-	-	両端折損、側面平滑、断面方形
1299	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11	加工材	棒状材 (方形)	(4.9)	(0.8)	0.3	-	-	-	-	側面平滑、端部折損-切損、先端斜めにカット、木函状
1300	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11	加工材	棒状材 (方形)	(6.4)	0.9	0.2	-	-	-	-	側面平滑、両端折損、木函状
1301	I	河川 SD976	7O10	加工材	棒状材 (方形)	(6.7)	1.4	0.4	-	-	-	-	表裏とも平滑だが加工痕不明瞭、両端折損
1302	I	河川 SD976	8N8	加工材	棒状材 (方形)	(6.3)	0.7	0.7	-	-	-	-	断面方形、側面平滑、端部折損-折損
1303	I	河川 SD976	8N13	加工材	棒状材 (方形)	(9.6)	0.7	0.6	-	-	-	-	側面面取り、端部折損-切損
1304	I	河川 SD976	8N7	加工材	棒状材 (方形)	(25.7)	1.5	0.5	-	-	-	-	端部折損-生き、側面平滑
1305	I	河川 SD976	8N22	加工材	棒状材 (方形)	(6.9)	0.9	0.7	-	-	-	-	断面方形、端部折損-切損、側面平滑
1306	I	河川 SD976	8N12	加工材	棒状材 (方形)	8.0	0.7	0.4	-	-	-	-	両端えぐり加工あり、側面平滑、浮子か
1307	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11	加工材	棒状材 (方形)	8.2	0.7	0.4	-	-	-	-	両端えぐり加工あり、側面平滑、浮子か
1308	I	河川 SD976	8N17	加工材	棒状材 (方形)	(6.6)	0.5	0.4	-	-	-	-	側面平滑、端部折損-切損
1309	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11	加工材	棒状材 (方形)	(9.3)	0.6	0.3	-	-	-	-	側面平滑、端部折損-生きか
1310	I	河川 SD976	8N4	加工材	棒状材 (方形)	(9.1)	0.7	0.4	-	-	-	-	断面方形、側面平滑、端部折損-折損
1311	I	河川 SD976	8N7	加工材	棒状材 (方形)	15.9	0.9	0.5	-	-	-	-	両端生きか、断面方形、側面平滑
1312	I	河川 SD976	8N12	加工材	棒状材 (方形)	(11.9)	0.6	0.4	-	-	-	-	断面方形、側面平滑、端部折損-生き
1313	I	河川 SD976	8N22	加工材	棒状材 (方形)	(10.2)	0.6	0.6	-	-	-	-	端部折損-生きか、先端カットか、側面平滑
1314	I	河川 SD976	8N12	加工材	棒状材 (方形)	(7.3)	0.5	0.4	-	-	-	-	断面方形、側面平滑、両端折損
1315	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11	加工材	棒状材 (方形)	(4.3)	0.7	0.5	-	-	-	-	断面三角形、端部生き-折損
1316	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11	端材	杭か	(36.3)	-	-	9.8	-	-	-	SX1209 杭1 下部 先端尖らせカット
1317	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11	端材	杭か	(35.7)	-	-	10.4	-	-	-	SX1201 杭1 上部 先端斜めにカット
1318	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11	端材	杭か	(48.1)	-	-	10.0	-	-	-	SX1209 杭2 先端尖らせカット
1319	I	河川 SD976	8N22	端材	丸木端材	(39.6)	-	-	2.9	-	-	-	先端斜めにカット、上端折損、節残る
1320	I	河川 SD976	8N17	端材	丸木端材	(10.8)	3.7	2.0	-	-	-	-	端部折損-生き、平割状態、両端斜めにカット
1321	I	河川 SD976	8N21	端材	丸木端材	(5.1)	2.6	2.3	-	-	-	-	端部生き-折損、先端斜めにカット
1322	I	河川 SD976	8N17	端材	丸木端材	(21.0)	-	-	2.0	-	-	-	棒状、両端折損、ともに3面カット
1323	I	河川 SD976	8N12	端材	丸木端材	(27.4)	-	-	2.4	-	-	-	端部折損-切損先端斜めにカット、折損部変化
1324	I	河川 SD976	8N11	端材	丸木端材	40.6	-	-	4.8	-	-	-	端部折損か-生き先端2方カット、枝葉ち落とし、樹皮残る
1325	I	河川 SD976	8N17	端材	丸木端材	(6.4)	-	-	2.9	-	-	-	両端折損、先端尖らせカット

No.	地区		出上位置		種別	器種	名称	法量 (cm)			木取り	樹種	AMS	保存処理	備考
	地区	遺構	グリッド	長さ				幅	厚さ	径					
1326	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11		端材		丸木端材	(3.5)	2.5	1.7	-	-	-	先端からセカット、大きく折損	
1327	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11		端材		丸木端材	(4.6)	2.9	2.4	-	-	-	大きく折損、先端からセカット、先端部以外炭化	
1328	I	河川 SD976	7010		端材		板状端材	4.3	2.8	1.4	-	-	-	両端切損、両端斜めにカット	
1329	I	河川 SD976	8N13		端材		板状端材	6.5	2.2	0.4	-	-	-	両端折損、切削痕が平滑	
1330	I	河川 SD976	8N7		端材		板状端材	(5.6)	2.2	0.4	-	-	-	端部生き - 折損、表面切削痕あり、側面平滑	
1331-a	I	河川 SD976	7010		端材		板状端材	(10.4)	4.3	0.8	-	-	-	表面大きく切削痕、両端折損、接合しない同一個体2点	
1331-b	I	河川 SD976	7010		端材		板状端材	(13.3)	5.0	1.1	-	-	-	表面大きく切削痕、端部折損 - 生き、接合しない同一個体2点	
1332	I	河川 SD976	8N13		端材		板状端材	(6.6)	2.3	0.7	-	-	-	表面平滑	
1333	I	河川 SD976	8N13		端材		板状端材	10.8	3.4	2.0	-	-	-	一部を除き全面切損	
1334	I	河川 SD976	8N17		端材		板状端材	4.2	3.2	0.4	-	-	-	両端折損、表面切削痕あり	
1335	I	河川 SD976	8N17		端材		板状端材	3.8	2.1	0.4	-	-	-	両端折損、表面切削痕あり	
1336	I	河川 SD976	8N8		端材		板状端材	9.3	1.5	0.3	-	-	○	墨痕?不明瞭、両端切損、表面切削痕明瞭	
1337	I	河川 SD976	8N13		端材		板状端材	7.4	4.7	2.7	-	-	-	両端切削痕、プロック状	
1338	I	河川 SD976	8N22		端材		板状端材	(16.8)	2.9	(1.2)	-	-	-	両端折損か、断面三角形、側面平滑	
1339	I	河川 SD976	8N13		端材		板状端材	(11.6)	2.5	1.1	-	-	-	両端切損、表裏平滑、切削痕あり	
1340	I	河川 SD976	8N22		端材		板状端材	(9.8)	2.7	2.1	-	-	-	端部折損 - 切損、先端斜めにカット、側面面取り	
1341	I	河川 SD976	8N17		端材		板状端材	4.2	4.3	0.5	-	-	-	両端切損、裏面切削痕あり	
1342	I	河川 SD976	8N13		端材		板状端材	(3.7)	2.3	0.4	-	-	-	表面斜めにカット	
1343	I	河川 SD976	8N13		端材		板状端材	4.9	(3.0)	0.7	-	-	-	端部切損	
1344	I	河川 SD976	8N13		端材		板状端材	7.1	2.5	0.8	-	-	-	両端切損、先端斜めカット	
1345	I	河川 SD976	8N13		端材		サカラ樹皮	8.7	2.7	0.02	-	-	-	加工段階、短辺断ち切り痕	
1346	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11				サカラ樹皮	(24.6)	2.9	0.04	-	-	-	加工段階、長辺剥ぎ取り痕	
1347	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11				サカラ樹皮	(6.5)	2.9	0.05	-	-	-	加工段階、長辺剥ぎ取り痕、短辺断ち切り痕	
1348	I	河川 SD976	8N14				サカラ樹皮	(14.9)	(3.4)	0.1	-	-	-	素材段階ないし残材、長辺剥ぎ取り痕、短辺面端割れ	
1349	I	河川 SD976	8N12				サカラ樹皮	(15.6)	(5.1)	0.05	-	-	-	素材段階ないし残材、長辺剥ぎ取り痕	
1350	I	河川 SD976	8N12				サカラ樹皮	13.6	1.1	0.1	-	-	-	加工段階、短辺断ち切り痕	
1351	I	河川 SD976	8N9				サカラ樹皮	(10.4)	9.9	0.15	-	-	-	素材段階ないし残材、長辺剥ぎ取り痕	
1352	I	河川 SD976	8N7				サカラ樹皮	44.8	4.2	0.1	-	-	-	素材段階ないし残材、長辺剥ぎ取り痕	
1353	I	河川 SD976	-				サカラ樹皮	(20)	0.23	0.2	-	-	-	加工段階 (製品に近い段階か)、短辺面端割れ	
1354	I	河川 SD976	8N12				サカラ樹皮	(30.9)	7.2	0.02	-	-	-	加工段階、長辺剥ぎ取り痕	
1355	I	河川 SD976	8N17				サカラ樹皮	(98.2)	1.5	0.04	-	-	-	加工段階	
1356	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11				サカラ樹皮	(28.5)	0.4	0.06	-	-	-	加工段階 (製品に近い段階か)、短辺断ち切り痕	
1357	I	河川 SD976	8N12				サカラ樹皮	23.1	2.3	0.04	-	-	-	加工段階、短辺断ち切り痕	
1358	I	河川 SD976 (SX1209)	8N11				サカラ樹皮	(7)	0.4	0.1	-	-	-	加工段階 (製品に近い段階か)、短辺面端割れ	

遺物観察表 (木製品)

No.	地区	出土位置		種別	器種	名称	法量 (cm)			木取り	樹種	AMS	保存処理	備考
		遺構	グリッド				長さ	幅	厚さ					
1359	I	河川 SD976 (SX1209)	8N6			サクラ樹皮	(17.6)	0.24	0.15	-	-	-	加工段階 (製品に近い段階か)	
1360	I	河川 SD976	8N11			サクラ樹皮	(14.6)	1	0.1	-	-	-	加工段階 (製品に近い段階か)、短辺断ち切り痕	
1361	I	河川 SD976	8N12			サクラ樹皮	8.9	1.6	0.02	-	-	-	加工段階 (製品に近い段階か)、短辺断ち切り痕	
1362	I	河川 SD976	8N13			サクラ樹皮	(15.2)	2	0.04	-	-	-	加工段階、短辺両端割れ	
1363	I	河川 SD976	8N17			サクラ樹皮	(6.7)	0.6	0.06	-	-	-	加工段階 (製品に近い段階か)、短辺断ち切り痕	
1364	I	河川 SD976	8N13			サクラ樹皮	(5)	(1.8)	0.04	-	-	-	加工段階	
1365	I	河川 SD976	8N9			サクラ樹皮	(12.5)	(3.3)	0.02	-	-	-	加工段階、長辺剥ぎ取り痕	
1366	I	河川 SD976	8N12			サクラ樹皮	15	1.8	0.04	-	-	-	加工段階、長辺・短辺断ち切り痕	
1367	I	河川 SD976	8N12			木簡	15.0	1.0	0.5	-	-	○	文字複数あり「□□里真志□」、両端折損	
1368	I	河川 SD976	8N12			木簡	(10.2)	(1.5)	(1.2)	-	-	○	文字多数あり 角材	
1369	I	河川 SD976	8N3			木簡	(10.8)	2.7	0.4	-	-	○	文字あり 端部折損・切損	
1370	I	河川 SD976	8N8			木簡	7.0	(1.1)	0.2	-	-	○	墨線、端部折損・生き	
1371	I	河川 SD976	8N13			木簡削片	(1.4)	(0.8)	(0.01)	-	-	○	薄い薄片状、文字あり	
1372	I	河川 SD976	8N11			木簡	(6.0)	2.7	0.3	-	-	○	墨痕あり 2片、両端折損、裏面切削痕	
1373	I	河川 SD976	8M25			朱漆木製品	(2.3)	(0.7)	(0.3)	-	-	○	朱と墨か?、側面一部生き、両端折損	
1377	I	河川 SD981	609	履脚具	下駄	下駄歯	8.4	13.7	1.8	-	-	○	スギ科スギ属スギ	
1378	I	河川 SD981		食事具	箸	箸	21.6	0.5	0.5	-	-	-	削出	
1379	I	河川 SD981		食事具	箸	箸	21.5	0.6	0.4	-	-	-	削出	
1380	I	河川 SD981		容器	蓋か	蓋か	(24.3)	31.2	0.9	-	-	○	表裏対物痕多数	
1381	I	河川 SD981		容器	脚飯	脚飯	(11.9)	6.0	1.0	-	-	-	ケビキ痕あり	
1382	I	河川 SD981		容器	曲物	曲物	-	4.0	0.4	8.2	-	-	内面ケビキ痕あり	
1383	I	河川 SD981		容器	蓋	蓋	12.8	(4.6)	0.7	-	-	-	2か所穿孔あり	
1384	I	河川 SD981		木製品	柄	柄	(10.5)	3.9	2.5	-	-	-	柄一部残存	
1385	I	河川 SD981		部材	脚飯	脚飯	19.1	(11.1)	1.2	-	-	-	木釘痕5か所あり、一部炭化	
1386	I	河川 SD981		土木材	杭	杭	(90.2)	5.5	5.7	-	-	-	北杭列、樹皮残存	
1387	I	河川 SD981		土木材	杭 (炭化材)	杭 (炭化材)	(90.3)	10.7	9.0	-	-	-	南東杭列、炭化杭	
1388	I	河川 SD981		土木材	杭 (炭化材)	杭 (炭化材)	(97.9)	10.8	10.9	-	-	○	南東杭列、炭化杭	
1389	I	河川 SD981		土木材	杭 (炭化材)	杭 (炭化材)	(115.5)	14.6	7.7	-	-	○	南東杭列、炭化杭	
1390	I	河川 SD981		土木材	杭	杭	(108.1)	5.5	5.3	-	-	-	南東杭列、樹皮残存	
1391	I	河川 SD981		土木材	杭	杭	(136.8)	8.2	6.4	-	-	-	南西杭列、樹皮残存	
1392	I	河川 SD981		土木材	杭	杭	(147.6)	10.6	9.2	-	-	-	南西杭列、樹皮残存	
1393	I	河川 SD981		土木材	杭	杭	(55.0)	6.4	7.0	-	-	-	南西杭列、樹皮残存	
1394	II	SB7-P573	22E24	建築部材	柱根	柱根	(33.0)	22.9	20.0	-	-	○	底面平坦に加工	
1395	II	SB7-P574	22F2	建築部材	柱根	柱根	(40.0)	27.3	25.2	-	-	○	底面平坦に加工	
1396	II	SB7-P955	23F6	建築部材	柱根	柱根	(11.9)	24.0	27.2	-	-	-	底面平坦に加工	
1397	II	SB7-P576	22F19	建築部材	柱根	柱根	(28.6)	26.0	17.7	-	-	○	底面傾斜に尖らせカット	
1398	II	SB9-P612	21G13	建築部材	柱根	柱根	(24.8)	25.4	22.4	-	-	○	断面八角形、底面平坦に加工、側面挟り	
1399	II	SB9-P632	20C9	建築部材	柱根	柱根	(53.7)	28.1	25.8	-	-	○	底面平坦に加工、側面挟り	
1400	II	SB9-P716	20G20	建築部材	柱根	柱根	(34.4)	28.0	32.0	-	-	○	底面平坦に加工	
1401	II	SB9-P615	21G22	建築部材	柱根	柱根	(12.0)	(17.9)	(6.9)	-	-	-	底面平坦に加工、大きく欠損	

No.	出上位置		種別	器種	名称	法量 (cm)			木取り	樹種	AMS	保存処理	備考
	地区	遺構				グリッド	長さ	幅					
1402	II	SB9-P617	20G25	建築部材	柱根	(55.3)	33.8	32.4	-	丸木	○	底面平坦に加工、側面抉り	
1403	II	SB10-P647	21F・12	建築部材	柱根	(47.7)	23.5	21.2	-	丸木	○	底面枳状に尖らせカット	
1404	II	SB12-P688	19H11	建築部材	柱根	(26.4)	21.2	18.6	-	丸木	○	底面折損	
1405	II	SB12-P696	18G14	建築部材	礎板か	(25.9)	11.9	5.1	-	ミカン削り (芯法)	-	外面大きな加工痕	
1406	II	SB12-P696	18G14	建築部材	礎板か	13.0	19.5	8.4	-	削材 (芯持)	-	下面大きな加工痕	
1407	II	SB12-P696	18G14	建築部材	礎板か	43.7	8.5	5.5	-	ミカン削り (芯法)	-	下面斜めにカット	
1408	II	SB12-P683	19G11	建築部材	柱根	(41.5)	29.2	19.0	-	ミカン削り (芯持)	-	底面斜めにカット	
1409	II	SB14-P666	20G6	建築部材	柱根	(18.1)	14.0	6.9	-	丸木か	-	底面平坦に加工	
1410	II	SB15-P738	18H3	建築部材	柱根	(37.6)	9.2	7.2	-	丸木	-	底面平坦に加工	
1411	II	SB21-P881	15J5	建築部材	柱根	(23.0)	10.4	9.6	-	丸木	-	木芯穴損、大きく折損	
1412	II	SB22-P862	17I17	建築部材	柱根	(29.0)	20.5	17.4	-	丸木	○	底面平坦に加工	
1413	II	SA29-P821	17I15	建築部材	柱根	(15.8)	14.6	9.5	-	削出 (芯法) か	-	端部折損-生きか、大きく腐食	
1414	II	SB13-P673	20H9	建築部材	柱根	(48.8)	27.7	24.1	-	削出 (芯法)	○	断面 13 角形、底面平坦に加工	
1415	II	SB13-P675	20H12	建築部材	柱根	(47.2)	24.0	20.3	-	削出 (芯法)	○	断面 10 角形、底面平坦に加工	
1416	II	SB13-P677	20H1	建築部材	柱根	(34.2)	21.8	21.3	-	削出 (芯持) か	○	断面 9 角形、底面平坦に加工、側面抉り	
1417	II	SB13-P680	20H3	建築部材	柱根	(58.0)	-	-	12.7	丸木	-	底面斜めにカット	
1418	II	SB18-P871	15I4	建築部材	柱根	(29.7)	18.2	18.0	-	丸木	-	底面平坦に加工	
1419	II	SE931	18J17	加工材	棒状材 (方形)	(29.2)	1.4	1.0	-	楕目	-	両端折損、側面平滑	
1420	II	SE931	18J17	加工材	板材	(7.7)	2.5	0.7	-	楕目	-	端部切損-折損、表面切削痕あり	
1421	II	SE3	16J24	加工材	棒状材 (方形)	(14.0)	1.0	0.7	-	削出	-	端部折損-折損、側面抉り、第3確認面出土	
1422	II	河川 SD466	16J1	土木材	杭	20.9	4.8	2.8	-	ミカン削り (芯持) か	-	両端折損、削材か	
1423	II	河川 SD466	16J2	土木材	杭	22.1	3.2	2.7	-	ミカン削り (芯持) か	-	端部折損-生きか、先端は平らにカット	
1424	II	河川 SD466	16J2	土木材	杭	32.6	4.6	2.7	-	ミカン削り (芯法) か	-	端部折損-生きか、先端は平らにカット	

5 石製品観察表

No	出土位置				名称	分類	法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考
	地区	遺構	グリッド	層位			長さ	幅	厚さ			
1425	I	SK1038	7N2		砥石	B1	(6.9)	6.0	5.1	352.4	凝灰岩	
1426	I	SK1039	7M23	上面	砥石	B2	(11.5)	10.3	9.9	777.9	礫岩	
1427	I	SX1001	8M9		砥石	A2	12.9	4.6	2.8	252.0	安山岩	
1428	I	SX985	7M17	上面	砥石	B1	(16.0)	(8.4)	(8.6)	1198.9	凝灰岩	
1429	I	SD978	709	最下層	砥石	A2	(5.4)	5.9	4.7	152.6	流紋岩	
1430	I	SD1021 -	7N8 7M14	上面 VI	砥石	B2	7.5	6.2	4.9	360.8	頁岩	
1431	I	SD1037 東	8M4	下層	砥石	B2	13.7	6.0	4.4	356.3	凝灰岩	
1432	I	SD1037 西	8L23	下層	砥石	A2	5.8	6.4	0.9	43.8	砂岩	
1433	I	-	11L19	II	砥石	A1	(6.1)	5.5	3.9	196.1	凝灰岩	
1434	I	-	12M7	II	砥石	A2	2.9	2.3	2.2	2.3	軽石	
1435	I	-	7015	IV	砥石	A2	6.8	5.0	2.5	76.8	凝灰岩	
1436	I	-	4M24	IV	砥石	A2	7.5	(4.8)	2.3	16.7	軽石	
1437	I	-	5M24	IV	砥石	A2	6.3	5.9	2.3	109.0	泥岩	
1438	I	-	6M18	IV	砥石	A2	6.3	6.8	(2.0)	94.2	泥岩	
1439	I	-	6N15	IV	砥石	A1	(4.5)	2.2	1.8	27.5	凝灰岩	
1440	I	-	8M2・9	IV	砥石	A1	9.8	3.9	2.8	69.9	凝灰岩	
1441	I	-	7N2	IV	砥石	A2	7.3	(4.5)	4.9	159.4	凝灰岩	
1442	I	-	5M2	IV	砥石	B2	(16.2)	(11.3)	7.0	1209.7	凝灰岩	
1443	I	-	7L8	IV	砥石	B2	(13.4)	(13.7)	4.1	840.3	凝灰岩	
1444	I	-	5N14	IV	石帯		(2.2)	(1.8)	0.7	4.3	石英閃緑岩	丸斬
1445	I	SB25-SD1078	6M9		砥石	A2	6.6	6.5	2.9	133.3	砂岩	
1446	I	SK1083	8L5		砥石	A2	(7.8)	4.6	2.3	112.0	泥岩	
1447	I	SD1085	8L15	上面	砥石	A1	(7.1)	3.0	2.7	62.2	凝灰岩	
1448	I	河川SD976	7013		砥石	B2	(17.5)	(18.4)	(9.1)	2223.1	凝灰岩	
1449	I	河川SD976	8N9		砥石	B2	17.6	12.0	16.5	3100.0	砂岩	
1450	I	河川SD976	11K14		砥石	A2	(4.4)	3.0	0.9	16.2	凝灰岩	漆付着
1451	I	河川SD976	8N12		砥石	B1	(9.8)	11.4	(2.8)	295.6	砂岩	
1452	I	河川SD976	7014		砥石	B2	(7.9)	9.1	(7.1)	641.4	凝灰岩	
1453	I	河川SD976	7014		砥石	A2	11.6	5.3	3.2	305.6	安山岩	
1454	I	河川SD976	8N11		石帯		3.7	3.8	0.7	24.1	石英閃緑岩	巡方
1455	I	河川SD976 -	8N12 703	V	石帯		3.7	3.8	0.7	20.5	石英閃緑岩	巡方
1456	I	河川SD976	7015		石帯		(1.4)	(1.7)	0.6	2.1	チャート	鈍尾
1457	I	河川SD981	1N13		砥石	B2	13.4	8.1	6.0	847.2	花崗岩	
1458	I	河川SD981	2N7		砥石	B2	10.8	8.7	3.7	437.5	凝灰岩	
1459	I	河川SD981	2N18		砥石	B2	(12.2)	7.5	(3.3)	366.0	砂岩	
1460	I	河川SD981	1P10		砥石	A1	(5.0)	4.0	1.4	49.8	凝灰岩	
1461	I	河川SD981	2N14		砥石	A2	5.9	4.3	2.0	7.1	軽石	
1462	I	-	1N10	V	砥石	B1	7.0	(6.2)	6.8	685.1	安山岩	
1463	I	-	2Q1	V	砥石	A1	(3.8)	2.7	1.9	20.8	凝灰岩	
1464	I	-	6M23	V	砥石	A2	3.7	1.7	0.9	5.9	泥岩	
1465	I	-	7M21	VI	砥石	A2	(7.0)	(6.5)	2.2	94.8	砂岩	
1466	II	SB3-P223	16I20		砥石	A2	8.5	7.6	5.6	106.6	軽石	
1467	II	P205	18I12		砥石	B1	(10.7)	10.0	8.6	870.7	凝灰岩	
1468	II	P107	15I4		砥石	A1	(4.7)	5.1	3.5	32.1	軽石	
1469	II	P295	17I13		砥石	B2	(13.8)	12.5	7.0	2091.2	砂岩	
1470	II	P449	17G19		砥石	A2	6.7	6.8	3.3	24.7	軽石	
1471	II	SK217	18I25		砥石	A2	(7.9)	(4.5)	(4.3)	94.8	凝灰岩	
1472	II	SK380	21G14		砥石	B1	(9.4)	7.3	(6.3)	480.2	凝灰岩	
1473	II	SD306	21F5		砥石	B1	(9.8)	7.5	5.3	541.2	凝灰岩	
1474	II	SD378	21G9	下層	砥石	B2	(10.7)	(10.6)	(6.9)	818.5	凝灰岩	
1475	II	SD21	17I6		砥石	B2	10.4	(9.2)	(5.6)	553.0	凝灰岩	
1476	II	SD21	16I10		砥石	A2	10.6	9.0	8.6	276.2	軽石	
1477	II	SD161	20H16		砥石	A1	(8.7)	(4.9)	(4.4)	130.3	凝灰岩	
1478	II	SD390	21G8		砥石	A2	8.1	5.2	2.4	28.3	軽石	
1479	II	SD339	21H10		砥石	B2	16.4	8.6	5.5	764.0	凝灰岩	
1480	II	-	16H23	II	砥石	A2	(9.2)	6.0	2.9	148.1	凝灰岩	
1481	II	-	16I15	II	砥石	A2	(9.3)	5.8	(2.4)	122.7	凝灰岩	
1482	II	-	16I1	IV	砥石	A2	6.6	4.0	2.3	49.4	凝灰岩	
1483	II	-	16H23	IV	砥石	A2	4.5	4.8	3.5	101.8	泥岩	
1484	II	-	22F20	IV	砥石	A2	5.9	5.2	3.2	123.6	泥岩	
1485	II	-	16I19	IV	砥石	A2	6.7	6.0	3.8	147.5	凝灰岩	

No	出土位置				名称	分類	法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考
	地区	遺構	グリッド	層位			長さ	幅	厚さ			
1486	II	-	22F20	IV	砥石	A2	6.5	4.6	2.5	84.1	泥岩	
1487	II	-	16I20	IV	砥石	A2	5.4	3.6	3.0	63.6	凝灰岩	
1488	II	-	17H6	IV	砥石	A2	(6.3)	(4.7)	(4.6)	129.2	凝灰岩	
1489	II	-	16I10	IV	砥石	A2	(4.3)	4.1	2.1	38.4	凝灰岩	
1490	II	-	16H23	IV	砥石	A2	4.5	3.9	1.8	39.7	頁岩	
1491	II	-	23F11	IV	砥石	A2	6.3	5.0	(3.7)	31.6	軽石	
1492	II	-	21G3	IV	砥石	B2	15.2	8.5	5.7	664.8	凝灰岩	
1493	II	-	18J19	IV	石帯		(2.4)	(3.3)	0.7	7.2	黒色珪質頁岩	巡方
1494	II	-	14I23	IV	石鏝		2.6	1.4	0.5	1.1	珪質頁岩	
1495	II	-	16J21	V	砥石	A2	6.3	5.4	2.1	97.5	砂岩	
1496	II	-	19J3	V直上	砥石	A2	2.8	2.3	0.5	2.5	黒色頁岩	
1497	II	-	21F22	V	砥石	B1	(12.0)	5.8	6.0	577.1	凝灰岩	
1498	II	-	19I24	V	砥石	C	(7.5)	3.4	2.9	106.0	凝灰岩	孔径 0.7 ~ 0.5 cm
1499	II	-	16L5	V	砥石	B2	(17.1)	12.0	9.1	1953.3	砂岩	
1500	II	SB9-P616	21H1		砥石	A2	9.9	9.0	2.4	292.3	泥岩	
1501	II	河川SD466	21G19		砥石	A2	4.7	5.0	2.5	13.4	軽石	
1502	II	P742	17I5	上面	砥石	B1	(16.0)	9.2	4.5	959.1	砂岩	
1503	II	SD620	22F17		砥石	B1	(13.0)	9.8	5.3	909.0	砂岩	
1504	II	-	21H10	VI	砥石	B2	14.1	8.5	5.7	596.3	凝灰岩	
1505	II	-	16I5	VI	砥石	B2	(12.0)	12.2	5.7	1181.1	斑れい岩	

6 金属製品観察表

No	出土位置				種別	名称	法量 (mm)					量目 (g)	字体	初鑄年	備考
	地区	遺構	グリッド	層位			外径縦	外径横	内径縦	内径横	銭厚				
1518	I	-	10K24	II	銭貨	景德元寶	24.7	24.7	7.3	7.5	1.3	2.48	真書体	1004年	
1519	II	-	-	-	銭貨	大観通寶	24.5	24.2	5.7	5.7	1.7	3.27	真書体	1107年	表採
1520	II	-	17J4	IV	銭貨	皇宋通寶	24.7	24.6	6.6	6.6	2.1	2.90	真書体	1038年	
1521	II	-	21F11	IV	銭貨	□□元寶	24.8	25.1	5.7	5.6	1.6	3.47	真書体	1004年	

7 漆製品観察表

No	出土位置				名称	法量 (cm)			備考
	地区	遺構	グリッド	層位		長さ	幅	厚さ	
1554-a	II	-	18H10	V層直上	漆手箱	(27.5)	(10.9)	0.3	
1554-b	II	-	18H10	V層直上	漆手箱	35.3	(6.4)	0.3	

No	出土位置				名称	法量 (cm)			備考
	地区	遺構	グリッド	層位		口径	底径	器高	
1233	I	河川SD976	8N13		小盤	15.1	12.2	0.9	
1374	I	河川SD981	4O12		漆器椀	-	9.0	-	
1375	I	河川SD981	2P1		漆器椀	-	9.0	-	
1376	I	河川SD981	4O12		漆器椀	-	-	-	

8 金属製品・鍛冶関連遺物一般観察表（作表：穴澤義功）

No	構成No	遺物名	遺構	区	グリッド	層位	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
							長さ	幅	厚さ				
1506	22	鉄製品（鍛造品） 刀子、基部、 木部付き	—	I	6N15	IV	3.6	1.0	0.5	2.4	1	錆化 (△)	刀子の基部破片。左右の両端部が破面になっており、右側部では基部が錆化して中空気味になる。背側を除く3面には薄皮状の木部の痕跡が確認される。背側の厚みは約3mmを測り、刃部側では2.5mm強と僅かに薄くなっている。木部は密度の高いやや硬質な印象を受ける。
1507	23	鉄製品（鍛造品） 鍋、口縁部？	—	I	7N6	IV	3.7	2.6	0.4	10.8	2	錆化 (△)	鍋または浅鍋状の鍛造品口縁部小破片。左右の側部から下手側の側部は破面で、破面には鍛造品特有の結晶状態が読み取れる。下面に貼り付くのは完全な土砂部分である。但し、土砂を取り除くと資料自体が崩壊するため、現状での観察記録とする。上手側端部が鍋の口唇部側で、内面中段には横方向にやや不明瞭な浅い段が生じている。また、左下手側の端部寄りが外側に反り気味で、資料全体が有段の鍋口唇部にあたる可能性もあり、厚みは3.5mm～4mmを測り、上手側端部の方が厚みを持っている。上面下手側の低い段部は表層の脱落による変形が認められる。
1508	1	鉄製品（鍛造品） 皆折釘	SK1083	I	9L1	上層	0.9	8.2	1.4	18.7	4	特L (☆)	体部半ばから逆L字形に折れ曲がった皆折釘破片。横断面形は方形からやや長方形で、足部側は欠落する。頭部は小さく折り曲げられているが現状は開き気味。
1509	16	鉄製品（鍛造品） 棒状不明品	SD1085	I	9L6		1.4	4.8	0.6	8.9	2	M (◎)	前者と横断面形がやや似た形の棒状不明品破片。下手側の端部は破面で、上手側端部は狭い扇状の形に終末する。前者と同一個体の可能性もあり。この場合には火箸の頭部破片ということになろう。表層の錆化が進み錆膨れも目立つ。
1510	14	鉄製品（鍛造品） 工具状不明品	SD1085	I	8L10		10.8	1.0	0.4	11.5	3	特L (☆)	2片に割れているが接合可能な鉄製品。基部の先端側が小さく欠落する以外は完形品。厚さ5mm前後の板状に粗く加工された刀子様の外形をもつ鉄製品で、刃部は全く確認できない。闊の部分は両側気味で刀子の未製品の印象を受けるが、表面の酸化土砂の影響も加わり、現状では工具状不明品としておく。未製品の疑いを持つのは刀子様の全体感と刃部が形成されていないということに加えて、側部の仕上げが極めて甘いことによる。刀子未製品とすれば、鍛冶工房での刀子加工の証拠品となる可能性大。
1511	15	鉄製品（鍛造品） 棒状不明品	SD1085	I	9L11		0.9	23.5	0.8	54.9	4	特L (☆)	長さ23.5cmを測る棒状不明品。横断面形は僅かに長方形気味で、下手側の端部は上面が平坦化されて先端部が細いへら状加工されている。一方、上手側の端部は欠けて基部が長さ8mm程右方向に折れ曲って突出する。全体感と下手側端部の形態は火箸によく似る。表面には錆膨れや二次的な酸化物が不規則に広がっている。
1512	4	銅製品（飾金具） 鉄芯銅貼？ 黒漆塗？	河川 SD976	I	801		4.1	2.8	0.3	4.5	2	錆化 (△)	厚さ1.5mm強を測る薄板状の不明資料破片。弱いながらも磁着傾向をもち、鉄芯銅貼または鉄芯に黒漆が塗布されている可能性をもつ。上面の外周部から下面の9割方が薄皮状の酸化土砂に覆われている。左右の側部から下手側の側部が破面になっており、外観的には目釘穴は確認できない。表裏面の地色は黒褐色で平滑になっている。また、上面の一部に不規則な皺が僅かに認められるため、漆塗布を疑わせる根拠となる。性格は不明ながら、飾金具あるいは石帯の裏金具等であろうか。要X線透過撮影。
1513	2	鉄製品（鍛造品） 馬鐙の歯	河川 SD976	I	11L3		2.1	21.2	1.4	83.9	4	特L (☆)	やや細身の馬鐙の歯の完形品。先端部から5cm程頭部寄りの部分で僅かに「く」の字状に折れ曲っている。また、頭部から体部側に3cm程寄った部分でもかすかな折れが生じている。この折れ曲った部分は木部本体側のホゾ穴に対応するものか。馬鐙の歯の横断面形は長方形で先端部が斜め方向に摩擦しており、平坦な頭部に向かって身幅が徐々に広がっている。本来の表面が残るのは飛々で、9割近い部分では表層が剥落する。馬鐙の歯としては細身のためやや古手の資料かもしれない。
1514	10	銅製品（鍛造品） 帯金具、巡方、 被熱？	河川 SD976	I	8N3		3.4	2.7	0.6	8.9	1	特L (☆)	古代の官人が装着した石帯の部品である銅製巡方の表金具の完形品で鍛造品と判断される。上面は平坦で肩部は四方が傾斜しており、上面下手側には長さ1.75×0.5cmの長方形透かし穴が認められる。一段四んだ形の裏面には2か所ないし3か所の短い目釘状の突出部が確認され、左下手側の側部から下面にかけては小範囲の鍛冶滓部分が確認できる。巡方の表裏面は荒れてザラザラしており、被熱痕を窺わせる。なお、本遺跡では石製巡方も複数個体が出土しており、石帯部品としては一連の資料であろう。また、構成No. 4の鉄芯銅貼？で黒漆塗りと推定される薄板状の資料も石帯部品等の裏金具の疑いを持つ。

No	構成No	遺物名	遺構	区	グリッド	層位	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
							長さ	幅	厚さ				
1515	9	鉄製品 (鍛造品) 焼印状不明品、 被熱	河川 SD976	I	709		3.3	4.0	0.5	8.9	3	L ●	不整十字形の本体部を持ち、その下手側から伸びた 茎部が直角に上方を向く形の特異な鉄製品破片。表面 全体がくり返し被熱した様な荒れた外観になって いる。茎部の横断面は方形気味で、本体部となる 十字形の部分は薄板の断面形を示す。但し、左右方 向の突出部は細身で、上手側は幅広い長方形の突出 状態を示す。(先端が二つに別れているようにも見 える) 下手側に伸びる茎部と推定される部分が端部 で上方に折れ曲ることから、古代の焼印または焼き ゴテの一種かと推定しておきたい。突出した端部は いずれも破面になり、銹化と部分的な表層の脱落が 生じている。
1516	8	鉄製品 (鍛造品) 刀子、刃部から 茎部、片関	河川 SD976	I	8N13		8.0	1.1	0.3	3.2	3	L ●	刀子の刃部から茎部と推定される鉄製品破片。茎部 先と刃部側の広範囲が欠落しており、背側にはゆる やかな傾斜角を持つ関が確認される。また、この関 部を境に全体が「へ」の字状に折れ曲がっている。 細長い茎部となることから、刃部側もかなり長い形 態の刀子と推定される。
1517	—	ヤス	河川 SD981	I	206		(10.9)	0.6	0.4	9.6	—	—	
1522	39	鉄製品 (鑄造品) 鍋、口縁部?	—	II	16H19	IV	3.5	1.7	0.6	3.0	3	銹化 (△)	鍋類と推定される鉄製品 (鑄造品) の小破片。左右 の側部と下手側の側部の破面に加えて外面表皮の剥 落が目立つ。上手側の端部は丸みを持って終束した 縦断面形で、外面がふくらむ傾向になることから、 鍋の口唇部かと推定される。内面側はほぼ平坦で、 外面には薄皮状の酸化土砂が貼り付いている。本遺 跡出土の鉄関連遺物から構成した42点の資料中 には鑄造品の破片が2点含まれている。もう1点は構 成No.23で、いずれも鍋類の口縁部から口唇部破片 である。古代の資料としては古手の鑄造品となろう。
1523	38	鉄製品 (鍛造品) 鎌?	—	II	21H8	IV	4.9	3.4	0.3	27.8	2	銹化 (△)	左右の側部が破面になった、身幅3cm程を測る鎌状 の鉄製品破片。下面に突出するのは酸化土砂の部分 である。左側部の破面には鉄製品自体の断面形が露 出するが、この部分では刃部と背側の差が不明瞭で、 へら状の鉄製品のように見える。上面から見ると 僅かに左右方向がせり上がり気味で、折れ曲がって いる可能性もあり。
1524	37	鉄製品 (鍛造品) 薄板状不明品	—	II	18J22	IV	1.4	1.5	0.4	1.5	3	銹化 (△)	側部4面と下面が破面になった薄皮状の鉄製品表面 破片。側部下が鉄器の表面側で上面は酸化物が主 体となる。何らかの角棒状の鉄製品の表層破片と推 定される。上下面から側面上半にかけては、三価 の鉄酸化物になっているため、色調がくすんだ紫紅 色になっている。被熱した鉄器に特有の酸化色であ る。
1525	11	腕形鍛冶滓 (小)	SD982	I	6N9	上層	5.1	3.9	1.9	50.3	3	なし	側部3方が直線状の破面になった、小型の腕形鍛冶 滓の中核部から側部にかけての破片。上面はゆるや かな波状の平坦面で、下手側の側部から下面は浅い 腕形になる。滓質は緻密で気孔は下半主体。側部か ら下面は木炭痕と見られる連続的な凹凸部分に覆わ れている。
1526	12	炉内滓 (含鉄)	SD1037 東	I	8L12	下層	5.6	7.7	4.5	194.9	6	銹化 (△)	やや肥大気味の気孔と連続的な破面に覆われている 炉内滓または腕形鍛冶滓破片。右側部下半が一部生 きており、この部分を重視すれば腕形鍛冶滓的な要 素が認められる。滓質は緻密で結晶が部分的に発達 してキラキラと輝く部分もある。また、滓部内の木 炭のかみ込みや木炭痕もやや目立つ。滓の結晶が発 達することから炉内滓の可能性を残すが、中型から 大型の腕形鍛冶滓の場合にも結晶が発達する場合が あり、かなりまぎらわしい資料である。上半部を中 心にやや磁着気味。
1527	17	羽口 (鍛冶) 先端部、滓付き	—	I	11K7	II	2.5	3.0	2.9	11.6	2	なし	鍛冶羽口の先端部破片。羽口正面から見て顎部側 の破片で、外面は体部から肩部にかけての特徴を残 している。羽口の下顎部破片に相当するためか、表層 に2mm以下の厚みとなる薄い滓層が貼り付いてい る。残る側部4面は破面で、通風孔部側の壁面は欠 落する。そのため肉厚は1.5cm以上を測るとのみ言 える。羽口としてはやや細身と推定される外観を示 す。胎土は僅かに粉殻を交える粘土質。
1528	20	腕形鍛冶滓 (極小)	—	I	8N6	IV	3.9	4.5	2.1	42.1	4	なし	ほぼ完形品とみられる極小の腕形鍛冶滓。最大厚み は1.8cm程を測り、側部の立ち上がりが比較的急角 度になっている。滓量の少ない鍛冶滓段階の最終 工程に伴う滓の可能性が強い。上面は平坦気味で木 炭痕が確認され、側部から下面は滓単位が2つに別 れている。上手側下半が先行する滓で、下手側から 上半部は二次的に重層した滓である。滓量の極めて 少ない段階での生成物であろう。上手側下半の滓部 はやや磁着が強い。

No	構成No	遺物名	遺構	区	グリッド	層位	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
							長さ	幅	厚さ				
1529	21	鍛冶滓	—	I	11K7	IV	2.0	2.9	0.9	5.4	1	なし	小さいながらも浅い椀形をしたほぼ完形の鍛冶滓。平面形は不整楕円形で、上面が浅く窪み下面が皿状に突出する。上下面ともに粉炭痕とみられる微細な凹凸が生じている。
1530	18	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	—	I	7N2	IV	6.0	7.0	3.5	139.7	4	錆化 (△)	分析資料No. 2。分析資料詳細観察表参照。
1531	19	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	—	I	8M4	IV	4.2	6.1	3.4	98.0	5	錆化 (△)	厚板状の外観を持った中型の椀形鍛冶滓破片。上面が生きており、下手右側の側部から下面にかけてが部分的に生きている。残る側部4面と下面の7割方が破面となる。上面はゆるやかな波状の平坦面で、点々と木炭痕らしき窪みを残す。破面は緻密で結晶が発達するため部分的にキラキラとした輝きをもつ。大振りの椀形鍛冶滓の場合には結晶が発達する傾向あり。右上手側の側部下端が小塊状に突出しており、この部分のみ磁着が強い。
1532	13	炉壁 (滓付き・含鉄)	SD1085	I	8L5	上面	11.0	9.9	6.0	788.3	6	錆化 (△)	分析資料No. 1。分析資料詳細観察表参照。
1533	6	粘土質溶解物 (鍛冶)	河川 SD976	I	8N17		2.8	2.2	1.8	4.6	1	なし	複数の小破片が被熱・発泡して小塊状になった粘土質溶解物。灰白色から灰黒色に被熱して表層全体が発泡する。構成No. 3の羽口先頸部の被熱状態とよく似ており、母体は羽口先の破片か。
1534	7	粘土質溶解物 (鍛冶・土器付き)	河川 SD976	I	8O5		4.2	4.1	3.7	19.6	2	なし	前者をさらに大きくした形の凹凸の目立つ粘土質溶解物。左側部下手側の端部のごく一部が破面になる以外は、完形に近い状態を示す。上面は左右方向に伸びる楕状で、短軸側の側部から下面は粘土質溶解物が複数垂れ落ちたような外観を示す。また、この部分の表皮は黒褐色。上面上手側の肩部の一部が鍛冶滓質で、錆色も認められる。右側部には厚さ1cm弱の土器片または羽口破片様の別個体をまき込んでいる。資料の生成位置は羽口先頸部の周辺かと推定される。
1535	3	羽口 (鍛冶) 先端部 粘土質溶解物付き 滓付き	河川 SD976	I	7O14		3.9	6.1	2.9	41.4	4	なし	右側に椀形鍛冶滓の側部様の滓部を残す羽口先端部破片。羽口の部位としては下頸部かと推定されるが、被熱粘土塊または粘土質溶解物様に熱変化してしまっている。滓側は上手側の肩部に小破面をもち、下面は粉炭痕による凹凸が生じている。羽口側は不規則な小破面が連続する状態で、灰白色きみに被熱・発泡状態を示す。通風孔部は不明瞭。
1536	—	金床石 (転用)	河川 SD976	I	8O6		(10.3)	(9.2)	6.9	1237.2	—	—	閃緑岩
1537	5	炉壁 (鍛冶炉) 滓付き	河川 SD976	I	8O5		2.6	3.1	1.3	9.3	1	なし	一見、極小の椀形鍛冶滓様の外観を示す特異な資料である。上手側の側部と右側部が小破面で内外面がゆるやかな弧状を示しているため鍛冶炉の内面に貼り付く形で生成した滓の可能性が有る。主体は鍛冶滓部分で、内外面には鍛冶炉の炉床土または炉壁と推定される灰褐色の緻密な土が面をなす。羽口先頸部周辺の炉壁表面付着滓の小破片か。
1538	24	椀形鍛冶滓 (小・含鉄)	SB6-P363	II	22F12		4.5	5.0	2.2	45.3	3	錆化 (△)	上面が平坦気味な平滑面で、左側部から下手側の側部が破面になった小型の椀形鍛冶滓。上手側の側部から左手側の側部は生きており、下面は浅い椀形を示す。流動性のよい滓で上面芯部寄りに含鉄部が推定される。そのためか、微細な放射割れあり。下面の中央部寄りはやや酸化土砂が厚い。
1539	27	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)	P457	II	16H9	上層	6.3	6.3	1.9	62.1	2	錆化 (△)	浅い椀形の形態を持つ完形の椀形鍛冶滓。重量的には極小の椀形鍛冶滓に相当する。平面形は左側部側が直線状に途切れた不整三角形。上面は浅く窪み、左側の外周部沿いでは表皮が剥落して凹んでいる。側部から下面は浅い椀形で、僅かに木炭痕や木炭の喰い込みが確認される。下面沿いがやや磁着傾向を示す。
1540	26	粘土質溶解物 (鍛冶)	SD279	II	17K14		2.2	3.0	2.0	4.9	1	なし	2cm大前後の羽口先2片が融合する形で発泡した粘土質溶解物。ほぼ完形品で芯部は発泡した軽石状になっている。表面はガラス質酸化して濃緑色から灰黒色を示し、僅かに木炭痕らしき窪みあり。
1541	28	炉壁 (製錬炉)	—	II	16J12	II	2.9	4.5	2.6	36.3	1	なし	分析資料No. 3。分析資料詳細観察表参照。
1542	29	羽口 (鍛冶) 先端部	—	II	16H18	IV	2.9	3.4	1.5	10.7	1	なし	細身の鍛冶羽口の先端部破片。先端部を除く側部4面が破面になる。羽口の先端部はきれいな筒状を示し、表層のみが薄皮状にガラス質酸化している。内面には通風孔部壁面が確認される。羽口正面からみて左側部側の破片である。胎土は僅かに粉塵と砂礫を混じえた粘土質。本例のような細身で管状の羽口は古代の北陸側に特徴的である。また、小型や極小の椀形鍛冶滓が数多く出土する本遺跡の鍛冶関連遺物に良く対応する。

No	構成No	遺物名	遺構	区	グリッド	層位	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
							長さ	幅	厚さ				
1543	30	羽口 (鍛冶) 先端部	—	II	15H15	IV	2.5	3.3	1.5	12.8	3	なし	分析資料No. 4。分析資料詳細観察表参照。
1544	31	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	—	II	23E6	IV	5.8	7.0	3.4	111.5	2	錆化 (△)	左側部と右側部上手側の肩部が破面になった、中型の椀形鍛冶滓の中核部から肩部にかけての破片。上面は浅く窪み側部から下面はきれいな椀形に突出する。下面を中心に酸化土砂が厚く、上面上手側の肩部では磁着が強めとなる。滓質は緻密で部分的に気孔が発達する。
1545	32	椀形鍛冶滓? (中・含鉄)	—	II	17I10	IV	3.9	3.8	3.7	137.8	6	特L (☆)	分析資料No. 5。分析資料詳細観察表参照。
1546	33	椀形鍛冶滓 (小・含鉄)	—	II	22F10	IV	4.0	4.8	2.5	52.7	4	錆化 (△)	上下面と右側部上手側が部分的に生きている小型の椀形鍛冶滓の肩部破片。破面はシャープで滓質は緻密。上面はほぼ平坦で、側部から下面はやや変形した椀形になっている。破面には気孔がほとんど認められない。上面が平坦気味の滓は気孔が少なく滓の流動性が良好なことが予想される。側部から下面の2か所がやや磁着傾向が強い。
1547	34	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)	—	II	21H11	IV	4.3	5.0	1.5	40.5	4	錆化 (△)	分析資料No. 6。分析資料詳細観察表参照。
1548	35	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)	—	II	19H10	IV	3.5	5.4	1.8	46.3	3	錆化 (△)	左側部に小破面を残す以外はほぼ完形の極小椀形鍛冶滓。平面形は短軸方向に長手の不整形から楕円形で、側部の立ち上がりが急角度になっている。上面は浅く窪み木炭痕が点在する。下面は皿状で小さな凹凸も確認される。僅かに磁着傾向があり上面寄りが強め。
1549	36	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)	—	II	16H10	IV	4.6	3.8	1.9	27.0	2	錆化 (△)	左側部が直線状の破面になった、やや横長で極小の椀形鍛冶滓破片。上面は平坦気味ながら中央付近の表皮が脱落する。側部から下面は小舟の軸状で、右方向にせり上がって終束する。表面には粉炭痕が連続的に残される。磁着傾向は弱いながらも上下面ともほぼ同程度に認められる。
1550	40	炉内滓? (含鉄)	—	II	15I18	V	3.7	5.5	4.2	92.0	6	錆化 (△)	上面と右側部の一部が生きている炉内滓または椀形鍛冶滓破片。残る各面は連続的な破面に開かれており、破面の結晶が発達してキラキラと輝いている。また、表面の半分以上が酸化土砂に覆われており、わかりにくい資料である。椀形鍛冶滓となる場合には左方向へ90度回転して、現在の右側部が上面となる可能性もあり。滓質は緻密で、やや発達した気孔が滓内部に点々と残されている。含鉄部は右側部寄りの表層と見られる。そのため酸化土砂もやや目立つ。炉内滓かとした構成No.12とともに椀形鍛冶滓的要素も一部に認められる資料である。滓の結晶が発達していることから、椀形鍛冶滓とすれば中型以上のサイズが母体と予想される。
1551	41	羽口 (鍛冶) 先端部	—	II	13I20	V	2.5	2.9	2.0	10.1	2	なし	鍛冶羽口の先端部小破片。身厚が1.2cm程を測る小振りの羽口で、残存部位は羽口正面からみて左側部下半に当たる。先端部は平坦気味に滓化・溶損して、肩部にかけての1cm幅程度に発泡状態が認められる。側部3面は破面で、内面には通風孔部壁面が確認される。胎土は粉殻や砂礫を混じえる粘土質。本遺跡出土資料から構成した42点の鉄関連遺物のうち鍛冶羽口の破片は4点である。うち3点は確実に細身の羽口で、古代の北陸道特有の形態と推定される。また、小型や極小の椀形鍛冶滓が目立つ点も羽口の傾向とほぼ対応する。
1552	42	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	—	II	22E21	V	5.5	7.4	3.2	137.3	3	錆化 (△)	分析資料No. 7。分析資料詳細観察表参照。
1553	25	金床石	鍛冶遺構 SX1214	II	17K2	V	17.6	24.5	11.1	5800.0	2	なし	転石を母材に用いた金床石の半欠品。左側部が直線状の新しい大破面になっており、金床石としては上下面の中央部を鍛打に広く用いている。右側部と下手側の側部の自然面は砥石としても用いられており、やや平滑な砥面が確認される。上下面の打痕は3cm程度程度の不規則なうろこ状のハネで、被熱痕は認められない。剥落の程度は下面の方が激しく、下面を金床石として先に用いた後に裏返して逆面を使用していることになる。石質は2mm以下の結晶が密な閃緑岩と推定される。砥痕の向きは面の長軸方向が主体になっている。本資料はSX1214鍛冶炉に接近した状態で検出されており、鍛冶工場の床面に平置きされた状態で用いられていたものと推定できる。なお、左側の欠落した部分の破片が出土資料中には含まれていないために、他の鍛冶工房に持ち運ばれてしまった可能性がある。

9 鍛冶関連遺物詳細観察表（作表：六澤義功）

分析資料 No.1

出土状況	遺跡名	浦反甫東遺跡		遺物No.	13（構成No.）			項目	滓	メタル		
	出土位置	I区	SD1085 覆土上面	時期：根拠	9世紀後半～10世紀初頭：出土土器							
試料記号	検鏡：URA-1	計測値	長径	11.0 cm	色調	表：茶褐色～黒褐色	遺存度	破片	分	検鏡	◎	
	化学：URA-1		短径	9.9 cm		地：黒褐色	破面数	13		硬度	○	
放射化：—	厚さ		6.0 cm	磁着度	6				前含浸	—	X線回折	○
遺物種類（名称）	炉壁（滓付・含鉄）		重量			788.3 g	メタル度	錆化（△）			断面樹脂	
観察所見	<p>内面に5cm程の厚みを持つ分厚い滓層が残る炉壁破片。内外面から側部全体が破面になっており、本来の自然面は確認することができない。内外面に灰えて側部が連続的な大小の破面に囲まれており、破面数は合わせて13面を数える。炉壁部分は外面寄りの1から2cm程度の厚み部分で、灰色に焼熱した小礫混じりの粘土質の胎土を示す。炉壁部分と滓部の境の部分を中心に1.5cm大以下の木炭痕や木炭のかみ込みが確認される。炉壁内面側の滓層は下方に向かう程緻密で、上端部の破面には5mm大以下の、ややゆがんだ気孔が連続的に露出する。内面寄りの滓層は肥大した気孔がまばらで、発達した結晶のためキラキラとした輝きを持つ。滓層全体が弱い磁着反応を示し、炉壁側は反応がない。炉壁上端部の平面形はゆるやかな波状ながらも、全体観は直線状になっている。色調は表面の半分以上が茶褐色の酸化土砂に覆われており、破面の角の部分を中心に滓側の黒褐色部分が露出する。地は黒褐色。</p>											
分析部分	長軸端部1/5を直線状に切断し、滓部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。											
備考	浦反甫東遺跡のI区下層出土品から構成された構成No.1から13までの13点の鉄・銅関連遺物のうちの1点である。分析資料としては、I区下層出土品中では本資料1点のみに限られている。出土位置はSD1085と名付けられた掘立柱建物3棟の北東側に位置する溝の覆土上面である。SD1085溝はSB25と名付けられた5間×2間以上と推定される掘立柱建物跡の北東側に13m程離れて位置する鈎の手状の小溝であり、掘立柱建物SB25からSB27と名付けられた3棟の掘立柱建物跡の南東部には、約10m程離れた位置に鍛冶関連遺物や石帯の部品である石製巡方4点と銅製巡方1点に加えて刀子や焼印状不明鉄製品等が出土した遺物集中区（廃棄場）が検出されている。構成資料のうち製錬系と判断される炉壁資料は本資料とII区上層出土の分析資料No.3の2点に加えて構成No.12を含む炉内滓があるので、I・II区合計して全42点の9割以上が鍛冶関連遺物主体になっている。前述の製錬系の炉壁資料2点は各々の胎土や滓質が異なり、別種の製鉄炉を母体とする可能性が高い。浦反甫東遺跡は旧島崎川流域に存在し、古代古志郡に相当する奈良・平安時代の官衙関連遺跡である八幡林遺跡や下ノ西遺跡の近接地域に接し、官道である古代北陸道との関連性も想定される一帯に含まれている。また、立野大谷遺跡をはじめ数多くの製鉄関連遺跡の密集地帯としても知られている。従って、分析資料No.1とNo.3の炉壁種類の違いは、背後の丘陵部に想定される製鉄遺跡から何らかの理由で本遺跡にもたらされた可能性が強そうである。つまり、本遺跡のI・II区の上・下層に区分される出土品の大半である多くの鍛冶関連遺物との直接的な繋がりは想定しにくい。なお、炉壁付着の滓部という観点からすれば炉底面に接した炉壁部分ではないかと判断される。											

分析資料 No.2

出土状況	遺跡名	浦反甫東遺跡		遺物No.	18（構成No.）			項目	滓	メタル		
	出土位置	I区	7N-2 IV層	時期：根拠	9世紀後半～10世紀初頭：出土土器							
試料記号	検鏡：URA-2	計測値	長径	6.0 cm	色調	表：黄褐色～灰白色～黒褐色	遺存度	破片	分	検鏡	◎	
	化学：URA-2		短径	7.0 cm		地：灰色～黒褐色	破面数	6		硬度	○	
放射化：—	厚さ		3.5 cm	磁着度	4				前含浸	—	X線回折	○
遺物種類（名称）	椀形鍛冶滓（中・含鉄）		重量			139.7 g	メタル度	錆化（△）			断面樹脂	
観察所見	<p>上下面と右下手側の側部が生きている中型または小型の椀形鍛冶滓破片。短軸側の両側部と左側部2面が破面になっている。破面数は4を数える。もとの椀形鍛冶滓の中核部から右下手側の側部にかけての破片で、本来の大きさの1/3以上が生きている可能性が高い。上面は中央部寄りか径5cmほどの円形の範囲でやや小高くなっており、肩部側が一段低い平坦面または外側に傾斜する緩やかな傾斜面になっている。右下手側の側部から見ると肩部の張り出しは滓の中段付近に位置する。生きている側部から下面は浅い椀形で、右上手側の側部は表層が欠け落ちている。破面に露出する滓質は緻密ながらも、部分的に微細な気孔が確認される。また、上面右上手側の肩部や左側部から下端部の破面端部は風化のためか白っぽくなっている。滓内部には含鉄部がやや広く推定され、錆化により放射割れも発達し始めている。下面中央部の突出部には小範囲ながら黒錆が確認され磁着も強めになる。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、滓部は風化の強弱により灰白色から黒褐色を示す。地は灰色から黒褐色で、一部が錆のにじみにより濃茶褐色となる。</p>											
分析部分	短軸端部1/3を直線状に切断し、滓部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。											
備考	浦反甫東遺跡I区上層からの出土品から構成された10点の鉄関連遺物のうちの1点である。包含層であるIV層からの鍛冶関連遺物の出土は下層に比べて散漫で、特に遺物が集中する状態は読み取れない。構成資料の内訳は、炉内滓が1点、中型から小型の椀形鍛冶滓が2点、小型並びに極小の椀形鍛冶滓が1点ずつ、鍛冶滓と羽口の先端部破片がそれぞれ1点、鉄製品（鍛造品）が2点含まれている。但し、うち1点は中世以降の馬鋸の歯である。また、その他に鋳造された鉄鍋の口縁部破片が1点、SB24掘立柱建物周辺からは石製石帯が1点出土している。次に破石の出土状況を調べてみるとI区上層からは調査区南西部のSB24掘立柱建物の東側からSD1037溝の間を埋めるように43点が出土しており、II区南西部のSB03と05掘立柱建物周辺とやや似た傾向を示しているため、このI区南西部にも鉄製品の破石による仕上げ工場の存在が疑われるかもしれない。また、I区下層の破石出土分布が古代の河道であるSD976に廃棄という形を取るのに対して、上層ではより西部のSBやSD遺構寄りになっているような印象を受ける。											

分析資料 No.3

出土状況	遺 跡 名	浦反甫東遺跡		遺物 No.	28 (構成 No.)			項 目	滓	胎土		
	出土位置	II区 16J-12	II層	時期：根拠	9世紀後半～10世紀初頭：出土土器							
試料記号	検 鏡： URA-3	計 測 値	長 径	2.9 cm	色 調	表：黒褐色～灰褐色	遺 存 度	破片	分 析	検 鏡 硬 度	◎	
	化 学： -		短 径	4.5 cm		地：灰褐色	破 面 数	5		X線回折 化 学 耐 火 度		
放射化： -	厚 さ		2.6 cm	磁着度	1					前 含 浸	-	カリリー 放 射 化
遺物種類 (名称)	炉壁(製錬炉)		重 量			36.3 g	メタル度	なし				断面樹脂
観察所見	内面がガラス質に滓化して、側部4面と外面全体が破面になった炉壁小破片。内面は表層のみ薄くガラス質に溶損して細身の垂れが散在する。外面中段が横方向に向かって突出しており、破面ながらも炉壁製作時の輪積み痕跡の疑いを持つ。また、炉壁内面側の平面形が全体的に直線状の溶損状態を示すのに対して、外面は右方向が倍程度の厚みを持っている。胎土は長石や石英質の砂粒を含む砂質で、僅かにスサが混じえられている。色調は表面が黒褐色から濃茶褐色で、胎土側は灰褐色を示す。											
分析部分	短軸端部1/3を直線状に切断し、炉壁として分析に用いる。残材返却。											
備 考	浦反甫東遺跡II区上層出土の鍛冶関連遺物から構成された16点の内の1点である。本資料に加えて、分析資料No.4の鍛冶羽口の先端部、分析資料No.5の椀形鍛冶滓(中・含鉄)、さらには分析資料No.6とした極小の椀形鍛冶滓を含む4点が同一地区上層出土品である。製錬系の炉壁資料としてはI・II区の上下層を含めても2点のみの出土量で、もう1点はI区下層出土の分析資料No.1としている。従って、浦反甫東遺跡全42点の鉄関連遺物中では極めて例外的な資料に当たる。また、本資料は観察所見のように胎土や内面の滓化状態が分析資料No.1の炉壁とは大きく異なる砂質土になっており、裏面は輪積み痕を疑わせるため、母体となった炉自体の性格や形状に加えて年代的な差異につながる可能性もあろう。旧島崎川流域の八幡林遺跡周辺の地域は官衙関連遺跡と製鉄関係遺跡が濃密に分布していることが既調査の結果からも判明しており、丘陵部に想定されるいずれかの製鉄遺跡から流れ下って来て本遺跡にもたらされた可能性が強そうである。											

分析資料 No.4

出土状況	遺 跡 名	浦反甫東遺跡		遺物 No.	30 (構成 No.)			項 目	滓	胎土		
	出土位置	II区 15H-15	IV層	時期：根拠	9世紀後半～10世紀初頭：出土土器							
試料記号	検 鏡： URA-4	計 測 値	長 径	2.5 cm	色 調	表：灰黒色～黒褐色	遺 存 度	破片	分 析	検 鏡 硬 度	◎	
	化 学： -		短 径	3.3 cm		地：淡赤褐色～褐色～黒褐色	破 面 数	5		X線回折 化 学 耐 火 度		
放射化： -	厚 さ		1.5 cm	磁着度	3					前 含 浸	-	カリリー 放 射 化
遺物種類 (名称)	羽口(鍛冶) 先端部		重 量			12.8 g	メタル度	なし				断面樹脂
観察所見	体部側と側部2面が破面になった細身の鍛冶羽口の先端部から肩部にかけての小破片。破面数は3を数える。先端部は外面から肩部にかけてが斜めに溶損して、薄皮状の黒色ガラス質滓に覆われている。中でも先端部側の1cm幅程度の範囲では滓部がやや厚い。内面には通風孔壁面の一部が残り、先端側の端部から8mm程度の範囲で、ややイガイガした滓層が広がっている。羽口先の肉厚は、肩部ではあるが最大1.4cm程度を測る。推定される羽口の径は約2.2cmと細身で、外径も約4.4cm前後と推定される。胎土は土器に近い粘土質で、極めてわずかながら繊維痕が確認される。残存部位は羽口先端方向から見て左側部にあたる。そのためか内外面とも下側のガラス質滓がやや厚めとなる。色調は表面の体部寄りが灰黒色で、ガラス質滓側は無光沢の黒褐色を示す。地は羽口胎土側の芯部が淡赤褐色で、通風孔部沿いは褐色基調になる。ガラス質滓は黒褐色。羽口本来の推定形状は竹輪状で、先端部から肩部がやや丸みをもって斜めに溶損する形態の可能性が高い。											
分析部分	短軸端部1/2を直線状に切断し、羽口として分析に用いる。残材返却。											
備 考	II区上層出土の鉄関連遺物から構成された16点のうちの1点である。分析資料No.3から6までの4点が同一地区上層出土品である。但し、羽口としては全構成資料中に4点が含まれており、内訳はI区II層出土の構成No.17、本資料に加えて同じII区上層出土の構成No.29、II区下層出土の構成No.41からなる。I区出土の構成No.17は細身ながら肉厚な羽口で、II区出土の構成No.29から30(30は本資料)とII区下層出土の構成No.41の3点は身厚の薄い竹輪状の形態と推定される細身の羽口の先端部破片である。一般的には福井県から富山県にまたがる北陸地域の鍛冶遺構で比較的出土例の多い形態である。通風孔部の径が細く肉厚の薄い羽口となっていることから、精錬鍛冶工程というよりはむしろ鍛錬鍛冶工程に向いている可能性が高い。浦反甫東遺跡I・II区の上・下層から出土した鉄関連遺物のうちで椀形鍛冶滓と判断される14点の資料中には大型の椀形鍛冶滓が含まれておらず、中型から極小の椀形鍛冶滓のみの組み合わせになっていることもその意味で矛盾してはいない。羽口先の溶損角度が弱いという事実も参考情報である。古代北陸道または官衙関連に伴う鍛冶技術の影響を想定できる可能性もあり。											

分析資料 No.5

出土状況	遺跡名	浦反甫東遺跡		遺物No.	32（構成No.）			項目	滓	メタル	
	出土位置	Ⅱ区	17I-10	Ⅳ層	時期：根拠	9世紀後半～10世紀初頭：出土土器					
試料記号	検鏡：URA-5	計測値	長径	3.9 cm	色調	表：茶褐色～濃茶褐色	遺存度	破片	分	検鏡硬度	◎
	化学：URA-5		短径	3.8 cm		地：濃茶褐色～黒褐色	破面数	4		X線回折化学耐火度	○
放射化：—	厚さ		3.7 cm	磁着度	6				前含浸	—	カロリー放射化
遺物種類（名称）	梘形鍛冶滓？（中・含鉄）		重量			137.8 g	メタル度	特L（☆）			断面樹脂
観察所見	放射割れや黒錆の目立つ含鉄の梘形鍛冶滓様の端部破片。左側部から上手側の側部が複雑に割れており、整理段階では完全にばらけて粉末化してしまっている範囲が広い。残存部は不明瞭ながらも破面数4を数える。上下面と右側から下手側の側部が生きており、外観的には小さいながらも厚みをもった中型の含鉄梘形鍛冶滓の疑いをもつ。右手側の側部にはなだらかに傾斜して、7mm以下の木炭痕らしき窪みが点々と確認される。鉄部主体の梘形滓と想定した場合、側部中段のやや下半が肩部の可能性が高い。側部から下面は小さくまとまった梘形で、粉炭痕らしき窪みと小単位の流動状の滓部分が混在する。激しく錆化が進んでいる資料ながら、メタル度が特L（☆）と判定される本遺跡唯一の含鉄の滓である。色調は表面にわずかな茶褐色の酸化土砂が確認される以外は含鉄部の影響が強く、表面・地とも濃茶褐色から黒褐色になる。										
分析部分	長軸端部1/3を直線状に切断し、滓中の錆化部分から選択したメタル部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。現状の放射割れを利用して分析資料の割り取り採取は可。										
備考	浦反甫東遺跡出土品から構成された鉄関連遺物42点の中では唯一の、鉄部の範囲が広い梘形鍛冶滓様の資料である。出土位置は分析資料No.4としたⅡ区上層出土の羽口の先端部破片と近接している。なお、16mほど離れた南側から鍛冶炉の火床と構成No.25とした金床石を伴う鍛冶遺構1214が検出されている。さらに鍛冶遺構の北側にはSB03とSB05掘立柱建物の2棟が存在し、この鍛冶遺構と掘立柱建物を取り囲むような形で鉄関連遺物が目立って出土する地区になっている。また、構成資料中には羽口先が2点と梘形鍛冶滓？（中・含鉄）とした本資料に加えて、梘形鍛冶滓（極小）が2点、金床石が1点、粘土質溶解物1点、鉄製品の鍛造品と鋳造品がそれぞれ1点含まれている。平面的な出土状態から見るとSB03またはSB05掘立柱建物を主屋とした前庭に鍛冶遺構1214を配置した形の、鍛冶工人の住まいあるいは鉄製品の低ぎ仕上げを含む仕立て工房と鍛冶工房に加えて、周辺部に砥石や鍛冶関連遺物の廃棄という姿がおぼろげながらも捉えられるかもしれない。さらに補足情報としては、鍛冶遺構のすぐ西側7m程度の所から石帯の部品である巡方が1点、30mほど離れた北東部のSD390からもう1点の巡方が出土している事実も①砥石による金属製品や②「石製巡方」の加工？に加えて③鍛錬鍛冶とのつながりについてが留意されよう。										

分析資料 No.6

出土状況	遺跡名	浦反甫東遺跡		遺物No.	34（構成No.）			項目	滓	メタル	
	出土位置	Ⅱ区	21H-11	Ⅳ層	時期：根拠	9世紀後半～10世紀初頭：出土土器					
試料記号	検鏡：URA-6	計測値	長径	4.3 cm	色調	表：茶褐色～濃茶褐色～黒褐色	遺存度	ほぼ完形	分	検鏡硬度	◎
	化学：URA-6		短径	5.0 cm		地：濃茶褐色～黒褐色	破面数	3		X線回折化学耐火度	○
放射化：—	厚さ		1.5 cm	磁着度	4				前含浸	—	カロリー放射化
遺物種類（名称）	梘形鍛冶滓（極小・含鉄）		重量			40.5 g	メタル度	錆化（△）			断面樹脂
観察所見	平面、不整形形をしたほぼ完形に近い極小の梘形鍛冶滓。肩部に小破面が3面残りながらも、もとの梘形鍛冶滓の全体形状は生きている。上面は左側の中央部が平坦気味で、右側が波状に浅く窪む。肩部は丸みをもった薄板状になっており、側部から下面はやや乱れた浅い梘形を示す。表面の7割方が茶褐色の酸化土砂に覆われており、下面には5mm大前後の木炭痕が3か所に顔を出している。破面にはやや気孔が確認される。全体的に磁着傾向があり、やや裏面側が強め。全体観が薄板状で、極めて滓量の少ない鍛冶の最終工程に伴う滓の可能性が強そうである。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、地は濃茶褐色から黒褐色となる。										
分析部分	短軸端部1/2を直線状に切断し、滓部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。										
備考	浦反甫東遺跡Ⅱ区の上層出土品から構成された16点の鉄関連遺物のうちの1点である。分析資料No.3から6までの4点が同一地区からの同層出土品である。資料的には梘形鍛冶滓の極小サイズに相当し、一般的には鍛錬鍛冶工程に伴う鉄製品の鍛造過程で生成されることの多い、最も小振りの梘形鍛冶滓に相当する。構成No.34から36の3点が極小の梘形鍛冶滓で、うち構成No.34の本資料と構成No.35の滓は10mしか出土位置が離れていない。さらに10m程北東部には石帯の部品である石製巡方を出土したSD390が位置し、そのすぐ右上にはSB06とした2間×3間の掘立柱建物が検出されている。このSB06からは構成No.24と33という2点の小型梘形鍛冶滓と構成No.31とした中型の梘形鍛冶滓が1点出土している。なお、鍛冶炉と金床石を伴う鍛冶遺構SX1214は南西方向に約30m程離れており、この鍛冶遺構に伴う廃棄物であるのか、SB06掘立柱建物の検出された北東側に別の鍛冶遺構があったのかは不明である。但し、大きく見ればSB03またはSB05掘立柱建物跡と鍛冶遺構SX1214の周辺域出土品としての理解はできよう。なお、砥石破片の出土傾向から見ると、南西側のSB03とSB05掘立柱建物周辺から51点、北東側のSB06掘立柱建物周辺から23点もの出土を見ており、大きく2群に別れる様相となっている。また、鍛冶遺構SX1214周辺部からは出土量が6点前後と少ないのに対してSB03とSB05掘立柱建物周辺からの出土が45点と目立っており、鉄製品の仕上げ工房の疑いを持つ。										

分析資料 No. 7

出土状況	遺跡名	浦反甫東遺跡		遺物 No.	42 (構成 No.)			項目	滓	メタル		
	出土位置	Ⅱ区 22E-21 V層		時期：根拠	9世紀後半～10世紀初頭：出土土器			マクロ				
試料記号	検鏡： URA-7	計測値	長径	5.5 cm	色調	表：茶褐色～黒褐色	遺存度	破片	分	検鏡	◎	
	化学： URA-7		短径	7.4 cm		地：黒褐色	破面数	6		硬度	○	
放射化： —	厚さ		3.2 cm	磁着度	3				前含浸	—	X線回折	○
遺物種類 (名称)	楕形鍛冶滓 (中・含鉄)		重量			137.3 g	メタル度	錆化(△)			断面樹脂	○
					X線透過							
観察所見	<p>滓の側部を中心に破面が確認される中型の楕形鍛冶滓の中核部から右側部寄りの破片。左右の側部2面に加えて下手側の端部から下面にも小破面が残されている。破面数は都合6面を数える。最大厚み3.2cmほどの比較的まとまりの良い楕形鍛冶滓である。上面は平坦気味ながら左下手側がわずかに低くなり、下面はやや乱れた楕形を示す。下面には中小の気孔が目立ち、風化もかなり進んでいる。上面の大半と側部から下面の一部が斑状の酸化土砂に覆われており、破面に沿った端部を中心に滓の地部分が露出する。左側部側の破面には木炭痕の疑いを持つ1.5cm大以下の小さな窪みが散在する。各面とも弱い磁着傾向を示し、最も強い反応を示すのは上面下手寄りの表層となっている。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、滓部は表面・地ともくすんだ黒褐色を示す。</p>											
分析部分	短軸端部1/4を直線状に切断し、滓部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。											
備考	<p>浦反甫東遺跡Ⅱ区下層出土の分析資料としては唯一の楕形鍛冶滓である。Ⅱ区の下層から検出された遺構は5間×2間または3間の大型掘立建物を主屋とし、背後に2間×2間の倉庫状の遺構を含む16棟の建物群を伴う初期荘園または、何らかの官衙関連施設と解釈される要素を持っている。但し、構成された鉄関連遺物の量としては、構成No.40から42(本資料4)までの3点のみで最も鍛冶関連遺物の出土量の少ない地区でもある。つまり、上層の出土資料が16点と多いのに対して下層では3点と極めて限られている。また、構成No.29・30の羽口2点が上層からの出土品で、構成No.41の羽口が下層からの出土品でありながらも極めてよく似た形態を示す点などから、下層出土の3点の鍛冶関連遺物はⅡ区の上層遺構、特に鍛冶遺構1214周辺廃棄物の下層への混入である疑いを持つ。他方、砥石については建物の大型、小型という規模あるいは住居、倉庫という建物の種別とは無関係に散発的な出土傾向を示している印象を受け、上層での建物遺構数と砥石や鍛冶関連遺物の数に比べ有意な差があるように思える。</p>											

10 墨書土器観察表

(凡例)

文字の大きさ 図上での数値である。mm四方で凡その数値を表し、縦と横で大きく異なる場合は×でそれぞれ表示した。

また、欠損しているものは()で表示した。

筆使い A: それぞれの点画に基本的な筆使いがみられるもの。あるいは、滑らかな筆致で定型的なぐずし方がみられるもの。
 全体的に整っているものが多い。書き慣れた筆使いを窺わせる。
 B: 基本的な筆使いが行われているものが十分ではなく、部分的にアンバランスな点が見られることもある。
 C: 筆幅が一定で変化に乏しいもの。とめ・はらいがほとんど見られない。

No.	地区	出土地点	層位	種別	器種	墨書部位	転用等	釈文	文字の大きさ(mm)	線の太さ(mm)	筆使い	墨痕
10	I	P1055		須恵器	無台坏	底部外面		□	-	-	-	中
19	I	SK1038		須恵器	無台坏	底部外面上		「# (記号)」	-	3	A	中
23	I	SK1039		須恵器	無台坏	体部外面中位～底部		「七」	30 × 40	5	B	中
26	I	SK1059		須恵器	無台坏	体部～底部外面		〔七〕	30 × 40	8	B	薄
32	I	SD977		須恵器	瓶類	頸部外面		〔 〕	-	4	-	中
38	I	SD979 西 6M19	IV	須恵器	無台坏	体部外面中位～底部		「七」	-	5	-	薄
62	I	SD1020		須恵器	無台坏	底部外面右寄り		「□ (十カ)」	(20)	4	-	薄
63	I	SD1020 SK1050		須恵器	环蓋	天井部外面	転用硯	「□」(記号)	50 × 35	7	C	薄
84	I	SD1027	上面	須恵器	無台坏	体部外面		「□」(記号)	25 × 15	2～5	B	中
112	I	SD1037 西		須恵器	無台坏	底部外面中央寄り		「山□」	25 × 30, 25 × 40	5～6	B	薄
225	I	7N2	IV	須恵器	無台坏	底部外面上半		「文」	30 × 50	2～3	A	中
226	I	5L17・18・23	IV	須恵器	無台坏	底部外面左		「仲」	(23)	1～3	B	薄
227	I	6M17	IV	須恵器	無台坏	底部外面上半		「田庄」	(20),15	2～3	A	薄
228	I	9K25	IV	須恵器	無台坏	底部外面上半		□	-	2	-	薄
229	I	6N6	IV	須恵器	無台坏	底部外面上		「□」(方カ)	16 × 24	1～2	B	薄
230	I	5L25,6M1	IV	須恵器	無台坏	底部外面左		「大」	45	3～5	A	薄
231	I	5L22・23・24	IV	須恵器	無台坏	体部外面中位～底部		「七」	16 × 25	4	B	薄
270	I	SB25-SD1078	上面	須恵器	無台坏	底部外面上	転用硯	「□」(中カ)	8	1	B	薄
272	I	SB25-SD1078	上面	須恵器	無台坏	体部外面～底部		「□」(記号)	30 × 40	1.2	B	中
273	I	SB25-SD1078	上面	須恵器	無台坏	底部外面中央		□	-	3～4	B	中
274	I	SB25-SD1078	上面	須恵器	無台坏	底部外面上		「中」	20 × 27	3	A	中
275	I	SB25-SD1078	上面	須恵器	無台坏	体部外面		□(七カ)	-	-	-	薄
276	I	SB25-SD1078	上面	須恵器	無台坏	体部外面		「□」(記号)	25	4	B	薄
277	I	SB25-SD1078 (SX1240)	上面 IV	須恵器	無台坏	体部外面		「×」(記号)	25	2	B	薄
297	I	SK1083 (SD1085)	上面	須恵器	無台坏	底部外面上		「九」	30 × 20	1	A	中
303	I	SK1136		須恵器	無台坏	体部外面		□	-	4	-	薄
331	I	SD1098	上層	須恵器	無台坏	底部外面左	漆書?	「× (記号)」	-	3	B	中
500	I	河川SD976		須恵器	环蓋	体部外面	転用硯	□ (記号?)	-	3	-	中
501	I	河川SD976		須恵器	环蓋	体部外面	転用硯	「足」	20	2～3	B	薄
502	I	河川SD976		須恵器	环蓋	体部外面左	転用硯, □縁部・ つまみ: 打ち欠き	「仲」	25	2	A	中
503	I	河川SD976		須恵器	小型瓶類 (長頸瓶)	体部外面 底部外面	体部: 打ち欠き	□(×カ) □	-	3	B	濃
504	I	河川SD976		須恵器	有台坏	底部外面左寄り	灯明皿	「入」	20 × 30	2～3	B	濃
505	I	河川SD976		須恵器	有台坏	底部外面左寄り		「仲成」	20 × 23, 27 × 23	2	B	薄
506	I	河川SD976		須恵器	有台坏	体部外面		「大」	20 × 16	1	B	中
507	I	河川SD976		須恵器	有台坏	体部外面, 倒位		「奉」	30	1～2	B	薄
508	I	河川SD976		須恵器	有台坏	体部外面	転用硯	「水」	25	2	B	薄
509	I	河川SD976		須恵器	無台坏	体部外面		「□」(記号)	8 × 13	2～3	B	濃
510	I	河川SD976		須恵器	無台坏	体部外面, 横位(木□)		「木□」, 「×」 (記号)	10,20 × 40	1～4	B	中
511	I	河川SD976		須恵器	無台坏	体部外面		「×」(記号)	(20)	3	B	濃
512	I	河川SD976		須恵器	無台坏	体部外面	灯明皿, □縁部: 打ち欠き	「V」(記号)	(27)	3	B	濃
513	I	河川SD976		須恵器	無台坏	体部外面, 倒位		「七」	(20)	3	A	濃
514	I	河川SD976		須恵器	無台坏	体部外面, 倒位		「床」	-	2～3	B	中
515	I	河川SD976		須恵器	無台坏	体部外面		「□ (七カ)」	-	4～6	B	中
516	I	河川SD976		須恵器	無台坏	体部外面		□(七カ)	-	6	-	薄
517	I	河川SD976		須恵器	無台坏	体部外面		「七」	(20)	2	B	濃
518	I	河川SD976		須恵器	無台坏	体部外面	打ち欠き	□	-	-	-	濃
519	I	河川SD976		須恵器	無台坏	体部外面, 対向2カ所		「五」, 「五」	25	1～3	A	薄
520	I	河川SD976		須恵器	無台坏	体部外面		□	-	-	-	濃
521	I	河川SD976		須恵器	無台坏か?	体部外面		□ (七カ)	-	-	-	中
522	I	河川SD976		須恵器	無台坏	底部外面上半寄り		「天」	20 × 30	3	B	薄
523	I	河川SD976		須恵器	無台坏	底部外面上		「□」	37 × 31	3	B	薄
524	I	河川SD976		須恵器	無台坏	底部外面左	転用硯, □縁部: 打ち欠き	〔仲〕	-	2～3	A	濃
525	I	河川SD976		須恵器	無台坏	底部外面左		「仲」	26	1～3	B	濃
526	I	河川SD976		須恵器	無台坏	底部外面左		「仲」	17	1～3	A	濃
527	I	河川SD976 (SX1209)		須恵器	無台坏	底部外面	底部: 打ち欠き	「□」	-	5.6	-	中
528	I	河川SD976		黒色土器	椀	体部外面		「七」「七」「□」	15	3	A	薄

No.	地区	出土地点	層位	種別	器種	墨書部位	転用等	釈文	文字の 大きさ(mm)	線の太さ (mm)	筆使い	墨痕
529	I	河川 SD976		土師器	無台椀	見込		「□(袴カ)	(25)	2~3	A	濃
530	I	河川 SD976		土師器	長襷	頸部外面		(人面墨書)	-	2	B	薄
531	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面左		「山」	20	2~5	C	中
532	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面上		「大」	40	5~6	C	濃
533	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面上半		「□」(大カ)	-	2~3	B	濃
534	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面中央左		「方」	22×15	3	A	濃
535	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面上	口縁部: 打ち欠き	「本」	20×30	1.5	A	濃
536	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面中央右寄り		「前」	(30×16)	1.5	A	中
537	I	河川 SD976 (SX1209)		須恵器	無台坏	底部外面		□	-	1.5	-	中
538	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面		「□」	-	1.5	A	中
539	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面		「□」	-	3~4	A	中
540	I	河川 SD976 8N3	IV	須恵器	無台坏	底部外面		「□」(記号?)	-	1.5	A	薄
541	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面中央左		「□」(日カ)	27	3~8	B	薄
542	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面上半		「□」(不カ)	30×40	3~4	C	薄
543	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面上半		「□」	33×48	2~5	A	濃
544	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面左		「田」	15	2~3	C	薄
545	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面上半		「田庄」	12×23, (20)	1~3	A	薄
546	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面上半		「田庄」	13×24, 21	1.5~3	A	中
547	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面上半		「田庄」	11×22, 18×25	2~3	B	薄
548	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面上半		「田庄」	20	2	A	中
549	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面右寄り		「下□」	10×20	3	B	中
550	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面上半		「□」(庄カ)	-	2	A	中
551	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面下半左寄り	体部外面: 漆, 転用硯	「□」	30	2~4	C	薄
552	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	体部外面	転用硯	「□」	13	2	B	薄
553	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面上半	転用硯	「太」	40×60	3.5	B	中
554	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面上半左寄り	転用硯, 口縁部: 打ち欠き	「仲」	(25×40)	3~5	A	濃
555	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面上半右寄り		「□」(文カ)	30×48	2~3	A	薄
556	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面上半		「□」(文カ)	(35)	3	B	薄
557	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面中央		□	-	6	B	薄
558	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面		「□」	-	3.8	-	薄
559	I	河川 SD976		須恵器	無台坏	底部外面上半右		「□」(文カ)	(27)	3	B	薄
579	I	606	V	須恵器	無台坏	底部外面	灯明皿	「□」	10	3	-	薄
580	I	602	V	須恵器	無台坏	底部外面		「□」	-	2.7	-	薄
581	I	5N23	V	須恵器	無台坏	底部外面中央上寄り	口縁部: 打ち欠き	「長」	26×31	1~4.5	A	薄
591	I	8L21	VI	須恵器	無台坏	体部外面~底部		「七」	(28)	4.6~7	B	中
639	II	P422		須恵器	有台坏	底部外面左	底部外面: 転用硯	「千」	28×18	3~4	A	中
651	II	SE3 16J8	IV	須恵器	無台坏	底部外面右	SE3: 第3確認面出 土	「大市」	26×30, (32)×19	3~4	B	中
755	II	SD306 21F13	V	須恵器	有台坏	体部外面		「□」	-	2	-	薄
777	II	SD360 23F23	V	須恵器	無台坏	底部外面		「□」	-	3	-	薄
828	II	18G9	IV	須恵器	坏蓋	体部内面右		「足」	24×18	2	A	薄
847	II	23E11	IV	須恵器	無台坏	底部外面左寄り	口縁部: 打ち欠き, 割れ口: 研磨痕	「春」	22×28	2~3	C	薄
982	II	14I23	V	須恵器	無台坏	底部外面	割れ口: 研磨痕?	「○」「□」「○」 (記号)	40~50	4.5	C	中
983	II	19H14	V	須恵器	無台坏	底部外面上		「九」	10×14	1.5	A	濃
984	II	18G4	V	須恵器	無台坏	底部外面左		「大市」	12×21, 16×17	1~2	B	薄
1001	II	SB7-SD389 東 23F22	IV	須恵器	無台坏	底部外面		「□」	-	1.5	-	薄
1028	II	SB9-P633		須恵器	無台坏	底部外面中央左	灯明皿, 口縁部: 打ち欠き	「□」(記号)	30	3	A	中
1030	II	SB9-P644		須恵器	無台坏	底部外面上		「□」(聖カ)	20	2.5	A	薄
1035	II	SB12-P695	上層	須恵器	有台坏	底部外面右		「□」(代カ)	-	4	-	薄
1037	II	SB12-P695 (SD48) 18G16	上層 VI	須恵器	無台坏	底部外面上		「山」	14	2~3	A	薄
1057	II	SE856 17H17	V	須恵器	無台坏	底部外面		「□」	-	3	A	中
1067	II	SD557		須恵器	無台坏	体部外面 底部外面		「□」 「□」	-	1~4.5	-	薄
1079	II	SD754		須恵器	有台坏	底部外面		「」	-	3	-	薄
1089	II	SX833		須恵器	無台坏	底部外面中央上寄り		「□」	-	3	-	薄
1090	II	SX925		須恵器	坏蓋	体部外面		「酒」	(20)	3.7	A	中
1111	II	19J9・21	VI	須恵器	無台坏	底部外面左	灯明皿	「大市」	21	2~3	A	中
1112	II	17K3	VI	須恵器	無台坏	見込み	口縁部: 打ち欠き, 割れ口: 研磨痕	「□」(記号?)	31×44	7	B	薄

11 主要遺構器種別構成比率

- (凡例) 1 器種欄の着色は種別を示し、右のとおりとする。 須恵器 土師器 黒色土器 緑釉陶器
 2 本書にある「口残値」・「底残値」は、出土した破片の口縁部・底部の円周長が36等分換算でいくつ分残っているかを表した値の合計である。計測値すべてが36で割るため、便宜的に分子のみで表す。ある器種の計測点数が3点の場合、口残値A=(A1/36+A2/36+A3/36)×36となる。
 3 器種構成比率A・Bは小数点第2位を四捨五入したため、実際の合計は必ずしも100%にはならない。
 4 口縁部・底部以外の破片しか確認されないものは、個体識別法による数値を表示した。ただし、構成比率の対象とはしていない。

													合計
	有台坏	無台坏	横瓶	括れ鉢	長頸瓶	甕・壺	無台碗	鉢	小甕	長甕	鍋	合計	
SD982	口残値A	3	121	16	17	17	識別:3	19	12	17	13	6	241
	比率A	1.2%	50.2%	6.6%	7.1%	7.1%		7.9%	5.0%	7.1%	5.4%	2.5%	100.0%
	計測点数	1	21	1	1	1	3	2	1	11	7	2	51
	底残値B		231		36	5		99	35	73			479
	比率B		48.2%		7.5%	1.0%		20.7%	7.3%	15.2%			100.0%
	計測点数		19		1	1	3	8	1	8			41
SD1037 (西・東)	有台坏	無台坏	横瓶	括れ鉢	長頸瓶	甕	無台碗	鉢	小甕	長甕	鍋	合計	
	口残値A	79	393	8	12	識別:3	11	31	17	94	37	3	685
	比率A	11.5%	57.4%	1.2%	1.8%		1.6%	4.5%	2.5%	13.7%	5.4%	0.4%	100.0%
	計測点数	9	61	2	1	3	1	8	1	19	13	1	119
	底残値B	102	596		30			26	33	179			966
	比率B	10.6%	61.7%		3.1%			2.7%	3.4%	18.5%			100.0%
SB25- SD1078	無台坏	瓶類	横瓶	無台碗	小甕	長甕	鍋	無台碗	有台皿	合計			
	口残値A	94	5	識別:1	29	2	7	2	3	142			
	比率A	66.2%	3.5%		20.4%	1.4%	4.9%	1.4%		2.1%	100.0%		
	計測点数	15	1	1	2	1	2	1	1	24			
	底残値B	221	18		41	6			33	23	342		
	比率B	64.6%	5.3%		12.0%	1.8%			9.6%	6.7%	100.0%		
SD1085	有台坏	無台坏	横瓶	長頸瓶	甕	無台碗	小甕	長甕	合計				
	口残値A	54	316	識別:1		22	5	106	37	540			
	比率A	10.0%	58.5%			4.1%	0.9%	19.6%	6.9%	100.0%			
	計測点数	3	38	2		2	1	14	7	67			
	底残値B	64	535		34			197	26	856			
	比率B	7.5%	62.5%		4.0%			23.0%	3.0%	100.0%			
河川SD976 (1)	有台坏	有台碗	無台坏	横瓶	長頸瓶	短頸壺	水瓶	甕	壺	合計			
	口残値A	250	12	2861	25	38	10	25		4433			
	比率A	5.6%	0.3%	64.5%	0.6%	0.9%	0.2%		0.6%	100.0%			
	計測点数	40	1	506	4	2	2	1	4	839			
	底残値B	434	36	4133		88			11	7080			
	比率B	6.1%	0.5%	58.4%		1.2%			0.2%	100.0%			
河川SD976 (2)	有台坏	無台坏	無台碗	小甕	長甕	鍋	壺	無台碗	緑釉 皿	合計(1+2)			
	口残値A		8	805	283	56	41		19	4433			
	比率A		0.2%	18.2%	6.4%	1.3%	0.9%		0.4%	100.0%			
	計測点数		1	161	80	16	20		1	839			
	底残値B	10	16	1636	691			13		7080			
	比率B	0.1%	0.2%	23.1%	9.8%			0.2%		100.0%			
SK294	有台坏	無台坏	横瓶	無台碗	小甕	長甕	鍋	合計					
	口残値A	9	45	識別:1	54	39	37	6	190				
	比率A	4.7%	23.7%		28.4%	20.5%	19.5%	3.2%	100.0%				
	計測点数	2	3	1	2	3	1	1	13				
	底残値B	32	46		74	61			213				
	比率B	15.0%	21.6%		34.7%	28.6%			100.0%				
SK380	有台坏	無台坏	長頸瓶	甕・壺	無台碗	小甕	鍋	合計					
	口残値A	40	165	18	識別:3	5	2	3	233				
	比率A	17.2%	70.8%	7.7%		2.1%	0.9%	1.3%	100.0%				
	計測点数	2	21	1	4	1	1	1	31				
	底残値B	36	221			55			312				
	比率B	11.5%	70.8%			17.6%			100.0%				
SE3	無台坏	長頸瓶	甕	無台碗	小甕	無台碗	合計						
	口残値A	37	6	識別:1	36	3	15	97					
	比率A	38.1%	6.2%		37.1%	3.1%	15.5%	100.0%					
	計測点数	6	1	1	1	1	2	12					
	底残値B	93	20		36		21	170					
	比率B	54.7%	11.8%		21.2%		12.4%	100.0%					
計測点数	7	1	1	1		1	11						

SD9		有台坏	無台坏	横瓶	長頸瓶	襖・壺	無台椀	小襖					合計	
	口残值A	10	41	5	識別：5	識別：2	43	4					103	
	比率A	9.7%	39.8%	4.9%			41.7%	3.9%					100.0%	
	計測点数	2	7	2	10	2	5	3					31	
	底残值B	24	110					5					139	
	比率B	17.3%	79.1%					3.6%					100.0%	
	計測点数	2	12		10	2		1					27	
SD21		有台坏	無台坏	横瓶	長頸瓶	襖	無台椀	小襖	長襖				合計	
	口残值A	20	47	5	5	4	19	14	1				115	
	比率A	17.4%	40.9%	4.3%	4.3%	3.5%	16.5%	12.2%	0.9%				100.0%	
	計測点数	3	12	2	2	1	4	4	1				29	
	底残值B	45	103				56	36					240	
	比率B	18.8%	42.9%				23.3%	15.0%					100.0%	
	計測点数	2	10				8	1					21	
SD274		有台坏	無台坏	長頸瓶	襖	無台椀	小襖	長襖	有台椀	無台椀			合計	
	口残值A	26	63	識別：1	13	29	2	5					138	
	比率A	18.8%	45.7%		9.4%	21.0%	1.4%	3.6%					100.0%	
	計測点数	2	15	1	2	3	1	1					25	
	底残值B	36	169			31	36		7	8			287	
	比率B	12.5%	58.9%			10.8%	12.5%		2.4%	2.8%			100.0%	
	計測点数	1	15	1		2	1		1	1			22	
SD350		有台坏	無台坏	瓶類	無台椀	小襖	長襖						合計	
	口残值A	2	16	識別：1		13	30						61	
	比率A	3.3%	26.2%			21.3%	49.2%						100.0%	
	計測点数	1	2	1		3	4						11	
	底残值B	20	27			16	69						132	
	比率B	15.2%	20.5%			12.1%	52.3%						100.0%	
	計測点数	3	4	1		3	3						14	
SD360		有台坏	無台坏	横瓶	襖・壺	無台椀	小襖	長襖	鍋				合計	
	口残值A		61	識別：1	識別：1	2		8	3				74	
	比率A		82.4%			2.7%		10.8%	4.1%				100.0%	
	計測点数		10	15	1	1		1	1				29	
	底残值B	15	135			27	3						180	
	比率B	8.3%	75.0%			15.0%	1.7%						100.0%	
	計測点数	2	7	15	1	3	1						29	
SD378		有台坏	折縁坏	無台坏	横瓶	長頸瓶	襖	鉢	無台椀	小襖	長襖	鍋	高盤	合計
	口残值A	41	11	191	8	27	8	5	15	6	20	4	12	348
	比率A	11.8%	3.2%	54.9%	2.3%	7.8%	2.3%	1.4%	4.3%	1.7%	5.7%	1.1%	3.4%	100.0%
	計測点数	3	1	44	1	1	2	1	4	3	3	2	1	66
	底残值B	80	36	286					149	32	42			625
	比率B	12.8%	5.8%	45.8%					23.8%	5.1%	6.7%			100.0%
	計測点数	5	1	28				12	4	2				52
SK510		有台坏	無台坏	横瓶	瓶類	襖	無台椀	小襖	長襖	鍋				合計
	口残值A	19	486	識別：3		7	46	15	50	18				641
	比率A	3.0%	75.8%			1.1%	7.2%	2.3%	7.8%	2.8%				100.0%
	計測点数	2	46	3		1	9	4	6	2				73
	底残值B	112	761			7	196	38						1114
	比率B	10.1%	68.3%			0.6%	17.6%	3.4%						100.0%
	計測点数	4	36	3	1	9	2							55
SX511		有台坏	無台坏	短頸壺	襖・壺	無台椀	小襖	長襖						合計
	口残值A	13	122	18	識別：1		25	14						192
	比率A	6.8%	63.5%	9.4%			13.0%	7.3%						100.0%
	計測点数	3	7	1	1		3	3						18
	底残值B	11	187	30		29	83							340
	比率B	3.2%	55.0%	8.8%		8.5%	24.4%							100.0%
	計測点数	1	10	3	1	2	3							20
SB7-SD389 西・東		有台坏	無台坏	横瓶	長頸瓶	襖	無台椀	小襖	長襖					合計
	口残值A	17	114	識別：1	5	2	5		2					145
	比率A	11.7%	78.6%		3.4%	1.4%	3.4%		1.4%					100.0%
	計測点数	2	23	15	1	1	1		1					44
	底残值B	23	211				37	6						277
	比率B	8.3%	76.2%				13.4%	2.2%						100.0%
	計測点数	2	17	15			4	1						39
SE856		有台坏	無台坏	長頸瓶	横瓶	無台椀	小襖	長襖	鍋					合計
	口残值A	9	22		5	4		12	2					54
	比率A	16.7%	40.7%		9.3%	7.4%		22.2%	3.7%					100.0%
	計測点数	2	4		1	1		1	1					10
	底残值B		13	7		5	36							61
	比率B		21.3%	11.5%		8.2%	59.0%							100.0%
	計測点数		1	1		1	1							4

12 遺構の主軸方位

地区	確認面	遺構名	存続時期	西偏 角度	東編 角度
I	1	SD978		0	
I	1	SX1041ほか		10	
I	1	SX1072	2~3	15	
I	2	SB27	4 ?	29	
I	2	SB28		29.5	
I	1	SD988		37	
I	1	SD989		37	
I	1	SD1027	5~6	37	
I	2	SD1085	2~3	38	
I	1	SD1037	2~3・4?	36	
I	2	SB26	5~6	42	48
I	1	SD977		42	48
I	1	SB24	3	69	21
I	2	SB25	6新	72	18
II	3	SB21		3	87
II	3	SB14	6	5	
II	3	SB20	3	6	84
II	3	SA32	3	9.5	
II	3	SB30	3	9	81
II	3	SA34	3	10	80.5
II	3	SB17	3	11	
II	1	SD9	3~4	12	88
II	1	SD279	4	13	87
II	1	SK217	3	13	
II	3	SB15		13	
II	1	SB6		15.5	
II	1	SB1	4新	16.5	
II	1	SK342	6古	16	
II	3	SB12	4~	16.5	74
II	1	SB5	3~6 ?	18	
II	3	SB8	6	17	
II	3	SB13	6	19	
II	1	SD6	3	20	
II	3	SB10	6	20.5	
II	3	SB9	5~6新	21	69
II	3	SD556	6新	21	69
II	3	SA29		22	68.5
II	3	SB23	2	22	
II	3	SD557	4	21	
II	3	SA33		25	
II	3	SB7	3~6	25	65
II	3	SB11		27	63
II	1	SD350	2~3	28	
II	3	SB19	4~	28	
II	3	SB22		28	62
II	3	SB31		28.5	
II	3	SB18	4~	30	
II	3	SB16		32	
II	1	SB3		41	
II	3	SD754等溝群		20~30	

報告書抄録

ふりがな	うらたんぼひがしいせき							
書名	浦反甫東遺跡							
副書名	二級河川郷本川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	丸山一昭 松井奈緒子 竹部佑介 南波 守 穴澤義功 大澤正己 鈴木瑞穂 四柳嘉章 パリオ・サーヴェイ株式会社 株式会社吉田生物研究所							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0084 新潟県長岡市幸町2丁目1番1号							
発行年月日	2016年3月4日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
うらたんぼひがしいせき	ながおかししまぎき 414-2ほか	152021	1307	37° 34'	138° 46'	20110803～ 20121212	13,503 m ²	河川改修事業
浦反甫東遺跡	長岡市島崎 414-2ほか					20130627～ 20131029		
ふりがな 所収遺跡名	種別	時代	遺構	遺物				特記事項
うらたんぼひがしいせき 浦反甫東遺跡	散布地	弥生		石鏃				
	河川跡	古墳	河川跡	古式土師器・須恵器・黒色土器				
	集落跡	平安	掘立柱建物 柵列 柱穴 井戸 土坑 溝 河川跡 鍛冶炉	須恵器 土師器 黒色土器 緑釉陶器 原始灰釉陶器 加工円盤 土錘 円筒形土製品 製塩土器 木製品(柱根・杭・曲物等容器・加工材等) サクラ樹皮 金属製品(皆折釘・飾金具・焼印状鉄製品・工具状鉄製品・刀子・ 帯金具) 鍛冶関連遺物(金床石・椀形鍛冶滓・炉壁等) 漆器(小盤) 漆塗り製品(手箱・須恵器坏) 墨書土器 木簡 石帯 砥石 竈材				墨書土器多数 転用硯多数 土錘 52点一括出土 漆パレット 漆塗り手箱 柱根 38点 建物 28棟
	河川跡	中近世	河川跡 杭列	青磁 珠洲焼 中世土師器 唐津焼 漆器 木製品(曲物・下駄歯・箸・部材等) 金属製品(馬鍬の歯・銭貨・ヤス)				河川川岸に木杭列

要約	<p>調査の結果、古墳時代～中近世の河川、及び平安時代の集落に関連した遺構・遺物を検出した。遺構は平安時代の掘立柱建物・井戸・土坑・溝・ピットのほか、古墳時代～中近世の河川跡がある。出土遺物は小泊窯産須恵器が多数出土した。同窯跡資料と対比しておよそ9世紀前半から10世紀初頭頃に比定される。平安時代の建物群はⅠ区では単独的に、Ⅱ区では建物群を形成して分布する。出土土器の時期や建物の切り合い、配置状況等から、その編年の位置は9世紀前半から末頃まで機能したと考えられる。出土遺物は土器・木器等の日常用具、生業・生産関連、祭祀関連のほか木簡・墨書土器、官衙的性格を帯びる特殊遺物等が河川の遺物集中域を中心に出土した。遺跡の性格は、9世紀前半が周辺地域の中心的な集落、中葉が物資の拠点施設、後半～末が荘園関連施設で、いずれも在地豪族層の関与が出土遺物の内容からうかがえる。</p> <p>また、検出された河川跡は旧島崎川の一部で、時代とともに流路や規模を変化させながら流れていた。</p>
----	---

浦反甫東遺跡

— 二級河川郷本川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

(本文編)

平成 28 (2016) 年 3 月 4 日 印刷

平成 28 (2016) 年 3 月 4 日 発行

発 行 長岡市教育委員会

印 刷 あかつき印刷株式会社
